THE KAIZO

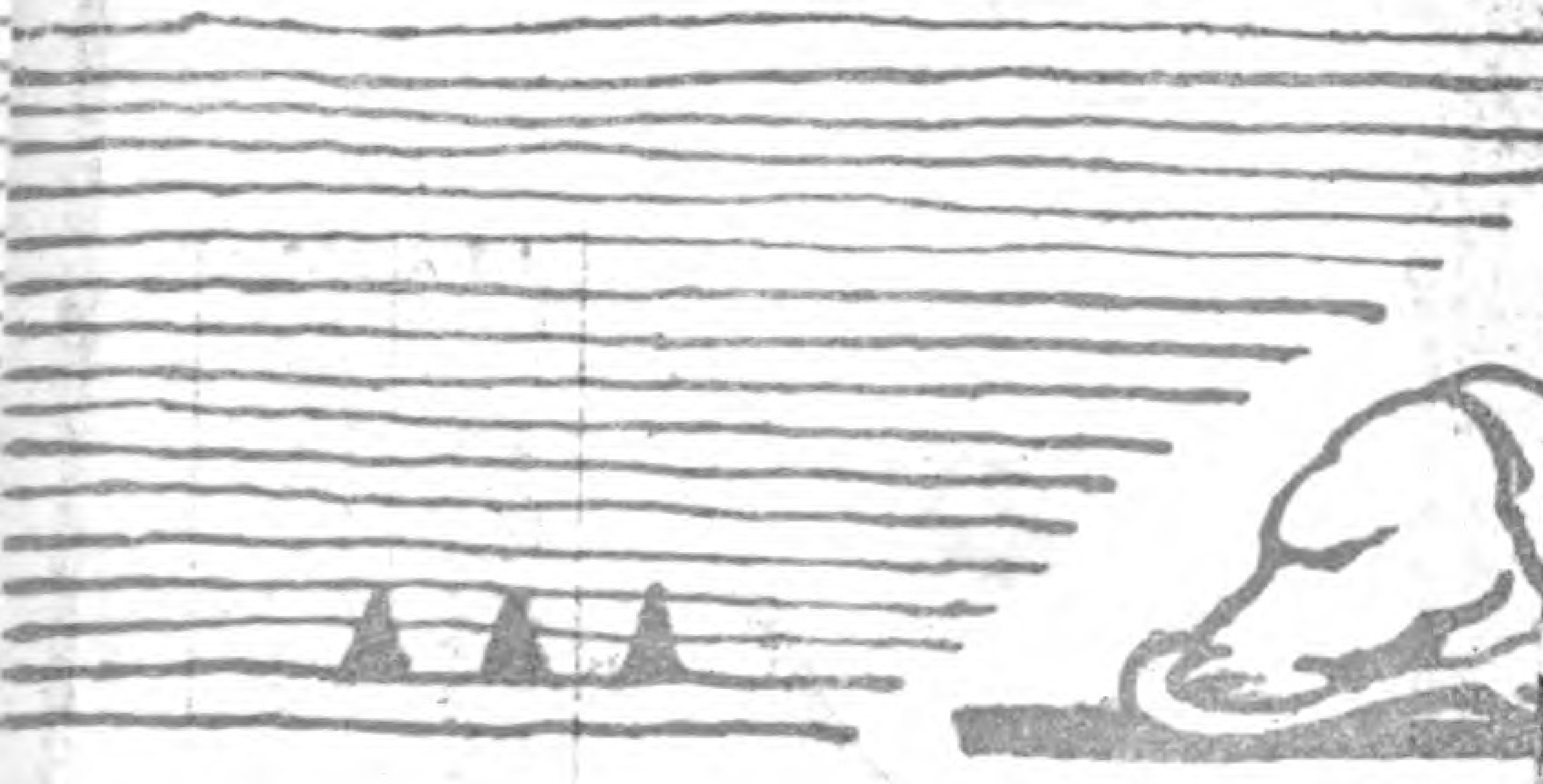
改造

十一月號

對支國策討議

1924


學理上
實驗上
齒を強く美しくする
最新
最良
の
クラブ煉歯磨
齒科醫學者の推薦
する一番齒の爲に
よいクラブ煉歯磨
CLUB
DENTAL CREAM
顔のアレない
カテイ石鹸
クラブ石鹸



「[illegible]國農業都市に於ける教育」

（十月十一日帝國ホテルに於て）

福田徳三
小村俊三郎
山本實彦

（イロハ順）

((紀念すべき二ツの名著増刷出來))

◇大關增次郎氏新著◇カント二百年唯一の紀念出版

三版カント研究

大歡迎初版再版盡く賣切（大阪毎日新聞曰く）：忠實にカントの述作に從つて彼の體系の開展をあとづけたもので「批判哲學の根據づけ「自然の形而上學」「道義の形而上學」「宗教哲學」「判斷力批判」等を谷した一千餘頁にあまる大著述である近代の哲學と倫理學との淵叢をなした。近代思想のことぐ〳〵が或はカントを批判し或はカントを祖述しないものは無いのであるから近代思想を極めるものは必ずカントまでさかのぼらねばならない本書はそのカントに達するよき手引書としてすゝめる（時事新報曰く）カントの全思想の體系思惟發展の道を辿りつゝ解説した書として量に於て最內容の豐富なる近來の大著述である

菊判壹千餘頁
正價金七圓八拾錢
送料卅六錢

九版 新井白石著 讀史餘論

白石二百年忌隨一の紀念すべき書（東京日々新聞評）：徳川期儒流史餘論は流石に犀燃の見識を備へて我國史論の最も上乘なるもの賴山陽の日本外史の如き其論文は白石の論旨に負ふ所多し此の如き名著の近頃割合に行はれざりしは極めて遺憾なりしが本書出でゝ其缺陷を滿たすに足れり單に專門史家のみならず世の識者經世家其他の當今の時勢に志あるの士は本書によりて啓發せらるゝ所尠少ならざるべきなり。（校訂嚴密異本を參照せしは本書の一大特色）

四六判上製
金貳圓
送料十二錢

小林榮子校訂 新刊

源氏物語活釋

日本文華の精髓源氏物語の理想的新釋書!!本書は初めて古文に面接せる人にも直ちに堂奥の源氏物語を了解する事が出來ます前編桐壺より若葉の下まで全壹卷發賣す。後編目下印刷中

四六判最上製美本
全壹冊九百餘頁
金四圓八拾錢
送料廿七錢

東京市神田區表神保町七番地　**大同館發行**　振替貯金口座東京八七貳番

高島佐一郎著

第五版

改訂增補 金融經濟の諸問題

布製菊版六百四十頁
定價五圓
送料十八錢

廣汎な金融經濟論考の解明に對しては、私は今、先覺の謂はゆる「謬れる全體」を描かんよりも寧ろ「眞實の斷片」を寫すを選ばんとする立場に居る、また、內外貨幣金融財政の實際界が提示する時論の解決に對しては殊に、一般的問題よりも寧ろ顯著な特殊問題に沈潛すべき必要を感じて居る。これ、刊行一年にして四版を呼ばれつゝ犧羊となつた本書內容の一部を復活せしめんとした理由なのであるが、併し眞のフィニックスたるべくば、眞に新生命が吹込まれて居らねばならぬ。よつて、舊版十四篇中の六篇を削除して、新稿四篇及び新附錄四篇を收錄した。之により、希くば全體として、より强き論攻の「連鎖」を作り得た事と思うて居る。さうして之がまた、安んじて改訂增補版と命名して讀書界へ送らんとする所以である。（著者）

東京市日本橋區本銀町三
振替口座東京二八〇番
寶文館
大阪市西區阿波堀通四
振替口座大阪四三番

を刺す大獅子吼!!



し何人も傾聽すべき經世の大文字である。氏の哲學的考察になる着想と崇高なる信念より迸出せる言辭は一々讀者を首肯せしめ、簡明平易然も熱血罩れる雄辯は何人をも魅了せずんば已まず

新刊 ——

傷ましき偉人の胸臆
理想に突進し人類の大恩人たる偉人の胸臆を偲ぶ大演説——

世界的勢力たるウエルスの作品と人物
世界的大思想家の作品と其思想人物を詳説して遺漏なし——

眞理の解放
徹底せる眞理に立脚し、廣く世界の大勢を洞察して我國婦人の一大覺醒を促せる大講演!

鄕土を愛する心
麗はしき山河、なつかしき故鄕を思ふ名演説——

ウイルソンの生涯を憶ふ
畏敬せるウイルソンの追悼演説——聽者をして涙せしめ又奮起せしむ——

猶太人獨逸人排斥の原因を論じて世界に於ける排日感情の擡頭に及ぶ
その眞相!その原因!世界に對する挑戰、國民に對する警告——

鶴見氏は日米問題の爲め今尚國論喧しき米國に赴き各方面の名士を歴訪し得意の雄辯を以て祖國の爲に奮鬪中である

發行所
東京本鄕駒込坂下町
大日本雄辯會
振替東京三九三〇番

最新刊

高橋龜吉著

日本資本主義經濟の研究

四六判箱入 四〇〇頁美裝

◆定價貳圓也◆（送料十七錢）

純理にのみ卽した多くのこの種文献とは全然異つて本書は一々我經濟の實際を徹底的に調査研究し之を基礎に論究された唯一の文献であり、斯學の革命的新著である。例へば我國現在の經濟的行詰は果して一時的な不景氣のみに原因するか、將又我資本主義經濟の根本的行詰に基因するか。我各產業各事業現在の行詰は如何にして來り、如何にして打開さるべきか。此等の我國經濟にとり最も重大な根本問題に答ふる爲、著者は我國經濟の各部門の實際に就き、或は歷史的に、或は國際的に、或は資源的に、或は技術的に、一々詳細に研究し、就中、代表的產業に對しては徹底的に調査解剖してゐる。その取材の豐富剴切なる、調査研究の周到なる、觀察批判の劃期的なる理論の明徹整然たる實に著者の獨壇場である。然り、本書によつて始めて日本資本主義經濟の現狀及將來に對する正當なる理解と判斷とを掴み得られる。

最新刊

赤松克麿譯（ボグダーノフ原著）

經濟科學十二講

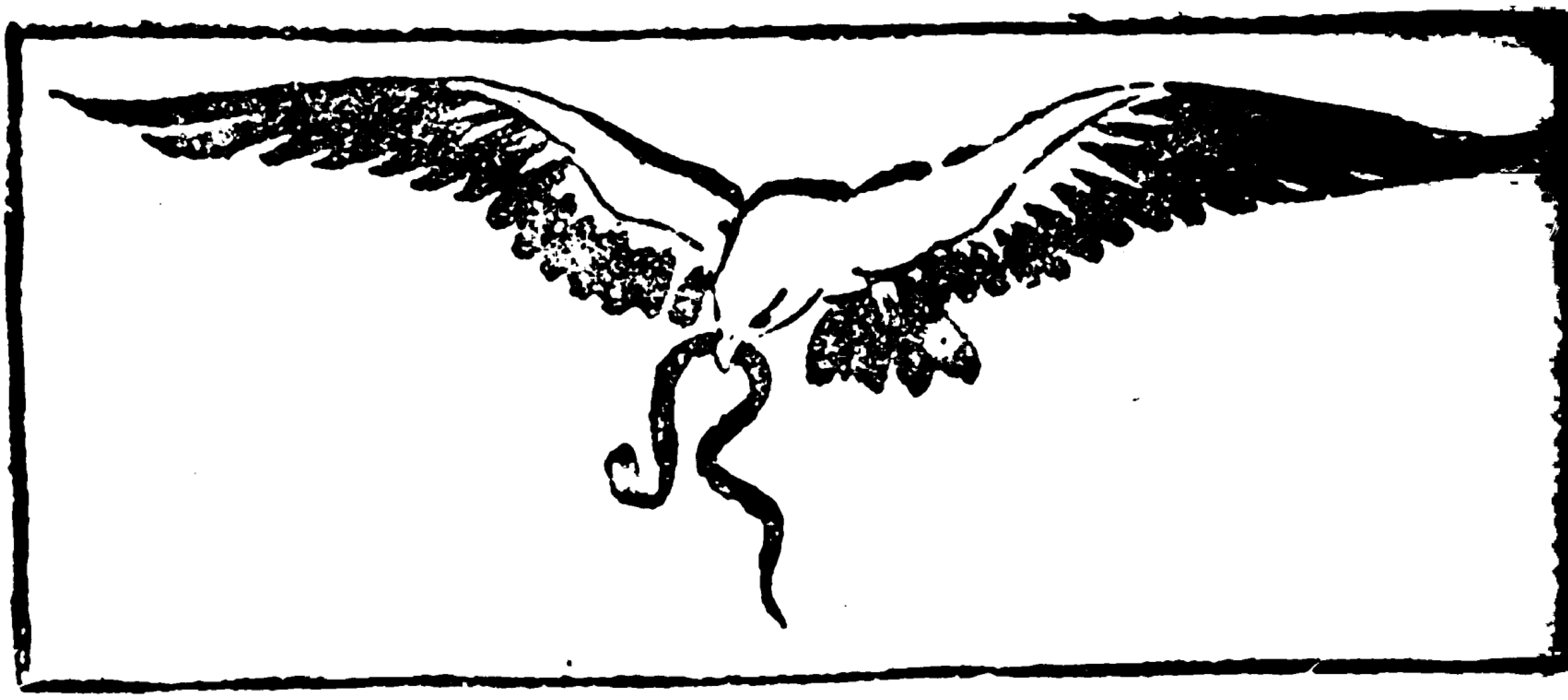
四六判箱入 布裝五五〇頁 定價貳圓八拾錢（送料十七錢）

經濟學は現代人に總ての問題の基本知識を與ふるものとなつて來たがどうも從來のやうな說き方では興味が起きないし亦我々の日常生活にシックリ當て嵌らぬ。本原著はロシアのソビエット政府が勞働者の教科書として編纂しただけあつて實に明快直截、その見方は純然たる無產階級の上に立脚し實生活にピッタリと合ひ、今迄の經濟學書を俯瞰して居る。ロシアに於て本書が一度出版さるるや各國の經濟學者は爭うて飜譯に着手し、今や本書は世界の勞働者の教科書とならんとしつつある此世界的名著が新進學者の譯出に依つて我讀書界に紹介さるる事は確に近來の快事と言はねばならぬ

東京市神田區美土代町二の一

白揚社

振替東京二五四〇〇番



（十一月號）

財政當局と軍閥との緊縮觀

正直掛値ない所で我々は現内閣をして普選斷行と財政緊縮丈には成功せしめて欲しいと思つてゐる。衷心我國民の前途を念じ、負擔の重荷に多年菜色ありし國民の憂苦に想到すれば我々は事々にケチをつけて内閣を倒潰するの非なるを轉た心痛するものだ。今回も軍閥と財政當局の間に意外の扞格を生じ、延いて政變まで傳調されたのであつたが、財政當局の妥協によりてそのことなきを得るの望みが立つたと傳へられる。姑息な妥協そのものに對しては我が民衆の尠からず遺憾とする所だ。そして濱口藏相が此事のために一身を賭して戰はなかつたことも氏の人格のためにも殘念に思はれる。しかし藏相が閣に叩きつけられておめ〳〵辭職するのは我々の却つて希望せざる所だ。我々は軍閥より濱口氏に親みを多く有し、濱口氏が國民的代辯者として閣僚中の第一人であり、現代の既成政治家中で、尤も私心少き人物であることを信ずるが故に、出來得る丈けの國民的聲援を與へて財政緊縮を有利に成功せしめたく思ふは我國民として將に當然のことだ。我々は濱口氏の理想に共鳴し、その手腕を信ずるものではない、我々をして其局に當らしむれば 論其以上の緊縮もあり、實行力もあるが、我々の抱負は殘されて三年後にあれば——其迄は我々の準備時代と見る——我々は破産申請を受けたる財政を引繼がぬやうに努力することも將來の我々の爲めの一必要事であると信ずるが、倘一面にその緊縮が姑息なる繼延の如き形式に出でずして、十年乃至廿年を通じての歲出入の均衡を確保し得る根本的條件を具備するものであるやを監視するの要がある。我國民が劣弱なる經濟的實力を以てして十億以上の負擔に堪ゆるは少からず無理を感ずるものであるから、庶幾くば十四年度以降の豫算も、國帑に或る剩餘を見るまでは十億内外の豫算にて切盛りして貰ひたい。かくすることは勢ひ軍事費に大斧鉞を加ふることであり、それも我國民の實力充實の前には忍び得る忍耐だと思ふ。我が農村の蕭條たる荒蕪に想到するものは軍閥が緊縮豫算の前に降伏するのが當然以上の當然であることを思ふものだ。（十月十三日）



混沌たる農村問題（其二）

（殊に那須、河田兩教授の農村問題論を讀みて）

福田德三

（一）

農村問題を適當に解釋し、解決し、窮迫の極に在りと謂はるゝ農民と農村とを其の窮狀より救ひ出すに就いて、先づ第一に爲されねばならぬことは、農村問題の本體を徹底的に見究めること是れであらねばならぬ。然るに我邦現在の農村問題なるものは、私の見る所では、未だ其の本體の所在が十分に見究められて居らぬ頗る混沌たるものである。從つて、我々は、農民と農村との救ひ出しを考ふるに先つて、農村問題其もの丶救ひ出しを考へなければならぬ。何をか農村問題の救ひ出しと云ふ、第一、事實上農村問題の本體を圍繞する所の混沌狀態から此問題を救ひ出すこと之れである。

第二、思想上農村問題の所在を晦澁ならしめる混沌たる農村問題論者の手から此問題を救ひ出すこと之れである。那須教授の『農村問題の歸趨』、(『改造』八月號)河田博士の『農民心理と時代思潮』(『改造』十月號)幷に博士の論文集『農村問題と對策』とは、何れも、此の救ひ出しとしての企てとして、甚だ有力なものであつて、五里霧中に彷徨する我々と農村問題とに取りて、暗夜の燈火たる可きものである。唯私は不幸にして、以上三論策を逐一精讀した結果、未だ本質上幷に思想上の混沌狀態から救ひ出され得ないものであつて、從つて、三論策によりて農村問題其ものが五里霧中から解脫して、白日を見るに至つたと考ふること能はざるものである。此論文に於いて、私の爲さんと欲する所は、私自ら農村問題の本體を見究めたことを示さんとするのではない。否、反對に私はまだ其本體を見究めること能はざる混沌狀態にあるものなることを示さんと欲するものである。私は最善の注意を以て精讀した此等三論策に依つて、殆んど何等の光明をも與へられなかつたことを、率直に玆に告白して、農村問題の混沌狀態からの救ひ出しの甚だ急務なることを訴へんと欲するに過ぎないのである。但し私は此論文において煩鎖なる學究的の言葉爭ひなどをしようといふ所存は少しも有たない、畏敬する專門學者の博議庸論に對して忌憚なく所感を陳述して、少しでも多く、農村問題の眞正の理解を得るやうにありたいと念ずるのみである。

(二)

河田博士は言はれる。「農民たるが故に、他の部類の人々とは、多少趣を異にせる心理狀態の認む可きものがある。心理狀態と云ふことが不適當であるならば、農民共通の思想又は思想の傾向の認む可きものがある。(中略)試に之を謂つて見ようならば、先づ農民は一般的に甚だ個人主義的である。又た甚だ傳統主義的である。別の言葉でいへば保守主

識である。次に又農民は一般的に宿命觀に捕はれ一種の宿命論者である。同時に又其の生活を處する上に於て甚だ個主義者である。そして此等の性狀や思想の傾向が、農民一般に共通なるは、主として、實にその與はれる農業といふ業務の性質と、その行ふ農村生活といふ生活樣式とより生じ來れるものなることも、睹易き所に屬する、居は心を移すといふが、先祖代々農業といふ單一の業務に從事し獨り農村の天地に生れるから死ぬるまで住んで居るのだから、其所に一種の共通なる農民心理の陶冶されるは當然であるその陶冶されたる共通の心理は、農業といふ業務と農村生活との續く限り、萬事流轉の今日に於いても、依然として持續されて行くのである。（中略）

所が右等多くの特色は、その何れを見ても、現代思潮一般とは、とかく十分に反りの合ひ兼ねるものばかりである。中には全く背馳するものもあり、中には傾向としては、稍々同一方向に向ひ乍ら、然かもよく十分に合致し併行し難きものがある。そして其事は、農民と農村生活とに取つては、現代に處する上に於て甚だ都合よからぬことである。之が爲めに、農民は農業を捨てゝ都門に走り、農村は荒廢して、今日の所謂農村問題の心理的原因と爲す所となる。（中略）

要するに、農民心理の一大特徴としての個人主義は、同じく個人主義ながら、現代一般の個人主義思潮とは、稍々の立場を異にし、とかく、十分に反りの合ひ兼ぬるものたるを謂ふことが出來る。そして、其の意味の個人主義心理に捕はれたる農民は、それが爲めに益々現代思潮と現代生活とに於て、其の地位を危くせられ、段々影の薄いものとなりつゝあるを否み難い、農民にして早くこの心理の轉換を圖り、個人主義に立つにしても、人格主義的にして、然かも盃明的な、同時に又生活と業務との上に於ては、共同一致の力を養ふて以て新なる團體主義を迎ふることを爲さゞるに於ては、農業の衰微と農村生活の沒落とは、所詮免れ難き所たらざるを得ないであらう、農民の抱懷する個人主義甚だ呪ふべきである。排斥す可きである。撲滅す可きである。農民にして飽迄之を固持する限り、時代は之を粉碎せなければ

止まぬのであらう。

次に又農民心理の特徴たるその傳統崇拜心や宿命觀的態度やに就いて見るも、何れも今の世には不向なものばかりである、即ち極端な傳統崇拜の如きは、進歩と改良を容るゝ餘地なきものである、農民の有する傳統主義はそれほど極端なものではないにしても、時勢と共に移り行くを妨ぐる點に於て、それは農業々務と農村生活とをして、段々時勢後れのものたらしめると。以上が農民心理を農村の運命とに關するが博士の考への筋道である。

（三）

此れによつて、見ると、博士は、現代の『農民心理』なるものを、徹頭徹尾否認し、農民離村、農村荒廢の最大原因を、此の『時代思潮と反りの合ひ兼ぬる農民心理』に歸して居られるのである。他の語を以つて、云へば、今日の農村問題發生の最大責任者は、此の時代後れなる『心理』てふものを所有する農民其人であると云はれるのである。私は博士の此の考察の仕方には、實に耐へ難いほどの混亂と不透徹性とが含まれて居るものと感ずる。今少しく順序を立てゝ少し私の解し得た所を述べて見よう。

第一に、博士が日本の農民を以つて個人主義心理に捕はれて居るとの斷案を下されたのに對し、私は喫驚を禁じ得ないものである。私共の見る所では、日本の農民位非個人主義的なものは類例少いと云はなければならない、日本農民の間には個人と云ふ思想は極めて弱いものであり、其の個人性の發達は非常に遲れて居るものと思ふ。然るに依つて又た社會と云ふ觀念、社會思想は極めて幼稚なのである、言ふまでもなく、社會と云ふ觀念の發達は、個人と云ふ觀念の發達と其の度合を同くするものである、構成要素たる個人性の覺醒するにあらざれば、構成體たる社會性の自覺は起り得

ないのである。若しも博士の言はるゝ所の意味が日本農民間に社會觀念幼稚なりと云ふにあらば、其は誠によく正鵠を得たものである。然し若し博士にして、其事を言表すに、個人主義的てふ言葉を以てせらるゝものならば、其は問題の紛糾否顚倒と云はなければならない。博士も此點に考慮せられたか否か、後段に於いて、農民の個人主義と一般の（卽ち正しく言ひ表はされたる）個人主義と決して同じからざることを繰返し言つて居られる。乍去、是れは、自殺的論證ではあるまいか。正しく解せられた個人主義觀と、日本の農民の『心理』又は思想の基調（グルンドトーン）とは全然反對なものである。然るを博士は、兩者を以て共に個人主義の細目（アプアルト）なりとして居られる。是れは、單に言表はし方の問題ではない、抑も『心理』なるものに關する根本的見方の相違の問題であると信ずる。

（四）

博士は或は Bäuerliche Pfiffigkeit（百姓の頑固性）Bäuerlicher Egoismus（百姓の利己心）のことを、個人主義てふ全く異れる內容を有する語にて言表はして居られるものではないか。若し萬一然るならば、其れは驚く可き概念の錯誤に陷られたものと云はねばならぬ。頑固性とか、利己心とか云ふ性狀の傾向と、個人主義と云ふ一の人世觀とは如何なる場合にも決して混同す可きものではないのである。然し私は日本の農民を以て特に頑固性や利己心に富めるものと考ふることを得ないものである。否、日本の農民は、農民として頑固性や利己心に富まざることは、之を歐洲大陸の農民に對比して、甚だ顯著なりと觀察しつゝあるものである。而して其れがやがて日本に於いて早く農民解放運動の起らず、小作爭議の起らず、日本の農民は永く『死なず、生きざる樣に』壓へ付けられて、其運命に默從して居た最大の原因であると思ふものである。博士は、又此の現象を解して、日本の農民は宿命論者なりとせられる。此れも亦私は理解

することを難んずる點である。日本の農民が、堪へ難き壓迫に永く堪へ忍んで居たのは、彼等が一種の宿命觀に囚はれた宿命論者であつた爲めと見るのは、同情に缺け、理解に缺けること大なる見方ではあるまいか。彼等は、西洋の農民の如き Pfiffigkeit を有せず、素直な人間であつたが爲めに、堪へ難きを堪へ忍んで、百姓一揆を起すこと極めて稀（西洋に比すれば、殆んど皆無と云つても差支ないほどに）であつたので、彼等は決して宿命論の人世觀に立つて、此の宿命を甘受して居たものとは思はれないのである。博士の云はるゝ節儉主義者たりしてふ事も亦同樣であらうと思ふ。日本農民は、別に節儉主義などと云ふ倫理觀上の一主義を奉じて居たものとは思はれない。彼等が節儉なりしは、然するより外に生く可き道が存しなかつたからである。『死なず生きざる樣に』と仕向けられたる彼等としては、極端なる節儉によつて死せず、さりとて大いに生きもせず、辛ふじて其露の命をつなぐの外はなかつたのである。此等の『心理』なるものが、農民に累したのは、寧ろ昔しにある。此『心理』あるが爲めに、日本農民は永く解放し得られなかつたのである。而も、其れは、彼等が責に任ず可き惡癖でなく、却つて、彼等の人間としての尊さを示すものである。其尊さを利用し、それに附け込んで、彼等を永く壓迫した江戸幕府時代の武士諸侯こそ憎みても猶餘りあるものなのである。然るに河田博士は、日本農民の此の『心理』なるものを以て、農村荒廢、農民離村の責任者として、之を非難す可く彼の一文を公けにせられた。博士は果して日本農民の眞の理解者を以て目せらる可きであらうか私は多少の疑を抱くことを禁じ得ないのである。

（五）

然らば、過去に於いては、其人間性の尊さを成して居つた此の柔順性は、今日の時勢に於いて、農村問題を惹き起し

た原因と見る可きであらうか。換言すれば、河田博士の見方は、過去に就ては妥當ならずとするも、現在に於いては轉じて妥當性を生じ來つたものと見る可きであらうかと云ふに、私は斷じて左樣ではあるまい、否、寧ろ其反對の見方こそ妥當性をより多く有するものであらうと思ふ。言葉を換へて言へば、今日農村問題の叫び聲の喧しくなつたのは、博士が日本農民の心理若くは思想傾向として指摘せられたものゝ存在するより起つたのではなく、寧ろ其反對に、其の『心理』其の思想傾向が段々消滅し行くが爲めに、今日の農村問題は起つたものと見る方が當を得ては居らぬかと、私は觀察するものである。博士の言を藉りて云へば、一般の現代心理、思想傾向と兎角『反りが合はない』が爲めに、農村問題が發生したるにあらず、却つて、其反對に、農村の民も、漸次に、現代の心理、一般の思潮と『反りの合ふ』ようになり始めたが爲めに、農村問題は發生したのであつて、博士の見方は、冠履顚倒、トプシー、ターヴヰーと云はなければならないようである。從つて若し、農村荒廢、農民離村の責任が、農民の側にありとするなれば――私は之を否認するものである――、其れは、博士指摘の『心理』の存在の上にでなく、却つて其の漸次的消滅の上にこそ求めらる可き責任であるのである。而して此の心理の消滅を促したものは、農民自身でなく、農民以外、農村以外の所謂現代――即ち資本主義營利經濟の現代――であることは、誰人も疑を容れない所であらうから、消滅の責任を彼等農民に歸しようとするのは、飛んでもない履き違ひとなる。責任者ありとすれば、其れは農民以外、農村以外の天地に尋ねられなければならない。即ち言葉を換へて云へば、私は農村問題發生の原因を農村の中に求めようとする一切の農村問題論を以つて無理解の甚しいものと見る。農村問題發生原因の所在地は遠く農村以外にあり、其責任者は、全然農民を離れたる以外の社會にあると信ずるものである。河田博士が農民に早く之の心理の轉換を圖れと命ぜられる其事は、博士の命令を待つまでもなく、既に已に起りつゝあるのである。其れが起りつゝあればこそ農村問題は喧しく叫ばれるに到つたので

ある。博士か農村問題消滅の適薬として處方を盛れた所のものは、實は却つて其の勢を助長せしむ可き最有力の動力たるものであると云はなければならぬ。

（六）

讀者は、以上の言によつて、私が農村問題を見る見方は、其態度に於いてのみならず、根本的立場に於いて、河田博士の其れとは相反せるものなるを諒とせられたことと思ふ。即ち私は農村問題の發生を一の忌はしいこと、悲しむ可きこと、希はしからざることと見るような立場に立つて居らないのである。元より其様な問題の起る餘地が全く存在せず、日本の農民が生活の安定を得、人としての生存を十分に樂しみつゝあるものならば、其れか理想的狀態と云ふ可きは勿論である。それに反して生活の安定なく、人としての生存の脅かされて居ることが事實なる以上は、一日も早く、而して一聲と雖も多く、農村問題の起り、叫ばれることは、其れが發生せず、其れが叫ばれざる昔よりは、遙かに勝つた現象なりと私は信ずるものである。病なく痛も亦なきは最上である。然し病あるに痛なくして病者其病に心付かざるは危險此上ないことである。私は日本農村と農民との現狀にして持續する限り、農村問題の彌々益々聲高く叫ばれることを歡迎する外なしとするものである。而して問題の發生が、博士の指摘せられた農民心理なるものが、漸次消滅し行く處より起つたものとするならば、其の消滅こそ寧ろ喜ばる可き現象と云はねばならぬ。嘗て神戸正雄博士は日本農民は可成自足經濟に甘ぜざる可からず、即ち其食ふ所の醬油を自ら作り下駄を自ら作るようにし、都會の産物たる毛布や洋傘を購ふことを罷めねばならぬと主張された。私は博士に反問して、何故農民のみ自足的でなければならぬか、農民か下駄や醬油を自ら作らねばならず、反對に大學教授は舶來のソースや靴を三越でドシ〳〵買入れて差支ないとは、抑

も如何なる經濟理論によりて要求せらる可き處なるかと。河田博士の論、神戸博士の論共に兄たり難く弟たり難き農民差別特殊視の見地を示めすものではあるまいかと思ふ。更らに又た河田博士は、農民離村を以て大なる疲弊として居られる。他方に、日本今日の農村の疲弊を農村人口の過多に歸しブラジル移民を主張せらるゝ論者は那須教授である。離村することなくして、遠く南米ブラジルに移住し得る妙案は、私は考へ及ぶこと能はざるものである。農村人口が過多なることが、農村疲弊の原因なりと聲高く叫ぶ論者よりも、默々として自ら離村して幾分にても過多なる人口の緩和を實行しつゝある農民こそ、より忠實なる農村問題解決の實行者であるのではないか。(但し私は流行の移民論を一の謬見なりと信ずることと後段述ぶるが如くである)今の農村論の晦澁、混亂を示めす好適例として、私は此一事を指摘して置かなければならないと思ふ。而して此の混沌はやがて現時の農村論を最もよく特徴付けて居るものゝように思ふ。

(七)

那須教授は、其論文の始めに於いて、『農村問題の特異性』として農村問題の內容の斯く複雜豐富なることが個人をして農村問題の本體何處にありやと惑を抱かしむる所以となるのである』と言つて居られる。此事は那須教授も引例せられた如く、先年の社會政策學會大會に於いて、私は高野博士と共に横井時敬博士に對して繰返し指摘した處であるが、爾來數年農村問題に關する論議甚だ盛となつた今日に至り、更らに新人たる那須教授の該博なる論を得ても、一向緩和せられて居ることを見出さないのは遺憾極りなき事である。農村問題の內容が複雜なることは事實である。否定す可からざる事實である。故に他の多くの問題に勝りて農村問題こそは、理路井然たる透徹した考察を最も急要とするのである。單純なる問題に向ふには、左迄の用意を須ゐず素朴なる常識論を以てしても差支あるまいが、問題が複雜なれ

ばなるほど、十分に用意せられ、訓錬せられ、研ぎすまされたる鋭き觀察を以てすることが必要である。今日の農村問題の混沌たる原因の大半は、問題其ものゝ複雑なるにあることは疑を容れない處であるけれども、他の一半は、其の觀察者の混沌、其の立論の不透徹に存するのではあるまいかと思ふ。而して那須教授の農村問題複雑性論は問題の複雑性を示めすのみならず、其の觀察の複雑性を最も有力に示唆するものゝように思ふ。

那須教授は云ふ、農村問題に於ては、一國全體、又は都會に就きて論じたる時に別々となせる問題を、往々、一括して相聯絡せるものとして論ずるが爲めに、其れは複雑となるのである。然らば左樣に一括して論ずるは何故であるか、其れには下の如き理由ありと思ふとして六箇條をあげて居られる。

一、農村住民の大多數は略同一なる環境の下に同一なる職業即ち農業に從事して居ること

二、其の結果として、農村民は其の心理に於て共通點多く、經濟的、社會的、文明的生活及要求に於いて、略同一なること

三、農業は尚生業の域を全然脱して居らぬために、多くの市民にありては、營利生活と家庭生活とを判然區別し得るに反し、農業者にありては、其の經濟的活動と家庭的、社交的生活とが不可分の關係に存すること

四、農村に於ては、文明生活の各要素間の有機的結合著しきが故に、一の要素に就きて、改良を圖る爲めには、同時に他の要素に對しても變更を加ふる必要があること

五、農村に於ては、人間及び職業の移動、事情の變遷が都會地に於ける如く急激ならざるが故に、各種要素的の相關々係を研究するに便宜多きこと

六、農村の對外的問題、例へば都鄙公租負擔の配分、農産物保護關税、農産物價格調節、國民食糧自治等の問題と、

農村の對內的問題、例へば、農業組織の變革、農家經濟改善等の問題とは之を切り離して考ふるを得ざること

（八）

教授は云ふ、『以上の如き事情存する爲めに、農村問題は自ら複雜なる內容を有するに至るのである。（中略）斯くの如き經營上の問題は工業及商業にも均しく存することではあるが、農業に於ては、其の作業の種類が商工に比して遙かに複雜であるから、研究す可き事項も頗る多端となるのである。これ農業經營學なるものが學的存在を要求する基礎である。』と。私は此一節ヲ讀んで殆んど私の眼を疑はざるを得なかつた。何となれば、農業の經營が商工業の經營に比して遙かに複雜なりと云ふことを自明の事理の如く、博士は我々に默認を命ぜられ、而して更らに內容が複雜だから農業經營學が學的存在を要求する基礎があるてふ學問方法論上前代未聞の哲理を我々に强制せらるゝからである。考察す可き事項が頗る多端だから學的存在要求に基礎ありとして農業經營學が主張せられるなら、其れは、理としては自殺的主張と云ふの外はない。何となれば、其樣なる理由を以て其の存在を要求するといふ事其事が、學的存在を自ら否認する最も有力の基本となるは疑ないことであるから。博士は、農業にのみ經營學の存在を主張し商工業にも經營學あることを毫も知られざるにや、考究事項の多端なりてふことが存在の理由ならば、商、工經營學は農業經營學よりも、更らに遙かに多く存在の理由を有つであらう。其は兎に角、農業が商工業より作業の種類が複雜なりとは、餘りに現代離れのし過ぎた觀察ではあるまいか。博士は農業經營學に精通せらるゝ他方に商工業の實狀に就ては曾て一顧をもせられたことなしと見へる。何となれば、然るにあらざれば、此くの如き發言は到底發し得らる可きではないからである。否發言と云ふは寧ろ當らず、私は直下に其を謬論と呼んで決して不遜の罪を冒すものでないと信ずるものである。教授が農業經營を

以て商工業の比し得可からざる複雑なるものなりとして列擧せられた七ケ條の何れを取りて見るも、其れ以上、若くは少くとも、其れと同程度の複雜な內容は、商業經營にも工業經營にも存するのである。即ち（一）耕地一帶の面積狹少且不規則なるが爲めに耕地整理の必要があると云ふことに對しては、工業には、經營範圍の問題があり、又た『シュタンドオルト』の問題がある（從つて『シュタンドオルトレーレ』と云ふ一科の構成を主張する學者がある）（二）轉業又は移住の問題は、工業勞働者に取りての大問題である（三）組合の問題、工業にも商業にも同樣の問題がある（四）厩肥不足の問題、此くの如きものを數へ上ぐるとなれば、工業上には僕を更ふも盡きぬほどある。商業も亦然り（五）勞力過不足の問題、之れは農業の問題としてよりも工業の問題として重大なることは誰人も皆知る（六）農業信用の問題、商業信用の問題はそれより數倍重要の問題である（七）農業者の機械的智識、工業勞働者に要せらるゝ其れと孰れが重きか等、教授の列擧は、却つて農業の經營は、商工業の經營に於けるよりも、問題の內容單純なることをこそ示せ、其の複雜なることを立證する力は些も之を有たぬように考へられる。

（九）

更らに遡つて教授の前段の六ケ條を見るに、其の大多數は、現今の農村問題に特有なものではない、何れも幾百年の昔から、我邦の農村に存して居たものである。即ち我農民は遠い昔から、（一）同一の仕事に從事して居た（二）其の經濟的、社會的、文明的地位及要求に於いて略同一であつた、否今日よりも更により多く〳〵同一であつた（三）經濟的活動と家庭的、社交的生活とか不可分の關係にあつた（四）文明生活間の各要素間の有機的結合が著しかつた（五）人間及職業の移動事情の變遷が都會に於ける如く急激ならず、各種要素間の相關關係は密接であつた。而して其密接さは

今日よりも遙かに大であつたのである。然るにも拘らず、農村問題といふものは毫も存在して居なかつたではないか？——**農村問題の複雑なることを、右等の事情が存するのを以て説明しようとするのは、歴史を全然無視し、社會發展の行程を全く度外に措くものでなくて何であらう。**

（十）

教授の指摘せられた所は、農村問題其ものゝ複雑性ではない。現今に於ける所謂農村問題論者の取扱方の複雑性である。右列擧の諸事項を別々に引離して考究すること、都市に於ける諸々の問題に於ける如くするならば、此の複雑性なるものは雲散霧消するのであらう。取扱者の頭腦錯綜して理義の明断を缺くが爲めに、其取扱方が支離滅裂となり、從つて右の如き複雑性が起つたのである。此事は横井時敬博士に對する抗議に於いて私は詳説して置いたことは、那須教授今猶記憶せられるであらう。問題が混沌たるにあらず、問題者の腦裡が混沌紛糾して居るのである。問題若し幾あらば、必ず其不遇を慨歎するであらう、殊に勞働問題の好遇を健羨に堪へないであらう。教授の列擧せられた（一）（二）項は問題其ものから見れば、複雑性の證據たらず却つて其の單純性の左券とならざるを得ないものである。農民の大多數が略同一の環境の下に同一なる職業を營んで居ることは、問題の共通性と其單一性とを條件付こそすれ、決して其の複雑性を示めすものではない。又農民の心理に共通の點多く、經濟的、社會的、文明的生活及要求に於いて略同一なることは、同じく其間に起る問題をして單一性を帶びること甚大ならしめるもので決して之を複雑ならしめるものではない。教授或は答へて云はれるであらう、然り汝の言の如し、然れども予は六ケ條の一々を以て農村問題の複雑性を證明せんとするにあらず、六ケ條集積して一の農村問題を成すが故に複雑性を生ずと證明せんとするものであると。果して然れば其

は全然取扱方の事項である。如何に單純な問題たりとも、一定の方針なく、一貫の理路に依らず、唯だ思ひ付いた儘ゴタくと並で立つるときは、複雜なるものとなることは勿論のことである。農村問題の大部が大抵たるゴタく的取扱を要求するとせば、其は問題の複雜性を裏書することとならう。本質が之を要求するに非ず、唯だ問題取扱者が、精神的怠惰性の常習者にして、其々の性質に從つて問題の分類と其特殊的取扱を爲すことを怠つて、雜然と思ひ浮ぶる儘に問題を混淆する物臭太郎たるが爲に、此の複雜性が生じたのではあるまいか。然れば農村問題を解決せんとの善意ありて却つて其の紛糾を助長するもの と云はなければならない。都市に起る凡百の問題を若しも右と同樣なる物臭的取扱を爲すとせよ、其の複雜性は到底今日の農村問題の其れとは同一の談でないに相違ない。唯都市諸問題の取扱者は幸にして物臭太郎にあらず即興的常識論者に非ず各般の問題に對して一々特殊的に、適當なる取扱と處理とを爲せばこそ農村問題を今日累しつゝある複雜性を免れ得て居るのである。責は農村問題其ものには毫末も存せぬ、唯其の怠慢なる取扱者にのみあるのである。

(十一)

論じて玆に來り、私は批評の筆を姑く休めて私自らの複雜性理由観を一言して置く必要があると思ふ。農村問題は複雜である。確かに複雜である、其取扱者を入れ換へて有爲有能なる人の手に任かすとも、其複雜性は容易に取去ることを得るものでない。其然る所以は那須教授の指摘せられた取扱上にあるのではない、抑も問題の本質其ものに存すると言はなければならぬと思ふ。

今日の經濟社會は資本主義組織を其基調とするものである。農村問題は、資本主義の發達に促かされて起つた問題で

ある。農村問題は農村から起つたのではない。社會から、――資本主義の支配の下に立つ營利社會から――起つたのである。恰かも勞働問題は勞働其ものから起つたのでなく、資本主義社會から、殊に資本の側から、資本的企業者の側から醸し出された如くに。若しも經濟生活の資本主義化が全く起らず、又はよし起つても今日の如く顯著でないならば、那須教授の列擧せられ若くは未だ列擧するに及ばれざりし幾多の事實が存するとも、今日の所謂農村問題は決して起らないに相違ない――他の形で色々の問題は起るであらうが、其れは今日の所謂農村問題では決してない――故に我々は、農村問題の成立と其の本體、其の本質とを農村に求める限り決して之を見究めることを得る望なきものである。此れを見究めんとするには、我々は其の醸出の本場に於いて探索せなければならない。農村問題が那須教授の言はれた樣に一の特異性を有つことは確なる事實である、現前の事實である。我々は此の特異性の解釋を農村の間に求めても到底之を得ることは出來ない、其れは、其の適當の場所に就いて探求せられなければならない、即ち現代の資本主義經濟組織に立つ社會の中に求められなければならないのである。而して私は農村問題の特異性としての其の複雜性は、資本主義社會に於ける一の消極的事實と見て始めて其の本質を究めることが出來るものであると考へつゝあるものである。

（十二）

今日の資本主義社會は、其態樣の複雜にして其行程の多趣多端なることは、到底農村に於けるの比ではない。然るに農村問題は却つて複雜性を其の特異性とする。是れは一見逆理であるかのやうに見えるが、實は逆理でないのみならず、却つて事理の當然を物語るものである。何故に然るか。

資本主義社會は實に形容し能はざる程複雜なものである。而して資本主義の擔荷體なる商業、工業は其の本質に於いて

も、其經營に於いても非常に複雜なものであつて、到底農業の得て比し得可らざるものである。然るに其態樣は如何に複雜に、其の經營上の問題は如何に多岐に亘るとも、其等は資本主義てふ一の經濟主義によつて一貫的に又た徹底的に支配せられてゐるものである。資本主義は從來人間の經濟社會を支配した何れの主義よりも遙に勝りて有力强大な主義である。其支配は絕對的とも云ふべき程徹底したものである。其作用は如何なる專制君主も企て及ばざる底の强大なものである。殊に資本主義の獨壇場たる市場と云ふもの丶發達すればする程、其支配は全排他的獨占的となる。營利經濟の主體は云ふ迄もなく、營利圈外に在る經濟主體たりとも、今日の社會に於て生を營むには必ず此の市場に藉らなければならない。一切の工業の生產は市場生產である。一切の商取引は市場取引である。一切の賃勞働は市場勞働である。否少くとも都會住民の消費は市場消費たるの色を濃くしつ丶あるのである。藝術も、政治も法律も漸次市場藝術、市場政治たらんとしつ丶ある。かくて我々の生活の大部分は市場に關はらずしては、維持せられないようになつた。市場は暴君である、單なる接觸を許さない、一度玆に出入し一指たりとも之れに觸る丶ものはこれを對等關係に置くことを許さない、市場は其觸る丶一切のもの、其接する凡べての物に對して支配者、命令者となるにあらざれば罷まないものである。即ち我々は市場に依係する限り、其の被支配者、其の命令執行者となるの外はないのである。市場の被支配者は即ち資本主義の被支配者である。而して然る限り、我々は極めて徹底的にして一貫的なる一の原則によつて支配せられ、之れに依りて我々の複雜多趣なる生活態樣を整然と統一化せられるのである。資本主義の特徴は營利主義である。餘剩價値の追求と其集積とを最高命令者の祭壇に祀るものである。此の營利主義此の餘剩價値追求は更らに極めて嚴格なる合則性 Gesetzmässigkeit合理的 Rationalität を其基調とするものである、從つて營利主義に支配せらる丶限り、餘剩價値追求に係依する限りの人間の經濟的、社會的存在と其の行爲とは、嚴格に一貫せる此の合則性、合理性の

下に立ち、此れに依りて其の生活態樣の複雜其の生活運營の多趣性を一律化せられ、統一化せられるものである。此の認識なくしては、現代の資本主義經濟組織の眞相は之を捕捉することは出來ない。殊に我々の經濟生活の基調を理解することは全く不可能である。

然るに今日の所謂農村生活は、此の資本主義の支配を受くること余り無きか、若くは輕微のものである。殊に我邦農民の大多數は市場への接觸からは未だ甚だ遠い地位に在るものである。從つて、營利主義の一貫的合則性、合理性の支配を受くること全くないか、あつても極めて微弱たるに過ぎないのである。從つて農村と農村の生活態樣と其經濟行爲とは有るが儘にの素朴に任かされてあつて、營利主義によりて其態度を整理單一化せられ、生活行動を統一化せられること殆んど若くは全く之れなきものである。此の農村に、此の農民の間に起る問題たる農村問題は、從つて合則的に、合理的に、單一化せられ、統一化せられ一の嚮導的主義の中に整理せられることなき素朴其の儘のものである。今日現在の農村問題の複雜性は此事情から起つて來て居るのである。問題其のものの複雜性が他の問題より大なるのではない。問題の依つて起る農民、農村生活其ものが未だ資本主義の洗禮を受け合理化、合則化の聖別を受けさる生れながらのものであるからなのである。

（次號完結）

金貨本位制復興の可否時期幷に方法

堀江歸一

一、金貨本位制の意義に對する解釋の寛嚴——金貨本位制の特徴——金貨本位制の要件——鑄造手數料の問題——自由鑄造と自由輸出——銀行券幷に預金通貨と金貨本位との關係、二、金の輸出に對する自由——自由金市場の意義と效果——英蘭銀行と金吸收の自由——英國の經濟的優勢、三、金の輸出に對する制限——金貨本位制の廢棄——其經濟社會に及ぼす結果——通貨膨脹、通貨價値の低落、四、政府紙幣發行の意義——政府紙幣發行の繼續する所以——政府紙幣と公債政策との關係、五、國際金融中心爭奪の問題——英國をして國際金融の中心點たらしめた所以——戰爭に依る其礎の搖撼——紐育の擡頭——世界に於ける金の分配——合衆國の對資本供給力、六、金貨本位制の即時復興論——カンリッフ委員會の意見——ウオーター、リーフ氏の意見——之に對する反對論、七、金貨本位復興無用論——牽制される通貨制度——之に對する正面の反對論——物價指數を標準として、貨幣價値を牽制する制度——國家と貨幣との關係

一

金貨本位制と云ふ言葉は一般世人に依つて、多くの種類の、又多くの形態の貨幣制度に對して、極めて緩漫に適用されることを常とし、斯る緩漫なる用法を以つてすれば、金貨本位制なり、金貨本位國なりの類は少なしとしないのである。現に我國の如き明治三十年現行貨幣法が制定されて以來、自ら金貨本位國の列に入つたものと考へて居るが如き、

此一例である。然しながら英國のハートレー・ウヰザース氏や、ジエー・エム・キーンス氏は先年或る機會に於て、日本を以つて、金貨本位制を採用したものに非ずして、金爲替本位制を運用しつゝあるものであり、隨つて純眞の金貨本位制と爲るには、改革を施す餘地の多々あることの意見を發表した例がある。我國に於ては、名實共に金貨本位國を以つて、自任するに對して、外國學者の內に、異說を唱へる者のあるのは、何故であるかと云へば、要するに金貨本位制なるものに對して持つ解釋の寬嚴に出ると見ることが出來る。一國が或る定量の金地金を以つて、國民から金貨自由鑄造の請求に應ずることを認め、其金貨を本位に充てた場合に、世人は之を以つて直に金貨本位制とするの常であるが、右の如き規定のみを以つてして、直に金貨本位制を實行したものとするに對じては、非難の生ずることを免がれない。金貨本位制なるものゝ本旨は金を以つて價値の尺度とし、金の價値を以つて、萬般貨物の價値を測定する規準たらしめることに存する。金の價値の一定不變のものでないことは、論を俟たないし、銀に比較し、將た又一般貨物や勤勞に比較して、價値の確實を保つを得るかどうかに就ても、自ら論爭の端たらざるを得ないのであるが、之を多年來の歷史に徵すると、金が廣く世上に於ける各種の用途に分布され、是等の用途の間に、自由に轉換するを得る事實の動かす可からざるものがあり、年々の產出額に對して、年來の蓄藏額の頗る多量に上つて居る爲めに、年產額の增減を以つてして、價値に急劇なる變動の惹起されざる事實に徵し、將た又國際間に於ける金の移動の極めて自由である結果、金は其物資に對する價値の幾分なりとも低き所から、其高き所に向つて移動し、斯くて國際間の廣きに亙つて、價値の均衡を保ち、其均衡を保つことを通じて、價値の確實を收めるを得る事實に照し、今日の處、金貨を以つて他種類の金屬に比較して、價値の確實を得るものと斷定しなければならない。從來多數の國が金貨本位制に對して、強き憧憬を懷き、機會の乘ず可きものがあれば、直に取つて金貨本位制に移ることを逸しなかつた所以であるが、然も能く金貨本位制の眞理

を理解して、純眞なる意義に於て、此制度の與へる利益を享けるだけの用意に出でたものがあるかと云へば、自ら問題の生ずるものなきを得ない。

既に金貨本位制にして、其本位貨幣たる金貨の價値確實であり、此本位制を採用したならば、物價に及ぼす影響を其最低限度に減縮し、斯くて商業取引の安全を維持するに足りると云ふことを重なる理由として主張されるものである以上は、金貨本位制の下に於ては、飽くまでも本位金貨の價値をして地金の價値と同一のものたらしめ、又兩者をして同一程度に、同一方嚮に變動せしめる工風を講じなければならない道理であつて、此工風が完成して、玆に始めて金貨本位制の實、擧れりとするを得るのである。然らば右の要件を充すに就ては、一國の貨幣法に如何なる規定を設け、又一國に於ける貨幣流通上に如何なる習慣を認めることを必要とするであらうか。貨幣法の規定から云へば、

第一、金貨の鑄造に對して、手數料の賦課されざること、

第二、金貨に對して、自由鑄造の認められること、

第三、金貨の鎔解、輸出等に對して、之を禁止する法律上の規定の存せざること、

を必要とし、貨幣流通上の習慣から云へば、貨幣の鎔解又は輸出を禁止する法律上の規定の存せざる其上に、之を非なりとし、又は之を妨害する何等の習慣の存せざることを必要とするのである。鑄造手數料の賦課される場合には、其料金額だけ、地金に對して、貨幣の價値を高からしめる道理であつて、斯くて內國に於て、將た又國際間に亘つて、貨幣と地金との間に、用途轉換の作用の生ぜんとすることを妨げざるを得ないのであるが、今日三四の國に於て賦課するが如き輕微なる鑄造料を以つてしては、貨幣と地金との間に於ける價値の差違は敢て重大なるものとするに足りないのであるから、鑄造料の如何は姑く問題の外に置く。而して本位貨幣の自由鑄造と自由輸出（鑄潰の自由を含める）とは地

金と貨幣との間に起らんとする價値の差違を絶滅し、兩者の均衡を維持するに就て、最も必要とされる二個の作用であつて、其一を缺いたならば、純眞なる金貨本位制度の運用に對して、直に支障を生ずることを免かれないであらう。蓋し金貨の價値が地金に比較して、高い場合には、地金の所有者は必ず地金を造幣局に齎して、其鑄造を請求し、鑄貨の供給の市場に增加する結果、自ら金貨と地金との間に價値の均衡を保たしめるを得るが如く、貨幣の價値が地金に對して、高い場合には外國に債務を負はして、之を決濟する地位に居る人は先づ貨幣を外國に輸出し、其內國市場に於ける供給を減縮することに依つて、貨幣をして地金の價値と相等しき程度に達せしめるからである。即ち自由鑄造と自由輸出とは相倚り、相助けて、以つて金貨本位制の運用を完成せしめるのであつて、若しも其一を缺いたならば、金貨と地金との價値に若干の差違を生じ、斯る差違の存するだけ、金貨本位制をして純眞の意義から、遠ざからしめるに至るのである。

若しも上記の場合に、銀行券が通貨の一種として、世間に流通したならば、如何なる關係を生ずるであらうか。銀行券は一葉の紙片に外ならない。然しながら一國に兌換制度の備はれるものあり、國家が之に關する法令を勵行する一方に、銀行亦之を遵奉するの誠意を持つ以上は、銀行券の發行法にして特に健全なるものに非ざる限り、銀行券は必ず或る程度まで、金貨又は金地金を代表し、金貨金地金の增減に伴つて伸縮し、金貨と相並んで、能く同價流通の事實を生ずる。隨つて兌換制度の維持される間、又銀行に於て兌換制度の運用に堪へる間は、銀行券の發行は世間に伸縮自由の通貨を供給する利益を與へて、一方に金貨本位制の純眞其ものに何等の障害を及ぼさないのである。

然らば銀行券と相並んで、一國の市場に所謂銀行通貨なるものが小切手に依つて代表されて、能く通貨の働きを爲す場合には、金貨本位制に對して、如何なる影響を及ぼすであらうか。此點に就ては、銀行通貨供給の任に當る市中諸銀行が如何なる態度を取るかに就て、顧みる所なければならない。舊來銀行論の一原則として、承認されて居るものは、

所謂健全なる銀行業の原則（Sound Banking Principle）であつて、銀行が預金取引を通じて、取引先に信用を與へ、斯くて預金通貨の利用される基礎を作る場合には、借方勘定に生ずる預金額に對して、貸方勘定に於て、手形證券の類と支拂準備金とを所有し、斯くて貸借の均衡を維持せざる可からざることゝ爲る。而して其支拂準備金として重きを爲すものは、今日文明國に行はれる通貨組織の下に於ては、銀行券に外ならないのであつて、斯くて銀行券が増發されて、其市中諸銀行の手に入ること多く爲れば、預金通貨は自ら膨脹するに至るし、銀行券が收縮して、其市中諸銀行の手に入ること、難きに至れば、預金通貨は自ら縮小せざるを得ない。而して銀行券の伸縮は前記の如く一國に於ける金貨の増減、更に之を狹義に云へば、發行銀行に正貨準備として擁される金貨の増減に依つて、律されるものである以上は、銀行業が所謂健全なる銀行業の原則の埒外に逸せざる限り、預金通貨の伸縮亦金貨の増減に伴ひ、斯くて預金通貨を代表する小切手の授受が如何に廣く社會に行はれても、爲めに金貨本位制の純眞を傷けるに至らないのである。

二

歐洲戰爭以來金貨本位制は世界を通じて、或は廢棄され、或は停止され、今や其影を留めざるに至つたと稱される。然も戰前金貨本位制の純眞を保つて居つた事實は何れの國に之を認めるを得るであらうか。金貨の自由鑄造は尙も一國が金貨本位制を標榜する以上は、如何なる國に於ても貨幣法に於て、之を認めて居つたのであつて、何等珍とす可きものを存しなかつた。然も金の出入殊に金貨の拂出並に其輸出に對して、全然其自由を認めた國が果して何れに在つたであらうか。一の英吉利を除けば、他の諸國は金の拂出又は輸出に對しては、其れ〴〵種々の制限を加へて、怠らなかつた。蓋し諸國は斯の如くして其蒐集した金貨の空しく他國に散逸することを防がうとしたのであつて、若しも一旦其散

逸することを許したならば、他日再び之を吸收するに就て、多大の困難に遭遇す可きを恐れて、此處置に出でたのである。隨つて自由金市場なるものは、一の英吉利のみに許された特權的制度であつた。即ち英國に於て、金貨拂出の任に當るものは英蘭銀行であつて、世人が金貨を必要とするや、銀行券を用意して、英蘭銀行に赴き、銀行券と引換に金貨を受取り、自己の欲する儘に、之を外國に輸出し、以つて外國に對する支拂を決濟するのである。英蘭銀行は斯る要求に接すれば、最も自由に之に應ずることに勉める。固より英蘭銀行が一個の發行銀行として、兌換制度擁護の責任を負うて居る以上は、或る限度を超へて、金貨が外國に流出し、爲めに正貨準備に縮小を來して、兌換制度の基礎を薄弱にしたり、又は正貨準備の減少に基く銀行券の收縮に依つて、金融市場に意外の波瀾の生じたりすることを恐れる場合には、正貨準備の取付に對して、或る防禦策を講ずる。然しながら其防禦策のものたる、要するに銀行利率の引上を主要の方便とし、高い金利さへ負擔する覺悟であれば、金貨を取付けて、外國に流出することを拒むものでなく、又實際に銀行利率の引上以外には、金貨の取付に對して、何等特殊の、又人爲的の制限を加へないことが英蘭銀行の誇りと爲つて居り、斯くて倫敦をして世界に於ける唯一無二の自由金市場である稱を有するに至らしめたのである。

故に倫敦に於て、金に關する取引の行はれるや、實に公明であると云へた。金貨金地金が世界の如何なる場所から、英國に向つて、輸入される一方に、如何なる場所に向つて、英國から輸出されるか、斯くて其出入の差額は英國に取つて逆であるか、順であるかは、日々英蘭銀行から世間に公表されて、世人をして將來の趨勢を豫測するに遺漏なからしめるし、英蘭銀行が金利步合の上下高低を決する場合に、此金貨金地金出入に關する現在並に近き將來の狀況、此出入に依つて英蘭銀行營業部に於ける預金と支拂準備金との比率の上に生ずる變動を參酌するものに外ならない。此事は姑く別問題とし、兎に角英國に於て多々斯く自由金市場たる地位を維持したのは、畢竟英國が國際貸借上の關係に於て、

外國に有利なる殘高を有し、自國に於て金貨金地金を必要とする場合には、何時と雖も、英蘭銀行が有效なる程度に於て、割引步合を引上げれば、以つて外國から金貨金地金を吸收するを得る地位に居つたからである。換言すれば容易に外國から吸收するを得る自由があり、又其效果を收めることに就て、確信があつたればこそ、英國は斯く自由金市場を維持して、泰然たるを得たのであり、英蘭銀行亦銀行利率の引上以外に、正貨準備を擁護し、吸收する何等特殊の政策を講じなかつたものと認めなければならない。而して斯く英國に自由金市場が成立し、英蘭銀行が金貨の搬出を自由にして、何等の人爲的制限を加へなかつたことは、磅の價値をして他諸國の貨幣に對して、最も確實のものたらしめる所以と爲つた。而して斯く磅貨の價値の確實を得た一事は自ら外國人をして倫敦に於て取引を決濟せしめ、又彼等をして磅貨又は磅貨を囘收するを得る權利の形態を以つて、資金を保有せしめる所以と爲り、此點から英國の國際經濟に於ける優勢に大なる力を與へるに至つたことは、論を俟たざる所である

三

右の如き事情の下に、英國は多年金貨金地金の出入を自由にして、以つて純眞なる金貨本位制を維持したのである。然るに千九百十四年歐洲開戰と爲るや、政府は四圍の狀況から、此年來の方針を一擲せざる可からざることゝ爲つた。即ち千九百十四年八月四日戰時禁制品を指定した勅令を以つて、政府は金銀貨幣並に金銀地金を條件付禁制品の項目に掲げて、其輸出を制限する方針に出でた。蓋し開戰と同時に、英國の經濟社會に對して、一の恐怖と爲つたのは、貿易上の逆勢の甚しからんとする一方に、貿易外の關係に於ける國際貸借亦自國に不利ならんとするの一事であつて、斯る場合に戰前に於けると同じく、金貨金地金の輸出を自由にしたならば、爲めに諸外國から殺到し來る取付を甚だしくし、

結局英國信用制度の基礎に如何なる動搖を惹起するや、測り知る可からざるの趨きを生じたのである。金貨金地金の輸出に對して、國家が干涉を試みるもの、亦已むを得ざるものなしとしない。然しながら此事たる、一面から云へば、英國としては、正に金貨本位制を廢棄し、貨幣制度に於て、年來の傳統的方針とした所のものを打破したことに當る。英蘭銀行は表面上、銀行券に對する正貨兌換を停止したものでなく、又制限したものでもない。然しながら輸出の許されざる金貨金地金を收受することは、之を收受した者に對して、對外支拂の方便として、何等の價値を與へるとするを得ない。啻に然るのみならず金貨金地金の輸出にして禁止されるからには、外國爲替相場は其變動の律される正常點を失う道理であつて、或る程度まで政府の策略に依つて、左右されること﹅爲るであらう。金貨金地金の輸出の禁止された後に於て、英國に逆と爲る對外支拂は政府の行う外債發行其の他の手段に依つて、調節される道理であつて、英國が或は合衆國其他の國に就て、外債を發行したり、有價證券動員を實行したりしたことも亦偶然ではない。斯くて金貨金地金の輸出の禁止される一方に、外債の發行されたことは、英國の金貨準備を擁護するに幾分の貢するものありとするを得るかも知れない。英蘭銀行の金貨準備が戰時數年間を通じて、毫も減少せず、却つて相當の增加を示して、今日に至つたのも、畢竟金貨輸出禁止の下に、外債募集の行はれたことを以つて、重なる原因であるとするを得るであらう。即ち倫敦市場に於ける對米爲替相場は常に英國に不利であり、合衆國に於ける英國の外債募集を了して、對外支拂の決濟される道の確實と爲るに隨つて、辛うじて爲替相場の恢復の緒に就くを得るの事實は頗る顯著なるものとして、一般世人の耳目に上つたのである。若しも英國が金の輸出を自由にして居つたならば、爲替相場の低落するに隨ひ、一部の金貨は外國に輸送され、斯くて相場の逆調を匡正するを得る道理であり、又金貨の現送は其れだけの內國に於ける通貨現在高に縮小を來し、貨幣價値の均衡を得ることに貢せしめるを得た筈であるのに、金の輸出の禁止された結果、斯る作用は遂に現

はれるに至らず、內國に於て通貨の膨脹を招き、磅貨の價値を低落せしめた。金の輸出入が自由であり、金貨の鑄造亦自由であれば、一國の通貨は自働的法則に支配されて增減し、斯くて價値の均衡を保つを得るのであるが、右の如く金の輸出の制限された以上は、一國の通貨は所謂管制される通貨（Managed Curren y）と爲るのであつて、總て自働的伸縮の長所を喪失し、需要なき場合に供給の增加し、供給增加して、之に對する需要の伴はざる事實を生じ、兩者孰れの場合に於ても、貨幣價値の低落することを免れない。英國に於て、斯る事實に遭遇するに至つたことは、英國自ら從來國際金融上の關係に於て占めた特權的地位を棄却したものに外ならない。

四

然しながら英國に於て、通貨膨張の勢を甚だしくし、又兌換制度の運用を破壞したものは、實に政府紙幣の發行に外ならない。政府紙幣のものたる、之に關する法律に於ては、單に「政府紙幣は大藏省の指定する人に對し、指定する方法の下に發行せらるゝ」と規定されて居るに止まるが、法律制定と同時に、大藏省の發表した說明書には「政府紙幣は英蘭銀行を通じて、諸銀行の要求するに隨ひ、銀行の當座預金の二割を限度として、發行せらるゝ」と云ふ一項があつて、金融市場を救濟する一の手段である事實が明にされた。即ち銀行が社會公衆に巨額の債務を負ひながら、之に對して所有する支拂準備金豐富ならず、然も戰爭の爲めに、一般資產は固定し、其處分回收に依つて、支拂準備金を塡補することの困難なる場合に臨んで、預金に對する取付が起つたならば、銀行は遂に支拂停止の窮境に陷ることなしとしない。斯る危機の到來を防ぐには、政府に於て英蘭銀行を通じて、是等要求拂の債務を負ふ機關に向つて急速に支拂方便を供給する必要ありと認められ市中諸銀行や、貯蓄銀行に對して、政府紙幣の貸出を見るに至つたのである。即ち政府

紙幣と云ふが如き特殊の通貨殊に小額面の通貨の供給されたことは、事變に應ずる處置として、始めて是認されるのである。――固より政府紙幣に代らるに、何故に小額面の英蘭銀行券の發行を以てしなかつたかと云ふことに就て、議論を生ずる餘地はあるとしても――既に然る以上は、戰爭進行し、戰爭の爲めに、經濟社會に幾多の波瀾を生ずることは、之を免かれないとしても、尙ほ大體に於て金融市場の安定を保つを得るに至つた時を以つて、政府紙幣の如きは、當然回收銷却されて、通貨制度に於ける變態を一掃するに至らなければならない道理であるのに、政府紙幣の發行は依然として今日に至るまで繼續するの狀態である。政府紙幣の所有者は英蘭銀行に就て、要求次第、金貨を以つて紙幣の兌換を爲すを得ることが規定されて居るのであるから、政府紙幣は不換紙幣ではない。然しながら兌換に依つて收め得た金貨に對して、輸出の禁止されること、從前の如くであつたならば、兌換の效果は遂に之を見るを得ざるのみならず、政府紙幣の流通しつゝあるだけ、英國に於ては通貨に不自由なる膨張を招いて居ることを知らなければならない。何故に斯の如く戰時非常の際に處する爲めに、計畫された政府紙幣の發行が戰後數年を經る今日まで、存續して以つて通貨制度に混亂を加へて居るかと云へば、此事たる、畢竟國家財政の處理に關聯するのである。即ち今日政府紙幣の發行高は二億九千萬磅から、三億磅を上下して居るが、一方政府紙幣發行勘定に於ける公債所有高は二億四五千萬磅を數へるのである。最近一兩年の間は、英國に於ける財政も著しく緊縮され、公債現在高も些少ながら次第に減少の方嚮に就きつゝあるが、戰時戰後の數年間に亘つて、發行された公債は容易ならざる金額であつて、結局戰前の千九百十四年八月一日と千九百二十四年八月九日とを比較し、公債現在高をして七億一千一百萬磅から、七十七億八千五百萬磅の多きに至らしめたのである。斯る巨額を市場に流動せしめるに就て、英國政府の試みた努力は輕少なりとしない、が、其全部が能く國民に消化され、公債の發行される一面に於て、其發行が必ずしも著しく金融を壓迫せず、又法外の高利を

付せずして、公債の發行を全うすることは、政府の最も強く希望する所であつて、其れには公債に對して、不斷の需要を作らなければならない。其用に充てられたものが即ち政府紙幣の發行であつて、英國政府は右手に政府紙幣を發行すれば、左手に公債を買入れ、買入れた公債は之を政府紙幣銷却勘定中に置き、以つて政府紙幣に對する準備の一とする。斯くて政府に於て、公債を發行する必要の大なるに隨ひ、政府紙幣銷却勘定に於て多額の公債を所有せざる可からざることゝ爲り、之を所有する結果として、政府紙幣の發行高を多からしめるに至るのである。

政府紙幣殊に小額面紙幣發行の當否は當初から一個の問題であつて、幾多の缺點が指摘されたが、就中重要視す可きものは、政府紙幣の弊として、伸縮の不自在なる一事であつた。而して之を實際の經過に徴すれば、政府紙幣は決して民間經濟社會に於ける通貨に對する需要の增減に依つて、消長せず、却つて財政上公債の發行を必要とする程度に依つて、伸縮することゝ爲り、當初世人に依つて豫想された如く、通貨伸縮上に於ける缺點を暴露するに至つたのである。

試に英國に於ける通貨の狀況を各種の時期に就て表示する。

	一九一四年六月三十日 磅	一九一九年六月三十日 磅	一九二四年八月十三日 磅
金貨并に金地金			
英蘭銀行	四〇、〇八三、〇〇〇	八八、五六八、〇〇〇	一二六、四八八、五八五
政府紙幣勘定	—	二八、五〇〇、〇〇〇	二七、〇〇〇、〇〇〇
銀行券并に紙幣			
英蘭銀行券	二九、七八四、〇〇〇	七九、九四八、〇〇〇	一二六、〇三四、二二〇
政府紙幣	—	三四二、九五二、〇〇〇	二九五、五七八、〇〇〇

政府紙幣の流通高が通貨として、如何に重きを爲して居るか、又通貨膨脹の原動力と爲つて居るかは、前表を一瞥し

て、明瞭に看取されるであらう。

五

英國の通貨流通狀態が斯の如く金貨本位制の破壞された儘、頗る混沌たる趣きを脫するを得ない間に、英國人に取つて、大なる刺戟を與へるに至つたのは、國際金融中心の爭奪問題である。蓋し倫敦が國際金融の中心點たる地位を占めて以來、年を經ること久しく、如何なる國も之を覬覦することを許されなかつたのである。畢竟英國が第一、國際貸借上、有利なる差額を有し、之を利用して、磅の價値を確實ならしめるに資したこと、第二斯の如く磅の價値の確實であり、加ふるに千八百十六年金貨本位制を實行し、千八百二十三年正貨支拂を復興して以來、貨幣本位に何等の變更の加へられなかつたことは相重なつて、國際間の取引を倫敦に於て決濟せしめ、磅貨の形態に於て、資金を所有せしめたこと、第三國內に於ける信用の膨脹極めて自由であり、且つ斯く膨脹した信用の基礎と爲る可き金貨の吸收の容易であること、第四隨つて英國は諸外國の需要に應じて、最も自由寛大なる條件の下に、諸外國の爲めに、資金調達の任に當ることの諸點は期せずして、英國をして國際金融の中心點たらしめるを得たのである。然るに歐洲戰爭が斯る英國の經濟的優勢に對して、相當の損傷を及ぼしたことは、爭ふ可からざる事實であつて、殊に對外債務增加して、一方に對外債權の減少したこと、磅貨の安定を失して、動もすれば低落の趣きを免かれざること、自國資本の外國に向つて供給される餘裕亦乏しきに至つたことは、英國をして國際金融の中心點たる地位を保持するに就て、疑惧の念を懷かしめた所以と爲つた一方に、合衆國の對外放資に於ける實力の加重は同國をして此地位を覬覦するに至らしめるの觀を生じた。從來と雖も、英吉利は國際間を通じて、最低の金利步合を維持して居つたものではない。時に佛蘭西銀行が英蘭銀行よりも

遙に低い割引歩合を以つて、取引先に臨んだ場合もあるのであるが、之を全體から云へば、英國こそ比較的低廉なる金利歩合の下に、比較的多量の資金の調達される市場を備へて居つたのである。然るに歐洲戰後に於ては、對外放資の市場として、紐育の勢力に侮る可からざるものを生じた。即ち歐洲戰時の數年間は勿論戰後の今日に至る幾年を通じて、貿易上に有利なる地位を占め、巨額の輸出超過を收めたことは、合衆國をして、第一舊來外國に負ふ債務の大部分を償還せしめ、第二新に外國に資本を放下して、債權を獲得せしめ、第三加ふるに巨額の金貨を國内に回收するに至らしめた。千九百二十四年四月發行のフエデラル、リザーヴ、ブルーチンには歐米の間に於て、將た又諸國の間に於て、千九百十三年と千九百二十二年とを比較して、如何に金の分配に異動を來したかを示す表が揭げられて居る。左に之を轉載する。

一、歐洲并に合衆國に於ける金の保有高（單位百萬弗）

	一九一三年	一九二二年	増減
歐洲			
中央準備金	三、一一九	三、〇三四	減　八五
流通中	一、八三四	—	減　一、八三四
計	四、九五三	三、〇三四	減　一、九一九
合衆國			
中央準備金	一、五二四	三、五〇四	増　一、九八〇
流通中	三八四	四二九	増　四八
計	一、九〇五	三、九三三	増　二、〇二八
合計	六、八五八	六、九六七	増　一〇九

二、重要諸國に於ける金の保有高（單位百萬弗）

比較増減

	一九一三年十二月末	一九二二年十二月末	一九二三年十二月末	一九一三年と一九二三年		一九二二年と一九二三年	
合衆國	三、九〇四	三、九三三	四、二四七	增	三、三四二	增	三一三
英吉利	八三〇	七五一	七五四	減	七五	增	二
加奈陀	一四二	二二二	一七一	增	二八	減	五〇
印度	一二四	一一八	一〇八	減	一五	減	九
濠洲	二一六	一一六	一二〇	減	九六	增	三
佛蘭西	一、二〇〇	七〇八	七〇九	減	四九〇	增	一
獨逸	九一五	二二七	一一一	減	八〇四	減	一一六
伊太利	二六五	二一七	二一五	減	四九	減	一
和蘭	六〇	二三三	二三三	增	一七二		—
西班牙	九二	四八七	四八七	增	三九五		—
瑞典	二七	七三	七二	增	四五	減	一
瑞西	三二	一〇三	一〇三	增	七〇		—
露西亞	一、〇一一	二	四五	減	九〇九	增	四三
亞留善丁	二九二	四五〇	四五一	增	一五八	增	一
伯剌爾	九〇	二七	二八	減	六一	增	一
日本	六四	六〇五	六〇〇	增	五三五	減	五
合計	七、二七一	八、二七八	八、四六一	增	一、一八九	增	一八二

即ち右の二表に據れば、歐洲諸國に於て金の保有に減少を來した高と略ぼ同等の程度を以つて、合衆國金保有高に增加を告げて居ることは明白の事實であり、而して重要諸國を通じて、之を見れば、合衆國に於ける金の增加は拔群の勢

があつて、他の如何なる國も之に及ばない、英吉利の如き、千九百二十二年と同二十三年とを比較すれば、經濟社會の多少順調に赴いた結果として、金の保有高に若干の增加を告げたが、戰前の保有高に比して、遜色あることを免かれざる一方に、合衆國は保有高を二倍大の多きに達せしめたのである。今日の金融組織が金を基礎とする以上は、資金融通の能力も、信用膨脹の程度も專ら金の保有高に於ける增減に依つて、律されざるを得ない。合衆國弗貨の價値が最も確實であつて他諸國の貨幣價値を律する規準と爲り、諸種の取引が紐育に於て決濟され、紐育、ボストン、フヰラデルフィア等東部中心市場に本據を置く聯邦準備金銀行の商業手形再割引步合が世界最低の割引步合であり。英蘭銀行の公定步合が常に其上位に居らざるを得ざるが如き、上記の事情を念頭に置いて、考へるときは、當然の勢としなければならない。

英米兩國の金融上に於ける狀勢右の如くであるから、假令ひ今日を以つて、國際金融上の覇權が倫敦を去つて、早くも紐育に移つたとするのは輕躁の斷定であるとしても、尙ほ近年歐米若しくは東洋諸國が外債を發行するや、必ずしも歐洲戰前に於けるが如く、倫敦のみを以つて、其應募先とせず、紐育を以つて重要なる對手とする、少なくとも倫敦紐育の兩市場に其應募を誘ふのみならず、時に紐育を以つて、唯一の對手とし、合衆國亦其强大なる資本供給力を此方面に利用することを怠らざるやうに認められる。從來紐育其他合衆國金融市場の重大なる缺點とする所は信用膨脹の自由の制限されて居つた一事であつて、從來資金に對する需要の劇增するや、金融上に容易ならざる波瀾を生じて、恐慌を惹起したことの如き、此缺點に基くものと認められた、然も聯邦準備金銀行の設立幷に其發展は此缺點を芟除した一方に、金貨の增殖する勢、上記の如く、之を基礎とする信用の膨脹亦甚だ急であつて、資金の一部分を外國に供給しなければ却つて內國に於ける投機熱を勃興せしめるに至りはしないかと云ふ憂惧すら生ずるに至つた。斯る際に新に倫敦會議

成立し、獨逸賠償金問題解決の一案として、ドーズ案なるものが關係諸國に依つて承認され、該案の下に、獨逸に賠償金支拂の財源を供へる爲めに、獨逸に産業復興の資金を與へる爲めに、將た又獨逸の國有鐵道を株式會社の所有に移すに就て、必要なる資金を調へる爲める、獨逸の發行する公債が多く合衆國の應募する所と爲つたならば、玆に國際金融上の關係に於て、從來英米兩國の占めた地位に大たる變動を生し、英國をして遂に合衆國の後塵を拜するに至らしめはしないかと云ふ悲觀說を生じ、其對策として金貨本位制の復興論が世間の一部に主張されるに至つたのである。

六

英國に於て、金貨本位制の復興を必要とする議論の唱へられるや、敢て今日を以つて始まつたものではない。現にカンリツフ委員會の如き、其中間報告の一節に於て、

有效なる金貨本位制の維持に必要なる諸條件は今日此國に於て、存在するを見るを得ない。是等の諸條件を即時に復舊することとは、當面の急務である。

と云ひ、更に他の一節に於て、

千八百四十四年の銀行條例の下に於て、英蘭銀行の保證準備發行に係る銀行券幷に蘇格蘭、愛蘭兩地方に於ける諸發行銀行の銀行券を除けば、流通中幷に英蘭銀行準備金たる通貨は全部を擧げて、金貨、補助貨幣幷に金を代表する銀行券に外ならない。金は何等の手數料を賦課されず、自由に造幣局に於て、鑄造され、ソヴエレイン金貨は表面價値を以つて、銀行券と引換に、英蘭銀行に於て交付され、而して金の輸出に對して、何等の妨害を存しない。

と云ひ、金貨本位制を有效ならしめる條件の金貨の自由鑄造、金の自由輸出入であるの意を明にしたのである。

右の如き正則論に基礎を置く金貨本位制の復興に對しては、今日別に世間に大なる異論を惹起すの餘地ありとしない。唯近時英國に於て、物議を招いたのは、金貨本位制復興の手段として、英蘭銀行をして割引歩合を五分に引上げしめようと云ふ意見に對してゞある。此意見は倫敦五大銀行の一つであるウエストミンスター銀行頭取ウオータ、リーフ氏の唱出した所であつて、氏は英蘭銀行自ら割引歩合を五分に引上げ可く、其引上を促進する爲めには、預金に三分五厘の利子を附せしむ可しとした。通貨の價値を高騰せしめるには通貨收縮(デフレーション)を必要とする、通貨を收縮するには、銀行券の發行され、信用の授與されるに當つて、其多寡を支配する金利歩合を引上げることを以つて、捷徑とすると云ふのがリーフ氏の取つて論理上の基礎とする所である。而して氏が金利歩合の引上げを主張するのは、決して金利の騰貴其ものを目的とするものではない、之に依つて通貨を收縮し、貨幣價値の騰貴する時を待つて、純眞の金貨本位制を復興しようとするのであつて、其方便を金利引上に求めたものに外ならない。然も此所説に對しては、種々の方面から幾多の反對論を生じ、今日に於ては、殆ど四面楚歌の觀を免かれないのである。左に其重なるものを揭げる。

第一、英蘭銀行の民間貸出の增加した結果として、通貨なり、信用なりに膨脹を來した場合には、金利の引上を以つて、デフレーションを期する唯一の方便とす可きであるが、今日の通貨膨脹たる、必ずしも英蘭銀行の民間貸出の寬大に行はれた結果として、生じたものでなく、一方に正貨準備の不自然なる增殖と政府紙幣の增發とに基くものであつて、隨つて金利引上に依つて、デフレーションを行うとするのは、當を得ない。前記カンリツフ委員會は夙にこの事實を認め、其の中間報告第十四節に於て「英蘭銀行券も、政府紙幣もともに要求次第英蘭銀行に依つて、金貨を以つて、支拂はる可きものであるから、これ等の發行は正常の狀況のもとに、銀行に對する取引を促し、銀行をして金貨の散逸を防がうとする以上は、割引歩合を引上げるに至らしむる」と論じた。政府紙幣の增發は割引歩合騰貴の原

因と爲るのであるが、割引歩合の引上に依つて、通貨の膨脹を制しようとするのは、因果關係の倒錯と云ふ可きである。

第二、故に英國にして金貨本位制に復舊しようとする以上は、先づ金の輸出に對する特許制度を廢して、之を自由にする一方に、財政上に收入剩餘を收め、之を以つて政府紙幣勘定に於て所有する公債の買入銷却を行ひ、以つて政府紙幣を回收することを急務とするのであつて、此以外の政策は寧ろ第二次に行はれ可きものである。

第三、英國に於て今日國民經濟の振興を謀るには、低廉なる金利歩合の下に、資金の豐富に供給されることを必要とする。現下社會の平和を脅しつゝある失業の如き、國民經濟の振興に依つて、之を甚だしきに赴かしめざるを得る道理であるに、今突如金利歩合の引上げられるに於ては、如何に其れが金貨本位制の復興を必要であるにしても、産業組合に及ぼす打擊に顧みて、制限しなければならない。

第四、今日の如き公債山積し、國家に於て其償還に全力を致さなければならない場合に、通貨縮小に依つて、貨幣の價値を騰貴せしめたらば、公債を所有する金權者階級は遙に低廉なる價値の貨幣を以つて、政府に貸付けた資金を騰貴した價値の貨幣を以つて、償還されることゝ爲り、其間に不當の利得を占めるに至る。公債償還の必要を眼前に控へて、貨幣價値の騰貴を謀る場合には、資本徵課金制度の實行と相俟つて、之を行はなければならないと云ふ議論を生ずる。

上記の内、第四の議論は勞働黨内部に於て、特に盛に行はれるのであつて、金權者階級に對する反感に基く所の多いことは、論を俟たない。千九百二十四年七月四日發行の「ニユー、リーダー」誌が此問題を論評して、

賃銀獲得者並に事業主は共にデフレーションに依つて、損失を蒙らざるを得ない一方に、利益を得る者は平穩なる利

子の收得者の叫びである。金融市場に於て要求される諸物價に於ける一割の低落は國債の實質の負擔に對して、一割を加重することに相當する。勞働黨政府が單に磅貨が再び四弗八十六仙を價するに至つたと云ふ榮擧の爲に、沈滯の深淵に吾人を陷らしめ、放資者階級に不勞利得を與へる爲めに、一般世人に貢納金を課するが如き處置に出でざることを信ずる。

と云つたのは、正に勞働者階級の輿論を代表した言論であると認められるであらう。殊に失業を抑制して、失業者を救濟することの焦眉の急を以つて、目される際に、金利歩合の引上に依つて、産業の沈衰を招くことの不可なるは、世人の認める所であつて、産業と金融との關係が特に世人を刺戟するに至つた所以である。

金貨本位制復興に對しては、其方便として、或は金利歩合を引上ぐ可しとし、或は通貨並に信用を制限す可しと云ふことに就て、反對の行はれる一方に、復興其ものを無益とし、從來の如き紙幣若しくは銀行券の流通を主たるものとし、兌換停止又は金輸出特許制度の下に、所謂牽制される通貨の制度を維持することを以つて、可なりとする論者がある。一時此議論は獨逸に於て主張されたが、近頃は英國の或る方面にも傳染し來つた如くであつて、或は此制度の下に、中央銀行の金貨準備を比較的多く爲替の調節に用ひ得るとか、或は金貨が一個所に集中して居る爲めに、財政に對する、外國の信用をして高からしめるを得るとか、或は金貨に對する取付の行はれない爲めに、金貨の流出を防止し、金利を引上げる必要に接せしめないとか、或は純然たる金貨本位制を復興するよりも、牽制される通貨制度を以つてした方が金貨を節約するを得るとか、種々の理由が附會されるやうであるが、私は是等の理由を是認するを得ない。吾人が一國の本位制度を決定するに當つて、第一に眼目としなければならない所は、如何にしたならば、貨幣をして完全に其職能を盡さしめ得るかと云ふ一點である。此點から云へば貨幣が實體價値を有すること、其自由鑄造の認められて居ること、

國際間を通じて、輸出入の自由であることとの諸條件を備へて居らなければならない。而して此貨幣を代表し、之と自由に兌換される紙幣又は銀行券であつて、始めて貨幣の代用物と爲るを得るであらうが、此場合に於ても、紙幣又は銀行券の伸縮をして、或る規律の下に、正貨の增減に伴はしめることを必要とするのであつて、此事が從來銀行券の發行法を律する根本觀念と爲つてゐることは、爭ふ可からざる所である。一部の論者は、紙幣が正貨と同一の價値を有したならば、何處までも貨幣の職能を爲すを得るものと考へるやうであるが、紙幣が貨幣と同一の價値を有するのは、單に信用上の事實であつて、而して此信用たる、要するに即時無條件の兌換制度の運用されることに依つて、支持されるのである。世間に屢に紙幣本位制と云ふ言葉が用ひられるが、其紙幣は何を根據として、其價値を維持し、斯くして諸般貨物の價格を律するかと云へば、政府なり、中央銀行當局者なりの專斷的意思以外に、殆ど何等の據る可きものあるを知らないであらう。一時は外國爲替相場の高低を標準として、不換紙幣又は銀行券を伸縮せしめる說もあつたが近頃は物價指數の高低を以つて、之に充てようとする說がある。二者の孰れを以つてした所で、內國に行はれる取引に對して、堅實なる支拂用具を供へたものと認められない。今、試に物價指數を標準として、貨幣價値を牽制する制度に就て考へる。

物價指數の高低を標準として貨幣價値を牽制するには、先づ或る原則の下に、物價指數の編成法を決定し、其實際の編成を專門家に託し、時を期して、其結果を發表することを以つて、前提とする。斯くて指數の增加したときには、貨幣價値は標準點以下に低落したものとし、紙幣發行を管掌する機關に對し、其發行を制限する命令を下す、如何にして紙幣の發行が制限されるかは、後段の問題とし、兎に角此種の命令が有效であるには、紙幣發行の機關は一國の銀行制度と餘程密接なる關係を持たなければならない。然も今日金融組織の發達した國に於ては、銀行預金こそ、支拂の方便として、紙幣や銀行券よりも、重要なる地位を占めるのであるから、如上の命令をして有效ならしめるには、銀行をし

て信用を收縮せしめることを必要とする道理であり、又指數の減少したときには、總て反對の作用を必要とする。

右の如き紙幣、銀行券、銀行信用等を收縮する命令が有効であるとしても、其効果を發揮することには、或る時期の經過を待たなければならない。物價が變動し、其れが指數と爲つて、世間に發表されるまでに、既に二三週間の日子を要するであらうし、其後を承けて、紙幣又は銀行券の發行高が異動するにも、或る週間を待たなければならないであらうし、銀行信用の收縮は紙幣又は銀行券の發行高に於ける減少が銀行の支拂準備金に減少を惹起した後に於て、始めて現はれる所である。物價の變動が既に現はれ、之に對して貨幣價値の調節され、統制されるに、或る時期を要するとすれば、之を要する期間を通じて、貨幣本位の不確實であり、其不確實である結果として、總ての取引や、契約に動搖を來す弊害のあることは、何としても避け能はざる所である。由來國家と貨幣との間に、如何なる關係を存するものやと云ふ問題に對して、一部論者の誤解を懷抱することは、吾人の指摘せざるを得ざる次第である。私の考へる所を以つてすれば、國家が貨幣の價値を決定し、又之を流通に付するに就て、爲し得る所は所謂宣言的方面に止まるのであつて、價値的方面に及ぶものではない。國家は通貨として紙幣を流通せしめる場合に、此一枚の紙片は若干の名義的價値を有するものであることを宣言するであらう。然も此紙幣と財貨との間に交換の行はれるに當つて、前者の若干額に對して、後者の若干量が與へられるであらうかは、一に取引に從ふ當事者の意思に依つて、定まることであつて、國家の權力を以つてするも、之を如何ともするを得ない。而して紙幣の若干額に依つて、或る定量の財貨を購買せしめるには、紙幣の即時無條件で金貨に兌換される道を開くことを以つて捷徑とするのである。

小作爭議の爲めの團體運動

平野義太郎

一

第一　農民運動禁遏の警察法規

各縣の政府當局者は農民運動を禁遏する警察法規を立法することに焦つてゐる。

世間は此の政府が農民運動を禁遏せんとする警察法規の存在すら氣づかないでゐる。其の存在を注意深く注目してゐる其眼の識者さへ、かやうな惡法が小作爭議を鎭壓するどころか、かへつていかに挑發してゐるかを氣づかない。それを幸にして、各縣の當局は、大膽にも日本臣民の基本的權利を一片の縣令で蹂躙しようとしてゐる。我が國法に惡法は多し。其の工業勞働者に對する罷業團結の禁止も其の一であるが、これは既に識者によつて充分に指彈しつくされたし、いかな頑迷な當局も、漸く覺めて（?）其の廢止を議してゐるさうだから、よもや來議會前になつて其のいひ觸らしてゐる聲明を裏切ることもしはすまい。ところが、近時各縣の當局が競つて設けはじめた警察法規は、工業勞働者に對する治安警察法第十七條第一項よりももつと一層峻嚴である。詳しくは後に論するのだが、一例をあげると、小作料の減額請求爭議について、小作人が多數集つて地主と交渉しても、罰せられるのである。當局はあたまつから、小作人の團

結するのを禁止する。爭議その者を不法なものとみる。テロリズムである。警察權の萬能である。刑罰の至上である。憲法によつてみとめられたわれわれの基本權の否認である。かやうな力は一時は農民を屈服せしめるに足るであらう。ちやうど岐阜縣の當局が、それで小作爭議を絶滅したと誇るやうに。けれどもかやうな一片の警察法規は、農民が『人らしく生きたい』といふ向上の願ひまでを根こそぎにすることができるものではない。かへつて此の力が農民の堪へ得べき最大限度を超えるときは、欝した其の願ひは勃發して、力に報ゐるに力を以てせんとはかる。おそるべき悲劇はやがて來るであらう。

私は此のおそるべき悲劇を心配する。それで、かやうな法規が法理上からいつても支持し得べき理由のないことを明かにして、識者に訴へ、且つ當局に對し反省を促すのが、此の論文の目的である。

二

なるほど、現在の經濟組織の下において、法律が保護するものは、人間の生命の流露である勞働ではなくて、人の財產である。人格權ではなくて、財產權である。人の生存ではなくて、資本である。資本の利用ではなくて、資本の所有である。資本の共同使用ではなくて、資本の私有である。勞働果實の分配ではなくて、資本果實の獨占である。平等ではなくて安全である。ベンタムのいふやうに、平等と安全とが衝突するときは、いつでも躊躇する必要はない。平等を棄てねばならぬ。そこで法律家は、此の法律の目的を私有財產權の靜的安全といふ。此の私有財產權の靜的安全こそ現在の法律の最高原則なのである。さうとすれば、地主階級が自分の土地所有權の安全を極力主張するのは、此の原則にはかなつてゐる。おなじやうに、人の財產の安全を保護する役目にゐる警察官憲乃至一般行政官廳が、地主の主張をきき入

れ、地主の所有權の保全を期することに萬々遺漏なきやうにする爲めに、あらゆる取締乃至壓迫をすることも、法の目的に忠實なやうにみえる。

それだから、もしも土地所有權の安全と其の果實の分配とに對して、すこしでも「對抗運動」をなすものがあると、官憲はすぐさもそれをヴイオランスだと早合點してしまふ。地主がその爲めに畏怖をいだくと、すぐと、其の行爲を脅迫だと律してしまふ。だから、かやうな農民の對抗運動を、早く徹底的に鎭壓せねばならない。それにはかゝる運動者を嚴罰に處するにこしたことはない。そんならば、取締法規はどうしても必要だ。といふのが、農民運動を禁遏しようとする法規のできて來る明快な論理だ。かうして大正十年十月岐阜縣をきつかけに、各縣いたるところに恐るべき警察法規がつくられつゝある。

けれども土地の價値の保存と土地の果實とは、實際に土地を使用し耕作をする小作人が産み出すものである。かうして、無産小作人階級が自分達の人格の發露である勞働力が、土地に對し營んでゐる貢獻を自覺して來るにおよんで、かれ等は土地の所有權に對して、土地の利用權にめざめる。前には小作人は土地の賃借人だから適當に其の土地を管理する義務があると考へられた。しかし毎年絶えず耕作することによつて、土地を荒廢にすることを防止し、よつて、土地の價値を保存するのだから、土地の管理そのことだけでも、地主延いては社會はそれを徳とせねばならぬ。生産出來高の分配についても、社會的正義の命ずるところに從へば、最もよく土地を利用し、果實をあげたものが、最もよく分配にあづかりたい、と冀ふに至らざるを得ない。さうなれば、かれ等は賴るべき資本がないのだから、其の利益を主張する爲めに、「富」の勢力に對しては、「人間」の勢力を以て對抗し、「所有權」の力に對しては「勞働力」を以て對抗し、「資本組織」に對しては「人の結合組織」を以て、これにあたらん、とするに至るのは、もとより自然の勢であるばかりで

なく條理のまさに當然とすべきことがらである。——ここに小作爭議の爲めにする小作人の團體運動が問題となる。

三

　すると、小作問題は現行の小作制度を改善することが何よりも首要なことだ。また小作人をして大衆打つて一團とした組合をつくらしめ、其の實勢力によつて地主に對抗させることが、爭議を撲滅することだ。だから、小作法、小作組合法の制定が何よりも急務だ、と論ずる人があるかもしれない。よろしい。勿論、小作法および小作人組合法の制定は目下の急務である。しかしそれらの制定は、すべて現在の小作爭議鎮壓法の「廢止」から出發せねばならない。

　一體現代の法制は、形式的には人に權利を是認しながら、しかも何等かの取締法規をこしらへて、此の權利の行使を實質的には禁ずる事例がざらにある。現代の法制は、決して小作人の組合團結を禁じてゐないし、爭議そのものを禁じてゐる筈もない。そのことは工業勞働者が團結をし、罷業をすること自體が形式的には、決して不法視され得ない。とおなじである。ところが、工業勞働者が同盟罷業の場合に、其の結合にいたる勸誘、說得、煽動を禁されてゐるから、實質的には到底罷業の爲めに相結合することが出來ない。甚しきは、政府内には將來一方において、勞働組合法を制定せんとしておきながら、他方において、治安警察法第十七條第一項二號はそのまま存置したい、といふ意見もある位である。しからば、おなじやうに小作法、小作人組合法の制定にあつても、依然として、小作爭議の爲めの結合を不法視する法規を、存置するおそれが決してないとはいふことができない。

　また或は論者は、よしやそんな法規が存してゐても、裁判所は後述する熊本縣郡築村の小作爭議の場合のやうに、結局は小作爭議の爲めにする團體運動を適法視するだらう、から、かやうな心配は無用だ、と說くかもしれない。しかし

ながら、問題は法廷に於て、いかに結合が不法視せられるか、ではない。むしろ警察官が實際の小作運動、小作爭議を、屋外屋内の集會、地主との交渉、同志の糾合を、治安の名でいかに取締るかが問題なのだ。或る檢事は、かやうな爭議のときに、警察官があげて來た者を起訴さへしなければいゝぢやないか？と安々といつてゐる。おなじやうに、問題は檢事が起訴するか、しないか？ではない。問題は小作運動者が檢事局へ引ばつて來られることによつて、運動そのものを潰滅させることが、正義に反しないか？どうかにある、取締法規は「拔かずの太刀」だ、といひ、官憲の頭腦を信頼せよ、といふ。「拔かずの太刀」が拔かれなかつたためしはない。信頼せねばならぬ警察官の頭腦が信頼できたためしはない。かやうに考へて來ると、もし農民運動を禁遏する法規が、法理上全く誤つたものであるならば、速かにそれは廢止されねばならぬ。さうして、此の廢止をせねばならぬ思想を出發點とし、其の根本の法理にしたがつて、すべての農民立法が進展されねばならぬのである。さうであるなら、われわれは其の根本の法理とはどういふものであらうか？をつぶさに檢討せねばならぬ時機に到達した、と考へる。

第二　小作爭議の爲めにする團體運動の合法性

一

むかし德川の御仕置百箇條には『地頭に對し、强訴其上徒黨逃散之百姓御仕置之事』（第二十八）といふのがあり、一諸所の五人組帳にもおなじ規定がある。百姓一揆をひどく恐れた明治の新政府が、慶應四年即ち明治元年に定めた定三札覺二札中、其の定第二札にも、『何事に由らず、宜しからざることに大勢申合せ候を徒黨と唱へ、徒黨して强て願ひ事企

つるを强訴といひ…堅く御法度なり。若右類の儀之れあらば早早其の筋の役所へ申出づべし。御褒美下さるべく事。慶應四年三月。太政官』とある。此の『定』は徳川の法制から由來したものである。がいづれにしても、徒黨による行爲が禁ぜられ又は刑の加重要件とせられたほかに、徒黨を組むこと自身が犯罪とされたものである。

しかるに、わが現行國法の下に於ては、憲法が團結權を保障するから、多數連行、徒黨を組むこと自體が犯罪とせられない、ことはいふまでもない。工業勞働者の罷業の爲めにする團結も、船員の「黨與」も、それ自體としては犯罪ではない（治安警察法第十七條第一項船員法第七十二條）。其のやうに、小作運動を取締るわが治安警察法第十七條第二項も、小作人の團結それ自體を禁止するものではない。しかしながら、法は團結そのものを適法視しながら爭議に關し多數相連行することをなぜ不法視するのであらうか？これを明かにする爲めには爭議の爲めにといふ目的をもつて相結合することが批判されねばならぬ。

二

今わが小作爭議のおもな原因となつてゐる小作料減額の請求について觀察してみる。

農業は自然を相手とする。殊にわが邦においては、暴風雨の起ることが屢である。暴風雨の襲來があると、きつと堤防が決潰する。洪水となる。泥水が苦心して育てて來た稻田をひたしてしまふ。さうかとおもふと、本夏のやうに井戶の水さへ涸れる大旱りがつづく。かり入れどきに雹が降つて稻穗をたたき落す。海岸地方では海嘯が來る。さういつた天災は毎年しきりなしに到來する。小作人等はおもはぬ減收をみて悲しまないわけにはいかない。ところで、かれ等は地主の下に趨つて、一定の「步引」を哀願愁訴する。其のはじめ甲地主の下にあるA小作人が此の哀願を訴へにゆく。する

と甲地主はおまへだけに歩引きをしてやるわけにはいかない、と答へる。さうなれば該小作人Aは、同一の地主の下にある小作人Bと一所に再び歩引を願ひにゆく。かくして小作人ABC……全部が、天災によつて著しく收獲が減じた同一の事情を理由として、其の割合に應じた歩引を交渉する。此のとき甲地主はきつといふ。歩引は自分だけでは取り計へない。もし自分が勝手に歩引をすれば、近所の他の地主乙、丙も亦同様な交渉を受けて困るであらうから。かういはれれば、甲地主の下にある小作人等は、他の乙、丙地主の下にある、同一の事情の生じた小作人A,B,Cなどと一所に、甲乙丙地主に對し、同様の減額請求をせずにはゐられぬであらう。かうした場合になつて來れば、甲乙丙地主等は、相協力一致した歩引に反對するのであるから、小作人等が亦すべて同一の地位に立つ以上、亦相協力一致して、初志を貫徹することにつとめるであらう。

右は減額請求を目的とする多數小作人が協同的結束行動にいたるプロセスを簡單化して示したものである。其の他、込米の全廢、小作制度の改善、すべて小作人等が目的とする交渉は、其の概念の本質において、多數小作人の統一的協同的結束行動をふくむ。しかも右の例からわかるやうに、地主に對する要求希望は、小作人のおのおのが自分自身の自由な意思に發現するものである。ただ此の要求希望は、また同時に、同一な事情の下にゐる、かれ等全體が共通に要求希望するところであるから、其の要求、希望をあらはすには、おのづから團體的形式をとらねばならぬこととなる。此の場合に、交渉が相容れられないときには、そこに、必然に紛議が起らざるを得ぬ。さうしたら、此の團體的形式が一人の例外もなく完全にゆくやうにする爲めには、すべての者がみなの共通目的にむかつて督勵邁進せねばならぬこととなる。さうすれば、おもだつた者が、其の同志を勸誘し說得しさうして督勵することとなるのは理の當然である。――以上は農民の小作爭議がおのづから團體的形式をとることを明かにした。しからば次には其の爭議の目的と手段とが論ぜられ

ねばならぬ。

三

先づ注意すべきは、小作運動は古來社會其の者の根本組織を脅威する目的でなされたことは曾てないことである。德川時代を通じて數多く起つた百姓一揆のうち僅少な例外をのぞいては、どれひとつとして武家階級の横暴な誅求がある極限を越えた時に、「愚かな百姓」が其の極に達した困苦、可憐な逆境から、わづかに其の生存を完うせんが爲めでなかつたものはない。本多正信が『百姓を治めるの法は一年入用の食料だけを殘して、其の餘は年貢に取り、彼等の手許には財の餘らぬ樣に且つ不足なき樣治むべし』といひ、本多利明が『胡麻の油と百姓は絞れば絞るほど出るものなり』といはれた百姓も、つひに絞つても絞られ得ぬ限度に達する。さうすればかれ等も亦反抗せざるを得ない。しかも其の反抗は『一年の入用の食料』だけを求めるにあつたに過ぎない。さうであるから、かれ等の農民運動は本來からいふと決して、政治的の目的を有しない。從つて殊更徒黨を組んで秩序をみだし、治安を妨げ、政談論議の爲めに結社、集會、多衆運動をするものではない。其のことは爭議を目的とする團體運動が、小字から、大字へ、大字から村へ、村から郡へとひろがつた場合でも決して異るところはない。

第二に、小作人が多衆聚合して、地主に交渉すると、地主及び官憲はすぐかれ等は暴行、脅迫、公然誹毀の意圖があるやうに感ずる、がしかし小作爭議の爲めに、小作人が團結するのは、暴行の爲めでも、脅迫の爲めでも、はたまた公然誹毀をする爲めでもない、大審院の判例では、脅迫罪に於ける害惡を加へるといふ通知は單に威勢を示す、といふ實行行爲があるので足り、通知も單に通知があるのみで足り、よつて被通知者が現實に畏怖を生じた事實の有無を問はぬ。

だから、小作爭議の爲めの團體運動が、地主の畏怖心を生ぜしめる爲めに、其の目的で、實行行爲をなし、或は害惡の通知をなしたのなら、地主が實際上害惡の通知を受けなくても、又畏怖を生じなくても脅迫罪は成立すると考へ得られるであらう。しかし小作人等は、地主に對して、畏怖心を生ぜしめる意思乃至認識を有しないから、爭議の爲めにする團體運動それ自身を脅迫だ、とは到底なすことが出來ない。

右述べたやうに、動機乃至目的が合法であつても、目的と手段とは必ず有機的な關係にある。だから、既に述べたやうに、目的が合法であつても、手段が不法ならば、該行爲は不法であつて、目的が手段を神聖にすることは決してあり得ない。このことは目的を離れて、手段の正、不正を論じあたはぬ、と同樣である。してみれば、爭議の爲めにする團體運動の合法性が檢せられる爲めには、用ゐられる「手段」が、果して不法であるか否か？を論じねばならぬであらう。しかし手段としても、小作人の用ゐる團體運動、殊に土地返還の申し合せは、そのこと自身が暴行でも、脅迫でも、公然誹毀でもない。なるほど爭議の場合に於ける多衆の結束は、地主にとつて、其の承諾を强ゐる爲めの威力ではあらう。が、小作人が團體的に結合を爲すことが既に威力なのであつて、共同的に交渉を開始するから威力となるのではない。だから團體的交渉が强談威迫（警察犯處罰令一條四號）となるものではないし、爭議の際に於ける交渉自身が地主の身邊に立寨り又は追隨するものでもないから、團體的行動に依る爭議が必然的に是等の罪に該當すべきこともあり得べきではない。

第三　現行の取締法規の不合理

一

以上縷々と述べて來たやうに、小作爭議の爲めにする國體運動其の者は一點不法ではなくつて、合法である。それならば、合法となさるべき國體運動を禁遏せんとするすべての取締法規は、此の法理とは根本に於いて、到底相容れることができない。今各縣に存在する小作爭議を抑壓せんとする警察法規を分類して、細く其の誤つてゐる所以を明かにするであらう。是等の取締法規は、わが國に於て最も早く小作組合がつくられ（明治八年）且つ最も早く爭議の頻發（大正十年）した岐阜縣に最初に制定されたのは不思議はない（大正十年十月）。其の後、此の岐阜縣令を模範として、香川縣（大正十一年七月）、埼玉縣（大正十一年十二月）、熊本縣（大正十二年五月）、三重縣（大正十二年六月）、福岡縣（大正十二年十二月）、佐賀縣（大正十三年二月）など續々と大同小異の警察犯處罰令を制定し、其の他の縣も同じやうな規定をもうけんとしてゐる。此の不當な小作運動抑壓法規はかうである。

二

（其の一）は、『故なく紛議に關與し若くは煽動したる者』を罰する法規である（岐阜第一條第一八號・香川第一條第四號・埼玉第一條第二號・熊本第一條第六號・福岡第一條第一〇號・佐賀第一條第二八號）。

さきに論じたやうに、小作紛議は常に國體的形式をとる。といふのは、紛議が其の行爲の本質において、多數小作人の統一的協同的結束行動を豫定するからである。それゆゑに、小作紛議それ自體が、小作人をしてお互ひに勸誘しあひ、說得しあひ、奬勵しあつて、爭議の目的を達せんとすることは、爭議の當然の性質である。だから、或は理性に訴

べ或は感情に訴へて、一人でも多くの同志を得んとすることは、當然のことである。從つてまた小作組合運動者が小作人に對し、其の團結を奬勵したり、目的貫徹の爲めに、其の結束を堅くするやう、說くことは、正當とさるべきことなのである。それなのに、かかる行爲を或は紛議について「故なく煽動した」ものだ、とし、或は「紛議に故なく關與した」ものだ、としてそれを罰することは何等の理由もない。從つてかやうな規定は全く不法であつて、法としての合法性をもつてゐない。私は此の說明を私の獨斷ではなく、わが最高の裁判所たる大審院の判示によつて、直接に示すであらう。

事は、日本農民組合支部長が、大正十二年五月十一日以降同月十六日迄の間に、『或ハ爭議ニ關スル會合ヲ催シ、或ハ同村（熊本縣八代郡郡築村）農民組合事務所ニ於テ、右小作人ニ對シ日本農民組合長（杉山元次郎）ヨリ被告ニ宛テタル小作人ノ團結ヲ奬勵スル來翰ヲ朗讀シ、且ツ目的貫徹ノ爲メ、其ノ結束ヲ堅クスベキ旨ヲ說』いたにはじまる。ところで小作紛議が『危惧ニ堪ヘザル情勢ヲ誘致シ』た。それで熊本地方裁判所は、此の事實が、熊本縣令警察罰則第一條第六號『故ナク他人ノ紛議ニ關與シタルモノ』に該當するとなし、有罪の言渡をした。しかるにこれに對し、大審院は次のやうに、原判決を破棄して、無罪の宣告をしたのである。甚だ重要なことであるから、煩を厭はないで本文のままを載せよう

『自己ノ勸誘及ビ紹介ニヨリ、他人ヲシテ組合ニ加入スルニ至ラシメタル者ハ、其ノ加入ノ目的ヲ達セシムル爲メ援助ヲ爲スベキコトハ德義上當然ノ事ニ屬スルガ故ニ、被告人ガ小作人ヲ勸誘シ、且ツ紹介シテ組合ニ加入セシメタル以上ハ、其ノ加入ノ目的ヲ達セシムル爲メ、小作人ヲ奬勵シタル判示行爲ハ之ヲ以テ正當ノ事由ニ因ラズシテ他人ノ紛議ニ關與シタル モノト爲ス ベキニ非ズ』（大正十二年十二月十八日大審院第一刑事部判決法律新聞第二二一七號六頁）

此の判決は、小作組合運動者が小作人を組合に加入せしめた後に、これを督勵して小作紛議の目的を達せしめるやう「援助」することを、『德義上當然の事』だ、とし、從つてたとひ其の爲めに、紛議を『危惧ニ堪ヘザル情勢ニ誘致シ』とも、『故ナク紛議ニ關與シタモノ』、となすことができない、と說くのである。から大審院さへが判決した今日においては、該規定は既に其の根柢を失なつた。なぜなら、小作爭議はそのものとして、既に團體的形式をもつことを豫定してゐるのであるから、爭議の前に組合に加入せしめた者が督勵援助したかどうか?は問題ではなく、其の團體的形式をとるべき爭議の目的を達する爲め、團體的結束を堅くするやう、督勵援助すること自體が、決して『故なく』不法なことをしたのではない、と解すべきものであるのだから。むしろ組合に加入せしめた場合は、其の者が紛議について小作人を督勵することが德義上當然とさへされるである。さう解さるべきことになつて來るならば、上述各縣の此の規定は全く其の根柢を失つたものと考へられるのである。

三

(其の二)は、『紛議に關し、多數連行して交涉し、又はこれを煽動したる者』を罰する法規である(岐阜第一條第一九號・埼玉第一條第一三號・熊本第一條第七號・三重第一條第一二號・福岡第一條第一一號・佐賀第一條第一九號)。

(其の三)は、『强ひて組合其の他の團體に加入を勸誘し又は故なく脫退を拒むこと』を罰する法規である(岐阜第一條第一四號・香川第一條第三號・熊本第一條第五號・福岡第一條第九號・佐賀第一條第一五號)。

是等の規定は、決してある縣の警察罰則といふ單個な問題ではない。先づ小作人の團體的交涉を考へてみる。小作紛議がすでに團體的形式を豫定するものである以上、紛議に際して、「多數連行」して交涉することとなるのは、全く當り

前のことがらである。紛議がそのものとして不法だ、といふのなら、問題はないのだ、が恐らく何人もさうは考へぬのだらう。といふことになれば、紛議とは離して考へることができない團體的交渉をば、ただ團體的に交渉をしたといふだけで以て、罰するに至つては何といふ暴政であらうか。

おなじやうに、小作人の地主に對する要求希望は、小作人のおのおのが自分自身の自由な意思に發現する。ただ此の要求希望がかれ等にとつて共通だから、おのづからそれをあらはすのに團體的形式を以つてし、それを統制するのに組合其の他の團體を以つてするばかりだ。さうなれば、主だつた者が、其の同志を勸誘し、說得して一人でも多くの同志を加入せしめるやう、努めるのは理のまさにしかるべきところである。しからば小作運動者が小作人等に、組合其の他の團體に加入を勸誘することが、刑法上の脅迫又は强談威迫にわたらないかぎりは、其の行爲はもとより正當とされ得ねばならぬのである。おなじやうに、小作人の團體運動がともすれば破れ勝ちであるとき、極く少數な個人が、其の利己的な、弱い心から全體の目的を潰滅におはらせぬやう、平和的に監視することも、脫退を拒むことも、亦正當である、といはねばならない。

(其の四)は、『故なく冠婚葬祭儀式祝祭其の他地方の慣例に依る交際を絕ち又は絕たしめたる者』を罰する法規である(岐阜第一條第二〇號・香川第一條第一一號)。(其の五)は、『故なく他人に對し土地の引上返還を强要した者』を罰する法規である(岐阜第一條第一五號)。(其の六)は、『紛議に關し若くは濫りに鐘鼓を鳴らしたる者』を罰する法規である(岐阜第一條第一六號・埼玉第一條第一二號・佐賀第一條第三一號)。(其の七)は、『紛議に關し兒童又は婦女を煽動又は利用したる者』を罰する法規である(福岡第一條第一一號・佐賀第一條第三〇號)。——是等はすべて『故なく』といひ『紛議に關し』といふ、全く不明瞭な語辭を用ゐて警察官の自由裁量の範圍を廣くし、それによつて小作爭議の

爲めにする國體運動を、徹底的に禁遏し抑壓せんとしてゐることはまことに明瞭である。」

四

最後に、上に論じて來たやうに、小作爭議の爲めにする國體運動が其のものとしては一點も不法ではなく、かへつて合法なものであるならば、たとひこれと暴行、脅迫、公然誹毀とが相伴ふ場合であつても、これを特に治安警察法といふ特別治安法で罰する必要はない、といはねばならぬ。すなはちかかる場合においては、刑法各本條で處斷すれば足りるので敢て特別法規を必要としない。此の理由から、同盟罷業に對すると同じやうに、小作爭議に對しても亦此の特別法規の廢止を主張したい。工業勞働者の同盟罷業については、今や治安警察法第十七條第一項は廢止せられるべきことが疑のない議論となつてゐる。それにもかかはらず、小作人の小作爭議について其の特別法規——治警第十七條第二項はいふ。『耕作ノ目的ニ出ヅル土地賃貸借ノ條件ニ關シ、承諾ヲ强ユルガ爲、相手方ニ對シ、暴行脅迫シ、若ハ公然誹毀スルコトヲ得ズ。』同法第三十條はいふ、『第十七條ニ違背シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ、三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス』——を廢止すべし、といふ議論をきかないのは、同じ社會的境遇の下にある者に對して、頗る片手落ちではあるまいか？それだから治警第十七條第一項を廢止するときは亦よろしく第二項をも廢止しなければならぬ。なぜなら、これを一例に徵すると、單純な『侮辱』が、刑法では單に拘留か科料かですむ（刑第二三一條）のに、治安警察法の『公然誹毀』はこれをもふくむ故、該法では六月以下の重禁錮にも處せられるのであるから。しからばかやうな不合理な法律は速かに撤廢せられねばならない。

ただ一般に、治安警察法第十七條廢止論が氣づかないところであるから、注意までに附け加へておくべき一事があ

る。それは刑法各本條の暴行、脅迫、誹毀の刑は一年以下であるから、治警の六月以下を廢止すると、かへつてより重い刑を課される結果となることである。しかし是等の行爲は未來の法律秩序の高い理想を明かにする爲めに、なされた進化的の意義をもつてゐる。だから通常の自然的犯行とは同一視して論ずることができない。しからば、治警第十七條の廢止論は、其の工業勞働者に對するとおなじやうに、小作人に對しても刑法各本條の規定を除外することを條件とせねばならぬのである。

五

終りに臨み一言する。刑罰は農民の困苦を救ふ道ではない。今や農民は其の極に達した疾苦を訴へてゐる。爲政者はよろしく心をむなしうして此の訴をきくべきである。それだのに、かれ等はこれを抑壓するのに力を以つてせんとする。力はついに虐政に化すであらう。虐政は虎よりも猛しい。だから一時は農民を壓伏せしめることもできるであらう。けれどもいかなる壓制も農民の生命を殺してしまふことはできない。壓伏された生命はいつかは其のとりもどしの爲めに反動するであらう。そのときこそ悲劇の幕がきつておろされる。私はその悲劇をおそれるのである。



現代日本の一人が選ぶ支那觀と
それの或關係意識

杉森孝次郎

一　はしがき

この一文の標題に於ける現代日本の一人といふ六字は斯く言ふ私自身を要するに意味する。なぜその表現を選擇したかといふ問ひに對する答へは、それを私がここに明記する必要がないと考へる。

二　現代支那の反省的必要の第一件としての全支的國民主義の形成

充分な聰明を條件とした必要をここでは反省的必要と呼んだ。その意味に於いて、現代の支那に反省的必要があるかといふ問ひは、勿論、あるといふ答へになに人をもすぐに導く。しからば、その反省的必要の最も代表的なものはなにか。私は、それは全支的國民主義の形成だと考へる。

三　現代文化に於ける國民主義の位置と現代に於ける全支的國民主義形成の可能及び價値

現代文化に於ける國民主義の位置は、初心の乘り手を乘せた自轉車に於けるブレークの位置に比されると同時に、老練者に乘られた自轉車に於けるペダルの位置に比される。歐洲戰爭に於ける中心的交戰諸國民は前の場合を例證し、支那がもしも全支的國民主義を近い將來に形成すると假定するならば、その支那は後の場合を例證する。

十九世紀の歐洲を救助した最大精神力の一は疑ひもなく國民主義であつた。獨のフィヒテと佛のマチーニとが、國民主義形成の社會的、時代的新必要に對して、それぞれに示した多少の功績は、この通則的、大勢的事實の世界に於ける部分的、有限的二特殊現象に過ぎない。それは砂漠に於ける二つの緑土ではなく、天下の秋を早く感覺し、そして表現した同時内的異時、同所内的異所の二紅葉に外ならなかつた。十九世紀歐洲の旺盛なる成長が、國民主義的衝動によつていかに大きく助けられたかは、あるひは、實に大きく助けられたことは一見して先づ光景的に顯著であり、精査する

に及んでいよ〳〵確實的に顯著だ。

二十世紀の歐洲諸族を亡ぼすかも知れない最大勢力の一はかれら自身の國民主義だと明確に考斷される。大戰、ヱルサーイ條約、ジェノア會議は、逐次に、かれらの全體的自殺、殺獨が意味する部分的自殺、殺佛が意味するそれといふ各種形に於いて、多少現實的に、及び多少傾向的にこの考斷を裏書する數知れぬ材料中の或ものだ。

老いたる准封建制的地方主義をして獨り死せしめ、制度の支配者たる人自身は、國民主義と共に、國民主義に於いて、國民主義に原因づけられ及び機會づけられて、再生したかたちが、十九世紀歐洲の一大特質であつた。老いたる第二封建制的地方主義の性質をいちじるしく帶んで來た國民主義と共に、それに於いて、それに原因づけられ及び機會づけられて、本來は制度の支配者であるべき人自身が殆どそれの被支配者となり果てて、土偶發明以前の追腹を土偶發明以後の時代に爭つて切らんとし、また切りつつあるかたちが現代歐洲の一大特質だ。

日本は、半世紀有餘前に、准でない純封建制的地方主義からではあつたが、すなはち一層原始的な制度からではあつたが、勇ましく國民主義と共に再生した點に於いて、及び、昨今、老いたる國民主義の魔の手に引きずられて、殆どそれに殉死しつつある點に於いて、歐洲諸族と共通だ。

國民主義は人類の一發明だ。人類が、彼れの全生存に於ける或部分として、國民主義になつたのであつて、國民主義が人類の全き生存を價値づけたり、可能づけたりする關係にはそも〳〵なつてゐない。十九世紀に於いて興榮の一原則であつた國民主義が、二十世紀に於いては衰亡の一原則として殘生を貪るといふ事實があつても、それゆゑに、根本的形式上、それはすこしも不思議ではない。

國民主義は、現代に於いて、通則的程度に於いて、すなはち通則的事實及び可能としては、人類が幸福に生存するた

めの一必要件だと確認される。猶太族の場合に於いてさへ、かれらの代表的大多數は、確設された國民主義のどれかに責任關係を結んでゐる。斯くして、かれらの或ものは北米合衆國民の一部であり、他の或ものは英國民の一部だ。——勿論、英國はいふまでもなく、北米合衆國でさへもが、猶太人を數に於いて多く持つ第一位國ではない。

人類が幸福に生存するとはなにを意味する言葉であつたか。それは、簡單に、しかも統一的に說定するならば、人類が、かれの價値意識を保護されるしかたに於いて生存することだといふことが出來る。その價値意識を、個人價意識と社會價意識とに有理に分類することが出來る。個人價意識といふ語は各人の對當人價を意味した言葉であり、社會價意識といふ語は各人の對他人價を意味した言葉だ。勿論、充全的意義に於いての個人價意識のうちには、社會價意識は完全に包容される。

個人價意識の、あるひはそれに於ける、基礎的事實は各人の生存欲だ。生存欲といへば、普通には生物學的意義に於いての自己保存欲が先づ意味される。しかしながら、人としての生物は、單なる生理的存在欲のほかに、それから分化した種々のかたちに於いての生存欲を事實及び傾向として持つてゐる。藝術的生存欲、學問的生存欲、道德的生存欲、これらはその派生的すなはちいはゆる分化的生存欲のうちの或代表的種類だ。

かれ自身の基礎的及び派生的生存欲を保護されないことが各人に取つて不幸福を意味することは自明的事實及び論理だとさへいふことが出來る。

現代に於いて、國民主義を自身形成してゐない部分の人類を見渡せば、そこに一とつの通則的——すなはちたとひ絕對無例外的ではないとしても——事實が發見される。それは、かれらは、國民主義を自身形成してゐる部分の人類との比較に於いて、多少いちじるしく不完全にかれら自身の個人價意識を保護されてゐるといふ事實だ。

前にもちよつと暗示した通り、特殊の考察を必要とする猶太族の場合でさへもが、この通則的事實に對して全然的例外をば決して構成しないが、猶太族以外の國民主義無しの人類部分を通觀する限り、右の通則的事實は極めて顯明に看取される。

現代に於いては、自身の國民主義を形成してゐない部分の人類は、通則的に、自身の國民主義を形成してゐる部分の人類によつて、多少いちじるしく物格扱ひされてゐる。前者の全部は、あるひは一見明白的に、あるひは一見明白的でなくても實質的に、後者の專制的支配の世界に生存してゐると概斷される。

多くもしくはすべての成功した帝國主義國すなはち強大國に於ける被征服民族系としての屬領系を見よ。橫の方に強大なる第三者としての國民が批判及び制裁の眼を光らし、筆舌を鋭にして控へてゐなかつたなら、その被征服民族系としての屬領系の人々の首そのものが極めて無造作に、容易に片づけられる可能がいかにしば〳〵であり、いかに常に確實であるかを考へて見ることは、現代に於いて自身の國民主義を形成してゐない部分の人類の生存がいかに不幸福なものであるかを、それの一例について見ることだ。

各人の生命あるひは生存が各人自身に取つて無上最高の價値を有することに多くの疑ひをいだく餘地はない。自身の國民主義を形成してゐる人々に取つて、かれらの生存が極めて必要なものであると同樣に、自身の國民主義を形成してゐない人々に取つて、その人々の生存は極めて必要なものとして、かれらによつて常に意識されてゐる。自分のいのちの貴さは、自身の國民主義を形成してゐる人々と、ゐない人々とを一通して同じだ。事件の眞相、犯罪の有無を碌にしらべもせずに、機關砲で大ぜ勢が一度にやつつけられたり、隨所で群衆の私刑に處せられたり、狩獵の目的物同樣の扱ひを受ける可能が常に機會をうかがつてゐるやうな事情下においては、いはゆる命あつての物種であるがゆゑに、學

問的、藝術的、道德的生存の成長や興榮はおろか、芽ばえすら至難または絕望であるに確定してゐる。成功した帝國主義國に於ける被征服民的屬領系の人々の場合は、現代に於いて自身の國民主義を形成してゐないすべての人々の場合の一適例にほかならない。かれらには、個人價意識の保護の缺けた生存以外の生存は許されてゐないといふ判斷はつひに有理に成り立つ。

現代に於いては、自身の國民主義を形成してゐない部分の人類の生存は、それに固有の社會價意識をも保護されないかたちのものとしてのみ、通則的には、可能だ。

いはゆる成功した帝國主義國における被征服民的屬領系を、この問題のためにも、一とつの代表的な場合として選擇して考察するに、そこにては、征服民的支配系に對する被征服民的屬領系の價値としての社會價は、前者によつて可能的極小限に見積もられる傾向があまりに強烈であり、後者に對する前者の價値としての社會價は、前者自身によつて可能的極大限に見積もられる傾向がまたあまりに強烈だ。後進民族自身の幸福のために、後進民族を開發し、敎化し、統治してやるのだといふ自覺が、征服民的支配系に於いてあまりに批判と反省を缺いたかたちに於いて成り立つ。

一とつの社會を構成してゐる各個人、各國人に取つては、かれまたはかれら自身の社會價が、及びその社會に於けるかれまたはかれら以外の個人や國人の社會價が、後者自身によつて正當に、客觀的眞實通りに承認されないことは、どんなにも深烈でありうる不幸福を形成する本質的必然がある。すなはち、その事實または關係が前者によつて意識されるや否や、意識されるにしたがつて、それは極度にさへも堪へがたい道德的、したがつて最も本質的な不幸福を前者に與へる可能がある。

母が子に對する場合の如きに於いては、母は、子自身の幸福のために、子を開發し、敎化し、統治してやるのだとい

ふ自覺などはかの女に成り立たないほどにも深く、眞にその關係の信仰者、實行者、創造者となつてゐる。成功した帝國主義國に於ける征服民的支配系が被征服民的屬領系に對する場合は、これとは全然別の性質を持つ。これとかれとの間には、性の善い實母がかの女の實子に對する場合と、性の惡い繼母がかの女の繼子に對する場合との間に見いだされる差に似た差がある。

母子間の關係の如き場合に於いては、その相互の社會價は母によつての如くに子によつても、特に問題として意識される可能が自然に低い。成功した帝國主義國に於ける征服民的支配系と被征服民的屬領系との間なる關係の如き場合に於いては、その相互の社會價は單なる本能によつてでなく、理性によつて正當に承認され、保護される必要がある。なぜかといふに、そこにては、その相互の社會價がその各自によつて批判的及び利己的に意識される可能が自然に高いからだ。

支那は現代に於いて、自身の國民主義を甚だ不完全に形成してゐる部分の人類の一大部分だ。歐洲の諸大國、日本、及び特殊の考察を必要とする北米合衆國、これらを現代に於いて自身の國民主義を形成してゐる部分の人類の水準と見ることは有理だが、さうすれば、現代の支那は、自身の國民主義を形成してゐるものとしての資格に於いて、遙かに水準以下だ。斯くして、現實論及び純理論の兩見地からして、現代の支那は、最も要領よくいへば、自身の國民主義を形成してゐない部分の人類に屬する或ものだと結論される。

現代の支那は、それの内的關係に於いては、そして實質的には、原始的封建制の或るかたちと見られる。それは、それゆゑに、部落主義の或るかたちとも見られる。將軍は藩主のやうでもあれば酋長のやうでもある。それは他のなにものに似てゐるよりも完全に原始的封建制に於ける藩主と部落主義に於ける酋長とに似てゐる。將軍中の比較的に雄強な

分子は、それぞれに、全支統一の初心を抱く一地方的專制者大の、しかしながら最高無上の一主權者だ。かれらは、織田信長の或時代を髣髴させるものであつたり、伊達政宗の或位置を聯想させるものであつたりする。

現代の支那が、省別によつてそれが便宜的に、多少有意義に指示されうるが如くに、いくつもの地方的社會の一群團であることは、支那の將來に興味を持つなに人もの深い注意を要求する一事であらねばならん。心理的殊に感情的、文化的、歷史的、社會事情的、及び自然的の各種關係に於いて、現代の支那が有根柢的に多元である限り、將來の支那を同情的に構想する人の立ち場からしては、各省自治を便宜的一標語として理解するかたちに於いて、地方自治を最も必要な一條件として確認しないことは出來ない。

しかしながら、全支的國民主義が未實現の狀態にあることと、侵略的國民主義、すなはち帝國主義的國民主義が現代及び多少遠い將來までの支那を間斷なく、いはゆる息つきのひまもない急忙を常に支那に與へるかたちに於いて、四周から壓迫する現實及び可能とを考へに入れて考へれば、現在の支那が、單純に地方自治の一路に向かつて邁進することは賢明でないと考斷される。なぜそれが賢明でないかといふに、その方法は目的にそむいた結果を招く必然があるからだ。

日本の場合を見るに、地方自治は、維新後に於いて、維新前に於けるよりは遙かに高い發達を示す。もしも日本が、ペルリ來浦の當時及びその附近時代に於いて、國民主義へ飛躍し移らずに、ひとへに藩別主義に固着し續けたならば、日本は、まもなく世界に於ける一とつの新らしい被征服民となつただらう。

日本は、それの地方自治の目的を達するためにさへも、先づ國民主義的中央集權を確設する必要を持つてゐたのだと、關係諸事情に對する考察に根據して確實に結論される。國民主義的中央集權の確設は、今日から見ての幕末の大小諸藩

の自己保存欲にむかつても、最も賢明に忠實な方法であつたのだ。勿論、私は、維新後に於ける藩閥の繁榮をここで意味したわけでは決してないが、それさへも、地方民の本質的幸福としての成長の大樹に對して派生的及び寄生的關係を有する癖、垢、黴の性質にすら缺けた現象ではまた決してなかつた。

日本の場合は、通則的價値ある近代的一原則の一例にほかならない。支那の各省自治、乃至廣く地方發達の目的は、目的としては不自然でも不合理でもないが、この目的を達成するための方法は、一日も早く、善意にして聰明な中央集權を極めて有力に確設することを一要件とする。

この一要件を缺いたかたちの地方自治實現または完成の努力は、世界の帝國主義的諸大國からの各種の不可抗的に强大な惡魔力の無間斷的作用によつて、出發の機會をさへ見いだしえずに死滅するか、不純正のしかたに於てしばらくそれの發達を許され、久しからずして根本的無自治の幻滅狀態に到達するかのほかに成り行きかたがないと考へられる。

現在の支那の全人口は實に大であり、それの國土は實に廣い。しかしながら、その廣大なる支那は、先づ一とたび、極めて凝集力强き一團塊となることによつて、それを方法的一要件とすることによつて、それのいかなる部分もの、したがつてそれの全體の、本質を保全することが出來ると考へられる。全支那が國民的一團塊を金剛不壞の堅牢さに於いて形成することは、たとひそれがどんなに完全に成功しても、それ自身としては、深い、高い興味を滿足させる事柄ではない。現代の支那が自身の國民主義を形成することの價値は積極的であるよりも消極的だ。それを形成しさへすれば萬善が成るといふ關係はそこにはない、しかし、それを形成しないでは一善も成らないといふ關係がそこにはあるのだ。國民主義は、他のいかなる民族に取つてもの如くに、現代の支那人に取つても、至寶そのものでは固より決してないが、かれらが至寶を保護または獲得するための方法的一必要件であるのだ。

現代の支那が持つことを値ひするかれ自身の國民主義は、したがつて國民主義的中央集權も、國民主義として、また國民主義的中央集權として、最も聰明な形式のものであらねばならん。それは、それの根柢に於いて、個人價意識と社會價意識との兩世界を完全に統一して所有するもの、その兩意識に徹底したものであらねばならん。それは、例へばフランス革命以前の政治組織の原則が示すやうな迷信的なもの、專制的及び盲從的、橫暴的及び卑屈的なものであつてはならん。それはそれらの言葉の廣い適用を條件としての封建制的及び奴隷制的のものであつてはならん。

しかしながら、この點に關しては、現代の支那は、必ずしも後進國に屬せず、かへつて先進的に屬してゐる證據をいく多のかたちに於いて、材料によつて、明示する。すくなくとも現代の日本の如きは、現代の支那との比較に於いて、いかにも恥づべき反道德質、非哲學質を自身の政治組織、社會生活の基礎觀念の內に持つてゐる

われらが支那の國民主義形成、中央集權確設になかつて希望する要件は、それゆゑに、獨、露、日等の國民主義形成、國民主義的中央集權確設當時の形式を、無批判的に規範または標準として理解してゐるかたちのものでは決してない。それはそれとは無關係もしくは反對に、あるひはそれよりは遙かに進步したものとしてのかたちに於いて、政治的主權、統治、または支配の進化的分裂を聰明に信仰するものであつてほしいといふことだ。

政治的主權、統治、または支配の進化的分裂とはなにを意味した言葉か。それは、一人または少數專制のかたちから立憲制へ、それも制限選擧のかたちに於いての代議制から普通選擧のかたちに於いてのそれへ、さらにまたそれが職業的、消費的、地方的形式に於いての社會的諸機能を內容とする組合に各別的及び綜合的にいよ／＼密接の關係または責任を待つかたちの組織的人民自治へ、近代に於ける政治的主權、統治、または支配の性質が進化し來たり、進化し行きつつあるといふ歷史的及び現在的事實と傾向とによつてかなり顯明に具體化されてゐる或原則を意味したのだ。

それは、それゆゑに、被治者が即ち治者であることを徹底的に、統一的に、完全に、名實兩全的に絶對的必要とする政治の根本的、公理的一原則の如きをば、政治の根本的、公理的一原則としては忘れ切つたほどにも知り拔いて、もつと先きの、すなはちもつと進んだ創造的思索及び事業を內容とするものであるのだ。

政治的主權、統治、または支配の內包に於ける進化的分裂を條件としたかたちに於いて、それの外延に於ける進化的統一が、すべての一全體としての政治組織にむかつて希望されるがゆゑに、あるひは、他のすべてのそれにむかつて希望されるが如くに、現代の政治組織的一全體としての支那にむかつても希望される。そして、その外延に於ける進化的統一は、現代の支那の場合に於いては、全支を完全に蓋ふ國民主義的中央集權を確設することによつて代表される。

最近代の支那は、それの名をば一獨立國として持ち通ほしたが、それの實をば或程度まで一屬領國として示した。支那は現になほ多少その狀態にある。

今より八十有餘年前、すなはち西歷一八四〇年に、支那は、英國にむかつて、阿片を支那へ輸入することを拒んだ結果として、英國からの武力的侵略を受けた。香港の割讓は支那が英國にむかつてなした敗戰謝罪の一內容であつた。その後、一八九五年に終戰した淸日役に至るまでの概略半世紀間に、支那は、都合十七個の港、揚子江等を英、佛、米、スカンヂネギア等の或もの及びすべてにむかつて開いたと共に、准支那領であつた緬甸を英に、安南を佛に割讓することをもした。その他のかたちに於ける對外的國家主權削滅の事績もそこには勿論それ、これとあつた。

一八九五年の下關條約は台灣を支那の手から日本の手へ移した。露、佛、獨の連名行動によつて、遼東半島は支那のために愛惜されたかの觀を一時、一部の人々には呈したかも知れんが、行動の眞意はまもなく實證された。露は、その對支好意の代償として旅順及び大連の租借權を獲得した。滿洲に於ける鐵道及び鑛山權もこれに帶び着けられてゐた。

西伯利亞鐵道を、支那の領土の一部を横斷することによつて、最捷徑的に浦鹽へ導く、且つ露の帝國主義的勢力の北滿に於ける根據地形成をも意味する東支鐵道は斯くして露によつて急ぎ敷設された。露は、細かくは、なほその他のかたちに於いても支の國土内に政治的、經濟的蠶食を行なつた。佛もそれをやつた。

一八九七年には、獨が、山東に於いて二人の自國布教師が殺害されたことをありがたい機會として利用して、また支那國土内に於けるかれ自身の鮮やかな帝國主義振りの發揮に及んだ。すなはちかれは膠洲灣を占領して九十九個年租借地となし、その後かれが實行した通りの諸權利——治外法權、武裝、造船場及び海軍根據地設置等を筆頭に殆どすべての主權國的自由——の享樂を約束した。かれは山東に於ける鐵道及び鑛山權をも獲得した。

露と英とは、相競うて獨の後進的な、しかしながら鮮やかな對支的帝國主義の向うを張つて、それぞれの先進的な對支的帝國主義の行動を更に新たに進捗させた。すなはち露は旅順港をいよ〱傍若無人的に自國軍港化し、新たなる鐵道敷設權を獲得したりした。英はこれに躍起となつて威海衛を取り、また揚子江沿岸諸州を首めとして、浙江、河南等にまで及んで、公式的及び實質的に自國の勢力圏を基礎づけたりした、

獨その他の支那分割的行動が多少の激發因となつて、一九〇〇年の支那を特標する北淸事變が起こつた。起原をそれの善後策に有する在北京列强公使館領域に對する列强自身の直接兵護、及びそれに附隨するいく多のかたちに於いての列强享有の特權も、支那の主權に於けるそれだけの被侵害または不成立を意味するが、償金支拂の方法が、種々のかたちに於ける關税及び鹽税等による歳入によつて條件づけられた點にも、そこに關係强國の手が直接に參加してゐるがゆゑに、支那主權の破損と缺乏がある。

領事裁判權の存在は一國の司法のそれだけの無自治、無責任、無を最もすくなくとも意味し、外兵の國內駐屯は一國

の警察及び軍隊のそれを同樣に意味し、關稅務の最長官や鹽稅務の樞要吏員を外人の範圍內に仰ぎ求むる制度の存在は一國の行政及び財政のそれをまた同樣に意味する。現代の支那は、しかるに、この一國だ。そして、上記三現象は、現代の支那の場合に於いて、同樣の無主權國的現象のなほ數多くあることを同時に意味する。上記三現象は或通則的現象中の或小部分以上のものではない。

一九〇四―五年の露日戰が、支那を無視して、しかも支那の國境內に戰はれたことも、支那主權の健在を意味する現象では勿論なかつた。

露日戰後及び大戰後、それぞれにポーツマス條約及びヱルサーイ條約の或內容として、支那主權の從來某外國または某々外國に被分割的に讓與されてあつたものが、同じく外國の範圍內に於いて所屬關係の上に顯著な移動を生じたといふ變化はあつた。露革命も同樣の變化にいくらかの機會を與へた。そして一九二一年末から一九二二年初へかけて約三個月間の會期を持つた華府會議の結果として、支那は主權恢復または伸暢の方途に向かつて、對外關係が關する限り、一大長步を進めた。

けれども、華府會議以後の支那でさへもが、被分割の可能をいちじるしく減じたわけでは決してない。一九二二年末に、いはゆる北京外交團――これの存在がすでに支那對外主權不全の一證だ――の間に支那共同管理運動が復た顯はに持ち上がり、一九二三年前半期末に臨城時件が突發した結果として、同じ年の後半期間に支那國際管理熱が列强中の或ものの間に遽かに高まつた觀を呈したことの如きは、大勢を例證する微細なる一、二現象以上のものではない。

最近代の支那が、それの對外主權をいかに不完全なものにして持つたかは、以上だけの簡叙によつても略ぼ完全に認知され、推察され、構想される。

現代の支那に取つては、對外主權を完全に恢復すること、あるひは一層適當な表現としては、それを始めて新たに打ち建てることが、最先要務の一だと確認される。支那の國民主義化、國民主義的中央集權化が、殆どそれと同義異語的な、それの主內容であり、またそれの代表的方法だと考へられる

鐵道の增設、普及設は、散漫無統一の現在の支那を、組織された、統一ある支那へ移すためにも必要だ。產業的、經濟的に支那を發達させるためにも、それは先き立つ一必要件だが、立法及び行政的に支那を自治化し、責任統治化するためにも、また支那に國民主義的敎育、啓蒙を深徹させ、遠達させるためにも、それは必要な一條件だ。實に、支那の如き無邊的に廣大な領土を單純なる一團塊的形式に於いて持つ國家の場合に於いては、鐵道の發達を缺いては、それは堅密に組成された一社會としての國家といふ資格を全うすることが出來ない。鐵道なき支那、鐵道の或程度以上の發達を缺く支那は、殆ど一とつのまとまつた社會としての資格をすら、或ものが一とつの社會であるために必要な最低限の或條件をすら、缺くとさへいふことが出來る。支那は、いやしくも一とつの社會であるためにすら、況んや現代に於ける一とつの組織された社會としての國家であるためにはなほさら萬々、鐵道を國內に早く普設する必要を持つ

しかしながら、この鐵道普設のための資本は、現代の支那としては、これを自給する決意を持ち、そして實行し通ほすことが、かれの必要的最低限賢明の一部分を構成する條件であることを充分に自認すべき事情と理由がある。

例へば米國の資本を支那に導き入れ、もしくは迎へ入れて支那に鐵道を增設または普設することを企てるならば、それは支那が米國の領有に移るための一準備としての意義を、すくなくとも結果に於いては、豫示するほかないと考へられる。

鐵道と鑛山は支那を產業化するための二大要件だ。しかしながら、この二大要件は、支那の自營を條件として始めて

支那のために有意義だ。鐵道及び鑛山の完全なる國有化、官營化は、支那の對外主權確設のために絕對不可缺の現代支那國策の一內容たるべきものだと確斷される。

治安及び國防の設備と制度と組織とを完全に中央政府の直接責任の或內容として所有するかたちに於いての國民主義的中央集權の創造も、現代の支那が最も有理的に必要とする政治的主權を對內的及び對外的に確設するための一必要だと考へられる。國家直屬の警察と憲兵と軍隊とが、現在の督軍が意味する私兵に完全に取つて代はる必要が勿論考へられる。その理由の內には、治安の嚴正、精確、公的責任を對人民的すなはち對國民的內的關係に於いて目的とする部分もあるが、治安及び國防が外國の支配下に支那國民の或部分によつて多少とも私用される可能を斷つことを目的とする部分もあるのだ。また國防を目的とする中央政府直屬の軍隊そのもの、國民的軍隊そのものの大きさまたは强さも、外國からの侵害を豫防しまたは制裁するに足るだけのものであることが必要だ。

基礎的普通教育を初めとして、教育の國民的普及及び徹底は、現代の支那が自身を救ふ最も根本的な、最も統一的な要件だと考へられるが、これにも、外人の手をば合理的極小限に制限する必要があると考へられる。眞の國民主義の建設のためには、國民自身の最善聰明が教育、啓蒙の前線にも、中堅にも、後殿にも總出動するやうでなくては理想的でない。外國布教團の自由發達をば保護することも、妨げないことも、すくなくとも大國たる意志あるものの雅量ですらなくてはならんが、外國布教團あたりが存在の自然的及び當然的理由を大きく持つやうであつては、支那自身の精神的反省及び努力に空隙があることをそれは意味するものだと考斷せざるをえない。

產業に於いての如くに、教育に於いても、管理または經營をば外人にまかせてはならん。ラスセル氏が『支那の問題』のなかに於いて、他の多くの點にの如くに、この點にも銳い觀察と構想とを示してゐることは、この場合にも想起され

る。ついでながらに注意するが、私は、氏の上記の著に對して多少深烈に批評的たらざるをえない點をも自然持つてゐるが、一善著に對する敬謝の念をも鮮やかに持つてゐる。それが廣く讀まれることは、要するに希望される。

日本が外國の領事裁判權を國內に撤廢しえたのは一八九九年に及んで始めてであつた。ハリスが先づアメリカのためにそれを日本から獲得したのが一八五七年に於いてであつたから、日本は約四十年間、明治になつてからでさへ約三十年間、すなはち清日戰後第四年までもその主權被侵害的屈辱を脫ぎ棄てることが出來なかつたのだ。支那が現在の主權被侵害的屈辱を、司法方面、直接には關稅關係によつて代表される行政及び財政方面、鐵道及び鑛山に代表される產業方面等の種々方面に於けるそれを、脫ぎ棄てるために必要な方法は、日本が近い過去に於いて同樣の目的にむかつて採用した方法と同樣のものであるほかないと考へられる。

その方法の複雜要素のうちには、强硬なる外交、それを可能にするための一要件たる恐るべき戰鬪力、またそれを可能にするためにすら必要な或條件である財力及び敎育等も勿論注意されるが、道德と氣力と聰明の內外の信頼と尊敬を必招するに足る政府を實現することが、最も先要的な、且つ支配的な一要素として特に深く注意される。

綱紀肅正といふ言葉は現代の日本の政治家が好んで用ひるほど、現代の日本にもそれの餘地があると見ることは、現代の日本の政治に對するよほどのひいきだが、現代の支那の政治が最先第一に要する一事は疑ひもなく綱紀肅正だらう。あるひは、現代の支那が最先第一に要するものは綱紀の肅正された政治だといへば一層完全な表現だ。

曾つて一九一八年當時のレニン政府は、レニン政府自身の憲法、條規、綱紀をいやしくも紊つたレニン政府系の官吏自身の行爲をばしば〱死刑に達する嚴罰にさへ處したと傳へられる。現代の支那が最も要するところの一事は、このかたちのレニンだと確認される。

善意にして責任ある政府が確設されれば、しかもそれが時務を解した有識なものであれば、政府すなはち國家の事業にむかつて、國内からも投資する個人及び團體が簇出するであらうし、外國からも同樣の現象があらはれるだらう。國民と外國から見て、信用を置ける、たよりになる、悦んで命令と招請とに應じうる政府が確設されたならば、財源は支那自身にも決して見え透いた小額に於いてでなしに見つかるだらうし、國外からも、支那の主權に損傷を與へない自由な條件に於いて募債することが出來るやうになるだらう。

觀じ來たれば、現代の支那が最も要するところの或ものは、近代國民主義の豫言者であり、伊太利統一の精神的衝動であつたマチーニと、かれの政治的協力者であつたカヴールと、かれらの軍事的協力者であつたガリバルヂとの三才一人者の出現、三才三人者の出現、三才自由數人者の出現だと確斷される。いな、それは、もつと根本的には、その國民的必要に對する國民的自覺及び努力だと確斷される。

現代の支那には、學生を中心とする啓蒙、改革、新文明と新社會とを建設せんとはげむ「學藝復興」期的氣分、思想、傾向及び運動が鮮やかに進展しつゝあるらしい。私はそれの內容を直接に確實に詳知する努力を拂ふ餘地を大きく持つてゐるものであるが、現代の支那に於ける進步的生命部分が、飽くまで聰明な、有根柢的な、意義に於いて獨創的または創造的な、精神的または道德的調子の極めて高い、そして現實に對する理解と知識の徹底的に具備された、完全理想主義的なものであることを先づ望み、しかるのちに、その部分が早く全支に對する酵母としての作用を完成することを望むものである。現在の私は、しかしながら、これを望む心のうちに、多少の不安が含まれてゐることを意識しないことは出來ない。その不安か、私の無知識に原因を持つ現象だけのものであつたと、他日、證據立てられるならば本懷である。すなはち私の不安は、事實及び可能を多少あやぶむ性質の不安である。

しかしながら、現在の支那の矚望は、要するに現代の支那の靑、壯年者に懸かつて存するものであるから、明日の支那に對する今日の支那の靑、壯年者の責任はつひに絕對的だ。

世にはすでに、「若かき支那」に對するあまりに溺愛的な、樂觀に過ぎた、また支那全體に對してもあまりに自己の嗜好的、感傷的、あるひは多少頽廢的でさへある傾向に支配された見解が散見する。ラッセル氏などにもこの點が多少見える。若かき支那が要するところのものも、また實に、完全なる自己批評を除いたものではありえない

私は、「若かき日本」には不聰明質と浮薄性とが隨分極端に帶着されてゐると考へる。「若かき支那」は果たしてどれほど完全なものであらうか。

若かき支那は、正しき意味に於いての眞、善、美に對する純烈な信仰、情愛に全燃してゐる人々であらねばならん。かれらは、それゆゑに、この際に於ける最も聰明なかたちの愛國者でもあらねばならん

四　支那と日本との將來的關係に對する一日本人の選擇

すくなくとも一日本人としての自覺に於いて、私は、支那と日本とは、各自に完成された、もしくは發達した國民主義的主權國としての立ち場を一面に於いて確保しつゝ、いはば制限的國際新國家、いな制限的國際聯邦の一を形成する目的にむかつて協力すべきだと考へる。こゝで制限的というたのは、代表制に於ける普通選擧制から識別された制限選擧制に於ける同じ表現を聯想させる性質をさしたのだ。目的と傾向に於いては普選であるべき代表制が事情的に制限選擧であるが如くに、本質的にはすくなくとも人類一家または世界國家であるべきものが事情的に或接壤複數國の進化的合同でありうるのだ。そして、その事情的にありうる狀態が、その場合に於けるあるべき狀態であることがある。現

代及び多少の期間を蓋ふ將來にわたつての制限的國際聯邦形成はこの種類の一狀態だと考へる。

制限的國際聯邦に於ける各成員國間の感情的關係は純眞なる友人間のそれであることを目的とする。純眞なる友人間の關係は、恐らくは世に形式に於いて極めて單純であり、作用に於いて極めて自由なものの一だ。そこには方法的組織はいかやうにもありうる、しかし精神に於いては最も善い意義に於いての無政府主義に於ける最も善い部分に比される絕對主權の各員各有の統一的實現が常にそれの支配力を失はずにある。

現代に於いて、制限的國際聯邦が隨處に形成されることは現代政治が、それの主權の外延に於ける進化的統一をそれだけ實現することを意味する。支那と日本との場合について考へるに、すべての關係事情を考量した結果としての最後の結論としては、兩國の一團化が、日本の自己保存の目的からして必要的に有價値であると共に、支那のそれからしてもさうであることは、なに人も否定することの出來ない眼前の事理だと考へられる

組合と進步との二概念は、マチーニに取つても、最も意義深いものであつた。現代の支那と日本とは、またたしかに組み合ふことを方法として進步しうる。しかもその組合は、すくなくとも早く制限的國際聯邦の程度にまで進むでなくてはあまりに稚弱だと考へられる。

從來の日本が、歐米の尻馬に乘り、手先きに使はれるかたちに於いて、しば〱あるひは常に、支那分割の眞似事をした概があることは事實だ。そこに日本の反省すべき一點乃至いく多の點がある。黃人中の白人を自身實現することに日本の存榮心は懸かつて存するかの觀をさへも最近代の日本の對白人的態度及び行動と對隣大陸黃人的態度及び行動との對照は示す。日本のそのやうな歷史は、今日のわれらが、それを單純に批難しうる性質のものでは決してない。苦衷の察すべきものもそこには必らずしも少小ならずあつたにきまつてゐる。しかしながら、それはそれとして充分に理解さ

れべき事柄だとして、日本の志が卑小であつたこと、感情が淺隘であつたこと、現になほさうであることは、すくなくとも日本の將來に耀望を懸けずにはをられない人々の立ち場からしては、この際、忘れ去ることの出來ない昨及び今の非なる現實であらねばならん。

日本が自身のものを持たなすぎるといふ悲哀は、かれの帝國主義の實行が近眼的に歐米のそれをまねたものだといふ性質をあまりに多分に含んでゐる事實にもあれば、かれの反帝國主義の聲が歐米の批難の聲の鸚鵡返へしだといふ性質をあまりにそれの本質的部分として持つてゐる事實にもある。

支那と日本が進化して現在の支那よりも、また現在の日本よりも大なる新生命に機會を與へることは、當事者以外の見地からしてさへも結局種々に有意義だが、日本自身が、すくなくとも支那と共通の必要と目的に完全に開眼し、進んではアジア族全體の共通必要にも開眼し、最後に、しかしながら最初から最も根本要件的に、全人類の共通必要に開眼するでなくては、日本からいふ限り、その新生命を機會づける第一方法を日本は採用しないでゐるのだ。

現代の日本は、しかるに、自己を愛するものとしても、他を愛するものとしても、あまりに淺い根柢に、それの政治をも、教育をも、道德をも、哲學をも、常識をも、原則的及び現象的に關係させてゐる。最低限必要の僞善をも、改正をも、手近かな自國の內的組織にむかつてすら敢てしないあひだ、隣國や列國や國際にむかつて勸善や先導に及ぶ順序は到來しないといふ反省は避けがたい。

五　支那と歐米との現實關係に對する選擇的一注意

最後に支那と歐米との關係について更に一言するが、「勢力範圍」、「門戶開放」等の標語が英、米等の對支態度を、そ

れがある通りの或るかたちにしたがつて、まさ〳〵と想はせる他面に於いて、英自治領の各所、米本國が支那人の入國をすら許容しないといふ現實は、それだけでも「若かき支那」の聰明なる愛國心を刺戟する資格を實に大きく持つてゐると考へる。

しかし、自然資源を開發せずに腐朽させることは、現代に於いては、それがいかなる一國の領土内に於いてなされようとも、人類社會に對する一罪惡を意味しうる場合がしば〳〵だ。支那の天然富源を支那人が開發しないならば、外國人が開發することを批難すべき理由は決して絕對的ではありえない。

現代の支那が要する愛國心は、單なるセンチメンタル程度のものであつては決してならん關係は限りもなく種々だ。

藝術上の眞

深田康算

藝術は自然の模倣でない。自然は藝術に對して質料若しくは素材を供するに止まり、藝術に向つて法則を指定するものではない。しかしカントの云つたように、「自然は同時に又藝術と見える時に美であり、そして藝術は、それの藝術たることが吾々に意識せられながら、しかも吾々に取りて自然と見ゆる時に於てのみ美と呼ばれうる」。藝術は自然そのもの現實そのものでなく、唯其れの映像であると考へられ、美は假象であり、美は無關心的であるとも云はれる。しかし藝術を以て「人類の良心である」と云つたヘッベルに同意しないものはあるまい。さうして又、吾々は飽くまでも美が──美のみが──藝術の原理であると云ふことを確認しなければならないのに拘はらず、シルラーが美を指して寧ろ「最も十分なる意味に於ける眞」と名づくべきだと云つてゐるのに深い意味を認めないわけに行かない。斯くして吾々はゲーテが云つてゐるように、「吾々をして生活から最も完全に游離せしめる所のものが藝術であると共に、吾々を生活へ最も緊密に結び附ける所のものも亦藝術である」ことを知る。吾々を生活から游離せしむる所の藝術の力を指して、今假りに美と呼ぶことができるならば、生活へ吾々を結び附ける所の其れの力を指して眞と呼ぶこともできよう。藝術上の眞とは如何なる意味に於て云はるべきであらうか。

藝術に關して眞を——例へば常識的に藝術作品に對して迫眞とか自然とか必然とかゞ要求せられる場合に於ける如く——說くのは、嚴密に云へば實は極めて不正確なる意味に於ての眞を語るものであり、實は大なる誤謬に基くものであると云へる。斯く不正確なる意味に於て眞と云ふ言葉を用ゐるのならば、吾々は學術に就てそれを語る如く道德に就てそれをも語りうる如くに、藝術に就ても亦眞を語りうるであらう。加之眞を以て直ちに藝術の評價の終局の標準であるとさへ云ふこともできるであらう。斯く藝術上の眞を語ることは、しかしながら、恰も藝術が遊戲的假象的であり畢竟無用なる恩寵であると見られるのに對して、その遊戲がそのまゝ眞面目でありその假象がそのまゝ眞實であり、そしてその無用の恩寵がそのまゝ有用の必要事であると言明するのと同じように、それは唯曖昧にして不正確なる言葉の多義を弄ぶことに外ならないのである。藝術の原理を以て美であると云ひ、さうしてその美を指して無關心的假象的であると定義するのは、それ丈けでは云ふ迄もなく單に形式的消極的なる限定を與へたものたるに過ぎない。加之それは畢竟——無關心、假象、及び遊戲等の言葉に於て顯著である如く——現實的生活と現實的自然とを標準としての定義たるに過ぎぬと正當に批難されなければならないであらう。しかしながら此定義の不足を補ふために唯單なる其逆を提示するのは、それも亦やはり彼れと同樣に現實的生活と現實自然とに立脚して藝術を規定しようとするものであり、所謂立場の混同たるを免れない。藝術に就てそのまゝそれが吾々の生活であり自然であり、若しくは生命であると云ふのは、少くとも正さに此譏りに價ひするものである。藝術は一面に於て美的であり假象的であると共に一面に於て自然的であり又眞實味を持つと云ふ事が吾々の經驗である。相容れざる此兩面を儼に示してゐる所の吾々の此特殊なる經驗を理解するために、美が如何にして、如何なる意味に於て眞と呼ばれうるであらうか、藝術上の眞とは何を意味するかゞ檢査さ

れなければならない。

藝術に眞實味のあること、なければならぬことは明らかである。從つて或意味に於ける眞を藝術に就て語ることの可能は許されなければならぬ。しかし藝術に就て眞を語ることは、其れに就て美を語る場合とやはり同様に多くの誤謬を惹き起し易い。美が多數なるが如くに眞も亦多數なるがためである。ゼウキシスとパラジオスとが其技量を爭つた話に於て、前者の描ける葡萄の一房は小鳥が來てそれを啄ばまうとしたのに後者の描ける薄布はゼウキシスをして此被覆を取つて繪を示せと要求せしめたと云ふ。此意味に於ける迫眞は屢常識的に藝術に向つて請求さるゝ所の眞である。又吾々はホーマーの詩に於て、そのテルジテスを自然であると感ずると共にそのナウジカを又やはり自然であると感ずる。吾々は又「エヂポス王」の運命を必然と感ずる如くに「アッシャー家の倒壞」をも必然と感ずる。自然と云ひ必然と云ふ評語はひとり內容的描寫的藝術（例へ繪畫や小說）に就ても用ゐられるばかりでなくして又實に形式的象徵的藝術（例へば純粹音樂や建築）に關して用ゐられるのを常とす。これ等の色々の場合に於て、これ等の言葉の意味が又種々なることは說明を要せざる程に明瞭であらう。現存するそして吾々自らの熟知する人物の寫眞若しくは肖像畫に就て吾々がそれを迫眞と評するのは、例へばレムブラントの自畫像に對して此評語を用ゆる場合と到底同意義であるべき理由は見出されない。劇や小說を指して自然の模寫であると云ひうる意味と、音樂や建築を指して自然の模倣であると云ひうる意味と、これ等も亦決して同じではありえない。そこに已に、眞なる言葉の――斯くもさうして如何に――多義なることからして、藝術上の眞が持たなければならぬ所の特種性に就て吾々に注意が促がされてゐるのである。しかしながら、迫眞と云ひ自然と云ひ又必然と云ふ時、換言すれば眞を藝術に就て語る時、―眞とは一般に或客觀的實在への主觀的表象の適合と考へられてゐるのであるからして――、この藝術上の眞なるものも亦何等か或客觀的實在への合致でなけ

ればならぬと思はれるは無理もないことである。そして藝術が模寫であり表現であり、主觀的構成であると云ふ顯著なる事實は、愈此思想を强めしめるに相違ない。眞理即模寫說の立場からの解脫が成し遂げられぬ限り藝術論も亦その確實なる基礎を得ることはできなかつた、加之此解脫が成し遂げられぬ限り此立場のために最も多くの困難と障害とを經驗しつゝあるものは藝術論であるとさへも云へよう。ところで藝術が模寫として眞なるがために、それへの合致が要求される所のものは、客觀的實在として、現實的自然と現實的生活との二者である。此二者はしかし外部的のと內部的のとして同じ一つの自然に屬するものとも見られる。自然は自然を生むと共に同樣に人間をも生む。自然は人間の母であるとも見られる。藝術的模寫が自然の模倣として最初に規定せられたと云ふ歷史的事實は恐らく此所に基くものと云へる。眞理が模寫である所に於ては、自然の模倣としての藝術は即ちやはり一種の眞として當然の權利を有しうべきである。しかし模倣としての術には不思議にも此當然なるべき權利の彼れに認容されることを不可能ならしめる所のものが──少くとも三つを數へることができる。それはそれが映像であることと、創造であることゝさうしてそれに快感の作ふと云ふことゝである。この三つのものゝ故に藝術は、それが自然の模倣であると規定せられると共に、それは同時に又虛僞的として純主觀的としてそして不道德的として否定せられなければならない運命に置かれる。との三つのものはしかし又一つに約することができる。藝術が模倣とされる時此模倣が他のあらゆる模倣と異なる著しい特色はそれが模倣に止まること映像に止まること若しくは形式に止まることである。換言すれば或客觀的實在に合致するべきことの要求の下に模倣と規定せられたる藝術が、其要求を充たさずして、唯其自らとして獨立し終はる點に在る。藝術が或ものゝ映像たることから、唯單なる映像たるに止まるに至るからである。或客觀的實在の忠實なる映像でなくして、唯單なる映像として其自ら獨立する所に、藝術の創造性が認められる。さうして斯かる單なる映像として其れの齎らし來たる

快感は、藝術に特有なるものとして、唯形式に伴ふ快感でなければならない。さうであるからして、藝術を以て自然の模倣とする立場は、多少の反省の後、此模倣を以て「そのまゝの」若しくは「忠實なる」模倣としてゞはなく、寧ろ「實質的に全く相異なれるものゝ單なる形式上の一致」として考へなければならぬことゝなる。さうして斯かる意味の模倣が正當に認められるためには、それに先つて形式そのものゝ特異性が明らかに確立せられることを必要とする。此確立が打建てられぬ限り、藝術は永久にかの三つのものゝ故に虚僞として若しくは不道德として批難せられることから免れることができない。しかして形式の特異性の確立は同時に模倣説の全然たる破却でなければならない。

彼の模倣説からして此形式の確立へまでの道程は思想史の上に於て可なり長い迂餘曲折を示して居る。模倣の概念からして創造的構想力の概念へ、職工としての藝術家からして天才としての藝術家へ、理知からして趣味へ、客觀主義からして主觀主義へ、――此等及び其他の種々なる轉向が其所には必要だつた。此道程の最初にプラトンを置けば、其最後の十字街頭に立てるものをカントと呼ぶことができよう。さうして此最後の到達地點に於て藝術論は形式の特異性の確立に依り全然模倣説から脱却することができたと云へる。しかしそれと同時に其所では藝術に就て唯美のみが語られ、眞はもはや其れに就て語らるべくもないかの如くに見える。藝術論は美學の中に包攝せられ終はつたと云へるからである。カントが天才を唯藝術家のみに認めて學者哲學者思想家達に向つて之れを否定したことは、彼自身已に天才ではなかつたのかと云ふ注意の下に屢誤謬として指摘された。しかし、彼れの天才論は恐らく決定的と云へないであらうとは云へ、天才を唯藝術家のみに認めたことは、寧ろ藝術を學術から截然區別する彼れの所論の當然の歸結でなければならない。

藝術を形式に依り、天才に依り、感情に依り、そして美に依りて規定することは、さうならば、其れに就てもはや眞

が語られてはならぬと云ふことであらうか。例へばカントの影響の下に立つてゐるフイードラー Fiedler の如きは實にさう見做して、カント哲學に關する彼れの深い理解にも拘はらず、カントの美學を否定しそれに代るものとして藝術學を要求しなければならぬと考へた。藝術は認識に屬する活動である故に單に主觀的なる美に依りて規定されえたと云ふのである。K.Fiedler, Schriften uber Kunst 又例へばラッセル lasserre の如きは「藝術のための藝術」の源泉はカントに在ると云ひ、斯の如きは或ものを摘擧する手段たる藝術を以てそのまゝ目的とするものであり、全く無意味不合理であると評してゐる。P. Lasserre, Cinquante Ans de Pensée Française 藝術は如何なる認識のために役立つのであらうか。又何物を描寫するための手段なのであらうか。藝術が形式に依り天才に依り感情に依り美に依りて規定される時そこには已に或種の或特種の眞が含まれてゐるとは云へないであらうか。

藝術に就て眞と云ふ時、吾々は先づ內容的描寫的藝術に就て之れを云ふ場合と形式的情趣的象徵的藝術に就て之れを云ふ場合とを區別しなければならぬであらう。「是れが彼れである」と云ふ類似若しくは合致を眞と見做すならば、此意味の眞は——不用意に考へれば——前者に認めることができるとは云へるであらうけれども、後者はそれを認めることはできないに相違ない。そこで此全く異種類とも見らるゝ所の——そして其故に其孰れか一方に優越を歸することに依り相反せる藝術觀(劇を理想とせる古き藝術觀と純粹音樂を理想とする新らしき藝術觀と)が現はれ來る所の——藝術の兩者に相通ずる意味に於ける眞とは如何なるものでなければならぬかゞ注意されなければならぬであらう。そして其眞とは模倣說若しくは描寫說の上から云ふ所のものではあり得ぬことが注意されなければならぬ。加之內容的描寫的藝術に就て眞を語る場合に於てさへ已に描寫的眞がその唯一の況んや中心の意味でありえぬことも明らかでなければならない。何故ならば此種の藝術の中に於て寫實的(レアリスト)とか理想的(イデアリスト)とか藝術的(アルチスチック)とか演劇的(テアトラール)とか或は裝飾化的(オルネマンタール)とか表現的(エキスプレショニスト)とかゞ區

別される、そしてそれ等がその中に包含されてゐる。さうしてそれ等のものそれ〴〵の眞若しくは眞實味はそのまゝ同じ一つのものではありえないからである。それ等に共通なる意味に於ける眞は寧ろ新らたに見出されなければならない。そこで吾々は此等の色々の場合に於て云ふ所の眞を先づ二つの方面に區別して見ることもできる。一は細部描寫の上に基いて云ふ所の眞、一は描寫全體の上に基く所の眞。細部描寫の上に於て云はるゝ眞には尙幾分模寫的意味が認められるであらう。描寫全體の上からして云はるゝ所の眞にはしかしもはや其れは認めることができない。認められる所のものは此所では明瞭に唯描寫の上の眞、唯描寫の上に於てのみの眞丈けである。藝術の經驗に於て吾々の逢着する奇異（——若しくは少くともその一つ——）は、ジャン・パウルの云つてゐるように、吾々の知人ならざる人物の實在を吾々が小說の中に於て認め信ずると云ふことである。或は寧ろ詩中の人物、畫中の山水の方が實在性に於て遙かに現實的の其等に優つてゐるとさへも云へさうに感ずることである。描寫全體がそれに合致すべきことの要求せらるゝ客觀なるものは現實的自然として若しくは現實的生活としてはありえない。自然が藝術に對して唯質料を唯素材を提供するに止まると云はれるのは其の故であり、藝術が理想化であり創造であると云はれるも其の故である。しかし其創造と理想化とは——云ふ迄もなく自然を其質料とし素材として其上に立つてゐるに拘はらず——自然としての自然の創造でもなく又其理想化でもありえない。そは例へば毛蟲から蝶は發生する、しかし蝶は毛蟲の理想化とは云へない如く、理想化と云ひ創造と云ふのは即ち地を匍ふ世界から地に繫縛せられざる世界への飛翔の意に外ならないのである。描寫全體の上からの眞と云へば、しかし、そは個々のものゝ統一を豫想する。その統一が即ち理想化であり創造であると云へる。そして此統一の原理が或は論理的なるもの或は道德的なるものゝ中に求められるならば、斯くして藝術上の眞が語られることもできる。藝術上の眞が、常識的に迫眞の意味に於て（即ち上に云へる細部描寫の上からの眞として）云はれるの

みならず、學術的眞への合致として自然の意味に於て（例へばゾラの說いた如くに）語られ、又道德的正義への合致として必然の意味に於て（例へば「詩的正義」の思想に於ける如くに）說かれるのは此所に基く。描寫全體の上からの眞、即ち統一に基く所の眞を斯くして、自然と必然とに依り基礎附けようとするのは、しかし、細部描寫に於ける追眞を現質に依りて說明しようとするのと同じくやはり誤まりでなければならない。何故ならばそはつまり形式としての藝術に於て克服され「理想化されなければならぬ所の內容——即ち質料若しくは素材——をそのまゝ藝術の原理と見做すのだからである。論理化と倫理化とも亦或意味に於ての「理想化」であり「形式化」ではある。しかしそは藝術化がさうであるのと同じ意味に於てなのではない。論理的統一と道德的統一とに對して藝術的純一が理想化なのであり形式化なのである。藝術に取りて內容となる所の此二者が已に形式である點から云へば、藝術とは形式の形式と呼ばるべきであらう。內容的描寫的藝術に於いて其原理が其內容（質料）には存せずしてむしろ其形式の中に存することは今更めて說明するまでもない。此關係は、言語藝術に就て之れを觀取することには多少の困難を伴なうやうであるけれども、造形美術に於ては比較的容易に理解せられうる。しかし尙一歩を進めて云へば、此關係を極めて單純なる姿に於て、云はゞ其原初に於て、吾々に提示してゐる所のものは所謂形式的象徵的藝術である。其點から——さうして他の理由からではなく——建築は（藝術として）むしろ純粹音樂と共に藝術の代表者たる地位を正當に占めるべきであると云へる。內容的藝術と形式的藝術との分類は蓋し唯單なる豫備的分類に過ぎない。そこで內容と云ひ形式と云はれてゐる所のものは、藝術そのものに屬するものなのではない。藝術そのものは唯形式のみである、そして其形式とは形式と內容との融合————（それも事實認められると云ふ意味に於ける其れではなくして、其れが理想たる意味に於てさうして又形式と內容との融合としての形式の中に於て再び又形式と內容とが語られうる意味に於ての）——に他ならないのである。さうで

あるからして、藝術が形式であることから、形式に依りての內容の克服であることから、若しくは內容と形式との融合であることからして、藝術上の眞は——若し眞を藝術に就て語りうるとするならば——基礎附けられなければならない。形式的象徵的藝術に藝術の理想を見る所の新らしき藝術觀は、それ故に、其れの示す多くの畸形と、そして又其れの陷り易き多くの邪徑とに拘はらず、內容的描寫的藝術を理想とした古るき藝術觀に優るのである。しかし形式的象徵的藝術に於て云はゞ藝術の純粹なるもの原初的なるものを見うると云ふのは、內容的描寫的藝術が藝術としてはやはり又それと同じ姿である若しくばなければならぬことを含んでのことである。從つてフィードラーの如くに、概念なきと云ひ內容なきと云ふことを——それから內容の克服であり概念の超越であることを觀過して、——そのまゝ言語なき概念なきものと同一視し、此要求を充たすべき藝術は其故に、概念の道具としてのみ考へられた言語の上に立つ所の言語藝術（文學）ではなくして、唯視覺それ自らの條件に從ふ所の造形美術であるかの如くに考へるのは大なる誤りであるとして——彼から浮びうる多くのものゝあるに拘はらず——之れを吾々は拒絕しなければならない。彼から吾々が學びうる所の一つの、そして主なることは、藝術上の眞が如何なる概念に依りて構成せられた所のものにも依據するものではないと云ふことである。そして此眞理は吾々をして形式的藝術の形式のみへ、心理的生理的なる限に訴へるものとしての形式のみへ、總ての救ひを求めしむべく走らすべきではない。フィードラーに云はば潛在する誤謬はヒルデブラント A. Hildebrand, Das Problem der Form に於て、殊にハンス・コルネリウスH. Cornelius, Elementargesctze der bildenden Kunst に於て擴大されて明白に呈露せられてゐると云へよう。此眞理の力は唯藝術上の眞が映像たる藝術の本質である所の映像それ自身の中に於てのみ求められなければならぬことを極說せる所に存する。藝術上の眞は現實への忠實なる模寫に在るのではなく、論理的乃至道德的、理論的乃至實踐的概念の如何なる構成への合致に在るのではな

い、——換言すればそれは何等の對象への關係附けの上に依據するものではなくして唯對象の表象（若しくは知覺）そのものゝ樣態の上に基礎附けられなければならないのである。假象說の或もの、殊に幻覺說 Ilussionstheorie 若しくは意識的自己錯覺說 bewusste Selbsttäuschung が誤まりであるのは、此所からして明らかであらう。それと共にしかし又心理學的に抽象せられたる感覺的表象を形式と見做す所の心理學的形式說の誤まりも亦明らかとなる。フイードラーは此點から云へばむしろフエヒナー Fechner が區別せる意味に於ての形式を主張するに近ひとさへも許せられうるであらう。

さうであるからして藝術上の眞が、概念に依れる構成への合致にでなく、對象的統一の上にでなく、唯表象そのものの樣態 Beschaffenheit の上に依據しなければならぬと云ふことは、一方に於ては藝術が他の或一つの實在の模寫ではなくして、それ自ら一つの別なる實在であることを意味する。或客觀的實在を自己以外に在るものとして、其れへの合致に依りて眞理が規定されえぬように、藝術上の眞も亦其自らの中にその眞理たることの根據を有するのでなければならない。そして其自身の中に於て眞理の根據を有する限りそれは又實在でなければならぬからである。さうして其自身に於て眞理たることの根據を有するとは其れ自らに合致すること、其自ら矛盾せぬこと、若しくは其自ら統一あることでなければならない。落附きなき所のものは虛僞であり、矛盾せる所のものは虛僞であり、分裂せる所のものは虛僞だからである。さうであるからして、他方に於ては、藝術上の眞は、之れと異なれるものゝ主なる代表として上に擧げた論理上に於ける眞及び道德上に於ける眞とは又自ら異なれる所の統一の上に立つものであることを意味する。藝術上の眞が他の或一の系列に屬する構成としての、或他の意味に於ける眞に依據するものでなく、其れ等の諸實在と共にやはり又一つの他の實在であることは、リツプスが彼れの美學の第二卷に於て Lipps, Ästhetik, II. Teil. Die aesthetische

Betrachtung und die bildende Kunst 精密に已に說いた所、又ジンメルが彼れの「レムブラント」に於て G. Simmel, Rembrandt 珍らしくも分かり易く述べてゐる所から知られうるであらう。藝術の上の眞がそれに依りて或一種の眞たることの基礎附けられる所の特種の統一の如何なるものなるべきかに關してフイードラー以下ヒルデブラント等及びリヒャルド・ハーマン R. Hamann（私が曾て「哲學研究」に於て紹介せる彼れの論文）の所說等は有力なる指唆を與へてゐる。藝術が其自身の實在性（從つて眞）を有し、必然性と普遍性とに對する彼自らの正當なる請求を有しうるのは、理論的及び實踐的綜合が未だ成し遂げずに殘した處の一つの新らしき統一を打建てるからである。空間的に普遍に聯關せる併存の體系でもなく、又時間的に永遠に進行する繼起の體系でもなく、常に此所であり常に今である所の現在に動きつつある圓と其中心とが構成してゐる體系——云はゞ斯の如き所の體系者とは統一に藝術上の眞はその基礎を持つと云へよう。此の如き體系として藝術は常に個性的統一であり從つて個性意識に依りてのみ確定的に規定される。

——ヘクバプリアモスの女それは吾々に取りて何の關係がない。しかし「名前を更へよ、其物語は御前自身のことである。」

支那の統一と我對策

三宅雪嶺

支部は如何に治まるか、急に治まらず、治まるには隨分永い年數を要する。若し遠からず治まれば、一時治まつたのみで、更に亂れるにきまつてる。最後に何と定まるかと云ふことは、問題の當を失つて居る。最後と云ふことがあるべきでなく、それは何時でも一期間に過ぎない。昔から一治一亂と云ひ、治まれば亂れるのであつて、割合に治まる期間が永がかつたものゝ、亂れて容易に治まらなかつたこともある。

或る部分に秩序を維持しても、他の部分は六ケ敷く、統一する迄に幾代を經た。

日本で明治維新が成り、十年を經て西南戰役が起り、それで統一の實が擧り、尙ほ憲法發布迄十二年を經た。今こそ人口六七千萬と稱すれ、以前には三千萬と稱し、當時その狀態であつた。支那の人口は明白を缺き、少なく見積るものもあるけれど當年の日本に十倍すると云つて不可なく、何程內輪に見積つても、大丈夫六七倍にならう。一度統一を失つた支那が、再び統一する迄少なくとも幾十年を費さねばならぬ。で、支那が統一すべきものか、統一したり分裂したり、或期間分裂でつゞくべきか、あらかじめ定めて置くことが出來ない。

嘗つて、七國に分れ、三國に分れ、南北に分れたことがあり、今後も分れぬと限らぬ。分れて統一せぬでなく、强固な統一を遂げるに至るかも知れぬけれど、何時でも統一すべきものと決定して置くわけに行かぬ。

日本程の大きさでは、統一するのが普通であり、世界のどこでも統一して居り、分裂するのは一時の內亂に過ぎないとし、支那ほど大きくなると、必ず統一するものと受合ふことは出來ぬ。ローマ帝國が支那に劣らなかつた頃、一度分裂して再び前の如く統一せず、ナポレオン一世の大才を以つてしても出來なかつた。ビスマルクの帝國建設とて、日本と餘計違はぬ。

支那は天下であるか、國家であるか。天下として狹く、國家として廣く、その中間に居り、何れとも片付かぬのである。普通

の國家として統一を望んでも、事實となるかが疑はしい。それで、統一が望まれぬかと云へば、さうでもなく、今は昔と違ひ交通の便利が著しく進み、ロシヤが大きな土地で一國をつくり、米國も歐大陸からロシヤをとりのけた程で、それで統一してる。米國の統一は、交通の便利に由來すること多く、鐵道がなかつたならば、南北戰役で分裂したらう。普通に國家と稱するところと違つた事實が現はれ、英帝國の如き、世界陸地の五分の一を占め、順次分離して獨立するだらうとの豫想を裏切り、愈益々結合を密にし、太陽が領土に沒しない事實を證明してる。支那が普通の國家に比し、地が廣く、人が多いとて統一し得ないと定めることは出來ぬ。唯他の大きな國家では、交通の便利が著しく進み、支那ではさうゆかず、鐵道が六千哩足らず、豫定線數千哩が何時出來るかわからぬ。一九一二年一舉革命が出來上り、袁世凱氏が支那の大總統となり、孫文氏が鐵道の衝に當つたとき、十萬哩建設の計畫であつて、支那としてそれ位の鐵道なければ、統一の實を擧げるに苦しむ。十萬哩なら夢のやうな話でも、その夢を事實にせねば國家らしい國家にすることが出來ない。これまで建設した所に豫定線を增し、それを十倍するには、從來の政治狀態を變更せねばならぬ。その變改が今日に於いて不可能と見られて居り、その不可能なる間、統一の實が擧らず、統一せても一時の妥協で、直ぐ割據に逆戾りするであらう。

咸豐十年（一八六〇年）英佛軍が北京に攻め入つた。當時、英軍で陸軍中佐を務めて居たウオズレーは後に元帥となり、軍事上の一權威と仰がれたが、支那について語つて云ふやう、支那人は兵に適して居り、若し支那にナポレオン又はビスマルクが出でたならば、必ず世界第一の强國にならうと。支那が現に見るが如き狀態になつて居るのは、ナポレオン又はビスマルクの出でないが爲めか、ナポレオン又はビスマルクが出でたとて大に腕を振ひ得ないであらうか。いくらか目醒しい活動をし得るにしても、歐洲で活躍したやうなわけに行くまい。

ナポレオン當時、鐵道なく、汽船なくそれで西はイスパニヤを征服し、東は露のモスコを陷入れたのであつて、今に於て支那を統一するなんか造作もないことと云ひ、假りに造作もなく出來るとし、ナポレオンの沒した後にどうなるか、歐大陸は英傑の馬蹄に蹂躙されたけれど、後久しからずして、そのあとかたを認めることが出來なくなつた。ナポレオン自からその後に生れ出ては、革命の際に崛起したと同樣に行かなんだらう。ビスマルクの偉大なる事業とて、半世紀を經るか經ないのに破滅した。支那に不世出の英傑が現はれゝば、現在の混亂狀態を

平定するであらう、統一政府の下で續々事業を起し、世界を驚かすことがあらう、然かしそれで何時迄つゞくか。大に外債を起し、鐵及石炭を活用する迄に、非常な手段をめぐらされねばならぬ。或國には利權を讓らねばならず、大なる擔保をも定めねばならぬ。一二國とのみ協議して出來べきでなく、平穩に外交を處するのも容易でない。今の支那の狀態で、人力を以つて之をなし遂げ得るか。不世出の英傑なるものが現れた上でなくては證明し得ないが、十の八九覺束ないとせねばならぬのではないか。事に依つては、ナポレオン又はビスマルクが居り、機會を得ずして活躍し得ないのかも知れぬ。何せよ十年二十年で統一の實の擧がるを待ち設けることが出來ぬ。

支那は一般民衆が政治に與かり關せず、權力爭奪を演劇の如くに見て居るとしても、幾何か、勢の移り更りがあり、傳統的勢力が減滅し、新政府の基礎を築く迄にそれ相應の準備を要する。俄ごしらへで、立派な政府が出來上がらぬと云へぬが、一夜城同樣、間もなく、騷ぎの起るを脫れない。現に進行しつつある紛亂は何の變哲もなく、あり來りの型を辿つてるに過ぎない。必ずしも人物を得ないのでなく、支那全體として、未だ新政府の基礎を築く迄に用意して居らぬのであつて、相當の準備するには、それ相當の年數を經ねばならぬ。玉子の殼を出でて、俄にときをつくることは出來ぬ。鐵道が四通八達ならば、早く統一の準備をとゝのへ得ようが、日本に十倍する國柄で、日本より鐵道が短かくては急に間に合はぬ。それで統一の希望ないではなく、年數を經さへすれば、自づと統一の準備が整ひ、統一政府が體面を備へるであらう。準備として舊來の中央政府所在地に勢力あるのが、政權を握るかに發表し、これに對抗し得るものは承知せず、互に味方をいさない、何れが勝つか試さうとしてる。廣い土地に鐵道が少く、愈決戰と云ふ迄に少なからぬ時日を費し、決戰となつたとて、不利と見たものが退き、優勢と見たものが追駈けると云ふこと位である。

戰線が短ければ、直隸軍が疾風迅來の勢で、浙江軍を擊破し、轉じて奉天軍に向ふとか、浙江軍が猛烈に追擊し、直隸軍がこれを妨ぐに努むる時、奉天軍が急に背後より直隸軍を突くとか云ふことがあり得るが、行軍のみに幾日を潰し、どこに何兵が居るか、前以つて一々知れ渡つて居ては神出鬼沒の早業など演じ得べきでない。ナポレオンならば、アルプスを超えて伊太利の墺軍を擊破したやうなことがあると云ふも、敵が墺軍ならば手答あらう、兵であるか無いかわからぬやうな軍隊に對し、意外の邊から意外に突出したとて何程の効力もない。

日清戰役に、日本で退却の妙を示さうとしても、さう云ふ場

合がなく、殘念に感じたことがある。戰略戰術の妙をつくすには、相手も戰略戰術に達して居らねばならぬ。支那では實際に軍隊と軍隊が衝突するよりも、何れの軍隊が强いか、これを宣傳するの競爭があり、そこに議論の戰がないとせぬ。戰はずして勝つのが勝つの上なるものといふを文字通り心得てゐる。

ナポレオンも心づかない兵法と云へば云へ、支那人にはそれが大切である

今の紛亂は早晩片付くが、それで愈治つたのでなく、類似の亂が又起らう。充分に政府の基礎が定まるのは、一二代に望むべきものでないとして、日本で問題とするのは、如何に支那に對すべきかである。豐臣秀吉の明と戰つた頃は、事が甚だ簡單であるけれど、今はさう行かず、世界列國、就中英米が鵜の目鷹の目で見張つて居り、少しでも乘ずべき隙があれば、唯では措かぬとしてゐる。勝手なことをするのは早い方がよく、今は最早や遲く、それだけ世が進んだものとして、我慢せねばならぬ。

今は强い者勝ちの跡がないではないけれど、高い所から人が見張つてゐる中で手品を使つてゐるやうなものである。英國は勝手なことをしたでないか、米國も、正義人道と云へぬでないかと詰問しても過去は過去、今はそれ相應に道理づくで、進まねばならぬと云はれ、仲間はづれは寄つてたかつて責めたてるやうになつてゐる。從來日本は强國に抑へられ、受身の態度で無理もせず、むしろ氣の毒であると思はれたりした。支那と戰つたのも止むを得ぬ次第であり、三國干渉に出遭ひ、次いで露國と戰ふに及び、健氣な振舞と讃められた。然し世界第一の陸軍國と見られた露國に對抗する迄の事であつて、露に代つて滿蒙に力を伸ばし、ひいて支那に及ぼうと疑はれ、前と勢を異にした。日本が割合に調子がよいので、外交上に嫉妬深いアングロサクソンの英米は、日本を邪魔者扱ひにするに傾いた。日本では、他國とは國情を異にし、國力不似合の犧牲を拂つて、滿洲に一根據をつくり、何とか之を活用せずに居れぬ。ところで支那は統一せば、日本に復讐し得るが如く考ふるのがある。他から見れば復讐するよりも、協力する方、自國に有利なるのが明であつても、彼自から復讐の念を忘れることが出來ない

袁世凱氏は朝鮮に駐在したころより日本に對抗し來つた經歷があり、口に出さなくとも或る機會に目に物見せてやらうとする心持ちがあつた。帝位に即いて、權力を振ふを得ば、日本に面當をしてやらうと意氣込みが見えて居り、日本で是に快よからず、帝位につかれては困るとて、これに異議をさしはさんだ。帝制政治は、それで頓挫したものの、袁の系統に屬するものは、とかく日本を目の敵にする。日本を敵にするとて之を吹聽

することが、どうしても味方に受けがよく、日本を罵つて止まない。

然し、統一の見込つかぬ間は、日本の援助も借りたく、好意を表はすを吝しまない。誰が排日、誰が親日、豫めわかつてゐるやうであてにならず、排日の張本と見えたものも、さう云ふことは斷じて云ふたことがなく、日本と中華と兄弟國なるを信じて疑はない、と明言する。さうかと思へば、親日派と信じて居つたのが、しきりに排日熱を煽つたり、その時々で變ずるのであつて、一々眞に受けてゐるわけに行かぬ。眞に受ければ、意外のことで失望するやうになる。小村侯は支那の事情に通じて居り、それで慶親王を信じ、後に失望した。支那人も眞實ないではなく、信頼するに足ることあると同時、うかと信じて、飛んだ目に逢はされることがある。それでなくても、日本で解しがたいことが、いろ〳〵あり、決心の態度を示すとき、滿身に力を凝め、死を以つて事に當るを誓ひ、それで戰線に出で、勢が不利になれば、どこへ行つたか、知れなくなる。あの調子では、必ず責任を負ふであらう思へば、責任も何もあつたものでなく、三十六計逃ぐるに如くはないとなつてゐる。その邊の調子がわからず、浮かと乘り出して間違つたことが度々ある。必ず中心人物にならうと思ひ、これを援助せば、云甲斐なく逃げ出し、後に力を獲たものが、日本を嘲り、それ見たことかと云ふ風になる。逃げるのは必ず弱いとは限らず、支那で當前であつても、逃げると思はなんだものは、失望せずに居られぬ。當てがはづれると共に、損失を招くやうなことになる。其の邊で、手を燒いた例に乏しくない。

孫文氏は、前より關係があり、張作霖氏は、滿洲の關係があり、段祺瑞氏は、中央に重きをなした關係があり、日本で親しみを覺えるけれど、それでも曹大總統とか、呉佩孚氏とか、ともかくも中央政府を備へ、外交の交渉に當つては、面倒をひき起しはせぬか。そこは、手を燒いた覺えある外務當局者が、首を傾けてゐるところである。中途半端のことをしては、味方とするところに悅ばれず、敵とするところに恨をうける。顧維鈞氏がベルサイユ會議、ワシントン會議に僻をしたのも、恨むべき事情ありとして居る。種々の經緯(いきさつ)を知つて居て、滅多に手を出せぬ如く、滿蒙の既得權を犯されぬ限りで不干渉主義を唱へ、これに閉ぢ籠らうとする。

滿洲で血を流した陸軍側では、さう云ふことでは安じて居れず、日本の東洋に置ける位置を確立するに相當な事をせねばならぬとする。そこで、他から見れば、第二のプロイセンと云ふところがあり、軍國主義でたて通し、世界を敵にして顧みない

と思ふ。我國で獨逸帝國はまさか斃れまいと考へたのが誤り、四年半も奮闘し健闘し、擧句の果てか、無條件降服となつた。陸軍側で、腕の鳴るを覺えても、思切つて干渉することも出來ず、二重外交とか、三重外交とか、復雜になつて居る。

若し將來を見通し、必要に應じて着々列國と交渉し得るならば、今迄に、大に力を振ふ可き時であつても、それ程の自信あるものなく、あつても他人が承知しない。もつと成行を監視し、既得權を冒された時、愈進んで出ようと云ふところに居る。

そこで、其まゝ居るべきかと云ふに、政府關係者の腕前は先づ共邊のものであり、其れ以上に望を屬しても益がない。政府を離れ、日本國民としてなすべきことがないか。それは双方を調停し、統一を助けるにあらう。境を接して居り、昔から密接の關係ある支那の紛亂し、四億の民が難儀してるのを見兼ねるとし、双方の言分を聽き、理は理として、非は非とし、一致點を見出すに努むべきではないか。

今は日本で政府に關係なく、それで、相當の位置を占めて居る人が幾人も居る。首相を務めた側で、西園寺公、山本伯、清浦子と云ふところがあり、首相にならなくとも、後藤子など相應に希望がある。その他實力ある者は他に尠いとせぬ。民間から調停使が出發し、何よりも先き、支那の統一を計ることにしたならばどうか。さう云ふことで、支那の督軍等が聽くものかと云ふが、それは聽かぬかも知れぬ。日本で好意を以つて勸告すべきを勸告し、理非を明にすれば、後に道理ある方を助け、道理ない方を抑へ得ることになるであらう。利權問題では事が面倒になる。道理上で斷定すれば、世界列國の面前で事を運び得られる。

支那の國状は一朝一夕で定まるべきでなく、多くの年數を要する。日本に於ける當局の處置として、この邊のところに出づべきである。これが出來ぬとならば、内閣に下手をせぬやうに望むの外ない。

戰爭は支那の痼疾、利權獲得は日本の慢性病

安部磯雄

私の外交問題に對する知識は極めて貧弱なものである。殊に支那問題に對しては全くの門外漢であるから、今回起つた支那の動亂や、これに對する日本の對策といふか如きことに就て私の意見を述べるのは恰も盲人が象に觸はつて、これを批評するのと同じく、見當外れのことか少なくないだらうと思ふ。然し私の卑見に誤謬があるならば、讀者諸君に其批評を願ふとして、私は率直に自分の考へて居ることを述べて見たい。

私の意見に多少の根據を與へるものとして私は新聞紙上に現はれたものを少し引照することを必要と信ずる。

十月九日の「英文大阪毎日」には支那政府から芳澤公使に質問した左の如き意味のことが掲載されて居る。

『日本か張作霖將軍を援助することなきやとの懸念から支那政府は奉天軍に對し今日まで何等斷乎たる手段を取る事が出來なかつた。今や奉天軍は山海關方面に於て攻勢を取りつゝあるが故に我等は我等の政策を何れにか決すべき必要に迫られて居る。我等は一日も早く日本の態度と其政策に就き知らんことを望む。然らざれば我等は空しく好機會を失ふことになる。』

數日前某新聞紙に貴族院研究會か外務大臣に傳達するといふ對支意見か大略次のように掲げられてゐた。

第一　外務省か出淵局長の名を以て支那戰亂當初發表したる不干渉主義は機宜の處置と認む

第二　滿蒙に於ける日本の既得權利利益の擁護は自明の理であるが更に日本の利益擁護は滿蒙のみでないから東亞の大局から確乎たる國策を樹立するの必要あること

第三　列國を敵に廻し日本丈甘い汁を吸ふといふことは不能のことであるから列國と協調の上對支政策に萬全を期せられたきこと

序に對支問題に關する政友會の決議を次に紹介する。

決議

第一　支那動亂の推移は太平洋問題と關連し延いては帝國の位地を危殆ならしむるの懼れなしとせず政府は速に機宜の措置を講じ支那保全のため東洋の盟主たるの責任を全うすべし

第二　滿蒙に於ける我國特殊の地位に鑑み安寧秩序を維持する爲め帝國政府は斷乎たる態度を決するの必要あるを認む

某新聞に支那の政治家張繼の談として揭げられてゐたものに據れば『英米二國は間接に直隷軍を助けて居るから、此際日本は不干涉主義を棄て反直隷軍を援助すべし』といふのである。甚しきに至りては『日本は宜しく露國と提携して奉天軍や浙江軍を援助すべし、何となれば直隷軍の勝利は支那に於て專制政治の復活を意味するからである』と論じて居る支那人もある。

私共門外漢に取りても支那動亂の內容とこれに對する日本の態度とは粗想察が出來るではないかと思ふ。支那動亂は恰も定期的發作を生ずる癲癇病の如く一種の痼疾となつて居るのみでなく、致命的徵候をさへ現はして居る。今や彼等の中には支那全國を統一するだけの財力と軍隊を有する者がないから、直隷軍は英米の力に縋り、奉天軍は日本の力に賴らんとして居る。若し此形勢が永く繼續することになれば支那は結局列國管理の下に置かれるか、或は分割の悲運に逢ふより外あるまい。或は支那に於ける勢力爭ひのため列强の間に一大戰爭を惹き起すが如き不幸を見るかも知れぬ。

然し私は支那の態度に就てよりも日本の態度に就てより多くの不安を感ずる。日本政府は明白に不干涉主義を宣言して居るけれども、私共は何等の割引なしに其を信ずることが出來るであらうか。支那政府が芳澤公使に質問した日本政府と奉天軍との關係は全く一の邪推に過ぎないのであらうか。日本と張作霖との間に親密なる關係のあるといふことは今日に始まつたことではない。私共は可なり以前からこれを耳にして居る。張作霖の軍隊に日本軍人が參謀として活動して居ることや、東三省に最も多く日本の勢力が扶植されて居る事實などを考へる時、今度の動亂に對し日本政府が完全に不干涉主義を實行し得るや否やに就き私共は大に疑を懷かざるを得ないのである

今日でも我國には領土擴張の夢に醉ふて居る者が少なくない。若し機會さへあれば滿洲蒙古は勿論、西比利亞地方に於てさへ領土を得たいと希望して居る者があるらしい。此の如き帝國主義者に取つては我國の老大なる陸軍も海軍も必要欠くべからざるものになつて來る。要するに現在の軍備は國防といふよりも寧ろ侵掠のために價値がある。軍國主義は獨り軍閥によりてのみ維持されて居るのではない。國民の多數が尚ほ領土擴張

を歩みて居るがため、軍國主義は今日も依然として根强き勢力を有して居るのである。此の如き國民を代表して居る所の政府が果して支那の動亂に對し冷靜なる中立態度を維持することが出來るであらうか

如何に極端なる帝國主義者も今日の場合領土擴張說を露骨に宣傳するやうなことはあるまい。然し領土擴張は兎に角として何等かの機會に種々なる利權を獲得することを當然のことと考へて居る者は極めて多いように思はれる。私が貴族院研究會の申合はせとして引證したものゝ第三項に『列國を敵に廻し日本丈甘い汁を吸ふと云ふことは不能のことである。……』とあるが、これは餘りに露骨過ぎる語であつて、研究會の眞意を誤り傳へた文字であると信ずるけれども、今日まで我政府が機會ある每に汲々として利權を得たといふことは疑ふことの出來ぬ事實である。今度の動亂によりて我國の既得權が犯されぬよう我政府は充分に注意すべしとは研究會及び政友會等の希望であるらしいが、彼等は果して既得の利權を保護するだけで滿足するのであるか、或は更に進んで甘き汁をも吸はんと欲するのであるか、これが私共には最も懸念に堪へない問題である。

利權を獲得するといふことは强國が弱國に對して行ふので、弱國が强國から利權を得たといふ例を聞いたことがない。其結果利權獲得は强國が弱國を威壓して行ふことになるから、弱國に對しては大なる不利益となることがある。而して利權獲得の行はれる時は多く弱國が窮境に陷いつて居る場合であるから、一種の火事場泥棒であると云ふも誣言ではない。私共は支那に於ける列强の利權爭奪を見て、支那に對して無限の同情を感ずると同時に、列强の處置に對しては實に憤慨に堪へないのである。

然し我政府も支那に對しては可なり多く無理を通ふして來た。歐洲戰爭の際大隈內閣が支那政府に對して二十一個條の要求をしたことなどは何としても辯護の仕樣がない。私は度々外國人から『大隈ともあらう人が何故にあんなことをしたのだらう』といふ質問を受けて閉口したことがある。兎に角我國は强國といふことを恃み、支那政府を强制して多くの利權を獲得した。而して今や動亂のため既得の權利を侵害してはならぬといふ警告を支那政府に與へんとして居る。若し我國が最初から利權獲得といふような野心を懷かなかつたとすれば、支那の動亂に對して何等氣を揉む必要はなかつた筈である。

支那に對する日本の政策は我政府の聲明せんとして居るが如く絕對的不干涉主義でなくてはならぬ。若し不幸にして日本が間接直接に奉天軍を援助するやうなことがあれば、英米は政策

上必ず直隷軍を援助するに相違ない。これは支那のために大なる不幸であるのみならず、我國と英米との間に無益なる暗闘を生ずる虞れがある。若しこれが正義のための爭ならば尙ほ恕すべき點があるけれども、利權獲得競爭のため紛擾を來すことは國家として實に恥づべきことではないかと思ふ。此際日本政府が絶對不干涉主義を徹底せしむることは最も望ましきことであつて、これが事實に證明せらるれば、日支親善の實現に數歩を進めたものと言ふことが出來る。

若し列强にして眞に支那の平和を希望する程の眞意があるならば、先づ支那に於て彼等の獲得せる利權を放棄することが必要である。利權獲得は明に支那の主權を侵害するものであつて、支那に取りては甚しき侮辱であり、列强に取りては大なる恥辱である。のみならず屢起る支那の動亂もこれに起因して居るといふことが出來る。張作霖が東三省に最も多く利害關係を有する日本に親しまんとし、吳佩孚が長江地帶に利權を有して居る英國や米國に賴らんとして居るが如きは自然の勢であつて、支那の動亂を誘致するものは即ち此等利權獲得者であるといふも決して誣言ではあるまい。利權獲得といへば左程人々に惡感を與へないけれども、碎けて言へば甘い汁を吸ふことゝ同意義である。若しこれが個人の間に行はれるとすれば、何人も野卑なる行爲としてこれを擯斥するに相違なけれども、國際的道德觀念の幼稚なる今日に於ては斯る行爲が平氣で是認せられて居る。然し他人が悉く不正を働くから吾も不正を行ふて差支なしといふ道理はない。我國の支那に對する態度は飽く迄も眞面目でなくてはならぬ。

恐らくは日本人で日支親善の必要を認めぬものはあるまい。私も心から日支親善を希望して居る一人である。然し正直に言へば、私は今日のまゝで日支親善が實現されるものとは思はない。假に露國人が××××××××××××××××××××××××××××××、同時に日露親善の必要を說いたとするならば、私共はこれを以て大なる侮辱だと考へないだらうか。日本人の大多數は先づ露國人を××から追拂つた後にあらざれば、決して日露親善などといふことには耳を貸さないであらう。×××××××××××××××××××××××××××××を加へながら仲善く交際しやうぢやないかと言ふが如きもので、其不道理なる事は明かである。若し日本國民が飽くまで滿洲の利權に戀々たらば、日支親善の希望を全然棄てるまでのことだ。利權獲得と日支親善とは兩立するものではないことを考へなければならぬ。

然し世界の大局から見ても、我日本の考へから見ても、支那

を敵とすることは決して得策でない。若し支那が幸にして統一され、鞏固なる政府によりて支配されるやうになれば、物質的にも精神的にも目覺しき進歩をなすかも知れぬ。其時我等は日支貿易に依りて有無相通じ、互に大なる利益を得ることが出來る。支那國民の意志に反して利權を獲得するが如きは有害無益であるのみならず、道德上より見て大なる不義不正である。私共は將來對支政策を根本的に改善する必要を感ずる。

世界的平和を來たすためには豫め戰爭の誘因となるべきものを除去することが必要である。今日各國民の間に稍もすれば面倒を惹き起こし、反感を生ずる虞れあるものは移民、商品、及び資本の輸入である。私は移民及び商品の輸入より生ずる國際的反感に就て說明する時間を有しないから、單に資本の輸入だけに就て論じて見たい。資本が國際の形式によりて輸入される場合には殆んど何等の面倒をも惹き起さないけれども、資本が外人によりて輸入されるのみでなく外人自らによりて投資され且つ經營されることになれば、これが往々利權獲得といふ形式を取ることになり、私共が支那に於て見るが如き大なる弊害を生ずることになる。若し我國民にして眞面目に支那の幸福を謀る意志があるならば、列强を勸誘して、支那に於ける彼等の利權を放棄せしむるのが最も有効な方法でないかと思ふ。しかしこれを爲すには先づ自ら範を示す必要がある。

利權を放棄すると云ふことは無償でこれを支那に返還するの意味ではない。日本政府及び人民は南滿洲鐵道の爲めに約六億圓の資本を投じて居るのであるから、若しこれを支那に返還する場合には相當の賠償を要求すべきは無論である。今日直に放棄すると云ふても支那にこれを受取るだけの準備があるや否やも疑問であるから、何も時期の問題に就て明言する必要はあるまい。兎に角日本が利權放棄の決心さへすれば、支那人の反感を緩和することが出來ると同時に、英米諸國に反省せしむることにもなる。若し歐米諸國が飽く迄支那に於ける利權を維持せんと頑張るならば日本は將來これを國際聯盟の問題として提出するのも得策ではないかと思ふ。

前に述べたるが如く支那の動亂は間接に列强が其原因となつて居るのである。東三省に日本の勢力が扶植され、揚子江流域が英國の勢力範圍となつて居るといふことは支那のためには大なる不幸だ。奉天軍と直隸軍が相對峙して居るといふことも其裏面に日本と英米の勢力爭ひがあるといふことを暗示して居るのではないか。奉天軍と直隸軍とが列强の傀儡であると言はゞ、其は餘りに誇張であるかも知れないけれども、張作霖と吳佩孚が列强から多少の援助を受けて居ることは事實らしい。よ

し實質的の援助を受けて居ないにしても、少なくとも精神的の應援位は受けて居るものと信ぜられる。斯の如くして支那領土の各所に列強の勢力扶植を許す限り其猖獗たる動亂の發生を防止することは全く不可能であると言はねばならぬ。故に支那の動亂を根治するには列強が等しく罹患されて居る利權獲得病を撲滅するより外はない。

利權獲得といふことが、よし支那國民の感情を害することはないと假定しても、果して我國民に有利であるか否かに就ては慎重に考へなければならぬ。一例を擧げて言へば我國は撫順炭坑の採掘權を得て居るに拘はらず、これによりて我國民は何等の利益をも得て居ないではないか。撫順炭坑は採掘が容易であるため、これを廉價で販賣することが出來る。然しこれを內地に輸送することになれば忽ち內地の石炭業者を窮地に陷れることになるから、其輸入を差控へるか、或は內地と同一の價格を以て賣るより外はない。故に撫順炭坑によりて利益を得るものは資本家のみであつて、國民全體でないことが判る。これは單に一例に過ぎないけれども、私は凡ての利權に就て同一のことがいはれると信ずる。故に多くの人々によりて既に喝破されて居るが如く、支那に於ける利權獲得運動は全く列強の資本的帝國主義の競爭であると斷定すべきである。

日本をして東洋の盟主たらしむるといふ說も、日支親善に努力すべしといふ說も誠に結構であるけれども、日本が支那に於て利權を漁つて居る限り其處に大なる矛盾のあることを考へなければならぬ。利權獲得が斷念出來ないといふことであらば、私共は正直に東洋の盟主とか日支親善とかいふ看板を引込めたいものだ。

十三、九、十二

杉森孝次郎論

純眞思想家杉森君

土田杏村

純眞思想家杉森孝次郎氏は其の新著『社會進歩の純粹原則』の中で次のやうに言つて居る。

「純眞思想家は創造の人だ。社會は一創造體だが、宇宙に於ける創造的最大中心は、われらの經驗知の達する範圍内に於ては人間の社會だが、その社會に於いて、創造の最大中心を形成するものは純眞思想家だ。純眞思想家は、眞理愛の本能と衝動と達成力とに於いて、かれの社會に於ける殘餘の人々にすぐれてゐる。かれはかれの社會に於ける眞理愛の最發祥府であり、林であり、泉であり、中心である。その社會に於けるかれ以外の人々は、眞理愛の興味と方法とをかれから學ぶ。かれらは、かれを眞理愛の源泉地として、それに汲み、それによつてつひに灌漑される田野の如き位置にある。かれは、太陽系に於ける自照體としての太陽の如く、かれの社會に於ける殘部はそれに於ける被照體の如し。その殘部としての各被照體にも、多少の光りと熱が内保されてはゐるが、太陽をまつて、かれらの或るものはあるひは反照し、他の或るものにはあるひは生物や精神を生育しうる。」

みずからの性格、意欲、理想、歴史などを殘り無しに描く自畫像の制作は、誰れに取つても困難な爲事である。杉森氏の右の言葉は恐らくは彼が其の性格、意欲、理想、歴史など、即ち彼の全生活の中からみづから適切に精進の目標として選び、創り出した晶核であらうが、彼は殆ど完全に其の目標を達した。

わたくし達の社會と杉森氏との關係を観察すれば、彼は正しく其の所謂純眞思想家である。わたくしは杉森氏の從來公表せられた論作に大いなる感興と敬崇とを持つて、其等の大いなる部分を讀過して來たものであるが、其間に持つことの出來た觀察から彼の外貌を素描するよりは、彼の所謂純眞思想家の原則的定義を其儘彼の自畫像として示して置く方が、どれだけ時宜に適當して居るか知らない。

彼はまたかう言つて居る。

「純眞思想家は直接に眞理を愛する。殘餘の人々は純眞思想家を愛する。かれを權威として、卽ち間接に、眞理を愛する。」

有力なる諸種の社會思想雜誌の上で、毎月のやうに社會へ公表し、社會生活を分析し、評價し、乃至忠告する彼の論作に對する社會の敬愛の態度には、またじつに彼が此の言葉で言つた通りのものがある。彼は直接に眞理を愛する。そして社會の殘餘の人々は、彼を愛する、彼を通じて間接に、眞理を愛することが出來るであらう。

彼が雜誌の上に長大論作を公表した時に、わたくしはいつも若い青年特に學生達に、「彼の論作を讀んで見たか」と尋ねて見るが、殆ど言ひ合せた樣に、其の論作の始めから終りまでを讀み通ほしたものは無い。大抵はほんの拾ひ讀みをするか、或は其の論作の香氣だけを吸つて通り過ぎて居る。わたくしはまた其等の青年特に學生達に、「杉森氏の哲學乃至社會觀はいかなるものであるか」と尋ねて見るが、此れも亦言ひ合せた樣に、よく其れを理解して居るといふものは無い。彼は國民主義者、社會主義者、共產主義者、ギルヅマンなどの何れでも無いことだけを青年は知つて居るが、さて彼の立脚の本領が何處にあるかを知つて居る場合は甚だ少ないのである。其れにも拘らず、此等の青年の何れ一人として、杉森氏の思想並びに表現の風格を知ないことは無く、彼の動機、欲求、事業を敬愛し、尊崇して居る。わが杉森氏については、其の思想、表現のほんの香氣を吸つただけで、直ちに彼を社會の深層として、源泉として感覺することが出來る。まつたく杉森孝次郎は、わたくし達の社會に二人と無い。彼こそは眞に誇るべき風格の哲人である。

杉森氏の論作はいづれも屢々難解だと言はれる。また餘りに要約せられ過ぎてゐると言はれる。また餘りに多くの新語が捻出せられてゐると言はれる。此等の評語はいづれも外貌的には當つてゐるが、内深的には當つてゐない。およそいかなる思想家を理解するにも其れだけの「準備知識」は必要のものであり、其れはカントについてもマルクスに就ても言はれることであるが、獨創の思想家杉森孝次郎氏を理解するに、何等の準備

何誰も用意しないとすれば、其の論作の難解なるは當然である。彼のたつた一つの論作を孤立的に讀めば甚だ難解であるが、其の纏つた著作を一つ々々讀み通ほして見れば、彼の思想は豫想以上に理解の容易なもつた。彼の文章はまだ特に難解なものには屬しない。また却て說明がくどい位には思へても要約せられ過ぎては居ない。(例へば習性論の何の奇も無い準備的解明にさへ彼は熱心に二十三頁を費すことを避けない。)また其の新語といふものさへ、コンテキストを見れば容易に理解の出來るものであるし、然らざるものも彼は一度は何處かで其れの解明を試みて居るのである。其れと同時にわたくしが彼の論作の註釋者たる立場において解明して置きたいと思ふことは、かうした哲學的論作のつねとして、紙上に公表せられたものは、甚だ多くの誤植を含んでゐることである。彼が嘗てわたくしの論評の資料として、其上に誤植の訂正を加へた後提示してくれた一文の如きは、短いものであつたが四十七個所を修正して居た。勿論此れはもつとも甚だしい一例ではあらうが、其れと同樣の事が彼の思想に對する世の理解を妨げて居ることだけは疑へない。

理解の難易の點でいつもわたくしが彼と對照して興味あることに思つて居るのは長谷川如是閑氏であるが、杉森氏にあつては外貌は難澁であるが內深は平淡である。然るに長谷川氏にあつては外貌は平洒であるが內深は旋迭し、わたくし達の諒解を苦めるのである。

純眞思想家杉森氏は、いかなる場合にも社會的展望を忘れる人では無い。そして彼は其の展望を最も具體的に時論的形式にまで徹兵することを忘れない。哲學者としての彼の認識に直接經驗として、所與として、現はすものは、其の時論的整理を餘儀せしめられる。政治、經濟、家庭、教育、もつと適切に言へば、加藤內閣、奢侈關稅、勞働黨の勝利等々である。若しも「所與性の範疇」なるものを彼について求めるとすれば、其れはじつに時論の窓だ。だから自然科學の所謂自然律は、彼に取つては發明的機能を持たない習性に外ならず、價値意識または當爲意識は、發明的機能を注意の焦點に置き据ゑたかたちである。カントが、時、空の直觀形式と、因果、實體等の思考形式との認識主觀の固有窓を考へる時に、彼は「人殊にわかい人々は、戀愛せずには自己が成り立たないのだ」と言つて、「性慾及び戀愛は、わかい男女に於ける一とつの固有窓だ」とする。

杉森氏は在來の哲學、倫理學、政治學、經濟學、社會學の何れに對しても根本的の改革、再構成を要求して居るが、隨つて現代文化のすべての再評價、再原則化を要求して居るが、彼の

認識の窓に映じた、認識の創造が判斷した、其等の科學と文化との最大缺陷は社會盲である。彼は言ふ。「現代に於いて、正しい個人觀が持たれるために先づ滿たされねばならない至要條件の一は、疑ふ餘地さらになく、十分なる社會觀が持たれるためにある。現代文化の代表的通有不完全の一は、その意味に於いて、現代文化があまねく最も缺乏してゐるものの一は、したがつて、現代文化があまねく要求して獲得すべきものの一は、社會眼だ。」

此の立場に於て彼が現代哲學の社會盲を痛烈に非難したところに、わたくしは悉く同感である。「現代の認識論者は、例へば、好んで經驗を口にし、筆にする。現代の形而上學者は、例へば、好んで實在を口にし、筆にする。わたくしは、敢て現代の認識論者にたづねたい。政治、經濟、家庭、教育、例へばこれらは、經驗のうちか、そとか、または、經驗であるか、ないかと。わたくしはまた現代の形而上學者にむかつて、政治、經濟、家庭、教育等は、實在のうちか、そとか、それらは實在であるか、ないかを、機會があつたら徹底的に問ひただして見たい。」此の批評に堪へて本當の哲學者であることを、或は少くも本當の哲學者への努力を爲して居ることを、或は大いに讓つて本當の哲學者への要求を持つて居ることを自由に告白し得る所謂哲學者が、わが國におよそ幾人あるだらうか。恐らくは五指を屈するにも足るまい。杉森氏は其の一例にオイケン氏の多くの哲學的著作を通じて一の家族なる語を見出し得ないと言つて居るが、わが國の哲學者の著作に就ても、階級、戀愛、勞働、生産者などの語が幾つ見出されるであらうか。「現實には家庭問題のために腦漿を絞られながら、哲學に於いては、それこそ家庭の家の字にも言及しないことが、現代哲學の一般的方式だ。」またよし其等の哲學者が稀れに時務的發言をなしたとしても、其の認識の窓はいかに保守的な、事實の分析に於て偏僻した、價値の判斷に於て錯迷したものであるか。そして其等のまことの直接經驗、まことの實在についての時論的範疇を誤まり適用するやうな、することの方が、偉大なる哲學者だと考へて居る現代哲學者の社會盲を、わたくしは杉森氏とともに非難しやうと思ふ。

杉森氏に取つては、社會哲學者などいふ特別のけちな言葉は必要で無い、哲學が直ぐに社會哲學なのである。「哲學といへばそれは社會的生活經驗の本質と關係と價値とが第一に扱はれた知的努力である。」「現代に於ける方法論としての認識論が、社會的經驗、社會的實在、社會的價値を閑却して成り立たう筈はない。」此の見方に立てば、現在にありては、純眞の哲學者たる

興味と標度とを最も少なく持つものが最も偉大なる哲學者と呼ばれ、哲學界と稱する煩瑣神學者の人工的逃避世界が組織せられて居ると正視する事も出來よう。

現代の哲學に對し、此く痛烈な非難を發する杉森氏は、併しながら通俗社會問題研究者でもなければ、また通俗社會學者でも無い。依然として彼は純眞思想家だ。純眞哲學者だ。彼は言ふ。「從來の社會學は時論の間口を持たず、哲學の奥行を持たない」「純眞思想家の目的意識に於いては專ら眞がある。完全意識がある。」「深見だけでは獨斷と誤解され、全觀だけでは尨雜と錯認される可能がある。判斷の理由を、すなはち英語のいはゆるグラウンドを明示する能力及び努力を待つて、純眞思想家の提說と唱導は、かれの社會に於けるかれ以外のすべての人々から、その提說なり、唱道なりが眞價あるものである限り、贊同される必然可能を持つ。」其れが彼れのつねに「原則意識」なる語を使ふ究極理由である。たゞ其の原則は、彼の所謂「死語」「逃辭」であるに過ぎない「價値」「體驗」「自覺」などの神學者概念の上に創設せられたものでは無い。

わたくしは今與へられた紙幅の中で、現に開展せられて居る志向と事業とを焦點とし、純眞思想家杉森孝次郎氏の或る小的な素描を創つて見た。彼が建設した原則や社會批評やの內容的制作に就ては、わたくしは多少づつ彼に不同意を表明しなければならぬのであるが、少くも彼の基本的に取つた志向に對しては全然の同意を持つ。彼の事業が近來次第に古典的完成の壯觀を示して居る事をわたくしは一大快事と爲すものである。

學生時代の杉森君

白柳秀湖

私の杉森君と親しかつたのは、明治三十五六年頃のことであるから、隨分古い話だ。早稻田が大學の名乘りを揚げる直前のことで、二人は高等豫科といふので落合つた。

杉森君はその頃、白松といふ姓を名乘つて居た。今でも覺え

て居るが高等豫科の時代はみんな無邪氣で、快活でよく語合つた。早稲田の文科といふ一つの型に嵌らず、お互が向き〳〵の中學で育てられて來たまゝの姿で、ブツ突かつたのであるから。豫科の時代が一番おもしろかつた。

白松君、イヤ杉森君なども進んで人に話をしかけたり、自分を披露したり、會合の發起をしたり、茶目氣分を發揮したりしたのは、高等豫科の時代で、それが大學部に入つて坪内さんや金子さんの講義を聽くやうになると、まるで人が變つたやうに大人びてしまひ、己は己だといつたやうな氣分で教室の一隅に陣取る。其重苦しい空氣の中にも杉森君などはマア〳〵變り方の少い方で、始めから終まで快活な、氣持のよい人で通つた。その點で僕は今でも杉森君を忘れ得ぬ。

その頃、學生の中で筒袖の着ものを着て居るのは、杉森君唯一人であつた。紺絣の着ものに、紺絣の羽織、小倉の袴をキチンと穿いて、度の強い近眼鏡をかけ、短い尋常な羽織の紐を行儀よく結んくで居るのが、ひどく氣に入つた。

『文科の學生だつて演説は必要だ。君、一つ演説の會をやらうぢやないか。』と云つたやうなことを申込まれ、『宜しい、大贊成だ。』で學校の大講堂を借受け、加藤咄堂先生などを眞打に賴んで來て、盛に何か喋舌つたのも高等豫科の時代であつた。杉森君は決して小さいハムレツトではなかつた。ドン・キホーテと云つた拍子が可なりに濃厚であつた。私が今でも杉森君をなつかしむのは其ドン・キホーテの氣分である。

『君、僕のウチへ遊びに來たまへ。』といふのでハツキリとは覺えて居ぬが、何でも辨天町か矢來町か、アノ邊の下宿へつれて行かれたことがある。或は僕が押かけたのであつたかも知れぬ。杉森君はドン・キホーテだけに決して愚痴をこぼさず、身の上話などはしなかつたから、杉森君の身の上については今でも何も知らぬが、その下宿といふのは、杉森君のウチか、親類かで、何でもたゞの下宿ではなかつたと記憶する。

其時僕は杉森君に滔々と一時間あまり、何事かを聽かされた或は僕も何か聽かせたかは知らぬが、僕は何でも聽かされたことばかり記憶する。その話は『夢』の分類であつた。今から考へると夢のやうであるが、杉森君は例の手眞似で、口の足らぬ所を補ひながら盛に夢の分類をした。夢には斯ういふ種類と、斯ういふ種類があり、又斯ういふのもある。これはかういふ種類に入れてよいといふやうなわけで、盛に科學的の分類を試みて居た。

本を讀むばかりでなく、自分でものを考へるといふ力が、その時既によく現はれて居た。

それからまだある。さて夢の分類をしてしまつたが、僕の思激が足りなかつたのか何うか、杉森君はクルリとうしろを振り向くと、机の抽斗から古い雜誌を取り出して、『これを見たまへ、此所に僕の投書したのが載つて居る。』と云つて見せてくれた。それは高橋五郎といふ人の出して居る哲學雜誌であつたが、名前はハツキリと記憶せぬ。六號活字でピツタリと組んであつた。

杉森君は大得意に、それを讀むできかせてくれた。其末段には二三行高橋五郎さんの批評が附加へられて居た。その批評はひどく杉森君の頭腦を賞めたもので、斯見蓋し凡庸の器にあらず、他日必ず名をなすべきものであるといふ意味の一句で結ばれて居た。其末段の一句になると、杉森君聲の調子は落したが、ウンと力を入れて讀了ると眼鏡の底から僕の顔をチツト見た。その様子がホントに無邪氣で罪がなく、早稻田には稀らしい型であつた。其の頃の仲間には、却々鼻端の强いのが多く、坪内さん直系の純文藝思想で固まつて居た某君など、小説の批評をしてさて自己のことに及ぶと、よく聲を顫はせたものだ。さうした小さいハムレツトが肩を並べて居る間に、杉森君だけは全く型が違つて居た。自己を語つて少くも厭味がなく、深いことを話して居て對者に何等重苦しい感を起させぬ。杉森君の身上が其處にあつた。

それから揃へて散歩に出かけた。未だ早稻田へ足を踏み入れたばかりで、大久保方面の地理には明るくなかつたが、杉森君はよくアノ邊のことを知つて居た。其頃大久保にはまだ植木屋が並んで居て滿天星(どうだん)の垣根が美しく色づいて居たことを覺えて居る。何處を何う通つたのか、西向天神の谷には黄ばんだ稻の穗が重く垂れて、楓の紅葉が夕日に映えて居た。

杉森君は政治のこともよく分つて居た。其頃、僕が議會政治といふものの効果を疑つた論文を書いて杉森君に見せると　杉森君は一讀して、弊害は君のいふ通りだが、併し議會政治にはかういふ長所もあるから、一概には云はれぬよと至極尤もな、穩健な意見を加へてくれた。その意見は憲法の講義などで實々聽かされて居ることで、敢て杉森君を俟つまでもなかつたが、雜誌が小さい新聞型であつた爲に、すべてを盡すことが出來ず、さういふ點にまで論及して居なかつた事は事實である。ホンの立話であつたが、僕は其時杉森君の此批評をきいて、感心に政治のこともよく分つて居ると思つた。

之は杉森君に對しては或は失禮な申分であり、又、今日の文科の人には異様に聞こえるかも知れぬが、その頃の早稻田の文科の空氣といふものは、全く純文藝の思想で凝り固まり、桁も

早稻田の文科に籍を置きながら、政治を論じたり、社會制度を批評したりして、さういふものを文藝若くは文藝批評の中に取入れようとするやうなものは、許すべからざる叛逆の徒として睨まれた傾があり、政治のことなどを口にするものは殆んどなかつたと云つて好い。今日は早稻田出身の名高い文藝家が社會主義の團體に加入したり、メーデーの行列に參加したりして居るのであるから卒然として之をいふと、嘘のやうであるが、僕達が高等豫科に居た頃の文壇は、鏡花、風葉の馳驅時代であつたといふ一事を以つて、萬事を說明することが出來ると思ふ。明治三十五六年頃は、紅葉が死に、露伴が隱れて花袋が未だ甘い〳〵少女の戀を描いて居た時代である。文壇の花形は何んと云つても鏡花と、風葉とであつた。學問の獨立、思想の自由と云つた名に憧れて早稻田に飛込んで行つた僕は、間もなく、文科の空氣に恐ろしい狹隘を感ずるやうになつた。こんな筈ではなかつた。こんな積りではなかつたと氣がついて周圍を見廻した時はホントにさみしかつた。學校といふものに對する煩悶がその頃から起つて來た。

忘れもせぬ。其頃僕が或る大商店の番頭から徒弟制度の秘密をきいて少からず感動し、一篇の小說らしいものを作つた。するとこれを讀んだ某君が、『君！何故アンナものを書くか、アンナものを書くなら論文にして、新聞にでも出し給へ、小說の形で發表してはいかんよ。』眞向から一本やられた。全く仰せの通りだ。僕はこれをきいた時に『君！何故文科などへ這入つて來たのか、政治を論じたり、經濟を說いたりするなら政治科へ行き給へ。文科に居て政治科の人のするやうなことをしてはいかんよ』と云はれたと。同じやうに感じた。御尤もだ。其通りだ。併し世の中には迷子といふものがある。早稻田の文科ともあらうものが、迷子の一人や二人置いてくれてもよいではないか。僕はこんなことを思つたりした。中村孤月君などは、露骨に云つた。『君！××先生と來たらソリヤ神經過敏だからねえ。君のやうな人は大嫌ひでテンデ玄關拂ひだ。』僕はこれを何度聽かされたか分らない。その頃、××先生の御機嫌を損じては文壇の飯は食へぬとさへ云はれたものだ。その點からも僕は寂しかつた。心細かつた。

此寂しい眼、心細い眼で同級の人を見廻した時、運動場の隅で、コツソリ僕と同じ傾向の書物を讀んで居た人が唯一人あつた御迷惑かも知らぬがそれを素破拔くと、今『東京日日』に納まつて居る島崎新太郎君である。之は恐らく世間の人の意外とする所であらう。僕は始から終まで、杉森君の人となりを懷しく思つて居たが、思想の上ではより多く島崎君と共鳴したもの

である。島崎君は學校を卒業するとゴソ〳〵何處かへ姿をかくしたが、今では『東京日日』で押しも押されもせぬ地位に納まつて居る。

要するに僕は學校でモウ少し茶目がしたかつたのだ。併し皆が早くから小さいハムレットになつてしまつて居て、茶目を許して呉れず、茶目の對手になつて呉れるものがない。其間にあつて杉森君だけは大學部へ進んでからも何處かに茶目らしい氣分を存して居た。それが僕にはひどくなつかしいものに思はれた。

僕は倦れに倦れて規律正しい學校生活に荒んでしまつた。或る教師の時間など、戸口までは行つて見るが、長く休んで居て皆に顔を見られるのが辛く、引かへしては圖書館に這入つてしまつた。此次からは出よう、此次からは出ようと思ふが出られない。そんなことで、杉森君とも追々に話す機會が少くなつてしまつたが、杉森君の人となりは今考へても心持が好い。

僕の錯感であつたら御免を蒙るが、高等豫科の時代、杉森君は確か一度本郷曙町の僕の厄介になつて居た家を訪ねて呉れたと記憶する。之は杉森君でなく、或は他の人であつたかとも思ふが、何でも早稻田から二里もある遠い所を態々來て呉れたのに、其頃の僕の體に自由がなく、甚だアッケないお別れをした。だから僕は平生僕の不自由な境遇を包まず、隠さず、打明けて置いたのにと、ひどく氣の毒な思ひをしたことだけハッキリ覺えて居る。之は杉森君でなく、他の人であつたかも知れないが文藝方面の人でなかつたことだけは確かである。

杉森君は或る事物に對する概念の内容をハッキリさせようとする爲に、それを表はす語に非常に苦心をし、その爲に何でもないことをひどく六つかしく云ふ癖がある。哲學をやつた人には多少とも此癖があるが、杉森君は特に甚しい。之は學生時代からであつたが、金子馬治さんなどの影響も餘程あらう。概念の内容をハッキリさせる爲に多く新しい語を造る所など、多少とも建部さんあたり影響もあるのではないか。それにしても杉森君の造語が、多く漢字三つから成立つて居るのはチョット面白い癖だ。僕は杉森君の文章をよく讀むが、一般讀者がよく之を讀むと思つて感心する。

杉森君のやうな物の言振りをする人で、僕の知つて居るのは金子馬治さんと、花井卓藏さんだ。皆偉い人には違ひない。併し人柄はトント違ふ。杉森君の身上は何と云つてもアノ人柄である。

杉森君はもと學者になれといふ何人かの意志に基いて獨逸語を勉强したのだといふことを當時誰からかきいて居た。早稻田

の文科で吾々が第二外國語として獨逸語を始めた時には、モウ一通りの本はスラ／＼と讀めて居た。それで、英語も獨逸語も學校に居る時から素晴らしくよく出來た。學者になるべく養成されたのを、斷然哲學に向つて猛進するといふにつけては、餘程の自信があつたものに違ひない。それは『夢』の分類を高橋五郎さんの哲學雜誌に投書して、高橋さんから激賞されて居たことによつても知られる。當時自分の身の上にもそれに似た問題があつてよく覺えて居る。杉森君の家は其後間もなく前の下宿屋から、坂町邊へ引越して小賣店をやつて居た。白松から杉森と改姓したのはその頃であつた。

要するに僕が杉森君と親しんだのは、白松時代である。僕は今でも杉森君のことを、白松々々と云つて、友人に修正される。それほどに白松といふ名が僕には印象深い。此原稿にも何度白松とかいて消したか知れぬ。編輯者がそれを證明して呉れよう。

杉森君が外國語の論文をかいて、外國人にほめられずともよい。僕には學生時代の白松君で値打は十分だ。僕はいひたい。『アレは昔から秀れた人でしたよ。外國語の論文といふことを背景にしなければ杉森君の値打を認めることの出來ぬ世間の淺はかさ！杉森君は外國へ行く前可なり長く早稻田文學に書いて居たのです。あなたは、あなたはそれを御存じないのですか。』

創造的思索家

出井盛之

わたくしは亞米利加に於ける、わたくしの最後の學生々活の夏一九二〇年を、ウヰスコンシン州のマヂソン市で送つた。マヂソン市は、かのウヰスコンシン大學の所在地で、廣いカンパスの中に建てられた大學の建物と、これに遠く相應じてたてられた、善美を極めた大理石造りの州廳とが、市の中心となつて居るので、この都會の空氣は、學問的であり、政治的であつて商工都

市のやうな静寂と安寧とを見ることはできないが、どこかに落ちつきのある。上品な州首府である。一名を、「四湖の市」と呼ばれる處であるが、市を圍む四つの湖水は、盛夏の日に絶えず涼風を注ぐので、市民はさまで堪え難き炎熱を經驗せずにすんで居る。わたくしはこゝに二十日ほど滯在して市俄古から運んで來た疲れた身體を休めた。その滯留の最初數日間、わたくしは、わたくしの一人の親友と共に、ウヰスコンシン大學の教授エム・シー・オツト博士の家庭に客となつて手厚いもてなしを受けた。オツト教授こそ、わが杉森孝次郎氏の The Theory of Moral Empire を、米國の大學に於て始めて、教科書として用ゐた學者である。

オツト教授は獨逸人系の米國生れで、ウヰスコンシン大學の出身であるけれども、獨逸の大學へも行つて學ばれた人である。若い夫人はウエールス人系で、大戰爭が熄んで間もない當時のことゝて、この英獨結合の家庭の會話は可成面白いものであつた。オツト教授の講座は哲學と論理學とであるが、頭腦明晰のこの新進學者は、殊に論理學を得意としてゐるらしい。わたしどもの寢た二階の部屋には、この學問に關する書物が一ぱいあつた。堅くるしい學問を専門として居るけれども、オツト先生は極めて氣輕で、磊落であつた。朝は早く起きては乳を買ひに出掛けて、わたくしどもに飲ませてくれた。晩食後はいつも教授は自分でセロを彈いた。また無邪氣に歌を歌つて興ずることもあつた。遠慮のない愉快な、この家庭には若い男女の學生や、卒業生などがよく集まつて來た。彼等はよく論じた、時事問題や藝術や哲學に就いて。我が國の多くの人々は、亞米利加の都會と云へば、ガソリン臭い空氣の中に、無慈悲に利己のみを追ふ徒輩共がうよ〳〵して居る處だと考へて居るだらう。それも無理もない。けれどもそんな處許りで無いことは確だ。

オツト教授の家にある夜集つた一人の青年は、わたくしにこんなことを言つた「僕等は教授スギモリの本を讀んで、非常に興味を感じたのだ。そうしてもつとスギモリ氏の書いたものを讀みたいんだ。君は近く日本に歸へるんだらう。歸つて英文の論文があつたら是非送つてくれ給へ、若し英文のものがなかつたら飜譯してね！」。わたくしは日本へ歸つて滿四箇年を全く無事に過ごして了つた。その間に彼等――マヂソンの湖畔で會つた米國青年――のスギモリ氏の著作に對する讀書欲は、餓えに餓えて、今頃までにはとう〳〵擱れ切つて了つたのではないかと恐れて居る。

我國と米國との間には、非常に複雜した問題が蟠つて居る。その解決は容易の業ではない。けれども人類の幸福のために、いろ〳〵の、そうしてあらゆる努力が惜しまるべき性質のもの

ではない。執らるべき諸種の手段の中、只今實行を切實に必要とせられて居るのは、我國の智識階級を眞に代表する人物を、彼岸に送りて、かの地の智識階級に接觸せしむることである。傳へ聞くところによれば、米國具眼の識者は、斯くの如き企の起らんことを待ち望みつゝありといふ。この實行可能性を多分に包有せられて居る希望が、もし實現せられるとしたならば、わたくしは、米國の學者と青年とに依つて慕はれて居る杉森孝次郎氏に、最も適當なる我國が派遣すべき代表者を見出すことを得ると思ふ。

××××

早稻田大學の教授で、大學の圖書館から書物を借り出して居ないものは、まア稀れであらう。大いていの教授連は澤山の書籍の貸出しを受けて勉強して居る。多くの人の場合、借り出しの數量が多過ぎるのと、期間を長くするので、諸方面から苦情が起るといふ有様である。しかるに杉森教授は少しも大學圖書館の便宜を利用して居られない。杉森さんのやうな勉强家が圖書館に足を踏み入れないなんて、世間の人々には不思議に聞える話しであらう。けれどもこれは正眞正銘の事實だ。試みに貸出し係の石井老人にたづねてみた、老人曰く「杉森さんは南山時代にはよく圖書館へ來て、一抱へも書物を持つて行くことが**よくありましたが、この頃はさつぱりお見えになりません、洋**行から歸へられて後、何かの用事で一度來られた切り、お出でになりません」。

杉森先生の讀破された書物を開くと、各頁にアンダーラインが引かれ、其の餘白には處狭しとまでに、批評と感想が書かれて居る。いつかわたくしに、自分は他人から借りて書物を讀まない事にして居ると語られたと記憶して居る。あのやうに汚されては、貸した方は全く迷惑だ。だから教授は圖書館からも、他人からも一切借りることなしに私有主義をまもられて居る。ひとの所有で、讀みたい書物があつた時には、直ぐ手帳を出して、著者書名發行所を控へられる、勿論早速に注文して取り寄せられるためだ。

我國の學者のなかには、多讀病に罹つて居るものが尠なくない。この病氣の一般的症狀は、先づ諸外國の書籍を、できるだけ廣い範圍に於て涉獵して、著作や論文に各國語の著作を引用すべく多大の努力をなすことである。そのために諸外國語の習得に永い歳月を費すを例とするが、一石二鳥を殺し得ざるの憾を殘すものが多い。次には高價なる電報料を支拂ふてまで、外國より新刊書をできるだけ早く取り寄せ、我國の誰より早く該書物を手に入れたことに無限の喜悅を感ずることである。なほ

病が昂進すれば、患者は徒に東西古今の書籍を蒐集するに熱中して、その蔵書の部數を誇り、書目整理のために分類カード作製に忙殺せらるゝに至るから、書物の內容の如きは全く顧られず、眼を通すのは漸く背文字位にとゞまる。

我國の學風は阿部仲麿、藤原清倜時代から今日に至るまで、他力主義である。我國で學問するといふことは、即ち外國の學問を習ふといふ意義に解せられた。われ／＼自身の生活と生活原則に就いて討究することを、曾て學問といふ範疇に入れて居つたかどうかさへ、甚だ怪しい。從つていつの時代に於ても、わが國の學者のなしたことは「涉獵」と「祖述」に限られて居つた。今日のわが學界がこの域から脫れて居るとは稱し難い。否、却つて其の弊に、深く陷つて居るのではないかと思はしめられる。

目下なにが我國に於て、最も憂慮すべき狀態にあるかといふならば、それは國民が消費に於て贅澤であるといふことでもなければ、また輸出貿易の不振その他の原因によりて國價が下落したといふことでもない。または普通選擧が行はれて居らないで立憲政治が半途であるといふが如きことでもない。たしかにそれは、國民があるフイロソフヰー、ある原則を持つて居ないといふ事實である。現內閣は贅澤稅率と敎育に對する壓迫とによつて、國民の慾望滿足の撰擇自由に極端なる干涉を加へ、非民主々義的政治を行ひつゝあるに拘らず、他面に於ては民主々義的精神に基礎を置いた、普選を實施しやうとする處に、何等の矛盾をも感知して居らないらしい。また現內閣員諸公中には勤儉主義を資本增加の根本として、主張せられて居るといふよりは、ストイツク的倫理原則として、實踐躬行を國民に慂めて居ると、思惟すべき筋が充分あるが、一方彼方は盛んに快樂主義的資本主義を謳歌しつゝあるのであつて、其の間に於ける原則的矛盾撞着には一向平氣に構えて居られる。わが國民の經濟生活にも、政治生活にも、原則意識は少しも發達して居ない。これはわが國民が皮相的であつて、沈思することなく、散漫な讀書より得た、模倣的智識に滿足するといふことに起因して居るものと觀察するのが至當であらう。

杉森敎授の論文は難解だと誰れもいふ。それはスギモリニークと稱せらるべき、一種特別な語法が用ゐられて居るが爲である。我が國語は貧弱なヴオキヤブラリーを有するのみであるが故に、それが補はれるのは當然である。敎授の論文には、些の衒學がない。放膽、雄勁の文は精練された彼の思索を直截に表現して居るのだ。我が社會が、頻りに出現を要求して居るのは、敎授の如く、純眞の眞理愛に靈感された、原則制作の思想家で

ある。

× × × ×

すべての學説は、人格の所產である。學問が翻譯的模倣より生れないことは前に述べたが、それはまた決して、單なる事實の觀察にのみよりて、自働的に發達するものではない。學問の內容としては、もとより事實に關しての調査——事實の類聚、分類、實驗など——は極めて大切なことには相違ない。けれども事實の觀察は學問の一小部分に過ぎない。學問の大部分は、事實の解説と豫言の機能を有する學説より成るものである。しかし、事實の觀測は、凡庸の徒もよくする處であるが、學説の發見は天才的人格によつてのみ完成せられるものである。

例へば、「林檎が木から落ちる」といふことは正確な事實觀測による命題であつて、法則と稱せられて然るべきものである。ニユウトンが生れる以前に於ても、勿論無數の林檎は地に落ちた。けれども天才ニユウトンが現れるまで、林檎の落下の法則は前者引力の學説を何人の頭腦にも閃かさなかつた。法則は現在事實の説明に過ぎない、時としては容易に見出し難き形式に在るとするも。之れに反して學説は、强烈な、イマヂネーチブな、思索力を有する發見者それ自身より離れて、孤立的に存在するものではない。

わたしは學問は、人格の產物であると堅く信ずる。これは自然科學について、社會科學についても、少しも變りはない。ゲーテの詩や、ベエートホーフェンの音樂が、彼等のものであるが如く、カントやアダム、スミスやアインスタインの學理は、みなまた彼等の人格の輝きである。藝術と科學とが本質的に相異つたものであるとは、わたくしにはどうしても考へられない。

杉森氏の風貌が、丈こそ低かれ、男性的の魅力を有して居ることに、會話の言々句々に、至誠の情を溢れさせて居ることは氏に接するものが必ず得る第一印象であらう。杉森教授が學者としての最大のアトラクチブネスは、教授の人格に詩人的要素が多量にあることである。幻想を知らない冷靜一天張の學者には、藝術は勿論科學も培はれない。教授の論文に溢る詩的風韻こそ、學者として最も尊い天分の豐富なることを表現して居るものである。わたくしが切に教授の自愛加餐を祈る所以は、この得難き天稟に敬慕する餘りである。

野上彌生著

海神丸

◇定價壹圓參拾錢
◇送料十五錢

新刊

生に對する人間の恐ろしき執着を語る「海神丸」。生命の芽を貞淑の名によりて押へつゝある家庭の淑女の惱ましさと淋しさを寫せる「多津子」。借家人の悲哀と家主の困惑とを捉え來りて現代社會制度の不合理を暗示する「所有」の三篇。何れも創作壇の名星野上女史が心をこめた名作をあつむ。

東京市芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

内外財政經濟時評

支那動亂と對支借款

我國の從來の對支借款なるものは、論者が、之を政治借款と經濟借款とに分けるけれども、所謂經濟借款なるものの中にも、其の貸金の支途が事實經濟上の目的に用ひられたのであるが、どうか疑はしいものが少くない、所謂政治借款の中には此の種類に屬するものが少くないやうである。而して斯くの如き政治借款又は經濟借款をなした日本の政治家又は實業家の動機は之に依て支那に於て利權を得んとし、又は勢力を扶殖せんとするに在つた。日本民族が太平洋上粟散の島嶼に國を建てゝ、人口は多く面積狹く原料品に乏しく、企業に足らざる状態であるから、隣邦支那大陸に於て利權を得、勢力を扶殖する爲に支那の官民に金を貸さうとするのは國策の上に於て必しも無謀の事とはいふことが出來ないかもしれぬ。それも亦愛國の至誠から來ることと推察する、然し乍ら既に利權を得若くは勢力を扶殖せんが爲に貸す金である、決して利殖を目的とする貸金ではない、其の利息若くは元金の取れないのは寧ろ當然の話であつて、それが取れると思つてる方が間違いであると言つても、必しも過言ではないと信ずる。たとひ元利金は取れないでも利權を得、若くは勢力を扶殖し得たならば、それで對支借款の目的を達し得たのである。金を貸した銀行へは政府の貸金は困つて居るかも知れないが、借款を實行した政治家の目的は達せられたのである。然し乍ら若し元利金も取れず、利權も得られず、勢力も扶殖せられずとしたならば、何の爲に對支借款を爲すや全く了解に苦むのである。

未曾有の饑饉に襲はれて餓死する生靈を救ふ爲に金を貸すならば、利權は得られず、勢力は扶殖せられずとも、人道上の意義はある。對支借款が塗炭の苦にある支那四億の民衆の生活を安易ならしめる爲に使はれるならば、人道の上に照らしても、人類愛の上から見ても、意義のあることである、たとひ日本の爲に何等の利益がなくとも、悦むべき爲である。然るに若し隣國の內亂に於ける一方の黨派を助ける爲に、金を貸すといふのであつたならば、それは悲むべき行爲である、斯の如く觀じ來るといふと今回の支那の動亂は日本の政治家、實業家に對して恐るべき話題を提供して居る。

今回の動亂に於て奉天軍と浙江軍と廣東政府と天津に蟠居して居る段祺瑞との間に一脈相通ずる所のあるのは疑のない事實であつて、江蘇軍と直隷軍との間に連絡あるのは勿論のことである。從て我國内に奉天軍乃至浙江軍を助けやうとする人士の少くないことは蔽ひ難い事實である。而して直隷軍と奉軍との勝敗の分れる所、戰爭の勝敗ではなくして寧ろ直隷派の内部に内輪割れの起るや否やに在ると言はれる。所謂直隷派の中でも馮玉祥の一派は平常吳佩孚の專横を面白からず思つて居る。若し天津に在る段祺瑞が直隷派の內訌を醸すことに成功したならば、直隷軍の成功は出來ないと言はれて居る。而して其の內紛を生ぜしめ得るものは唯金の力であると言ふ說がある。

江蘇軍の兵力三萬一千に對し浙江軍の兵力

三萬六千、略相匹敵して居る、唯最近に於て浙江軍は浙江省外に出て吳淞、上海、松江の線を守り、形勢剛非なるが如き觀があるけれども、之を南北相呼應して居る奉天軍の意氣込は誠に素晴らしいものがあるから、必しも反直軍の爲に悲觀するには當らないのである。然るに我國の所謂國士の内には若し直隷軍が決定的勝利を占めたならば、滿洲に於ける我國の既得權に影響を及ぼすであらうと說くものもある。直隷派の外交總長顧維鈞は自ら Wellington Koo と稱する程の親米派であると心配する人もある。其他幾多之に類似したやうな事柄から、暗々裡に所謂不干涉政策に反對する空氣が可成り濃厚である。

私は人道の上から見、又世界平和の上から考へて、此の機會は實に日本民族の三思三省すべき時であると思ふ。若し今日本民族が直隷派若くは反直派の何れかに援助を與へるとしたならば——兵器彈藥等の援助は本篇に於て論ずる限ではないが——金錢上の援助を與へることがあつたならば、それは實に恐るべき政策であると私は確信する。

露西亞の大飢饉を救濟する金を惜んだ日本である、墺太利の經濟復興公債に參加しなかつた日本である、獨逸の八億外債に參加を拒絕せんとする日本である。その日本が支那の動亂に際して反直派又は直隷派に財政上の援助を與へるといふのは途方もない話である。

或は一部の論者は唯今反直派に財政上の援助を與へて置けば、其の成功した曉には日本は新なる利權を得られるであらう、少くとも大に勢力を扶殖することが出來るであらうといふかもしれない、しかし若し成功しなかつたならば如何であるか、貸されたる金は唯砲丸となり彈藥となつて雲散霧消するのみである。私は左樣に無益に費消せられる金を惜む、それを惜むのは日本の爲に惜むのみではない、世界人類全般の爲に惜むのである。世界には此の金を必要とする幾多の人類が存在して居る。

或は又論者はいふかもしれない、日本は曾て歐洲大戰に當て聯合國側に加擔して、三億の金を露西亞に貸し、六億の金を出兵費として西比利亞の荒野に捨てたではないか、一千萬や二千萬の金を直隷軍の爲に又は反直軍の爲に貸すのは少しも不都合はないと。私は玆に歐洲戰爭と今回の支那の動亂とを比較研究する時間と紙數の餘裕を持たない。しかし歐洲戰爭は墺國皇太子の暗殺に端を發したけれども、歐洲戰爭の核心を成したものは獨佛民族の爭鬪である。獨逸皇帝の白耳義中立蹂躙乃至其の帝國主義若くは世界政策に對する聯合各國の義憤であつた。今回の支那動亂は本年五月福建の北部に占據して居た臧致平及楊化昭の軍が孫傳芳に逐はれ、浙江に入つて盧永祥に歸服し、盧は之を參謀長及警防司令に任命したことに端を發する。即ち吳佩孚は齊燮元と共に其の行爲を責め福建避難軍の武裝解除を要求したけれども盧永祥は斷然之を拒絕したのに端を發する。尤も其の奧には矢張り吳佩孚の所謂武力統一政策が根本の禍因をなして居るものと謂はねばならぬ。然し乍ら之に對する張作霖の挑戰の動機は必しも支那の平和を祈念する一心から出て居るものと謂ふことが出來ないと思ふ。

若し直隷派は所謂武力統一主義を標榜して支那大陸を戰亂の巷と化さうとして居る故に之に反對し、張作霖、盧永祥、孫文等は支那大陸に平和を齎さうとして居る故に之に金錢上の援助を與へるといふのであるならば、其の前提に於て誤あるとしても動機は之を責むべきではない。然し乍ら若し張作霖を援助して置けば其の成功した曉に於て大なる利權を得ることが出來る故に之を援助するといふのであれば、其の動機は極めて卑劣なるもので

あると私は信ずる。恰も國々の總選擧に當つて在野黨が勝利を得たならば、其の政權を握つた曉に利權を要求しようといふので、或る政商が在野黨に選擧費を提供すると同様であつて、極めて陋劣なる心意と謂はねばならぬ。

玆に又或る一部の論者は米國が直隷派に對して財政上の援助を與へるであらう故に、我國は反直軍に對して財政上の援助を與へなければならぬと論ずるものがある。上海、京邊に駐在する米國外交官が直隷派に有利な運動をして居るといふことは或る一部の人の傳へる所であるが、私はそれを信じない、たとひ事實であると假定してもそれは米國中央政府の意思ではない、方針ではない。況んや米國の金融業者、今八億金馬克獨逸債款の成立に必死の努力を拂つて居る米國の金融業者が直隷派の爲に金錢上の援助を與へるといふことは斷じてないと確信する。たとひそれが萬一事實であると假定しても、それ故に日本は反直軍に財政上の援助を與へなければならぬといふ結論はどうしても出て來ない。

米國が直隷派に財政上の援助を與へる故に——それは全く假空の想像であるが——日本は反直派に金錢上の後援を與へねばならぬといふのは、米國を敵としようといふ考である。

若し米國を敵としようといふ考であれば、何も支那の動亂をだしに使つて、張作霖や盧永祥の蔭に隱れて米國と喧嘩をする必要はない。移民問題に就いて米國の態度が不都合であるならば、堂々米國政府に向つて抗議を申込むべきである。何も支那の動亂を道具に使ふ必要はない。

若し又英米其他の列强が今回の動亂の機會として、支那に於て利權を得んとし、或は支那に不利なる政策を執ることありと假定すれば、日本は正々堂々として此等の國に對して抗議を申込むべきであつて、決して直隷派又は反直派の一方に援助を與へる理由とはならないのである。

之を要するに、今回の支那動亂に際し、直隷派又は反直派の何れかに日本の政府又は實業家が金錢上の援助を與へることは、所謂日本民族の大陸政策即利權獲得策から考へても何等得たものでないのみならず、人道上若くは世界平和の見地からすれば極めて不當なる政策であり、殊に米國が直隷派に對する關係を顧慮して反直派を援ふべしとなすが如きは、殆んど兒戲に類する論であることを確信し、日本民族が此の非常の時機に際し、克く其の方策を誤るなからんことを希望する。

八億金馬克の獨逸外債の發行

倫敦會議の議定した事項、之を正確に云へば倫敦會議が實施を議決したドーズ案の諸事項の中で、今秋の世界の經濟界若くは金融界を動かすべき最重大な事件は八億金馬克の獨逸政府外債の發行である。

私は此の發行が容易く行はれるとは考へぬ。成程米國の金融市場は今日の金融の緩漫に苦んで居る、金利の低落に悩んで居る。聯邦準備銀行は其の公定割引歩合を三分に引下げても借手のないので困つて居る、從て紐育の金融業者、殊に其の牛耳を握るモルガン商會の如きは對歐洲の作付に殆んど有らん限りの努力を致して居るやうに見える。其の證據には七月十六日から始まつて形式上八月三十日に終つた倫敦會議の前後、モルガン商會の中心人物であるラモントは屢々西洋上を往復し

た。

然し乍らモルガン商會の財力如何に大なりと雖、八億金馬克即二億弗の獨逸國外債を一手に引受ける力があるとは私は考へぬ、又何人も考へぬであらう。今春我國の政府が英米兩國に於て合計五億五千萬圓の外債を募集したときに、其の中三億五千萬圓は四分半利付英貨公債の借替の爲であつて、四分半公債を以て拂込を許したるにも係らず、又モルガン商會が米國發行團の中心であつたにも係らず米國は三億圓即一億五千萬弗以上を引受けることが出來なかつた。今回の二億弗は全部新規發行に屬するのであるから、モルガン商會は勿論紐育金融業者の團體と雖全部を一手に引受けることは出來ない。

情報の傳へる所に依ると八億金馬克の中四億金馬克は米國金融業者が之を引受け、二億四千萬金馬克は英國が之を引受け、殘金の一億六千萬金馬克は佛蘭西、伊太利、白耳義等の諸國が之を引受けるといふ、私は此の情報の正確なるや否やを知らないけれども、分配の割合としては大體當を得たものであると思ふ。しかし此の分配の割合に依つて公債の募集が容易に行はれるとは考へな、

本年二月の我國の外債五億五千萬圓は所謂 international issue としても稀に見る、殆んど空前の巨額のものであると、日本政府は誇つたけれども、前述のやうに其の內三億五千萬圓は借替へであつた。應募の實蹟に於ても約二億七千萬圓は乘換であつたといふ、然らば現金應募は二億八千萬圓に過ぎない計算である。然るに今度の獨逸外債は四億圓全部の現金應募を必要とする、其の金額に於ても同日の論ではない。

加之獨逸は今日巨額の賠償義務を負擔して居る。ドウズ案に依れば同案實施の第一年には十億金馬克、第二年には十二億二千萬、第三年には十二億、第四年には十七億五千萬、第五年には二十五億、其の以後は二十五億以上を支拂ふべきことになつて居るが、一九二一年の五月に定められた所謂獨逸賠償支拂計畫の定める千三百二十億金馬克を減額するといふことはドーズ案の中には見當らないやうである。從て獨逸は今尚千三百二十億の賠償義務を負擔して居る譯である。而して此の賠償義務に就いて聯合國はヴェルサイユ條約第二百四十八條に依り、賠償委員會の承認すべき例外の場合を除くの外、獨逸共和國及其の各邦の一切の資產及收入の上に第一順位の擔保權を持つて居るのである。それ故に今回の獨逸外債の募集に應ずるものは此の點に於て少からぬ不安を感じなければならぬ。

次のヴェルサイユ條約第八編第一款第二附屬書の十八項によると、獨逸國が故意に履行を怠つた場合に同盟及聯合國が執る權利を有する措置には經濟上及金融上の禁止及報復其の他の一般に各當該國政府に於て事情に應じ必要と決定した措置を包含する、獨逸國は右措置を以て戰爭行爲と認めないことを約束するとある。

此の規定は獨逸に取つては實に迷惑な規定であつて、獨逸の外債に應募する者は大に懸念しなければならぬ、何となれば或る同盟又は聯合國政府が事情に應じ必要と決定した如何なる手段でも採ることが出來るとなれば、獨逸が八億外債の元金又は利息を拂ふことが出來ないやうになる事態の發生することは極めて容易であるからである。殊に獨逸が故意に履行を怠つたかどうかを判定する者は何人であるかは從來明瞭でなかつた、成程條約の第八編第一款第二附屬書第十七項には獨逸が本編規定の義務を履行せない場合には賠償委員會は速に之を關係各國に通知し且不履行の爲執るべき行動に付必要と認める建議を爲すことが出來る、とあるから賠償委員會が故意

の不履行を判定する權限があると一應解釋せられて居つたけれども明確ではなかつた。
　若し假に佛蘭西が一人で故意の不履行を判定し、單獨に其の必要と考へる制裁を加へることが出來、如何なることをしてもそれは戰爭行爲と認めないとすれば、獨逸に金を貸す人は非常な不安を感じければならぬ。
　それ故倫敦會議中倫敦に滯在したモルガン商會の中心人物ラモントは英國金融業者を代表した前英蘭銀行總裁サー、ロバート、キンダースレーと策應して、前述諸點に關する獨逸外債應募者の不安を除く爲に、ヴェルサイユ條約の第八編第一款第二附屬書の一部を修正したのである。それが卽今回の倫敦協定の重要なる部分を爲して居る。卽ヴェルサイユ條約第八編又はドウズ委員會報告の中に含まれて居る義務に就いて獨逸の不履行を宣言すべしといふ申請のあつた場合、其の決定を爲すのは賠償委員會の任務である、若し賠償委員會が右申請を多數決に依つて承諾し又は拒絕したときは、議決に參加した何れの賠償委員でも此の議決後八日以內に獨立不偏の三名の委員から成る仲裁委員會に之を附議することが出來る、右仲裁委員會の決定は最終とする、右仲裁委員の任期は之を五ケ年とし、賠償委員會が全會一致の議決を以て之を任命する。全會一致を得ないときにはヘイグ國際司法裁判所長之を指任する。五ケ年の任期滿了後又は任期中缺員を生じた場合には最初の任命と同樣の手續に依り後任者を任命する、右仲裁委員會の議長は米國人でなければならぬと規定した。
　次に今回の倫敦協定はドウズ委員會報告第一編第三節の意味に於ける不履行のあつたことが宣言せらるるに非ざる限り、ヴェルサイユ條約第八編第二附屬書第十八項に依る制裁を獨逸に課するなどは出來ない、此の場合協定に調印した諸國の政府は自己、獨逸に金を貸した者の財產上の利益の爲に共同の委託を受けて居ることを自覺して、直に適用すべき制裁の性質及其の迅速有效な適用の方法を相談しなければならぬと規定して居る。
　倫敦協定はドウズ報告の計畫する八億金馬克の公債の元利支拂を保證する爲に且右公債の市場に於ける發行を容易ならしめる爲に聯合諸國は獨逸の不履行の結果制裁の課せらるべき場合には公債の元利支拂の爲に提供せられた特別擔保を保護すべきことを宣言する、併之聯合諸國は此の公債の元利支拂は公債に對して一般的擔保權の與へられた獨逸國の資源に關し、且制裁の適用の結果として生ずることあるべき資源に關しても亦絕對的の優先權を持つものと考へる、と規定して居る。
　以上に述べた今回の倫敦協定の規定に依つて、獨逸に金を貸す人の不安は一應除去せられた譯である、卽第一には條約上卽獨逸國の資產は賠償義務の第一番抵當となつて居るにも係らず、聯合諸國は今回の公債の擔保は絕對的優先權を持つものと考へるといふのである。第二には獨逸が故意に義務を怠つたかどうかといふことは賠償委員會が一應之を定めるけれども其の決定に不服のある國は仲裁委員會に訴へることが出來る、而して其の仲裁委員會の議を經なければ制裁を加へることが出來ないといふのである。故に今後獨逸に制裁を加へるといふことは非常に困難になるのである。しかし茲に一抹の暗翳ともいふべきものは其の制裁を加へ得る場合に何れかの聯合國が單獨で之を加へ得るか否かといふことである。ヴェルサイユ條約第八編第一款第二附屬書第十八項には各當該國政府卽 respectively.といふ語が使つてあるので、昨年一月ルーア占領の際時の佛國首相ポアンカレー氏は單獨で制裁を課し得ると主張した。今回の倫敦協定は前述のやうに調印國政府は適用す

べき制裁の性質並に其の迅速有效な適用方法に就き直に協議すべしといふのみで、此の點を明確に解決して居らぬ。即ち單獨行動を許す余地あるかのやうに見える。此の點が獨逸に金を貸さうといふ金融業者の懸念する所となると思ふ。

最近の外電報は、モルガン、ラモント及獨逸ライヒスバンク總裁シヤハト大藏大臣ルーテルの四者が倫敦に集つたことを報じて居る。之に依つて見れば八億の外債談は目下倫敦に於て進行しつゝあるものと推察せられる、米國の四億、英國の二億四千萬は左迄困難がないかもしれぬが殘余の一億余を歐洲大陸諸國に分配するに於て少からぬ困難があらうと思ふ、佛蘭西、白耳義、伊太利に大なる引受能力はない、希臘セルヴイア、ルーマニア、チエツコスロプアーキア、葡萄牙は勿論である、和蘭、瑞西、瑞典、丁抹、西班牙の中立諸國にも左迄多くを期待することは出來まい。

此の時に於て問題となるのはヴエルサイユ條約が主要聯合國即ち所謂五大國の一と規定した我が日本である。日本は此の八億の獨逸外債に參加するであらうか、日本政府、日本銀行とは之に參加する意思があるだらうか、私が之を推測するに否である。曾て露西亞に空前の饑饉があつて幾萬の生靈が餓死した時に一圓の支出をもしなかつた日本政府、墺太利經濟復興公債にも一圓も參加しなかつた日本の金融業者がどうして此の獨逸の外債に參加しよう、露西亞は共產主義である故に之を救ふことを避けたといふか、墺太利には何等の恩澤を受けて居らぬといふか、獨逸には學術の上に技藝の上に多大の恩惠を蒙つた日本民族である。しかし日本の金融業者は報恩の爲に金を貸す實業家ではない、八億の獨逸外債の問題は恐らく純然たる西半球の問題となるであらう。日本は震災に依つて非常な打擊を受けた故に他人に金を貸す力はないといふ者があるならば、私は、今、日本は內外を通して約十五億圓の金を持つて居る。而してこれ丈の金を持つて居る國が世界に幾つあるかと問ひ度いのである。例ひ千萬馬克又は百萬馬克と云へども、もし此度の獨逸外債の一部を日本の金融業者が引受けるならば、それは世界永遠の平和に貢獻する貧者の一燈ともなるであらう。（×　×　生）

反直隷派の役者と作者

小村俊三郎

一

自分は本紙前號に於て、現在支那で行はれて居る戰爭に就いて、思想的政治的背景を叙し、直隷派と反直派との有するその各々を比較し、前者は政治上に弱味はあつても強味はなく、軍事上丈に有するこの強味を有する丈である。それも反直派にして暫く戰局を維持する限り、必ずその弱味が暴露され、直隷王國のネツトワークは、脆く内に崩壞し、ザーやカイゼルの末路を見るであらうとまで、豫言する所があつた。そのうち未だ一ト月も經たぬ間に、どうやら確實に的中して行くらしい。

南方に於ける盧永祥等の反直軍は、一時齊燮元の浙江進入に依つて、前途を危ぶまれたが、それは却つて彼等の爲に破釜沈舟の古事同樣、上海を背に背水の陣を張る結果となつた後、その形勢は寧ろ有利に轉回さるゝこととなつた。之に反し直隷派の齊燮元は、[illegible]門の陸軍に惱まされ、多大の兵力を損した上、期待した吳佩孚の援軍は至らず、既に來援した客軍は、指揮意の如くならず、加ふるにその軍隊の不規律は、甚しく地方の人心を失し、豫てその時機を伺いつゝあつた江蘇出身の反直派も之に乘じて省内處々に擾亂を企つるに至るであらうから、齊燮元の運命は、大體既に決定的となつた。

同時に北方の張作霖は、既に山海關と熱河蒙古の兩方面に進攻中であるが、熱火方面の直隷軍は、馮玉祥や王懷慶共に、戰意を疑はれて居るから、彼等をして奉天軍の主力を牽掣せしめ置き、自分は手兵を提げて山海關外の敵兵を猛襲せんとする、吳佩孚が得意の戰略も最早行はれぬ。彼れは既に軍事上で不利に陷つて居るばかりでなく、政治上の立場は更に困難である。第一彼れが北京に乘込んで、馮玉祥や王懷慶を出陣せしめたまでは可かつたが、彼れ自身は却つて之が爲、全軍に對する給費の供給と、北京政府維持の大責任を負はねばならなくなつた。左なきだに窮乏の極に達して居る北京政府の財政狀態に加ふる

に、政治上に於ける極端なる不人望と、軍事上に於ける前途の不信用とは、內債外債共に成立の見込が立たち筈がない。ドサクサ紛れに油斷のならぬ契約はしても、勘定高い英米人は、一文の金をも渡すまい。吳佩孚の運命も齊燮元同樣最早デッドロックとなつた。この後に來るものは、諸將の裏切による內部の崩壞と、全國から起る曹錕退京の運動であらう。張作霖の軍が山海關や長城を越えて押寄するを待たず、曹錕や吳佩孚は、復辟失敗の張勳と同樣の憂目を見るであらう。

而してこの時舞臺の表面へ表はれ出で、明智光秀ここに在りと名乘りを揚ぐるものは、即ち天津の租界を竹籔とする段祺瑞である。その舞臺面がここまで展開して行くことも、餘り長い間でもあるまい。

二

然るに我東京の政界は今頃何を考へてか、頻りに張作霖が負け、吳佩孚が乘込んで、滿洲の我鐵道も破壞され、我居留民も虐殺され、我特殊利益は蹂躙されて仕舞うものゝ如くに吹聽し、實力を以て張作霖を援助するか、又は相當時期に戰爭の中止を勸告し、以て滿洲の現狀を維持せんと主張し、あらゆる舊思想や舊勢力や特殊階級支配階級を擧げて大騷ぎをして居る。

假令張が負け吳が勝つたとて、露國と戰爭の結果に依つて得た我日本帝國の地位勢力が、左樣に譯なく動搖され破壞さるゝものであらうか。その自覺なき自信なき態度は、自分の目には恰も地震當時に朝鮮人を怖れた自警團騷ぎと同樣に映ずる。一吳佩孚が怖るべきものでない代りに、一張作霖を唯一の賴みとすべきものでもあるまい。吳佩孚が勝つたら、彼れは我總領事の前に頭を下げて來るであらうし、負けた張作霖を助けたなら、堂々たる日本帝國をして馬賊出身の張作霖と、情死をさせねばならぬこととならう。且つそれでは張作霖を賣國奴に仕立て上げ、寺內內閣の段祺瑞同樣、助くべき筈のものが助からぬことにならう。同時に我國の一部で、自己自身のイルユージョンから疑心暗鬼に陷つて居る英米の魔手も、それこそ滿洲以外に支那本土に働き、又た全然忘却されて居る勞農露國は、喜んで北滿洲に手を出すであらう。

それは兎に角、第一張作霖は負けそうでない。負けぬものを無理に實力を援助する必要もなければ、戰爭中止の勸告をした處で、肝腎な彼れが之に應ずまい。若し又彼れが之に應じ、花道で引込んだら、反對に引込むべき曹錕や吳佩孚は引込ます、段祺瑞は出鼻を折られ、張作霖が段を乘せて本舞臺に現はるべき、馬の脚の役目は勤らぬことになるであらう。それでは全體

芝居にならぬ。自分の目には東京の田舍芝居の方が、餘ッ程拙い、ファースに見ゑる。

東京の偉い人々が、總掛りでかゝる滑稽劇を演ずるのも、必竟不斷に支那の事に無頓着で、その僻何か事があれば、眉毛に火の付いたやうに騒ぐからである。今度の戰爭にも、過去にそれ〲の原因もあれば、現在に當然な結果もある。現在の因が更に將來の果となつて、戰爭の結果に伴ふ支那政局の一大變化を將來するのである。但しその將來を知るには、先づ現在を知り、尚ほ溯つて過去をも知らねばならぬ。過現未に亘り、レトロスペクトや、インサイトや、フアサイトや其他總べての觀察眼や、洞察力を備へて、始めて物の眞相を知り、之に處するの方法も立たうといふものである。

自分は本年の春八年振りで支那に遊び、極めて短い期間ではあつたが、北京から天津、上海等で今度の戰爭劇ん關した、大小種々の役者や、作者にも會い、前以てその筋書の大體をも聞かされて居る。又た少し間はあるが、一昨年の暮れには滿鮮を巡遊し、奉天で張作霖と省長の王永江にも遇つた。反直隷派の人々丈ではあるが、その作者や役者の直話や、筋書の大體を話すことは、現在の時局を理解するに便利でもあり、又た興味も多からうと思ふ。又た既に時局がこゝまで進み、彼等は殆ど皆な表面の人となり、その態度をも明かにした上であるから、別に差支もなく、且つ之を披露して置く事が、双方の利益でもあらうと信ずるのである。

三

但し芝居には序幕もあれば中幕もある。今度の支那芝居は、僅にその中幕にしか過ぎぬ。それには前々の經きを話して置く必要もあれば、更に幾分溯つて以前の歴史的事實をも話す必要もあると思う。かくてこそ大切迄の想像が、豫め付き易い譯である。

大體今度の戰爭は、改めて言うまでもなく、直隷派と反直隷派との戰爭であるが、その直隷派も反直隷派も孫文、唐繼堯を主とする。西南諸省を除きては、何れも皆所謂北洋軍閥の仲間である。假令浙江派とか江蘇派とかいつても、その首領も兵隊も、大抵同樣である。この北洋軍閥は、大體又た長毛賊や捻匪の大亂を平げた淮軍、即ち安徽軍の後裔でもある。その淮軍の首領李鴻章が、權勢北京の內外を傾けた長き間の直隷總督時代に、安徽派も直隷派をも打つて一團としたのが、即ち今日の北洋軍閥である。李鴻章の死後革命騒ぎを經て袁世　の在世中までは、安直兩派の北洋軍もその團結を保つて來たが、袁の死

後直隷派の馮國璋と、安徽派の段祺瑞との間に、その勢力爭いの起つた結果が、現在迄の北洋派の爭いである。而して馮國璋の死後直隷派の勢力は、吳佩孚の支持に依り、曹錕を傀儡として今日に至つて居る。

東三省の張作霖は袁世凱の死後、大部分日本との關係に依つて新たに起つた勢力であるが、それが時には直隷派と聯絡し、時には安徽派と提携するやうになつてから、更に兩派の爭いを深刻ならしめ、擴大せしむるに至つた。民國九年の安直戰爭には、直隷派と結んでその功に居り、之が爲同十一年の奉直戰爭を惹起し、再び安徽派と結んで、終に見事な敗戰を遂げた。但し安直戰爭に、張作霖が一時安徽派を敵としたのは、段祺瑞を敵としたのでなく、自己の野心以外の段の子分の徐樹錚を恨んだ爲であつて、張は到底段の敵ではなく、段も亦張を利用せねば、その志を爲すことが出來ぬ。かくして段と張とは曹吳に對し、不倶戴天の仇敵となつた。直隷と安奉二派との戰は、到底免れ得ぬ運命となつた。

張作霖の東三省は勢力以外に、安徽直隷の北洋派の爭いに、勿論大なる關係のあるものは、孫文、唐繼堯を始めとした西南諸省の勢力である。民國革命の端緒は言ふまでもなく、西南諸省に發せられたが、第一革命の結果は袁世凱に竊まれ、第二革命間も排袁運動の結果も同じく段祺瑞に竊まれ、乃至護法運動にも竊まれんとした。その撥亂反正には何時も北東と西南との聯合力に依るのであるけれども、最後の結果は必ず北洋軍閥に竊まれる。要するに是れ力の關係である。過去幾年かの南北對峙乃至南北離合の錯雜紛糾した所謂內亂狀態は、要するにその北洋軍閥の力が、或は求心力、或は遠心力の作用をなして、離合集散常ならぬ儘に、今日に至つた現象であるに過ぎぬ。

四

左り乍ら二十世紀就中歐洲戰後の現世界は、武力のみがその力でないやうに、支那に於ても勿論そうである。民衆の意思時代の要求は、同じくその力である。第一革命以後後者を代表した南方の力と前者を代表した北方の力とは、互に相消長し進退し、時には相抱合し利用したが、結局一時的には、民意輿論の力が團結した武力の力に勝ち得ぬのも、是亦已むを得ぬ。然るに袁世凱の死後幸いに北方軍閥自身の力の中に、前述の通り分解作用を起し始めた。その分解作用を助くることが、南北の化合作用を促がす唯一の道でもあり、望みでもある。

共和民主の戰いの爲に、長く間關流離の苦しみを嘗め來つた廣東の孫文は、安直戰爭以後吳佩孚の武力統一に反對する自衛

の必要に逼られたことが、その原因ではあつたが、兎に角第一に自ら進んで段祺瑞と握手をした。而して奉直戰爭以後には、張作霖が同じく自衛の必要に驅られ、その段祺瑞を通じて孫文とも握手し、所謂三角同盟なるものが成立し、こゝに從來に於ける南北大陸横斷の局面に代ふるに、遠く奉天より天津、上海杭洲から廣東に至り、租界の安全地帶を點綴し、新たに沿海一帶の縦斷的分野を現出することゝなつた。彼等は自身のこの運動は、北方軍閥の分解作用を助け、而してこれその化合作用に導くが爲の、自覺的運動でないことは、勿論であるが、但し結果は即ちそこに歸着するので彼等自ら天の攝理を受けつゝあるのである。

その一方に於て、民衆の意思と勢力とを代表し、若くは之を代表するものと自惟しつゝある孫派以外の政黨政派も、亦たこの自然の大勢を看取し、進んで三角同盟と大同盟を結び、幾分かは自覺的に、その分解作用と化合作用を全からしめんとして居る。而してこの派の標榜する化合作用は即ち聯省自治地方分權による平和統一である。之と直角的反對の關係に立つたものは即ち呉佩孚の主張し實行しつゝあつた中央集權箇人專制の武力統一である。後者が假令呉佩孚以上の人物に依つて行はれても支那民衆の意思感情と相反し、結局その覆敗を招くに終るものであることは、言ふまでもない。過去の袁世凱も、段祺瑞も皆な然りであつた。反對に再び政治舞台に立たんとする段祺瑞も段を助くる張作霖も、之を理解するにしても、せぬにしても、同じく聯省自治平和統一を表榜して、民意輿論に投ぜざるを得ぬのは、自然の理數である。

故に今度の戰爭は表面は直隷派と反直隷派との戰であると共に、裏面に於ては武力統一中央集權と、平和統一聯省自治との戰である。その關係は建國時代の北米合衆國に於けるフヒデラリストと、レパブリカンとの競爭を極端にした戰爭であるといつても可い位である。それが即ち支那の民衆をして反直隷派の側に立たしむる所以でもある。

五

以上話しは餘りに長く歴史的事實の上に、聊かながら哲學的考察を下した理論に馳せたが、最近までの直隷派の局面は、兎に角かやうな歴史的背景を負ふて、展開せられつゝあつた。

彼等三角同盟は天津の段祺瑞を中心に、奉天の張作霖、廣東の孫文、乃至杭州の盧永祥等の間に、使節往來し冠蓋相望み、春秋戰國の昔しを今に見る程の實狀であつた。上海を中心とする各黨各派の政客も、主として天津の段祺瑞と聯絡し、段祺瑞

も亦自ら從士を放つて四方に遊說せしめ、秘密運動に從事せしめつゝあつた。孫文の代表は主として、汪兆銘が之に當つたが、段派の策士は、徐樹錚吳光新兩人の暗中飛躍が就中著しいものであつた。安直戰爭に張作霖が段祺瑞を敵としたのは、徐樹錚に欺かれたことを憤る爲であつたが、その徐樹錚は奉直戰爭には再び段と張とを結びつけ、孫と段張とを結び付けたのも、同じく徐樹錚であつた。彼れは兎に角芝居にはなくてはならぬ小役者の一人であり、同時に油斷のならぬ人物で、爲に謀を爲すものも彼れであり、事を敗るものも亦彼れである。」

兎に角所謂三角同盟の陰謀的劃策は、過去一二年の間に着々と――進行し、就中廣東の孫文は、吳佩孚と陳炯明の爲に內外に敵を受け、最も不利益でそして危險な地位に置かれて居た爲め、反直派が事を擧ぐる必要に逼られて居たものも、亦孫文であつた。之と同時に段祺瑞も、同派の手に殘された大事の地盤と兵力とである福建の臧致平と、浙江の盧永祥とを救はねばならぬ關係から、同時に擧事の必要に逼られて居た。而してこの何れもが、奉天の張作霖に迫つて復讎の師を出さしめぬ限り、その目的を達することが出來ず、その約束の堅固ならざる限り、假令浙江にして兵を擧ぐるとも、勝算の立たぬのは明白な次第であつた。然るに肝腎な張作霖は奉直戰の大敗に對し、假令然ゆるが如き怨恨の念はあつても、第一士氣の不振や、兵器と軍需費の不足等から、直隸派に挑戰の決心はつかぬ。左りとて段派と孫派とに十分な聯絡を取り、之を直隸派に示して、牽制作用に供せぬ限り、自分が危ぶない。段派も孫派も畢竟に同じ心ではあつたが、但し彼等の念は前述の通り張作霖より急なるものがあつた。かくして昨年の十月迄は、三角同盟の中でも互に虚々實々の秘術を盡して、たゞその聯絡提携を保つに務めて居た。」

然るにその十月前に徐世昌を逐い、後に黎元洪を逐ふた直隸派は、曹錕を擁して大總統の位に就かせた。この選擧は所謂賄選で議員一名に五千元の賄賂を使つて當選し、その支拂命令さへ新聞紙上に暴露された位であつた。南方派から見すれば、北京の國會は元來非法國會であつた上に、曹錕の大總統も當然非法總統であるのみならず、その選擧は如上の方法に據つたものであるから、各國の新聞紙は一齊に起つて之を非認し、上海の如きは今に決して大總統の字を使はぬ位である。尙ほ同地の商務商會や教育會其他の團體は、皆な總統非認の公電を發した位であつた。段派と上海の各政派とに時こそ至れとし、廣東、浙江奉天の三方相應じて、曹錕討伐の兵を擧ぐるの議を決した。然るに張作霖は、この擧兵の間際に及んで、日本政府の好意的勸告

を口實とし、體善くその參加を斷つた。彼等就中孫派の恨みは極點に達した。彼等は張作霖を恨ますして、之を抑へた日本を恨むだ。それは昨年十一月頃の事であつた。

六

自分が支那に遊んだのは、其後の本年五六月である。反直各派の日本に對する餘憤の尚ほ未だ消えぬ頃であつた。天津の段派は左程でもなかつたが、上海の廣東代表王兆銘胡漢民の二人からは、烈しく恨まれた。恰も自分が張を抑へた政府でもあるかのやうに。章太炎先生を中心とするその他の上海各政派等は、一齊に日本が張の馬を抑へずに、之を放して呉れとの注文であつた。この注文は、段祺瑞を始め天津の段派も、勿論皆な同樣であつた。

自分は是等の事情を始め、所謂役者や作者の直話に據り、その頃迄の筋書の大體を話す順序であるが、但し自分がその以前一昨年の十二月に、滿鮮旅行をした時に、奉天で張作霖や省長の王永江に遇つた時の事を、繰上げて話して置く方が便利であると思ふ故、先づそれから先きにやることにする。元來自分が支那に遊んだのは、寺内内閣時代に援段政策や、西原借款の行はれた頃、政府の對支政策に不滿足であつた爲、外務省を辭職し、北京の公使館を去つて東京に歸り、自己の意見を我國民の輿論に訴へん爲、新聞社會に身を投じてから、七八年振りであつたのである。それまで自分は、支那は軍閥の互爭に依り、時局の解決に向つて、自然の進行をば經つゝあるが、日本は未だその何れをも助くる時でなく、絕對の平和政策と不干涉主義を取り、先づ支那内外の誤解を去ることが必要で、殊に軍閥の爲にする武器借款の供給の如きは、絕對に禁止すべしとの考へであつた。就中東三省の張作霖との關係は、左なきだに内外の疑惑を受け、我援張政策に依つて得た支那國民の恨みが深いのに對し、出來る事なら張作霖をして中原との關係を絕たしめ、彼れと共同し彼れを援助して、責めて東三省丈でも絕對の平和的經濟的政策を執らしめ、之を支那全國の模範者とせしめ、他支那統一の成るの日を俟たしむる事とした方が、支那の爲にも日本の爲にも利益であらうとの考へであつた。自分は屢々その考へを讀賣新聞の社說に於ても述べ、之を張作霖に送つた事さへあつた。

それ故一昨年の暮奉天を訪ふた時、その考へを極めて露骨に同人に告げたのであつたが、當時はたゞ滿鮮と浦鹽丈を巡遊して、支那には往かなかつたから、この二三年中直隷派全盛の間に、支那の時局と人心との、著しく變化して行つた關係を、十

分には關係して居ない時であつた。隨つて自分が張作霖に對した遊說も、今から考ゆれば、實は餘計な心配であつた。張作霖も自分の所說に對し、彼れの已むこと難き意中と、段派との關係を語り「貴下はまだ善く支那の眞相を諒解して居らぬ」と言うたが、それも今から正直に告白すれば、寧ろ張作霖の言葉の方が本當であつた。」

但し今でも尙ほ支那將來の眞相を解せぬ東京の政治家や軍人は、今更張作霖が出兵して敗戰する結果は、南滿洲の特殊利益が破壞され、蹂躙さるゝものゝやうに、大騷ぎをして居るのであるが、ならばその內一人でも、曾て張作霖の爲に平和主義を說き、日本の爲に豫め現狀維持を講じたものがあつたらうか。同時に今でも尙ほ東三省と支那本土との關係を切放し、張作霖をして三角同盟を賣り、獨りその身を全くせしめられ得るものと、考へて居るのであらうか。張作霖が自分を冷笑した如くに自分も亦た彼等を冷笑したい位である。

七

時は大正十一年十月頃の事であつた。自分が故滿鐵總裁早川氏の個人的好意に依つて、滿鮮地方の視察旅行中、奉天に於て張作霖を訪問した。元來自分は省長の王永江には會見したい積りであつたが、自ら求めて張作霖に會はうといふ考杯はなかつた。日本の軍人顧問の勸めによつて、會見することとなつたのである。自分は先づ彼れに向つて大連以來の滿洲所感を述べた。

「日本は滿鐵の經營其他の投資企業に依つて、滿洲の貿易を發達せしめ、それが爲例へば豆や豆粕の特產物丈でも、何れ丈利益をして居るかも知れぬ。假りに豆粕丈が年に一億萬圓日本に輸入さるるものとし、之を米作の肥料に供する結果は、その收穫は三倍になるといふことであるから、日本は滿洲から三億萬圓の米其物を輸入することと同然である。又た之を滿洲の方から言へば、支那に於ける各港は皆な輸入超過であるが、獨り滿洲のみは特產物の爲に輸出超過である。滿洲は支那の爲に幾分なり輸出入調節の機關となつて居る。日本は亦た南方支那には輸出超過であるけれども、滿洲よりは輸入超過である。隨つて多額の金を滿洲に拂はねばならぬ。彼是日本も滿洲のお蔭で利益もして居る。」

但し一番利益をして坐ながらに富を得るものは、滿洲其物である。閣下が無限の軍事費を捻出し得るのは、即ちその爲ではないか。滿鐵其他の經營投資と、滿洲自身の利益とは、各不可分であつて、所謂共存共榮とは、即ち之を言ふのであ

る。それ故日本の國民はその満洲の秩序が攪亂されて行くやうなことには、皆な反對である。それ又た閣下の見込みも立たぬ支那の政局戰局に關係し、その結果戰亂の影響を及ぼすやうなことにも、反對である。それは閣下の考へや大局との關係なら、致し方はないが、支那の國民も之を好まぬに相違ない。日本國民はこれ等協に武器の供給や、其他の助力をして、支那國民の恨を買ふことに、勿論反對する。假令閣下の左右に在る日本の軍人顧問が、如何なる約束を閣下にしても、又た日本本國の軍部や政府が、假りに之に承諾を與へても、我國民は之に反對する。少くともかく申す自分は、新聞記者として之に反對する。日本は輿論政治の國である。政府はその輿論を無視することは出來ぬから、その約束も實行は出來ぬ。その時になつてから、閣下が日本の軍人等に欺かれたと思つてはそれは閣下の不明からである。自分は我國民を代表し、豫めこの事を閣下に申し入れて置く。

但し日本國民とて、閣下と満洲に於て利益を共にするものであるから、閣下に好意を有ち、閣下を援助せぬ譯ではない。然らば如何なる事に向つて閣下を援助するかと言へば、東三省の民治を尊重し、その自治を文字通りに東三省の人民に實行せしめ、保安維持者たる閣下の威力は、是非その文字通り地方治安の維持に用ゐ、かくして東三省の文化的産業的事業の發達を圖り、之を以て支那全體の模範省とし、平和的に支那大局の平和統一を促進する目的に向つて、閣下を援助したいと思ふのである云々。

以上は自分が張作霖との會見に於て、劈頭第一に述べた意見であつたが、但しそれは進んで尚ほ以下の如き、突込んだ意見を述べんとする前提にしか過ぎなかつた。

八

張作霖は自分が叙上の陳述に對し、これ相當の挨拶をなして居たが、内心甚だ不滿の様子に受取られた。自分は委細構はず、次の如き奇問を續發した。

閣下は閣下の先輩たる袁世凱と段祺瑞と、閣下自身とは、孰れが偉いと思はるゝか。彼れは之にも何か不精無精に返答して居たが、それは自分の豫期する所であつたから、それに頓着なく、

閣下よりも偉い筈の袁段が、失脚したのは如何なる譯か。

これにも前同様であつたが、自分は進んで、

自分の見る所では、今日の支那の時局では、餘程偉い人物でない限り、一たび北京の中央政府に據る以上、時局の犠牲

となるものはない。その上袁段共に北京に自己勢力の根據地を有して居た譯でない。それに袁段に及ばぬ閣下が、滿洲の根據地を離れ、再び政權を中央に爭つて、成功の見込ありと思はるゝか。

自分は更に語を進めて、

今ま山西の閻錫山は、地方自治を標榜して模範省の名がある。但し山西は中原に逼近し、結局大局の影響を蒙らぬ譯に行かぬ。且つ貧瘠なる同省は天惠に乏しく、縱しその產業を開發しても、海口を距ること遠いから、その民を富ますことが出來ぬ。然るに之に反し、滿洲は山海關と錦州義州を守り、所謂閉關自守の策を行へば、何人も來つて之を犯すものはない。而してその天產は豐富、滿鐵と大連とを控へ、運輸貿易は行はれ易いから、こゝに閣下の所謂保境安民の策を事實に實行し、平和的政策の下に、地方を開發したなら、東三省の地方人民の爲、乃至閣下自身の爲、之に優る幸福はなかるべく、而してその事は即ち日本の利益とも一致するものであるから、自分は我國民に代つて、之を閣下に進言せんとするものである、

云々と結んだ。張作霖は之に對し、大要

現在支那の時局を拾收し、之を平和統一に導く爲には、段祺瑞の出馬を必要とする。その時局拾收の任に當るものは、段祺瑞を除いて外にない。又た彼れ程東亞の大局を憂慮し、日支の提携に熱心なるものはない。彼れにして起たば、支那の平和統一はその緒に就き、東亞の大局を維持する爲の日支親善も行はるゝ。自分の任務は、段の出馬を助けてその大任に當らしむるまでゞある。獨り東三省の利益のみを主とし、一隅に割據する譯には行かぬ。現在直隷派の政府が如何に惡いか。反直隷派の關係が、如何に進捗して居るか。貴下はまだ十分に支那の事情に精通して居ないやうである。

といふやうな意味を述べ、多く語るを喜ばぬ色であつた。自分は勿論一場の會見のみで、張作霖と十分の意を悉くすものとは、思つて居なかつたから、始めから餘りその會見を希望もせず、その十分な事は、別に之を省長の王永江と話す積りで居たから、張との會見は可い加減にして引揚げた。が、彼れも定めし自分を無禮なものと思つたらう。自分も之を謝するが、要するに皆好意からである。

九

自分が張作霖に話した意見は、假令今日彼れが支那大局の關係から、身を引く譯に行かぬ破目になつて居るとしても、その

東三省に關する丈の事柄は、張であらうと誰れであらうと、その通りに之を實行せねばならず、又た之を實行させねばならぬ事柄であるが、從來我國の之に對する態度は、たゞ我國丈の利益を主とする利己本位のものであり、且つそれを甚だ不徹底不統一なものであつた。張作霖が果して段祺瑞を助けて、一時なりとも支那統一の大業を成功させたら、彼れは退いてその統一された一部の事業として、東三省の平和的文化的產業的政策を行ふに至るであらうが、然らば我國はその目的に對し、如何なる事をして彼れを助けたら善いか。豫め善く之を研究立案して置いたら可からう。それが本當の我對滿洲政策であり、對張作霖政策であらねばならぬ。自分が張作霖に述べた意見は、單なるヒント丈に止まるものであるにしても、その參考となるものであると思ふ。

併し自分が張作霖に進言した中で、彼れをして絕對に支那大局關係から絕緣し、東三省丈に閉關自守の政策を行へとの意見は、今から思へば、全く無理の考へであつた。第一彼れが支那大局との關係は、安直奉直の戰爭以來、その因果が餘りに深い。彼れは直接直隷派との因果から免るゝことが出來ぬのみならず、その直隷派に當る爲の三角同盟關係からも、最早免れぬ破目に陷つて居た。假令その事が彼れの爲、東三省の爲、乃至支那國民の爲に、善からうが惡しからうが、いかなる力も最早之を挽き止むる譯には行かなかつた。その實際裏面の關係は、自分が本年天津上海に於ける、彼れと同盟關係に在る方面からの、側面觀察に依つて、之を明白なものとならしめた。自分が始めに先づ支那に遊び、次ぎに滿洲に往つたのなら、自分は決して張作霖に、無理な註文はしなかつた。その順序が後先きになつた許りで、張作霖から「君は未だ支那の事情に精通して居ない」と言はれた事は、一生の不覺ではあるが、正直の處それは自分の負けであつた。

自分が一場の會見丈で、深く張の意中を測量することの出來なかつた事は、致し方がなかつたとしても、その左右に居つて、帷幄の計にも參して居た筈の日本の軍人顧問連が、今に尚ほ彼れが眞意を諒解して居ないのは、如何なる譯か。彼等は張の出兵を不可なりとし、第一平和勸告の手段に依つて之を妨ぐるか、第二負けた場合に彼れを助けんことを主張し、以て滿洲丈の現狀を維持し、結局之を支那の大局から引離さんことを宣傳した。その軍人の宣傳が今日の自警團的對支運動となつたのであるが、抑も今日の場合となるからまで、直隷派との仇敵關係、乃至反直隷派との同盟關係から、張作霖を引離すことが可能であらうか、不可能であらうか。當時張作霖が自分に款語し

た丈の事實から見ても、それは既に不可能であつた。餘事は措置き、この一事丈でも、自分は彼等軍人の判斷力を疑はねばならぬ。

兎に角讀者の目には以上の記述に依つて、張作霖が今度の戰爭劇に對する重要なる役者として、如何なる役目に當るものかが稍や明瞭となつたであらう。換言すれば、彼れは段祺瑞の馬として、段を乘せて出すのが彼れの役目である。今更その馬を引込めては、折角の芝居は打ち壞しである。

十

これから話は、その張の馬が乘せて出るべき大立者で、今では尙ほ作者の立場に居る段祺瑞との、會見談に及ぶ筈であるが、その前に更に一節を、こゝに挿ませて貰いたい。そは尙ほ滿洲旅行の當時に張作霖の部下で、奉天省長たる王永江と、段祺瑞の部下の策士である吳光新とに關した話である。

自分は張作霖よりも、主として王省長と話をするのが希望であつた。彼も之を希望し、前後三回の會見に於て、自分が張作霖に對してなした東三省論の實行方法に關し、その細目の意見を交換する所があつた。それは日本國民の一分子として、責めて東三省丈に對する我國の政策を決定するが爲の基礎として、同省長の意見を求め、自分の所定をも之に告げたのであつた。その意見交換の結果は、略ぼ數ヶ條の所論を得たのであつたが、こゝには之を省略する。たゞこゝに紹介して置きたいのは、王省長の人物である。彼は天性理財の才に長じ、張作霖の爲に再三の軍事費を調達する蕭何の役目であり、東三省人民の爲には收斂の臣としても、見られて居るが、彼は一方に於て、行政的材幹をも有し、且東三省の自治を主張する人民の味方である。東三省にも平和主義民衆主義の行はるゝ時、乃至張作霖が段祺瑞を助けて、果して支那の統一を全くし、東三省にも聯省自治の政策を實行せねばならぬ時、王省長の如きは、益々必要な有力人物となるであらう。然るに我國には未だ餘りその人物を認められて居らぬ。それ故自分は先づこれ丈の紹介をして置くのである。

次には吳光新の話であるが、彼れは段祺瑞に取つては亡き妻の弟であり、徐樹錚と共に段の下廻りとして無くてはならぬ役者である。彼れ等兩人は、不斷に三角同盟の間を奔走し、日本にも或る方面に運動の爲、前後して屢々我に來朝した。吳光新は今は奉天軍の騎兵隊長として、熱河蒙古に出征して居る。之を見ても今度の戰爭と、段張の關係は知れやう。自分が彼と會つたのは、昨年の正月大連の酒樓であつた。北京に於て面識位

いない間ではなかつたが、何しろ自分は段段主義の大反對者でもあり、同時に之と縁故のある日本の軍閥外交に對しても、大反對者であつた位であるから、その段派の呉光新とは一ッ寸面白き會合であつた。彼れは頻りに段祺瑞の人物、勢力、並に親日意見等を述べ、軍人らしき露骨さを以て、その政治運動に對する自分等の諒解を求めたのであつた。由つて自分は彼れに對し、次のやうに言ふてやつた。

段氏の人物、勢力、並びにその親日意見等は、長く支那に居た自分等の熟知する所である。過去は過去として、その政治意見にも變化があらうが、左り乍らその段氏の意を承けて、君等が幾ら南北に奔走し、又た日本に來て見た所で、要するに是れ皆な舊式の陰謀である。現代的政治運動ではない。君等が段氏を世に出す積りなら、何故その運動を現代化し、段氏をして堂々としてその政見を公表せしめ、時局の打破並に收拾の手段方法から、平和統一の各箇政策に至るまで、一々その抱負を明かにし、内外の輿論に訴へせしめないのであるか。

其他自分は武斷主義の非なること、民衆輿論の重んずべきこと等をも、近く支那と日本との實際に徴して、之に切言する所があつたが、彼れは退いて人に語り、「アンナ話しは始めて聞かされた」と言つた由である。それが爲でもなかつたらうが、その年の春頃に段祺瑞の政見發表なるものが、始めて天津に於て行はれ、彼れはそれから始めて暗みの夜から、明るみに出で陰謀の首領から遽か仕立ではあるが、民衆的政治家の大立物となつたのであつた。當時の政見なるものは、大體は次に記する自分への民意尊重云々との直話の中にも含んで居る。

十一

反直隷派に取つてその筋書の作者でもあり、同時に大建物の役者でもある段祺瑞と自分との會見は、本年の五月二十日頃であつた。是より先き自分は對支文化事業の關係で、北京に廿日餘りを過し、朝夕その關係で寸暇のなかつた間にも、時局についての觀察を怠らず、諸種の人々から意見を聞いたのであるが、何分にも大總統たる曹錕の評判は、殆ど話しにならぬ程であつた。政治的には最早生命がないと同然であつた上、實際彼れが病氣に就ても、種々の取沙汰があり、人々は皆な其死の早からんことを、心に望んで居る位であつた。古代の支那民衆が暴君の死を祈り、「この日いつか亡びん、我れ汝とともに亡びん」と歌つた有樣もこうであつたかと思はれた。曹錕は固より彼れ自身に暴君たり得る丈の人でもないが、兎に角北京に於てさ

へ、その不評判は甚しかつた。それが爲、一時曹錕の飯を喰う人々との話も、どうしても段祺瑞の將來に向つて落ちねばならなかつた。自分はそれから倘更段祺瑞について、自分の好奇心と、觀察力とを集中せねばならなくなつた。天津では文化事業關係で、梁啓超や羅振玉一派の人々と會談した外には、以上の目的で主に段祺瑞直參派の人物と會見した。曹汝霖の隱れ家が、その集會所であつたが、援段主義の西原借款の犧牲となつた一人である同人は、今もなか／＼元氣である。商人としての彼れは、何處までも男らしき性格の持主である。彼れに一の美談がある。これ丈は序に我讀者に紹介さして置かねばならぬ。彼れは日本留學中中江篤介翁の家に寄宿して居たことがある。翁の沒後その嗣子丑吉君を北京に引取り、之を扶助して、自由に研學させて置き、十年の間一言もその成績を尋ねたことがない。彼れが今日の生活は世間で想像する如く、餘り餘裕あるものでもないことであるが、それでも彼れは依然として、少からぬ與資を續け、相變らず一言をも發せない。丑吉君は先君の血を受けて聰明人に絕する上に、多情多感の青年歳子である。丑吉君は元々東大の文科を出でた上に、遺傳の哲學者的嗜好もあるが、曹汝霖の恩に感激し、彼れの汚名をその學術に依つて雪がんと決心し、それから支那の古典と西洋の哲學とを潛心獨學した。現に著作中である支那古代の民主思想に關する、浩瀚で且つ精深な一書は、その傳統的儒教思想に疑を抱いた獨創的なる點に於ても、世界的價値を有したものである。何れ世に公にされる機會もあらうか、君は其著を公にせんとするに臨み、曹汝霖と共著の名に於てする積りであることを自分に相談した。自分は之を遮つて、他人の恩義に報ゆるのと自己の著作を公にするのとは、別問題である。曹汝霖が君の著作に助言でもしたのなら格別、然らざれば、學問の獨立の爲、自分は之に反對せねばならぬと告げた。旅館の樓上に於て、中江先生の遺孤丑吉君は、遂に聲を呑んで歔泣した。自分も無論涙を呑んだ。

段祺瑞の爲に犧牲となつた人々の中には、かやうな悲劇も藏されて居るのである。曹汝霖は假令段が世に出ても、直ぐと公に世に立つ譯にも行くまいが、自分は日本人として我留學生の花であり、兩國の爲に有爲に働かすべき人々を、かやうな運命に陷れた我援段主義や西原借款を、今も倘ほ惡まざるを得ぬのである。

曹宅の會合に跡なつた人々の中でも、段祺瑞を中心とする反直派の擧兵を急ぐ、急進派と、政治的運動に依つてその機會を熟せしめんとする漸進派の區別があるやうであつたが、何れもその運動と宣傳とに熱心な樣子であつた。その宣傳の爲でもあ

つたか、自分にも段祺瑞に會へとのことであつた。而してその紹介と通譯とには、元の司法總長で前記の急進派である姚震が之に當ることゝなり、その翌日愈會見の榮となつた。

十二

租界に於ける段祺瑞の寓所は、吳光新の住宅であるが、コリンシアンかオリンピアンかの宏壯なる希臘式の大殿堂である。建築の當時十萬元かを費やしたといふことであるが、今は數十萬元を要しやう。吳光新は大連で自分に向つても、段の淸廉潔白なる人格を手放し的に賞揚したが、彼れ自身のそれが疑はれる。段祺瑞と自分とは公式の場合に、握手した位の縁故はあらうが、親しく談話を交換するのは、今日が始めてゞある。坐定まつて自分は自分の經歷を述べて、寺内内閣の援段主義、西原借款、並びに彼れ自身の武力統一、南方討伐反對であつたことを告げた。スルト彼れは、彼れと寺内伯との關係、西原借款に對する彼れが當時の意圖、日支經濟提携の相互利益、及び武力討伐の理由等に關する説明杯を始めたから、自分は之を排し、次の如くに切出した。

閣下の人格と政治的勢力、就中民國に對する功績、即ち第一革命、帝制反對、復辟反對、並びに大戰參加の功績等は、自分も之を認める。今日の時局に對しても、内外の耳目は閣下に集中して居る。その時局の發展如何は、我日本にも影響する。自分が會見を求めたのは、直接その時局に大關係なる閣下の意見と態度とを知らんが爲である。過去の事は今こゝに談ずるの暇がない。第一に問はん、直隷派の曹錕と吳佩孚とに對する閣下の所見如何。

之に對する主人の答へは、大要左の如く甚だ手輕なものであつた。

直隷派の今日は最早問題とならぬ。大總統としての曹錕も、多く言ふを俟たぬ。吳佩孚の武力統一は、今日の時代と相容れぬのみでなく彼れは其人でない。彼等の倒るゝことは、久しきを俟たぬ。曹倒るれば吳存せず、吳倒るれば曹存せず。彼等兩人は猶人の字と同樣である。(指で人の字を作り)、一劃を缺けば字を成さぬ。吳曹共に元と予の部下で、吳は南方討伐の際、南方と通じて予に反いたものに過ぎぬ。

そこで待設けた自分のこの矢は、次の如くに放たれた。

然らばその局面打破の方法は、武力手段に出らるゝか、將た平和手段に出らるゝか。

答へは言下に、

武力手段の外にない。今直隷派の内容は知らるゝ通りであ

る。之に對し張作霖が奉天から七萬の兵を擧げ、三萬は山海關から、四萬は熱河蒙古から進出さへすれば、浙江も廣東も、皆な之に應ずる事となつて居る。同時直隷派は内部から崩壞する。昨年の冬も同樣に奉天から事を擧ぐる積りであつたが、故あつて中止した。

自分は聊かその答への餘りに率直過ぐることに驚いたが、武力主義を執らるゝことが、吾國の必要であるとしても、自分は今その可否を論ずべきではない。たゞ之に代る平和的政治的手段があるならば、先づそれを執らるゝの道はないか。自分は切に窃にそれを希望する。

答。平和的政治的手段の尊重すべきことは、言を俟たぬ。但しそれ等の手段は、時局を收拾する爲には必要であつても、時局の打破には武力を要とする。武力には武力を以て之に對する外はない。且つ假令政治手段に訴へても、武力の背景がなければ、駄目である。その政治的手段としては、例へば各省の代表會議を開きて、民意輿論に依り、行詰れる時局の轉回を圖ることも一法であつて、その議論がないでもない。但し現在直隷派の武力が現存して居る間は、それも言ふべくして行はれぬ。

問。然らば假りに武力に依つて、局面が打破さるゝものとし、その時局收拾に對する閣下の意見如何。

答。それは昨年の春も、既に予の政治意見を公表した通り、第一從來の武斷主義、中央集權は時代と逆行して居るから、憲法と議會とを尊重し、民意輿論をも尊重し、隨つて矢張聯省自治、地方分權に依り、共和民國の再建を計らねばならぬ。而して是等の建國の根本方針や、其他の内政、外交、財政、兵制等の諸大端は皆な各省代表の會議に依つて、その大綱を決する積りである。それ等の事は、既に各省各派の主なる者と、十分に意思の疎通が出來て居る。

自分はそこで一歩を突込み、

その場合閣下は、起つて時局收拾平和統一の責任を執らるゝ筈であるか、

との最後の重要な質問を發して見た。その答には

國家大局の爲とあらば、固より之を辭せぬ。但總べては民意輿論の如何に據つて進退する。假令直隷派が倒れたとて、直ちに足を擧げて北京に入るやうなことはせぬ各省會議の結果如何に出る

と、あつた。次に自分は三角同盟中の孫文との關係如何を尋ね、局面の打破には協心同力せられても、その收拾の始めから意見の差があつては、將來の大局に關し、大なる憂慮が存在すると告げた。彼れは

民國の革命の元勳たる孫氏は、その人格と共に、予の敬重する所である。如何なる地位も、予は之を孫氏に推すに吝ならぬ

と答へたが、後で在上海の汪兆銘や胡漢民が、自分に告げた所に依れば、兩雄の間には、「段の權力時代には、孫氏之と政權を爭はぬ」との約束が成立して居るとの事ではあるが、必竟兩雄の關係如何こそ、何人の問題にも浮ぶ支那將來の陰翳である。自分は餘談として尚ほ段の思想の根柢を試みん爲、共産主義、學生運動等に對する所感を叩いたが、その答は甚だ不滿足なものであつた。彼れは當面に必要な政治問題の外、思想や社會の問題抔は、依然たる舊合肥であることが窺はれた。それと共に彼れが部下左右の人物の、志操品性の變化如何とは、是亦何れか將來の運命を蔽ふ陰翳である。但し彼れが自分と同樣の態度で、四方の客を引接し、胸中の大事を事もなげに、極めて率直眞確に即問即答し、十二分に緊張の度を帶びて居る所を見れば、從前の彼れが自ら事を事とせず、緇子輩に事を誤られた頃の同人とは、大分の差があるやうである。一日を佛に耽る抔とは英雄世を欺くの類である。

會談は約二時間に亘つたが、門を入るまで晴朗な天氣は、對坐中遂に一變し、狂風屋外に怒號しつゝあつた。辭して門を出づれば、北支那特有の黃塵は、之を蔽ふて黑い程であつて希臘式大殿堂の主人公が、果して風雲を呼び起し、龍驤虎變するの日も、遠くはあるまいと思はれた。

十三

段の談話は、彼れの意中と同盟の謀略とを知るに於て、十分である。一言の蛇足を加ふるの要がない。この上自分の爲すべき事は、各派の集合地、輿論の中心點たる上海に就いて、段の所言を試驗すべき事丈であつた。自分は天津を去つて山東を經、還付後の現狀を視察し、青島から海上を上海へと急いだ。上海には革命以後の北京に於て、友人というよりも、寧ろ同志といふべき關係の人々が、集まつて居る。その後自分が新聞紙に據り、如何なる對支意見を發表して居たかは、日本に於けるより遙に善く知られて居る。彼等は自分を迎へて、或は案內の勞を執り、或は通譯の任に當り、數日の滯在中に兩三回の集會を催し、歡迎して與れた。席上では勿論時局談に花を咲かせた。民國革命の元老であり、學界の泰斗である章太炎先生は、何時

もその主席であり、代表的發言者であつた。不思議な事には、從前南北兩派に分れ、南方の中でも又た各派に分れて居た人々が、何時も一堂の內に集まつて、反直運動に關し、皆な異口同音の話をして居る事であつた。直に吳越同舟の觀があつた。たゞ廣東派の人々が共席を共にせぬのみであつた。彼等の言ふ所は、殆ど段祺瑞との間には、十分に意思の疎通がせられて居るのであつた。集會の席上には、現に段祺瑞派や盧永祥派の有力者で、自分とは未見の人もあつた。それ等を除いては、多く民黨各派の人々で、元來平和統一の民主主義者であるが爲、從前は皆な武力主義にも絕對反對し、段張二人とは正面の敵である人々であつた。

それで一番自分が驚いたのは、それ等の人が口を揃へて、直隷派を倒すが爲の局面打破には、已むを得ず武力解決を必要手段とし、武力解決を要するには張作霖の兵力をも利用せねばならぬし、その時局の拾收にも段祺瑞の出馬か必要であることを說くのであつた。自分は前にも言つた通り、奉天で張作霖に平和自治の策を說くまでは、支那の人民は絕對に戰亂に駭き、絕對の平和を要求するものと考へて居た。又た後にも言ふ如く、同樣の意味から、武斷主義軍國主義の段張等兩人をも、亦た絕對に之を排斥するものと考へてゐた。然るに彼等か自身に說く所では、それは勿論の事であるけれども、永久の平和を得る爲には、一時の兵亂は已むを得ぬ。局面の打破を計る爲にも、武力の解決は必要である。直隷派の武力統一や、極惡政府の下に、長く呻吟してその苦痛脅迫を忍ばんよりも、進んで之と戰ふ方か善い。今は一般國民も大體にそう思つて居る。又た張作霖は兎も角、段祺瑞は確に變つた。元の段祺瑞ではない。總じ我等と諒解がある。兎も角彼等に依つて局面を打破せしめ、時局の收拾には、彼等と共に之に當り、平和統一の政治運動に、その局面を轉回し、民衆最後の勝利に歸せしむることが、反直聯合運動の根本精神である、といふのであつた。

兎も角それ丈聞かされても、自分か段祺瑞に尋ねた所と、上海各派の言ふ所とか、同然一致して居る事丈は確められた。たゞそれ丈の事實でも、それか既に支那今後の時局に、一大關係を有つものである事丈は、否定の出來ぬ事實である。その後の問題は如何なる方法に依つて、先づその局面打破の目的を達するか、といふことであつたが、それについても、章太炎先生を始め彼等は一齊に、日本か張作霖を抑へてはいかぬ。之を助けて押し出すまでには及ばぬ、又たそういふことをしてはならぬが、たゞ抑へた尻尾を放せば可い。然らば馬は自然に走り出す。而して局面打破の道が開かれ、その收拾の爲には段か之に

乘つて出る幕が明くのである、と言ふのであつた。當時果して日本が張の馬を抑へたか、又た之を放したら、果してその馬が驅け出すやら、自分には疑問であつたが、兎も角彼等はかく信じて居た。當時から僅か二ケ月の間に、戰爭の端緒が浙江から開かれやうとは、彼等も豫想しなかつたらしい。それは奉天が起たなければ、浙江と廣東之外丈は、到底勝算が立たぬからであつた。但し張作霖と三角同盟との關係は、何時何處に戰場が開かれても、義理上利害上之に應じて起たなければならぬ破目に置かれたのである。彼れとしては少くとも當分眞に日本が抑ふるか、又は之を口實に戰期を延ばすことを利益としたではあらうけれども。

十四

自分に取つて、反直派に關し、最後に殘された疑問は、廣東孫文派の眞の意見が果してどうであるかの問題であつた。孫段張の存在で明白であり、且つその必要は廣東派の地位が、最も急切に之を感ぜしめ、之を首唱したものも寧ろ孫文であつた。去り乍ら自分には、その三者の關係の眞底に、尚ほ多少の疑が殘された。之を段祺瑞に質しても、十分には釋け得なかつた。それは勿論將來の事に關してであるが、當面の軍防に對しても、矢張りシツクリと意氣の投合があるかないかを、自分の參考上確かむる必要があつた。自分は上海着後國民黨の本部に、汪兆銘と胡漢民とを訪問したが、その時は時局談をする暇がなかつた。張繼とは十分に話し合つたが、尚ほ右の三人と一夜胡漢民の宅で會談することにした。

然るに、自分が自分の必要とする疑問を發する前に、汪兆銘から會合の劈頭に意外な質問、否な寧ろ嚴しき詰問の矢が放たれた。それは日本は何故に張作霖を抑へたか、といふのであつた、會見は最初から甚だ氣色ばんだものとなつた。これ迄でその話は處々でもあつたが、それ程苛酷な意味でもなかつた。且つ自分が奉天で張作霖に進言した以外には、日本政府がかゝることを張作霖に言うてやつたか否かは、固より之を知る由もなかつた。そこで自分はたゞ自分の意見として、日本では支那の國民が戰亂を厭ふて平和を欲するものと考へ、且つ一黨一派の援助から、過去の恨みを受けた事もあるから、絶對の不干渉政策を取り、東三省にも同樣平和政策を執らしむることが、支那の利益でもあり、日本の利益でもあると思惟し、張作霖が支那本土の戰局に參加することには、自分個人としても反對な意見を進めた事もある。但し政府として何を言つたかは知らぬと答へた。

すると胡漢民も言葉を添へて、日本政府は現在之を抑へた。張作霖は我々に之を示した。元來日本が絶對不干渉政策を唱へながら、一面に於て張を抑ゆるのは、是れ同じく干渉政策ではないか。且つ滿洲に於ける日本の利益の爲に、張を抑ゆるのも、是又利己本位の政策である云々と詰寄せて、窮追甚だ辛辣であつた。そこで自分も負けて居らず、抑も日本の援段援張政策を攻撃したのは、廣東が始めではなかつたか。我等も勿論之に同感で、同じく之を攻撃して來た。然るに君等は何時の間にか、その段張と交通し、而してその時、理由を更に日本に通ぜなかつたではないか。自分と同じく君等の友人であつた死んだ龜井陸朗は、死ぬまで之を怒つて居た、と言つてやつた。

それにも拘らず、尚ほ胡漢民は益々追窮を罷めず、話を進むることが出來なかつたから、自分は過去は過去でなるとしても現在では自分もその非を悟り、これから先きの事について、君等の意見を聞かんが爲に、來たに拘らず、君等が尚ほその態度では自分は御免蒙るとて、憤然として坐を離れた。すると張繼が見兼ねて胡漢民をなだめた處、今度は兩人の間が怪しくなつて來た。兎角して話は九時から十二時迄續けられたけれども、何となく白けた儘で、前の話が妨げをなし、十分な懇談を遂ぐることを得なかつた。

人のいゝ張繼は痛く之を氣にし、歸りには自宅に伴い、一時過までも談話に耽つた爲、雨降る夜中を自動車で旅館に歸つた時には、門の鐵扉を鎖され、呼べども答へず、已むを得ず附近の見知らぬ日本宿に其夜を明かし、翌朝七時には汽船に乘込み上海を出發したやうな悲喜劇を演じた位であつた。但し馬を抑へた抑へぬの話は、當時でこそ、廣東派は之が爲更に窮地に陷いられたと思ふた爲、深く日本を恨んだのであらうが、今では既に入らぬ心配となり、他日再び彼等と逢ふた時には、一場の笑い話となるであらうが、自分が之を讀者に傳うるのは、廣東派に限らず、反直派は皆な之を恨んで居た事を明かにし、再び類似の失敗を重ねて、張作霖には裏切られ、一般には恨みを買うやうな、愚劣な考へを起させぬ爲である。今の援張論者抔には、かくいふ自分が善い手本である。

十五

自分は今少し廣東派に就いて、語つて置かねばならぬ事がある。抑も現今に於ける支那の政治的勢力を、地層に譬へて見るならば、現在の直隷派は地表の上層である。反直隷派たる段張の實力派や、各黨各派の政團政客は、その地下層である。段祺

瑞も直接に實力を有せぬ點から言へば、一種の政客であるが、同様に兎も角廣東に地盤を維持する孫文も、實力派たる部分から言へば、同じく地下層に屬し、即ち地上層たる直隷派の權力を顛覆して、之に代らんとする目的には、その運動を共にして居る。更に其下には地下水に屬する思想的努力がある。この派は主として北京大學の一部を始め、全國の青年學生に屬するのであるが、思想界の指導者としての孫文は、一面に於ては此派の首領である。

直隷派を倒すのが目的である所の、局面打破の運動には、段張其他の實力派や政客と何等の差別がないにしても、本來の思想その物には、多大の懸隔があるのは、言ふまでもない。自分の第一に憂うる所は、當面の運動にさへ、その思想の關係から完全な一致を缺く節の、存在しては居らぬかの點であつた。多少はそれも認められる。即ち段祺瑞の孫文評の濁ることや、聯省自治を主張とする上海各派と、之には從來反對であつた廣東代表等が、その席を共にせぬこと抔である。但し反直運動丈には、兎に角共同利害の關係上、先づ完全に近く一致して居る。第一に自分の憂うる所は、萬一果して倒直運動に成功し、共和民國の再造、平和統一の建設問題に這入つてから、その思想の差から、政治上にも分裂を來たし、過去の苦き歴史を繰返さぬかの點である。假令孫派に於て、一般の大勢からは、その聯省自治に對する反對を緩和し、自黨の内情からも、共産主義を取消すにしても、尚ほ國民黨としての主義思想は、果して段祺瑞派や政學會等と、その歴史感情を外にしても、兩立一致の望みがあるや、是れ將來に對する一大疑問である。

上海の廣東代表は、現に孫文は段祺瑞と權力は爭はぬが、たゞ在野黨として主義主張を宣傳し、政治的運動に從事する許りだと言つた。一個の主義主張を有つた政黨としての存在は、當然の事であるが、若しそれが利害感情の相違から、再び當然でない爭いを起すやうな事になつたら、民國の再造も、平和統一も、前途は甚だ悲觀と言はねばならぬ。要するに思想は何處迄も、水である。現在では地水下であつても、それが噴出し、汎濫すれば、地上を支配する。而して孫文の廣東派は、假令政治上には何時も、失敗者であつても、思想上には青年支那の支配者である。彼等の運命は將來に在る。自分は彼等がそれを考慮し、善處せんことを切望するが、第一に段祺瑞派が果してその權力を回復し、獲得した場合には、孫派の利害感情を尊重し、無益の壓迫や冷遇を加へて、過去の誤りを重ね、將來の患を貽さゞらんことをも、今から切望して置く。同じやうな事は、熊希齡や梁啓超やの率ゐる研究系派に對しても言はれる。彼等も

今日は失意の境遇に在る。随つてその思想は、幾分左傾して居る。但し彼等は彼等一派の思想學問、就中教育に對し、著しき潜勢力を有して居るのである。英米留學生抔を强めて岐視するやうな量見を有つてもならぬ。

十六

それに就て又た我日本の注意を要する事もある。袁世凱が倒れて、段祺瑞が之に代り、事實上の實權者となつた時、日本も亦た大隈内閣が倒れて、寺内内閣が之に代つた。その時日本としては、叙上の事實に顧み、南北各派を調和して、民國再造の事業を援助すべきであつた。然るに寺内總理の下に、林大使のやうな舊思想の力の崇拜者が居り、無暗に北方を揚げて南方を抑へ、所謂援段政策や西原借款抔をやり、殊更そのバランスを失はしむるやうな加勢をした爲に、竟に今日迄の大亂と、排日の原因ともなつた。今度若し反直隸派が勝つたなら、日本と種々の關係を深くし、支那國民も眞に公平正直な援助なら、喜んで之を希望もし、日本も亦たその時には進んで之を援助せねばならぬが、それには我政府に餘程な考と、その考を正しくて强く代表し得る程の駐支公使を要す。但し何をいうても、支那自身の考へが第一である。反直隸派の人々は、戰爭熱に許り浮かされて居ず、少し靜かに前途の方策を研究し、既にあるものは之を完全し、なきものは之を立案し、民國改造の諸大方針と、政治上にも必要な考慮とを公表し、我日本や列國にも、その據るべきものを示めして置いたら可からう。同樣な事は、我國の學者識者にも之を要せねばならぬ。それが眞に支那援助の道である。

筆を收むるに臨み、一言を吳佩孚の爲に費やさねばならぬ。自分のこの文は、全部反直隸派に同情してのものであることは、隱くされもせぬ。但し自分も吳佩孚が湖南に於て、段祺瑞の武力統一に反旗を飜へした時は、全幅の同情を之に傾け、續いて安直の兩戰共に、同じく吳佩孚の同情者であつた。自分は吳佩孚の必ず勝つことを讀賣新聞紙上で斷言し、二度共に的中した位であつた。何となれば、當時吳佩孚は國民會議による平和統一を標榜し、民衆の味方であつたから、支那の民衆と共に彼れに同情し、その必勝をも豫測し得たからである。然るに彼れは何時の間にか、その和平統一を抛ち、再び段祺瑞の武力統一に復歸した。民衆は之に同情する代りに、之を怨恨して居る。自分は何時でも支那民衆の味方である。随つて今日は吳佩孚に反對し、反直隸派に同情せねばならぬ。同情と援助や干渉の別物であることは言ふをも俟たぬが、更に自己の信念を以て、彼等に同情する。彼等の失敗は同時に自分の失敗である。但し政治運動に入つた後の成敗は、勿論其の限りでない。

大、一三、一〇、一〇

ハリウッド巡禮

メリーピックフオードを見フエアバンクスに會ふの記

近藤經一

去年の十二月十日。私達がロスアンゼルスに着いたその日は、二十年來その地方になかつたといふ大風の日だつた。私達はその二十年の間そこで牧師をしてゐる私の遠縁の從弟の家に招かれて行つて夜おそくホテルに歸つてみると留守に上山草人氏夫妻が訪ねてくれたといふことであつた。で、その翌日、私達は旅の疲れで寢坊をして午近く目をさまして食事を濟ますと直ぐ草人氏の家を訪ねた。待ちかまえて居て呉れたらしい氏は初對面の挨拶を濟ますか濟まさない中に、まるで二十代の青年の樣な元氣な調子で氏が「バクダツトの盜人」に蒙古皇子の大役を演ずる樣になつたまでの顛末及びそれに就ての苦心談から、その映畫に働ひた三ケ月半の間に得た種々の見聞談やら感想やらを細々ときかせて呉れた後で「もし都合がよかつたら明日にでも」氏の働ひたフエアバンクスのステユデオの見物に連れて行つてやらうと云つた。私は喜んで「どうか！」と頼んでホテルに歸つた。もう夜も大分おそかつた。草人氏の話はそれ程長くつきなかつたのである……。

翌日は好い天氣であつた……と云つて、實はそんなことは書く必要はないのであるが、何故と云つて其處では三月の初めから十一月の終までは天氣のいゝといふことはきまりきつたことなのだから……。然しともかくいゝ天氣だつた。草人氏夫妻の四人は草人氏の令息千八君の運轉する草人氏の自働車に乘つて重つて見え草人氏の家を出た

こゝで一寸ロスアンゼ・ルスとハリウツドとの地理的關係を述べておいた方がいゝと思ふのは日本の、然も活動寫眞專門の雜誌にさえ時々それに就て途方もない間違ひが堂々と書いてあるから……。ハリウツドはロスアンゼルスを東京とすれば、まあ

巣鴨か池袋かと云つた様なものと思へば大した間違ひはない、ともかくロスアンゼルスの西方、稍北によつた所にこぶの様にくつひてゐる東西、南北共に約三哩、人口十萬ばかりの隣接都市である。

さて今、私達はそのロスアンゼルスの所謂下町といふビジネス區域の一隅にある草人氏の家を出て、その區域から直接ハリウッドへ通ずる殆んど唯一の道である、と同時にロスアンゼルスとハリウッドとをつなぐ（と云つても勿論全部家つゞきではあるが）最大の道路である所のサンタ、モニカの大道を西に向つて走つてゐるのである。道の幅は三十間位もあらうか、眞中にはその道路とともにハリウッドの通を貫ひて十七八哩先のサンタ、モニカ海岸の遊覧地に通ふ赤く塗つた大きな電車が走つてゐる。然し、そんな電車などに乗る人は極く少い、大ていの人は自働車だ。だから、その自働車の數と云つたら大變なものだ――もつともロスアンゼルスは世界中でその住民に比して自働車の數の一番多い所ださうだが、ともかく私の感じでいふと、それは先づ東京の市街の上を動いてゐる自働車と云はず電車と云はず、自轉車と云はず荷車と云はず、ありとあらゆる輪といふもののつくものの約二倍……か、もつともあるかと思はれる……。その自働車の群の中を我々の車は平八君の妙腕によつて縫ふ様に切りぬけてゆく。

やがて草人氏の家から三哩半ばかり來た所でそのサンタ、モニカの大道は二つに分れるハリウッド大道とサンタ、モニカの大道とに……。（此の二つの道はハリウッド大道から東に分れるサンセット大道といふのと共に三筋平行してハリウッドの町を横切り、その三つの道がハリウッドを形成してゐる）――我々はいよ／＼ハリウッドに來たのだ。現在世界中で作る活動寫眞フイルムの八割を作り、全世界幾億のファンのあこがれの都であり、活動寫眞製作業者にとつて聖地ともいふべき、あのハリウッドに……。そこにはフエーマス、プレヤース、ラスキーのステュデオもあれば、フオックスのステュデオもある、メトロもあればワーナーもある。さうしてチヤツプリンも居ればフエアンバックスもゐる、ピックフオードも居ればタルマッヂも、デミルもゐればルービッチも居る。數をあげたら限りがない、ともかく全世界が、眞に文字通り全世界がその名前を知つてゐる幾百十の人々が居る、そのハリウッドに……。私は自働車の窓から首を出してつく／＼と外を眺めた。自働車はハリウッド大道を右に見てサンタ、モニカ大道に入つた。何れにも新興の街らしい勢が兩側の家々に見られる。北の方で市街を區切る様に立つてゐる一連の小山は此處こそ人間の住む理想の場所だ」

とても云ひた氣に如何にも氣持の好さうな白や赤や、青や黄色の立派な家をその中腹に抱いて暖かい陽の光りの下に横つて居る。私は何時の間にか、それが日本でも未だ寒くてふるえてゐる十二月の中葉だなどといふことは忘れてしまつて居た……。

自働車は公園かと思はれる樣なきれいな墓地を左に見て一哩二哩と進む……。ハリウッドの眞中を通り越して向ふのはづに近づくと段々と道の兩側に空地が多くなる。

「さあ、もう直きだ」草人氏が云ふと、運轉して居る平八君が「もう見えるよ」と云ふ。

「うむ、見える〳〵。……ね。」云ひながら草人氏の指さす方を見ると、おゝ、そこには我々があの「ロビンフッド」で見覺えのある先のとがつた古城の圓塔が見える。それからその向ふに重つて見えそれより高い何だか譯の分らない樣な建物が幾つも、幾つも、る。

自動車はどん〳〵とその變な建物に向つて近づく。

「そら、あの向ふの方のが「セーフ、オフ、バグダツト」のセツトなんですよ」と云つたが、すぐ草人氏は平八君に「何だか小さくなつた樣だな」と云つた。

「うむ」と平八君が答えた。

「もう取りこわしだしたのかも知れない」

「一昨日の風でこはれたんぢやあないか知ら」と少時く間をおいて平八君が云ふと草人氏は直ぐに贊成した。さうして私達に「あの倍位あつたんですがね…」と云つた。見るとそれでも高さは、なほ曾つ上野の五重の塔位はあるやうだつた。

その中に自働車はステユデオの傍に着いた。我々は車から降りた、さうして門の方に歩ひて行つた。門はへいを兼用させて正面の道路につけて建てられたオフィスの中央にあつた、さうしてそこには嚴重な門番が居た。聞く所によると以前は、どこのステユデオでも訪問者を、むしろ歡迎したさうだ。然し、その中に一つには訪問者の數が無暗に増えたのと、一つにはその訪問者といふものによつて如何にステユデオ内の仕事がさまたげられるかといふことが分つて來たのとで今ではどこのステユデオでも特別の紹介のある者でなければ絶對に中に入ないことになつたのださうだ。

「さうだらう、お前」と此の事に就て後日私がルービツチのセツトで見學出來るやうになつたとき、そこの出來たての會社のマネージヤーが私に云つた「今此處に一組の訪問者が來たとすると、どんなことをしたつて此のコムパニーの仕事を一分間は止めるか、後らせるかするからなあ…。さうしてどつちにしたつてその一分間は我々にとつては百弗以上につくんだ。何故と云

つて、我々は此のコムパニーに一日少くとも五千弗は拂ふんだから……。だから、もしそんな訪問者が一日に十組もあつてみろ我々は一日に千弗づゝの損をしなければならない……。そんな馬鹿なことが出來るか……」と。

私は此の人の此の計算に直ちに賛成しやうとはしない。けれどもステュデオへの訪問客の害に就ては單に此の人の云ふだけに止まらないと思ふ。私はルービッチが或る非常にデリケートな然も大切なシーンの眞中に突然現はれた一組の訪問者、見物の爲めにふつとセットを立ち去つて、その一組の見物がそこを立ち去り、進行係の人がそのことを彼に通知して、彼を呼びに行くまで十五分位の間セットに歸つて來なかつた。さうして歸つて來ても少時くの間、どうしても思ふ様に仕事をつゞけてゆかれないでいら〳〵してゐるのを見、さうして、後でアシスタンド、デレクターに少し怒る様に「訪問者はいかん」と云つてゐるのを聞いた。蓋し、ステュデオへの訪問者の害は一組百弗ではきかない。時によつてはその一日を無駄にし、時によつてはその一本の映畫をさえ目茶苦茶にしてしまう様なことがないとは云えない。今日アメリカと云はず全世界のステュデオが訪問客に對して固くその門を閉ぢてゐるといふことには十二分の理由があると私は思ふ。

然し、私達は云ふまでもなく、そのステュデオに働いてゐた草人氏の案内だ。譯もなくその關門を通つて中に入つた。

「大將が居て會えるといゝがね」と草人氏が云ふ。大將といふのは云ふまでもなくフェアバンクスのことだ。

私は生れてから始めて入つた活動寫眞のステュデオといふものに好奇の眼をみはるだけで默つて居ると、

「あれが大將達二人の樂屋ですよ」と浦路さんが云ふ。見ると室の五つ六つもあらうかと思はれる立派な家が美しい芝生の眞中に建つてゐる。

「はあ……」さう云つて私達はそつちの方に歩き出した。すると何處からか「ハロー、ソージン」といふ大きな聲がした。驚いてそつちを見ると未だ三十にならない位の若い男がニコ〳〵笑ひながら我々の方へ歩いて來る。草人氏も「ハロー、ハロー」と云ひながら、その男の方に歩いて行つて握手した。それはそのステュデオのカステング、デーレクター（俳優を選定する役）といふ重要な位地に居る人だつた。草人氏はその男に私達を紹介してから、フェアバンクスは今働いてゐるか、ときいた。

「いや、」とその男が答えた「今日はもう濟んだ。然し、あそこでミス、ピックフォードが働いてゐるから行つて見たらどう

」だ

ミス、ピックフォード！フェアバンクスに劣らない名前だ。

私達は初めて見る本當に世界的活動寫眞俳優を、然もその俳優の働ひてゐる所を目の前に見るといふことから來る緊張した氣持を抑きながら指し示された方に歩ひて行つた。そして高い城の壁の一隅を廻ると、向ふの方に中世紀時分のお城があつて、その前に大勢の人が集つて居るのが見えた。

「あすこだ、あすこだ」誰だかそんなことを云つた。そして私達は足を早めてそつちの方に行つた。その時は丁度撮影が一きりつひた所とみえて皆別に何といふこともせずぶらぶらしてゐた。その人々の約半分はセットに働く人達で後の半分は中世紀の武士や貴婦人のなりをした俳優達であつた。所で、その幾十人かの人々の眞中に、その人々に取りかこまれて、私達はルーベンスの繪などでよく見る首から頭の後の方に妙な後光の樣な白いきれをしよつた中世紀の女王の風をした小さい、小さい女を見た。そしてそれこそ云ふまでもなくドロシー、バルノンにふんしたメリー、ピックフォードその人であつた。

私達は仕事の邪魔になるといけないと思つて余り近くまでは行つてみなかつたから、そしてその後フェアバンクスが紹介してやらうと云つて探してくれたときには相憎く彼女がロケションに出た後だつたし、又その後間もなく彼等はヨーロッパへの旅に出てしまつたしして、それきり私達は彼女に會ふことは出來なかつたので私の彼女に對する印象は實にたはひないと云へばたはひないものではあるが、然し、そのたはひのない印象の中で私の頭に強く刻みつけられてゐる只一つのことは、彼女が、その時彼女の身につけてゐた女王の服裝に如何にもピッタリしてゐたといふことであつた。

こゝに書き添えておくが、私は日本に居て彼女の映畫を見てゐた時分、あの貧弱な身體で、顔と云つても別によくはない、然も芝居ときたらいくらひいき目に見ても決して上手くはない（もつとも此のことに就ての私の意見は彼女の「ロジタ」及び「ドロシー、バルノン、オブ、ハッドン、ホールス」を見てから多少變りはしたが）此のメリー、ピックフォードがアメリカにて、その幾千萬といふ活動女優中の王位に坐し、然もその王位を、此の世の中に於て最も失ひ易き王位といふものの中に於ても最も失ひ易き「活動女優の王位」を十年以上の間保ちつゞけて來たといふことに對して、その理由を解することが出來なかつたばかりでなく、それを想像することさへ出來なかつた。そして私は今日でも、日本の多くのファンの中には、私が曾て抱いた此の疑問を抱いて居る人々があるだらうと思ふから、此

のことに就て一言しやうと思ふのであるが、それはおかしなことではあるが「日本に居ては決して理解の出來ないこと」であると同時に「アメリカに行つてみれば、實に譯なく分ること」なのである。といふと、ではそれは何か？一言で答えるならば、それはアメリカに於ける活動寫眞製作業そのものの組織であり、而してその組織を巧みに利用し、操縦してゆく所のビックフォードのビジネス、ウーマンとしての頭であり、手腕である。とこれだけ云つたのでは結局何のことだか分らないかも知れないけれど、此のことに就ては「アメリカに於ける活動寫眞製作業の組織と俳優の位置」とかいふ様な題目で稿を別にして書いて見たいと思つて居るから、その方にゆづることにして、これだけにしておくが、ともかくビックフォードといふ女は恐しろく頭のいゝ女らしい。

そして今も云つた様に所謂ビジネス、ウーマンとして異常の手腕を持つてゐる女らしい。此のことに就てはルービッチが彼女を評してゐる言葉があるからそれを引ひてみやう。曰く「ミス、ピックフォードはいゝ女優である。然し、若し彼女が彼女の今の職業をやめて映畫の製作者（プロデューサー）となつたならば、世界は今まで曾て見出さなかつた程偉大な製作者を見出すであらう」といふのである。然して事實彼女は、もうあと三本か四本畫を作つたらそれで女優としての生活はやめてプロデューサーになるといふことを彼女自身でも宣言して居る。彼女がさういふことを云つてゐるからこそルービッチも遠慮なく、あゝいふことが云えたのであらうが）さうしてその場合プロデューサーとしての彼女の最初の仕事はルービッチを監督として、リリアンギッシュをマーガレットとしてゲーテーの「ファウスト」を映畫化するといふことださうだ、此の着眼一つをみても、私などには彼女に對してのルービッチのあの評言が十分裏書きされるやうに思はれる。

さて、然し道草はこれ位にしてをいて先に進まう。私達は少時く其處に立つてみてゐたが、猶々たるもので何時次のシーンの撮影にかゝるか分らない様な風でピックフォードは、私達の傍を通つた男にきくとマーシアル、ニーランだといふゴルフ、パンツをはひて、ねずみのジヤケツを着た一見勞働者の親方と云つた樣に見える男と談笑して居る。そこで私達は先づ場内を一覽しやうといふので其處を去つた。そして大きな城壁を一つくゞると、そこは五千人のエキストラを使つて撮つたといふバグダッの宮殿内の大廣間だ。セットの作りは寫眞で見て悲愁してゐたよりはヅッと／＼チヤチで、「なんだ、こんなものか……」といふ幻滅を感じた位なものだつたが（然し考え

てみれば、そのセットがチャチであるといふことは輕蔑すべきことではなく、反對にむしろ驚くべきことではないか、それがチャチなればチャチなる程驚くべきことではないか。何故と言つて、そのチャチなセットで寫眞では立派に本物のやうな感じを出させるのだから、いや、寫眞にすれば立派に本物の様な感じが出る様にそれを作ることが出來るのだから……。といふと、私は「必要にして十分なり」といふアメリカ主義にカブれて、それを藝術の上にまで及ぼすふとどき者と云はれるかも知れない。

然し、私は敢て云ふが、少くとも現代に於ては此の「必要にして十分なり」といふことは、その善惡は別問題として、事實上、獨りアメリカだけではなく、世界中の如何なる國に於ても人間の生活上「必要にして。」且つ「十分としなければならぬ」標準といふか、境界ではないだらうか？そして藝術も此の人間生活の一部である以上、これ亦それの善惡は別問題として、事實上此の「必要にして十分」主義に傾かなければならないのではないであらうか？少くとも創作とか、繪畫とかいふ様な畫者か、アトリエに引きこもつて、殆んど何等の財政的資力の必要なく、然も自分只一人で出來る様な仕事をのぞいた他の藝術、實い意味の總合藝術に於ては……。）その大きさに於ては實に驚くべきものであつた。私達はその人一人居ない大宮殿の中をぬけてフェアバンクスがこれから一人で撮る　セーフ、オブ、バグダッド」の中のいろ〳〵のトリックのセットや、これは今度始めて映畫に使つてみたのだといふ實に精巧なガラス細工のミニアチュアや（そこに居た若い技師がいゝ人で、わざ〳〵私達の居る前で一つの小さな船を作つてみせて呉れた）ダークステージや、エレジンルームや、衣しやう部屋から樂屋まですつかり見て廻つて約一時間の後に、もう始めてゐるかと思つて先刻のお城の前に還つてみたが、その時はもうその日の撮影は終つてしまつたのだらう、そこには人一人居なかつた。

「こんなことなら、もう少し待つてゐて、ピックフォードに紹介してもらへばよかつた」そんなことを考へながら私達は門の方に歸つて來た。そして大將（フェアバンクス）も居ない樣だし、もう別に見るものもないしするから、ハリウッドの町でも見物して歸らうかなどと話し合つてゐた。とその時――おかしなことには、その時の印象は今でも私の頭に明つきりと殘つてゐる程強いものであるにもかゝはらず、私はその時私が偶然てつちを見たのか、それとも私の傍にゐた誰かに注意されてそつちの方を見たのだつたかを忘れてしまつたが――ともかくその時、私はあの芝生の眞中に建つてゐる樂屋の方から一人の男がピヨコ〳〵と歩ひて來るのを見た。さうしてそのピヨコ〳〵と

歩ひて來た男の顔は世界幾千萬の活動ファンが、只一日見てその誰であるかゞ分る顔であつた……。

ハリウッドに居る間に、私は映畫の上で知つてゐる隨分多くの顔の持主に出會つた。然し、それらの顔の大部分はスクリーンの上に現はれた彼等の顔とは似てもつかない（中には「あれがさうだ」と云はれても一寸信じられない様なのさえあつた）様な顔だつた。極く似たのさえ教えられなければ明つきりさうだと斷定することは出來ない様な程度のものだつた。そして、此の點で、今私達の前に現はれたダグラス、フェアバンリスのそれは私の見た中での只一つの例外だつた。彼の顔は前にも畫いた様に一度でも彼の映畫を見たことのある人には何時何處で會つたつて只の一日でそれと斷定することの出來る程映畫の中の彼の顔に似てゐた。たゞ單に顔だけでない、そのピヨコ／＼と歩ひて來る歩き付きから、身體つき、段々と分つたことだが話の仕方、笑ひ方、手の振り方から足の擧げ方まで、一として映畫の中に於ける彼のそれらに似てゐないものはなかつた。要するに彼は、日常の彼そのまゝをもつて彼の映畫に現はれるので、此の意味に於て、私は、少くともその外形に於て彼位自分そのまゝのものを映畫の中に出してゐる俳優（そのことが俳優として好いことであるか、どうかは別として）はないと思ふ。そして此のことは（勿論それを信じてもらうとして）それだけで、フェアバンクスの映畫を見たことのある人には、彼の身體や動作やが如何にキビキビしてゐて氣持のいゝものであるかといふことを思ふに十分であらうと思ふ。事實彼は實に氣持のいゝ身體と動作との持主である。が同時に彼は人としても亦彼が彼の映畫の中で好んで演ずる役柄の人物の様に弱き者を、困れる者を援ける義俠的精神に富んだ立派な人間で、彼のお陰で今日アメリカの活動寫眞界に名を爲してゐる者は少くないといふことである。その一例——と云つても、これは非常に適切な例とは云ひにくひかも知れないが、何故と云つて、此の場合その相手は、彼のお陰で名を爲したといふのとは少し違ふから、然しともかく兩者の役者が大きいし、又最近の事實だからこれをとつてみるが、それはあのドイツの生んだ最大のデレクター、ルービッチが二年程以前初めてアメリカへ來たときのことである。世間ではルービッチはピックフォードに招聘されたのだとか、ラスキーと契約があつて來たのだとか云つてゐるが、實はそれらは皆余り確然たるものではなく、おまけにその當時は未だ戰爭の記憶が新らしくアメリカ國内に於ける反獨熱が旺んだつた、と同時にその敵國人である彼の盛名に對する嫉妬もありで、ハリウッドに着いたときの彼の立場といふか、境遇は實に

六ケ敷しいものだつたのださうである。（私は此のことをルービッチ自身からきいたのだから確かだ）所で此の六ケ敷しい立場にあつた彼に先づ最初のチャンスを與えて、アメリカに於て彼の地位の礎を作らせたのが外でもないフェアバンクスその人だつたのである。彼は彼の妻君のピックフォードと相談してルービッチを彼女の監督として聘すると同時にその事に對して前に述べた樣な理由から同業の間に猛然として起つた批難やら攻撃やらに對して一夕の宴を張り、その批難、攻撃の急先鋒であり、頭目であると目されてゐる幾十の人々を招き、その席上、さういふ批難、攻撃には何等の理由のないことを堂々と演説し、斯くして彼等の口を閉ざしめ、斯くしてルービッチをして何等の顧慮なく彼のアメリカに於ての最初の作品「ロジタ」を製作せしめたのであつた。と云ふと或る人は云ふかも知れない、それは彼の如く自己の位地がその社會に於て大盤石の如く絕對安全な人にして初めて出來ることで云々と……。それはさうかも知れない、否、さうだとする。然し私の云ひたいのはかうだ。此の世の中には彼の如く絕對安全の位地にありながら後進の爲めに相當なはをうかほんの僅かの援助をさえをしむ人が多い、その世の中に於て、その困難しつゝある後進の爲めにそれだれの援助を與え得た彼はともかく義俠的精神に富んだ人間だと云つてもいゝではないか？ 然も、如何に絕對安全とは云え、何と云つても人氣商賣といふ不安のある俳優として、然もなほ一層本當のことを云ふならば、云ふまでもなく此の世の中に絕對安全な位地などゝいふものはある筈はなく、從つて彼は彼がそれを爲すことによつて彼の位地を失ふかも知れないといふ可なり有力なる理由のある危險を冒して……。私は其處に彼ドグラス、フェアバンクスの人間としての眞髓を見る樣な氣がする。そして彼の人間としての此の眞髓こそ、彼のあの氣持のいゝ外觀も手傳つて力あるものではあることはいふまでもないが、彼が彼の映畫を通して世界の人氣を有する髓心の理由ではないかと思ふ……。但し、私は不明にして彼に會ひ、彼と語をするまでは彼の此の人間としてのよさを眞髓を彼の映畫を通して感受することは出來なかつた。それは、思ふに演技批評家としての私の眼が、どう見ても余り上手くはない彼の演技に觸ひせられて、その裏にひそむ人間としての彼を見、感ずることが出來なかつたからであらう。とにかく私は白狀するが、彼に會ふまでは、ちつとも彼を好きではなかつた。然し、彼に會つて大好きになつた。故に、もし、彼が、彼の今までの映畫に於ては、常に彼の余り上手くない演技の陰にかくれて、子供か、或ひは子供の如き純な心を持つ人、少くとも私の如きたまじいな

演劇批評眼に禍されてゐない人間にのみ、然も、恐らくはたゞ淡然と感受されてゐるにすぎない所の此の人間としての彼の眞髓を彼の外觀の如くありのまゝに彼の映畫に現はすことが出來たとしたら、私は思ふ、彼の映畫の愛好者は恐らく現在の十倍になるであらう……と。

然し、彼に就てのぜい言はこれ位にしておかう。太い白の運動ズボンに、白のスウェーターを着たフェアバンクス自身が今我々の前に現はれたのだから……。その彼の姿を一見したときの感じを私は今でも明つきりおぼへてゐる。と言つて、それはどんなものかときかれると一寸答へに困るが、ともかく、云つてみれば、まあ「あ!、これだ、これだ……」と言つた樣な好奇と驚きと喜びと混つた樣な一種異樣な氣持だつた。そして、それに、もう、一つその時私の感じた特殊な感じを附け加えれば、それは私が今私の目の前に出て來た私の初めて見るその人に對して何だか十年も前から知つてゐる人を見る樣な氣がしたといふことである。それは私が彼れの映畫を通じて幾度も幾度も彼に接してゐたそして彼が前にも書いたやうに、その映畫の中の彼にそのまゝであるといふことから來たものであるといふことは云ふまでもないが……。

草人氏は一人で「大將」の方に步ひて行つた。さうして一言二言言葉を交すと私の方に向つて手をあげた。私達は早速そつちの方に步き出した。有名といふことに於ては世界中の何處の國の君主、宰相にも負けず、その仕事に於て眞の世界的の位置と盛名とを保持しつゝある人間に面と向つて會ふといふ私にとつては生れて初めての經驗の前に胸を躍かせながら……。

私達が行つて、草人氏が紹介の言葉を云ふと、その間ニコニコ笑つてゐた彼は "oh. I am very glad to meet you" ときまりの文句を云ひながら手を出した、その手は、それを差出してゐる人の顏とともに眞黑に太陽にやけた、如何にも運動家か何かにありさうな頑丈な手だつたこれを握つたとき、それは實に暖かひ手だつた……。私は思ふ。手といふものは、顏とともに、人間の身體の中で最もよく其の人の性情といふか、感じを現はしてゐるものではないかと……。從つて握手といふものは人と人とが會つた場合、いやしくも人と人とが會ふといふことが本當に會ふといふことでありたいと願ひつゝ會つた場合、實に此上もない適切な、といふより必要にして換え難い唯一の禮儀といふか、挨拶ではないかと……。少くとも私にとつては或る人とお互に十遍づつ頭を疊へつけてお辭儀をし合ふより、只一度その人と手を握り合つた方が十倍もその人に會つた樣な氣がする。だから私にとつて或る人との最初のお辭儀は殆んど何もの

でもないが最初の握手は非常に重要なもので、私はこれによつてその人の性情、ひととなりの大體が分るやうな氣さえする……。そのフエヤバンクスの最初の握手は實に私に、暖かひゝ感じを與へた。

私と妻とは、目茶苦茶な英語で代る代る殆んど十年位も前から彼の大抵の映畫は日本で見てゐること、さうして非常に感心してゐる（これは少くともその時の私にとつては單なるお世辭に過ぎなかつたが）ことなどを述べた

「サンキユー、サンキユー、」そんなお世辭はそれこそ本當に聞きあきて居るであらう彼は、それでも一々さう云つては聞いてゐたが やがて自分は今丁度セーフ、オブ、バグダットのプロジアクションを見に行くところだから一所に來て見ないかと言つた。

「これは大變なことなんですよ」と試寫室に入りながら浦路さんが云つた

「最高幹部でなければ此處には入れないんですからね……」幾人も働いた日本人の俳優の中でも其處に入つてその映畫の試寫を見ることを許されたのは草人氏だけだといふことだつた。私達は私達に對するフエヤバンクスの小さな試寫室の中で彼が正味百五十萬弗をなげうつて作つた彼の最大作の試寫（と云つても、それは勿論一部分に過ぎず。然も或る幾つかの場面の如きは同じやうなものが幾通りも幾通りもつゞいて寫されたりしたが、然し、それこそ本當の意味の試寫といふべきであらう）を見た。フエアバンクスは默々として熱心にスクリンに映る數々の場面を見てゐながら時々「此處はこれでいゝ」とか「此處はかうしたければいけない」とか云ふ、と、その彼の云ふことを小さな電氣スタンド付いたテーブルを前にした一人の男がどん〳〵ノートに書き込んでゐた。聞くと「バグダットの盜人」を撮り始めてからその時は既に三十週間目だといふことだつた。そしてその間フエアバンクスは日曜をのぞひて一日として休むことなく、然も多くの日自分自らもその映畫の撮影に働いた上なほ且つ毎日さういふ仕事をして來たのださうだ。

「だから」と草人は云つた「大將なんかもう、これで何十遍これを見るか分からない。恐らく何百遍だらう」と。

あゝ、一度見るさえ時にはあき〳〵する映畫を。然も印刷で云へば校正刷と云つた樣な見にくひ未完な映畫を、へくら自分のものとは云ひながら何十遍、何百遍と見る！それはたゞそれを考へるだけでもゾツトすることだのに、今私の傍で現在それをやつて來た人、さうしてやりつゝある人の態度は又どうだ！まるで初めてその映畫を見る人の熱心さで、これを批評し改善し

つゝあるではないか、私は其の人の根氣と精力とに驚倒すると同時に、何事によらず世界に認められるだけの仕事をするといふことは大變なものだといふことをつくづく思はないでは居られなかつた。――そして、此の私の感じは後にチヤツプリンと會つたり、その話をきいたりしてなほ一層深くなつた。然し此の事に就いては私が恐らく一番多くの書くべきことを持つてゐるであらう。チヤツプリンに就ての稿に譲ることにしやう……。が、ともかく人間が此の世の中で盛名を保つて行くと云ふことは大變なことだ、いや、私に言はせれば、それはむしろ恐ろしいことだ……。

試寫は一時間の程で終つた。私が大變に面白かつたと云つて禮を云ふと「さうか……」と彼は云つた。私はその彼の語氣が余り、といふか少くとも意外に熱心なので一寸ビツクリした。彼はつゞけた然し、これは未だ未完成なんだ。これからいろいろのシーンが入るんだ……」と一寸切つて「然し、本當にお前にも興味があつたか？」ときゝかえした。さうして私が「非常に……」と答えると彼は私が自分で云ふたその「非常に……」といふ言葉がまんざら嘘ではないとしても、何だか少し恥しくなつた程嬉しさうに「さうか……」と云つて私の顏を見た。

…成る程、ものが東洋のもの、少くとも彼等が東洋のものと思つてゐるものだから、それでなのだな……とその時私は私の批評に對しての彼の興味といふか注意に對して、さう解釋した、が然し考えてみると世界の人間を相手にしてゐる彼の如き人にとつては、單に或る特殊の映畫のみでなく、常に常に世界中のあらゆる國の、あらゆる階級の人の批評が大切であり、從つて又それがきゝたいのであらう。であるから、今東洋の島國かゞ太平洋を渡つて來たばかりの人間の彼の映畫に對しての批評は、たとえそれが東洋のものであらうが、なからうが。彼にとつては大切にして、興味のあるものなのであらう……。そしておざなりといふことを知らないアメリカ人の一人なる彼は私の「非常に……」といふのをそのまゝに受けて、あれ程喜んだのであらう……。それにつけても日本人といふ人種は、否、少くとも私といふ日本人は何といふおざなりの多い人間であらう？それを思ふ度に、私は今でもあの時フェアバンクスに云つた「非常に…」が恥しい、さうして、何故もつと眞地目に批評すべき所は批評してやらなかつたらうかと思ふ…。然し、又それをすれば、私はそのことによつて彼のある子供の樣な心を傷つけたかも知れない、否、少くとも初對面の彼に對しての禮を失したかも知れない、さう考えるとアメリカ人にもやはりおざ

なりは必要なのか？否、それはたゞにアメリカ人だけにではない、此の世の中の總ての人間にとつて必要なものかも知れない、少くとも人間が一所に此の世の中に生きてゆかうといふには…。然し、それにしても日本人が日本で使ふおざなりは人間が一所に生きてゆく爲めに必要以上の樣な氣も又する。

藥も度をすごせば毒になる…。そんなことを考えながら私達は外に出た。冬でも暖かい南カリフオルニアの陽も既に落ちて、流石冷氣身にしみる夕暮時であつた。私達は親切に、又來い…と云つて吳れるフェアバンクスに別れを告げて、その思ひもかけず收獲の多かつた半日の思ひ出の糸をくりかえしながら、丁度燈火のつき初めて美しいハリウッドの町を通つてホテルに歸つた。

斯くしてハリウッドに於ける私達の第一日は過ぎたのであつた。

島山

──壹岐にて──

釋迢空

葛の花 ふみしだかれて、色あたらし。この山みちを行きし人あり

わがあとに 歩みゆるべすつゞき來る子にもの言へば、恥ぢてこたへず

この島に、われを見知れる人はあらず。やすしと思ふあゆみのさびしさ

ひとりある心ゆるびに、島山のさやけきに向きて、息づきにけり

もの言はぬ日のかさなれば　稀に言ふことば拙く　心足らふも

いまだ　わが　ものにさびしむさがやます。沖の小島にひとり遊びて

蜑の家　隣すくなみ、あひむつみ湯をたてにけり。荒磯のうへに

蜑の子のむれにまじりて經なむと思ふ　はかなごゝろを叱り居にけり

蜑の子と　つひにまじらむ時はあらじ。若きはたちはむなしくありけり

蜑をのこのふるまひ見れば　さびしさよ。脛長々と　砂の上に居り

赤ふどしのまあたらしさよ。心いたみ　蜑の若子(わくご)を見まもりにけり

向ふ三軒兩隣り

高畠素之

舌代

世の中がかうなつて来ると、何が癪に障るかと聞かれるよりも、何が癪に障らないかと聞かれる方が、よつぽど答辯するのに楽である。上はダンス耳隠し連の跳梁から、下は認識不足阿呆駄羅思想の跋扈まで、見るもの聞くもの、癪の蟲を刺戟する材料ならぬものはない。それを一々取り上げてゐた日には際限がない。依つて玆のところは、向ふ三軒兩隣りの思想屋をコキ下ろし、時に取つての胃散がはりにしたいと思ふ。

平和主義

日本が軍國主義だといふのは、世界の流行語であるばかりでなく、日本に於ても素晴しい勢力になつてゐる。民間は元よりとして、この頃は政府の役人や海陸の軍人などにも、大分その信奉者が多いやうに見受けられる。ガキも人數とあらば致し方もなく、たうとう政府までがそれに感染して、軍縮に次ぐ軍縮といふ鹽梅である。それほどの日本なら、どれほど軍費に蕩盡してゐるかと思へば、總豫算に對して五分の一、一人あたりの割勘で四圓五十錢に過ぎない。その癖、日本攻擊の親玉たる英國は十一圓三十錢、佛國はその上の十八圓、最も渺い米國でさへ五圓二十錢だから笑はせる。

日本が軍國主義だといふなら、それでもいい。その代り歐米列國は超日本級の軍國主義でなければならない筈である。それを日本だけに惡名をきせて、自分は正義人道の標本みたいた顔をしてゐるところ、さすがに偉いものだと感心せざるを得ない。これに反して、干唐の出鱈目を眞に受け、日本人の癖に日本の惡口に專念してゐる手合も、また見上げた馬鹿だと感心するの外はない。而もそれが、日本の新思想家と稱せられる人々

によつて代表されてゐると來ては、毛唐の方でも藥が利きすぎたに驚ろくであらう。

しかし、毛唐の唱へる平和主義を、正眞正銘の本音だなどと考へるのはお目出度い。毛唐に限らず日本人でも、凡そ人間といふ奴は、自己の惡を意識することを恐れるものである。よしそれを意識したにしても、何かそれを埋め合はせる善行をするか、善辯を口にするかして、他人にも善らしく誇示し、自分にも男らしく得心させようとするものである。その極端な例をいへば、女郎屋のヤリテ婆などに限つて、神信心には狂的な眞劍さを見せるものである。これは平素の罪惡意識を、一片の信心で帳消しにしようとする眞理の現はれたに過ぎない。毛唐の平和主義にも、同樣の心理作用が顯はに看取される。ピンからキリまで、そればかりで動いてゐるとはいへまいが、少くともそれを見越して考へなければ、結果に於て飛んでもない誤算を招くに相違ない。

この考へを余りに懷疑的だといふなら、毛唐平和主義を純粹な感情の所產だとしてもいい。更に好意的に解して、世界の傾向が平和主義に向つて、進みつつあると見てもいい。しかしその傾向の如何に拘らず、人類は未だ最後の解決に武力を棄てようとしてはゐない。武力が最終の審判者だといふ念慮を棄てない限り、平和主義も畢竟は『祖國の正義』の粉飾である。即ち第三國に對しては平和主義者であり得ても、自國の利害休戚に關しては、つひに好戰主義者たるを免れないのである。これは善惡の問題でなく、萬人を動かす現實の力である。歐洲大戰當時は交戰各國の社會主義者や宗教家が劍戟を取つたのも、あながち變節とばかりはいへない點がある。よしんば變節であるにしても、土壇場に至れば變節を敢てするのが、人間の常態であることを知つて掛らなければならぬ。最後の場合に臨んで、さういふつもりぢやなかつたといつたところで、それはつひに及ぶところではないのである。

國際聯盟が成立された時、華府會議が開催された時、人類の永久平和が來たかの如く吹聽したのは、世のいはゆる平和主義者に他ならなかつた。而も華府會議は英米の世界的支配を維持するための、他の國家の軍備縮少だつたことが暴露された。そして今や、國際聯盟は歐米聯盟たるの實を備へ、日本が寄つてたかつて袋だたきにされてゐる。それでも非戰だ、平和だといつてゐるのが、性も懲りもない日本の平和主義者である。それが有閑階級の觀念遊戲欲を充たす道具である間はまだしもとして、勞働階級まで尻馬に乘つて騷ぎ立てるのは、どういふつ

もりかその了見の判斷に苦しむ。

資本家の搾取に對して、萬國の勞働者が團結するのは、それとしての意義もあり、また必然性もあることとである。しかしその反面には、萬國の勞働者が團結することの出來ない必然性があることも忘れてはならぬ。人種的理由と經濟的理由とを盾にして、先鋒として日本人排斥をやつたのは、加洲の組合勞働者に外ならなかつたことが、生きた證據を突きつけてゐる。どうせ搾取されるなら、誰に搾取されるのも同じだなどといつたところで、戰勝國の國家と資本家から、二重の搾取をやられたんでは、國敗れて山河もない始末ではないか。鮮人勞働者を憐憫するほどの道理が解つてゐるなら、せめては同情されない身分を維持することに、物事の筋道を考へ直すべきである。

自由主義

人生れながらに自由だといふ御託は、表現の味としては面白さもあるが、理屈としては通用しない言葉である。翼なくして鳥の自由なく、鰭なくして魚の自由ないこと、既に人間として或る種の自由を制限されてゐる證據である。然るに世間には、翼が與へられず、鰭が與へられぬといつて、不平を滾してゐる者がある。言論の自由、集會の自由、出版の自由、學問の自由、等、等を唱へるのがそれである。形容語としての文字を離れたそんな自由が、この世の娑婆にあつて耐つたものぢやない。

野暮をいふやうだが、國家はそれ自身に於いて自存の目的を持つてゐる。從つて、それの自存性を傷碍する如き、言論、集會、出版、學問等を制限すること、チブス患者に生水を禁ずるやうなものである。口が如何に渇を訴へたとて、身體髮膚の全體的生命を完うせんとすれば、生水を飲ませないのが、至當にして正義な道である。國家の生命を危險ならしめる言説行動であれば、國家がそれを取締るのは正當防衛といへよう。この場合、單位的に自由を追求して根本の害惡をなす國家を破壞しようといふのが、無政府主義の原始的な立場である。從つて、それにはそれとしての意義もあり、その限りに於いての筋道も立つてゐる。しかし、世間のかうした論者の多くは、身體は身體としての生存を主張しながら、同時に口腹の慾をも充たさうとする貪亂者である。

具體的な例を求めれば、世のいはゆる官憲横暴論者である。始めは散々に小突いたり、蹴飛ばしたりして置いて、官憲が本氣で怒つて來ると、今度は却つて横暴呼ばはりをする者である。デモクラシ屋、文化屋、主義屋、これ皆その徒黨である。ブルジオア國家であらうが、プロレタリア國家であらうが、

凡て國家と名がつくものなら、支配と服從との縱斷的組織である。そこに强制があり、不自由があることは、どうしたつて已むを得ない。國家を認める以上、豫めそれは覺悟しなければならぬ根本義である。ところが例の官憲橫暴論者は、國家はいいが、その存立を危險ならしめる言動を取締るのか、いけないといふのである。橫暴ならざるを得ないやうなことを仕向けて置いて、つまり他人の頭を擲つて置いて、對手の怒るのは怪しからんと、憤慨するやうなものである。これでは、何ぼ何でも蟲が好すぎる。ところが、蟲のいいことは、單にこればかりで止つてゐない。かういふ手合に限つて、日本の官憲ばかりか、言論壓迫の親玉であるかのやうな語氣を洩らす。蟲が好すぎるよりも、頭が惡るすぎるのである。

國家は今いふやうに、支配と服從の關係によつて成立してゐる。プロレタリアが支配階級にあれば、あらゆるブルジオア的な、もつと包括的にいへば、あらゆる反プロレタリア的な言論行動を、遠慮會釋もなく取締ること、ブルジオアア國家に於いて、あらゆる反ブルジオア的なそれを取締ると同樣に、妥當にして必然な手段である。現に勞農露西亞の如き、總ての出版物は政府機關の出版局の手によつて成され、苟くもボリシエキズムを支持するものなら、紙屑に等しき原稿も出版され、苟くもボリシエキズムを非難するものなら、如何に科學的に藝術的に價値あるものでも、闇から闇へ葬つて顧みないのである。言論壓迫もこれでは、秦の始皇帝あたりの生まやさしさではない。然るに日本の官憲橫暴論者の多くは、何らこれを咎めようとはしない。それどころか、過渡期の現象として已むを得ないと稱し、もしカウツキーやゴールドマンの如き非難者が現はれると、露助のいふことをその儘に眞似て、ブルジオア自由主義の何のといふ。過渡期だらうが何だらうが、理不盡に二つはない筈であるに拘らず、日本官憲の如き緩漫なる取締政策に對してのみ、怨言を放つてゐるのである。

勞農露西亞の例は極端に過ぎて、耳裡に入り難いといふなら、勞働黨政府を戴く英國の例にしよう。最近の外電が報ずるところによると、同國の共產黨機關紙『勞働者週報』の一文が、取締りの槍玉に擧げられたさうである。理由は『軍人の奉公心を阻害する嫌疑』があるとのことで、内容は勞働爭議の關係を匂はしたに過ぎないといふ。問題の波及するところ、嘗てこの問題に就いて考察を試みたマクドナルド・スノーデン・ヘンダーソン等をも、法廷に引出さねばならぬやうな破目となり、有耶無耶にケリをつけたと傳へられてゐる。オチは聊かアッケないが、日本なら、こんなことは最初から問題にされさうもな

い論旨である。慾をいへば、せめて日本は官憲も、勞働黨政府ほどに壓制的ならしめたいものである。さるにても、わが大日本帝國は、彼等官憲横暴論者に取つて、何と棲みよき樂國ではないか！

至上主義

至上主義にも色々あるが、古今東西を通じて、最も需要の旺盛なのは、藝術至上主義と勞働至上主義とである。この頃では、もう一つ學問至上主義といふのが殖えて來た。『生命は短し、されど藝術は永し』とか『勞働は神聖なり』とか『學問の獨立』とかいふ標語は、夫々自惚れを憶面もなく、公表した言葉である。

何の至上主義によらず、この連中の滑稽なことを、自分のやつてゐることを、身も世もないほどに最高唯一だ、と自信してゐる點である。思春期の少女は、始めて惚れた男を、三千世界に二人とない對手だと思ひ込むものである。しかし年數を食ふに從ひ、世間の振割りが見えるやうになれば、アバタはアバタ、エクボはエクボと見定める餘裕もでき、達觀すれば、六千萬の人口の半分は男だと解るやうにもなる。花恥づかしき乙女の思ひ上がりなら、まだしも色氣があつて愛嬌になるが、いい加減、娑婆の波風に揉まれた筈の大の男が、ゲージツのガクモンのといつてゐるのは、喰飯よりも痴癖が先きに立つものである。

藝術至上主義者が、最も見つともない馬脚を露はすのは、展覽會の出品に撤回を命じられた時である。その作品ひとつが陳列されないため、展覽會そのもの、擴大しては藝術そのものが生命を斷たれたやうな騷ぎ方をする。そして抗辯するところは、千遍一律の官憲の無理解である。この點、聊か官憲横暴患者と症狀を一にする。しかしこの世は幸か不幸か、藝術のために存在してゐるのではない。況して一展覽會の一出品のために作られたものでもない。藝術の本來的な性質が、人生の慰樂として生産されたものであるかどうかは別として、現在の藝術消費者の需要するところは、慰樂的要素の享樂以外に意味は認められない。藝術そのものが既に人生の慰樂であるとすれば、その藝術品が慰樂に反する効果を齎すか、或は、慰樂を與へても、社會の淳風美俗と認められるものを壞亂するものなら、取締りに任ずる當局が、焼いて喰はうと煮て喰はうと、致し方がないことを觀念しなければならぬ。憂世の定めは、總てさうしたものである。

學問至上主義も同じことである。遠くしては森戸事件、やや

近くしては早稻田の研究室捜査事件等に於いて、民間の學者思想家といふ連中が、一齊に『學問の獨立』を唱へて抗議したものであつた。學問の獨立などといふことは、元來あり得べからざる妄想であるが、よしあつたにしたところで、それが一教授もしくは一研究室にのみ、許さるべき特權ではない。民間思想家は常に『學問の獨立』を侵害され續けてゐる。法は一視同仁だといふなら、民間思想家同様の取扱を受けて騷ぎ出すなどは、土臺學問を輕視してゐる證據である。また研究室を蹂躙されて苦情をいふにしても、裁判官が道樂半分でしたことでない以上、つまりそれ相當の理由があつて法の適用を受けた以上、研究室たると女郎屋なるとの論ではない。研究を邪魔されたといふ理屈が立つなら、女郎屋では營業を妨害されたことに、立派な根據が立つわけである。商賣として、學問の切賣りが高等で、貞操の切賣りが下等だといふやうな議論は、原則的に成立する筈がないのである。

殘る勞働至上主義は、前の二つとは大分面目を異にしてゐる。何商賣でも、それを商賣として飯のタネとする段になれば、さう大して樂な仕事はあり得ない。中でも筋肉勞働は一番引き合はぬ。ならうことなら、避けたいのが人情である。皆が皆、その人情のままに行動されることは困ることであり、且つその引き合はない商賣人を慰撫するために、社會の優勝階級が、狡智にも考へ出したのが勞働神聖論であり、職業高下無差別論であり、大地還元論であり、流汗鍛錬論である、その意味に於て、勞働至上主義は勞働至下主義の、變形的現はれだといつて差支へない。それだけに、勞働至上主義の内容は複雑多岐に亘つてゐる。

中でも一番苦々しいのは、有馬頼寧の草むしり、協調會幹部林平馬の悴の納豆賣り、頻々と見る學生の勞働體驗熱等の、社會的傾向として現はれた勞働至上主義である。彼等にして見れば、何に不足なき主人であり息子である。憚りながら、筋肉勞働をしなければならぬ身分ではない。その身分を以て、勞働者の仲間に入つたり、入る眞似をすることは、徹頭徹尾道樂だといふより外に評しようがない。何となれば、彼等が勞働者らしく振舞ふことは、それをすることによつて、結局、慈悲を施してゐるやうな快感を覺えたり、平常勞働などをしたことのない經濟的優越を誇示したり、自ら享樂したりするために過ぎないからである。もしさうでないやうに考へてゐるとしても、嫌やになればいつでも飽食暖衣の生活が待つてゐる氣分と、一日の汗で一日の米を買はねばならぬ、その日暮しの勞働者の悲痛な忍從とは、苦痛を感ずる程度に於て、天地霄壤の差違である。

最も嚴肅な氣持ちと誇稱してゐる藤森成吉氏にしたところで、この說の適用を受けること勿論である。

以上の意味に於いて、勞働至上主義は優勝階級の道樂であるが、他の一面に於いては、勞働者自身の悲しい諦めを、是認する道具として用ゐられる場合もある。つまり自分の割の惡い廻り合せに、ある犧牲的な滿足を與へやうとする努力である。しかしこれは、嚴密な意味での勞働至上主義ではない。米國の勞働官僚の頭目たるゴムパースが、四人の子供を悉く勞働者にしたといふやうなことは、ゴムパース自身の勞働至上主義といふよりは、もつと外の功利的打算が作用してゐると見た方が確かである。彼は世界一の大勞働組合Ａ・Ｆ・Ｌの大將であり、而もその組合が、熟練工のみを內容として、賃銀値上運動を全目的とするものであることを知らば、如何にメリケンの風習とはいへ、四人を四人とも勞働者に仕立てなければならぬ身分の男ではない。而もそれを敢て勞働者たらしめたこと、彼の今日の信賴をつなぐに足りた或る種の尊敬を、全米勞働者に與へ得る原因の一部をなしたのではなかつたか。話は面倒になつたが、つまり協調會幹部の林平馬が、子供に納豆を賣らせて、勞働者に同情ある所以を見せびらかし、商賣は道によつて賢き、勞資協調の一助にしようとしたのではなかつたか、と思はれることが、ゴムパースの場合にも想像され得るのである。親爺の營業を成立させるために倅を犧牲にするのは、娘を賣つて左團扇をつかう鬼婆と、少しも擇ぶところのない功利的な打算である。

社會主義

一概に社會主義といつてしまへば、味も素つ氣もないが、茲で謂ふのは直譯的、模倣的、雷同的な外國崇拜の社會主義を意味してゐる尤も今の常識で社會主義と呼んでゐるのは、斷るまでもなく、それらの連中を指してゐるやうである

社會主義思想は、生るべき必然性に從つて生れ、また同じ理由によつて發展したること確實である。その限りに於いて、勿論存在意義であるばかりでなく、時代性も將然性も大いに在るのである。砕いていへば、社會主義思想は尤もでもあり、正しくもある。而もその社會主義思想は、思想的價値よりも實行的價値に重心が置かれてゐて、現實社會を如何に變革するかが、根本の問題なのである。その點、釋迦や基督の敎義と面目を異にする。ところが、その釋迦の敎義にさへ、小乘があり方便がある。現實社會を對象とする社會主義が、五十年昔しの共產黨宣言の命令を遵守し、二千里向ふのボリシエヰキの戰術を眞似るばかりが、能でもあるまいではないか。

今更らの話しでもないが、獨り社會主義に限らず、總ての思想が眞理とされ、背理とされるのは、時間的にしてまた空間的なものである。共產黨宣言が、當時の歐洲勞働者に訴へること强かつたとて、それと同じ効果を五十年後の日本勞働者に、期待し得るかどうかは疑問である。それと同じく、ボリシエヰキ革命が露西亞で成効したといつて、直ちに日本の社會革命に適用できるとは限るまい。そんなことは、解り切つた理屈であるが、いはゆる社會主義者には、どうも呑み込めてゐないらしい。呑み込めないからこそ、新經濟政策が一步前進したの、共同戰線が歪んだの、揚句の果ては擬國會もどきの番付を拵へたりするのである。ハタの見る目は、止せばいいのに、といふ氣がしないではない。

社會主義が正當にして必要なものである以上、これが外來思想だらうが何だらうが、日本に移植して惡いといふ筈はない汽車を輸入し、紡績機械を輸入し、ダム・ダムを輸入し、その他あらゆる科學文明を輸入したことが、嘗ても今も正善であると同じ意味で、是認さるべきものである。科學文明の輸入が、日本人の生活內容を豐富にしたことによつて西洋諸國に感謝する程なら、社會主義に對して同樣の感謝を捧ぐべきである。何となれば、社會主義は日本の國民生活を改造する上に、缺くべからざる目標と實策とを、寄與したからである。その段は汽車とマルクスとレーニンとレールとを問はぬ。這個の消息は外國利用上の効果である。

社會主義もかくの如く、利用的に消化するのが肝要である。時は惟れ一九二四年、所は是れ日東の君子國、古色蒼然たる共產黨宣言や、蒸し返へしの露西亞革命で夜が明けもしまい。資本主義經濟組織を根本惡とする觀念さへ、搖るぎがないものなら、その範圍で戰術は變通自在の八百八狸でよからう。誰が何と我ん張つたとて、日本はつひに日本である。氣候風土、國民的氣質、傳統的觀念等は元より、あらゆる社會事情も經濟事情も、他の何れの國のそれではないのである。社會主義が現實の社會事情を對象とする限り、獨特な日本は獨特の日本的のそれでなければならぬ。これは是非の問題でなくして、必然の問題である。日本人が好きの嫌ひのといつたところで短軀黃顏の日本人たる事實はどうにもならない。日本の社會事情が革命するに都合が惡くたつて、頭に描いたままの都合に從つて變へることは出來ない。都合が惡いなら都合の惡いままに、それをそれとして對象することから、嫌でも應でも出發しなければならぬのである。マルクスもレーニンも、そのためでの參考書に他ならない。試驗問題は日本人が日本に於ての應用である。

應用問題の答案は參考書に書いてない。日本の社會主義者は、與へられた試驗問題に、土台目も通さずして、暗記して來た參考書のままを寫してゐる。利用的に消化しろといふのはそこである。人間が牛肉を啖ふのは、牛そのものになるためではなく、それによつて食慾を充たし榮養を攝取するのが目的である。共產黨宣言も露西亞革命も、日本人に取つては所詮牛肉に過ぎない。それを牛そのものにならなければ駄目だ、などといふ日本の社會主義者は、その愚や遠くして及ぶべからず矣。

復古主義

社會主義者の愚蒙も呆れるが、いはゆる國粹義主者になると、その程度は一層濃厚なものがある。前項の例でいへば牛は四足だから食はぬ、といつた風の唐變木である。神風連は鐵橋の下を通るとき、丁ン髷の上に扇子を戴いたといふが、謂はば外來思想に對する神風連が澤山ゐる。玆まで來てしまふと、兩隣りから遙かに遠くなるが、似たか寄つたか程度に彷徨してゐるのは、これも決して尠い數ではない。一括して復古主義とでも呼んで置かう。

日本古來の善事美事を買ふことに於いて、筆者は決して人後に落ちるものではない。しかし、惡事醜事まで押賣りする醉狂はない。よし惡事醜事でないまでも、浮世繪が毛唐に持てはやされるからといつて、日本の美術が世界に冠絕する、などといふヨタは飛ばしたくないのである。浮世繪元より結構なものに相違なく、從つて持てはやされるのは當然であらうが、珍らし物ずきの毛唐に珍重されて、それで鬼の首を取つた了見にはならぬ。タチを惡くすれば、日本人の癖にといふハンディキャップも、ないものではなからう。鸚鵡の人眞似は達者である。が、人間そのものに比較して見れば、最も下手なものよりも尙ほ下手である。メリケン觀光團や、人氣商賣の舶來藝人などのお世辭を眞に受けて、實價以上に日本を買ひ被つてゐる日本人は、自分が鸚鵡扱ひにされてることを知らぬ人間である。

尤もこんなことは思想といふ譯に行かぬが、序曲として引例して見たのである。思想界にもトルストイやニイチエが東洋を憧憬したから東洋文明が高級だとか、從つて精神文明が物質文明に代つて世界を支配するとか、勝手な寢言を吐いてゐる奴がある。そんなら精神文明は何だと反問すれば、物質文明の工本なるに對して農本だと答へる。かくして昔に返へれといふのが、その最後の結論である。冗談ぢやない、精神的だから農本だの、物質的だから工本だのでたまるものか。日本の國策が農本だつたといふのは、地理學的、風土學的、土壤學的な、自然

の條件に制約されてゐるためでそれは鐵と石炭との天産豐かな英國が、工本國となつたと同じく理屈で自然的なものである。そんな理屈はどうだつていいが、物質文明の輸入が、一體それ程の害毒を日本に流したであらうか。

日本が開國と共に物質文明を移植したのは、移植することによつて、富の生産を増大するために他ならなかつた。即ち日本を日本として發展せしめるための必要からであつた。その結果、生活内容か豐富にされたことは、誰だつて疑ひはしまい。勿論、それに隨伴する害惡もある。物に表あれば必ず裏ある如く、いいことばかりを望む譯には行かぬ。だから問題の要點は、いい事と惡いことを差引勘定して、どつちが得だかを算出するしかないのである。

東海道五十三次を、歌俳諧に托して漫歩すること、元より一脈の雅致もあるが、チチキトクの電報に對しては、箱根を寢台車で越すに如くはない。復古主義者の云ひ分は、この場合、汽車が通じたので大正の膝栗毛文學がないといふのである。文學が必ずしも膝栗毛でなければならぬものでもなく、よしきた膝栗毛でなければ滿足できぬ者があつたとて、曉の星よりも寥々たる數である。この世の中は多人數の集合社會である以上、多人數の滿足を以て社會の滿足に認むるしかない。古い言葉だし、嫌味な言葉だが、最大多數の最大幸福は善惡を超越した度量衡である。而も箱根を夜行で越すことは、今や最大多數の最大幸福である。物質文明は人間に幸福を與へるものである。

免れぬところの物質文明の害惡は、可及的に免れ得る方法を以て免れしめるしかない。例へば勞働階級の悲慘なる生活狀態は、夫々の方法によつて改善すべきものである。社會主義はその根本的にして、而も實效的な一提案である。然るに世の復古主義者、倘ほ廣くいへば精神主義者は、社會主義もまた唯物主義だから人類の幸福を寄與し得ないといふ。そして求むるところは、過去の社會生活そのものである。昔を今にするよしもなしといふ古歌の心意氣は、等しく今を昔にするよしもないのである。汽車、電車、瓦斯、等々の物質的なそれが、一時に眼前から、拭蝕されたなら、その不便は目明かめくらになつた以上であらう。生れながらの盲目なら別として、現世的な美と幸福を眺めた兩の眼が、一時につぶれたとなれば、その不幸は想像外であらう。ところが復古主義者、なほ廣くして精神主義者は、十億の人間が皆めくらになれといふそして盲目にのみ幸福があるといふ。世にこれ程の出鱈目はあるまい。以上。

馬場辰猪自傳

馬場孤蝶

（七）

十五歳になると、彼は叔父馬場氏連及び土佐の侍數人とゝもに、大阪へ行つた。此時は、若き土佐侯が軍船即ち當時關船と呼ばれてゐたものに乘つて、浦戸から最初の航海をするのであつたので、侯に取つては大に記念すべき場合であつた。それまでは、侯は何時も陸路を取つて、江戸へ往復したのであつたのだ。

註ノ一——この時の土佐侯は山内豐範である。土佐からの陸路といふのは、北山越へと稱して、阿波の池田近くへ出で、それから、讃岐の川之江へ出で、高松か、丸龜かから、中國へ渡つて、大阪を經て、江戸へ向うといふのであつたらうと思ふ。

註ノ二——源馬氏高の最初の妻吉田氏は、予等の父來八が八歳位な時分に死んだので、源馬は直きに大高坂（後森岡）氏の女を娶つて、氏連及び鹿子の二子を擧げた。家記に據れば、氏連は天保二年六月二十二日生れ、幼名荒松、後鉛子と改めたが、嘉永三年武藝を以つて、御目見えをなすとある。鹿子は天保四年に生れ、弘化四年野崎傳太に嫁した。璽の家左文（野崎城雄）の養母である。

氏連は幼時、學問、習字の稽古に通ふ時分、双紙へは水をぶつかけて、習字をしたと見せかけて置て、何時も鍛冶屋の前に立つて鍛冶の作業に見入つてゐるのであつた。源馬にとう〱それが知れると、それ程好きなものならば、鍛冶の稽古をさせてやらうといふので、藩の抱への刀工左行秀の弟子にし、鍛刀の術を學ばした。氏連の名は、新刀鍛冶の傳に載つてゐる。

氏連も次男であり、辰猪も次男であつたのだから、二人の

間には、自然と双方から同情が生じたのであらうと思はるゝのであるが、後年に至るまで、二人の交情は親子の間柄に劣らざる親しさであつた。

辰猪は他の八人の侍と共に、多くの從僕や、船長や、水夫等と一緒に、破れかけた古い小船に乘つて、浦戸で三日間待つた。勿論、同じやうな船が、幾つも、同じやうに、土佐侯の出船を待つてゐる九人若くは十人の侍を載せて、辰猪の船と並んで、碇泊して居るのであつた。三日がたつといふと、それ等の連中は、土佐侯の發船を待たずに、解纜し、甲之浦に至つて、土佐侯を待てといふ命が下つた。で、人々の船は皆出發した。さういふ船は皆數人の水夫が船の兩側に立つて撓（櫓）で漕ぐのであつた。若い辰猪は外海へ出たのはそれが始めてであつた。彼はひどく醉つて眠がまわるやうな心持ちがして、それまで曾て感じたことのないやうな、いやな苦しい心持であつた。それ等の船は覆へりやすいのであつて、帆走は危險だとなつてゐたのだから、水夫が何時も船を漕いで行くのであつた。上述の事實で、それ等の船が何んなやうなものであつたかは、容易に考へ得られることであらうと思ふ。實際、それ等の船は構造に於ては極めて不便な無細工なものであつて、甲板の平衡が直きに失なはれてしまうのであつたから、少しでも強い風に襲はれるとそれに堪へる力は殆ど無いと云つてい丶位のものであつた。さういふ譯であつたので、その一行の船は皆、天候が變りさうだと見るや否や、何處でも構はず、小さい港へ入り込んでしまう積りで、何時も海岸に沿うて漕いで行くのであつた。やがて、それ等の船は室戸の港へ入つて、其所で三日止まり、それから、やうやくお鼻と稱する少さい岬（室戸岬のことである）を廻はつて、甲之浦といふも一つの少さい港へ入つた。

註――室戸崎のあたりは、ひどく波が荒くつて、難所となつてゐたので、和船時代にはよく〳〵天候を見計つて、其所を廻はるのであつたらしい。それで、辰猪等の船もさういふ風に、室戸の港で、日和見をやつたのであらう。室戸崎をおはなといふのは、舟人が其所を恐れたのから生じた名であらうと思ふ。

人々は、此所で、高知から陸路をやつて來る土佐侯を待てといふのであつた。この甲之浦なる土地は極く小さいところで、住民も僅な數であつたのだが、それ等の者どもは、村へそれ程多人數の旅人が來たのを見るといふと、皆爭うて、さま〳〵な

方法、例へば、一寸とした日用品とか、菓子その他のやうなものを賣る事などで、利潤を得ようと力めるのであつた。辰猪等の一行は土佐侯が來るまで、其所で十九日碇泊してゐなければならなかつた。其所で、辰猪等は、此の航海に土佐侯を載せて行くことになつてゐた船を始めて見た。その船は、他の船と共に此の港へ入つたのであつたが、それが他の船よりは少し大きかつたといふこと以外には、別に變つたところがあるとか、特に立派であるとかいふやうな點で、人々の注意を引くやうなところがあつた譯ではなかつたのである。ところで、その船は、桁その他のさま〴〵な武器で飾られて居り、その外、船の上部全體に、美くしい赤や紫の幔帷即ち幕を引き繞ぐらして、それをところ〴〵幕と同じ色の大きい紐で絞りあげてあるのであつた。その地方の人民は皆、彼等の靜な港へ入つて來たその不思議な船にひどく驚かされたやうであつた。辰猪の叔父は、それは何か見せ物のやうなものであつて、中で何か演伎が始まるとでも云ひ度いものであると、戯言したのであつた。ところで、土佐の政府の海軍といふのは、さういふやうな所謂軍船から成つてゐたのであつて、侍の大多數は、さういふ船で歐羅巴の汽艦と戰ふ積りであつたのである。

さて、辰猪等は、雲のない風のない好天氣を待つて、甲之浦から出船して、途中泊（椿泊）その他の小港に停船して、阿州の海岸に浴うて、航行した。十五日の後、その一行は、到頭大阪の阿治川へ入ひることができて、その市の街へ上陸した。辰猪等は今宮の小さい寺に宿泊したが、兄源八郎が土佐侯の建てた小寨、即ち御陣屋と呼ばれるものにゐたので、源八郎は氏連及び辰猪に逢ふため、今宮のその寺へと尋ねて來た。辰猪は、心齋橋通その他の大阪の町を見物に出て、土佐と大阪では兩者の間に非常な相違のあるのに驚いた。見る物がこと〴〵く如何にも美しく大きくあるので、彼は自分の生國の土佐などは、まことに少さい場所に過ぎないのだと思ひ始むるに至つた。

これは丁度、日本の歴史中の、將來の內亂の徴が現はれ始めた時代であつた。それは、長州浪人及び福原越後が京都の皇帝の宮殿へ砲彈を打ち込んだ年――それは元治元年のことであつたが――の翌年であつた。諸侯のうち將軍の政府の權威に反抗し始めたものが幾人かあつた。さういふ風で、さま〴〵な侍や浪人が何時も街を歩いてゐた。若き辰猪はそれ等の者どもの風俗や様子を見る有らゆる機會を持ち得たのであつた。辰猪はその時生れて始めて、硝子に寫した寫眞を見た。それは、叔父氏連が寫させたものであつた。

註ノ一――辰猪の兄源八郎は、藩の兵に加はつて、住吉の土佐の陣屋に來てゐて、長州の京都砲擊の際には、兵を率ゐて與れと云はれたのであるが、自分は若年だからそんな資格はないと云つて斷つたけれども、馬が達者な者でないと隊長の役は勤まらぬのだからと云つて、しきりに賴まれた。其所で唯馬に乘れさへすれば、いゝといふのなら、自分は七八歲の時分から馬には乘せられてゐるのだから、引受けられぬことはないと云つて、足輕大將のやうなものになつたといふのである。

註ノ二――當時は、所謂尊皇攘夷熱の烈しい時分であつたので、西洋の文物に親しむやうな者の身邊には、浪人の猜疑の眼が注がれて、なか／＼危險であつた。寫眞屋へ入ひるなどといふのさへ何うかすると危險であつた。惡るくすると、寫眞などを寫す奴は西洋崇拜の徒だから斬つてしまへなど〻いふ浪士に逢はぬとは保し難いといふ有樣であつた。辰猪の叔父氏連は、父源馬の感化で西洋の文物に就ても相應の理解があつたので、寫眞などに就てもその理を調べてみ度いといふ考があつたらしかつた。或る日、辰猪と一緒に見物に出た時に、寫眞屋の前へ通りか〻つたので、氏連はなかへ入ひつてみやうと思つたのだが、用心深い男なので、萬一の場合を慮かつて、辰猪には一足先きへ宿へ歸れと云ひ聞かせて置て、自分一人で寫眞屋へ入ひつたのであるが、一寸經つと、辰猪が後から入ひつて來たので、何うしたのだと聞くと、『何うも此のあたりに怪し氣な浪士體の者がうろ／＼してゐるので、叔父さんの身が心配だつたので引返して來たのだ』と、辰猪が云つた。氏連は、その時から、辰猪の思慮あることと勇氣とに信用を置くやうになつて、だん／＼辰猪を愛するやうになつた、と言ひ傳へられてゐる。

その後、辰猪は他の人々と共に、同じ大阪の阿彌佗ケ池へ移つて、菊源といふ商人の家を宿にして、其所に三月留まつてゐた。彼は土佐の政府の命に依つて、本國へと喚び返へされ、此所に記述せんには餘りに傷ましき事情であるが故に、此所に錄するに及ばない事件が起つたので、家を繼がなければならぬやうになつた。

註――餘まりに傷ましき事情といふのは、今日になつて、さういふ事情に自ら遭遇しなかつた吾々から見れば、敢て記錄し難いことではない。父來八は女に關することか何かで、岸切りの橋限り、即ち高知城下の禁足を命ぜられ、辰猪の兄源八郎が家を繼いでゐたらしいのであるが、本文にある通

り、源八郎は禁裡の護衛隊に加はり、元治元年の長州兵の京都亂入の戰ひに出會つてから、住吉にあつた土佐兵の駐屯所（當時御陣屋と稱してゐた）にゐたところ、他藩の兵は、元治の亂後間もなく歸國を許されたに拘らず、土佐の兵は翌年になつても一向歸國の許るしが出さうもなかつたので、兵が憤つて、住吉の陣屋を破壞してしまつた。これを當時『御陣屋ゆすり』と云つた。源八郎も元よりその亂暴に加はつたので、一同國元へ呼び返されて、それ〲刑罰を云ひ渡された時に、二三人の連中と共に、渡り川限り即ち幡多郡の四萬十川以東の禁足を命ぜられた。それで、父來八夫婦、源八郎夫婦、及辰猪の妹駒子と以上五人だけが、幡多郡の江の村といふのへ行つた。それは慶應元年の五月頃らしいのであるが、その年の暮になつて、源八郎は赦免になつて、高知へ歸ることができたといふのだが、その時に、辰猪が家を繼いだのであらうと思はるゝ。

其所で、辰猪は家の名譽を恢復しようと決心したらしい。彼は全力を注いで、漢學の修行と、擊劍及び歐羅巴式の兵法―例せば、兵の操練、洋製の銃の發射――を稽古した。それ等の銃は始めは大概和蘭製のものを用ゐたのであつたが、後には英國製のものを以つて、それに代へるに至つた。斯ういふ風で、辰猪はもう一年國にとゞまつて、勉學した。

註―辰猪は後年になつて、凝り性であることがよく現はれたのであるが、それは極く若い時分からの性質であつたのであらうと思はるゝ。本文の修行は、皆藩校（文武館、後致道館）でやつたのであらうが、その時、辰猪が擊劍を餘まりに熱心にやるので、教師連中が皆手古摺てしまつたと傳へられてゐる。何うぞ、今一本、今一本と云つて、辰猪はなか〲止めない。相手になつた教師は少しも憩むことができないので、皆閉口してしまつて、互に辰猪の相手になることを讓り合うやうにしたといふのだ。谷干城は當時藩校の漢籍の教授方であつたのであらうが、或る日、辰猪の父に、『ご子息は非常に武藝にご熱心のやうだが、これからは武藝よりは學問の方が大切であらうと思うのだから、武藝の方は大抵にして置て、學問の方へ力をお入れになるやうになすつた方が宜しからう』と云つた。辰猪の父は『イヤ、ご忠告はまことにかたじけない。しかし、何にせよ、修行ごとは當人の心から出なければ、他から强てやらせたところで詮もないことだと思ふので、もう少しあのまゝにして置いて、當人の心で、學問の

大切なことが分つて來るのを待つてゐる譯です』と答へたといふのだ。

（八）

日本暦で數へて十六歳になつた時に、辰猪は土佐の藩廳から選拔されて將軍の政府（註幕府）で立てた學校で海軍機關學を學ぶために江戸へ行くことになつた。その時代には歐羅巴の法律や、政治組織を學ばうといふ考などは誰ももつてゐなかつたのであるが、兵學と醫學だけは歐羅巴式のものを學ばなければならぬものだと誰もが思つてゐた。さういふ風で、若い辰猪が漢學と練兵の最中に於て、海軍機關學の修行の爲めに、江戸行きを命ぜられた理由は、容易に理解し得られやうと思ふ。それは、土佐の藩廳が土佐に海軍の機關技師を得ることを非常な重要事と考へたからであつたのだ。さういふ譯で、多くの青年のなかからさういふ風に選まれて、江戸へ修行にやるゝといふのは、若い辰猪に取つては、非常な名譽とされたのであつた。けれども、それは土佐の保守的の人々の感情には全く反したことであつた。さういふ人々は、辰猪は聖堂即ち江戸の漢學の學校へ入學せしめらるべきであると云ふのであつた。辰猪と共に海軍機關學を學ぶために江戸行きを命ぜられた他の青年は辭してしまつた。が、若い辰猪は江戸へ行かうと決心した。それは一つには、とにかくその名高き首都を見んがためであり、二つには、其所で何等かの經驗を得ようがためであつたのだ。

當時では、旅行は甚だ困難な事柄であつて、誰もが、今日の如く、容易に東京へ行くやうな考をもつてゐるのではなかつた。辰猪の友人の或る者は、唯江戸へ行くだけでも猪辰に取つては非常に利益があるであらうと云つた。その時代の人々の感情では、江戸への旅は今日人々が歐羅巴へ行くのと丁度同じ位な心持のものであつた。さういふ風で、發足に定まつた日に、送別の酒盃即ち『さかづき』が、父、母、妹といふやうな親族と辰猪との間に取りかはされてから、辰猪はその同行者の百々幸彌と共に汽船に乘つた。その汽船は土佐の藩廳が歐羅巴から買つて、軍艦と稱してゐるものであつた。ところで、この軍艦なるものは、もう極く古いこわれかゝつた船であつて、その機關の如きは非常に古ぼけて具合の惡くなつてゐるものであつた。此の船には、辰猪の叔父が機關士として乘り込んでゐた。辰猪はこの時生れてから始めて蒸氣機關なるものを見た。彼はそれを實に驚くべき不思議なものと思つたのであつた。叔父からその構造に就て詳しい説明を受けたけれども、少しも了解し得なかつた。けれども、前の航海では、弱い和船に乘つて、強い風に遭つた經驗があつたので、今度は乘つてゐるのが汽船で

あるといふことのみで、全く安全だと思つてゐたのだ。彼は汽船といふものは、何んな烈しい浪にも風にも破壞されるものではないと思つてゐて、汽船でも危險なことがあるといふことなどは、少しも知らなかつたのであつた。平穩な三日の航海で、彼は大阪へ着き、其所で三日逗留したのであるが、その間彼は初めて道頓堀の劇場で演劇を見た。演劇を見るといふことは、土佐の侍の一般慣習には反したことであつたのだが、國外ではさういふ慣習は守るには及ばなかつたのだ。

註──辰猪の土佐を發足したのは慶應二年の三月三日（舊曆）であつたらしい。辰猪の叔父氏連が土佐藩の軍艦に機關士になつたのは、實にいゝ加減なことでさういふ命をうけてしまつたのだ。『お前は鍛冶が出來るから、機關方になれと云ふ位なことであつたのだ』と、晩年に氏連はよく笑つて話した。僕の家には、輕業師が箍拔けをしてゐる繪をかいて、それに假名ばかりで說明をつけた手紙があるのであるが、何うかすると、此れは辰猪が前の旅の時か、此の旅の時かに、家に寄せたものではなからうかと思ふ。

公務を帶びて江戶へ行く侍が一人ゐたが、此の侍は京都へ立ち寄る用事をもつてゐた。それで、三人の侍即ち馬場、百々、谷口は三十石といふ小舟に乘り込んだのであるが、此の船のことは、その船で旅したことのある人々が尙よく記憶してゐることであらうと思ふので、こゝに詳記するの要はない。小さい極く狹い場所へ、十人から二十人程の旅客が押し込められて、舟は淀川の强い流に逆らつて、二人の船頭によつてのろ〳〵と引いて上ぼられ、時としては、竿即ち竹の棒が舟を溯らすために用ひられるのであつた。吾々は、此の舟で眠なければならなかつた。三十石船の甲板で眠たとのある人々でなくばそれが何んなものであるかを語ることは出來ない、それは實に何とも云ふやうのないものであつた。十人から十五人位までの人々が極く狹い場所に押しつけられて、一夜を送らなければならぬのであるから、到底何としても眠られるわけのものではなかつた。けれども、到頭、次の日の朝になると、若い辰猪は他の人々と共に、伏見へ着いて、朝食をしたゝめた。辰猪は暑くなりつゝあつたので、扇を買つて、京都へと歩いた。京都で一日逗留して、大佛や大梵鐘の遺跡等を見物してから、辰猪は百々と共に東海道へと發足した。二人とも長旅には全く不馴れであつたが、若い辰猪は平氣であつた。それは、土佐で家來の孫六と云ふ男から浪話講（旅舍組合ともいふべきもの）といふ東海道の

案内書が役にたつものだといふことを聞いたので、それを一部持つてゐたのと、『膝栗毛』といふあの非常に好い小説を讀んでゐたためとであつた。二人は、逢阪山を通り、大津を過ぎたが其所では、辰猪は初めて大きい湖水と義仲の墓を見た。瀬田の長橋へ來るといふと、二人は土佐の橋の方が餘程大きくもあり長くもあると思つたのであつた。二人は自分の國の物は何でも非常に大きいと云ふ考を持つてゐたのだ。大津（註草津か）の入口へ達すると、宿屋の者が出迎へて、何うか自分の家へ泊つてくれと請ふた。同行の百々は、その男は烏散な者だと思つたのであつたが、若い辰猪は彌次郎兵衛、喜多八の物語のなかで宿引きのことを讀んでゐたので、さういふ習慣のことをば、友に話した。それで百々は直ぐ安心した。さういふ風で二人は草津で一夜を送つた。

當時、東海道の狀態は平和でなかつた。將軍の威勢が衰へてゐたので、浪人などいふ無頼の徒が機會さへあれば何時も犯罪をなすのであつた。辰猪と百々は、驚破といはゞ直ぐ起つて自己の生命と財産を防衛することができるやうにといふ用心の爲めに、寢床へ刀を入れて眠たのであつた。けれども、二人は何事にも出逢はずに、『裾細そ』即ちヅボンのやうなものをはき、二本の刀を帶び、嚢のやうなものを肩に擔いで、東京の方へと通つて行つた。途では、人々が一見して、二人が土佐藩の侍であることを知つた。二人は毎日十里から十一里程を歩いた。ひどく疲れたには疲れたが、宿屋々々のさまぐ\な樣子や、何時も自分たちの家へ客を泊らせようと骨折る女中等の風を面白がつたのであつた。

（九）

これ等二人の旅人に隨いて、彼等が一夜一夜を送るのであつた驛々をこゝで辿る必要はない。二人が京都を發足してから十一日目に品川へ着いたことだけを云へば宜しいのだ。二人は屋敷即ち土佐侯の住んでゐる家がある場所が江戸の何の邊になるかを知らなかつた。土佐にゐた時、土佐侯の家が品川にもあるといふことを聞いてゐたので、二人はその晩泊つた宿屋で問ひ合せたが、誰も確に何處だと知つてゐる者がなかつた。それで、二人は次の朝江戸へ向つて出發したが、江戸の地圖を買つて、鍛冶橋の屋敷の所在をさがすのが一番宜しいと思つたのであつた。二人は田町あたりのとある店で地圖を二枚買つて、日本橋の方へと歩いて行つた。到頭、二人は途で幾度も聞き合せたあとで、鍛冶橋内の屋敷へ着いて、土佐藩の重役を尋ねて、自分等が江戸へ安着したことを報告した。二人の着京は待ち設けられてゐたので、彼等の室即ち部屋と呼ばれてゐた小さ

い家へと行くように命ぜられた。さういふ家は、家の長い列を幾つにも仕切つたものであつて、その仕切つた各の部屋が階下と階上から成り立つて居るのであつた。階下の方では從僕が眠たり、主人の爲めに食物を調へたりし、階上では主人が眠たり、客に接したりなどするのであつた。辰猪と百々とは、從僕をつれてゐなかつたのだから、二階に住ふことにして、食物は他から取り寄せたのであつた。

人々の云ふのでは、辰猪等の最初にしなければならんことは、江戸の町々を見て廻はつて、江戸の住人の生活を經驗することであるといふのであつた。それで二人は毎日外へ出て、家屋の壯大な（二人はさう思つたのだ）有り樣や、人民の夥しい群集にひどく驚かされたのであつた。江戸へ着いてから三日經てば、修行を始めなければならなかつたのであるが、百々は私費の學生であつたので、自分の欲するまゝにすることができるのであつた。若い辰猪は、此の規則に縛ばられてゐるので、誰か歐羅巴語を敎へてくれる敎師を見つけなければならなかつた。けれども、彼は自分の目的に協つた學校を見つけることができなかつた。海軍敎育を授けるために將軍の政府が立てた學校はあつたにはあつたが、其所での敎授法は、唯機關の圖を引くことの外は殆ど何も學ぶことができないといふやうな不完全なものであつたのみならず、第一それへでも入學の許可を得るのが甚だ六づかしかつたのだ。それで、辰猪は歐羅巴語の何れかを學ぶことに專心に取りかゝらうと決心した。彼がさう決心したのにはも一つ理由があつた。彼は歐羅巴の書物即ち原書の知識が大切なものであることを、機關士であつた叔父から彼は聞いてゐたのであつたのだ。

さういふ目的で、辰猪は英吉利語を學び得る學校をさがした。和蘭語を學ぶことは當時ではもう衰へだしてゐたからであつたのだ。やうやくにして、彼は鐵砲洲の奥平家の福澤氏が私立の學校を持つてゐて、其所では英吉利語が敎へられるといふことを知つた。辰猪は其所へ行つて、此の私學校の敎頭であつた小幡氏に逢つた。奥平邸の門番どもは、英學即ち英吉利語を敎へるのは何處だと聞いても、少しも分らず、蘭學所はと聞くと始めてそれで分つたといふことを此所に記して置くことは、敢て無用なことではないであらう。

辰猪が其所へ行つた時には、校舍はひどくこはれかけた家であつた。それは侍部屋の跡であつて、家の東突に、福澤氏及びその家族の用に供された私室があつたが、それは二階建てであつて、食堂、厨房及び福澤氏が書物の講義をする一室から成つてゐるのであつた。その外に、學校の部屋が數室あつて、其所

で、學生が眠もするし、勉學もするのであつたが、それは十疊か十二疊の部屋が二つと、も少し小さい部屋六つであつて、そのうちの二つは元便所であつたのを造り直したものであつた。それから、大きい爐即ち竈の傍に疊のない食堂が一室あるのであつた。

若い辰猪はさういふ校室へ案内され、次いで、校長福澤氏に謁したのであるが、氏は年三十五か六か位の人で、階下の小さい部屋で何か洋書を讀んでゐた。福澤氏は、辰猪の年齢を問うた。辰猪が十七歳だといふと、氏は『今からだ』、即ち丁度學問を始めるべき時分だと云つた。それから、辰猪は同學の人々に逢つたが、それは皆辰猪よりは年長であつて、皆なで三十人であつた。辰猪はさういふ馴染のない人々の間へ入れられたので、可なり弱つてしまつた。彼は同學の人々の言葉が解からなかつた。それ等の人々の言葉は辰猪の國元の言葉とはひどく違つたものであつたのだ。辰猪は土佐へ歸つて、友人たちに逢ひ度いと思ふことが度々であつた。

(一〇)

それ等の學生たちの行状は何とも云ひやうのないものであつた。彼等は不規則であると同時に不身持であつた。何時も、女郎屋即ち品川や深川でなした何事かを誇つてゐるのであつた。彼等はさういふ場所で金と時とを費すのであつたのだ。彼等は何時も差し迫つた負債を持つてゐて、何か理由を設けて金を得ることに骨折つてゐた彼等はそれを金策と呼んでゐた。尚その上に、彼等は大抵皆或傳染する病氣を持つてゐて、それを誇りとしてゐた。それは、彼等はさういふ病氣は學生の是非持つべきものだと思つてゐたがためであつたのだ。其所で彼等の日常生活は何うかといふと、彼等は殆ど勉學しなかつた。食事の時は、美濃屋といふ老人があつて、それが干魚、野菜などを持つて來て、學生たちにそれを賣るのであつたが、米は從僕が炊ぐのであつた。彼等は、或者は立つたまゝ、或者は坐はつて、大急ぎで食事をするのであつた。

教授方も極く不規則で不完全であつた。學生は誰でも入學金即ち束修と稱するものを拂はなければならなかつたに拘らず、定まつた教師といふものはなかつた。此の學校へ入學した者どもは、互に教へあはなければならなかつた、即ち、第一級の者――と云つたところで、他の連中よりホンの少し進んでゐるといふだけであつたのだが――は下の諸級のものを教へなければならなかつたのだ。さういふ風で、最初の者が第二の者を教へ、第二の者は又第三の者を教へるといふ譯で、下までずつと順々にさうして行くのであつた。さういふのであつたので、課

業は年長の學生から恩惠のやうにして授けられたのであつた。教へられたのは、徳川政府の開成學校で印刷した小さい英語文典であつたが、これは三十頁位の本であつた。A・B・Cを教へずに、行きなり此の本を教へるのであつた。發音は何時も間違つてゐたのだが、當時は正しい發音を知つてゐる者は誰もなかつたのだ。學生は英語の直譯を學ばなければならなかつたのだ。此の小さい文典を讀みをはるといふと、もうその上のことを教へることのできる者は誰もゐなかつた、即ち、誰も全くめいめいで勝手次第に讀めるものを讀むことにしなければならなかつたのだ。けれども、會讀といつてゐたもの、即ち、此の文典に載つてゐるところのもの丶意味に就ての討論會のやうなものがあつた。それには、年長の學生のなか丶ら審判者を選ぶのであつた。學生の下す解釋の當否に從つて、それ〴〵點數が與へられることになつてゐた。ところで、此の會讀がをはつてしまうといふと、學生が讀む本といふのは殆ど一つもなかつたのだ。それでも、彼等は何うにかして、物理學とか、地理學といふやうな書物を見つけて來ることはできたのであつたが、歴史、哲學、政治學の書物に至つては何處にもなかつたのだ。皆のなかに書物がたつた一册あるきりであつたので、已むを得ず、めいめい原書をば紙へ一行々々書き寫して、一週一度開かれるのであつた會讀の準備に充てるのであつた。前に云つたやうな小文典を讀んだだけの智識貧弱なる學生のことなのであるから物理學の如き科學書を讀む際の困難といふのは實に甚しいものであつた。彼等は毎會讀の支度をするために、何うしても字書で三百字は引かなければならなかつたのだ。さういふ風で、彼等はその問題の相應な知識を持つことができるに至るまで、英語を解しようとする非常な骨折りを續けるのだつた。若い辰猪が此學校へ入學した時分の英語の教へ方といふのは、さういふやうなものであつたのだ。

辰猪は極て若くもあつたし、前途に可なりの望みを持つてゐたがために、學生の大部分の不埒な怠慢の習慣からの惡感化を受けずにしまつたのであるが、塾頭の小幡篤次郎は辰猪に注目して、地理や物理を彼に教へた。辰猪は小幡氏の此の親切な援助によつて、學業が可なり進歩した。それと同時に、辰猪は徳川政府が立てた築地の海軍學校へ行つて、海軍機關學を學べと命ぜられた。彼は其の學校へ行つたけれども、其所には海軍機關學を教へる何等組織的の方法があるのでなかつた。彼は、政府の役人等の倨傲な擧動を見て、厭な印象を受けたので、それ等の者どもの官僚主義を心から厭はしく思つたのだ。さういふ風で、辰猪は英語の本の勉學にもう一年半程を送つて、福澤

氏がその頃亞米利加から日本へ持つて歸つた北米合衆國の歷史を讀み得るやうになつてゐた。

十一

ところで、これは王政復古の始まる時代であつた。即ち、將軍の政府の威勢が全く衰へて、江戸では浪人等の暴行が度々行はれた。彼等は追剝、押し込みといふやうなさま〴〵の罪惡を行なつたのだ。到頭將軍の政府も決心して、兵を出して、さういふ浪人等の隱れてゐた屋敷、即ち、赤羽の薩摩侯の家を攻擊したのであるが、その時には數人の浪人が殺され、家は火を放たれて、燒かれてしまつた。

さういふ風に不隱な時勢になつて來たので、辰猪は、當時政治上の事件の中心であつた京都へ向つて發足し、其所から土佐へ歸へらうと決心した。それで、上記の事件があつてから三日目に、辰猪と他の二人の侍とは、東海道へと發足したのだが、辰猪は宮（熱田）へ來るまでは京都の狀態は何も知らなかつた。辰猪等はその驛で始めて伏見の戰とその後の將軍の兵の敗走を聞いたのであつた。京都へ達すると、その都は諸藩の兵で護られてゐた。さういふ兵士は、辰猪の名と藩とを問うてから通してくれた。京都で三週間滯在してから、辰猪は土佐へ歸つたのだが、まだ自ら世間へ出て活動する時期は來てゐないと思つたので、勉學のためにもう一度生國から出ようと決心して、歐洲語を學ぶために長崎へ差遣して貰らひ度いと、藩の重役等に賴んだ。その許可が與へられると、彼は土佐藩廳所有の汽船に乘つて、長崎へ行つたが、其所での英語の敎へ方は江戸の福澤塾での敎へ方よりも尙一層不完全であつた。學生を敎へる敎師といふものが殆ど一人もなかつたのだ。それでも、辰猪は、當時長崎にゐた宣敎師フルベツキ氏の援助を得て、合衆國史と萬國史を讀了した。

長崎の狀態は、住民が學生の習慣に馴れてゐなかつたので、極めて面白くないものであつた。學生の方は又甚だ懶惰で不身持ちになるのであつたのだ。學生は大抵皆、學生の第一の必要は女を圍つて置くことであると思つてゐるのであつた。辰猪は一般の學生のさういふ風習とは何時も衝突するのであつて、度度爭論を生じたのであつた。けれども、彼は英語の知識に於てはずつと進んでゐたので、學生間で尊敬されてゐて、他の者どもを敎へたのであつた。九ケ月滯在した後で又江戸へ出ようと決心した、その時は江戸ももう靜穩になつてゐたのである。

その時岩崎彌太郎が土佐藩廳の命によつて大阪へ出るのであつたので、辰猪は大阪へまで同伴して行つてくれと賴んで、そ

の承諾を得た。辰猪は岩崎に伴はれて米國汽船に乗り込んで、三日の後大阪へ着した。

註―辰猪が土佐へ歸郷したのは、慶應三年の十二月二十六日らしく、長崎へ向け發足したのは、明治元年の四月であつたらしく、長崎から江戸へ向つたのは、翌二年の正月頃らしいのだ。岩崎彌太郎氏は、當時藩の國産方といふやうな役人で、藩の産物を賣るといふやうな用事で、長崎へ出張してゐて、大阪へ引つ返して來る際に、辰猪が同伴して行つてくれと頼んだところが、公用のことだから唯同伴といふ譯には行かぬが、從者といふ名義で宜しくば、同伴しやうとの返辭であつたので、辰猪はそれでも一向差し支へがないと云つて、岩崎氏に大阪までつれて行つて貰つたといふのだが、それは多分船に乗る便宜などを得んがためではなかつたかと思ふのである。

大阪に二三日逗留して、東海道によつて旅行する費用を作るために、所持の書籍を賣り拂つてから、辰猪は江戸へ向けて發足し、一年前に過ぎた同じ道を通るのであつた。將軍の政府の時代とは何も彼もがまるで違つてゐた。大きい宿屋がこわれかけてゐて、修繕が行き届いてゐなかつた。旅客も極めて少く、總べてが寂しく悲しい有様であつた。十二日經つて、辰猪は東京へ着いて鍛冶橋の屋敷に二三日ゐた。

福澤氏がその塾を新錢座へ移してゐたので、辰猪はそこへ行つたが、英語の勉學法が非常な進歩をなしたことが直ぐ分つた。學生の數も大に増してゐるのであつた。日本の各所から來た殆んど二百人の學生が其所に集まつてゐた。學校も慶應義塾と呼ばれてゐた。辰猪はその塾に一年程留まつてゐたのであるが、彼はその間に、歴史、ウエーランドの經濟學を讀み、又倫理學などをも讀んだ。彼はこゝで始めて、通貨及び需要、供給等の諸法則を讀んだのであつた。

その時分に、辰猪は土佐藩廳が歐羅巴へ數人の學生を留學させるといふことを聞いたので、彼は急いで、自分をもその留學生のなかへ加へてくれと、土佐の役人等へ願ひ出た。幸にして、彼は四人の青年と共に、海軍研究のために英國へ留學することを命ぜらるゝに至つた

土佐藩廳は、會津での戰ひのやうなものに參加した武人等が同行するのだから、これ等四人の青年學生を歐羅巴へ留學させることが非常に善い事だと思つてゐた。けれども、彼等は洋書も和書も、書物は何も殆ど讀み得ないやうな者どもであつた。實

際、彼等は土佐の國の住民のなかで見附け得べき最も無學な人間であつたのだ。彼等が何れ程までに無學であつたかは、英語の附教師が『未來』とは何ういふ意味だと問うた時に、彼等はその意味をさへ知らなかつたといふ事實で、想像がつくであらうと思ふ。

けれども、若い辰猪はさういふ者どもと共に歐羅巴へ行かなければならなかつたのだ。彼等の名は、眞邊戒作、國澤泉（新九郎）、松井政美、深尾倍作であつた。眞邊は此の一行の頭と想像されてゐた。けれど、彼がさういふ頭だつた位置に就いた理由といふのは、多分彼が一行中での一番無學にして魯鈍な男であつたことにあつたのであらう。さういふ風で、一同は眞邊から實に馬鹿氣極まつた指圖を受けなければならなかつたのであつた。眞邊は彼をば大人物だと思つてゐた土佐藩の或る重役の眷顧推輓を受けてゐたのであつた。その重役といふのは板垣であつたのだが、此人は、その後の閲歴で、他人の才能を見出すとか選抜するとかいふことには全然不適任であることが明らかになつたのである。

註——土佐藩からの留學生のうち三名程は會津戰爭に出た者のなかゝら選抜したものらしく思はるゝ。此れは行賞の意味が幾分含まれてゐたものであらうかとも考へられるのだ。寺石正路氏著『土佐偉人傳』には藩士谷神之助芳義と川上友八正躬とが英國留學を命ぜられてゐたのだが、明治三年の正月に、二人はその友小島、小笠原と共に、島原遊廓へ遊びに行つた歸りに、守備の加賀藩の兵と喧嘩して、毆打されるか何うかされたので、それを憤つて、その翌晩、築地の加賀藩の陣屋を襲ひ、番兵を斬つてから、藩邸へ歸つて、四人とも自刄した。それで英國留學生が欠けたので、谷神之助及び川上友八の補欠として、馬場辰猪が選ばれたのだと書いてある。谷も川上も共に會津戰爭に出た人々であつたといふのだ。



女工哀史（3）

細井和喜藏

工場設備及び作業狀態

工場の設備

建築樣式は、凡そ各工場または室別に防火壁で區切られた半耐火式一階建で鋸齒狀屋根に依るを普通とするが、ごく初期の建造にかゝるものは二階乃至三階建である。即ち東洋紡績三軒家並に四貫島工場の如きがそれだ。

床は往時石疊を敷いた工場が多かつたが現今は許可にならぬところからして板にする傾向がある。尤も技術管理の幼稚な關東方面の工場は別として、然らざる工場では機械のフレームの脚だけを敷石にするのであるが、東紡、鐘紡等の新しい工場へ行つて見ると床が整然たる一水平面に在つて實に綺麗だ。のみならず作業能率と男女工の疲勞の點に於いて大いに良好なものがある。それに較べて主腦技術者の低腦な工場へ行くと床面は凸凹し、凡ての點に於いて面白からぬものがある。

纖維仕事の關係上、採光はよく行き屆いてゐて、特種の作業部門を措いては如何に大工場と雖も晴天の日に薄暗いやうなことはない。夜の照明は電燈を用ひるが、小ランプを數多點じるものと、大ランプを處々にぽつと點けるものと二樣ある。　何れ

にしても充分な照明を與へてゐることは目が高い。これに引きかへ寄宿舍の點燈燭光に至つては實にひどく見すぼらしく、十五疊のだだ廣い部屋に十燭光のコード一尺といふものを用ひてゐる處さへある。寄宿舍とは寢る場處だからランプの必要は無いとさへ云つた社長がある。

「防火設備」は更に角相當行き屆いて居る。「非常バケツ」や「手押喞筒」は言ふまでもなく、スプリングラー（自働散水、警報、喞筒運轉裝置）とハイドランド（自然水壓ホースの備へ付け）の無い工場は全くない。それから工場内での喫煙は嚴禁し、犯した者は即時解雇の嚴罰に處する。

「手洗場」や「湯呑場」は實に行き屆いた處と、殆ど有名無實で貧弱きはまる處とある。

「通風裝置」並に「換氣裝置」も有る處と無い處とある。

原動機は蒸氣機關四分、電力四分、水力一分、瓦斯機關一分である。

「傳動裝置」は架空式に依るものが多く、ロープ、ベルト半々である。暗渠式に依る場合もある。併し乍ら近頃は一〇〇單獨電氣運轉式に依る方法が漸次さかんになり、危險な「傳動裝置」を用ひぬ工場が出來だした。

「危害豫防裝置」は或る程度まで機械についてゐる。それは齒車のカバーといふ位なものが――。併し「自働停止裝置」を取付けてゐる處は極めて稀だ。

プラット式力織機などには杼の飛ぶことを防ぐ爲めのオートマチック・シャットル・ガードを、いたんだまゝ再び取付けぬ處さへある。

各機械の間は通例非常に狹隘であって、巨きな荒い機械は別とし重要な仕上機械の間を二人すれ違つて通ることの出來ない工場が多い。

「暖房裝置」はこれを用ひぬ處斷じて無く、八分通りヒーチング・パイプに依るがたゞ鐵管を通すのみのやつと、ノッズルより生ま蒸氣を噴出せしめるのとある。新しい工場では暖め濕ためた空氣を、床下の通風路から輸送するやうに出來てゐるが、これは極くすくない。

「噴霧裝置」は綿糸及び麻の場合、織布部には必ずこれを設備し、先進工場では紡績部と雖も小數取付けられてゐる。而してボール・ダックス式に依る場合とターボー濕潤裝置に依る場合と二樣に分れる。

「運搬裝置」は主として「小トロッコ」に依ることが多く、巾員一呎くらひなレールが敷設してある。而して大工場では場外に出でて普通のトロッコを用ひる。

二階建て以上の工場では昇降用に「ホヰスト」と稱する一種のエレベーターを使用してゐる。トラベリング・エプロンを裝置してゐる工場は未だ見受けぬ。その代り高い處から袋へ入れた管糸を辷り落とす方式は可成り廣く用ひられて居る。

延綿（ラップ）を搬ぶ爲めに架空式を採用してゐる工場はまゝある。併し乍ら概して言はゞ相當重きものがあるにも拘らず、クレンの有る工場は皆無であつて、整經機の荒卷ビームなどは四百封度もあるが、これを矢張り手で運搬するのだ。

非常口その他の危急避難設備に極めて行き屆かず、五六百人もは入るやうな大工場と雖も非常口は唯だ二三ケ所しか無く、しかもそれには門が嵌めて錠前までおろしてある。

高層建築の工場と雖も何等それに適應した裝置をつけず、平時の昇降用に供される巾せまき梯子があるのみだ。

濕度、温度、音響、塵埃

前に言つたやう棉纖維に濕氣を與へるとその強度を増し、作業が容易で能率の増進が計れるてふ論據からして保健の點などは聊かも考慮におかず、綿糸紡織工場では甚だしい濕度を有たせるのが常だ。殊に織布工場は甚だしく、向ふが霧の爲めに霞んでさへ見へる程だ。

噴霧器の數は凡そ床面八坪くらひに各一個を、十呎以上の高處に取付け、そのボールダックスと稱するものゝ噴出口（ノッヅル）からは百封度以上の高水壓で、三十二分の一吋乃至十六分一吋孔口から間斷なく水を吹き出すのである。而してこれが殆ど細霧狀となつて空氣に飽和して行くのだからたまらない。

織布部で恰度その噴霧器の眞つ下に台を受け持つた女工なんかは、過度な濕氣の爲め實に惱まされるのである。機械が何時も運轉して居ればいゝが、故障で一時間も停めやうものなら忽ち赤錆が來て了ふのである。そして着物や頭髮は年中しつとりしめつてゐる。

女工達はよく「冬は極樂夏地獄」といふがこれは冬季工場生活の暖かさを僅か計り誇張した丈けの言葉で、凡そ何れへ行つても平均濕度六十五度以上、酷寒の時と雖も五十度を降るやうなことは滅多になく、氣張ればちよつと汗ばむのである。だから年中一重の工場着一枚きりだ。そのかはり場外へ出ると一時に寒くてやり切れない。

此の如く冬季暖房のおかげで寒さ知らずに働けるに反し、夏季になつて濕度の上騰を見ることは甚だしい。なにしろ密集した人體の熱と、機械の熱と、原動機の熱と、太陽の射熱とが加はる故、その焦熱地獄の苦しさは想像以上だ。其の上綿の毛の

やうな棉纖維が汗でべたべたと顏に吃つ着くからやりきれない。殊に「糊場」では右四つの上さらに蒸汽を使ひ、「瓦斯燒場」では點火瓦斯を使ふのだから全く言語で表現し得ぬ苦悶がある。糊場なんかでは百十度以上に昇つて余りに暑いため、小便が皆目出なくさへなつて了ふ。

左に東京某工場に於ける大正十二年八月十五日の溫度表を示さう。

工場	午前九時 乾	濕	%	正午 乾	濕	%	午后三時 乾	濕	%
外	90	80	53	49	81	60	94	8[illegible]	60
混棉	86	87		90	83		90	82	
打棉	90	81	63	91	82	62	92	80	53
梳棉	92	81	64	99	90	64	97	83	59
同上	89	81	45	98	89	64	97	85	54
精紡	101	86	47	103	88	47	105	87	40
同上	97	85	58	99	86	58	105	88	52
合糸	90	83	62	93	84	43	95	85	60
撚糸	99	89	41	96	85	57	100	81	38
紐場	89	82	49	93	85	66	94	84	78
瓦斯燒	97	88	46	100	89	53	103	90	52
水氣	90	82	45	99	85	49	97	87	67

前の二表を對照して見るに、紡績は濕氣がすけなくて自然であるが織布は殆ど飽和狀態にあつて不自然、ことに保健上よろしくないと言はねばならぬ。

次ぎに音響の劇しいことは紡績工場の特長であつて、二三の作業部門を除いては何れも喧囂を極めたものだ。一梃杼機械の音を細かく分析すれば一軸毎に、一齒車毎に、一風車毎に異つてゐる。併し乍ら工場ではそれ等無限にひとしい雑音の單位が一種の渾然とした綜合音響となつて居り、よく一台の機械の音を聞くことが出來ない。

從つて普通に談話の出來ないのは事實であり、始めて這入つた者などは馴れるまで全く閉口のほか無い。

而して此の音響の强度は、どれ位なものであるかといふに、先ず製罐カジヤへ行つた大きな厚い鐵板を先手ハンマーでなぐり、一時耳が聞こへなくなつた程度のものを十と假定する。これは山間で一丁以内の距離へ落雷した場合でも略ぼ同じだ。すると織布部などでは七乃至八くらひな强さである。織機工場の音を五分間諸君が聞いて見給へ、暫くは耳が鳴つて聾になる。で、新入者などは其の强音の中で十時間以上もゐる故、さつぱり聽覺が損じられ、すけなくとも一ケ月くらひは明け暮れ耳が鳴つて仕方がない。そしてもう永久に聾になつたのかと思つてゐると、漸

やく抵抗力が出て來て聞こへるやうになるのが普通だ。

若しその工場に私設電話がありとするなれば、受話器をぴつしり片手の耳へ當てゝ、片方の耳は手の平で塞がなかつたら聞こへない。

しからば其の工場内ではどんなにして言はねばならぬ用を辨じるかと申せば、口を耳にひつゝけて大聲に奴鳴るのである。であるから其の習慣がついて男女工の聲は非常に高いのが普通である。

右に就いて專門的立場から職工の聽覺試驗を行なふと隨分面白からうと思ふが、遺憾ながら今は研究の余地がない。

それから汽笛は作業中鳴つても始ど聞こへないし、最高度の雷鳴も判らぬ位だ。

塵埃に就いては言ふまでもなく戰慄すべきものがある。何しろ棉纖維一本の大いさは〇、〇〇〇五——九吋、長さ〇、八——一、八吋といふ微々たるもの故、いくらでも飛び放題である。おまけに工場は運轉の爲め風があるから恰も煙のやうにふはふはと飛散する。而して其の數は平均紡績工場の空氣一立方呎につき三百萬乃至四百萬であり、職工が十時間中に吸入する量は〇、十二グラムであると。これを左の表に作つて比較すると面白い。

紡績工場	〇、一二グラム
製粉工場	〇、一三
鑄物工場	〇、一四

粉や鐵よりも、無論棉は遙かに輕いから同じ一グラムでも嵩が高いのに、他の工場とほんの僅かしか重量が違はない。これをもつて見ても如何に紡績工が多くの塵埃を食べるかが窺はれる次第だ。

右のやうな鹽梅ゆへ機械及工場の掃除は隨分やかましく、一日に三回くらひは是非共やらされるが其の度毎に普通の人家の大掃除以上の塵が出る。そして如何にしてもこの塵埃を吸はねば仕事が出來ないのだ。此の項については余りひどすぎて、もう何とも言ふことが出來ない。兎に角、粉な雪が吹雪くのと同じで、初手のうちは迚も呼吸が苦しいたらない。

標準動作

紡績工場の作業システムに「標準動作(モーシヨンスタリー)」といふものがある。——これはテーラーの科學的管理法に端を發するものであつて、よく言ふ米國の一煉瓦積工が右へ積む爲めの煉瓦を左へ置いて一々持ちかへたのに反し、今度改めて始めから右へ置いて持ちかへる手數を省いたら、一日に何千枚とか多く積み得たといふや

うな事柄を、紡績技術に應用したものだ。

第一に鐘紡がこれを始め、次ぎに東洋紡が眞似てから段々ひろく行なはれるやうになつた。

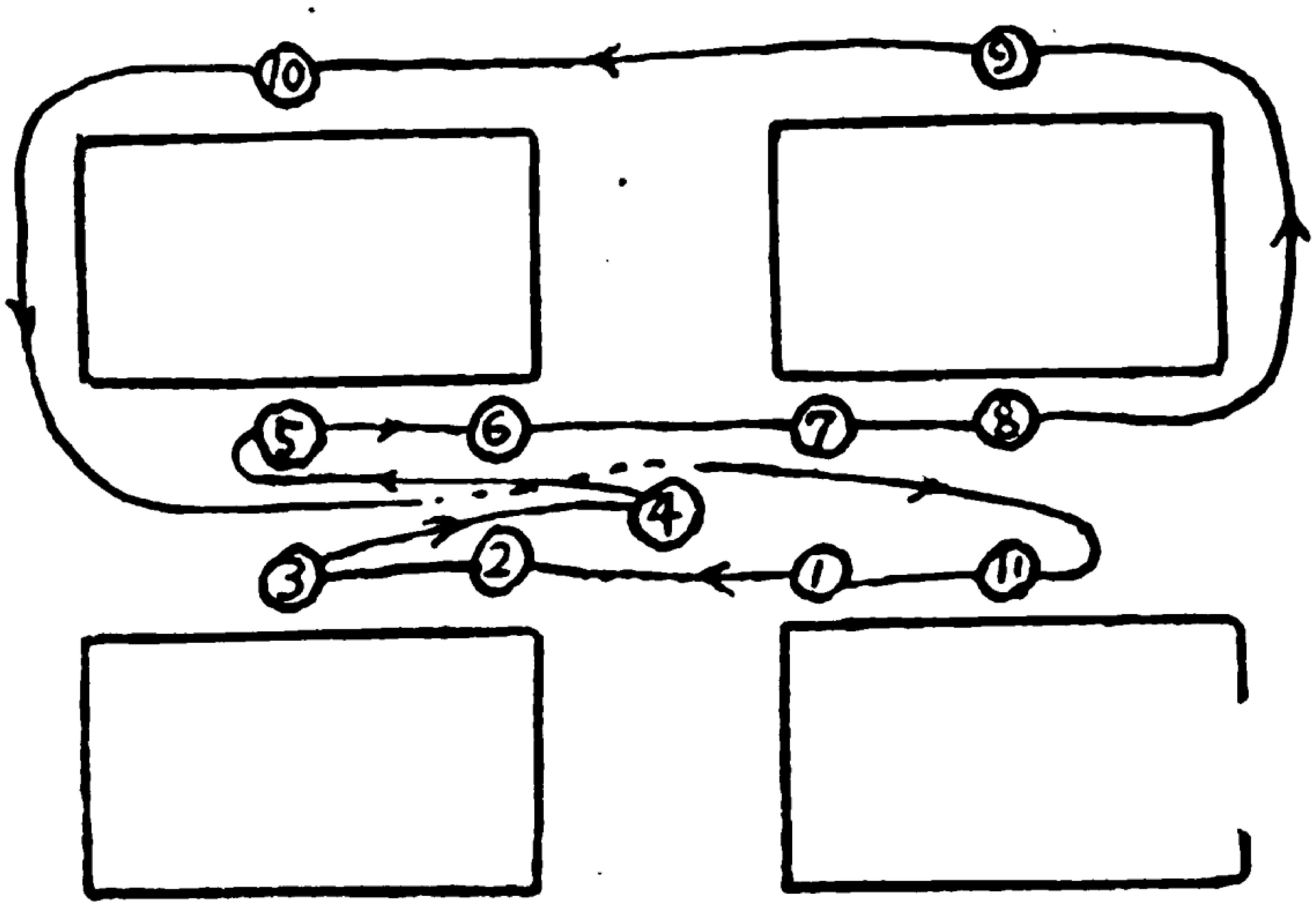
先づその大體を次圖に就いて說明しよう　これは織布部に於ける標準動作のうち、「細物四臺持ち女工」が其の四臺の力織機間を常に矢の如く歩るき廻るのであつて、一つも無駄の無い動作を示し制定したものである。今番號順に彼女の爲す仕事を言へば左の通り。

(1)――杼換へ・管換へ。

(2)――杼換へ・管換へ。

(3)――織り前しらべ。

(4)――管の口出し。



(5)――織前しらべ。

(6)――杼換へ、管換へ。

(7)――杼換へ、管換へ。

(8)――織り前しらべ。

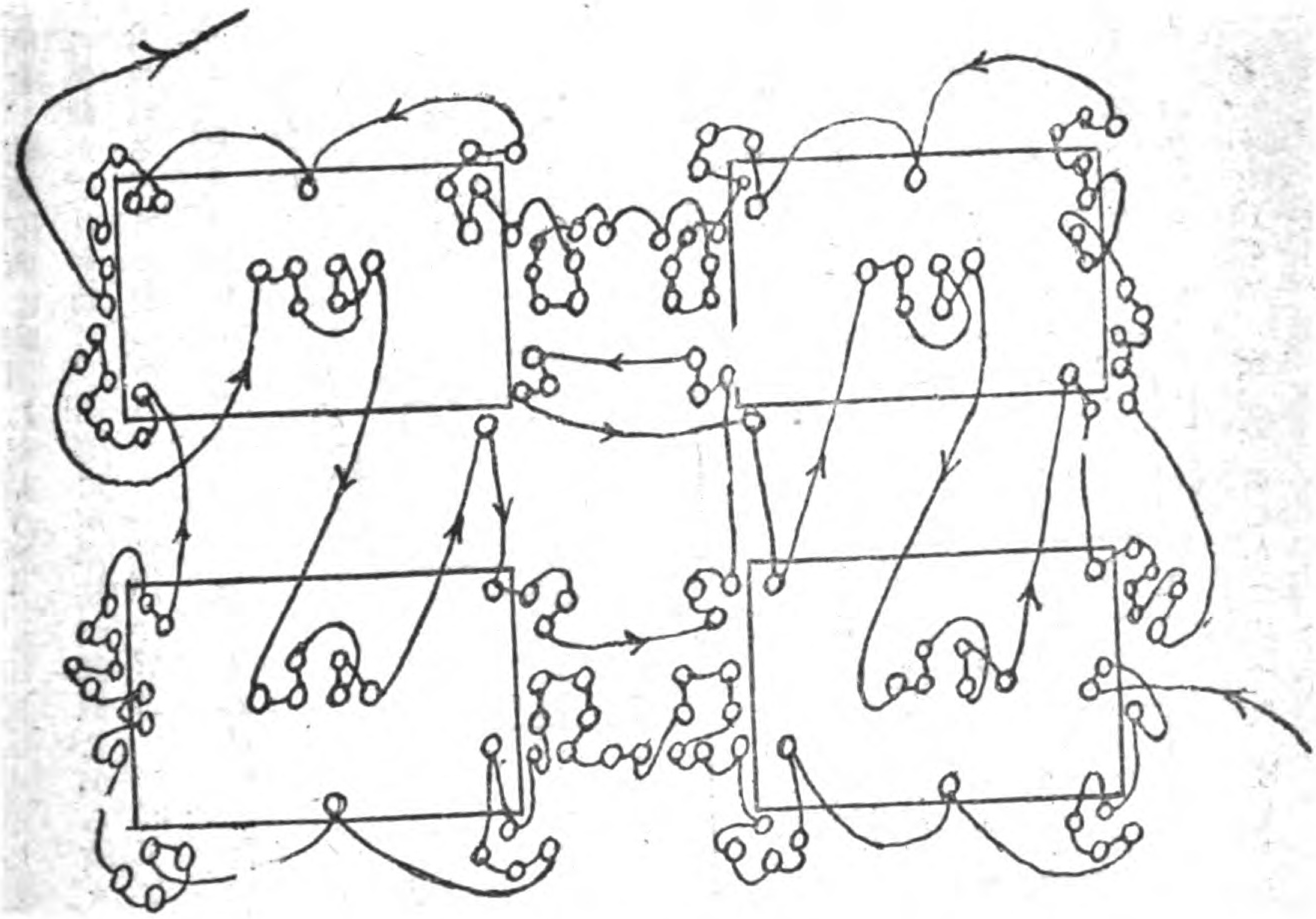
(9)――經糸の手入れ

(10)――經糸の手入れ

(11)――織り前しらべ

而して此の圖面で見て上の二臺と下の二臺を交互に此の如く行なふものである。だから布の織れる方の手入れを二回する間に、後の經糸は一回手入れする譯となる。若しこれを無標準動作で動作することにしたなれば、大抵な女工は「織り前しらべ」、ならその仕事だけを先づ四臺一時にやつてのけ、次ぎに「杼換へ、管換へ」の作業にとりかゝるであらう。さうすると歩くこと無駄が大分多くなり、加ふるに唯だ歩く爲めに歩るいゐる間は機械の運轉狀態に氣も附けぬことゝなる。

それから今一例として「注油」の標準動作を擧げて見よう元來「力織機」（パワールーム）は疊一枚ほど小さき機械ゆへ、運轉とめて油さすことは容易である。併し乍ら運轉を停めることは成る可く避けた方がいゝから、出來得る限り運轉中に注油をして了ひ、どうしても停轉せねば射せない部分に限り、これは休憩時間中の



停轉を利用して注油するのである

織械はその構造とライン・シャフトの關係上四臺が一組になつて居る。であるから注油の場合も圖の如く四臺づゝを一區として、數多の油孔へ最も都合よく注油器を差し向けるやうに考へらる。若し此の數多い油孔を順序なく思ひ出す儘に油さして行つた日には、二倍以上の時間を費したうへどうしても落ち度が出來るを免かれない。

標準動作とは概略右のやうなものであるが、實はもつともつと難かしい。ことが專門的に亘る故どうにも說明のしようがないが、前の「杼換へ、管換へ」といつた中にも分析すれば十數段の動作が含んで居り、一々これを女工に强制するのである。また男工とても此の通りであつて、原料が無くなつて掛けかへる臺へは、何分前に臺と何吋の距離へどつち向けに原料を置き、どうしてこうしてあゝすると、いやもうピンからキリまで規定が設けられてゐて凡てこの作業はその型へ嵌めねばならぬ。實に斯くせされば大量生産が成り立たぬのだ。だが、何萬人寄せて見ても一人々々異つた個性を有つ人間が、はたしてそれによく堪へられやうか！

工場とは永遠に、科學と創造の矛盾を繰りかへす處であつた

近代工業は徹頭徹尾「加工」に過ぎない。工匠は永遠に創造の喜びを失ひ、マシン油と燃料より以上のものを喰はねば動かぬ、彼等資本家より言はしむれば「不經濟な機械」に過ぎないだらう

所謂福利增進施設

醫療機關に就て

工場に醫局の設けがあるといふことは、言ふだけ野暮なほどきまつたことだ。で、これ丈けは何處へ行つてもある。併し乍ら外の商賣醫者や病院でさへ先づ患者の懷を覗つてから脈を把り、着物を見て聽診器を當てる世の中だもの、どの職工より偉いと思つてゐる筍醫者奴、どうして直接金も取れない患者なんかを眞心から診るものか。實際どこへ行つても彼等の不親切には呆れる。いや別段親切にやつてくれなくても當り前に取り扱つてさへくれゝばいゝのだがまるで話にならぬ。それは俺達が機械を分解したり組立てたり、油さしたりグリスつけたりする方がどれだけ誠意があるか。

さて、一體どんな病院や、醫局があるかといふに、極く小工場を除いては大抵入院出來るやうになつて居り、處によつては傳染病隔離室を建てるものもある。また鐘紡には既に高砂、茅ケ崎に肺病患者の保養院を設けて居る。

醫員は醫專出格のところが多く、看護婦は比較的多くゐるが免狀有ちは一人乃至二三人くらひで、あとの多數は見習を使用する處が多い。

診料及び藥價は寄宿女工無料、通勤者實費または廉實乃至瓶代を徵收するのであつて、市價より遙かにやすく醫者にかゝれるのは事實だ。而して通勤者は大抵その家族をも同一に取り扱ふ場合が普通だ。但し藥價無料主義の處と雖も特別藥及び材料を要する場合は實費を取る例が多く、藥局に不備なる點の多きことは事實だ。一例を擧げると東京モスリン龜戶工場の如きは近時藥價を全廢して無料主義を採つてゐるが呼吸器病必需藥フアゴール、强度の胃腸病に配合するロートエキス、並にホミカエキス等にこと欠き處方箋が用を爲さなかつた例がある。それから職工の家庭へ應診する工場はすけなく、たまにあつてもどうも醫師が職工を輕蔑してきはきせぬやうである。此の點、鐘紡だけは流石にちよつとほめても差支へない。

保育場

「保育場」「幼稚園」はある處とない處とあるが、ある處では

大抵その種類が二樣に分れてゐる。その一例を擧ぐれば、工場に「托兒所」(保育場と稱へる)を置いて社宅に「幼稚園」を置く工場が大阪にある。而してこの二樣に分けた目的といふものは保育場で通勤女工の子供を預り、幼稚園では子供を集めて遊ばせるのだ。これは寔に結構なやうだが、怪我にも彼等の親切氣から始まつたことではなく、夜業のとき子供がゐると晝間わいわい騷いで主人夫婦を眠らせないところから、工場で居眠りをして仕樣がない。茲で一策を案じ出したのが件の「幼稚園」なのである。

保育場は工場の敷地內でなければならぬ譯がある。それは休憩々々に補乳せねばならぬ故であつて、此の爲め社宅では一々出門させる譯に行かぬから已むなく場內に取り入れたのである。工場內のものはどうしても場所柄空氣も惡く子供の爲めによくない傾向のあることは免れない。壁一重なかにはがらがらがらがらと大きな機械が怪物の喘ぐやうに音たてゝ運轉してゐる。工場の窓を開くとそれがよく見へる。樹木も草花も邊にはない。實に女工の子は子守唄の代りに機械の騷音を聞き、母の懐ろで溫かくねむる代りに保育場の籠の中で泣き疲れて寢なければならない。豐かな情操を養ふことは出來ないのである。

女工の母ちやんは蒼い胸をひろげて、墨染の體に赤ちやんを抱へ乍らたつた十五分の休憩にお乳をくれるのだつた。可愛い坊やがどんなに泣いたとて荒くれな汽笛は一秒も容赦せず、嚚々と吼へて早く這入れと急き立てる。

左に東京某工場に於ける「保育場規定」なるものを引用して、同工場の托兒組織說明に代へやう。因に同工場は無社宅であるから場處は場內の一つ處だ。

第一條　本園ハ當會社職工ノ幼兒ヲ預リ善良ナル習慣ヲ養ヒ知育ノ發達健康ノ保全ヲ助成シ父母ヲシテ意ヲ安ジ各々其業務ニ精勵セシムルヲ以テ目的トス

第二條　本園ハ職工救濟ノ趣旨ニヨリ社費經營トシ人事係ノ所屬トス
但シ衛生ニ關スル事項及一般ノ取締ニ關シテハ業務分掌規定ニ依リ當該各課コレヲ管掌ス

第三條　本園ニ左ノ保員ヲ置キ幼兒保育ノ任ニ當ラシム

保育教師　貳名
保姆　若干名
小使　壹名

第四條　本園ヲ乳兒部、幼稚部ニ分チ乳兒部ハ生後七十日ヨリ一年六ケ月幼稚部ハ學齡迄トシ定員ヲ左ノ通定ム

幼稚部　五拾名
乳兒部　拾五名

第五條　幼兒ハ左記各號ニヨリ教育保育スルモノトス

(一)　乳兒部ハ體育ヲ專ラトシ幼稚部ハ年齡ニ應シ談話、躾方、手工、唱歌、遊戲ノ初步ヲ授ク

(二)　保育時間ハ午前五時半ヨリ午後五時半迄トシ會社ノ休日ハ休

園ス、但シ時宜ニヨリ夜間預リヲ爲スコトヲ得
(三) 日ノ長短ニヨリ適宜ノ間食ヲ給與ス
(四) 會社ノ賄ヲ受ケントスル者ハ一食金貳錢トシ牛乳使用者ハ現品ヲ持參スベシ
(五) 幼兒ヲ入園セシメントスル者ハ保護者同伴人事係ニ申込ミ承諾ヲ得別ニ定ムル入園證ヲ差出スヘシ
(六) 幼兒疾病ニ罹リ傳染ノ恐レアルカ又ハ保護者ノ看護ヲ要スト認ムルモノハ全治迄休園ヲ命ズ
(七) 保護者ノ心得事項左ノ如シ
(イ) 工場休憩時間ノ外入園スベカラズ但シ事情止ムヲ得サルモノハ此限リニアラズ
(ロ) 園内ニテ直接間食物ヲ與フベカラズ
(ハ) 園内ニテ喧噪スベカラズ
(ニ) 名義ノ如何ニ拘ラズ係員ニ金錢物品ヲ贈ルベカラズ
(ホ) 前各號ニ違背シタルトキハ入園ヲ拒絶ス

附　則

一、本規則ハ業務取締役ノ承認ヲ受ケ改正増補ヲナスコトヲ得
二、本規ハ大正八年三月一日ヨリ實施ス　以上

而して保育料は二三年前頃まで之を相當額徴收した處が可成多かつたが、近頃は兎に角無料といふことだ。

序で乍ら、玆にずつと以前に工場で書いた叙事風な詩の習作があつて、女工の「母」と「愛兒」のことがよく出てゐると思ふから三四年も前の舊稿のまゝで引用しておく。

「一番」の汽笛が鳴る……

けたゝましい音たてゝ
まだ明けやらぬ朝の平和をかきみだす夫婦笛が——
千日前の宵は
工場町四貫島の曙だ！

武士の子は刃の音に眼を醒まし
貧乏人の子は茶碗の音で眼を醒ますといふが
女工の子はまた
汽笛の音に起き出して合奏する

びつくりして飛び起きた母親は
黒い上衣に黒いはかま
禁慾の着物を逆さまに
髪もときつけず白粉もつけず
行くよ！　自由と美の廢墟へ

背中の子供は
妙鉢のやうに泣いて伴奏する

母親は一度子供に接吻して保育場へ預け
廢墟の中へ
死せる暴君のお通夜には入る
さうして「三番」の汽笛の一聲
暴君の亡靈と組んでダンスおどる……

汽笛が鳴つたら
亡靈とおどる甘さにすつかり醉ふて
乳房の邊まで汗ばんだ母親は
始めて我が子のことを思ひ出して保育場へ行く

だが暴君の亡靈にしやぶられた乳房は
蒼ざめて胸は痩せこけてゐる
汽笛、入場、タタ、タタ、タタ……ダンスは續く！

ひるの汽笛が鳴つたのか？
母親は食堂へかけて行き
南京米の飯を喰ふ
そしてまた保育場へ——

お乳をくれやうと思へど
不養の果ては乳田の旱魃
乾葡萄に似た乳房を
小兒は齒咬んで泣く——

詮方なく母親は練乳をときにかゝつたが
攪件(まぜ)てゐるうちにかゝれの汽笛！
——入場、抱擁、ダンスは面白い
しばらく續く……

三時の汽笛が
ちよつと休めといふて鳴る——
保育場へ、哺乳、旱魃、汽笛！
——入場、ハンドル、クルクル、タタ……

疲れたお前はもう駄目だ！　早く新手と入れかへろ！
汽笛が吹鳴ると母親は
子供を抱いて我が家へ歸る
さうして翌日の準備に寢なければならない
子供は泣く……

死んだ累看の亡霊！　機械の情夫に愛を奪はれて
工場の横手の大斬家川へ
子供の自殺が流行り出すぞ！

扶助、保險、金融等

扶助は「相互扶助」と「會社扶助」の二様に分けることが出來るが、主として後者であつて前者の設けある工場は至つてすけない。

工場法の規定に依る業務上の事故に對する扶助は、協調會の調査にかゝる六大會社のものを左に轉載しやう。

右の社名が判然しないのは甚だ面白からぬ次第だが「已」が鐘紡なること丈け、當方蒐集の材料と合致してゐる點から明かである。併し乍ら右のものは何れも「規定」であつて、これを此の通り嚴守してゐるや否やは頗る問題だ。内外綿會社、東京モスリン等で全然業務上、工場側の落ち度から生命をおとした職工を私は數人知つてゐるが、百圓の香典料しか出さなかつた例がある。或はまた兎に角規定を設けておき乍ら少しも實行せず、指一本くらい落とした者には藥價とその半癒までの給料の外、一厘も扶助しない工場がまだ多數あることを見逃してはならぬ。

相互扶助的なものは前も言つた通りに些だすけないが全然その例が無いこともない。併し根本に於いて職工の發意に依るものは皆無で、謂はゞ何か事のあつた場合會社の負擔を輕くする爲め、會社側がこれを先に立つてやるのである。今東京某工場の「救濟會規則」中から扶助の項目を拔萃して見やう。

第九條　本會會員ニシテ疾病又ハ負傷ニ因リ休業ノ爲メ三十日以上引籠リタル時ハ左ノ見舞金ヲ贈與ス

見舞金　金參圓以上　金貳拾圓以内

前記ノ見舞金ヲ受ケタルモノニシテ尚ホ引續キ休業ノ爲メ引籠レルハ其後三十日毎ニ見舞金ヲ贈與スルコトアルベシ

第十條　前條ノ期間ハ九十日ヽリトス

但シ場合ニ依リ此ノ期間ヲ伸長スルコトアルベシ

第十一條　會社ヨリ入院ヲ許可セラレタル者ニハ手當トシテ一日金五錢ヲ支給ス

第十一條　業務上負傷シ又ハ疾病ニ罹リタル時ハ其負傷又ハ疾病ノ治癒後ニ於テ遺留セル身體障害ノ程度ニヨリ左ノ區別ニ從ヒ救濟金ヲ支給スルモノトス

一、終身自由ヲ辨スルコト能ハザル者　金七拾圓以上　金百五拾圓以内

二、終身勞役ニ服スルコト能ハザル者　金九拾圓以上　金百參拾圓以内

三、從來ノ勞務ニ服スルコト能ハザル者　金參拾圓以上　金百圓以内

項目	施行令ノ最低限度	甲	乙	丙	丁	戊	己
工場施行令第六條ノ場合	一日ニ付賃金ノ二分ノ一但三箇月以上ニ渉リタルトキハ其後ハ三分ノ一	三箇月迄日給ノ二分ノ一以上四分ノ三以下其後三分ノ一以上二分ノ一以下	日給全額、三月後ハ二分ノ一以上	日給全額二箇月以後ハ十二割迄ニ増給スルコトアリ	日給全額	六箇月マデ日給ノ二分ノ一以上其後三分ノ一以上	日給全額
同第八條ノ場合	賃金百七十日分	勤續五年未滿ノ者日給百七十日分、同五年以上ノ者二百日分以上、同十年以上ノ者二百五十日分以上	三百日分以上 九百日分以內	三百日分以上 四百日分以下	三百日分以上	百八十日分以上 六百日分以下	負傷　七百日分以上 疾病　六百日分以上
同第九條ノ場合	十圓	二十圓	十五圓以上 五十圓以下	五十圓	二十圓以上	五十圓以上 八十圓以下	負傷　三十圓以上 疾病　二十圓以上
同第七條第一號ノ場合	賃金百七十日分	二百五十日分以上	三百日分以上 八百二十日分以上	三百日分以上 四百日分以下	三百日分以上	百八十日分以上 六百日分以下	日給三百日分以上ヲ手當トシテ支給シ、尙終身本人ノ生計ヲ扶助ス 女子ニシテ既婚者ナルトキ、又ハ其後會社ノ許可ヲ得テ結婚シ一家ヲ成シルタトキハ無料ニテ社宅ヲ貸與又ハ相當家賃ノ全額ヲ補助シ、且ツ附添トシテ世話人一名ヲ雇入ルル金額ヲ補助ス
同第二號ノ場合	同百五十日分	二百日分以上	二百五十日分以上 六百二十日分以下	二百二十日分以上 三百日分以下	二百日分以上	百六十日分以上 五百日分以下	
同第三號ノ場合	同百日分	百二十日分以上	百五十日分以上 四百二十日分以下	百五十日分以上 二百五十日分以下	百五十日分以上	百日分以以上 三百日分以下	百五十日分以上 會社ノ勞務ニ服スルコトヲ欲セズ治癒後退社スル場合ニハ百五十日分以上ヲ支給ス但最低額ヲ五十圓トス
同第四號ノ場合	同三十日分	三十日分以上	三十五日分以上 二百三十日分以下	三十日分以上 百五十日分以下	三十日分以上	三十日分以上 百二十日分以下	三十日分以上
同第十四號ノ場合	同百七十日分	百七十日分以上	百八十日分以上 七百五十日分以下	規定ナシ	二百日分以上	百八十日分以上	規定ナシ

四、（イ）健康舊ニ復スルコト能ハザル者
（ロ）外貌ニ著シキ醜痕ヲ貽ス者
（ハ）身體ヲ傷害シ舊ニ復スルコト能ハズト雖モ引續キ從來ノ勞働ニ服スルコトヲ得ル者
金五圓以上
金七拾圓以内

五、身體機能ニ輕微ナル障害ヲ貽ス者
金壹圓以上
金拾圓以内

第十三條　有夫ノ普通會員ニシテ分娩シタルトキハ産婆又ハ醫師ノ證明ニヨリ左ノ見舞金ヲ贈與ス

見舞金　金五圓

第十四條　本會普通會員ニシテ疾病ノ爲メ會社ヲ解雇セラレタル者ニハ左ノ見舞金ヲ贈與ス

一工場法施行規則第八條（自第一號至第三號）ニ因ル者　會社給與金ノ十分ノ八

二、業務ニ耐ヘザル疾病ニ因ル者
金貳圓以上
金拾圓以内

第十五條　本會普通會員中寄宿職工ニシテ疾病ニ罹リ醫師ノ診斷ニヨリ靜休ヲ必要トセラレタル場合ハ金貳圓以内ノ手當金ヲ支給スルコトアルベシ

第十六條　本會普通會員ニシテ水火震災其他ノ災厄ニ罹リタルトキハ左ノ見舞金ヲ贈與ス

見舞金
金壹圓以上
金五圓以内

第十七條　本會普通會員ニシテ業務上ニ非ザル死亡ノ場合ハ遺族ニ左ノ弔慰金ヲ贈與ス

弔慰金
金拾五　以内

第十八條　本會普通會員ニシテ業務上ニ因リ死亡シタルトキハ遺族ニ左ノ弔慰金ヲ贈與ス

弔慰金
金七拾圓以上
金百五拾圓以内

第十九條　本章ニ規定セル救濟事項ニ該當セズト雖モ必要アリト認メタル場合ハ相當ノ救濟金ヲ交附スルコトアルベシ

平職工に對して病氣欠勤の場合日給を與へる工場は極めて稀れだ。それに反して雇員並に社員には月給なる故これを支給するのであるから、待遇差別の甚だしさ、不公平さには唾棄したい。

それから保險に加入せしめてゐるやうな處は余り例が無い。

金融機關については寄宿女工に極く小額の小遺錢を勘定まで貸すやうな例は一二これを見受けるが、一般的には此の便宜が無い。それで不時に金子の入用なとき貯金のない者は甚だ困るから米を受けて賣つたり、食券などを割引して金に代へることが普通爲されて居る。それから後に述べる指定下宿の委任前借など、隨分悪いことが已むを得ず行なはれて、諸種な弊害がともなつたものであるが、それは「指定下宿」の章で詳述する。

それから男工が阿彌陀籤なんかをやつて金を都合することもある。また頼母子講（無盡）は最も普通に流行するところと言はねばならぬ。

病人、死者の慘虐

三つの天災

此處は水多き浪華の市、正蓮寺川の河畔には三層樓の大工場が巍然として聳へて居つた。これぞ名も美しく「浪華紡績」と言ふ

はるけくも生駒の連山より出づる旭光に新しい避雷針が燦然として黄金に輝くのだつた。そしてまた六甲の山なみへ夕陽が入るとき、再び強く光つて威力を示し、富の集まりを象徴し、無言のプロハカンダーをする。

夜になつて電燈がつくと、流もやらぬ河の面に映じて、灯の小波は美しかつた

廣い正蓮寺川の唯中に島が一つ在り、其處に女工の寄宿舍を建てた。そして女工は陸橋と河橋を二つ渡つては毎日工場へ通ふのである。搾取の城を築くに、何とした要害の地であらう玆に奪掠の城廓は築きあげられ、搾取の裝置は据はつて資本主義の礎が固められたのであつたが、その富の殿堂は束の間に大地震の爲め、根底から破壞されて了つた　遙に遠い濃尾の地殼から大蛇ののたうつやうな地波が起つてからがらと工場は崩壞する。

煉瓦の崩れる音、機械の壞れる音、蒸氣の洩れる音、非常汽笛はもの哀れげに鳴り響くのであつた……

女工の悲鳴がそのあいだを切れ切れに聞へる……

煙突は怒濤に飜弄される舟の帆柱の如く、今にも倒れさうに、そして折れさうに搖らぐ。防火壁は倒壞し、煉瓦と金物と死體は雜然として其のあとに殘つた。レールは折れ支架は飛び、軸は飴の如く曲つて、精巧なりし機械の跡形もない。

破壞された鑄物の下敷きになつた少女、「煉瓦が胴腹へは入り、髑髏を半分埋められた男工、または口に鐵棒のつら貫いた老婆、脚の無い者、手の無い者、首の失へたもの、砂にまみれた肉片、その悽慘たる光景は戰場よりも酷かつたであらう」

隨分時間が經つてから堀り返して取り出された屍は、さつと菰を掩つて其處らに列べられたが、何れの肉が何人に屬するのか、またはどの首が誰につくのか判らない。手脚のついた者でも、顏面が潰れて何びとたるかわきまへることが出來ない。

電報で呼び寄せられた父兄は、どれが肉身か判別がつかない。唯だ慘狀に泣くの外はなかつた

噫！　戰死以上の殉業者よ！

これは明治二十四年の出來事であるが、今は殆ど廢寺になつ

た正蓮寺の境内に、さびしくその記念塔が一本殘つてゐるのみだ　三百人の靈は安らかであるか。

その後浪華紡績は三重紡績に代はり、東洋紡績に名が代はつたが、工場は修繕 改築されて 相變らずその フライヤーの音と共に、女工の不幸と逆比例で黄金を生み出すだらうが、「奴隷の島」は彼女に渡る瀬もない。

次ぎは大阪紡績三軒家工場の大火である。

明治二十五年十二月二十日拂曉、第一工場から發火し、火はフレームに積もつた綿を傳つて忽ち一階の天井へ燃へ移つた一階の天井は直ちに二階の床なるが故、油の浸んだ板は一たまりもなく勢づいて燃へ始める。さうして焔は立ち處に三階まで昇つて全工場は猛火に包まれた。そして、二階で作業中の女工が、階下が火事だと知つた時にはもう火の海でおりることが出來なかつた。

原動機は仲々停まらない。ロープやベルトに火がついて、「火の車」は物凄く唸つて回轉する……。

一階につき一ケ處しか無い非常梯子は、幅が狹い爲め役に立たない。で、二階以上にゐる者は見る見るうちに猛火に包圍されねばならなかつた。此のとき非常汽笛斷末魔の聲を擧げて鳴る……。その中で火に燒かるゝ女工達は。

「助けてくれ……。助けてくれ……。」

「あつい！ あつい……。」と悲鳴を張りあげる。だが救助の術もない高層な建て物――。

「おゝゝい、おゝゝい……。」

尚ほもこう狂ひ叫ぶ女工の背後へ猛火は渦卷いてのさばりかゝるのであつた。下から仰ぎ眺めてゐると、頭髮に火がついて狂亂し乍ら燒け死ぬ態が手に取るやうである。なかには焦熱の苦悶から逃れやうとして三階の窓から飛び降りる者がある。併し空中で數回翻筋斗うつて地上へ落ちた時は既に絶命の外はない。おまけに其處も火の海だし、飛んだ壓力だけでも生命は無い筈。

その時の死傷者も數百人に昇つたと傳へられる。併し右の慘劇に對しては紀念碑一基あることを聞かない。それに引きかへ同工場の創始者山邊丈夫なる者は、その銅像さへも工場門前に建てられて居る。而して紡績界で成功せんとする小技術家連は、これを「紡績の神」と尊崇して朝夕禮拜するとかや。

大火と地震――これを世人は天災と言ふだらう。併し乍らあながち單純に天災の慘禍と言つて片附けて了つて、良心の苛責を感じないであらうか？ 兩者ともなるほど表面の形ちは奇禍

であるが少しく内省すれば虐殺と何等えらぶところが無い。多額のコンミツシヨンに依つて不正を通したであらう不完全な建築、又は避難設備もつかぬ高層な工場、何れが資本主義の罪悪でないと言へるだらう。

大正十二年九月一日、突如として關東一圓を襲つた大地震は東京と共に富士紡押上、大日本紡深川、栗原紡織の三大工場を灰燼に歸したほか、死の谷小山以東の大小工場を殆ど倒壞せしめて了つた。それは天が我れ等人間に向つて血の啜り合ひするやうな淺間しい行爲を再びせぬやう、啓示するかの如く見へた。主なる罹災工場を擧げると、

富士紡——小山工場、押上工場、川崎工場、程ケ谷工場、小名木川工場
日清紡——龜戸工場
鐘紡——東京本店
大日本紡——深川工場、橋場工場
東洋紡績——王子工場、栗橋工場
相模紡績——平塚工場
東洋モスリン——龜戸工場
東京モスリン——吾嬬工場、龜戸工場
栗原紡織合名會社——工場
小田原紡績——工場
東京紡績——工場
服部商店——横濱工場
東京毛織——大井工場、千住工場

右多數工場の死傷者は災後未だ日淺き今日、その數を知ることが出來ない。來し壓死及び燒死を遂げた者、負傷した者がどんなに尠く見積つても五千を下ることはなからう

地震そのものは勿論不可抗な自然の威力である。併し乍ら積み上げた煉瓦の下敷になつたり、据へ付けた機械の間へ挾まつたり、又は燒き殺されたりしたのが悉く不可抗なる大自然の法則に從つたものであるや否やを考へる時、私は尠からぬ疑問を起こさないでゐられない。要するにそれは狡猾飽くなき資本主義がもの言はぬ自然への罪の轉嫁に他ならんのである。そりやあれ丈けの大天災で一人も人畜に被害を及ぼさぬといふやうなことは期し難い。併し乍ら人間本位な最上人命の尊ばれる世の中だつたら尠くとも今回より遙か少數の死傷者で事が濟んだであらう。

富士紡小山工場の如きは一たん逃げ出した女工を「お前達の體は金を出して買つてあるのだから自由な行動は執らせない。」とて、嚴重な監視づきで倒壞工場の炎々と燃へあがる工場脇の

空地へ拘禁して置き、遂に避難時を失して延焼建物の爲め四方から挾み燒きにして了つた事實がある。

また大日本紡深川工場の如きは震前すでに危つかしくて中にゐたまらぬやうな古き煉瓦建ての三階工場に、重い機械を据へて運轉させて居つたのである。工場の煉瓦壁には幾つもの龜裂が入つてゐたが、毫もそれを修理することがなかつた。

こんな危險きはまる工場を何故建て直しては置かなかつた？建てかへる金が無い位なら大きな顏して營業をするな――。而してこれに何等危急避難設備がついてなかつたのだ。

右の他何處の工場へ行つても三百人も五百人もが一堂には入つて働く大工場内へ、ほんの申し譯的に一二ケ所の非常口しか設けてなかつた。しかも其の非常口は扉を閉ざして門をはめ、ご叮嚀に錠前まで卸して全然非常口たるの効果を收め得ない裝置にやつてあるのだつた。

自然は氣まぐれに大地を搖るがし、風をも吹かす。

併し乍ら錠前と、人を埋める爲めに煉瓦と石材を與へたことが無かつた。

嗚呼この一瞬

それはもう余ほど以前大阪に虎疫が猖獗をきはめた或る夏のことである。下らぬ處に面目を重んじた其の工場は始め一人の患者を工場醫に隱匿せしめたのが元で、恰かも水面に油を注いだ如く忽ち戰慄すべき病菌が全寄宿舍に蔓延したのである。此のとき會社は×××警察署と結托して、隔離室てふ名目の許に三十間とはなれぬ同敷地内にバラック建の病舍を急造し、灼熱するトタン屋根の下に荒莚を敷いて、二重三重と患者を押し込めた。そして一名の臨時醫師を増員して防疫にこれつとめたのであるが、此の際眞正患者と診たものは全部助からぬものと斷定し、××。×××××、忽ち患者は七轉八倒の苦悶を始めて遂にいたばたと虛空をねめて息ひきとるのであつた。するとそれを薄々覺つた他の患者は、口を緘つて藥を服まない。すると會社は荒くれな人夫に命じて××××××××、否でも應でもそれをませねば措かないのである。

×××服ませ終つて苦悶が始まるともう×××××××、×××まバラックから文字通り引きずり出して「死體室」といふ小舍へつれ行き、其處で棺桶ならざる釘が出てグリスのついた機械の空箱へ詰め、車に乘せては火葬場へ運搬して了ふのだつた。親が來たら無論傳染病ゆへ警察の命令で直ぐ燒いた

と言つて了ふのである。こうしてそも幾百人の女が無念を呑んでかへらぬ幽鬼に旅立つたことぞ――。

それから此の話しはまだ日も淺い四年のこと、岐阜の工場で流行性感冒があつたときだ。そばについてゐて怠らずに手當さへすりや充分癒るものを夕方の看護きりで誰も行かずに朝まで放つて置く故、病人はあずり廻つて、而も血みどろになつて死んでゐるのであつた。それを「死體室」へ屠牛か何ぞのやうに札つけて、放り込んで置き、打電に依つて親が來ると暫らく門で待たせてゐるうちになかへ電話かけて引き合はせの用意をする。死體室から引き出し、慌てゝ一間に安置して燈明をあげ、「泣き婆」を一人つけてから「さあお通り下さい。」と出る。

こうして彼女達は「末期の水」も飲ませて貰はずに、恨みを呑んで幽鬼とならねばならなかつた。

私は大阪に於ける一流會社某工場の「死體室」といふ小舍を見たが、それはまあ何といふ酷いところだつたゞらう。恰度たとへて言ふなれば便所の端に掛け出しをしたやうな處で、家庭養鷄地の鷄糞をちゝと一緒に捨てる場處と同じであつた。それを見た私は實際「地獄」といふ感じがした。

東京には工場で葬式をいとなむ場合、棺桶に入れた儘で、棺巻き一つせずこれを畚に乘せてむき出しの儘、人夫に擔がせて砂村の燒場へ棄てに行く工場がある。(續く)

不兒罕山

幸田露伴

第一折。不兒罕山

場所。貝加爾の大湖より遙に南方に發して、其湖に流れ入るところの土拉河、及び數千里を東に流れて終る黑龍江の名を以て韃靼海峽に注ぐところの大河の一源たる敖嫩河、又敖嫩河の南に於て東流せる他の一源たる克魯倫河、即ち漢史に於て臚朐河或は飲馬河の名を以つて呼ばるゝ一河。此等三大河の出づる地方たる不兒罕喝拉圖納の一峰。西南のみ少しく開けて他は重疊せる山嶽。

人物。蒙古部族の一酋長、都蛙鎖豁兒。年齡三十歲位。肩幅濶く、身長五尺二三寸、顴骨秀で、加之廣く、鼻平たく、眼は細けれども其頭下り尾上りて鼻に斜に對し、且一眼は失はれて黑き一線を留めたるが、却つて異樣の威嚴を添ふ。頭には平なる毛氈帽の、遠くより望めば低き三角形をなすやうなるを、紐もて頤の下に結び、紐の終りの垂れて動くに任せ、後部に細からぬ棕櫚樣植物纖維の尾の如き飾を下ぐ。袖の窄からず濶からず筒形に仕立てたる裘を被て、前を重ね合はせたる上に緊しく帶して、きつしりに身に着く。腰に長からぬ劍を佩び、手首に細き靭やかなる樹枝の鞭の緒を貫き、鞍に食料雜品等入りたる革囊二つほど付け、大きくはあらねど強き良き馬に乘りて、緊張

もせねば弛緩もせず、油断なき位にて出づ。偶然の山遊び、遠乘の態。

都薩鎖豁兒弟朶奔蔑兒干。同じこしらへ。同じく馬上。小さく强げなる弓小さき矢壺の毛皮づくりなるを負ふ。三つほど年下にて、容貌兄より優なり。

都薩鎖豁兒。待つことの來るのは遲いものぢやが、意に期せぬことの現はれるのは疾いものぢやな。

朶奔蔑兒干。それは何様いふことなのです?

都薩鎖豁兒。然様ではないか。鹿の獵の期節が過ぎて終ふと、また其期節の來るまでを待つて居る。其間は長い長い、まことに長い。吾家の答驛兒（馬の名）は、つい先日まで未だ使へる健やかな馬であつたのにもう今では老いさらほうた腰ぬけ同様なものになつて終うた。意に期せぬことの現はれるのは疾いものぢやとつく〴〵思はずには居られぬ。

ダウボンメルガン。ハヽヽ。それは何程良い馬でも二十歳にもなれば、老いまするは。わたしが生れて初めて乘つた馬は彼馬でしたもの。

ドアソゴル。ハヽヽ、俺が馬の乘りやうを覺えたのも彼馬ぢやつたのよ、ハヽヽ

ダウボン。それですもの。どうも是非無いことです。ハヽヽ。また何だつて其様な事を思ひ出されたのです?

ドアソゴル。ナニ、きさまが俺の云つたことを何様いふことなのですと問うたからよ。それで喩に云ひ出したばかりさ。

朶奔メルゲン。ハア、

ドアソゴル。まだ解らぬやうな顏をして居るな。ソレもう直に此山の嶺ぢやらうはサ。かうして天氣が好うて閑暇であるから何の事も無しにぶら〳〵と出掛けたら、急いだ譯でも何でも無いに、忽ち頂上へ來て終うたらう、それで待た

ぬことは疾う來るといふたまでぢや。

朶弁メルゲン。ア、、然樣なのでしたか。わたしは又兄上が何ぢややらカーメ（神託を傳ふる哲人）の言葉のやうな調子で申されたから、何事かの意味が有るのでは無いかと思ひました。ハ、、、ほんとにもう何時か知らず頂上は直に其處になりました。

ドアソゴル。カーメ！ ハ、、、。なるほど、そんな風に聞えたのだつたか。ヤ、しかし俺だつて自然に未來を覺らないとは限らない。犬は風の中から野獸を嗅出す、禽は茂みの中に居ても箭を持つてゐる人を見出す。俺は元來ドア（哨望又は探路を主とする武者の義）なんぢや無いか。ナ、

朶弁メルガン。それは然樣ですが、兄上はカーメのやうに怪しいことは仰あらない。

ドアソゴル。當りまへサ。彼奴等のやうな出鱈目を誰が言はうものか。然し待つことの來るのは遲いものぢや、と今云つたのは本當ぢや無いか。

朶弁メルガン。然樣です。本當です。

ドアソゴル。イヤ、さういふことを自然に云ひ出したのが本當であつたのだ。俺は疾くから汝の爲に良い女房が天から授かるのを待つてゐるのだ。だが何樣したものか、まだ授からない。待つことの來るのは遲い。

朶弁メルガン。ハ、、。兄上、おからかひなさつてはいけません。

ドアソゴル。だが、期せぬことの現はれるのも疾いものぢや。それも然樣です、本當ですぢやろう。

朶弁メルガン。さうです、いよ〳〵もう頂上嶺へ來ました。

ドアソゴル。その事ぢやあ無い。ソレ、今日は俺も汝も汝の女房の事など期しては居なかつたらう。だからもう汝の女

男が不意に現はれても可い筈ぢや無いか

朶奔メルゲン。およしなさい、つまらぬ冗談は。

ドアソゴル。イヤ、自然に言ひ出した事なのだから、然樣いふ事が出て來るかも知れない。カーメの言葉だつて、わざとこしらへたのは中らないが、自然に出て來るのは中ることが多い。俺のは自然に云ひ出したのだから

朶奔メルゲン。それでも人一人居ない此樣な高い山の頂上で!!？ハヽヽ。それよりも頂上に來ましたから、馬を下りてお休みなさつては。

ドアソゴル。おゝ、然樣しよう。

ト二人馬を下り、遙に西南の方を見下しながら、狹き平地に兩脚を箕のやうに伸べて坐す。ドアソゴル鞭をもて何の意味も無く地をたゝきながら、

ドアソゴル。成程靜かなものだ。高い山の上だ。人一人居ない。

朶奔メルガン。ハヽヽ、まだ其樣なことを云つてゐられる。

ドアソゴル。イヤ、からかふのでは無い。ほんとの話ぢや。全く人一人居ない。それでも美しい牝鹿が此樣いふところに出ぬとは限るまい。(美しい牝鹿は郭阿瑪剌勒(ゴアマラル)といふ。蒙古民族神話の同民族祖先たる女子の名にして、郭阿瑪剌勒と、蒼き狼の義なる布兒特齊諾(ブルテチノ)といへる男子との間より蒙古人は世に出でたりと云傳へられ居るなり)

朶奔メルゲン。我等の御先祖樣は天よりお下りられたやうなもので、

ドアソゴル。我等から見れば御先祖樣は天に近い方々だ。さうだ。然し我等の子孫から見れば我等は天に近いものだ。昔といふのも今のやうなものだ。今といふのも昔のやうなものだ。

ト云ひながら、今度は思ひ附きて鞭をもて地をヒタ〳〵とたゝき。

ドアソゴル。草をたゝき地をたゝくと鹿や野禽(ノトリ)は出る。美しい牝鹿をたゝき出してやりたいものだがナア。

ト戯謔の如くに又眞面目の如くに輕く地を撃つて止ます。朶奔蔑里干は馬に附けたる雜嚢よりアルタック(羊の類)の蹄もて造れる酒盃を取出し、クーミス(馬乳もて醸せる酒)の入りたる革嚢を取卸して、酒盃を兄にわたし、

朶奔メルゲン。まあ宜しい兄上。一盃めしあがつて、そしてわたしに擬して下さつた方がありがたく思ひませう。

ドアソゴル一盃受けて、山下を見渡し、

ドアソゴル。ア、好い裾野の景色ぢや。よその國のあゝいふ廣場で、何千とか何萬とかいふ敵の奴原を追捲つて、俺の馬の尾と俺の帽子の後飾(ウシロカザリ)とが、虚空に眞直になるほど打飛(アツト)ばしたら面白からうナア。そしてギユーと飲んだなら此のクーミスも一トしほ甜からうにナ。

ト仰ぎ盡して弟に擬す。

朶奔メルゲン。へゝゝ。兄上は勢のよい事が強うお好きぢやが、さういふことは我等の部族が、もつともつと殖ゑてからで無くては。

ト又酒盃を屬す。受けて、聲大きく、

ドアソゴル。ちやから、

ト強く地をたゝき、

ドアソゴル。早く好い牝鹿をたゝき出してやりたいのぢや。

朶奔メルゲン。で、待つことの來るのは遲いのですか。

ドアソゴル。馬鹿ッ。自分の事を他人の事にして居る！俺が人の事を我が事のやうにしてゐるのに！も一ツ重ねて注げ、汝のために飲んでやるぢや。

朶奔メルゲン。クーミスは何程飲んで下さつても宜しい。然しわたしの事は兄上の事のやうになされなくてもです。

ドアソゴル。イヤ、汝の爲め飲んでやる。も一ツ注げ。ム、よし〳〵。待てよ、クンカラート（蒙古の一部族）は、

ト鞭もて地をたゝき、

ドアソゴル。ア丶、好い鹿は居ない。バヤツート（同じく一部族の名）には、

ト考へながら又鞭打ち、

ドアソゴール。やはり居ない。タイチウ（同じく一部族の名）は廣いが、

ト考へてピシリ〳〵と打ち、

ドアソゴール。居るか知らぬが俺は聞かぬ。

朶奔メルゲン。兄上、もう宜しうございます、拾置いて下され。口の黒い馬から口の白い馬が出來ますぢや。如何に兄上でも何も彼も見透せる譯では無さゝうです。期せぬ事は疾う現はるゝものぢや、とは御自分で仰あつた。拾置いて下され。今日は何か知らぬが、ふとした言葉から、丁度川の出はじめる水源の沮洳地に、指で劃いたほどの一寸した水道が出來ると、いつまでもいつまでも盡きぬ水が流れるやうに、何ぢやから妙なことばかり言ひ出して止められぬ、もうさし置いて下され。

ドアソゴル。馬鹿云へ、其の臂喩の細い水道に水が流れて盡きぬのは、そこら中に水が滿ちてゐるからぢや。日頃俺が思うて居た事ぢやによつて、不圖した言葉から俺がカーメのやうになつて終つたのだ。も一ツ注げ、汝のために飲ん

んでやる。

ト、又一盃飲みて、少し酔ひたる勢好く、又地をたゝき。

ドアソゴル。何樣も何も出をらぬ。

朶奔メルゲン。まあ、何もテングリ（天、自然）から出る、地からは出ますまい。

ト云ふ。ドアソゴル急に獨合點して立上り。

ドアソゴル。然樣ぢや。ちとよい心持になつた。もう歸らう。

ト馬に騎る。弟も品々を納めて馬に騎る。

ドアソゴル。馬の上で見ると、目の下の世界は又好いものぢやナ。雲も無い、カラリと晴れて居る。うね〳〵した山々の尾も見える、樹々の畑のやうなのも見える、小さな川々も見える。草も見える。俺はソゴル（獨眼の義）ぢやが、三日路の前途まで見えると云はれてゐるドアぢや。見えるだけ見てくれよう。

ト遙に西南の方を馬上にて睥睨する。弟も同じく望み見る。兄は急に笑ひ出して、

ドアソゴル。ハヽ、ハヽ、ハヽ。見えた見えた。待たぬもの、現はれるのは疾い、現はれたぞ、メルゲン。

朶奔メルゲン。何が見えました、わたしには何も異つたものは見えませぬ。

ドアソゴル。見える、現はれた。

朶奔メルゲン。何物が？

ドアソゴル。汝の女房が見えて居る。

朶奔メルゲン。エ？、

ドアソゴル。見ろ。汝は今何事もテングリから來ると云つたがナ、見ろ彼の統格黎河の邊を見ろ。

朶奔メルゲン。テングリ河と申しまするとゝ?

ドアソゴル。知らぬことは有るまい、あの末は鄂爾坤河に入る統格黎克鄂爾罕(天の小川)を。

朶奔メルゲン。知つては居りますが、何樣して見えませう!こゝからは三日路も彼方では無いですか。

ドアソゴル。然樣さ、三日路も隔つて居るか。然し俺にはハツキリと見えてゐる。オヽ彼の川の側を一族の人民が通つて居る。

朶奔メルゲン。ハテ!

ドアソゴル。老人も居る、若い者も居る。その中に一ツの黒い輿の付いてゐる車があるぞ。其の車のオルチク(車の前方の居處)に若い女が乘つてゐる。好い女だ、立派なものだ。あゝ美しい。こりや汝の女房にせいで何としようぞ。汝あゝいふ女を娶らないで、何とするのだ。

朶奔メルゲン。そんな遠くが兄上には見えますか?私には何も見えませぬが。

ドアソゴル。汝には見えなくても俺には見える。アツ無邪氣に笑つたぞ、斡兒朶(幕舍)の上に低く照る春の星のやうに柔和で美しい、あの眼、咲かうとする花の莟のやうな、あのふつくりした頬。しかも衣の着かたが端然としてゐるから屹度賢いしつかりものぢやぞ。

朶奔メルゲン。ほんとに兄上には其樣な事まで見えまするか。

ドアソゴル。見えるとも。汝には見えないか、不憫な男だナ。ヤ然し弓を彎かせれば汝はメルゲン(精射の人)の名を負うて居て、百步離れたところでも次の箭で前の箭の筈を射ることも出來る、また飛ぶ鳥の翼を縫ふことも出來る。

それは俺には出來ぬが、汝には出來る。それと同じに俺には見える遠方が汝には見えぬのだ。疑つてはならぬ、疑ふところは無い。アゝ見える〳〵と美しい女だ。人に約束が濟んでゐる女だか、然樣で無いか、それまでは見透せぬ是非とも汝の家內にさせたいものぢや。汝これから直に馬を駛らせて彼の一群をとらへろ。そして未だ約束の濟まぬ女なら無理にでも貰へ。

朶奔メルゲン。これはどうも。

ドアソゴル。何が何樣もだ。屹度汝の氣に入るぞ。疾く行け、疾く行け。

朶奔メルゲン。でもどうも。

ドアソゴル。そんなこと云つてゐると好い女房を貰ひそこなふぞ。俺の革囊も、ソレ汝に與る。

ト食物入りの革囊を取つて無理にわたす。

朶奔メルゲン。兄上には見えても私には何も見えませぬ。當も何も全く有りはしませぬ。それに三日路を行けと仰あるのですか。

ドアソゴル。ソレ、あの通り見えてゐる。美い女だ。心に期せぬものゝ現はれるのは早いのぢや。行け。

朶奔メルゲン。…………

ドアソゴル。何をぐづついて居る。部族の者も皆知つて居る。三日路を見通すドアソゴルぢやぞ。行かぬか、メルゲン。

ト鞭もて弟の馬を強く打つ。馬は烈しく走り出す。朶奔メルゲン半弓を高く揮つて別を告げ、兄の方を見て、

朶奔メルゲン。何事も天ですか。

ドアソゴル。然樣ぢや。何事も天ぢや。天に會つて來い。

朶奔メルゲン走り去る。ドアリゴル笑ましげに見送る。

第二折。天の小川

場所。不兒罕山を西南に離るゝ統格黎克豁羅罕(テンゲリ・コロカン)の流のほとり、遠見に不兒罕の大山脈蜿蜒重疊して、大なる祭壇几の如くに巍然として、晴れたる青天を劃す。川は寧ろ山脈と反對なる方より來りて、其の左方の山盡くるところの低地に向つて去らんとする形勢。小川とは云へ可なりの幅有りて、水清く河原開け、樹木草叢よきほどに點綴し、河の側におのづからなる一路あり。朶奔蔑里干、氈帽裘衣、箭を負ひ弓を手にし、劒を佩き馬に騎して元氣よく馳せ出づ。小手をかざして前方を望み、

朶奔メルゲン。兄上も面白い方ぢやが、俺も面白い男ぢや。何事も天ぢや、天に對面して來いと云はれたが、俺も天に對面して運命と眼の前に視るつもりで馬を馳せて來た。一昨日、昨日、今日、もう三日路を走つた。ほんとに兄上には見えたことか見えぬことか、それは俺には分らぬ、然し三日路も走れば其間には若い女の五人や六人には出逢ふ筈ぢやつた。ハヽヽ。幾人かの娘にも出會つた。一隊の人民にも出會つた。それでも言葉を懸けたいと思ふのも無かつた。

ト前面を見てゐる中に何物かを認めて、

朶奔メルゲン。ヤヽ、行手の川端(カハバナ)の矩(カネ)の手になつたところの彼の樹立(コダチ)の茂みの中から一隊の人馬が見え出して來た。ホウ、先に立つたのは厳めしい奴ぢやナ、や、車も見える、若い女も居るやうぢや。

ト見て居るまに、現はれ來る一隊の人馬。先頭に立つたるは豁里剌兒臺蔑兒干(コリラルタイメルゲン)、四十格好、赭き顔、立派なる體軀、黒き羊裘、栗毛の馬、短き劍、鹿皮の靱(ウツボ)、半弓を手にして出づ、續いて雜嚢多く附けたる馬二匹、各々馬上に

弓箭の若者、それ〲の姿。次に少く離れて高き一輪の馬車、車上に細き樹枝を穹形に張りて、それに毛皮を被ひて幌となせる、其前部にゴリラルダイの娘阿闍貉阿（アヂンゴア）、襟、袖口等に紫がゝりたる貂の皮の付きたる白き綿羔（コヒツジ）の柔らかげに見ゆる裘衣（ウハギ）を被て、雑綵の色鮮やかなる薄き毛織の幞頭（かぶりもの）を蒙り、厚き毛氈を重ね布きたる上に坐し居る。きれの長き眼の眼尾の方上りて、眼の中澄みて麗はしく、明るき額、品よき鼻つき、紅き唇やゝ厚けれども締りたる口元。十八歳ばかり。後方には阿闍貉阿（アヂンゴア）の母巴兒忽貝貉阿（バルクツンゴア）、三十四五歳、裘を被、蒙頭（かぶりもの）を戴き、氈に坐す。次に若く健やかなる女。車の後少し離れて駱駝に野營用の杵、毛氈、綱縄等を付け、又少し離れて山羊八九頭、痩馬に騎りし十四五歳の童子これを追立つ。

馬上の若者一。ヤ、彼處の路の高みにたゞ一人で馬を立て、此方を見て居る者がある。

馬上の若者二。中々逞しい奴ぢや。

ゴリラルダイ。氣にかけることは無い。

　一行漸く進む。朶弁メルゲンと阿闍貉阿と面を見合はせる。双方心動く。馬上の若者は朶弁メルゲンを訝しみ視る。ゴリラルダイは平然としてたゞ前路を望む。

朶弁メルゲン。ア、何事も天ぢや、とう〲天に對面した哩。これで無くて復（また）別に何が有らう！

ゴリラルダイ。エ。

　朶弁メルゲンを視る。朶弁メルゲン馬をすゝめて

朶弁メルゲン。何處から來られた方々ぢや。

ゴリラルダイ。御身は？

朶奔メルゲン。天より不兒罕大山に生れた布爾特齊諾と豁阿瑪喇勒との末の脫羅豁眞伯顏と孛雞黒臣豁阿との第二の子、朶奔メルゲン。

ゴリラルダイ。ホウ、血統を尙ばるゝ人の名乘りかたぢや。自分は豁里禿馬敦部落の官人（官人の二字心得難かれど脫ト察安に依る）豁里剌勒歹。

朶奔メルゲン。何として豁里禿馬敦よりは來られました？

ゴリラルダイ。禿馬敦（バイカル湖附近の地名）の地方は他に好いものもござらぬ、貂鼠や靑鼠を捕獲することを主と致して居りましたが、餘り少うなつたので仲間内で互に當分禁約することになりました。で、此の不兒罕山つゞきの山々谷々に野獸の多いことを聞き、幸に不兒罕山の晒赤長者、あの兀良孩姓の晒赤長者を賴んでまゐりました。

朶奔メルゲン。ハア。して御家族の方々は？

ゴリラルダイ。濶勒巴兒忽眞（バイカル湖東の地）の主人巴兒忽歹メルゲンの女巴兒忽眞豁阿それが即ち自分の妻でござつて、禿馬敦の阿哩黒烏遜（アリクの河、今のイルク河）附近に住んで居りました時、設けましたが、彼の娘の阿闌豁阿でございまする。

ト一寸吾が女アランゴアの方を顧る。朶奔メルゲンも同じくアランゴアを視る。柔らかなる感情は男の面に現はる、娘も同じ感情に誘はる。朶奔メルゲン男性的勇氣を鼓して、

朶奔メルゲン。ヘ、好い方々と御近附になりました、今日は吉い日でござる、此後は何ぞに付けて御身に對する吾が心の温みを現はしたいと存じまする。阿闌豁阿殿と仰せらるゝナ、オ、阿闌豁阿殿とナ。あゝ何事も天であるとは虛言では無かつた！今こそ天に對面し得たのである！、一昨日から御身等を尋ねて、とう〳〵今日御身等に遇ふた！、

ゴリラルダイ。一昨日から我等を御尋ねあつたとは?、一昨日からトナ、

ト訝しむ。阿闌谿阿も一昨日といふ語に訝りて桀奔メルゲンを覩る。

桀奔メルゲン。さやう一昨日、一昨日。

ゴリラルダイ。何様して始めて會うた名も知らんだつたものを、一昨日から尋ねられたと云はるる?

桀奔メルゲン。カーメのやうな怪しいことを云ふと思はるゝのか。然し、知らなんだからこそ知るやうになり、尋ねたればこそ相會ふたのでござる。

ゴリラルダイ。ハヽヽ。御身の言葉はまことに面白い!然し其仔細は更に分りませぬ。

桀奔メルゲン。仔細は斯様でござる、御覧なされ彼の不見翆の秀でた峰!

ト不見翆の一峰を指さす。ゴリラルダイも阿闌ゴア(ゴアは乙女、媛など云はんが如し)も遙に其峰を瞻る。

ゴリラルダイ。フーシ。

桀奔メルゲン。彼の峰の頂上に此馬此姿で自分が立つたのは一昨日でござつた。

ゴリラルダイ。なるほど。

桀奔メルゲン。連れだつて居つたのは吾が兄のドアソゴルでござる。自分は未だ家内無しでござるに因つて、談話の次手から兄は自分に妻を迎へよといふことを申し出してござるが、いざ歸らうと致して馬上遙に此方を望みました時、其兄は忽ち此方を見て、彼處に一ト族の人々が大の小川のほとりを進み居る。其の裏に一つの黒い輿ある車がある、車の前坐に美しい女性が見える、

トこゝまで言ひて又阿闌ゴアを見る。阿闌ゴアおもはゆげに母の方へ身を向く。ゴリラルダイ少し馬を退かせて用

心する。それにも關はらず無邪氣に

朶奔メルゲン。ト申しまして、兄は又申しますには彼の女性はまことに面さしと云ひ物ごしと云ひ、立派な女性である。

ト云ひかけて又阿闌ゴアを見る。阿闌ゴア愈々母の方へ寄る。

朶奔メルゲン。但し既に人に許されてあるのであらうか、どうか、

ト又阿闌ゴアを見る。阿闌ゴア春の湯光に醉ふ花の如くなりて堪へ兼ねて母車室の低き隔欄ごしに母の膝に俯く。

引かへつて母の巴兒忽眞豁阿は緊張して朶奔メルゲンの人物を覩る。朶奔メルゲン熱心にはあれど邪氣無く、

朶奔メルゲン。そこまでは見透すことは出來ぬが、若し婚約無き處女ならば、汝に取つては上も無い幸福の星である、

世界に復とは得難い寶である、汝の一生を明るく而して暖にする吉慶の光明である、

ト誇張の限りを盡して云ふ。巴兒忽眞ゴア愈々緊張して聽く。

朶奔メルゲン。ト申しまして、自分に直樣天の小川をさして參れと申しました。

ゴリラルダイ。其樣に遠方が見えたものでござるか。

ト信ぜぬ態。

朶奔メルゲン。イヤ、見えたか見えぬかは弟の自分にもわかりませなんだ。然し兄は恐ろしいドアでございまして、三日路を見抜くといふことは人々も申して居ります。兄は自分の疑に對して申しました、人はおのれが出來ぬからとて他人も出來ぬと思うてはならぬ、汝の弓射る技が俺には出來ぬ通りに、俺の物見の力は汝には無い、何事も天ぢや、往つて見い、天に會つて見よ、と申しまして、自分の馬を激しく駈けさせました。

ゴリラルダイ。ドアソゴルといふ方のことは耳に挾んで居りました。然し

ト云ひなから不見罕の峰を望んで、

ゴリラルダイ。あの峰から我等の女づれの車の上までを詳しく見られたことは？

ト合點せぬ顔つき。

朶弁メルゲン。然し何より明らかなしるしには、斯樣して自分が現に御目にかゝつて居りまする。

ゴリラルダイ。イヤ。存ぜぬことの多い者は疑ふことが多いものでござる、失禮は自分が何も存ぜぬ者ゆゑと御赦しなされ　御話は一應きこえてござるが。言葉は何とでも云へるものでござる。

ト受付けぬ態度、用心して馬を又一歩すさらせて朶弁メルゲンを油斷せず見る。朶弁メルゲンも一寸たゆたひしが、直に氣を取直して馬をゴリラルダイに近づけ、明るき顔して、

朶弁メルゲン　これはしたり、自分は、言葉は何とでも云へるのではござらぬとおぼえて居りまするが、

ゴリラルダイ。ハヽア、それは？

朶弁メルゲン。言葉は何とでも云へるものではござらぬ。男たるものは吾が良き友と思ふものに虛言は云へぬものでござる。

ト云ふ時、阿蘭ゴア面をあげて好ましげに朶弁メルゲンを見る。母バルコヂンゴアも悦ばしげに見る。ゴリラルダイは無言、不動の姿勢。

朶弁メルゲン。また、も一ツ言葉は何とでも言へるものでござらぬ場合がござる。それは………

ゴリラルダイ。それは？

朶弁メルゲン。それは……

ゴリラルダイ。それは？

朶奔メルゲン。それは……。

トたゆたひしか、思切つて

朶奔メルゲン　それは譬喩を以て申すならば、春の末の峰々の雪が解けて小鳥が悦んで啼くやうな頃に、川の一番水上に當る凹いところに清水が湧きまする。其清水は絶えぬ力をもつて地の下から滲み出まする。何處から出るのだか、何故出るのだか知れませぬか、たゞもう、和らかに、おとなしく、しづかに、そして抑へきれぬ塞ぎきれぬ幽かな勢をもつて湧き上がる。か、其水はまだ小川になるか、小さな瀧になるか、長い〳〵川の水上になるか自分の運命を知らぬ間は、溢るゝばかりになつても、音も立てなければ呼きもせずに凝然として困つて溜まるばかりです。然様いふ心持が胸の中に起つた時は、何とか言ひ出したいのは山々でも、言葉は何とでも言へるものではござらぬ。

ト苦しげに云ふ。阿蘭ゴア此言葉を聽いてゐる中伏目になり、次第〳〵に身を捩りて又母の方に寄る。巴兒忽眞ゴア、朶奔メルゲンが吾が女に優しき意を寄せたるを明らかに悟りて、夫のゴルリラダイと顔を見合はせ、無言の中に思入あり。

ゴリラルダイ。なるほど言葉は何とでも言へるものではござらなんだ。して御身の兄上の御意は兎に角、御身は現在兄上の言はれた通りに思うて居らるゝと云ふのでござるか。

此言葉に渡りに船を得たる心地。勇を鼓して

朶奔メルゲン。全く兄の言葉通りの存じ寄りを今は持つて居りまする。

ト、きつぱりと男らしく云ふ。阿蘭ゴア親子三人感動する。重ねかけて

朶弃メルゲン。彼の峰から此處へ降りてまゐりました、そして此處で方々に御眼にかゝりました、全く不思議な事と思ひまする。何事も天でござりまする。自分は兄を一毫も疑ひませぬ。兄は優れたドアでござりまして、たゞ地の上を看透すばかりで無く、天の意をさへ覩得たかと思ひまする。自分は今兄の言葉通りになつて居りまするから。

ト云ふ。ゴリラルダイは考へながら朶弃メルゲンの人物を洞察し盡さうとするやうに左見右見して、

ゴリラルダイ。如何にもドアソゴル殿の神のやうな眼力を御疑ひはいたしませぬ。兄上は御身の弓箭の技を御自分の眼力に擬へられたと申せば、御身もメルゲンとして優れてゐたまふには相違ござらぬが、こゝに御身の優れた技を御示しあつたら、一切の事を御物語通りと存じませう。

朶弃メルゲン。メルゲンとしての自分の技を御覧になりたいと仰せらるゝか。

ゴリラルダイ。イヤ所望申すなどいふ失禮な意は持ち申さぬが、………

朶弃メルゲン。嫌ならずば技を見せよと仰せらるゝのぢやナ。

ゴリラルダイ。と申すのは女房どもの父親も巴爾忽歹メルゲン、聊か弓箭の道には名を有つたものでござるから、

朶弃メルゲン。いかにも、

ト心中に勇みを懐いて、四方を見廻はし、

朶弃メルゲン。何物にもあれ、的をさへ御示し下さらば、

ト自信に滿ちたる態、ゴリラルダイも四方を見廻はし、

ゴリラルダイ。何か宜しき物もと思ふに、小鳥も居らず、………

と一寸考へしが、馬を車に歩ませ寄せて妻巴兒忽眞ゴアに吾が手中の弓箭を渡して何か呟やく。巴兒忽眞ゴア共弓

箭を娘の阿蘭ゴアに渡して又何か呟やく。阿蘭ゴア弓箭を取り悩みたる態

ゴリラルダイ。阿蘭ゴアよ、その路の邊の川添ひの老いたる丸葉楊(ヤナギ)の太き幹に一ト箭射立てよ、いづくへ立つても宜い。

ト優しく言ふ。阿蘭ゴア羞らひながら朶奔メルゲンをソツと看、父の言葉もだし難く車上より射る。箭は目通りより二間程の高さに立つ。

ゴリラルダイ。時に取つての的はあの箭。娘が射たる彼の箭を射つて御示し下さい、細かい箭つぼの事でござれば中らぬとてももとよりの事、御心輕う御試みなされ。

○奔メルゲン。ホウ、おもしろい御思付の的、箭幹(やがら)箭羽は興もないこと、箭筈を的といたし申さう。

ト云ひながら馬を特更に乗り開きて、宜き程のところより身を後へかへして兵と射る。ガツシと朶筈は砕け飛び阿蘭ゴアの箭の傍に朶奔メルゲンの箭は鎚戰して立つ。一同喝采賛歎する。阿蘭ゴア母に取付く、

ゴリラルダイ。ヤ、皆虚妄(うそ)で無い、皆本當だ!

ト、思はず叫びの聲をあげて、

ゴリラルダイ。何事も天ぢや、なるほど天ぢや

ト、何やら考へ、馬を箭奔メルゲンの方へ駈けさせ、兩手を擧げてメルゲンを擁抱き、

ゴリラルダイ。何事も天ぢや。娘は御ン心に任せまする。末長う可愛がつてやつて下され。

阿蘭ゴア、朶奔メルゲン互に相看る。悦びを謡う小禽の聲

寂しがり屋の獨語

里見弴

私はひと一倍の寂しがり屋であるらしい。

こつちでも大好き、むかふでも大好きな人を、身に近く感じてゐないと、一日だつて生きてゐられさうもない心地がする。幸か不幸か、もの心ついてこの方、さう云ふ、生きてもゐられないほどの寂しい目にあつた覺えがないのだから、はつきりしたことは云へないが、何しろ、ちよつとでも、自分なり相手なりの好きさに、十分信據できない氣持が來ると、これには何よりもまゐる。世間には、雷が可怕いとか、鼠が嫌ひだとか、なかには、八百屋の店先に並べてある木爪を一目見たばかりで、靑くなつてひつくり返るとか云ふやうな、いろ〳〵な苦手があるものだが、私のは正にこれだ。人が私を好いてくれない、私が人を好きになれない、或は大好きに私を好いてゐてくれるとばかり思ひ込んでゐた人の好さ加減がそれほどでもない、私が大好きだと思ひ込んでゐた人に對して、存外私の氣持が白々しい、――さう云ふやうな場合に、いつも必ず私の陷らなければならない寂しさほど、悲み深いものはないのだ。

もう二三年で、四十面をぶら下げやうと云ふ私が、こんな暢氣らしい、甘ツたれみたいなことを、平氣で公言するのからしてなみではない。然し、私が女にかけてだらしのない人間だと云ふことも、いゝ加減評判になつて了つたらしい

し、隱してゐたところで結局仕方のない話だ。廣い世間には、私のやうな寂しがりやだつて、わりにゐさうな氣もするから、その人たちに、——同病相憐んで、いろ〳〵病症について語り合ふ氣持で、少しばかり話しかけてみよう。

一體私は、少さい時分から、わりに氣持がませてゐた。ものゝ評價などでも、一番えらいとか、一等好きだとか、非常だとか、素敵だとか、よく子供の使ひたがる最上級の云ひ表はしに對して、嘘らしさと、從つて羞恥や反感を感じる方だつた。兄たちに、わりにさう云ふ飛躍的な感情の動きが著しかつたために、それとの對比から、實際以上に自分を、反英雄主義（アンチイヘロイズム）のやうに感じさせられてゐたのかも知れない。靑年の頃、夏目先生の「それから」の主人公代助によつて、Nil-admirali の精神を見せつけられ、その凉しさを益々好ましく思ふやうになつた。一時は、總ての亢奮を、醜しとして忌み嫌つた

さう云ふ私にすら自惚（うぬぼれ）だけは飛躍的だつた。文藝の仕事にかけては、何かしら特別に優れた才能を與へられてゐるやうな氣持が、時を得ると頭を擡げて來た。然し今の私は、それがあつたおかげで今日まで來たとも思はれず、これから先にさう云ふものを望んでもゐはしない。私は自分を、少しでもえらく生れついた人間だとは思つてゐない。私のちかに知つてゐる範圍で、やゝさう云ふ感じのもてるのは、武者小路君くらゐのものだ。其ほかにも、吃驚するほどあたまのよく働く人だとか、官能の鋭い人だとか、さう云ふ點で感服してゐる友達もあるにはあるが、それだけではえらく生れついた人とは思へない。さう云ふなかにあつて、私自身はと云ふと、少しの謙遜もなしに、凡庸の生れだと思つてゐる。たゞ恃むところは、其凡庸にあるばかりだ。五慾煩惱と云ふかなんと云ふか、人間のもつ限りの心の動きを、悉皆身に

具したゞ一介の平凡人であると信じてゐる。信は力である。此力によつて、私の仕事が出來て行くだけのことだ。

さて、寂しがり屋の話だが、さう云ふ、或る人々から觀たならば、なんの張合もなく思へるだらうところの仕事でも、時々私は夢中になる。その、永くて二時かそこらしか續かない夢中の間には、勿論、好きな人のスの字も、寂しさのサの字も、何もかも雲散霧飛してゐる。何も仕事には限らない、勝負ごとでも、遊戯でも、演伎を見物中でも、當面のもの以外には、少しもあたまへ來ない時間だつて可なり多い。稀にはまた、なんにも考へずにぽかんとしてゐる時だつてある。私が人一倍の寂しがり屋だと云つて、何も、たつた一人でぽつねんと、寂しさうな顏をしてゐる場合が、時間的に人よりも餘計あると云ふわけではない。それどころか、年が年中、ちよつと一流の實業家でもどうかと思はれるくらゐに忙しく、仕事に追はれ、面會人には攻めかけられ、つき合の茶屋酒や、氣まゝな飯食ひ、遊蕩や、または家庭の雜用で、ぽかんとしてゐる時などは殆どない。餘りひどいから、一人書記でも雇はふかと思つてゐるくらゐだ。

——それでゐて私は寂しいのだ。いま私には、命もいらないほど好きな人がある。女房も隨分好きだ。四人の子供は、みんなそれ〴〵に可愛いゝ。それでゐて、年ぢう私は寂しがるのだ。ふと、一陣の風のやうに、襲ひかゝつて來る寂しさに、人目のあるところなら、たゞ默りこくつて了ふけれど、眞夜の床のなかなんかだと、涙を流し、身を悶えることさへあるのだ。何もこれは、色情關係のことを云つてゐるわけではない。うちに轉げ込んでゐる不良少年の、溫み難い冷さにも、涙を流したことがある。友達の、たつた一言の言葉にも、二日三日寂しくされる場合もある。——可笑しければ笑つて貰はふ。私はさう云ふだらしのない男なのだ。

御法便なもので、かう云ふ質の人間の常として、私も人の好き嫌ひがはつきりしてゐる。一目見たばかりで、有緣無緣は確然と別たれて了ふ。私もいゝ加減浮世の風に晒されて來て、さう〳〵お坊ッちやんじみた我が儘も云はなくなつてゐるから、無緣の人とでも仲よくつき合つてゐる。よく〳〵機嫌の惡い時でもなければ、めつたに不愉快な顔などは見せない。然し何年つき合つて行つても、無緣は無緣で、初からちやんと諦をつけてゐるのだから、さう云ふ人たちとの交渉では、交りが絶へるほどの氣まづいことが起つて來ても、私は決して寂しがりはしない。それが、有緣の人だと、ほんの些細な、相手の氣にもとまらずにすんで了ふほどのことにまで、私の心は烈しく搖ぶり動かされる。寂しくつて寂しくつてたまらなくなつて了ふ……。

寂しがらない人を見ると、時に私は大へん羨しく思ふ。

何故かと云ふに、さう云ふ質に生れついてゐたら全心を仕事に投げ込むことも出來やうと思ふからだ。

基督のことはよく知らないが、無論同じだと思ふけれど、釋迦などは、寂しがり屋の張本人、大先達だと思へるし、一體宗教や藝術の方面は別として、科學や實社會の仕事には、寂しがり屋はあんまり向かない。ナポレオンなどは、隨分多情佛心だつたけれど、それほどの寂しがり屋だつたかどうか當にならない。そのほか、歴史上、實社會の仕事師は、大抵寂しがらず屋さんが占めてゐると云つてもよからう。

元來仕事の上乘なるものは、即ち天才の仕事は、必ず飛躍的であらねばならない。さうして、飛躍は一人に限る。一人三脚のやうに、肩に手を繫ぎ合つたのでは、決して遠くは飛べない。——それを想ふと、人間に與へられた寂しがり屋の根性は、人類前進の足枷（あしかせ）のやうな氣もして來る。

それなら人間が、一人殘らず、寂しがらず屋になつて、云ひ換へれば、群居動物の特性を失ひ盡して、個々別々の生活を營み、他人の顏さへ見れば、齒をむき出して摑み合ふやうになつたらばどうだらう。繁榮も、幸福も、前進もあつたものではあるまい。

みんなが寂しがらないでもすむやうに俺が一人でうんと寂しがつて置いてやらう、——生意氣を云ふやうたが、この階梯にあつた釋迦の氣持は、私にも想像がつく。然し、いくら釋迦や基督が引うけてくれても、科學がふんばつてくれても、寂しい時の私の氣持は、とても救はれないのだ。

この寂しさを、寂しがるな！とは、それやあんまりだ、胴慾だ、——さう云ひたくなるくらゐのものだ。

いつまでも、四十近くなつてまでも、寂しがつてばかりゐるやうでは、ほんとうに駄目だ、いけない、——それは私も知つてゐる。

然し、事實として、寂しいのだ。寂しさ故の勇氣も知つてゐる、それ故の力にも覺えはある。それでも、寂しさは、

どこまで行つても寂しさで、嬉しさや喜ばしさに變りはしない。たゞ寂しさは寂しい！

五慾煩悶の輩は、一生涯寂しい思いをしなければなるまい。凡庸下根私の如きに至つては、どんな思ひもかけない力が現はれて來ようとも、所詮救はれやうとも思へないのだ。

寂しい時には寂しがらう！

それでも自分の一生だ、寂しいから可厭だとは思はない。この先どれほどの寂しさが來ようとも、自分の一生だから好きだ、大切にする。死ぬ間際までも大切にする。寂しいくらゐのことで、まさか、自分の一生を厭ふほどの弱蟲でもない。

時評

平和の努力と戰爭の努力

山川均

日本の手柄

ゼネヴァに開かれた國際聯盟の總會は、明年六月に召集する軍備縮少會議の前提となるべき『平和議定書』を『議定』して目出度く散會した。そしてこの議定書の討議には、日本全權の主張が目出度通過した帝國主義的平和の大爼の上でドイツを活きづくりにしたヴエルサイユ講和の大評定この方、國際會議といふ國際會議には、日本は『五大强國』の一國たる資格をもつて、殆んどどの國際會議にも、欠かさずその『象牙の面』をつられて來た。そしていつでもお行儀よく兩手をきちんと膝の上にのせ、腹は減つてもひもぢうない武士道そのものゝやうな顔つきをして、會議を拜聽したのである。ところが今度といふ今度は、日本の外交はこの傳統を打ち破つた。そうしてその主張は、とう〳〵聯盟總會の容れるところとなつた。尤もこれ位のことは、自國に資本主義的利益を臆面もなく主張する列國の餓鬼道外交の上から見れば、何の變哲もないことかも知れぬ。けれども日本の武士道外交家としては、慥かに得意とするに足るところの成功である。

況んや日本の得たところによつて、何者も損失をした者はない。これに反して日本の主張が容れられた結果として、國際聯盟は單に國際的性質を帶びた問題から起つた紛爭の場合ばかり

でなく、國內的の問題から起つた紛爭の場合にまで、その行動の範圍が擴大せられた譯であるから、國際平和の保障としての聯盟の意義（若しあるならば）は、一層重きを加へたと云つてよい。そこで日本の外交は、大に面目を施こした譯である。

しかしながら國際聯盟の總會で、日本が平和議定書の討議に成功したこと丶、國際聯盟そのものが平和の『議定』に成功したことは、固より別々の問題である。況んや平和を『議定』したこと丶、實際に平和を確保すること丶は、固より別々の事實である。そして國際聯盟が、若し迫つてゐる第二の世界戰爭の防止に成功するかどうかと云ふことは、平和議定書の討議に於いて、日本が成功したかどうかと云ふこと丶は、比較にならぬほど大きな問題である。

各國の軍備競爭

さきに海軍縮少の目的で太平洋會議を招集した米國では、上院は更に、第二の軍備縮少會議を招集する權限を大統領に與へる決議をした。そして大統領クーリッヂは、遠からずその目的のために、先年のワシントン會議よりも一層廣汎な國際會議を招集するものと信ぜられてゐる。

この時ヨーロッパ側では、國際聯盟が一と足お先きに、明年六月を期して軍備縮少會議を開くこと丶なつた。世界は今ま、一切萬事をおいて一遍に平和の競爭をしてゐるかのやうである。

ところが實際の世界を見ると、今日の世界ほど、軍備競爭が激烈に行はれてゐた時代はない。歐洲戰爭の勃發した一九一四年の世界も、一九二四年の世界ほどに、甚しい軍國主義化はしてゐなかつた。一九一四年の世界に、既に大戰爭が近づいてゐたとするならば、一九二四年の世界には、第二の大戰爭が既にその門を叩きつ丶あると云つてよい。これは各國の間に行はれてゐる、軍備競爭の狀態を一瞥しただけでも直ぐ分かる。

五ケ年間の大殺戮の初まらうとする形勢を控へた一九一三年には、ヨーロッパには三千七百五十萬の軍隊があつた。然るにヴェルサイユ條約が、永久に世界の平和を保障してから三年を經た一九二二年には、ヨーロッパの軍隊は却つて四百三十五萬に增加した。然るにヴェルサイユ條約は、戰敗國（ドイツ、墺太利、ハンガリー、ブルガリア）の軍隊を約七十萬に減じたから、戰勝國の間だけで百三十萬の軍隊が增加したことになる。

人間屠殺術の革命

然しながら最近に於ける軍備競爭の著しい特徴は、軍隊の分量の増加ではなくて、軍隊の機械化である。全ヨーロッパを實驗室として行はれた五ケ年間の戰爭の實驗は、人間屠殺の技術を革命した。今日の軍備競爭の上からは、兵隊の數は最早や重要な要素ではなくなつた。少くとも第一に重要な要素でなくなつた。四箇師團を減じても、最新兵器の充實を先きにしなければならぬほど、それほど軍隊の機械化は、軍備競爭の第一の要件となつて來た。それにも拘らず、ヴエルサイユ條約によつて平和を保障せられてゐるヨーロッパの戰勝國の間に、百三十萬といふ驚くべき軍隊分量上の増加を見たことは、軍備競爭が如何に激烈に行はれてゐるかを物語るものである。

資本主義の生產技術が進むにつれ、高價な機械が安い勞働に取つて代はり、謂ゆる有機的構成の低い資本から、有機的構成の高い資本に進んだように、丁度その通りに、資本主義の破壞技術が進むにつれ、高價な機械を以つて、××。今日の資本主義は、戰爭なくして存在することは出來ぬ。帝國主義の發達段階に進んだ資本主義に取つては、戰爭の組織は、利潤の產出に欠くべからざる組織の一部分を成すものである。この意味から云へば、軍隊が高價になつたことは、資本家國家に取つては、工場が高價になつたのと同じことである。工場の資本の構成が高度になつたように、軍備と名づける資本の構成も亦た高度になつて來た。

軍事費の激增

この軍費は、やがて最近に於ける各國の軍事費の、驚くべき膨張に現はれてゐる。ヨーロッパ大陸では、暴風の中心は英佛の利害の對峙を中心として動いてゐる。ところが戰前のフランスの軍事費は九億一千七百萬法であつたが、今日は十四億五千三百萬法になつた。今やフランスは、平時三萬人、戰時三十萬人に達する航空軍を擁してゐる。英國は戰後の財政立て直しの必要に迫られて、軍事費に大斧鉞を振ふたにも拘らず、戰爭の終了から昨年までに軍備の充實に費やした金額は二十九億圓に達したと云はれてゐる。マクドナルドは忠實な平和主義者である。けれどもマクドナルドの英國は、一九二四—五年度に於いて兵員一萬二千人を減じようとするにも拘らず、航空隊と補助

艦建造とのために、軍事費に於ては却つて二千萬圓の豫算を増加した。これはマクドナルドが平和主義に忠實でない證據ではなくて、マクドナルドの平和主義以上の力をもつた或る力が、英國の資本帝國主義を動かしてゐる證據である。この力は云ふまでもなく、最後の崩壊期に達した資本主義の、生きんとする本能に外ならぬ。

イギリスとフランスとが、ヨーロッパに於ける二つの對立した利害を代表してゐるやうに、太平洋上に於ける低氣壓の中心となつてゐるものは、アメリカと日本である。そして軍事費の膨脹では、アメリカと日本に於いても、決してイギリスとフランスとに劣らぬものがある。即ち戰前に於けるアメリカの軍事費は三億一千六百萬弗であつたが、今や倍加して六億五千二百萬弗となつた。そして此の間には日本の軍事費は、一億九千萬圓から五億乃至六億圓に増加したのである。そこでこの形勢の下に、世界が再び帝國主義的戰爭の渦中に投ぜられたとしたならば、その結果はレーニンの云つたやうに、先きの歐洲戰爭で一千萬人の人間が屠られたとすれば、今度の戰爭では二千萬の人間が屠られ、三千萬の人間が片輪になつたとすれば、來るべき戰爭では、六千萬の人間が片輪になるに相違ない。何故ならば、人間屠殺の技術が一變したばかりでなく、一九一四年世界を蔽ふてゐる帝國主義的戰爭の暗影は、一九一四年のそれよりも、更に範圍が廣いからである。

世界戰爭の威嚇

世界の一局部に起つた何等かの利害の衝突、何等かの均衡の破壊、何等かの地盤の弛るみが、忽ち全ヨーロッパ乃至は全世界の戰爭の導火となるべき危險と可能性とに於いても、不安定な今日の世界は、決して十年前の比ではない。ヨーロッパの中原に、相ひ容れない英佛の二つの大きな資本主義の利害が對峙してゐるばかりでなく、フランス、ベルギーの利害はイタリー、スペインの利害とも衝突する。これ等の主要な國々の利害が衝突するばかりでなく、民族自決の美名によつて無暗矢鱈に造られた幾多の小國は、互ひに利害が相反してゐる。況んやこれ等の小國は、多くは強大國の軍事的殖民地に外ならぬ。そればかりでなく是等の小國の國境は、決して經濟生活の必要に基づいた自然の境界ではなくて、多かれ少かれ、征服者がその劍の先きをもつて、ヨーロッパの地圖の上に獨斷的に描いた境界線に外ならぬ。例へば、民族自決の名によつて、ヴェルサイユ會議で捏ね上げられたチェク・スロヴァキア國にしても、人口一

千三百五十萬のうち、約四四%がチェク人であつて、ドイツから併合された工業地帶に於ける三百七十萬のドイツ人は、全人口の二七%に當つて居るばかりでなく、全人口の一五%に當るスロヴアク人、六%のハンガリー人、三%のウクライナ人二・七%猶太人の外、約二%のその他の民族を含んで居る。ポーランドも其の通りであつて、全人口三千萬のうち、ポーランド人は僅かに五三%であつて、二一%はウクライナ人、一一%は猶太人、七・三%は白露人、七%はドイツ人である。斯ようにヴェルサイユ條約によつて書き替へられたヨーロッパの新地圖は、要するに征服國の帝國主義的必要を滿たすために、多かれ少かれ不自然に描かれたものであつて、是等の小國が互ひに利害を異にするばかりでなく、各々の國内に於ける各々の民族の利害が相反して居る。その結果は云ふまでもなく、ヨーロッパの均勢を一層不安定なものとした。そこで何處かの小さな一角が崩づれても、その結果は直ちに全ヨーロッパの地盤を震撼する。一九二四年のヨーロッパは、到るところに危險な地雷火が伏せられてゐる。若し何等かの利害の衝突が、この地雷火の一つを發火せしめたなら、それは容易に全ヨーロッパの到る所に埋められてゐる資本帝國主義の地雷火に導火するに違ひない。

十年前に見ることの出來なかつた今ま一つの新しい形勢は、資本主義の世界に、新たな要素の加つた事である。戰爭はヨロッパに於ける、舊るい資本主義の地盤を揺り動かした。ヨロッパに於いては、資本主義は少くとも其の一角が崩潰した。然るにアメリカとアジアとでは資本主義は戰爭によつて初めて成熟した。この有力な資本主義の二つの新勢力が、しかも相ひ容れない利害の衝突を持つて舞臺に加はつた爲めに一九二四年の資本主義の世界は、十年前にくらべて危險になつて來た。資本主義の世界には、少くとも今一つ地雷火が増したことになる。一九一四年に資本主義の世界が當面した危險は、何等かの利害の衝突が、全ヨロッパを帝國主義的戰爭の渦中に卷き込む危險であつた。一九二四年の資本主義の世界が當面してゐる危險は、何等かの利害の衝突が、全世界を帝國主義的戰爭の渦中に卷き込む危險である。一九二四年の吾々を威嚇してゐるものは、眞實の意味での、世界戰爭の威嚇である。

この時、米國は第二の軍縮會議を召集しやうとし、英佛のブルジョア自由主義と平和主義とによつて率ひられる國際聯盟の總會は、平和議定書の『議定』に成功した。そして日本の外交家はその強硬な主張によつて、國際聯盟の與へやうとする世界平和の保障を、一層有効にすることに成功した。これと同時に、この時、英國は新たに、八箇の航空隊の増設に着手し、フランス

は二十萬の機關銃と、六萬の飛行機と、一萬二千のタンクの完成を急ぎ、アメリカは國民的纐同日デーを與行して、アメリカ帝國の國民的意氣を鼓舞してゐる。第二の世界戦争の危險が加はるに比例して、戦争の防止と軍備縮少に對する熱心と努力が白熱する。そして戦争防止と軍備縮少に對する努力が白熱するに比例して、列國の軍備競争はいよ／＼熱烈的になつて來る！。

支那の動亂

斯やうに一九二四年の世界は到るところその地殼の底には、國際戦争となつて燃え上がらうとする資本帝國主義の火焔を包んでゐる、もし地殼のいづれかに少しの龜裂でも出來たら、忽ちにして其處から、全地表を包む世界戦争の火焔が噴出する。一方で抑へれば他の一方に噴き出さうとし、一ケ所で消し止めれば、他の箇所で燃え上がらうとする。

ブルジョア急進主義と平和主義がフランスと英國で勝利を得たことゝ、フランスの武力的侵略的政策に代つて、平和的搾取のプログラムたるドウズ案が兎も角も採用せられたことは、少くともドウズ案實施の結果が明かに現はれるまでは、ヨーロツパの方面では、危ふく英佛の間に燃え上がらうとしてゐた火の手が揉み消された。併し太平洋上の低氣壓は、これに反比例してだん／＼擴大した。

たま／＼奉直戦の勃發は、支那に於ける日米の利害の對立を、一層露骨におき出した。支那の動亂は、固より日米の間の利害に衝突のために起つたものではない。けれどもこの動亂の眞實の意義と重要さとは、支那に於ける日米の資本利害に眼を閉ぢては、充分に解することは出來ぬ。

支那に於ける日米の經濟的勢力の對峙と消長とは、貿易戦の上にも現はれてゐる。歐洲戦前の一九一三年には、日本がこの輸入は輸入總額の二〇%であつて、米國がこの輸入は僅かに六%に過ぎなかつた。戦争の四ケ年間に、英國がこの輸入は半減し、米國は僅かに一〇%に增加したが、日本輸入總額の四一%を占めるやうになつた。ところが戦争が濟んで英國が經濟的に恢復し、殊に米國が支那の市場に注意を向け出すと、日本の對支輸出は漸減し、折角戦争中に築いた立場は、英米の商品の

ために閉出されて、一九二一年には日本の輸出に、輸入總額の二二・五%となつた。この間に英國は戰前の地位に復したに過ぎぬが、獨り米國の輸出は年々增加の一方で、一九二一年には一八・八%となり、日米の地位の顛倒は時間の問題となつた。

のみならず支那に輸入品の内容も、だん／＼變つて來る。一九一三年には、綿製品は輸入總額の四六%を占めてゐたが、一九二三年には二八%に減じ、之に反して機械類の輸入が增加した。即ち一九二〇年には僅かに六百九十萬兩だつた紡績機械は、一三年には三千五百萬兩となり、機械類全體の輸入額は、一九一九年の一千五百二十萬兩から、一九二三年の五千萬兩に增加した。これはやがて支那の工業化を語るものであつて、支那の工業化が進めば進むだけ、日用消費品の輸入に對して、生產機關の輸入が重要を占めて來る。そして生產機關の生產に於いては、日本の資本主義は米國の資本主義の敵でない。

それのみならず、支那に於ける工業の發達——支那土着の資本主義の發達——が進めば進むほど、支那は最早や資本主義列國に、商品を輸出する競爭の舞台たることに止どまらないで、資本そのものを輸出する競爭の舞台となる。言葉を換へて云へば、資本主義列國の間——殊に日本と米國との間——には、いづれの國の金融資本が、支那に發達する土着の工業を支配するかと云ふ、激烈な爭霸戰が起つて來る。勿論、今日までもこの競爭は激烈であつた。そして今後は一層激烈となるに相違ない。

戰爭中に、農業國から一躍して工業國となつたアメリカは、その商品を支那に賣らねばならぬ。それと同時に、最早やヨーロッパに有利にして安全な搾取の舞台を見出だすことに困難なアメリカの有り餘る資本は、支那に投資の舞臺を見出さねばならぬ。そしてアメリカの資本帝國主義が支那に勢力を張らうとする瞬間に、それは日本の資本帝國主義の利害と正面衝突する。

歐洲戰爭は、多かれ少かれ、交戰列國の何れにも資本主義を弱めたが、之に反してアメリカと日本の資本主義は、戰爭によつて初めて成熟し、今や渾身の力と元氣とをもつて立ち上つた。そしてこの二つの努力が正面から衝突する所が、即ち支那大陸であつた。

支那の動亂が如何なる結末を見ようとも、アメリカと日本とに資本帝國主義の利害は、依然として支那大陸に於いて相ひ對峙する。そして日米の資本帝國主義の利害が相ひ對峙してゐる限りは、第二第三第四の呉佩孚張作霖との[illegible]的確執は、今日と同じやうに、國際政局に異常の緊張を惹起すに違ひない。

英國の政變

各國の共產黨は八月の第一週を『戰爭反對週間』と定め、歐洲大戰の十週年を紀念すると同時に、現にヨーロッパを威嚇してゐる第二の世界戰爭と軍國主義に對する、反對運動の日と定めた。そこで英國共產黨の機關紙『ウオカース、ウヰクリー』の七月二十五日と八月一日の紙面は、戰爭反對の記事で滿された。

すると八月五日の午后三時、多數の私服刑事が英國共產黨の本部と『ウオカース・ウヰクリー』の發行所に踏み込んだ。そして同紙同號の記事は、軍隊に反亂を敎唆したものであるとの廉で主筆キャムベルを逮捕した。『ウオカース、ウヰクリー』の記事は固より内亂敎唆と認むべきものではなかつたし、警察の横暴に對しては、勞働組合の間からも非難の聲が喧しかつた。これに動かされたかどうかは別として、兎も角、政府はキャンベルを釋放したのである。これが今度の英國の政變を引き起した、謂ゆる『キャンベル事件』である。

キャムベルの釋放に對して、財閥、大資本、大地主黨――從つて帝國主義的資本家黨――たる保守黨はまつかうから、政府の不信任を唱へて反對した。ところが小ブルジュア黨たる自由黨は、まつかうから反對しないで、此の事件を查問委員會に附する動議を提出した。この態度にも、自由黨の曖昧不決定な小ブルジュア的性質がよく現はれてゐる。

尤も英國の勞働黨そのもの、今日は尙ほ多分に、小ブルジュアジーの心理を持つてゐる政黨である。これは一八五〇―七〇年代には、英國の勞働階級は、ブルジュア自由主義を心の底から信じてゐた病毒の名殘りである。けれどもそれにも拘らず、ヘンダースンやトーマス等に代はつてマクドナルドが卒ゐるようになつてから、勞働黨も幾らか旗幟が鮮明になり、兎にも角にも今では勞働階級の社會主義を公然の綱領として掲げてゐる政黨である。そこで昨年の總選擧に、勞働黨が下院の第二黨となり、續づいて内閣を組織したのを見て、多くの人々は、英國の政黨（保守黨や自由黨）が社會主義の政黨に對してすらも飽くまで立憲的の手段で爭はうとする寛容にしてデモクラチックな

態度に感服し、さすがは民主政治の傳統國であると敬服したばかりでなく、これでこそ資本主義が社會主義への社會的變形が、あくまで立憲的の方法によつて行はれる實例を與へられたものであるとして喜んだ。

ところが勞働黨內閣が成立して十ケ月なるかならぬに、反對黨では、もうしびれを切らして來た。何故ならば、政界の素人の寄合ひたる勞働內閣は、三ケ月もするうちには、きつとぼろを出すにきまつてゐるといふ。職業政治家の期待は裏切られ、勞働黨內閣の存在が尙ほこの上に續づけば續づくほど、勞働黨の政治的勢力は鞏固となることが分つたからである。これは必ずしも、最近の勞働黨の大會に於ける、マクドナルドの手前味噌ばかりではない。兎にも角にも、勞働黨は——資本主義の英國の現狀を維持するためにも——保守黨や自由黨の爲し得なかつた仕事をした。英露協定の成立は、反對黨が何とけちをつけやうとも、ロイド・ヂョーヂ以來の內閣の爲し得なかつたところである。フランスとの關係を改善し、一時的にせよ、極度に緊張したヨーロッパの形勢を緩和したばかりではなく、ヴェルサイユ條約をフランスの製鐵業と帝國主義とに有利に改變したルール占領政策の代りに、反對に、ヴェルサイユ條約を、英國の金融資本に取つて有利に變改することを意味するドウズ案を採用せしめることに成功したことは、勞働黨は——英國の資本主義の擁護者としても、またヨーロッパを資本主義の爲めに安全にする爲にも——保守黨以上の功蹟を殘したものである。また內政の方面でも、失業問題や住宅問題に對する對策は決して滿足なものではないが、純粹のブルジュア黨や小ブルジュア黨の爲し得ぬ何事かをしたことは爭はれぬ。そこでブルジュア政黨に取つては、何とかして勞働黨內閣を叩き落すことが、焦眉の急務になつて來た。

それには英露協約にけちをつけること、これが差し當り唯一つの手掛りであつた。けれども英露協約に反對して總選擧に臨むことは、決して望ましいことでない。その上に、尙ほ多少の時日を待たねばならぬ。この時、期せずして惠まれたのが、キャムベル事件であつた。勞働黨の政府は、共產黨の陰謀を不問にした！これは慥かに、英國のゼンツルメンに訴へるには絕好の題目である。そこで英國の大ブルジョア黨と小ブルジョア黨とが提携して、勞働黨の政府を、極めて立憲的に倒さうといふのが、即ち今度の政變である。

斯ように英國の保守黨と自由黨とは、勞働黨の政治的勢力が鞏固となることを未然に防止するために、今までキャムベル事件と云ふような、もと〳〵問題とならぬ問題を故らに問題にして

勞働黨の政府を倒壞しようとするに當つても、決して一揆や暴動にはよらないで、あくまで立憲的民主的の手段によつてゐるのである。この點についても、全世界の平和的革命主義者は、英國のデモクラシーに對して、隨喜渇仰の涙を流すことだらう。

そこで議會の解散と總選擧とは、最早や既定の事實と思はれるが、その結果はどうだらう。總選擧の結果は、恐らく自由黨が一層凋落して、保守黨と勞働黨との對立の形勢が一層著しくなるであらうとは、多くの人々の一致する觀測のやうである。

この觀測は、決して根據のない臆測ではなくて、その根底には、英國に於ける資本主義的發展の事實が横はつてゐる。そこで若し斯ような結果が、今度の總選擧で直ちに現はれなければ、今後の總選擧で必ず現はれるに相違ない。今日以後の英國の政界に自由黨がます〳〵勢力を失墜して、保守黨と勞働黨との對立の形勢となるといふことは、第一には、既に帝國主義的段階を進んでゐる英國の資本主義の反動的性質がいよ〳〵濃厚になつたと云ふことを意味してゐる。第二には、この末期に反動的資本主義に當る力は、最早や小ブルジョアの自由主義や急進主義ではなくて、無産階級の社會主義的勢力あるのみだといふことを意味してゐる。そして第三には、英國に於ける今後の政治の局面は、この二つの階級的勢力の正面對峙を中心として展開するといふことを意味してゐる。

勿論、總選擧の結果は自由黨が凋落して、保守黨勞働黨の對峙の形勢が著しくなるといふ觀測をする人々といへども、必ずしもこの三つの根本的の事實を承認する譯ではない。否な彼等の多くは、恐らく斯ような事實を明白に認めては居らぬ。或は斯ような事實を認めまいと努めてゐる。それにも拘らず、尚是等の人々が斯ような觀測をしてゐるのは、階級的對立の發展といふ事實が、よし彼らにこれに目を蔽ふても、尚ほ感ぜざるを得ぬほどに、それほど著しいものがあるからである。

組織の問題

十月五日には、日本勞働總同盟に東西の大會が、日を同じくして開かれた。

關西大會には、神戸聯合會所屬の一組合から、日露交渉の促進を目的とする次の如き決議案が出た。

『…………二ケ年に亘り五十餘回に及ぶ日露兩國代表の會商も、一進一退、暗雲低迷して何時如何なる解決を見るや計り知り難い情勢にある。固より兩國の交渉、少くとも日本政府の交渉は、××××××××××××××。然しながら我が政府の資本主義的軍國主義による外交は、徒らに兩國々交の恢復を遷延し、彼にありては××××××××支障を生ぜしめ、我國にあつては産業不振による無産階級の生活難の緩和と失業防止並びに救濟の上に大なる打撃を與へてゐる。斯くの如きは人道と正義を基調として全人類の解放運動に努力する吾々組織勞働者の默止する能はざるところである。故に吾が關西勞働同盟大會は日露兩國政府、並びに代表に向つて、次の如く勸告する。

一、勞農露國政府は、隣接日本との國交を速かに恢復する爲めに、最善の努力をもつて應酬すべし。

二、日本政府は先づ勞農露國を速かに承認し、然る後、利權其他の交渉に入るべし。

三、日本政府は北樺太の駐屯軍を即時撤退すべし。

四、利權問題の交渉に就ては、日本は宜しく資本主義的侵略主義を棄て、互譲協調の精神を以つて解決すべし。

五、尼港事件の責任、帝政時代の債權等に就いては、兩國將來の親善の爲めに、深く追窮すべからず。』

ところが此の議案は、大會の討議に附せられないで、暗から暗に葬られた。聞くところによると、地方の警察は、大會がこの議案を上程すれば直ちに解散を命ずるといふ内意を傳へて、この議案の上程を妨げたといふことである。勞働組合の大會に警察官が臨監して解散を命ずるといふことからしてが、他國では見られぬ光景であるが、更に一歩進めて警察が大會の議案の内容に容喙するなどゝいふことは、最早や、今日では、如何なる野蠻國に往くとも見ることは出來ぬ。

□

大會の最も重要なる議案の一つは、産業別組合主義の原則に基づいて、總同盟の組織を改造するといふ提案であつた。この議案については多少の異論があつたので、結局、産業別主義によることを明示しないで、單に組織改造の必要を認める修正決議が通過したと傳へられてゐる。總同盟は先年の全國總同盟に於いても、また關西同盟の大會に於いても、既に産業別主義に基づいて組合を整理する決議をし、既にその方面の準備に當るべき特別委員會が設けられてゐるのであるから、組織を改造す

るといふことになれば、その改造とは、勢ひ産業別主義に基づいた改造を意味することは自明であつて、産業別主義の原則以外には、總同盟の組織改造に當つて據るべき原則はないと云つてよい。從つてこの修正は、決議の內容を變へたものではない。

そればかりでなく、大正十年の勞働組合全國總聯合の創立大會で、總同盟が組合同盟その他の團體と袂を分つたのは、自由聯合主義に對する産業的合同主義の原則のためであつた。この點に於いては、總同盟は日本の組合運動界に一種の責任を擔ふて居ると云つてもよい。總同盟が先づその所屬組合の內部に於いて、産業別主義に基づく組織の整理に着手することは、總聯合創立大會に於いて、決裂を賭して勇敢に支持した原則を實際に移す第一歩と見なければならぬ。

云ふまでもなく、産業別主義の原則を取るといふことゝ、總同盟の組織を整理するに當つて、如何なる形で如何なる程度までこの原則を取り入れるかと云ふことゝは、固より別問題である。例へば英國の場合のように職別的の組合が十分に發達して居るところでは、たゞ是等の組合を整理して編制替へさへすれば、それで立派な全國的の産業別組合が出來上がる。從つて産業別主義の實現を妨げてゐるものは、主として狹隘な組合心理と、組合の整理によつて、組合基金や支配權や、その地位を失ふことを恐れる組合官僚主義者である。斯ように英國の場合には、全國的の産業別組合を組織すべく、云はゞ材料が揃ふてゐる。日本の場合はさうでない。組合は分量に於いて極めて貧弱である。この貧弱な材料は、それを如何様に組合せて見ても、如何様に整理をして見ても、完全にして有力な全國的の産業別組合の組織とはならぬ。強いて産業別主義の原則を杓子規定に當て篏めれば、却つて組合運動の實力を減ずる恐れがある。

そこで日本の現狀では、産業的の組織は、之を從來の地方的の組織（例へば地方聯合の組織）を以つて補はねばならぬ。否な實際には、地方的の組織にのみ偏した從來の跛の組織を、産業的の組織によつて補ふと云ふのが當つてゐる。例へば組織の原則の上から云へば、直接に經濟上の行動に當るのは、主として産業的の組織であつて、地方的の組織は、組合運動の一般的の問題や、多かれ少かれ社會的若くは政治的の性質を帶びた行動に當るべきものである。そこで罷業の主たる中心として活動するのは、その産業の産業別組合であつて、罷工基金は、産業別組織の中央機關に集中せらるべきものである。然るにメーデー運動の組織、勞働學校の經營、又は無産階級政黨との聯絡などは、地方的組織の擔任すべき組織である。ところが今日の

實狀からは、罷業の主たる中心は、必ずしも産業別の組織に置かれないばかりか、却つて地方的組織に置くことを便利とする場合が多い。罷業基金や罷業の統制にしても其の通りである。そこで今日、産業別主義に基づいて組織を改造すると云ふ、主張は、必ずしも産業別主義をそのまゝに實現する譯ではなくて、たゞこの原則を確立し、この原則に向つて一歩を踏み出すといふことに外ならぬ。

從つて今日、産業別主義に基づいて組織を整理改造しても、實際の運動の上では、現在と餘り變らぬといふことになる。從つて組織の整理改造は、さほどに重要な問題でないといふ主張があるかも知らぬ。けれども事實は反對であつて、それ故に日本の組合運動は、今日から組織の根本原則を確立して進む必要がある。

組織の整理と改造については、總同盟の機關紙の上にもしばしば論議せられて居るところであつて、關西大會に於ける今度の決議が、來るべき全國大會に於いて一層具體化され、日本の組合運動の上に、新しい紀元の開かれることを希望する。

□

關西大會には、無産階級の政黨組織に關する決議、勞働組合法に對する態度、俸給生活者の組合運動に對する態度の決定の如き、極めて重要な議案が附議せられたが、こゝには是等の重要問題に觸れる餘白の無いことを遺憾とする

「戰爭に反對する戰爭」その他

山川菊榮

□「戰爭に反對する戰爭」

「喉元すぐれば」といふ諺はあるにもせよ、三千萬の人の子の生命を損なひ、幾千億の富を亡ぼし、世界の資本主義をして瀕死の重傷に呻かせた、あの慘澹たる大戰の記憶が、僅々數年の間に、斯うまで拭ふやうに忘れられて、再び次の大戰のための軍備の競爭に余念のない世界を大戰開始後十周年の今日猶ほ、見出さうとは余りと云へば淺間しい人類の現實である。

「世界平和を確立するための戰爭」「戰爭を終結せしむるための戰爭！」聯合國に依つて揭げられたるこの高貴なる目的のために戰はれた世界戰爭は、果して其等の目的について成功を收めたであらうか。戰前以上の激しさを以て行はれる戰後の軍備縮少は、何を語るであらうか。

ヨーロッパの兵數は、一九一三年當時の三百七十四萬餘に比し、約百三十萬餘を加へた四百三十五萬餘に達してゐるが、獨、墺側の兵數は諸國を通算して七十萬以下に制限せられてゐるのであるから、此の兵數の增加は、專ら聯合國側のみに歸せられねばならぬ。單に陸兵の數のみならず、海軍及び航空軍の擴張に至つては更に目ざましいものがある。マクドナルドの勞働黨政府は、內國の常備兵數十六萬四千を、一萬二千人だけ減少して、十五萬二千人にしやうとしてゐる代り、新たに二百萬ポンドを支出して航空軍の擴張を企てゝゐる。其他にも新たに艦船を建造し、同時に恐るべき殺人的效力をもつ爆彈や毒ガスの發明研究に沒頭してゐる。世界戰爭の終りから一九二三年に至る迄の間に、英國が軍備のために拂つた金額は、既に二億九千萬ポンドに達した。

フランスに至つては此傾向は一層著明であつて一九二三年に於て、常備兵八十三萬を擁し、更に百三十二の航空隊の建造

計畫を立て、新政策に要する六ヶ年臨時費二億三千萬、戰時には三十萬人に增加する豫定である。

ヨーロッパに於ては、斯やうに英佛二國が、往年の英獨間に於けるが如き嫉妬猜疑に驅られ、軍備の擴張を競つて居る間に、東洋方面に於ては、支那大陸を中心とする日米の資本家の利害の衝突が、兩國に於ける軍國主義的精神の發展となつて、この軍備擴張論を刺戟して居る。アメリカも戰前に倍する軍備を有すれば、日本の軍備も戰爭中に擴張された。

要するに世界大戰は、世界の平和を確立するために何等の效果もなかつたのみならず、世界は却つて前以上に、軍國主義的、好戰的となつたとさへ云ひ得るのである。資本主義經濟が世界を支配し、各國のブルジョア階級が國內の無產階級と共に列國の無產階級の搾取によつて肥えんとし、各國民の疲弊によつて捌け口を狭められた商品のために販路を擴張すべく、死物狂ひの鬪爭に沒頭する限り、第一の世界戰爭は第二の世界戰爭を生み、第二の世界戰爭は更に第三の世界戰爭の種子を播くだけであつて、國際間の爭ひは、益々紛糾しようとも、永遠に解決される見込みはない。そして其等の大戰の度ごとに、いかなる國家が亡びて、いかなる國々が世界の覇權を掌握しようとも、無產階級の運命には變りがない。戰爭が自國の勝利に終ると否とを問はず、血と戰費とを捧げて戰爭の犠牲となるものは勞働者である。よしや勝利を以て局を結ばうとも其等の大戰で失はれた無產者の血を取り戻すことは出來ず、破壞され、浪費された富の中に結晶した勞働者の汗を取り返すことも出來ない、のみならず、彼等は更に次回の大戰に備へるために、より大なる犠牲を搾取るに甘んずることを餘儀なくされるのである。失業、生活難、勞銀の低下、高額の租稅は、辛じて戰場から生きて戻つた勞働者を俟つ歡迎の項目である。

從てヨーロッパの無產階級の間から舉げられた「戰爭に反對する戰爭」の叫びは、侵略主義者の足下に踏み躪られ、大戰の渦まく血潮の中に葬られ去つたが、今や新になる大戰勃發の危機が隨處にはごくまれ、列國の軍備競爭は戰前以上に激甚を極むるに當つて、軍備と戰爭との犠牲たるべき無產者は、再び、戰爭に反對する戰爭」の叫びを擧げなければならなくなつた。そして此「戰爭に反對する戰爭」を遂行する唯一の力は無產階級の團結である。各國民が自國の安全と幸福とのために、且つ世界の平和のために取らねばならぬ唯一の道は、自國の軍國主義化を防止することである。

「世界平和を確保するための戰爭！」「戰爭を終結せしむるための戰爭！」とは、資本主義の國家間の虐殺を意味するものでは

なくて、帝國主義、軍國主義に對する無産階級の戰爭、戰爭に反對する戰爭をこそ意味するものでなくてはならぬ。

武裝の平和が、決して平和を保障する所以ではなくて、武力による衝突を促進するものに過ぎないことは、過去の經驗が痛ましすぎるほどの深刻さを以て證明したところである。世界の民衆はあれほど恐ろしい大戰の經驗により、自分らの血によつて購はれた此尊い、病ましい教訓から、何物をも學ぶことが出來なかつたのであらうか。

□『武裝平和の危險性』

國民の熱望する軍備縮少の要求に對し、陸軍は軍制改革を以て應じようとして居る。パンを求めて石を與へられるといふのは、まさしく此場合に駁當する。國防なるものは、外寇に對して國民の生活の安全を期するがためのものであつて、國民生活の完全を犧牲にし、國民に窮乏と戰死とを强ゐてまで、徒らに軍備を擴張することは、それが國防の名に於てせらるゝと否とを問はず、國民生活を脅かす點に於て、外國からの××××と何等選ぶところはないのである。

四ケ師團の減小によつて捻出し得る經費を國庫に返納する代りに、航空軍其他の新なる方面に於ける軍備擴張に振向けようとする陸軍の計畫は、軍備縮少によつて、過重なる陸軍費の負擔を多少なりとも削減されんことを欲する國民の期待を裏切ること甚しきものである

軍備の競爭は、それが兵數の形で行はれようとも、タンクや毒ガスの形で行はれようとも、飛行機增加の形で行はれようとも、實質上何等の變りもない。國民が反對するのは、舊式の兵器や、舊式の軍制に對してではない。兵器や軍制の新舊精粗を問はず、國民は、國民の生活を軍備の犧牲とすることに反對するのである。國際的××主義の謂に外ならぬ軍國主義の精神そのものに反對するのである

軍備縮少の問題について、結局軍部の主張に屈して已みさうな三派の弱腰にあきたらぬ國民にとつて、清浦内閣支持の事實以上の憤りを感ぜしめたものは、政友本黨の態度である。床次總裁は言ふ、

『…我が軍備の目的は東洋平和の維持に置かねばならぬ。東亞に强大陸軍國なきの一事を以て帝國陸軍制限の理由となすものの如きは、軍備を以て單なる敵對侵略の具となすものであつて帝國の最高使命たる東洋の平和を維持すべき職責を忘却するものと云はざるを得ぬ。軍備は之れを敵對侵略よりも戰爭を避けて平和を保障する設備と見るが至當である…… 顧みて帝國の今

日迄の地位をかち得たる歷史を見られよ。幾度かの國難を經て今日に至つたのは、僅かに武備のあつたお陰と云つてよい。これは我國自然の國情が然らしめたのである。之れを忘れて俗論に媚び、武備を怠るに於ては一等國たる國位を維持し、其權威を保つことも困難であらう。現在東洋の平和を保持するものは、一に係つて帝國の双肩にあることを忘れてはならぬ。』（九月廿八日、東京朝日）

日本の陸軍が常に東西に於ける强大なる陸軍國、即ちロシアを假想的として擴張せられて來たのは周知の事實である。さればロシアが平和的な無產階級の國家と化した今日、擴張された日本の軍備がその意義を失つたので、軍備の制限が叫ばれるのは當然の歸結である。××××は、帝政時代の軍國主義を打破し去つた一事によつて、東洋平和の恩人であるといつてよい東洋の平和の最大の威嚇者たりし、ツアーが滅亡して、もはや何人も東洋の平和を攪亂し×××××××、日本は何故に舊時にまさる尨大過重なる軍備を必要とするのであるか。假想敵國あつてさへ問題となりがちな過大な軍備を、それなくして維持することは、單に國民に不當の犧牲を强ふるのみならず、東洋の平和に對する脅威として他國の反感を買ふの結果を招くに過ぎない。ヨーロッパの平和を確保するためと稱せられた英佛墺獨の强大なる軍備が、世界大戰を防止する代りにその誘因となつた事實を前にして、何人か强大なる武裝を、平和の保障と斷言することが出來よう。殊にロシアの帝政亡びて東洋の平和を窺ふ者なき今日、單に軍備のための軍備を維持することは、侵略主義の疑ひを蒙るのみならず、實際にさういふ批難を受けるやうな行動に出る誘惑をも受ける恐があるのである。ロシア革命の際における我がシベリア出兵の如きは、其顯著な例である。數萬の同胞の生命と巨億の財貨とを賭して××××××した結果はどうであつたか。世界的に帝國主義の名を恣まにした結果隣國の怨みを買つて孤立無援の地位に陷つた上、引込み時を失つた怪物のやうに、列國の反感と嘲笑とに追立てられて、すご〱まご〱と『自由的撤兵』の醜態を演ぜねばならなかつたではないか。今や支那の動亂に當つて、早くも『帝國の利權擁護』のため、××××××××××× ××××××××××××××××××××××××××××××××××××させようといふ武力干涉の要求が起りかけて居るが、これとても露國革命の場合同樣の結果に陷るべきことは、火を見るよりも明かである。

今日東洋の平和が危いながらに保たれて居るのは、決して尨大なる日本陸軍のお陰ではなくて、列强の相互牽制のお陰であ


る。一朝列强間の此微妙なる勢力の均衡が破られたならば、尨大なる日本の軍備は、戰爭を防止し、平和を保障する何等の力を持たぬのみか、全東洋、惹ては世界を擧げて戰禍の渦中に投ずる原動力ともなりかねまじき形勢にある。斯の如く過大なる軍備は、平和を維持する所以ではなくて、××××××××を犠牲とする危險性を多量に帶びて居るのみである。

　そこで唯一の野黨たる政友本黨存在の意義は、輿論を代表して政府を鞭韃し、軍縮を徹底させる所に係つて存するに拘はらず、本黨の態度は、さらぬだに保守反動を事とする政府以上に保守的反動的であつて、時代後れの軍國主義、露骨なる帝國主義を振りかざして、軍閥の歡心を買はんがために國民を賣らうとする跡が歴然として居る。

　要するに與黨といひ、在野黨といふも、既成政黨の實質は同じことであつて、いづれもブルジョアジーの獨裁機關たるにすぎず、無産階級の利害に對して何等の理解をも持つものでない。與黨三派の申合せといひ、本黨の宣言といひ、支那の動亂に對する武力干涉を是認し、督促するの口吻を洩して居る以上、次第によつては、我勇敢なる軍隊——農民勞働者の子弟——は、××××××××××××××××××××××××××××されないとも限らない。一旦出兵の議決するや否や、政府の方針に對して一言の批判をも許されないのが、吾が言論取締上の慣例である。新聞雜誌からは武力干涉の利害得失、理非曲直を論ずる公明な文章が姿をかくす代りに、色々の形で子供らしい、單純な、淺薄な、激越な軍國主義の謳歌が行はれるであらう。眞實の意味に於ける國民的利害の立場から、軍國主義的行動に嚴正な批判を加へることは、獨り國法の禁ずる所となるのみならず、非國民、賣國奴の行爲として、社會の公敵としてあらゆる迫害を蒙らねばならぬこととなる。

　然し無産階級の利害を代表する階級的な政黨の存在する場合には、形勢は大に異つて來るであらう。無論其場合にも言論の抑壓や種々なる形の迫害と鬪はねばならぬことは避け難いが、兎にも角にも、公然、一政黨の政綱として軍國主義に抗議し得る自由を保持するだけ、國民の自覺と反省を促す機會が多く、帝國主義的企圖を防止する可能性が多くなる譯である。

　目下の狀態に於ては、個人としての無産者がいかに既成政黨の無能と背信とに愛想を盡かし、軍閥の橫暴に憤りを感じても階級としての彼等の意見を代表し、遂行する機關が缺如して居るので、軍閥とブルジョアジーとは、無産階級の意見と利益とを無視し蹂躙して、恣まに××××、×××××××を稱されて居るのである。今や國民は、國民自身の利益を基礎とする


大阪
朝日新聞
本紙夕刊共十二頁
大阪朝日新聞發行所

布施辰治
中西伊之助 共著

【最新刊】

社會隨筆 審くもの審かれるもの

定價一圓九十錢　送料拾錢

東京市神田區表神保町三
自然社
振替東京三五五一〇番

權力の前に弱き民衆よ!!! 讀め

日毎に、殺人、放火、强盗、詐欺、强姦、姦通―罪―罪―罪―罪―々―々―々として捕縛―收監―審かれ―罰せられ―暗から暗へと葬られて行く。眞に、コレ等の事象は人間生活―社會生活―の欠陷に喰入つた病根の結果が生んだ暗黒な底知れぬ深淵だ、單調で蕪雜な官憲の報告や、新聞紙上に散見する如きものではない。人間の自暴、破滅、絶望は戰慄せざるを得ない。眞に複錯多岐に亘る社會相である

審く 誰れか人を審く事が出來るであらうか? **法律が。法官が!!!?**

本書はコレ等社會の暗黒面の實相を社會の表面に曝露して日光消毒を行ふものである。民衆擁護士として布施辰治氏の深き研究と弱者の爲め辯護せる事件の記錄を題材として、中西氏の囹圄生活の體驗と快筆とに依り縱橫無盡に刑事裁判制度に加へた大鐵槌である。

事實の眞相は小說より奇なり驚異たり

—內容—

若い勞働運動者と檢事との對話
死刑製造法
法廷小話
召喚状の威赫
一人に三度の死刑宣告
事實の姦通
法律の姦通
井伊大老の朱筆
社會的制裁への抗議

政治を要求し、軍備を國民自身の眞實の必要に應じた程度に留めんことを欲して居る。そしてその第一步として、無産階級の階級的利害を代表する政黨の出現を望まずには居られないのである。

□「婦人と平和運動」

近代社會の一特徴は、婦人の社會的勢力の增大である。婦人解放の問題に對していかなる態度を採るかを問はず、何人も此著明なる社會的事實を無視することは許されない。のみならず社會的又は政治的方面に何等かの運動を進めようとする事は、此勢力を利用するとせぬとによつて、重大な影響を受けることゝなる。ベーベルは、古來のいかなる運動も、婦人の參加を見ないうちは重大な勢力となり得なかつたと說いて居るが、現代に於ては特に其傾向が著明である。諸種の宗教運動や軍國主義運動の如き、明らかに婦人の社會的自由と背反した性質を帶びるものでさへ、婦人に對する宣傳おさ／＼怠りなく、拔け目なく婦人の間に於ける保守的な傾向を利用することは周知の事實である。婦人の社會的活動を罪惡視する日本に於てさへ、愛國婦人會の如き、軍國主義的な團體の活動は讃美され、奬勵されて居る樣である。そこで御多分に洩れず、人道主義者も亦、婦人の平和的使命を高唱して、その平和運動を激勵した。かくて今日、吾々は軍國主義的な日本の中に、平和主義の溫かい夢に抱かれてゐる女神のような淑女の多くを見出すようになつた。其等の婦人の大多數はキリスト教徒であり、教養ある貴婦人であると同時に、日本婦人の中では、最も進歩的、活動的な分子であつて、個別的に見ても、かの愛國婦人會其他の反動的な團體に屬するものよりは尊重すべき人々である。

けれども列國の軍備競爭が戰前以上の激しさを以て行はれ、第二次世界大戰の危機が至る所に生まれつゝある今日、彼等人道主義者の平和運動が果して何程の效果を齎らすべきかを思へば、甚だ心細い感じがしない譯には行かないのである。彼等は國際戰爭の原因を、單純な國民的感情にのみ歸し、隨つて國際間のもつれた感情を融和して、人道主義的な感情を喚起することによつて、問題は容易に解決されるものと考へて居る。殊に個人として、男子よりも平和的な傾向を持ち、愛情に富む所の婦人の感情に訴へることによつて、國際間の危機が平和的に切拔けられるものゝように考へて居る。そこで婦人の平和的使命が高唱せられ、婦人の社會的勢力が本質的に平和促進の效果あるものゝ如くに信ぜられるようになつたのである。

成ほど個人として見る時、婦人は平和的でもあれば、愛情に

も富み、戰爭を嫌惡しても居る。けれども同じく個人としての男子について見る時、吾々は彼等も亦、平和的で愛情に富み、戰爭を嫌惡する點に於て婦人に讓らぬ點を見出すのである。これはどこの國民に就ても云ひ得ることであつて、他より好戰的尙武的だと云はれ、且つ實際に軍國主義的な宣傳の根强く行亘つて居る日本に於てさへも、見られる事實である。抽象的、一般的な問題として見る時、何人も戰爭よりは平和を採るに違ひない。そこで問題は、個人としては然く平和的にして愛情に富む國民同士が、國家としては、何故に相對峙し、相鬪ふことを余儀なくされるかといふ一事に在る。平和の愛すべきことは何人もこれを知つて居る。問題はたゞ、各國民が自己の意思に反し、自然の感情に反してまで、何故に隣人と鬪はねばならぬか、の一事に盡きて居るのである。そして此處に吾々は、資本主義發展の結果としての國際市場の爭奪戰、搾取の對象を國內の無産階級より外國の無産階級にまで及ぼさんとする侵略的傾向を、近代の國際戰爭の根本的原因として見出すのである。

此の各國資本家階級の間の利潤の爭奪戰が、ブルジョアジーによつて國民的利害の背反として飜譯され、國民同士の間に於けるあらゆる猜疑や誤解や反感を煽る材料として利用される時、本來平和を愛好し、實際には何等確執の原因を持たぬ國民同士が、狂犬のなやうになつて互の咽笛に嚙みつくのである。そして民衆の生命と富との恐ろしい浪費の中に資本家獨り肥えふとり、死と荒廢とに領せられる慘澹たる戰後の世界にはたゞブルジョアジーの勝利の榮光が輝くのである。

民衆が戰爭に參加するのは、戰爭の恐ろしきことを知らぬがためではない。平和の愛すべきことを知らぬがためではない。戰爭の犧牲者は常に民衆自身である以上、彼等はその恐ろしさを知り過ぎるほどに知り拔いて居るのである。それにも拘らず、××××××××××××しないのは何故であるか。

民衆は戰爭の恐るべき事を知り、平和の愛すべきことを十分に知つて居る。それを知りつゝ彼等が進んで戰場に赴くのは、これが彼自身、及び彼等の屬する民族の生存と繁榮とのために、絕對に必要として有利なことだと信ぜしめられて居るからである。平和を愛し、隣人を愛するのは人類の本能であり、人道に叶つたことである。けれども自己保存の欲望は、それ以上に强い本能であり、これ以上に人道に叶つたことである。そこで自己保存の必要上、外敵と戰ふのは人類の正當なる權利であり、義務であつて、まことに當然な、正當な行爲である。戰爭が眞實國民の利害と一致するならば、いかに慘虐な方法を以て行はれても非人道と稱せられることは出來ない。これは人類が猛

獸を撃つ場合と同じことで、自己保存の神聖なる目的と一致する限り、吾々は戰爭を攻擊する何等の理論的根據をも持たないのである。

けれども人類の國際關係は、決して人類と猛獸との關係に比せらるべきものではない。諸國民は互に人間として共通の利害、共通の感情を有し、相愛し、相扶けて共同の生活を營む可能性を有し、且つそれこそは自己保存の目的に叶つてゐるのである。一部資本家同志の間に於ける利害の衝突を以て、直ちに國民的利害の衝突と解し、爲めに隣接國民に死と荒廢とを齎らすことは、人類の自己保存の目的を裏切るものであり、隨つて非人道にして不道德と目されねばならぬのである。それは恰かも隣接にゐる二ケ國の猛獸が獲物の奪合に熱中してゐる時、兩國の人間までが、自國の猛獸をして勝たせるために、隣國の民衆と戰はねばならぬ道理はないのと同じことである。いづれが勝つにせよ、猛獸の生存は人間にとつての危險である。此場合、兩國の國民は、いづれを問はず、その猛獸を仕末することに協力すべきではなからうか。

各國民が衷心平和を愛好するにも拘はらず、心ならずも戰場に相見えることゝなるのは、戰爭が眞實自己の利益に一致し、自己保存の目的に叶ふと誤信する結果である。此誤信を一掃せぬ限り、いかに人道主義的感情に訴へようとも、縷々千萬言を費して平和の愛すべきことを說かうとも、それは畢竟徒勞であつて、人類は、資本家の吹く笛のまに／＼再び三たび、世界大戰の慘禍を繰返すの外はなく、現に其方向に向つて取返しのならぬ步みを進めて居るのである。

婦人といはず、男子といはず、抽象的な一般論として、又目前に何等對外感情の昂奮を促すやうな具體的問題のない、冷靜な批判を許される平和時代にあつては、戰爭を措いて平和に與せぬ者はない筈である。けれども此平和時代の平和論ほどあてにならぬものはない。それは一朝國際間に資本家的利害の確執を見るや、忽ちにして對手國のみに平和的態度を强要する擬態的な平和論、又は愛國的主戰論と豹變するからである。

是等の社會的、政治的な問題について、婦人は決して男子と本質的に異つた態度を採り得るものではない。婦人も亦、其時代、其民族の傳統と教養とによつて育て上げられたものである以上、決して國民的な偏見を超越し得るものでなければ、國民の知識の水準以上に出で得る者でもない。即ち彼女等も亦、戰爭が自己保存の目的に一致するといふ誤信によつて支配される限りに於て、男子以上に平和的ではあり得ないのである。

婦人は、戰爭によつて最愛の我子を失ふことに忍び得ない筈

である。されば婦人の母性に訴へるのが戰爭防止の捷徑であると説く論者がある。けれども人類は、久しい間の共同生活の結果として、自己保存を全うする所以である種族保存の目的のために――自己と種族との共同利害のために――自己の個人的利益を犠牲にする習慣と道德とを養はれて來た。此目的のためには、何ものにも換へ難き我子の生命を捧げることさへ、忍び難き、然も忍ばねばならぬ犠牲の一つとして、多くの母の經驗して來たところである。直接の個人的利害又は利己的感情に訴へることによつて戰爭を防止し得るものならば、自己の關係を砲彈の的とせねばならぬ男子の場合には、この宣傳が婦人以上に效力を生じてよい筈である。けれども人類が、自分一個の利益と感情とを、共同利害のために犠牲として悔いざる底の心理と道德とを保持する以上、男子の自愛心に訴へ、婦人の母性に訴へたところで、戰爭を防止することは不可能である。男子も女子も、種族のため――國家のため――には、いかなる苦痛でも敢て忍ばうとするからである。

婦人が參政權を得た戰後の世界が、忽ちにして平和の樂園と化する代りに、却つて戰前以上に軍國主義化したことは、婦人の胸に內在すると信ぜられた平和的傾向の無力を證明するものでなくて何であらうか。とは云へ、戰後の世界の軍國主義化は、新たに參政權を得た婦人らの罪ではなくて、內外の無產階級の搾取によつて、瀕死の重傷から救はれようともがく資本主義經濟の罪に歸せられねばならない。婦人は、新たに得たるその參政權を以てし、戰後頓に增大せる社會的勢力を以てしてさへも、世界の軍國主義化を如何ともすることが出來ずに、ゐるのである。そして世界の民衆は、過ぐる大戰の慘禍に戰のきつゝ、切に平和を愛好し、希求しつゝも、猶且つその志す側と反對の方向に引ずられ、血と肉の狂ひ渦まく大戰の際の淵に再び投げ込まれんとしつゝあるのである。

何故であらうか。それは彼等が戰爭の眞實の原因を知らないからである。戰爭が、各國民の自己保存の目的と一致せず、其眞實の利益と一致しないことを知らないからである。

戰爭の恐るべきこと、平和の愛すべきことは、人道論者、博愛主義者の教へを俟たずして何人もこれを知つて居る。問題は、いかにして戰爭を恐るべきか、又いかにして平和を愛すべきかに在るのではなくて、いかにして戰爭を不可能にし、平和を可能ならしむべきか、に在るのである

戰爭を不可能ならしむる唯一の道は、×××××××××××××××××。そして平和を可能ならしめる唯一の道は、戰爭が各國民の眞實の利益を裏切るといふ人生の眞實を國民に覺

らしめることである。軍國主義に塗り潰された常闇の世界を照らす唯一の光明としては、この眞實、この自覺を措いて外にはないのである。

とは云へ、私は決して婦人の平和運動を無用視するのではない。たゞ其婦人らが戰爭の眞の原因を探求せず、隨つて其平和的努力が見當違ひの方向に向つて、全然無意味に浪費されるのを惜むのである。婦人が、戰後新たに獲得したる政治上、社會上の勢力を、戰爭の眞因たる社會組織の改革に利用し、空疎な感情的平和論によつて、かの慈善事業に於けるが如く、自己の社會的良心を欺く手段とする代りに、各國の軍國主義的傾向に對して必死の抗爭を試みざることを遺憾とするのである。移民問題について、世界平和のために米國大統領に抗議書を送る勇氣のある我婦人平和論者は、何故に自國民の生活にとつて、より以上直接な、重大な影響のある軍縮問題について、輿論を喚起し、當局の反省を促さうとしないのであらうか。吾々が要求するのは天上の平和でなくて地上の平和であり、客室の平和ではなくて社會全體の平和である。この意味に於ける平和の使徒は、外國人の接待に圓滿な交際振りを示す社交術の持主であるよりも、先づ以て『戰爭に反對する戰爭』の遂行者たる勇氣の持主でなければならぬ。眞の意味に於ける『世界平和を確保するための戰爭』『戰爭を終らしむるための戰爭』に身命を捧ぐる底の殉道者でなければならぬ。自國の軍國主義を不問に附して、他國の態度を詰る愛國的平和論者は、羊の皮を着た狼に異ならない。（十月一日）



一國農業生活に於ける教育と新哲學

ハロールド・タブルユー・フオート

日本田園生活の第一印象

數日前私は、東京を立つて、汽車で東北地方に向つた。八方にひろがつてゐる豊かな耕地の、胸を打つやうなパノラマに接して、私は歡喜を禁ずることが出來なかつた。すべて小規模である。しかし、集約的に耕作されてゐる。稻、蕎麥、里芋の田畑、竹林や糸杉につゝまれた丘の斜面、そこここに巣をくつてゐる小さな百姓の家、ほとんど寸尺の地と

雖も無駄にされてゐない。私はこれまで、これほど興味ある農村生活の光景に接したことがない。

丁抹農村生活の聯想

そうした日本の農村生活に接して想ひ出されるのは、コペンハーゲンからシイヤランド（丁抹の北西の地方—譯者）の中心に到る途上に見られる、丁抹の農村の光景である。異ふところはほんの僅かな點である。私は數年前、自動車を驅つて、丁抹を旅行した時のことを覺えてゐる。私達は、兩側に美しい山毛欅の並樹のつゞいた、すばらしい近代的な道にそつて、コペンハーゲンから北方に馳驅した。路は西に曲つて、心を魅するやうな田園社會の中心に入つた。見渡す限り、よく實つた、黃金色の穀粒の盛られた四角な畑がつゞき、その間には蔬菜や恭菜の暗緑色が、點綴されて居た。牧場にはホルスタイン種の牛が盛んにかわれて居り、そこゝからは、農民協同組合の乳酪工場や燻肉工場の、機械の音が傳はつて來るのであつた。

私達は或る校長の家に入つた。そこはいかにも人の心を惹く、古風なところであつた。家の前面には、美しい庭があつて、散步路が交錯して居り、休み場や、花園があつた。家の後方には、立派な實驗所と校園とがあつて、校長はちやうどそこで、生徒たちに圍まれて、仕事をして居た。生徒たちは、そこで土を堀つたり、掻き集めたり、莖や葉や花をいぢつたりして居た。そして小供たちがかゞんで、大地にぴつたり喰付いて仕事をしてゐるのを見た時に、私は彼等が自分の生れて來た自然をよく理解し、愛してゐることを知り、彼等がかうして仕事をしてゐる時に、聖なる造物主はどこからか彼等を見下して居り、彼等に大地の尊さを理解せしめてゐることを知つたのである。

日本の農村と丁抹の農村との差異

日本の農業は、丁抹のそれに比して、規模が小である。共同耕作は、日本の農業生活に於ては、首要特徴ではない。尠くとも、一旅客の眼にはさう見える。丁抹では立派な道路があつて、農地と商業地の中心とを結び付けてゐるが、日本ではそうした道路は、極めて貧弱か、乃至は全く無い。それにまた日本の農業は、大部分小作農業であつて、小作人の住家は、殆んど顧られないやうである。之に反し丁抹では、實際に於て、凡ての耕地は、それで生活する家庭の所有になつて居り、その結果、非常に氣持よく、凡てが造り上げられてゐる。

戰爭によつて教へられた農業生活改更の要

他のいかなるものにも優つて、農業生活の重大なる意義と尊嚴とを强調するのが、新しい生活哲學である。丁抹をして世界の農業國中に於て、最も立優つたものとしたのは、この新生活哲學である。一切の問題の解決はこゝに在りと云つても、差支へないと私は信じてゐる。即ち農業をもつて、最も尊い、最も價値ある職業とし、國民中の最も優れた人々の從事すべき仕事とする哲學に基いて、新しい教育を樹立すること、是である

しかし丁抹に於て、いつもさうであつたわけでは無い。一八六四年の悲しむ可き戰爭（獨逸と墺太利とが聯合して丁抹に侵攻し、維納條約を强要して、領土の一部分を奪つた戰爭――譯者）が、必然にこの變化を齎らしたのであつた

丁抹はその戰爭で、領土、人口、富の多くを失つた。當時祖國に脫れ歸つた丁抹出身の知名の人々――哲學者、詩人、學者等は、祖國を救ふには、どうしても新らしい教育を實施しなければならぬと痛感した。この願望が現實となり、「田

園丁抹には、普遍的な、實際的な、民主的な、教育制度が實施された。造物主、家庭、祖國に對する愛に根を下した、廣い知惠を基礎として、新しい國民生活が樹立された。この新しい教育と新しい哲學とは、王國の凡ての男、女、子供に及び、彼等に農業再建の心を振ひ起さしめたばかりでなく、この目的のための、實際の準備に着手せしめた。

農業の尊さを說く賢者に惠まれた日本

私は日本に來てほんの僅かしかならないが、日本にもまた尊ぶ可き賢者があつて、農業生活の福音を說き、國民生活に於ける農業の重要さを、同胞の前に訴へてゐることを知つた。彼等は說いて曰く、農業は、國民の最も大なる、最も肝要なる職業である。未來に於ける日本の偉大さは、常に、農民の知惠と進歩とによつて測られると。

往時にこの福音を說いた者は、かの偉大なる二宮尊德であつて、彼の教へは彼の生地及び全日本の民衆に、深い感銘を殘した。數日前私は水戸を訪ねて、水戸烈公が農業のために盡した仕事について、知ることが出來た。昨日はまた、仙臺で伊達政宗公を祭つた社に詣で、その人が聖なる大地をいかによく利用す可きかを、その領民に教へたことを知つた。

そう云ふわけで、過去の日本に於て、賢明な農業上の指導者が無かつたわけではない。然るに、今日の狀態はどうであるか？農耕にたいして、往時と同じ愛着があるであらうか？小作人等は、前と同じに、滿足してゐるであらうか？諸外國に於けると同樣に、農業家や小作人が、田園を離れて、都會地に移住し始めてゐないであらうか？この不安の實證は歴々と見得ると私は信ずる。私の觀察に間違ひがなければ、農業は今日最早、以前のやうに、尊いものと認められず、農業に從事する人々は、都會の商人や給料取から、劣等な階級と見られるやうになつてゐる。これは、田園組織の不安

足と不滿足の徴候と見てよいであらう。

世界戰爭によつて激發された農業問題

世界戰爭は文明各國の田園生活に、悲しむ可き結果を齎らした。戰爭は、農業生産物に不自然な刺戟を與へ、その價格は騰貴し、農業組織及び農業經濟に、異常な變化が起つた。次いで戰爭は終り、農産物の價格及び農業勞働の價値は暴落した。戰爭の結果として、更に租税率が高められた。西歐の多くの國々、北米合衆國、並に日本に於ても亦、農民の所得は、その支出以下となつてしまつた。この事情は更に、田園生活に於ける昔ながらの平衡を破壞して仕舞ひ、農民離村の勢ひを高めたのである。然らば我々は、今後、いかにす可きであるか？

日本の面接せる人口增加問題

私の祖國では、土地の饒多に惱んで居り、耕地は廣く、農民は耕地から遠く離れて生活してゐる。そこで我々の問題は、どうしたら農業民を耕地の近くに落付かせ、その兒や孫をそこに榮えさせて、農業人口を增加さすかといふに在る。ところが日本では問題は全く別である。日本の都會人口も、農村人口も私の祖國に比して、稠密である。そこで問題は、增加せる人口をどうしたら農村で維持することが出來るか、且つ、農民のためばかりで無く、刻々に增加する都會民のために、どうしたら多くの農産物をあげることが出來るかといふに歸する。しかも私は、日本の田舍を視察して廻つて、現在の農業組織の、割合に集約的になつてゐるのを見て、いつたいどうしたらこの上農産物を增すことが出來るか！と迷はざるを得なかつた。しかし私は、どこかに解決の道がなければならぬと思つた。

救濟策としての集約的生産と經濟的分配

私は日本へ來てから、地位のある人や無い人や、貴族院議員や、大地主や、小地主と語る機會があつた。彼等はいづれも熱心に問題の解決を求めてゐた。――實際的の協同企業を促進する立法によつて、解決す可きであるが、新らしい教育制度を樹立して、農業生活上の新哲學を與へ、それに依つて解決す可きであるが、彼等はそれの決定にあせつてゐた。

ついこの間松島驛の近くで私は或小地主の家の集りに列した。その小地主は、小作人や友達を集めて、この問題を討議してゐた。そこに集つてゐる人々が、いかにも熱心にこの問題を討議してゐるのを見て、私は、またそこには大地にたいする敬愛の心が存在して居り、それは再び農業をして、日本に於ける最も名譽ある職業とならしめるに足るものであると、感じたのである。日本に於てはこれまで、農民相互の間及び農民と商人との間の協同企業が、何等著しい發展をとげてゐないやうである。且つ、協同販賣や、穀物の標準化についても、殆んど何等講ぜられた跡がないやうである。私は、教育と、政府専門家の直接の補導とによつて、日本に於ても亦、丁抹に於けると同樣な、大いなる改善が齎らされると固く信じてゐる。丁抹の農民は、教育と政府専門家の補導とによつて、どうしたら必要な穀物を、最も安い費用で、生産することが出來るかを學び、次いで協同工場で、農民自身がその穀物を加工し、それを國內及び國外の市場に送り出し、生産者自身の代理人、それも特に新らしい農業學校で教育された代理人によつて、賣却して居るのである。

生産及び穀物の標準化に於ける政府の補導

日本には農業學校の立派な組織が出來てゐる。私たちはその立派なることに、喜びもし且つ驚きもした。主として農業專門家を養成する農科大學があるばかりでなく、その他多數の農業學校があり、そこから多數の學生が農村へ歸つて行く。これらの學校は、農業學生として生産に關する農業經濟學を教へてゐる。そこでこの次の、極めて重要な事は、穀物の標準化と、消費者への直接の分配の道を講ずることとである。丁抹人は、穀物の標準化と、チーズ、バタ、燻肉、鷄卵の優良たることとに於て、世界的の名聲を博してゐる。輸出品に對する政府の赤き印證は、立派な保證であり、世界の市場に於て、他の國民の持出す同樣な商品よりは、常に高い價格を持つてゐる。私は、日本の農産物の標準化と、取扱ひとに於て、より一層の改善の可能性があると信じてゐる。政府の補導と、農業教育の更に一層の專門化とは、そのために資するところがあるであらう

土地購入に對する金融的援助

丁抹に於ては、小作人と農業勞働者の數は、全農村人口の一割一分以下であつて、その他（即ち八割九分）は、自己の田畑を耕作する土地所有者で、その田畑は、一、二エーカー（一エーカーは約五反――譯者）から二〇〇エーカー位までに及んでゐる。平均は約三〇エーカーである。新らしい農業哲學に於ては、土地の獲得は重大な役目を演ずる。ほんの些かの土地でも所有してゐる人々は、勢ひ現在の政府と現在の制度に忠誠であり、祖國の建設に心からの努力を傾ける。丁抹國民は、この哲學を知つて、勤儉な小作人や、善良な農業勞働者なら誰でも、田畑を買取ることが出來るや

うな法律的の施設を樹立した。これは政府の援助によつて達成されたもので、政府は畑一枚にたいして、十分利附で一定の信用を與へ、または九十八年間を超えざる期間でなし崩しにして、一定の信用を與へたのである。時々には政府自身が、貸與たよりは高率の利子で、金を借入れなければならない場合があつた。しかしさう云ふ場合でも、この政府援助の計畫が、有利なものであるといふことが證明された。何故と云ふに、さうした援助の結果、課税財産の非常な増加を齎らしたからである。

優秀なる農業指導者の必要

丁抹は古い時代に於ては、農業上に何等目ざましい事を成し遂げることが出來なかつた。それが今日の如く、凡ての點に於て、目ざましい發展をとげたのは、新農業學校で養成された新らしい指導者の賜物である。今日丁抹には、最早、文字の讀めぬ者は絶對に無く、農業學校で教育を受けた人々は、明確廣汎な思考に必要な教養と、實際の科學的生産に必要な知識とを持つてゐる。

私の祖國及び日本が、今後更に充實せる農業學校から、今日に於けるよりも一層多くの農業指導者を出すに到れば、農業は更に發展し、農民が再び往時の如く、國民中の最も名譽あり、最も貴き職業に從事する者とせらるゝに到る可きは、疑ひなきことである。（終）

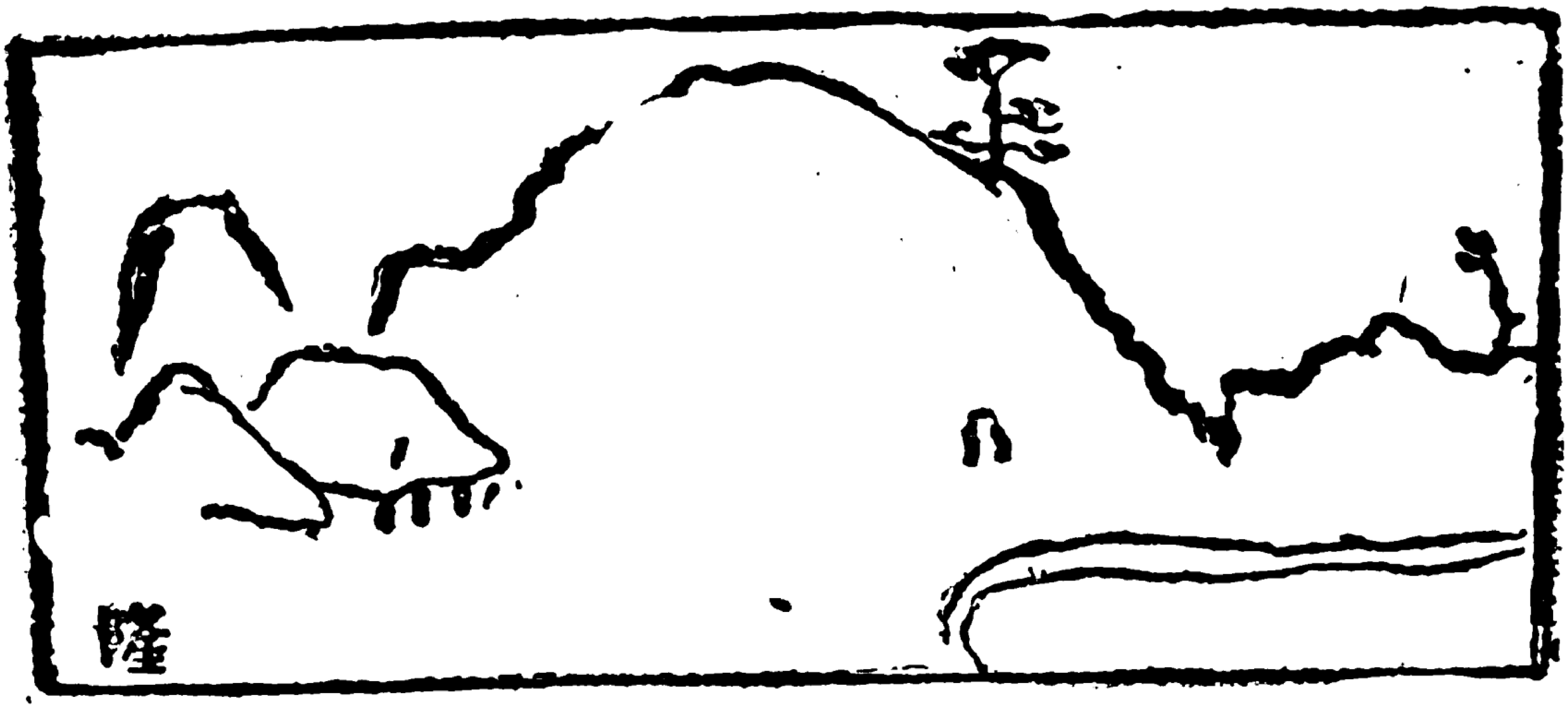
山川均著「十一版」

◇定價壹圓五拾錢
◇送料金拾五錢

東京芝愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

レーニンとトロツキー

レニン傳及彼の人物評は澤山あるが、本書は類書中の尤も卓越した評傳だ。彼の不朽の事業、雄大な人格を知らんと欲するものは本書に如くはなし。震災後永く絶版となつていましたが今回增補訂正の上、再び出版を見るに至つた。



愛卷

横光利一

1

風が闇の中で吹きつけてゐた。外では塀の慄へる音がした。巻き上げられた木片が時々カツと戸を叩いた。それでも妻は行くと云つた。もう彼は默つてゐた。二人は外へ出た。妻の遅れ毛が風に吹きつけられて斜めに彼女の顔へ吸ひついた。

「ここへ這入つてもいいよ。」

彼は和解のつもりで妻にマントを擴げてやつた。

「いいわ」

「さうか。」

「ええ。」

また彼は叩かれた。女の子がひとり溝板の上でひよろけてゐた。高い塀の上からアーク燈の強い光りが足元へ斬り込んでゐた。妻はひたひたと打つ髮の毛の下で青白い顔を顰めてゐた。

「ぢや、入れてよ。」と暫くしてから妻は云つた。

愛はもう彼に蹴飛ばされてゐた。しかし、彼はまた默つてマントを擴げてやつた。不意に自轉車が無燈のまゝ梭のやうに飛んで來た。彼は一寸悸えた。

「馬鹿ッ。」

二人は曲つた坂を下つていつた。人は通らなかつた。どこかで呼び子の笛が高くなつた。不吉だッと彼は思つた。妻は少し身慄ひをした。二人は默つてゐた。坂路は新らしい枯葉と藁屑の舞踏の他、塵埃は風に吹き拂はれて何もなかつた。ひとり電柱が傾いて鳴つてゐた。

「早く歸るか。」

「ええ。」

樹の梢は塀の上へ突つ伏さうとしてゐた。パッと街の火が明るく見えた。坂路を降り切ると風の底で皺んだ街が騒いでゐた。桁の脱れかかつた木橋があつた。橋の下では石垣の下でいつもの濁つた水が縺れてゐた。

「こゝでいいわ。」と妻は云つた。

彼は立ち停つた。彼もここで別れたかつた。「あの本屋」の方へ行くのもここからだつた。

「ぢや。」

妻は彼の胸の前に立つて暫く彼の顔を覗つてゐた。彼は眼を妻から外らして行手の街角の方を眺めてゐた。

「行つて來てよ。」

「うん。」

妻は笑ひを浮べる努力もせず彼の前から去つた。。妻のショールの端が袂と一緒に横に飛ぶやうに靡いてゐた。間もなく妻は橋を渡つて次の街角へ消えて了つた。しかし、彼はまだ立つてゐた。本屋の主婦を見に行くには妻に見られない方が得であつた。淋しい屋臺の店からは暖簾のはためく音がした。街角の塵捨場には煉瓦が山のやうに積つてゐた。その山の頂には斜めに竿が刺さつてゐて濕つた布切れがその竿の尖端を搖つてゐた。ふとそのとき、消えた筈の妻の半身が街角から傾いて彼の方を一寸覗いた。あの妻が暫くの別れを惜しんでいま一度と自分を見たとは彼には思へなかつた。なほ木橋の欄干に凭れて見てゐると、また妻は「鬼」の來るのを見るやうに街角からひよと顔を現はした。彼は恐ろしくなつた。實家へ行くと云つたのはそれは彼女の嘘なのだ。誰かに逢ひに行くのに相違ない。自分が妻を送る顔をして實は本屋の主婦を見に行くやうに。彼女が自分の方を覗いたのも、今自分が本屋の主婦の方へ行くために「鬼」を見送つてゐるやうに、彼女も彼女の後を追跡しやうとする「鬼」を見屆けたかつたに相違ない。——彼はくるりと自分の家の方へ向き返つた。

彼は直ぐ家へ歸つて來た。

「皮肉な奴だ！」

2

彼は本屋の主婦に逢へなかつたと云ふ不滿でひとり自分にぷんぷんと怒り出した。彼の立つてゐる眼の前の壁には、彼と妻との幸福な日に二人のために書かれた紙が貼られてあつた。

——ああもろもろの愛よ、汝はいかに麗しくいかに悦ばしきものなるかな。——

「馬鹿な！」

彼は黄色くなつたその紙をひき裂いた。何か代りに自身へ投げつける毒々しい言葉を書いてみたかつた。が、やめた。彼は本屋の主婦に逢ひに行かねばならなかつた。彼女は自分を愛してゐる。と彼は思つた。たゞさう思ふ方が得策であつたから。彼が彼女に逢つたのは三年も前である。彼は彼女の家の本棚の前で、次の時間に必要な書物を落して來たのに氣がついた。そのとき彼は、「アツ」と小さな聲を上げた。

「どうなさいましたの？」

主婦は坐らうとする膝を延ばして彼に訊いた。それが彼女が彼を知つた最初である。――

彼は時計を出して見た。八時。彼が彼女の前へ出て行つて默つて歸つてくるいつもの時刻は今であつた。彼は手首の脈をとつてみた。騒ぐ。彼はマントの羽根を首に卷いてまた風の中へ出て行つた。

3

本屋では、店の火鉢を中に挾んで主人と主婦とが坐つてゐた。

「稲妻はまだ出ませんか？」と彼は訊いた。

二人とも默つてゐた。ただ主婦は顔を赧らめて俯向いた。

「變つた！」と彼は思つた。

彼は本棚の前を一廻りした。

「まだ稲妻は出ないのですね。」

主人は火箸をしつかり握つて聞えぬやうに表の方を眺めてゐた。」

「ええ、まだでございますの。」と主婦は云つた。

表の硝子戸に風が突き衝つた。主人の火箸が慄へてゐた。―

「稲妻はいつ出るんです？」

主婦は彼の眼を避けて一寸口を動かさうとしたがまた默つた。稲妻、稲妻、とばかり云つてゐる自分に彼は腹が立つた。

「もう出るんでせう？」

「ええ。」と主婦は低く答へた。あの主人が恐いのだ。

彼は會釋して外へ出た。出ると、彼は主人に向つて腹を立ててゐる自分に氣がついた。彼はいま一度自分に怒つてゐる主人の前へ引き返したくなつた。

「あなたの細君は僕を愛してゐるんぢやありませんよ。僕が愛してるんです。」さう彼は云ひたかつた。彼女のために。

もう行かない、と彼は思つた。もう行けないと思つたから。彼は道の端に立ち停つてゐた。何物にも怒る理由が何もなかつた。急に彼は故郷（くに）のかん子に逢ひたくなつた。彼女こそ自分を愛してゐたと彼は思つた。前には彼も彼女を愛してゐた。何事も默つて一言の言葉も交へずに別れて來た。何ぜか？ただどちらも默つてゐたのが惡かつたのだ。めちやくちやに饒舌れば良かつたのだ。英語の會話のやうに。馬鹿がツ。と彼は思つた。

彼は肩で路傍のカフエーの廻轉戸をぐツと突いた。隙間から蓄音機のセレナードが飛び出て來た。

「いらつしやいませ。まアひどい風でございますわね。」

女給は彼の傍へ寄つて來て大理石の卓子を拭き始めた。カーテンが風でめくれ上つた。彼は默つて無意識にメニューの一行を指で叩いた。

「はい。ココア？」

女給は彼の頷くのを待つてカウントの方へ引き返した。彼は冷たい卓子の上へ曲り込んだ。一體自分は誰を愛してゐるのであらう？妻だ、と彼は思つた。妻であるが故に、あの不幸な辰子であるが故に、さう思つたと云ふことがなほ彼には淋しかつた。

4

（彼は明日からその日日を何で慰めて行つて良いのか分らなかつた。彼には故郷の家に恒産があつた。ひとりの母は月々彼に少くない費用を送つてゐた。それは彼を苦しめた。二重にそのため何事も仕事をせずに生活出來得ると云ふことが、彼から心の張りを奪つて了つてゐて苦痛であつた。彼は思案することの出來ない多忙な仕事の充ち滿ちた生活を欲した。それは激しい勞働でも良いと思つた。）

その夜、彼は遲く歸つた。歸ると、妻は歸つて眠つてゐた。彼は妻の寢顏を立つたまま眺めてゐた。

「俺はお前を愛してゐるんだ、だが、お前は俺を愛してゐない。だから俺はお前を愛したくないんだ。俺に放蕩さすのはお前なんだ！」

彼はひとり胸の中で妻に云つた。彼は妻をしつかりと一度抱きたくなつた。もし妻が何事も捨て去つて彼に身を投げかけて來たならば、彼は喜びのために涙を流したにちがいなかつた。しかし彼女は？彼には妻の寢顏がいつもより美し

く見えた。彼は妻を蹴りたくなつた。

「あなた。」と妻は不意に云つて眼を開けた。

彼は默つてゐた。

「私、今夜途中で歸つて來たの。」

「直ぐか？」

「ええ、風があまりひどいんですもの。」

さう云ふと妻はまた眼をつむつた。

「誰と逢つて來たんだ？」と彼は云ひたかつた。が、それは彼自身にも云ふべき言葉であつた。彼は默つて自分の部屋へ引き返した。彼は自分の放蕩が嫌ひであつた。が、もし放蕩をしなければ、彼は妻の美しさに壓倒されて身が破滅しさうに思はれた。彼は多くの友達を持つてゐた。初め彼は彼らの心がどれも美しいと思つてゐた。しかし、それは間違ひであつた。彼は彼らが友人の妻であらうと愛人であらうとに拘らず、總ての女を自分の自信の材料にして了ひたがる賤しさを持つてゐるのに氣がついた。彼はさう云ふ種類の男を失ふと云ふことよりも、妻の心の對象を完全に自分一人に向けしめやうとすることにより多くの幸福を見出すであらうと思つてゐた。しかし、それも彼の間違ひであつた。彼はもう友達を失ひたくはなかつた。總ての友達を失つてまでして完全に妻を所有しなければならないそれほど、妻の何處に價値があるのか分らなかつた。以後、彼の放蕩は始つた。彼の放蕩の種類には三種あつた。一つは散歩することである。街路へ出ると彼は到る所で美しい娘達に行き逢つた。彼女らに逢ふと云ふことは、これからさき自分の妻になる新鮮な娘が無數にあることを彼に感じさせた。この感じは彼の心にある活氣を起こさせた。そして、彼が妻から苦痛を

受ければ受けるほど、そのときに限つて妻の與へる苦痛は彼にとつて却つてなほ都合よくなつて來た。何ぜなら、彼は新鮮な妻を求める理由の説明を一層自分で自分に向つてすることが出來たから。今一つはカッフェーへ出入することである。しかし、ここでは彼は、彼の傍で妻や子供のありさうな多くの男達が女に戯れかけてゐるのを見せられた。これは彼の浮き上らうとする活氣を叩き壞して時にはなほ彼を憂欝へ落し込んだ。が、たゞ彼にとつていいことは、さう云ふ所にゐると云ふことは自分の放蕩心を見詰める彼の氣持ちが、妻の放蕩に對して幾分かの寛大さを持ち得られる心の養成に役立つた。さて最後の一つの放蕩は最も彼を喜ばせ、彼の苦痛を慰めるには一番効果が多かつた。それは、彼の夢の間に間にも浮き上らうと絶えずするあの本屋の主婦に逢ひに行くことであつた。

彼は本屋の主婦から商法的な手段や愛戀的な媚弄を少しも感じなかつた。そればかりではなかつた。假ひ彼の場合が彼でなくとも、彼女はそのあるがままの優美さをもつて、絶えず他の多くの客に接してゐたのにちがひなかつた。しかし、彼から見たとき、彼女のその彼に示す優しさは彼が最初に彼女を見たときと少しも變らなかつたのは勿論、それは初めから特に彼ひとりの性質にわざわざ適合させて作られたかのやうに溫く柔かに香氣を持つて迫つて來た。もつとも時には彼女とて至極靜な媚びを匂はせて彼を迎へることはあつた。しかし、それは彼の妻が近づく男達の面々に振り撒くそれのやうに、對象に比例して變化させたりまたその効果を充分に意識してするものとは違つてゐた。それはしとやかな淑女の趣きで、自身の友人を迎へて流す優雅なほのめく氣品をもつた靜かな靜かな微笑であつた。彼は彼女に危險な欲望を少しも感じなかつた。そればかりではなかつた。彼女の前へ出ると云ふことは、寧ろ彼の總ての欲望を壓伏さ

せ、彼の憂鬱な胸に一輪の穢れぬ花を刺すやうに何か朗かな高々とした響きを傳へて來た。しかし、彼はもう彼女に逢ふことが出來なかつた。あの妻を持ちながら、どうしてあの主人は怒るのか？「それは間違だ。」と彼は云ひたかつた。が、彼はあまりに行き過ぎた自分を考へた。もし主人が妻を愛してゐるならゐればゐるほど、あれほども行き過ぎた自分に疑ひを持つ主人の方が正しいと彼は思つた。が、また一方主人の前で、主婦が何か自分に好意のあるらしい氣持ちを現したのかも分らないと彼は思つた。すると、遽に、今迄と全く打つて變つた喜びが、彼の胸の中ですつくと立ち上つた。もしそれが事實であるならば、もうそれだけで澤山だ、と彼は思つた。彼は自身にとつてまことに尊いその喜びを少しでも自分の胸から失ひたくはなかつた。彼は誇らかになつた。生々とした。今は彼は堂々と妻の面前へ突き立つてみたかつた。俺は勝つたぞ！締めたツ、と彼は思つた。が、ふとそのとき、突然、妻の辰子が今自分の感じてゐるのと同じ種類の喜びを、絶えず多くの男達に感じさせて來續けたのだ、と彼は思つた。彼は叩かれた。彼の今感じた喜びは、忽ちまた動きのとれぬ憂鬱な氣持ちの中へ突き落された。妻が一層妻だとは思はれなくなつて來た。彼は本屋の主人が氣の毒になつて來た。もう行くまい、と彼は決心した。行く手の苦い生活がまた茫漠として擴つて來た。ただ妻だけがその中で自由に延び延びと美しく踊つてゐた。そして、彼はいぢけて嫉妬深く、鼠のやうに憂鬱に妻の前で首を縮めて竦んでゐた。彼はかん子に逢ひたかつた。今は彼は彼女に縋つて立ち上りたくなつて來た。もしもかん子がまだ彼を愛してゐるなら、彼は今直ぐに故郷へ歸つて行つてもいいとさへ思つた。しかし、妻は誰と今夜逢つて來たのか？何を彼女はして來たか？それを思ふと、彼はもう溜らなかつた。彼は机の上へ額をつけて眼をつむつた。

暫くして、彼の後の襖が開いた。彼はその方を向かなかつた。

「あなた。」と妻は云つた。

彼は默つて顔を上げた。

「お眠みになつては。ねえ。」

「寝るといゝ。」

妻は默つてゐた。彼はパイプに煙草を詰めた。

「何を考へてらつしやるの？」

彼は答へなかつた。

「あたし、あなたの考へてらつしやること知つてゝよ。」

彼は妻の美しさを驗べるやうに顔から足さきの方まで冷たく見降した。

「そんなに見ちやいや。」

妻は彼の傍へ寄つて來て彼の背中を膝で暖く挾みながら彼の頭を抱いた。

「ね、おやすみなさいな。ね、ね。」と妻は云つた。

彼は默つてむつゝりとしてゐた。

妻は彼の髮に頬を擦りよせて、彼の頭を抱いたまゝ靜に彼を左右に搖り始めた。媚びてゐる、と彼は思つた。彼は妻の動かすまゝに搖られてゐた。彼には妻のその優しさが、彼女の此の夜の秘めた行爲の辨償のやうに思はれた。

「止せ。」と彼は云つた。

妻は急に彼を放して立ち上つた。そして、默つてまた自分の部屋へ戻つて行くと強くぴしやりと襖を閉めた。

6

市場(マーケット)の青物店の店頭から無花果(いちじく)や葡萄がなくなつていつた。新らしい箱にはそれらに代つて柿が並んだ。街々の影の傾きが方向を變へて冷たくなつた。彼は殆ど終日をあてどもない散歩に費してゐた。彼はもう本屋へは行かなかつた。彼は寒さを感じる夏の草葉のやうにだん／＼と萎れて來た。

或る晴れた日、彼は散歩から歸つて來ると玄關に妻宛になつた封書が一枚表を向けて落ちてゐた。彼はふと何心なくそれを拾ひ上げやうとした。すると、急に彼は不安な氣持ちに胸を突かれた。彼は延ばした手を引つこめて上から封書を見詰めてゐた。

「男からに違ひない！」

疑ひが書かれた見馴れぬペン文字から閃めいて來れば來るほど、彼はその封書を裏返して差出人の名を見る勇氣がなくなつて來た。見ても仕方がない。譬へそれが男から來た戀文であつたとしても男の名は書かれてなからうしまたよしそれがさうであつたとしても、自分は結局苦痛を一束増すだけのことに過ぎないのだ、と思へばもう彼はそれより此の場合、自分の自尊心を傷つけないためにその手紙をそのまゝにして妻に拾はせて了つておく方が、まだしも一番聰明に自分を助けるやうに思はれた。

彼は書齋へ這入つていつた。妻は彼の想つたやうに不在であつた。前からこれに似た疑ひが込み上げて來ると、彼はその苦痛から逃れるために、よく前に疑ひを起して間違つてゐたときのことを思ひ出す習慣をつけてゐた。自分の疑ひを疑ひ出すと云ふことは、疑ひの苦痛を壓へるためにはなか／＼効果があつた。が、大低の場合彼の疑ひは多少なりと

も當つてゐたのでその自分の判斷を明確にするだけでも、また彼には二重に骨の折れる仕事であつた。此の時も彼は困つた。

暫くして、妻は案外早く歸つて來た。彼は妻がその手紙のことについて彼女から何か云ひ出すかと思つて待つてゐた。が、彼女は彼の部屋へは這入つて來ずに何ぜだか箪笥の引き手をいつまでも鳴らせてゐた。彼はもう自分の氣持ちをそのまゝ持ち耐えてゐることが出來なくなつた。

7

「おい。」
「歸つてらつしやるの?」
彼は默つてゐた。妻は彼の部屋の襖を開けて中を覗きながら、
「もう直ぐ御飯にしますわ。」と優しく云つた。
その優しさが尙また彼の疑ひを强め始めた。
「お前に手紙が來てゐただらう?」
「ええ。」
「誰からだ?」
「お友達から。」
「俺にか?」

「私の。」

「お前、何處へ行つてたんだ？」

「あのう　お味噌を買ひに行つてたの。あのね　そりや面白かつたのよ。あのね。あなた　あのクリーニングの所ね。變な青いカーテンがあるでせう。あそこで鉢卷をした按摩が。」

「嘘をつけ。」

「本當よ。さうしたら。」

「手紙のことだ。お前は嘘より云へない奴だ。」

「ほんと、お友達からよ。見せませうか？」

「お前にどんな友達があつたんだ？」

「そりや私にだつてあるわ。」

「見せろ。」

彼は手を差し出した。妻は子供らしく拗ねるやうに、

「いや。」と云つて直ぐ次の部屋へ行かうとした。

彼は立ち上つた。妻は逃げるやうに足早やに歩きながら顔だけ一寸振り向けて、

「破いちやつたの。だつてさ、いけないことが書いてあるんですもの。」と巫山戯た笑ひを浮かべて云つた。

彼は妻を追ふことをやめた。妻は火鉢の傍へ崩れかかると、下顎をふくらせた横顔を少し赧らめながら故意に默つて落ちつき出した。それはとても手出しのならない不貞な感じであつた。彼は部屋の中央に突き立つたまま妻のその横顔

を睥んでゐた。と、突然、ごそりと身が落ち込んだやうに力が脱けた。
「まア見てくれ。これが俺の妻なんだ！」と彼は誰かに云ひたかつた。口の紋めやうがないと云ふやうに、彼は口を開けたまま冷やかに妻の落ちついた様子を眺めてゐた。
「もう駄目だ！」
　彼は表の方へ飛び出した。
　彼は俯向いてただ無闇にせかせかと歩いてゐた。スカートを蹴る高い靴が見えた。馬の蹄がちらついた。塵埃の中で自動車の太いタイヤが廻つてゐた。と、坂の中途でカーブして來た自動車が横さまにぶつ倒れた。
　妻の相手は誰であるのか。一度はさう考へると放れていつた友人の顔が次ぎ次ぎに浮んで來た。しかし、もうそれは誰であつても同じであつた。彼は妻から放れやうと決心した。決心するとそれまでに放れていつた友人らに對して濟まないと思ふ氣持ちがしきりに動き出した。彼らにとつた自分の態度は、盡く不貞な妻に原因してゐたとは云へ所詮また皆自分の呪はしき猜疑からであつたのだ。と彼は思へば思ふほどその妻に今迄粢きつけられてゐた自分の身體が　穢れた壺のやうに穢れて見えた。彼は自分に心から腹が立つた。が、とにかく今はそのままではゐられなかつた。何かしなければならない。酒を飲まふ。いや酒では駄目だ。何か素敵な力のもので自分の頭を叩かなければ！
　ふと彼は本屋の方へ行かうとしてゐる自分に氣がついた。自分の苦痛を救つてくれるのはただそこだけよりないと彼は思つた。ただ行けばよい。ただ彼女の顔を見れば良い。主人と主婦との不和を今以上に増すやうなことは斷じてしない。――家から離れて行けば行くほど彼の氣持ちは明るくなつた。暮色が濁つた空氣の中に擴つてゐた。露店が荷車の上から降ろされた。活動の幟は白亜の木戸口で色めき出した。エプロンの女が急がしさうに彼の前を横切つた。鳥屋の

大きな俎の上には裸體にされた鷄の死體の群れがだらりと首を垂れてゐた。その前で料理人は手捲つた。庖丁が鋭く暮色の中で閃めいた。街は雜閙し始めた。彼は日が全く暮れるまで本屋の方へは行きたくはなかつた。彼の一番恐れたのは本屋の主人に見られることであつたから。彼は氣がつくと呉服屋のショウウインドウの前に立ち停つてゐる自分を知つた。何を覗いてゐたのか。彼は自分でも分らなかつた。ただ彼の幸福な日に、妻に似つかはしい着物の縞柄を見定めるため絶えずさうして覗き歩いた日の彼の習慣が、・何心なく今もふと殘つて現れたのであつた。彼はいまいましさうに顔を赧らせて歩き出した。

8

彼は暗くなるのを待つて本屋の方へ近か寄つた。本屋の前の明るい通りを歩早やに通りながら主人がゐるかどうかをみるために、靜かにちらりと中を覗いた。主婦はひとりぼんやりとした表情で表のどこか動かぬ一點を見詰めて坐つてゐた。小し衰へが見えてゐた。彼は彼女が彼にまだ氣附かぬさきに一寸頭を下げて通り過ぎた。通り過ぎると彼は彼女が自分を認めるまで何ぜ大膽に彼女の視線を見屆けやうとしなかつたのかと後悔した。暫く行つて彼は後を振り向いてみた。すると、丁度そのとき、彼の方を見たまま彼女は店頭へ顔を出した。

彼を見附けると同時に彼女は馳け出して來たらしかつた。が、彼はまたくるりと前方を向くと周章てて歩き出した。何ぜさうするのか、彼は自分でも自分の腹の蟲が分らなかつた。また彼は脊中に彼女の視線を強く感じながら、振り向いてまいものかどうかと迷ひつつ一方何ぜ彼女が自分の姿を見ると同時に馳け出して來たのかと考へた。彼は喜びのシヨクを受けた。が、彼女の出て來たのは賴んでをいた『稻妻』の出たのを知らせるためかもしれないと思つた。彼はま

た彼女の方を振り向いてみた。彼女は矢張り彼の方を見續けたまま立つてゐた。彼は自然に頭を下げて會釋をしかけたが、傍を通る人々に氣がひけた。そのまま下げかけた頭を高く支へたまままた前方を見返つて歩いていつた。もし「稻妻」が出たからだとすれば、何か彼女は一言相圖をしさうなものだつた。すると、また彼は彼女の方を向いて見なければならなかつた。が、脊後を向いてみて、彼女のゐなくなつてゐるときの淋しさを想像すると振り返る氣持がまたなくなり出した。と、不意に、彼は自分の歸つて行く先に潜んでゐるあの暗い空氣を思ひ出した。

「ああもう、あれには溜らない。」と彼は思つた。

彼の歩みは弛んで來た。

「本屋へ行かう。彼女は俺を愛してゐるんだ。それに、何をぐずぐずしてゐるんだ！」

彼は自分を追ひ立ててみた。が、彼女の良人の苦しげな顏が浮び出すと、もう彼の勇氣は振はなかつた。いかに考へても、本屋へ行くと云ふことは罪な氣がした。自分が苦しめられてゐるが故に、その苦しみを同じ苦しみに苦しめられてゐる者へ塗りつけやうとする。さう云ふことは絶對に赦されてはならないことだと思つた。しかし、ただもう彼は考へることに倦き倦きとした。ただもう苦痛であつた。彼は自分の絡まつた氣持ちを一刀のもとに斬り落したかつた。彼は狂暴な勇氣を自分の上に投げつけたいばかりに叫び出した。

「よしッ、俺は！——苦しむ奴は苦しむがいい！」

彼は本屋の方へ引き返さうとした。が、足が動かなかつた。

「行かう。」と彼は云つた。

が、矢張り彼は立停つたままであつた。

「行くぞッ！」

彼は本屋の方へ歩き出した。彼女の姿はもう店頭から消えてゐた。しかし、彼は本屋の方へ近づくに從つて不可思議な力を感じて來た。それは野蠻に潑溂とした盲目的な進軍であつた。かうなると、彼は何をし出すかいつも自分が分らなかつた。

彼はまつしぐらに轉げてゐるやうな氣持ちで本屋の中へ這入つていつた。主婦は一人の客に釣錢を渡さうとして手を延ばしてゐた。客が出て行くと彼女は何心なく彼を見た。が、直ぐ彼女はそのまま火鉢の傍へ坐ると默つて眼を自分の膝へ落した。

彼は突き立つて主婦の顏を見詰めてゐた。彼女は青ざめた顏を俯向けていつまでも默つてゐた。彼は何の涙か涙がにじんで來た。

「もう僕は參りませんよ。」と暫くして彼は云つた。

彼女は初めて顏を上げた。彼は彼女の眼が潤んで光つてゐるのを感じた。

「すみません。」と彼女は小聲で云つて心持ち頭を下げた。

「郷里へ歸らうと思つてゐます。」

彼がさう云ふと、彼女の眼は少し大きくなつた。

「またいらつしやるんでございませう？」

「御主人はお宅ですか？」

「いいえ、あのまたいらつしやるんでございませう？」彼女の顏は赤くなつた。

「分らないんです。御主人にはすまないと思つてゐます。」

「いえ、さうぢやございませんの。そんなことは何んでもないんですのよ。お郷里の方に何かお變りがあつたんですか？」

「別にないんです。御主人はお宅ですか？」

彼はさう云ふと自分の口が氣持ちと全く放れたことばかりを云つてゐるのを知つた。

「御免なさい。」

突然彼は頭を下げて歸らうとした。

「まア。」と云つたまま彼女は會釋も返さずに彼の顏を見詰めてゐた。

彼は直ぐ表の方へ出ていつた。

彼は本屋から遠ざかつて行くに從つてだんだん昂奮が醒めて來た。事實自分はもう行くまいと思つてゐるのか、事實自分は郷里へ歸らうと思つてゐるのか。さう考へると彼は初めてもう行くまいと思ひ、郷里へ歸つてみやうと思ひ出した。が、それは彼女の前でもう來ないと云ひ郷里へ歸ると宣言したがためではなく、それとは全く獨立して、此の時初めてさう云ふことに氣づいたがためばかりに湧いて來た氣持ちであつた。が、彼女の前でさう云ふことを明瞭に宣言したと云ふのは、まだ彼女に逢ひたがらうとしてゐる自分の心に強く自然と釘を打ちつけて了つてゐるのを發見した。彼は急に力が拔けた。

「いやいやもう行くまい。彼女が自分を愛してゐるからと云つて、自分が彼女を愛してゐるからと云つて、ただそれだけで、彼女を奪ふ理由や口實にはならないぢやないか。」

それなら一體何が理由となるのか。彼にも分らなかつた。たださう云ふことのみが他人の妻を奪ふ理由や口實となる資格を充分に備へてゐるものとは思へなかつただけである。さう云ふ理由のもとに行動された場合の他の多くの者の苦痛、それの計算を忘れてはならない。と彼は思つた。彼は自分をかうして謹嚴な位置に再び置き戻したかつた。人間とは計算する動物である。計算とは整頓を意味し發展を意味するものである。計算のない熱情は賭博である。賭博は不安定な運命であるが故に罪惡であると彼は決論した。しかし、彼はその裏からまた本屋の主婦に逢ひたくなつた。が、今さきに彼女の示した露骨の愛情を思ひ出すと、もうこれ以上本屋へ行くのは主人にとつて氣の毒でならなかつた。

「お前までが何ぜそんなことをしてくれたのだ。お前には立派な良人があるではないか。」

さう彼は頭に浮んで來た本屋の主婦に叱るやうに云つた。が、自分のために、妻を情婦呼ばはれにされた本屋の主人を想ふと、もう彼はたまらぬ憂欝へ落ち込んだ。

「清朗なものはないか、何か正しく素晴らしい快活なものはないか。もう御免だ！」

彼は頭を振り立てて獅子のやうに吠えたかつた。」

9

先づ何はさてをいて郷里へ歸らうと彼は思つた。それに郷里にはかん子がゐた。彼とかん子との愛が同じ程度の深さにまでなつてゐながらもなほ二人は默つてゐた或日である。村の附近へ都會から來た有名な活動俳優の一座が場面を撮しに來たことがあつた。そのとき彼は最初からかん子もそれを見に人々と一緒に行つてゐるに相違ないと思つて出ていつた。彼の行つたのはかん子を見るためにいつたのだつた。彼女は矢張り人々の中に交つてゐた。しかし、かん子は

の來てゐることを知りながらも、一座の中で一番優れた役者の顔ばかりを、殆どその男の眼潰しになされた欠呻一つにさへ牽引されてゐるかのやうに絶えず恍惚として見惚れてゐた。そればかりではなかつた。彼は胸を慄はせて彼女が自分を見るかと絶えず待ちかまへてゐたにも拘らず、彼女は少しも彼の方を見なかつた。以後、彼は彼女を愛することをやめて了つた。それは彼の受けた最初の痛手であつた。その春彼は學校を卒業した。彼はもう郷里へは歸らなかつた。一友人の通知によつてまだかん子は不思議に誰とも結婚してゐないと云ふことを彼は知つた。どう云ふ理由かそれは分らなかつた。が、とにかく彼はかん子と結婚してゐる自分の生活を想像してみる日が日に増し多くなつて來た。少くともそれはいかに惡くとも、今より幸福であつたにちがいないと彼は思つた。彼はかん子にいま一度逢ひたかつた。良人のある木屋の主婦に放蕩してゐるよりも、同じするなら狭量であつた自分の行爲を謝罪する氣持ちで、徹底にかん子に放蕩してみたくなつて來た。かん子が彼に妻のあることを知つてゐるかどうかはしかし疑問であつた。が、このことは今の彼にとつては問題とはならなかつた。ただ彼は放蕩することが出來ればよいのであつた。放蕩した結果から起る樣々なことは總てかん子にとつていいやうにはからへば濟むわけであつた。その點良人を持つ木屋の主婦を誘惑するよりもいくらかは氣品があつて赦された。

その夜彼は自分の家へ歸つても妻の顔を見ないやうに氣をつけた。今迄の經驗から妻に憎惡を感じてゐるときでさへ、妻の顔を見ると忽ち彼の決心は鈍つて來た。殊に部屋を一つにして寢ることはいけなかつた。

彼はひとり机の前に坐つて最近手を入れた自分の原稿を見てゐた。彼の目下着手してゐる論文の題は「無性生殖個體の決定素と突然線」と云ふのである。すると、彼の開いてゐたアオミドロの葉綠體に含まれたプロトプラズムと日光の相關係數を示した突然線の上へ、ぽたりと一通の手紙が落ちて來た。見ると彼の後ろに妻が立つてゐる。彼女は何か怒

つたやうな顔をして彼を見てゐた。」

「これが何だ？」と彼は手紙を拾ひ上げて云つた。

「見てごらんなさいな。」

妻は自分の部屋へ這入つて了つた。彼は妻の落した手紙を見ると、それは彼が前に彼女に與へた古い愛の手紙であつた。

われ君を愛すれど君われにまたも云ふ。
「君われを愛せず。」と。
われ君を愛すれば君に怒るなり。
されど君われの心を知らずして
さめざめと泣き給ふ。
われ君を愛すればかく默々として靜なり。
君われに問ふことなかれ、
われの心かくも靜に君を愛してやまざれば。」
ああわれらかくして老ゆるなり。
されど君知り給ふてかわれは悲しまず。
われわが心動けと願ふ日はあやまてり。
ああされどわが心泉の靜なる井戸のごとくに。」

彼はその自分の古い手紙を横に投げた。手紙は顯微鏡の足を叩いて壁際へ落ちた。彼は今妻の傍へ行つて跪拜きながら彼女の足へ接吻してゐる自分を想像した。

「愛してくれ、愛してくれ。」もしさう云ふことが出來たなら、云つた瞬間、自分は舌を嚙みきつて自殺するだらうと思つた。しかし、出來ることなら、彼はさう云ひたかつた。

10

次の日から彼は自然に郷里へひとり歸れる氣持ちの來るのを待つてゐた。が、妻の方から彼に別れ話を持ち出さないまでは、彼から妻にそれを切り出すことが出來なかつた。それには決斷心の乏しい彼の性質も多少手傳つてゐたにはゐたが、それよりも、彼にはまだ妻から放れきれない種々な感じを多分に持つてゐたからだつた。そればかりではなかつた。直ぐ近くに本屋があつて、いつでも見たいと思ふとき本屋の主婦を見に行き得られると云ふ手輕さなどが、浮き足でゐながらもなほ尻子を廻つて遇圖遇圖しさうな日を彼に送らしめる多くの原因であつた。しかし、彼はもう本屋へは行かなかつた。彼は本屋の主婦に愛されてゐると思ふことによつて、ともすると自信を得たがる自分の氣持を叩きつけてやりたかつた。さう云ふ生活の續いてゐた或る日、三島が郷里から上京して來た。三島は重い荷物を持つて驛から直ぐ彼の處へ尋ねて來た。三島と彼とは學生時代からの友人であつた。

「まだ後一年だね。」

「一年だ。」と三島は云つた。

三島は在學中兵役にとられていつた。卒業するには後なほ一年學校生活をしなければならなかつた。

もう此の頃は生活に興味が全然なくなつたよ。かうぢやなかつたんだがね。」

「今頃それでは困るぢやないか。」と三島は云つた。

「困る。困つたものだが。」彼は急に自分が生活に興味がなくなつたと云つたことを羞しく思つた。さう云ふことを口にする年でもなかつたからだ。

「何を今やつてるんだね？」とまた三島は訊いた。

「生物學を少しかぢつてゐる。しかし、もう倦きた。突然變異つて云ふことが一寸面白かつたんだが、一向に俺の性質は突然變異もしなさうだ。しなければ何にもならない。」

「變轉（ムーテーシヨン）か。」

「うむ。夢を見てゐる間がいゝので。このままではどうも仕方がないと思ふと面白くないよ。それより夢を見るなら天文學の方が良ささうだね。宇宙が十三萬あるつて云ふが、太陽が十三萬あると思ふと面白くなつて來るぢやないか。どこから割り出したものか一寸興味があるね。兵隊さんに天文學でもあるまいが。」

「子供はまだかね。」

「まだだよ。」

「太陽が十三萬もあるつて勘定しながら子供を産むのも愉快ぢやないか。」

「馬鹿だね。」

「いや、そりや軍隊よりや愉快だよ。」

「軍隊の方がいゝ。」

「君、あの臭い飯を食はされて見給へ。」

「だつて勇壯活潑だ。」

「何が勇壯であるものか。」

「いや、さう云ふ感じだけでも旣にいいんだ。殊に軍隊なんかは絕對に他人から動かされるんだからなほ吞氣だよ。」

「つまらないや。」

「軍隊へ入つたものはたいていそんなことを云ふが、誰か一人位、立派に服從して來た心理から何か大きな哲學でも引つ下げて出て來る者はないかね。服從出來れだほんとにいい。」

「そりや君が行つてみないからだよ。」

「そりやそうだ。だが、何事にでも自由であつて、然も何事にでも自由であり得ないと云ふ世界の方が僕らにとつては困り物なんだ。」

「君は贅澤なことを云つてゐるんだよ。」

「だけど、三度牢獄へ這入つた者は、四度目の入獄が待ち遠しいつて云ふぢやないか。」

「そんなことは分らないよ。君なんかは、まアまア一度位い行つて見るべき所だね。」

「さうかね。ぢや行つてみたくはないが、とにかく僕の生活がいけないにちがいないが、かなり長い間生きてみてゐるのにこれこそ自由なものだと感じたものは、高々あつて吐き出す息ぐらいなもんだ。大體自由なんか望んでゐる間はまだ雛鷄なんだね。自由なんか望む奴は。」

「すると俺も雛鷄か？」

「不服かね？」

「不服だね。」

「軍隊へ入つて來たから君なんかそんな贅澤を云ひ出すんだよ。今に君、自由の爲に不服を云ひ出すに定つてゐるんだ。」

三島は馬鹿らしさうに默つて笑つてゐた。

妻が暫くして野菜を下げて這入つて來た。

「まア、三島さん。」妻は驚いたやうに立つたまゝ云つた。

「また、お邪魔に上りました。どうぞ宜敷。」

「眞黑におなりになつたのね。」

「さうですか。何か早く白くなる法がありませんか。」

「黑砂糖を顔にお塗りなさいよ。」

「なほ黑くなりさうですね。」

「今、何處にゐらつしやいますの。」

「ここですよ。」

「まア、いやなかた。」

「いや、今ここへ驛から直ぐ來たんですよ。」

「あら、さうでしたの、それは失禮いたしました。」と妻は云ふと、そこへそのまま坐り込んで初めてあらたまつた挨拶をし始めた。

「ほんとうに御無沙汰いたしまして、お變りもございませんで何よりでございました。」
「いや私こそ。」三島も輕く頭を下げた。
「君、下宿屋は嫌ひだつたんだね？」と彼は訊いた。
「ああ嫌ひだ。」
「兵隊さんになつてもまださう云ふ贅澤を云ふかね？」
「ああ、なほ云ふよ。」
「私の所にゐらつしやればいいぢやありませんか。」と妻は云つた。
「うむ、部屋が君、空いてるんだよ。その代り君だつたら高くとるよ。」
「さうなさいましな。」
「ずぼらでなけりや厄介になりたいんですがね。」と三島は云つた。
「もう私馴れてをりますわ。良人の無精たらございませんのよ。」
「ぢや二人も揃へばなほお困りでせう。」
「あら！」と、妻は云つた。

彼は妻の顏を見なかつた。が、そのときの誇張した妻の驚きの中から誘惑的な媚びの表情を閃めかせてゐるのを感じることが出來た。彼は心にある寒さを感じ出した。すると、今頃まださう云ふことに脅迫されると云ふ自分に彼はもう腹が立つた。

「君、今頃素人下宿なんか見つからないよ。僕の所にゐればいいぢやないか。ね、さうするがいい。此奴が少々不味い

ものを食はすか知れないが。」

彼はさう云ふ自分の言葉が口から何の障りもなくすらすらと出て來たのが愉快であつた。

11

空風が二日吹き續けて漸くやんだ。彼の妻は部屋の中を掃いてゐた。彼は窓の敷居に腰を下ろして郊外の通りを眺めてゐた。駄馬が首を振り振り田舍の方へ歸つて行つた。靜に垂れてゐた蕎麥屋の暖簾が跳ね上つた。女の顏が現れた。どこかに皮肉な微笑を浮べてゐるのが、うまく瞞してやつたと云ふ顏である。さう彼には見えた。

「まア、この埃り。」

後ろで妻の辰子が言つた。彼はふとまた妻の顏を見やうとした。が、やめた。朝から一度眺めたきりだと彼は思つた。見るともう彼は苦痛であつた。

「あなた、いけないわ。そんなところにゐちや。埃りがかかつてよ。」

彼は默つてゐた。妻が自身の顏を彼に見せたくて云ふのが分つてゐた。

「さアさア。」

後ろで妻の箒の音がとまつた。彼は故意に窓際の鉢植に擴つた八つ手の葉指を算へてみた。

「いやね、この埃り、御覽なさいよ。」

「うるさい奴だ。」彼は強く云つて妻を睥んだ。

妻は唇をひき締めた。が、彼が外にまた眼を向けると、彼女は掃くのをよして勝手の方へ出ていつた。

彼は妻の復讐を待ち構へた。いづれするのは定つてゐた。彼はその妻の復讐に復讐する方法を考へやうとした。しかし、それには最早や最も悲壮な準備が整ふてゐる筈だつた。いつでも來い。さふ思ふと彼はまた落ちつき出した。自轉車を片手に持つた小倅が足駄を榎の株に叩きつけてゐるのが見えた。

暫くして三島が彼の部屋へ這入つて來た。

「Kまで一寸行つて來る。部屋をひとつ頼んでをいたのでね。」と三島は云つた。「

「丁度風がやんだ所だ。君、風がひどいとね、あそこの通りで馬の鼻へぶつかる人が澤山あるんだよ。

「なぜだ？ああ眼が見えなくなるからか。全く埃りがひどいね。」

「いつだつたか、トタンが電線へひつかかる。鰯開きが勝手元から飛び出て來て大道を濶歩する。傘が吹き飛ばされる、それはそれは滑稽なんだよ。」

「はははは、そりや愉快だね。」

「全く。」

「鰯開きが濶歩するか。はははは。」

「さう云ふことに面白がつてはいけないよ。」

「いや、なかなか面白い。何か入用な物はないかね、出たついでだ。」

「さうだね。何んでもいい物がいい。」

「三島さん。お出かけなの？」と、勝手の方から辰子の元氣の良い聲がした。」

彼女はタオルで口を拭きながら障子を開けて這入つて來た。」

「何處へお出かけ？」

「Kまで一寸行つて參ります。」

辰子は眼を細めて三島を見ながらいかにも情愛の籠つた低い聲で、

「さうお、お遲くなるんでせう？」と云ふと、愁ひと淋しさをその傾けた首の曲線に浮き出させた。

「今日は早く歸つて來ますよ。」

「どうだか分らないわ。あなたのことだから。」

「もう少し信用して頂きたいものですね。」

「信用しますから、早く歸つていらつしやいな。ね？」

彼は妻がいよいよ復讐をやり始めたと識ると、彼女のその復讐を受けつけないために、またいつものやうな快活さが自分から飛ぶ出しさうなのを感じて來た。

「茶でも飲んでから行くといい。おい、茶を煎れないか。」と彼は云つた。

「もうお飲みにならないわね。早く行つて、早く歸つて來て頂戴な、その方がいいわ。」

「お茶をいつぱい飲みたいものですね。」と三島は云つた。

「いやよ。あげません。行らつしやらないならあげてよ。家にゐらつしやいな。ね？」

「むづかしいなア。」

と三島は云ふと周章て玄關の方へ出て行つた。

「あら、行らつしやるの。またどつかへお廻りになるんでせう。」

辰子は袖口を胸の上で合せながら、良人を送り出すやうに三島の後からついて出た。彼の顔はひとりになると澁り出した。

「行つてらつしやいませ。ほんとうに早く歸つて來て下さいな。私、淋しいんですもの。ね。」

玄關の方から辰子の親しげな聲がした。もう赤の他人だ！と彼は思つた。

暫くして、妻が彼の部屋へ戻つて來た。彼は落ちつき拂つて急須に茶を入れると妻を見た。

「どうだ。茶でも飲まないか。」

「ええ、ありがたう。」

妻は靜に彼の眼を避けて窓際へ立つた。

「もうお仕舞ひよ、だけど、私もういいの。」

と、彼女のその後姿が云つてゐた。彼に多くの歡樂と苦痛を飲ませた後姿が。間もなく、妻は小さな聲で外を見たまま唱歌を唄ひ出した。ジョセランの子守唄だ。彼は妻の落ちついたその態度に腹立たしさが燃え上つた。彼は握つた急須を妻に投げつけやうとした。が、急に彼の怒りはへし折れてたまらぬ淋しさの中へ沈沒した。彼は毅々しく立ち上ると自分の書齋へ這入つて行つて寢椅子の中へ倒れ込んだ。妻の唱歌がまだ呪はしく聞えて來た。その歌の調子には、高音を殺して盛り上る情熱を下へ下へと壓しつけてる重苦しい響が流れてゐた。

「むごき運命

身にあふれて

なれと眠る

呪はれの夜
胸の憂ひ・
夢にあふれぬ
祈らばや
搖ぐ星のごと………
……………

12

夕暮になるのが間もなかつた。彼は日の暮れるのを待ちわびた。日が暮れたなら、長らく行かなかつた本屋の方へ一度行つてみたかつた。彼はその事を朝からの樂しみとしてゐたのであつた。彼は書齋のカーテンを開けて窓いつぱいに夕日を部屋の中に入れてみた。綠の茶園のカーブの上に牧場が見えた。半白の牛の群が黄色い草の上に立つてゐた。乳搾りの若者が桶を擔いで木柵の横を下つて來た。教會の赤い圓頂(ドーム)が遠く低い森の中で夕日を受けて輝いてゐた。彼はふと何ぜともなく自分の老母のことを思ひ出した。自分はまだ一度も孝行をしたことがないと彼は思つた。それはいつもになく彼には淋しかつた。

「あなた、お湯へいらしつて?」

隣室から辰子の聲がした。彼は默つてゐた。妻は小さい金盥を持つて彼の部屋の襖を開けた。

「ね、いらつしやらないの?」

「うむ。」

「私、行つて來てよ。よくつて？」

妻は彼の返事も待たず玄關の方へ出やうとしたがまた振り返つた。

「三島さんはまだお歸りにならないでせうね？」

彼はもう妻が憎かつた。答への代りに、死ね、死ね、と胸の中で叫んだ。

「きつとまたどつかへ廻るんだわ。御飯が澤山あまつてるんだけれど。」

間もなく妻の玄關で下駄を履く音がした。

「あなた、一寸七輪を見て頂戴な。御飯がしかけてあるのよ。ね、忘れちやいやよ。」

彼は僅か懸け物の煮る時間を利用してまで湯に行く妻の心が、彼を意識してよりも三島の歸りを頭に描いて出て行つたのを感じると、

「阿奴は敵だ！」と彼は云つた。

彼には湯上りの妻の美しさが何よりも恐ろしかつた。もつと妻が美しくないならばもつと妻を愛することが出來るにちがいないと彼は思つた。

彼は妻に纏りつかうとする自分の感情を眼界の風物へ透明に放散しやうとして骨折つた。茶園、牧場、半白の牛の群れ、圓頂、森、夕霧が牧舍の屋根の上に煙つてゐた。やがて、彼の心は時の流れを感ずるほど靜に窓から外へ溶け込んでいつた。牛の脊中が小屋の中へ動き出した。圓頂（ドーム）の避雷針が最後の閃きをきらきらと空中に放つてゐた。森はその下で默つてゐた。今、多くの人々はどこかで死んでゐるにちがいない、と彼は思つた。」

三島は眼に疲勞の色を浮べて歸つて來た。

「やれやれ。どうも思はしく行かないものだ。」と三島は云ふと彼の横へごろりと長くなつた。

「どうだつた?」

「先手が一人あるんだつて。明日ぢやなきや分らないんださうだ。」

彼は三島の顏を見てゐるとかすかな恐怖を感じ出した。實際彼は此の頃、勝手口から聲をかける御用聽きの小僧にまで威脅されてゐるやうな氣持ちを感じた。道を歩いてゐるとき、何かを物色してゐさうな男の眼に行き逢ふと、彼は心にある壓迫を感じ彼らの眼が傍にもゐない辰子を搜して動き廻つてゐるやうに思はれた。夜中時々彼は眼が醒めた。するとその時、柱時計の振り子の音が跛足を曳いて辰子を奪ひに忍び寄る不思議な男の足音のやうに思はれた。

「俺には危機が來てゐる。辰子は、あいつは俺を殺すにちがいない。」と、彼は思つた。——

三島は疲れて默つてゐた。彼は三島の傍にゐなければならないと云ふことがだんだんに苦痛になつた。それよりも、彼は家の中にゐると云ふことが、また、三島のために今自分の靜けさを亡くして了つたと云ふことが苦痛であつた。彼の眼は衣桁にだらりと垂れ下つた妻の奔放な着返への色に突きあたつた。彼はその着物に纏る妻の匂ひを感じた。彼は押し迫つて來た肉感を跳ねつけやうとして眼の置き場に一寸うろたへた。床の香爐はカーテンを擦つて流れ込んだ夕日に虎の彫刻を浮べてゐた。ダリアの花は首を垂れて本棚の上で萎れてゐた。柱に傾斜した鏡面には絨緞の模様と標本類の崩れかかつた推積の影とが映つてゐた。

妻が湯から歸つて來た。彼は妻が彼の部屋の入口に立つたとき、最初に三島へ眼を走らせたのが眼についた。

「まア早くお歸りになつたのね。そんなに早くお歸りになつちやいやですわ。御飯の準備(したく)もまだなんですもの。お腹(なか)お空(す)きになつたでせう。」と辰子は三島に云つた。

「いや、あまり毎日不味いものを食べさせられますのでね、それで今日は一寸他所で失敬して來ました。」

「まアひどいわ。」

「あなた奈良漬がお好きですか。そこへ買つて來ときましたよ。」

「あなた、奈良漬がお好きでしたの？それならさう仰言ればいいのに。奈良漬なんかで他所へ廻られちやたまらないわ。」

「あなたは頭が悪い方ですね。」

「どうして？」

「あなたがお好きぢやなかつたんですか。僕はあなたがお好きだらうと思つて買つて來たんですよ。」

「私、奈良漬なんか食べたかなくつてよ。」

「それぢや何がお好きだつたんです？」

「私、ベビーが好きなの。」

「ぢや今暫く御辛抱なさるんですね。」

「あら！」と辰子は云ふと腰を折つて笑ひ出した。

彼は三島が妻を見ると急に生き生きとなり出したのが不愉快であつた。

「ベビーつて、あなた、御存知ないの？」と辰子は云つた。
「失敬なことを云ひなさんな。これでも大學生なんですよ。」
「あらあら。」辰子は一寸笑ひをとめるとまた新に噴き出すやうに笑ひ直した。」
「何がおかしいです？もつとも、奈良漬とベビーとはいささか變な對照ですがね。」
「ベビーつてお菓子のことよ。」
　三島は暫く默つてゐてから、
「知つてますとも、ベビーぐらひ。」と云つてくすくす自分も笑ひ出した。
「知らないんだわ。おかしいわ。」
「知つてますよ。」
「知らないのよ。奈良漬なんか食べたがる人に、ベビーなんか分るもんですか。」
「一體ベビーつて、どんなものです。」
「さうれごらんなさい。」
「手があつて、足があつて、そして。」
「嘘だわ。お腹ばつかりなのよ。お臍の代りに干葡萄かのつかつてるのよ。少し酢つぱくつて、そりやお美味の。奈良漬は附いてゐないわ。」
「もう結構です。」
「だつて、あなたは大學生ぢやありませんか。」

「君、叱り給へ。」と、三島は云つた。

彼は默つて笑ひながらうるささうに煙草を吹かしてゐた。妻はもうこれで湯上りの綺麗さを充分見せたと思つたらしく、急に忙しさうに勝手の方へ廻つていつた。

「あらあら、まア、御飯が焦げついちやつてるぢやありませんか。あなたつて何も賴めない人ね。御覽なさいな、どうしたらいゝかしら。」

ひとりさう云つてゐる彼女のその浮いた聲の調子から推しても、自分の滿足さに浸つてゐる彼女の喜びが事實とは餘程誇張してさう彼女に云はしめてゐるのを彼は感じた。

彼はもう三島と妻とがなるやうになつて欲しいと思つた。これ以上友人に騙ばかりの顏をしてゐると云ふことが絶えられなくなつて來た。それればかりではなかつた。彼はもう自分自身の不思議な病ひのために自分を滅してやりたくなつた。自分の最も恐れてゐること、妻の貞操の確實に破れること、ただそれを防禦しやうとするためにのみ全心の注意を傾けて全生涯を警戒し續けやうとするその忌忌しい自分の胸へ、その最も怖るべき運命を自分の手で塗りつけてやりたくなつた。それはいかに痛快なことであるか。もしさうした後、ぶつ倒れてゐる自分のその累々たる存在を笑殺してやつたなら、思ふ存分からからと笑ひ殺してやつたなら、それは自分の生存に對する最高の復讐だ。と彼は思つた。彼は自分を蹴りつけてやりたかつた。俺は今逃げねばならない、郷里へ歸らう。さう云ふ決心がいよいよ彼の中で堅くなつた。が、さう決心が固まれば固まるほど、また一方で本屋の主婦が強く彼を攫まへ出した。

彼が外へ出ると外はもう暗くなつてゐた。彼は直ぐ本屋の方へ歩いていつた。彼は出來るだけ種々なことを考へないやうにして歩いた。いかにも呑氣さうに飄々としてみた。健全な足の女の兒が跛足の眞似をして走つていつた。その後から貨物自動車が警官の一體を滿載して馳けていつた。警官の山は車上で黒い雄蕊のやうに突き立つて默つてゐた。後からまた一臺の自動車が馳けて來た。中では若い女が疲れてゐた。木橋は自動車が通ると慄へてゐた。彼は電車通りへ出ると右へ曲つた。數臺の電車は後ろに人間の房を搖がせて飛んでゐた。四角いその車内の中では詰つた肉體が彈動してゐた。芳烈な肉感の渦卷が次ぎ次ぎに飛んで行つた。彼の前を若い夫婦が彼と同じ方向に歩いていつた。夫の方は俯向いてゐた。妻はあたりを見廻しながら胸を張つて歩いてゐた。その妻が横を見たとき優れた容貌を持つてゐた。彼はその良人の顔も妻に匹敵するほど美しいことを心竊に願つてゐた。暫く行つたとき、その妻は良人から一寸後へ退いて良人の羽織の襟を直してやつた。

「宜しい。」と彼はひとり云つた。彼は自分の心も明るくなるのを感じた。近頃殊にさう云ふことに感傷的になつてゐる彼には、良人に貞淑な女の行爲がよしそれが譬へ些細なことでもたいへんに喜ばしかつた。

「あなたは決して自分の良人と他の男とを比較してはいけません。分りましたか。さう云ふ心を見せてもいけない。」

彼はそんな風に前に行く人妻に一言云ひたくなつたが、ふと彼は自分が他人の妻に逢ひに行くのだと云ふことを考へた。すると彼の足は鈍り出した。それはいかなる理由があらうとも、またいかに野心がないとは云へ少くとも放蕩にちがひなかつた。前に自分の所へ來た多くの男達の中で、實は今自分のしてゐるやうに妻に放蕩する目的で出かけて來たもののあつたのを感じた時、自分はどう思つたか？さうまた彼はいつものやうに思ひ始めると今は自分の反省心がもううるさかつた。圖太く本能のままに放蕩出來る者達の性格が溌剌として強く立派に見えた。しかし若し妻やそれ等の男

達から苦しめられた自分の經驗が、何かの役に立つものとしたならそれは自分だけは少くともさう云ふ事にかけては、他人を苦しめないと云ふことだけにあるのではないか　と彼は思つた。「さうだ！」と強く應へるものがあつた　此の應へには群る總べての思考力を壓しつけるだけの力があつた。彼は自分が恨めしくさへあつた。が、さうかと云つて、またこのまま自分の家へ歸らねばならないことを思ふと、もう彼の足はどちらへも動かなくなつて了つた。

「一體、俺と云ふ男は何から出來てゐるのだらう？」

彼は實際一人の女のためにこれほど苦しめられると云ふ自分がおかしかつた。彼は立ち停つたまゝくつくつ笑ひ出した。すると涙が出て來た。すると、不意に一切の雜然とした事柄が實に馬鹿馬鹿しい塊りに見えて來た。

「自分の物は自分の身體だけなんだ。」

さう云ふ感じが強く彼の胸を打つた。と、彼は身體の奥底から、何かの眠つてゐた一つの力が俄に勃然と跳ね起きたのを感じた。

「今から郷里へ歸らう。かん子に逢はふ、」

彼は直ぐ停車場へ行くために停留所の方へ歩き出した。俺は實にしつかりと歩いてゐると彼は思つた。さう思ふと、彼は自分が賴母しかつた。電車が來た。彼は澤山の人波を押し除けて眞先きに電車に乘つた。いつも人の込み合ふとき彼は一番最後に乘つた。誰か後でぶつぶつと云つた。

「何にをッ」

と云ふ調子で彼は後を振り向いた。彼は戰爭の時命を的にして突進すると云ふことが、いつも想像は出來得ても胸に感じは來なかつた。が、今はそれを感じることが出來た。百萬の敵が押し寄せて來ても、今ならただ一人その中へ躍り

込むことが出來るやうに思はれた。彼は今の腹の意力で走つてゐる自分の電車を停めてみたかつた。吊り革に下つたまま下腹に力を入れてふん張つた。が、電車は彼を乘せたまま馳け續けた。ふとそのとき、彼は自分が今、自分の手で自分の運命を展開させつつあるのだと云ふことを意識した。心の鋭い寒さの中で悲壯な感じが波を打つた。妻との過去の歡樂が美々しい裝ひで襲つて來た。彼の意力も怪しくなつた。

「馬鹿めツ馬鹿めツ、」

彼は周圍の人々の顏を見廻した。もたれかかる美しい人の柱が欲しかつた。しかし何處かへ急轉直下して墜落して行く自分の運命の奔放な線を感じると、なほ彼は自分の意力の速力に鞭を振り上げたくなつて來た。

驛へ着くと彼は直ぐ時計と時間表とを比べて見た。發車時刻まで間があるとそれだけ妻や本屋の主婦のことを考へてまたどうした拍子に舞ひ戻らないとも限らなかつた。三十分ほど間があつた。彼は直ぐ何よりも切符を買つて了ふ必要を感じた。買ふ前に、「いいか？」と自分に訊ねてみた。「いい。」と答へた。幾らか曖昧な手の出し方で切符を買つた。彼は廣い驛内の賑やかな所を撰んで絕えず往つたり來たりし續けた。此の際ベンチに腰を落ちつけるのは過去に心を引かれる危險があつた。とにかく今は手段として何より一圖に未來の華やかな幸福ばかりを夢想し續け、それらの空想をなほ豐富に刺戟する事物にのみ心を働かせてゐなければならなかつた。太い石の圓柱に支へられた壯大な圓頂の下で華やかな人波が揺れてゐた。電光は天上から傘のやうに擴がつてゐた。壁を飾つた金屬の光りが人波の割れ目の中から輝り反つてゐた。彼はふと群衆に包まれた遠くの圓柱と圓柱との間から、瞬間何物か不確な桃色の一點が閃めいたのを感じた。彼は直ぐ振り向いてその方を眺め直した。しかし、そのときは早やその桃色の存在は流れる人波の中に沈沒してゐて見えなかつた。が、それは彼には素張らしく美しい何物かにちがいないと直覺された。彼はその方へ歩いていつた。

圓柱の間を通つてアーチの扉の開いた部屋の入口に立つてみた。が、彼の眼を牽く物は何もなかつた。そのまま暫くぼんやりと立ち迷つてゐると、緋色のクツションの影から蛇の目を持つた十六七の少女が父に連れられて彼の方へ進んで來た。此れだ、此の少女だつたにちがひない、と彼は思つた。實際彼はまだそれほど美しい少女を見たことがなかつた。桃色の感じとは少女の色だ。少女のその美しい頬の色も桃色であつた。彼は直ぐ急がずに彼女の後を追つていつた。少女は改札口に竝んでゐる人々の後へ父と一緒に竝んで立つた。彼はその少女と一つの列車に乘つてゐる間の幸福を想像した。たしかにこれなら郷里まで歸り得られると云ふ自信がついた。改札が始つて人波が前へ進んだ。彼の番が來たときに彼は父と一緒に前方へ馳けて行く少女の姿を見守りながら切符を出した。そして、漸く彼はプラツトに停つてゐた後から三番目のボギーの昇降口の所でその少女に追ひついた。が、少女は列車の中へは這入らなかつた。彼女は父と一緒に窓の下で立つてゐた。彼女は誰かを見送りに來たのであつた。彼は急に力がぬけて座席を搜さうとする元氣もなくなつた。が、せめてその少女を充分愛賞することの出來る位置をとるために、彼女の立つてゐる窓の傍のベンチをとつた。少女の父は窓越しに彼の前に座つてゐる太つた婦人に話し出した。少女は父の傍で蛇の目を笙を吹くやうに捧げながら片足を中心にして廻つてゐた。その彼女のどこからも、自分の美しさを意識したときの下品さが見られなかつた。そしてそれは彼女がいつまでもまたどれほど多くの人々から賞讃され續けても、恐らく生涯今の氣品を保つてあらうと豫想することが決して感傷的な考察とは云ひ得られないそれほども美しく、彼女の總ての一點一線の動きの影の片鱗にさへも謙譲な優しさが現れてゐた。

「あゝ恍惚とは！」と彼は思つた。彼は自分をかくまで動かした美の力に驚いた。さうしてもしも今自分と同じやうに妻から苦しめられてゐる多くの若い良人達に、彼女をひと目見せたなら、彼らは必ず妻に復讐する力を感じて潑剌と活

動し出すに相違ないと思はれた。

發車のベルが鳴り響いた。少女は胸の上に兩手を合せて遠くの機關車を眺めながら、

「あら〳〵〳〵。」と云つて地團駄を踏み出した。

15

郷里の家の周圍の垣には眞赤な蔦が茂つてゐた。裏の鳥小屋の中では鶏の數が増してゐた。草に埋もれた小川の中では水車が廻つてゐた。人々の言葉はのんびりとして樹の間から聞えて來た。彼は母には、旅行がしたくなつたから歸つて來たと云つておいた。が、果して妻と三島とは自分の最も恐れてゐたことをなすであらうか。さう云ふ考へが三島を信用しながらもなほ絶えず彼の頭に浮んで來て、彼は歸國してからもなか〳〵落ちつくことが出來なかつた。それに、今からして全く總てのことから遠のいてみると、過去の中で最も彼の心に響いて來る者は、不思議に妻の辰子であつた。一緒にゐるときはあまり辰子の善良な部分を感じることが出來なかつたのが、別れたとなると急にそれが彼女の全部の性格を代表して彼の心に現れ出した。一體彼女は自分に何をしたのであらうと彼は考へた。すると、辰子のしたことは別に何でもないたゞ普通のことを普通の妻達がするやうにしてゐたにすぎないやうに思はれ出した。さうして徒らに苦しんでゐたのはたゞ自分の下劣な性格だけで、それが勝手に様々の苦痛な理由を造り出し捜し出しては、絶えず勝手に苦しみ續け憂鬱に沈み込んでゐたのではなかつたか？彼はそれを思ふと歸國したと云ふことが馬鹿らしくなつて來た。しかし、さうかと云つて僅か一日か二日の妻の懷想でまた遽に妻の傍へ戻つて行つたとすると、あれほどの鋭氣と覺悟とで出かけて來た自分に對しても面目ないやうに思はれた。彼はまた妻の性格の不貞な部分を記憶の中から出來るだけ

丹念に掻き集め堀り起した。すると、再び不貞な妻が忽然と出來上つた。

「俺はまだ〳〵歸るまい。」と彼は思つた。

　彼は辰子の幻想を追ひのけるためにだけでも早くかん子に逢ひたかつた。彼は歸つた夜から暇のある度に二階へ上つてかん子の家の方を眺めてゐた。しかし、彼女の家の二階は何ぜだかいつも雨戸が閉つてゐた。三日目の夕暮、彼はまたいつものやうにかん子の家の方を眺めてゐた。すると、そのとき下の細い路を彼の家の方へ來るかん子の姿が眼についた。彼女は前よりは少し太つたやうに彼には見えた。が、白々と面長な彼女の顏は豐かな髮に保たれてまだ昔の清澄な淋しさを失なつてはゐなかつた。彼は窓から一寸顏をひつ込めた。が、彼の氣持ちには別に何の變化も起らなかつた。たゞ彼は二人で過去を愛翫したい氣持ちからまた顏を窓から出した。そのとき、かん子は何心なく彼を見た。と、彼女の顏色は靑くなつた。跳ねられたやうに彼女は顏を俯向けて引き縮めた口元へ袖口をあてゝ通つていつた。

　彼はかん子が自分に妻のあることを知つてゐるに相違ないと思つた。しかし、彼は彼女に謝罪する氣持ちは起らなかつた。暫くするとかん子はどこへ行つたのか直ぐ引き返して來ると俯向いたまゝ歸つていつた。彼は彼女の姿が葉の落ちた梅の小枝に切られながら見えなくなつてもまだ長らくその場から動かなかつた。すると、今迄閉つてゐた筈のかん子の家の二階の戸が二枚だけ開いてゐた。開いてゐるのを彼が見たとき三枚目の戸がひとり戸袋の方へ辷つていつた。そして、戸と戸の間から出て來たのはかん子であつた。彼女は少し胸を反らせて最後の戸を開け放つて了つてもまだ髮を撫で上げながら遠くの山を眺めてゐた。彼女は少しも彼の方を見なかつた。彼は彼女が自分の方を見るのを待つてゐた。が、かん子はそのまゝ障子を閉めて部屋の中へ消えて了つた。彼はかん子がまた欄干の傍まで出て來るに相違ないと思つて待つてゐた。が、彼女はいつまでたつても出て來なかつた。彼は自信のあつた自分の姿が羞しかつた。その羞

しさをなほ自分に見せつけてやるために、彼はかん子の立つてゐた戸袋を眺めてゐた。前にはその戸袋が、かん子が彼女の家の人目を避けて彼女の愛情をひそかに彼に示す都合の良いたゞ一つの場所であつた。

「お前はそこで俺を愛すると云はんがために泣いたのを覺えてゐるか。お前が泣いたと同じやうに俺もお前を愛してゐた。しかし、お前は ひと目見た役者のために、俺の愛情を蹴飛ばしたのだ。何ぜ それが惡かつたのか とお前は怒るなら、俺はお前に云ふが、俺はその役者のためにその時負けたのだ。お前が泣いたそれほどのお前の愛人を、負かすやうにしたのはその役者では決してない。俺のために泣いたそのお前ではないか。」

彼はかん子に謝罪する氣持ちで不服をひとり竝べてみた。彼はかん子を愛してゐた當時の正しい自分の貞操を思ひ出した。

「どこに俺は頭を下げねばならぬ所があるか?」

彼は不服のリズムに乘り過ぎて不意に不機嫌になつて來た。

16

かん子は次の日から彼の家の前を一日に二度は通つた。初めのうちは彼女の下駄の音がすると彼は自分の姿を見せないやうにして彼女を眺めた。しかし急に妻から放れて來た今の彼としてはただかん子をさうして見てゐるだけでは物足らなくなつて來た。彼は機會があれば辰子と放れて來たことをかん子に云はふと思つた。彼は午後になると村の湯へ毎日行つた。そこまで行くにはかん子の家の軒を通らねばならなかつた。彼の湯へ行く頃はまだ男女のどちらにも客がひとりも來てゐなかつた。が、彼が湯へ行きつけて二三日してから女湯へも早く來る客が一人あつた。或る日彼は水溜の

水を汲み上げやうとして身を踞めると、御影石に包まれた四角い靜な水面へかん子の裸體の半身像が映つてゐた。女湯の早い一人の客はかん子であつたのだ。彼は彼女の映像の壞れることを恐れて桶を持つたまま立つてゐた。彼は敷られた男女別々の浴室にゐながらもかうして彼女の姿を見られると云ふことが面白かつた。彼女は彼に隣室から見られてゐると云ふことも知らないらしかつた。暗い浴室の天井に僅に切り取られた明りとりの窓からは日の光りが縞を作つて降り注いでゐた。その下でかん子は無心に牡丹刷毛を鼻から頰に使つてゐた。兩手で首を撫でながら行でぱたぱたと白粉を叩き留めると彼女は身を踞めて水を汲み上げた。彼女の裸形の半身は無數の切れ切れな白い網目となつて水面で搖れ始めた。彼は水の靜まるのを待つてゐた。が、隣室の浴場から間もなくかん子の出て行くのを彼は感じた。彼も彼女を追ふやうに出ていつて着物を着た。彼が下駄を履かうとしたとき、丁度かん子は出口の格子に手をかけて彼の方を振り向いた。その見方は矢張り早く來る男湯の一人の客が彼であることを充分知りぬいてゐる眼つきであつた。してみると、彼女の家の軒を通る自分の足音をかん子は知つてゐたのにちがいないと彼は思つた。彼は彼女の後から外へ出た。かん子は少し胸を張つて金盥を小腕に卷いて道の片側を歩いて行つた。彼は房子と放れて來たと云ふことをどこかで一言云ひたかつた。そのまゝ二人は二間ほど離れて同じ方向に歩いて行つた。すると、彼女の腕の袖口が道端の低い竹垣の角ひにつかゝつた。金盥はかん子の腕から飛び出して大きな音を立てながら道の上に轉がつた。彼女は顏を赧らめて撒かれた化粧道具を拾ひ始めた。彼はかん子の羞しさを感ずると直ぐ足が後へ戾つていつた。が、さてどこへ戾つて行つてよいのか分らなかつた。すると、彼の足だけがどしどしとまた湯屋の中へ這入つていつた。

「いらつしやい。」と番臺の若い女が彼に云つた。彼れは默つて一度浴場の中を見廻すとまた外へ出た。かん子はもう金盥を拾ひ上げて彼女の家の方へ歩いてゐた。

その日の夜は夕暮れから平原に霧が立つた。彼は緣側に立つて頭の後で兩手を組んで遠く霧の中を眺めてゐた。人の姿は見えなかつた。霧に崩れた灯が運河の岸の上で揺れてゐた。彼女は家を出てひとり野の中を自由にのびのびと歩いて行つてみたくなつた。暫くしたとき、彼は家の前を通る下駄の音をききつけた。その心持ち引き摺るやうなよく鳴る乾いた音はかん子の足音に相違ないと彼は思つた。彼は外へ出た。足音は彼の家と隣家の間の狹い露路の中で立ち停つた彼はその方へ近寄つた。かん子は胸に袂をあてて近づく彼の顏を見詰めてゐた。蔦のからんだ垣の中から獻燈は霧を浴びて立つてゐた。彼はかん子の傍へ行くと立ち停つた。心はどこか空虛であつた。かん子は默つてゐた。彼は自分の興奮することを願つた。が、彼は殆ど何の感動も受けなかつた。彼は獻燈の光りが彼女の膝を斜めに切つて沈まつてゐるのを眺めてゐた。すると、かん子は急に彼の傍から擦りぬけるやうにして家の方へ歸つて行つた。彼も彼女とは反對に運河の方へ歩き出した。彼は空氣の冷めたさを肌に感じて身を慄はせた。何ぜ自分は默つてゐたのか、と彼は考へた。彼は淋しくなつた。彼は自分の冷やかな態度はかん子に對する冷たさではないと思つた。かん子と放れて以來彼女以外の女性を愛したと云ふすまなさが　自分の心を謙讓に縛りつけてゐたのにすぎなかつたと思つた。愼ましやかだつたのだ。謝罪してゐたのだ。しかし、それは通じるものではない。と彼は思つた。彼は運河を包んだ堤の上へ出た。心は淋しさの中で朗らかになつた。霧は見下ろす平原の上に茫漠として擴つてゐた。曳き舟が腹に波を叩かせて運河の下から登つて來た。彼は堤みに添つて歩いていつた。芝生は霧に濡れてゐた。樹の匂ひが足もとの森の上から流れて來た。

次の日から彼はかん子と浴場の中で默つて放蕩してゐるのが樂しみとなつて來た。妻のことは、彼が三島を信用して

ゐるそれだけに歸らうとも歸るまいとも思はなかつた。が、それにしても郷里にゐると云ふ通知だけは三島にだけなりともしてをかなければすまないと思ひながら、しかしいつ歸る氣になるとも分らないと思ふと明日にでも歸りさうにも思はれて自然通知も捨ててをいた。とにかく彼はまただんだんとかんの方へ動いて行きつつある自分を識つた。そして、本屋の主婦に逢はれなくなつた今の自分の淋しさも再びかん子のために消されて行くのを感じると、今迄妻の復讐を考へたときに湧くあるいささかの恐怖も、今は全く何の力も持たなくなつてゐるのを彼は感じた。彼は何よりもそれを喜んだ。殊に辰子は今彼と一緒にゐなかつた。それが却つて彼にとつて口惜しくさへ思はれた。出來ることなら彼はかん子の美しさとかん子が彼を愛し出したその態度とをひそかに辰子に見せてやりたかつた。しかし、さうかと云つて別段彼はかん子をさてどうしたいと思ふ欲望は持つてゐなかつた。ただ彼の希ふのはかん子から彼を強く愛して來ることであつた。かうして二週間ほど案外彼は幸福に過ごして來た。が、彼とかん子との間は湯屋での柔な遊び以上には少しも進では行かなかつた。

彼が歸國してから二週間目の日に、彼宛になつた手紙が三島から來た。それには短く次のやうに書いてあつた。

「君はなぜ歸つて來ないのか。多分君は郷里の方へ歸つてゐることと思ふが出來ることなら早く歸つて欲しい。多くは云ふまい。僕は危險になつてゐる。」

彼はその手紙を讀み終ると急に落ちつきがなくなり出した。文面のやうなことは勿論充分豫明してゐたことにはちがひなかつた。しかし、その豫明が今明瞭に事實となつて現れやうとしてゐるのだと思ふと、豫期してゐたときとは全く違つた恐怖が初めて彼に迫つて來た。妻に對する總ての解釋が錯誤ばかりを續けてゐたやうに思はれた。大きなとり返しのつかぬ悔ひが棒立ちになつて立ちはだかつてゐるかのやうな形であつた。さうして今まで妻に對する彼の反抗心は

忽ち吹き拂はれて了つて、理屈なしに直ぐ妻の傍へ歸らうと云ふ氣持ちを強く彼に起させた。あれほども覺悟をして來たものがさてとなるとまた俄然として搖るぎ出す、さう云ふ自分がいかにも彼には安價な男に思はれた。しかし、自分の意力を感じやうとし、自尊心を保たうとする心からばかりのために、故意にまだ愛してゐた自分の妻を友人に開放して來た自分を思ふと、その時の強い自分の方が今妻の傍へ馳せ歸らうとしてゐる弱い自分よりもなほ一層彼には安價な男に思はれて來た。彼はもうかん子のことは頭から消えてゐた。さうして妻に逢ひたくなればなるほど、妻がますます善良で無邪氣に美しく見えて來ると同時にかん子との自分の放蕩が譬へそれはかりそめの反抗的な好奇心からであつたとしても妻に對してすまないと思ふ心が動き出した。妻と一緒にゐると復讐的に起つた放蕩心に對する自責の念も直ぐ次に來る妻の不愉快な行爲のために忽ち打ち消されて了ふのが例であつた。が、一人となると起つて來た自責の心も容易に彼の胸から消えなかつた。殊に今の場合が場合であるだけになほその感じが強かつた。無論一度は忘れずに妻の不貞な部分をあれこれと屢捜しもした。だが最早此の場合妻の不貞な性格の部分は不思議にも彼女を飾る華やかな裝飾物のやうに美しくなほ一層彼に魅力を持つて襲つて來た。さうして、あのときどうしてあれほどの意力を持つて妻を殘して逃げ出すことが出來たのか、彼はその時の勇ましい自分の意力をいま一度と胸の中に呼び戻さうと努めてみた。が、今は何事も無駄であつた。彼は早り立つた馬のやうに心の首だけが前へ前へと打ちのめつて妻の方へ崩れかかつた。ただ浮かんで來るものは彼の餓えた欲情の面前できらびやかに燃え立つ妻の肉感と優しき彼女の中の女性であつた。確に妻は彼のものであつたのだ。確に彼女は彼の妻にちがいなかつた。「妻！」實際此の時ほど彼には此の妻と云ふ言葉が親しみ深く物柔かな優しさをもつて響いたことがまだなかつた。それは自分と切り得ない宿命的な同じき肉體の一部であると思はれることによつてなほ憐れな甘さを含んでしみじみとした懷しい快感が感じられた。妻を批判すると云ふこと

は間違ひだ。ハツト手を引くやうに彼はさう思つた。

彼はその夜歸國したときと同じやうにまたあはただしく妻の傍へ歸るために列車に乘つた。彼は三島に逢へば自分の總ての氣持ちの經過について正直に話して了ほふと考へた。そして妻には出來るだけ寛大になり、彼女の性格と突き合ふ自分の性格を鞭えて今一度辰子を愛し直してみたかつた。それに彼は今迄の自分の生活が厭はしかつた。彼は母からの送金を拒絶しやうと決心した。もしさうすることが出來たなら多分新らしい生活が再び妻と自分の間に展開されて來るに相違ないと考へた。だがそれにしても辰子の氣持ちはもう自分の愛を受け入れない程度に三島に向つてゐるかも分らないと思はれた。さう思はれると彼はあまりに早く輕々と汽車に乘り過ぎたやうにも考へた。しかし、自分が歸ればまた辰子を取り戻せると思ふ自信が彼には三島の手紙を見たときからあつた。彼は度々三島と辰子との心理經過を想像した。が、自分の最も恐れてゐること、そのことは三島が手紙をくれたと云ふことだけでもまだ結ばれてゐないにちがいないと彼は思つた。無論此の斷定の仕方には、三島を信用してゐる彼の氣持ちが大部分働いてゐるとは云つても、幾らかは恐る恐るさう信じることを欲する彼の氣持ちが手傳つた傾きがないでもなかつた。

18

夜明けに彼は汽車を降りた。彼は眠らなかつたが頭は冴えてゐた。寒かつたので俥に乘つて郊外まで來た。まだ家々の戸は閉つてゐた。自宅の前で俥を降りて戸を輕く叩いてみた。

「おい、おい。」

返事はなかつた。彼はいつもよく戸締りをせずに眠つて了ふ辰子の癖を思ひ出したので自分で外から戸を引くと、戸

は開いた。彼は家の中へ這入らうとすると他人の家へ這入るやうな氣遲れを感じた。彼は玄關から茶の間へ通る襖を開けた。すると、辰子は××××××××眠つてゐた。彼は瞬間無禮なことをしたやうな羞しさを感じて一寸周章てた。と、忽ち胸が冷めたくなつた。兩膝が慄へて來た。同時に三島に向つて爆發した怒りが身を痙攣けて齒かちかちと鳴り出した。か、直ぐ彼の怒りは三島と辰子を振り捨てて翻然と自分をかく存在せしめかく愚弄したある不可思議なものに向つて突きかかつた。

「よしッ　俺を迫害するならしてみろ。俺はどこまでも貴樣に對抗してみせる！」

彼は二人から眼を外らさうとする自分の心をひつ捕へ、二人の眠つてゐる枕元へ坐るとぢつと妻の寢顔を見詰め出した。胸はますます痛んで來た。呼の痙攣がとまらなかつた。しかし　何か分らぬ緊張らしく尨大な神秘な感じに彼は呆然と見とれて落ちつき出した。すると、胸の痛みがまだこれなら充分保てると思はれる程度のときに、不意にいつものやうに平靜になつて來た。

「絞めたツ！」と彼は思つた。それと一緒に今迄あれほども魅力のあつた眼前の妻が、とても相手になれない下品な獸のやうに見えて來た。

「勝つた！勝つた！」

彼は力強い喜びを感じた。彼は立ち上らうとした。そのとき辰子は初めて眼を醒した。彼女は暫く眼醒めたままの顔をしてぼんやりと彼を逆さに眺めてゐた。と、急に彼女は悲しげな顔をした。彼は默つてゐた。辰子は直ぐ蒲團の中へ顔を隱すと動かなかつた。

彼は立ち上つて外へ出た。通りは次第に活氣づいてゐた。白い大根を積んだ荷馬車が幾臺も賑やかな街の方へ動いて

いつた。

「はい、よう、はい、よう。」

「數人の若者達はさう云ふ掛け聲をかけながら空車を輓いて勇ましく彼の前を馳け過ぎた。雀は朝日の射した高い建物の上をけたたましく叫びながら追つ馳け合つた。彼は鋭い快活な氣持ちに胸が張りつめた。彼は朝日を眺めて、

「素敵だッ素敵だッ。」と叫んだ。

涙が眼から流れて來た。彼は力の限り道の上を馳け廻つてみたくなつた。奔放に自由な快感が彼の認識世界へ充滿した。彼は通りを横切つて足早やに雜木林の中へ這入つていつた。切られた木の枝が足もとに散らかつてゐた。一人の男が木の間を驢馬を曳いて來て樹に縛いだ。露が木の葉から落ちて來た。避雷針が高く遠くの空で光つてゐた。

自分の妻が傷つけられたと知つてこれほどやつきと快活になつてゐる自分が彼には分らなかつた。彼は氣が狂ひ出したのではないかと疑つた。しかし 自分の意識が明らかに輝いてゐるのを彼は感じた。彼は馳けるやうに林を拔けて牧場の方へ降りかけた。すると、今まで快活だつた彼の氣持ちが俄に彼の胸をめがけて崩れて來た。穢れた妻の肉體が間斷なく眼の前に現れた。彼の足はぴたりと停つた。自分が妻にしてゐたことを他人が代つてなしてゐる、それを思ふと再び彼の齒がかちかちと鳴り始めた。胸が痺れるやうに疼いて來た。身體が路の上へぶつ倒れさうに思はれた。と もう此れ以上はとても駄目だと思つたとき、突然彼は自分の家の方を向き返つた。彼はなほ一層自分を苦しめてやりたくなつたのだ。その苦痛の源泉である妻の肉體を、自分の身體へにぢりつけてやりたくなつた。

「よしッ 俺は俺を嬲し殺してやれ!」

彼は猛然と林の中へ馳け込んだ。林をぬけると道へ出た。道から彼は家の中へ馳け込んだ。彼が襖を開けたとき、辰

子は蒲團の上へ起き直つて襟を直した。三島は床から半身を起すと顰めた額に一寸手をあてて默つてゐた。

「飯がないか。」と彼は云つた。

「郷里へ歸つてゐたのかね？」と三島は微笑しながら云ふと直ぐまた顏を曇らせて横を見た。

彼は默つて相手にはならなかつた。そのまゝ勝手の方へ歩いて行つて櫃の蓋を開けてみた。

「ないね、腹がすいて腹がすいて。」

「今焚きますわ。」と妻が云つた。

「どうも寒い。火がないつていけないね。」

彼は炭箱の炭を荒々しく割り始めた。

「ありがたう。私しますわ。」

さう云つて妻は彼の傍へ寄つて來た。彼は彼女には介意はず割つた炭を七輪の中へ投げ込んでゐると、傍へ蹲んだ妻の匂ひが暖く鼻に來た。彼の胸はぷつりと音を立てて破れさうに痛んで來た。彼はマッチを袂から取り出して焚附けに火を點け、團扇で七輪の下を煽ぎ出した。一切の頭の働きを追ひ出すために彼はばたばたと故意に激しく音を立てた。彼は自分が勞働をしてゐると云ふことを感じやうとした。彼は自分の考へを直ぐ次にする可き仕事の方へ向けていつた。第一に米を磨がう。それから湯を沸し、味噌汁を造つた後で食器を洗ひ、部屋を掃いて、雜巾をかけ、庭を掃かう、それから、それから、と考へ續けていつたがしかしその勞働は寸時の休みもなく身體の續く限り一生し續けなければ、その休んだ隙間からまた忽ち苦痛が肉體の中へ忍び込んで自分を破滅させさうに思はれた。

妻は暫く默つて彼の傍に慎ましやかに立つてゐた。が、直ぐまた彼の傍から離れると蒲團の上へ坐つて顏を伏せた。

三島は怒つたやうな顏をして胡坐の上で握り合してゐる自分の手を見詰めてゐた。

彼は火がぱちぱちと勢ひよく炭を爆かせて怒つてゐるのも忘れて無茶苦茶に團扇を使つてゐた。が、彼は急に自分のしてゐることが馬鹿らしくなつて來た。彼は團扇を投げ捨てて部屋の中へ這入らうとした。すると、三島は立ち上つた。そして、暫く彼の顏を睨んでゐたが默つて寢卷のまま外へ出て行つた。

彼には三島が何を怒つてゐるのか分らなかつた。が、それについては考へたくもなかつた。彼は倒れてゐる妻の傍へ寄つて行つた。

「俺はお前を愛してたんだ。」と彼は云つた。

妻は默つてゐた。

「俺は歸る。」

彼は玄關の方へ歩き出した。

「待つて、待つて、」

妻は早口に云つて彼の片足を抱きかかへた。

「えーいッ！」

彼は妻を蹴飛ばした。妻は横に倒れると直ぐ起き上つて涙を出しながら彼を睨んだ。

「私、腹が立つたわ。長い間置いてきぼりにしといて、私、腹が立つたわ。」

妻はまた蒲團の上へ顏を伏せた。彼は瞬間妻を氣の毒に思つた。

「俺はお前に俺の子供を產んで貰ほふと思つてゐたんだ。」

彼はさう一口云つて玄關の方へ出て來た。部屋の中から急に高く妻の泣き聲が聞えて來た。彼は家の戶口に一寸立ち停つて妻の泣く聲を聞いてゐた。それから通りの方へ歩いていつた。小路をひと角曲つた所に三島が向ふを向いて立つてゐた。彼は三島の後まで行くとまた自然に足が停つた。三島は彼に氣附かなかつた。

「俺は郷里へ歸る。」と彼は後から云つた。

三島は初めて彼の方を振り返つた。三島の唇の端から細くひと條の血が流れてゐた。二人は向き合つたまゝ默つて俯向いて立つてゐた。彼は三島の顏を見ることが出來なかつた。もし見れば恐るべき現象を自分が引き起しさうな氣持がした。それにも拘らず見ないでゐると、彼にとつて三島は實に路傍の石のやうにかかわりを無くせてゐた。彼は何ぜ自分が立ち停つてゐるのか分らなかつた。歩き出すと、

「辰子さんをくれないか。」と突然三島が云つた。

彼は默つて歩き續けた。答へる心要が彼の感情のどこにも見つからなかつた。ただ彼は絶へずどこかへ突き衝りさうな氣持がした。足が自由に動かなかつた。彼はときどき立ち停つて足を整理した。暫く行つたとき彼は自分がまた本屋の方へ歩いて行つてゐるのに氣が付いた。もう行つてはいけないのだ！さう彼は弱々しいながらも根限りの聲で自分をひき停めやうとした。が、もう彼は駄目であつた。とにかく彼は今、本屋の主婦にでも寄りすがらなければ自分の身體が危險に思はれた。このまゝ何の目的もなく歩き續けてゐれば自分がどんなことを仕出かさないとも分らなかつた。今傍にかん子でもゐてくれればと彼は思つた。いまさき三島と辰子との様子を見たときから彼の氣持ちの底には急にかん子の方へ倒れかゝつて行くものがあつた。が、へし折れて了つた心の柱になるにはあまりかん子は遠くにゐた。本屋が見えた。もう彼には本屋の主人がゐやうとゐまいとそれが何の問題にもならなかつた。彼はたゞもうせつかちにな

た。彼は崩れ込むやうに本屋の庭へ這入つていつた。中には誰もゐなかつた。朝の焚物の匂ひが懷しげに匂つて來た。瞬間、彼は幸福な家庭を思ひ出した。健全な生活の空氣に觸れたかすかな喜びを彼は感じた。彼は涙がにはかに流れ出した。彼は主人に一度兩手をついてお辭儀をしたくなつた。暫く彼はぼんやりとして庭に立つてゐた。すると、主婦が急がしさうに白い布で手を拭きながら出て來て何氣なく彼を見た。彼女は「アッ！」と云ふ顏をした。

「まア、こんなに早くどうなさいましたの？」

彼は返事が出來なかつた。

「長らくいらつしやいませんでしたのね。お鄕里へお歸りなさいましたの？」

彼は默つて主婦の顏を見てゐたがまた涙が出さうに思はれたので橫を向いた。

「どうかなさいましたの？」と主婦は小聲でまた訊いた。

「僕はもう駄目なんです。」

さう彼は云つたが自分の言葉が急に不快になつた。彼はどうかして快活さを示したかつた。あはてゝ、

「今、幾時頃ですか。」と彼は直ぐ訊ね直した。

「さア、七時頃だと思ふのですが。」

「さうですか、七時頃ですかね。僕は瘦せてはゐませんか？」

主婦は驚いたやうな顏をして默つて彼を眺めてゐた。

「瘦せたでせう。僕はね、眠らないと直ぐもう瘦せて了つて。」

「お加減でもお惡いのですか？」

「御主人はまだお眠みでせうね？」
主婦は眼を一寸しばたゝかせて彼を見た。
「僕は昨日まで郷里にゐたんですよ。今朝一番でこちらへ着いたばかりなんですが、どうも、僕、これからまた歸らうと思つてゐるんです。」
「これから？」
「これから歸るんです。」
「お郷里へでせう？」
「ええ、僕の郷里は田舍ですからのんきですよ。」
「どうかなさいましたの？」
「ええ？」と彼は訊き返した。
主婦は氣の毒さうに顔を曇らせた。
「どうかなさいましたのでございますか？」
「一寸困ります、お話はしかねます。御主人に宜敷しく申して下さい。もう多分お邪魔はしません。」
「どうぞいらしつて下さい。いいんでございますの。また直ぐいらつしやるんでございませう？」
「ええ、では失禮します。」
彼は丁寧に頭を下げた。
「まア、もう少し御ゆつくりなさいましては？」

「いや、どうも。」

「ね、もう少し。」

彼は主婦に脊を向けたまま又お辭儀をして外へ出た。主婦は彼に返す會釋を忘れて彼の後から戸口へ立つた。

彼は後を見なかつた。これで一時間ほど生命を延ばすことが出來たと思ふと、彼は次に間もなくやつて來る苦痛を何で持ち應へればよいかと考へた。彼は早くかん子に逢ひたかつた。今までかん子に冷い態度をとつてをきながら、妻や本屋の主婦が駄目になつたと見てとると急にかん子の方へ心を向ける、さう云ふ自分が彼にはいかにも淺ましく思はれた。が、一切のことを正直にかん子に話さうと思つた。しかし、女から受けた苦痛をなくするためにまだ他の女に心を向けやうとし、向けてゐなければならない自分を思ふと、もう彼は全く心から凋れて了つた。

「何ぜ自分はかうなのだらう。いつこれがなくなるのだらう！」

彼は早く老人になりたかつた。涙がまたしきりに流れて來た。しかし、今彼は過去の重い扉を自分の手でしつかりと閉めたのだ。それを感じると何か胸の底でほのぼのとした明るい色を彼は見た。それは分らぬ新鮮な感動であつた。前面には開け放たれた健康な彼の生活がぴちぴちと躍動してゐた。

「俺は自由になつたのだ！俺は自由だ！自由とは！」

彼は無茶苦茶に停車場の方へどしどしと歩いて行つた。それは跳ね起きた者が突進する姿のやうに勢ひ良く前に傾いた姿勢であつた。彼の姿に混つて朝の人々は白い息を吐きながら急がしさうに門を開いた工場の中へ這入つていつた。朝日を含んだ霧の中を滿員の電車が轟々と馳けてゐた。擦れ違ふ自働車の警笛が敏感に前後左右で爆けてゐた。きらめく金屬と白煙との中を人々の足なみが輕快に動いてゐた。彼は頭を上げた。壯大な建物が彼の行手の空に鋭くどつと立つてゐた。



冬眠

（一）

中條百合子

誰かの指が、仲子の腕に觸つた。
「さあ、もう朝になりましたよ、今度は私共が傍に居て差しあげます、この方もお寢みなさらなければなりません」
穩やかな、然し命令的な口調で、彼女は仲子の腕を、他の頸から離した。腕は、まるで抵抗なく枕の上に落ちた。
仲子は、視點の定らない、熱に浮かされた眼で看護婦を見た。昨夜の看護婦だ。自分に衣服を更へさせた看護婦だ。冷たい水のやうに室内に流れる拂曉の光線を感じ、仲子は途斷れ〳〵に呟いた。
「さう、朝になつた。…寢なければいけない……」
仲子自身、激しい眠りたさを感じた。彼女は自分が眠つたのか眠らなかつたの

か、一向解らなかつた。一晩中、絶間なく蜿る大波に揉れて居たやうな精神と肉體の疲れを呟いた。彼女の上に屈みかかり、半分意識の混濁した呟きを聞きとつた看護婦は、額に觸り、子供をあやすやうに又囁いた。

「そうそういゝお嬢さん！おやすみにならなければいけません」

仲子は、微かな歪んだ微笑を浮べた。

佃の聲がした。

「――それでは又參ります。何かホテルから持つて來るものはありませんか？」

暗い、底なしの何處かへ、重い堅い後頭部から引き込まれるやうな感じと戰ひ乍ら、仲子は辛うじて考へを纏めた。

「――箱を持つて來つて頂戴…青い革張の…櫛や何かの入つて居る―。それから、父様によろしく」

仲子は佃の出て行ったのを知らなかつた。まるで時間の判らない何時か、仲子は一粒の丸藥をのまされた。次に矢張りいつだつたか、嘔きたくなつた程不味いコヽアを二口のまされた。

彼女は不圖、ひそ〳〵聲ではあるが險しい女の聲で目を醒した。その聲は熱心に囁いて居る。

「どうぞ話しかけないで下さい。話しかけないで下さい、どうか！」

仲子は、白いエイプロンの紐が十文字に立つて居る看護婦の水色制服の彼方に、佃を認めた。彼は、腹を立てたやうな眼付で此方を凝視して居る。其光景から、仲子は何となく不機嫌を感じた。彼女は枕に頭をもぐり込ませ、ぼんやり思つた。

「もう明日かしらん…まだ今朝のつゞきか。あゝ、長い…長い…」

今見たばかりの光景が夢のやうに摸糊とし始めた。

すると、寢台の裾の方から、佃が聲をかけた。

「どんな工合ですか？」

看護婦が其にぶら下るやうに低く叫んだ。

「Oh! Please!」

（後からも此時のことを屢々明瞭に思ひ出し、仲子は自分の心持を怪しんだ。）彼女は、佃に訊かれてちつとも嬉しくなかつた。寧ろいやで、恥しささへ感じた。仲子は、泣きたいやうな頭の中で咳いた。

「どうしてあの人は口を利くのだらう」

默つて居ると、佃はもう一度繰返した。

「いかゞです？氣分は」

仲子は其に答へず、訴へるやうに悲しげに咎めた。

「何故貴方は物を被云るの？」

いきなり神經的な涙が瞼一杯になつた。仲子は滅入つた心持を感じ乍ら眠つた。

まる二日半、仲子はまるで連絡ない生き方をした。彼女の裡に目醒めてゐるのは—其も時々—感覺ばかりであつた。

彼女は、嬰兒のやうにすつかり人任せにした體全體の受ける感じで、自分の感情を支配された。

朝、彼女は衣服をすつかり脱がされ、暖い湯で身體を拭かれた。濡れた、粗いタウルが背中に觸つた瞬間、仲子は操つたさと心持よさを半々に感じる。彼女は、看護婦に一言二言愛嬌のある言葉をかけた。感謝からではなく、彼女の皮膚が愉快だと感じたから。間々にひつそりとした、睡くて堪らない明るい午後が挾つた。燈火がつく。看護婦が交代

し、佃が來た。彼の顏や、聲や、

「どうです？　少しは心持がよくなりましたか」

と云ひ乍ら、彼女の手を執つて撫でるその感じが、特殊な、顫えるやうな感覺を伸子の裡に起させた。彼女は軟かく、優しく燃える感情の小さなかたまりとなつて、枕の上から彼を眺めた。無力になつて居る彼女の精神の奥深いところまで、さういふ感動の印象は屆いた。そして其處で根を張つた。

伸子は疲れを覺える。一層佃を歸らせたくなく感じる。夜中、さうして寢台の傍の低い椅子にかけ、丁度自分から顔の見へる處に居て欲しい。九時になると、彼は歸らなければならない。彼の後で扉が締ると、伸子は殘り惜しい胸を押られるやうな心持がした。涙らしいものがこぼれさうになる。が、彼女は五分も目を醒して居ない。感情が亢奮したあとの夢もない眠りが、朝まで彼女の睫毛も動かさせない。次の朝、再び濡れたタウルが寢起きの皮膚に觸る時、伸子は前夜激しく自分を捕えた感情は思ひ出さなかつた。忘れたのではなかつた。眠つて居る間にもどし〳〵活動して居る生活力に卷き込まれて、夜前の感銘は意識の底に沈んだ。今日は今日で更に新しい、依然として理性のない感覺が、新しい印象を期待して目覺めるのであつた。

（二）

四日目頃から、伸子の生活はやつと調子を整へて來た。

彼女に意識ある日課が始つた。

寢たきりなので、頭の上の窓の外に如何那風景があるかは判らなかつたが、自分の居るのは、十呎に十二呎ばかりの

白壁に圍まれた聖路加病院の一室であること。隣りにも隣りにも病室が並んで居、廊下の彼方には藥局のあること。朝七時に、ミス、クロッスが必ず入つて來て「さあお目をお覺しなさい。いゝ朝ですよ」と自分を起すこと。掃除婦が間もなく床を拭きに來る。體を拭き、もう自分で櫛をとつて髪を梳き、消化よい朝食をたべる。それが大抵八時九時の間であること等を、伸子ははつきり知つたのである。

肉體の苦痛が去り、時間の觀念が戻つて來るにつれ、伸子は此迄にない感情で、自分を取繞む生活を味ふやうになつた。彼女の内心に、何處やら弱々しいが穩和な敏感さ、次第に充實して來る生活力に耳を傾けて居るやうな何かが生じた。病室内に漲る明るい靜けさ、清潔で汚點一つない白い壁。其等は皆ひどく彼女の心持と調和して居る。伸子は、工合よい羽根枕の上に延々と横はり、四邊の豐かな靜寂を樂しんで居ると、此世に何の不滿も無いやうにさへ感じた。自分が病人だと云ふことなど念頭から消えた。旅館の慌しい日常で全然缺けて居たものが此處にはある。それが空氣に混つて、體を内部から富ませ力づけて來るやうだ。さういふ淡然とした恢復期の幸福感は、伸子が午後一時間、定まつてする午睡から醒めた時、時々強く感じられた。

伸子は、眠り足り、足の爪先までぽこ〳〵と暖かな好い心持で目を醒す。彼女をねかしつけて散歩に出掛けた看護婦はまだ歸つて來て居ない。森とした部屋ぢゆうの朗らかさ！

晴やかな冬の日光が、人の居ない椅子の背を滑つて、床に落ち、化粧台の脚の一部に照つて居る。日かげにある鏡面に、彼女が寢て居る寢台の純白な覆布の折目立つた端と、三本の麝香撫子の剪花が、靜物畫のやうに映つて居る。

何の物音もしない。…………日向が息をするのが判るやうだ。

伸子は、體も心も溶け込むやうな快さを感じた。滿ち足りて、何だか幸福で、文句も節もはつきりしない歌の諧調

か、心の底から湧いて來るやうだ。

仲子は、さういふ瞬間、屢々父や佃のことを思つた。

「皆は今頃何をしてゐるだらう………」

仲子は、病氣になつた晩、夢中で抱へ出されたきり、一遍も父に會つて居なかつた。彼はまだ外出する程恢復して居なかつた。彼の消息は毎日佃を通じて知らされる許りである。其にも拘らず、仲子の心には深い安心があつた。彼は、遠いが近い彼處に居るといふ確信。仲子が父を想ふのは、不安や寂しさからではなかつた。自分がたつぷりした心持になると、ひとりでに生じるゆとりで、細かく父の身ぶりや、今頃仕て居さうな動作などを想像するのだ。

十分か十五分經つと、元氣よい血色になつて、ミス、クロッスが歸つて來る。彼女の頬や髮に、さつぱりした外氣の爽やかさが殘つて居る。仲子は愉快に訊いた。

「どう？何か面白いことがあつて？」

「何んとも！　いつもの通り澤山の乳母車と赤ちやんと、犬づれの貴婦人」

（彼女は、病院の附近にある公園に散歩に行くのだ。）

「よくおよれましたか？」

「今起きたばかりのところよ」

ミス、クロッスは、仲子の熱を計り、他の二三必要の事をして、彼女の皺張椅子にかけた。彼女は、綴ぢのすつかり弛んだ赤い表紙の本を出して讀み始める。時には、白いエイプロンの上に編物をたぐめたまゝ、頬杖を突いてぼんやりして居ることもある。

伸子は、枕の上から彼女の縮つぽい前髪や、寒さうな鼻つきなどを、眺めた。何か考へ込んで居る時、ミス、クロッスの顔から看護婦につきものゝ、てきぱき母親ぶつた表情が消えた。生活が餘り樂ではない女性の魂の奥に在る渇き、落付きなさが滲み出すやうに見える。

伸子の、親しみといひ表はさない同情を含んだ視線が不圖彼女の眼とうち合つた。伸子は微笑した。その微笑を無意識に照り返し乍ら心は他處にある風で彼女が訊く。

「Yes? dear?」

「——何でもないの」

二人は又微笑する。

「此處にも生活があり、心がある」伸子は思ふ。そして、何とも云へず生命や時間の充實した嬉しさを感じるのだ。

一體、事々につけてこのやうに感じる和らぎ、病氣さへ苦にならない生活の歡びは、何處から來たのだらう。

生活の廣さ、變化の點から云ふと、今と病氣前とはひどい違ひだ。刻々に活動し、動搖して居る社會は、伸子の周圍からすつかり遠のいた。彼女が今接觸を持つ人々は、ミス、クロッスと、哀れな掃除婦と、膳運び、醫者、おしやれの若い夜勤看護婦と佃ぎりだ。その中で十分以上口を利き合ふ人と云へば、看護婦と醫者と佃ばかりであつた。本を讀むことは禁じられて居る。天候は緯度の高い北方の冬で、清朗ではあるが虹と薔薇を降らす譯でもない。自分の足で立つことさへ未だ出來ないのではないか！　それだのに、何故このやうに安らかで、暢やかで、見えぬ信仰に滿されたやうなのだらう。僅か十呎と十二呎の室内で、又その中の狹い寢台に寢たまゝ、伸子は自分の生命の擴りと、生活の豐富さとをふんだんに感じた。十一月の下旬、旅館の部屋で雨降りの午後感じたやうな恐ろしい焦躁——自分ばかり本當の生活を

持つて居ず、人間仲間からぐん／＼置いてきぼりにされて行くやうな苛立ちと恐怖——などは、跡かたもなくなつた。自分を繞つて、生活は此處に流れて居る。仲子は其を全存在で感じるのであつた。

彼女は、自分の病氣の原因や病名など、まるで知らされなかつた。多分、神經系統と關係のあつた、四五日間の生活機能の擾亂のうちに與へられた一つの接吻は、仲子に奇蹟的に働いた。平常なら當然起る筈の種々な內省が、此時は全く省略された。仲子は、自覺しない幅で、心の彼方から此方へと一息に跳び仙を愛しだしたのであつた。

(三)

夜の七時。——

燈火のついた病院の建物全體に、微かな、捕へ難いさはめきが漲つて居る。

仲子の部屋では、夕飯後の身じまひが濟んだばかりであつた。窓かけを下した室內で、ミス・タロッツは洗面器を片づけて居る。彼女はもう歸るばかりに着物を着換へ、一日の勤務から自由になる嬉しさで活々動いて居る。

仲子は、背中をアルコオルでふかれ、粉をぬられ、又朝になつたやうに輕快な、心持であつた。彼女の髮はすつかり梳きなほされ、左右にふり分けた二筋のあみあげの先に、白いリボンが結びつけられて居る。

仲子は、仰向のまゝ凝つと天井を眺めて居た。暫くすると、彼女の顏に、注意を集注した、眞面目な切なげでさへある表情が現れた。

仲子は或音を聽きつけたのだ。七時になるや否や、一秒毎に彼女が待つて居た其音。まだ極遠い。彼女にしか聽き分けられない靴の踵の音が、石敷の步廊で圓天井に反響し乍ら此方に來るのだ。

仲子は身じろぎもせず、體の裡で血行が變化するのを感じた。ミス・タロッスが背中を向けて居てくれるのは幸だ。音が近より、近よつて來るにつれ、仲子は、胸が破裂しさうに苦しくなつた。力の入つた、平たい踵の音が殆ど顔の上で鳴るやうに感じた時、扉にノックが響いた。ミス・タロッスは素早く仲子にふり向き、揶揄ふやうな、嚇すやうな合圖をした。仲子は、仰向きになつたまゝ、だまつて動かない。ミス・タロッスは故意と儀式ばつた調子で應へた。

「どうぞお入り下さい」

扉は外側に開いた。佃が閾の上に立つた。

「今晩は」

ミス・タロッスは、入れ違ひに出て行つた。佃は、其間彼女のかけて居る椅子の上に、外套と帽子とを置いた。そしてもう一つの低椅子を動し、仲子の枕元にある小卓子の傍に坐を占めた。これ等は、いつも沈默の裡に行はれた。仲子は彼が閾に立つた刹那、寢台ごとふうつと體が浮上るやうな異樣な感じを經驗した。一寸の間、彼女は眼で佃の動作を熱心に見守るぎり、口が自由にきけない心持になるのであつた。

佃が、いつもの通り彼女の容體をきゝ、ぽつ〳〵外の樣子や、父からの傳言を話し出した。

「今日上つたら、もう少し經つと旅館を更へると云つて居られましたよ。貴女が退院なさる前位に」

「さうお」

仲子は、段々落付をとり戻して來た。

「どうして？今の處で何故いけないのでせう」

「二人とも病氣におなりになつたから厭だとお思ひなさるらしい」

「御幣かつぎね。――でも、私の退院はまだ見當もつきはしないわ」
「大丈夫です、もうぢきでせう」
佃は、仲子の顏を調べるやうに眺め乍ら云つた。
「今晩なんか、大層いゝ色つやです」
「――電氣のせいよ、きつと」
沈默が擴つた。仲子は今横向きになつて居る。小卓の上のスタンドの圓い光の圏内では 彼女の胸までかゝつて居る毛布と、そこで組んで居る兩手と、白リボンのついた編み下げの先しか見えない。顏は暗くなつて居る。けれども、彼女から佃はすつかり見えた。茶つぽいフランネルの襟から浮立つて居る顎の丸みから、鼻つきから、額から髪まで。彼は、どういふ譯か、仲子が氣分を惡くして寢ついた日からずつとカアキ色の襯衣と、膝まである長い編あげ靴とをつけて居た。その上に、紺ぽい粗織の背廣の上衣を着て居る。仲子は、見なれ、その妙な組合はせの服裝をちつとも可笑しいと思はなかつた。其どころか、それが彼の裝で、その裝でなしに想ふことが出來ない程馴染深いものになつた。
佃はやがて、彼と共同に學生倶樂部の管理をして居る男が不注意で誠意のないことを訴へた。
「おかげで僕が責任上困つてしまひました」
仲子は、驚いて訊いた。
「どうなすつたの？何か大變な迷惑？」
「さう大したことではないのですが」
「蒸汽罐を破つてしまつたのです」

「蒸汽罐を？――どうして」

仲子は笑ひ出した。

「いや不注意だからいけないのです。ちゃんと石炭に火をつける前水が入つて居るかどうか見ずにするのがいけません」

佃の、本氣らしい口調につり込まれ、仲子も我知らず其の重大に考へ出した。

「どうなすつて？それで」

「仕方がないから、本部の設備掛に修繕をたのみましたが。――實に皆責任を考へない人ばかりで困ります。そして、私が餘り熱心にやると、好まない」

仲子は、佃の顏を見た。彼女には、蒸汽罐など如何うでもよかつた。けれども、佃の滅入つた表情は、心を痛める。

仲子は、事柄より佃の心持を劬ることに傾いて、云つた。

「自分の代りにあやまつて吳れる人があると思ふと、つい粗忽になるのでせう。でも、それで濟んだ事だから……忘れてお仕舞ひなさい」

「實に、人間同志の事はむづかしいものです。忠實であつてもいやがられ、不忠實であつても非難される」

仲子は、默つて、組んで居る兩手の指を動した。佃のさういふ感情は、最近、益々仲子にとつて、他處ごとでなくなつた。仲子は佃の、こだはり、陰氣になつて居る感情を自分に極く密接に感じた。彼女の裡にある母らしい心持は、佃が自分に向つて此様な苦痛を云ふ秘密な原因は見抜いて居ると信じた。彼は自分から、知らず知らず慰めを期待して居るのではないだらうか。子供が駄々を捏ねるやうに。

仲子は鷹揚な暖い心持に滿ちて云つた。

「だれからも褒められることなんか、出來はしないでせう。自分がいゝと思ふ事もやつて被居れば其でいゝわ」

「さうです。判る人には判つて呉れるでせう。けれども私は、あの人を知つて居るとか、判つて居るとか云はないことにして居ます」

「何故？」

仲子は、一種の警戒を以て目を瞠つた。彼女の胸で痛むものがあつた。――たつた今、彼女は自分が佃の内心の願望の少くとも一つは自分が理解したと、幸福を感じたばかりの處だ。佃の言葉は、偶然、冷やかな皮肉のやうに響いたのであつた。仲子は、さりげなく訊いた。

「――何故？」

「人は容易に判るものでありません。本當に解つて呉れる人などといふものを此世に期待するのが抑々間違ひかもしれません。」

「――」

仲子は、心を冷たい風が吹き過ぎたやうに感じた。彼女は我知らず熱し出した。

「……あなた、自分を判つて呉れる者のある方がお好き？　それとも無くつて平氣？」

佃は、低く答へた。

「――勿論、あれば其に越したことはないでせう」

「ぢやあ、誰か貴方を知らうとする者があつた時、自分を閉ぢてお置きになるのはいけなくはないの？　向ふが本氣な

ら、貴方も本氣に打ち開けないでは、判りつこはない」

「眞心のある人なら、私の閉ぢた扉でもあけてくれるでせう。それに、私の眞心をそのまゝ受けられない場合が多くて困ります。――貴女髙崎さんも御承知ですか、いつかの會にも見えた――」

「えゝ」

「あの人について、私は或誤解を受けた例があります。あのひとが日本から來たばかりで獨りで、いろ〳〵困るらしいので、本當に娘か妹を見るやうに少し世話をやいて上げたら、すぐそれがやかましい、いやなことになる。――私は何處までも公明正大だつたのです」

伸子は、何とも云はず、心の裡で佃の頭を撫でたゝいた。「不思議な人！　貴方は自分で何を求めて居るか御存じない！」

（四）

伸子は、自分に對する佃の態度で、彼が何故あのやうに勞を厭はず多くの病人を見舞ひ、世話をしたのか、はつきり動機を洞察したと思つた。彼が其をしたのは、唯氣の毒さからではない。彼は、一時でも自分が責任を持ち、その人の運命に關與する本氣ないきさつを、人間との間に持ちたかつたのではないか。

伸子は、彼の孤獨さを思ひ遣ると、如何うして其でやつて行けるかと驚き憐む心持を強く感じた。彼には兩親無いも同じだ。兄弟の一人此處に居るではない。彼の口ぶりによれば大して賴りになる友人さへ無さゝうだ。誰一人愛す者も無ければ、愛して吳れる者も存在しない生活。――それでも生活だらうか。

伸子は、佃のさういふ孤立的な生活の理由を外部的にだけ解釋した。彼が、專門の研究から當然導かれる筈の交友を持たないのは、彼の專門が餘り他の人達とかけ離れて居る故だ。彼を人として親しむ者のないのは――彼にも變つた處はあるが――周圍の者が、彼の內心に立ち入る丈の熱やむきさを缺いて居るからではないだらうか。

伸子は、佃を、佃自身が說明してきかせる立場に置いて丈觀た。すると、何か、理解せられざる者、愛せられざる者といふ受難者風な處があつて、伸子の同情を牽いた。彼が人との接觸に、自ら溫いものを求めるのは自然すぎる程自然だ。佃には妙な持ち前があつて、その衷心の要求を自分から自然に承認しないのではないか。その一點が、彼と周りの者にとつての躓きだ。ひとは彼を冷やかと思ふ。それに對して佃は拗ね、說明を決して與へない。

伸子は、自分が佃と會つたことを徒な偶然とは考へなくなつて來た。たゞ行きずりの行人同志なら、何故そのやうに自分の心が彼の內心に入り込むだらう。そして、理解する歡びや張り合ひをもつのだらう。病氣になる以前、彼女が旅館の客室などで佃と熱心に話した、何方かと云へば知的な興味と共は全然違ふものであつた。もつと情の問題であつた。元のやうに、

「一寸、その考へ方に何かぬけて居はしなくつて」

と云つて安心しては居られない。伸子は、佃が兎に角不幸なのは厭なのであつた。賴まれても賴まれないでも、彼を幸福にあらせたい。自分こそ彼を愛さう。重大な、達し難い大望が伸子の胸に忍び込んだ。彼の心よ！　殼も溢れろ！　明るい、眞直な、勇氣や愛の漲つた生活が欲しくはないか？

伸子は、自分がそのやうな境地に絕え間ない憧憬を持つて居る爲、佃にもその渴望の在ることを疑ひ得なかつた。萬一、彼が言葉に出して

「私は其那生活は信じない。信じないから、望みもしないのです」

と云つたとしても、伸子は、寛大な、總て知り拔いたと信じる微笑で應へたゞらう。

「それではまあ其にしてお置なさい。今に私が、成程これか！と云はずに置けないものを見せて上げませう。」

其故、佃が高崎といふ婦人について云つた言葉と對しても、伸子は、彼の反省から逃げて居る極核心の願望を直覺し、寧ろ好意を以て領いた。

「私は、騙されませんよ、貴方がお好きな妹や娘といふ言葉に。貴方はあのひとが嫌いでなかつた、若しかしたら好きになりたかつた――さうでせう？其でいゝのです。何故貴方のやうな勉强をした人は、女のひとに父親や兄らしく對すいふ想像を眞先にするのだらう！」

然し伸子にとつて、佃の父親ぶり、兄ぶりの心持は、一種の愉快でないとは云へなかつた。其は伸子の心にもある感傷癖と何處か調和した。其上、彼女には、現在佃が其那彼一人の思ひ込みを飛び踰つて自分に衷心を吐露して居るといふ、女らしい信念があつた。

「好きなやうに私をお呼びなさい。子供とでも、赤ちやんとでも。私はちやんと知つて居るのだから――卅五歳の男が卄の、性で呼んで居る娘の唇に、父の心ばかりで唇をつける！其那ことがありますか」

彼女は、互に與へ合つた最初の接吻について唯一言も說明はしなかつた。又、芝居の戀人達が喋るやうな、砂糖菓子のやうな話しもしなかつた。伸子は其那趣味におぞけを振ふ。何の說明がいらう、

枕に上氣せた頰を壓しつけ、白繻子のリボンを闇を押しのけて點く圓の狹い燈火に浮立たせ乍ら、伸子は佃を凝つと見守つた。彼は、腕組みをし、正面を向いて居る。伸子は見守つて居るうちに、段々彼の中に吸ひ込まれ、手足や體が

何處にあるか判らない心持になつた。苦しい、熱い、息づまるやうなものが迫ツて來る。仲子は眼を瞑つた。猶、苦しい。仲子はやつとのことで寢返りを打ち、佃に呼いた。

「——あつちの燈火もつけて頂戴」

ぱつと化粧台の吊電燈が灯つた。四邊は俄に明るく、快活に、着實になつた。魔術的な雰圍氣が消散した。

仲子は、編下げをふりさばいて腹這ひになつた。

「貴方、紙と鉛筆とを持つて被居ること？」

佃も先刻と少し違ふ音調で答へた。

「萬年筆は持つて居ますが……小さい帳面でようござんすか」

「かまわないわ、」

仲子は、佃の帳面を開き、萬年筆をとつて、ちらばら、飛々に數字を書いた。佃はずつと椅子を近よせ、片よせた枕の傍の帳面を覗き込んだ。

「何んです」

「遊ぶのよ、」

十五までの數字を二通り書くと、仲子は、樂しさうな惡戯子の笑ひ顏で、佃の前に握つた拳をつき出した。

「さあ、ぢやんけん」

佃は、頭を振り、苦笑し乍ら大きな節の高い拳を出した。彼女達は、二人の子供のやうにぢやんけんをした。仲子

が勝つた。彼女は、帳面の數字の一と二とを曲りくねつた線で結びつけた。

「貴方はそつちの一と二とをお繋ぎになるの」

佃は、しかつめらしい樣子で自分の持場に棒を引いた。

「今度は私の番……」

仲子は、

「三、三、三、」

と口の中で呟き乍ら文字をさがした。

「ほら、御覽なさい、斯うなるでせう、貴方の三が此那奥になつてしまつた。なるたけ邪魔をして行き止りにしていゝのです。線を横切つたり、くつついたりすると負け」

彼等は喋つたり笑つたりし乍ら、單純な遊びを飽きもせずにやつた。その勝負では仲子が佃の線にかこみ込まれて負けた。

次に、目をつぶつて、豚に尻尾をつける遊びを始めた。哀れな豚は容易に尾が貰へない。先のまるまつた尾は、背中に生えたり、宙に吊下つたりする。其度に、豚はまるで逆に見えたり、異つた動物に見えたりする。

笑つて居る處に、戸を敲き夜勤看護婦が入つて來た。彼女は、片手に澤山薬瓶を並べた盆を下げて居る。白粉をつけ、氣取つた歩きつきで寢臺に近より乍ら彼女は愛嬌たつぷりに仲子に聲をかけた。

「面白さうですこと！私もお仲間に入れていたゞき度うございますことね」

彼女は、佃に流眄を與へて笑顔をし、熱心な顔付をして仲子の薬を分けた。

仲子は、小さい藥杯をあけてかへした。

「有難う」

仲子は、この看護婦が仔猫のやうな風で入つて來ると、がつかりしたやうな、興ざめた心持になつた。彼女が決して悪いのではなかつた。來る時間がわるかつたのだ。彼女は定つて九時十五分前に仲子の戸を敲く。彼女は仲子等にとつて左様なら、の先觸れなのであつた。

糊の強い、水色の洋袴をかさ／＼云はせ、看護婦は去つた。けれども、もう豚の尻尾も可笑しくない。二人は、默つて、時間の過るのを感じ乍ら坐つて居る。急に夜が更けたやうな室内の靜寂に響いて、近くの教會の大時計が仄かに聞えた。

佃は、時計を出して見た。そして、徐ろに立ち上る。

「……窓はこのまゝでいゝのですか」

仲子は、遊んで居た時の陽氣さを失つた聲で答へた。

「もう少し開けて置いて頂戴。」

佃は、窓を動し、化粧臺の上の電燈を消した。再び病室の中は明るみと暗さの複雑な陰に包まれた。仲子は、隅の椅子から外套と帽子とを取上げる佃の朦朧とした後姿を見る。佃は其等を片腕にかけ、仲子に右手をさし出した。

「左様なら、よくおやすみなさい。又あした參ります」

「おやすみ」

仲子は、胸を壓搾されるやうに感じた。挨拶の手から力がぬけた。佃はそれを離さない。——腕に傳る急激な動作

で、仲子は、はつとし佃を見た。彼は、外套や何かを寝臺の裾に落した。磁石が牽くやうに、ぴつたり彼女に向つて居る顔は、苦痛を現して歪んで居る。何といふ眼！

仲子は、胸に落ちかゝつて來た佃の顔を、母親の溫情と戀人の忘我の混り合つた熱情で、優しく、うつとりと愛撫した。

佃は去つた。

二時間前、次第に近づいて仲子の心臓を戰かせた跫音が、今は次第に遠ざかつて行く。絲にでも繋がれて居るやうに、仲子の注意は其音に跟いた。病室の角を曲る迄はつきり――段々遠く――やがて微に……微に。音はすつかり消えた。もう何も聞えない。佃は街路に出たのだらう。

仲子の心は、半分間、見當のつかない夜の街上に停る。心は程なく滿足した緩い歩調で戻つて來た。仲子はそれを大事に自分に抱きとる。幸福な、重みのある感情が魂一杯になつた。聖化された、香爐の烟のやうなものが、一縷顔の奥から立ち昇る。遙か上空で其はゆつたりと擴り、揺がぬ加護で父や佃や自分や、愛する總ての者に深い夜を護つて與れるやうに思はれる。

仲子は、情感に浸り込み、眠りに溶け込み乍ら心で挨拶した。

「おやすみ、みんな――おやすみなさい」

（五）

仲子は、讀書を許されるようになつた。
好きな丈寢台の上で起きかへつて居られ、午前中暖かなら、車輪付椅子に載せられて、屋上の日光浴室に行つた。彼女の肉體はまだ弱く、人まかせだが、元氣はよい。よく喋るようになつた。其につれて、ミス、クロツスも饒舌となつた。彼女は、看護婦としての訓錬で、病人の生活力の潮の滿干に合はせて自分の活力まで調節する術を心得て居た。彼女は、カナダ生れで、ウヰルソンに著しい反感を示した。ウヰルソンは巴里に居た。夥しい電報か、國際的熱狂で、大西洋を飛び交つた。其が新聞に出る。讀んだ者は、一層彼等の世界平和の夢を深めるか、皮肉な幻滅感を強めるか爲ずに居ない。ミス、クロツスは、仲子に理解し難い頑固さで、彼が僞善者であること、丁度廻り合せよく開いた大舞台で、出來る丈自分を目立たせるのに齷齪して居るに過ないと力說する。彼女は、例の綴ぢの弛んだ本の頁を焦立つやうに人指し指で叩き乍ら云つた。
「よく見て被居い。世界の理想を最も都合よく利用するのが彼の野心なのですよ。あはよくば、廿世紀に出現した救世主の役を持ちたがつて居るのです」
仲子は、積重ねた枕に靠りかゝり、病衣の上に日本の羽織を着、彼女を眺め、微笑する。
「批評するのはやさしいわ。私は貴女程嚴しく見て居ない。…………成功するかしないか解らないが、彼の熱中する心持はわかるじやあないの。翔べる人には翔ばせて見ろ、よ」
ミス、クロツスは不贊成らしく頭を振る。仲子は、其が可笑しさうに蟠りなく笑つた。
外界の出來事は、總て以前と違ふ當りの軟かさ、はつきりした自他の區別を以て仲子の心に受け入れられた。先のやうに、其等の現象の裡に自分を集注したがる饑えが無くなつた。今は自分にも育てるもの、養ふもの、精神を捕へて離

さないものが出來た。巨大な、漲つて居る世界問題、其間に動く少數の現代の人物の姿は、仲子に雲の多い夕燒空を見るやうにさへ思へた。其を眺めるのは壯大だ。心を高め、鼓舞するものがある。然し、高められた心のつかひ道は、彼方には無い。――

伽は、殆ど毎晩仲子を訪ねた。

習慣になつたので、一度でも七時に戸をノックされないと、仲子は寂しく、一晩を異樣に懶く感じた。

彼等が一緒に過す二時間は、何の妨げもない平和な時間であるべき筈であつた。愛するものが愛する者と二人きりで居られる時。

けれども、仲子は折々何とも云へずさし向ひで居る彼と自分との空氣を重苦しく、堪らなく感じることがあつた。愛が迫つて苦しいのとは違つた。伽の陰欝さ、彼の心に激しく燃えるものがあると却つて反動的にその濃さを増すと思はれる暗い感傷が、仲子の單純な、樂しさを愛さうとする感情に絡みつく事があつた。伽を愛し出した彼女は其をふり切れず――無頓着になれず、伽ごと氣持の上で浮上らうとする努力を無自覺に生じた。彼の氣分と出會ふ爲に、仲子の心持は、彼の氣分の在る水準まで一旦は沈み込まなければならない。仲子は、全然自分としては原因のない陰氣さに引込まれる。彼女の本質は其を好まない。感じだけで理解される或不調和、相反するものが、仲子自身の裡で互に牴觸し合つた。其から逃れようとする本能的な意企で、仲子はやがて自分の快活さを倍にして現した――それで二人分の間に合ふように。

仲子が感じた苦しさは、其樣に感情を誇張し、極から極へ飛び移らなければならないやうな異常な亢奮に對して、自然の與へた警戒ではなかつたであらうか。

然し仲子は、綿密に自分の感情を點見する落付きを持つより先きに情熱を捕へられて仕舞つて居た。彼女は、さういふ苦しさを感じると、一層激しく佃と自分との愛の境地を夢想した。

「どんなにいゝだらう。彼も仕事をする。自分も仕事をする……二人の最もよく愛し合つた人間が、樂しい、自由な生活をやつて行く――」

左樣云ふものゝ、彼女が斯樣な夢に耽つて居る時、誰かが訊いたとする。

「では何ういふ境遇の下で？その二人樂しく仕事をやつて行かうといふのは――」

仲子は意外さと、不安とを現して質問者を見つめただらう。そして、反問したに違ひない。

「――如何う云ふつて――このまゝよ。――このまゝでいけないのですか？」

降誕祭の前週、或晴れ渡つた午前十一時、仲子は車輪付椅子に載つて日光浴室に居た。三方硝子張の、敷瓦や植木鉢に鮮やかな日光が躍る廣い室内には、仲子ぎりであつた。正面には、同じ建物の彼方側の翼の屋上が見えた。其處も此方と同樣、日光浴の場所となつて居るらしい。澄んだ、冬の青空に湯氣も吐き出して居る此方の軒の樋嘴(ガアゴイル)の青銅飾越しに、燦く硝子が眺められた。白い寢間着の十位の男の子が三人、大きな枕をふり廻し、光の子供のやうに遊び戯れて居る。看護婦が笑つて廻りを動いてゐるのも見える。聲がちつとも聞えないので、樂しさうな光景を見てゐるうちに仲子は悲しい心持ちになつた。

右手には、矢張り建物の屹立つた端れと、下の街路樹の茶褐色の梢、教會の圓屋根、遠方でぼんやり淺黃色に霞んで居る市街の建物無數の連り等が展望される。

角度の工合で、仲子の場所から、ほんの一部分街路が瞰下せた。空地の角のやうな處で、稀な通行人が、機械的に其處

を曲るのが見えた。

仲子が此處で何より嬉しいのは、所の何處かで絶間なく囀つて居る雀の聲を聞く事であつた。數羽の仲間があり、彼等はきつと太陽の一杯さす屋根の斜面で羽繕ひをしたり、日向ぼつこをしたりしてゐるのだらう。小さい趾で金屬の樋か何かを渡るカサカサといふ音、やつと聞える羽搏きの音、そして性急な愛らしいチユンチユン、チクチユツ、チユツ、チクといふ囀り、此那大都會にもこのやうな聲が在るかと思ふ程、仲子には懐しかつた。無邪氣で、情が深く。――日本の雀、舌切雀が囀つたその囀りとちつとも異はない。チユツ、チユツ、チク……

人間の聲ばかり聞き、都市の雜音に堅くなつた鼓膜に、雀達の聲は、殆ど感歎を與へた。素朴さや、純粹さや、微妙な生きものゝ表情で。

仲子は雀の囀りにきゝ入つて居ると、いつも日本の田舎の竹籔や、自分の家の椿の木を思ひ出した。逆に日本の自然を觀る愛、穏やかな郷愁が湧く。西洋人が――詩や小説で見、讀みしただけだが――毎朝窓にパン屑を撒いて雀に饗應するといふ事、特に巴里のやうな都會に棲む者がするといふ心持、それが仲子にしみじみと理解されるのであつた。

清潔な室内は實に靜かだ。雀の聲は頻りに個の幸福や、安全に護られてゐるらしい彼等の生活の歌を歌つて居る。太陽は空の眞只中にのぼつて全市を照し、皎まつた空氣中で、青銅の樋口（ガアゴイル）からは今揺れる陽炎のやうなものが立つばかりだ。縞の毛布に縮まり、髪の毛のさまゝで暢々として居た仲子は、自分の直後で昇降機の開く音を聞いた。

（六）

仲子は、凝つとしたまゝ注意を其方に向けた。

「ほゝう！これはなか〳〵好い處だ」

仲子は、思はず椅子の上で振向いた。父の聲ではないか。父だ。

「――どうなすつたの！」

仲子は、感動して起ち上りさうにした。彼女は今日父に會はふとはまるで豫期しなかつた。父と一緒に佃が居る。

佐々は、急いで仲子に近づき手を執つた。

「こら〳〵さう亢奮してはいけない」

「どうなすつたのよ、本當に！もういゝの彼云つても。大丈夫？」

「もう今日で二度目だよ外に出るのは。もう大丈夫さ。ほら、この通り。先よりいゝ色をして居るだらう」

佐々は、屈んで仲子の顔のところに、彼の艶々して、全く平常通りの頬を出した。仲子は感情を制し切れず、延び上つて、外氣に曝されてつめたい、固い、剃りたての父の頬を自分の顔に押しつけた。

「さあ、さあ」

「だけれども、變ね、佃さんは昨夜も被來つたのに、何とも仰云らなかつてよ、今日被來るとも何とも」

佃は、彼の一番よい、穩やかな笑顔をして親子を見た。

「わざと云つて下さるなと願つて置いたからさ。一つ不意に出かけて來てお前を愕かせて遣らうと思つて。處でどうだね、お前の方は。大分達者さうに見えるぢやあないか」

佐々は、肱掛椅子を動して、仲子の斜向ひに坐つた。佃はその左の方に。

「來がけに下で、サムアヴェル博士か、あの人に會つて禮を云つて來たよ。十日も經てば退院出來るさうだよこの分な

ら――」

「其那に早く？まだ一遍も歩きもしないのに」

「かまはないさ、その車に載つて漕いで歸るさ」

「――西洋韃！」

皆が笑ひ出した。久しぶりで、父の潑溂とした聲や、眼付や、總て身の廻りの雰圍氣が、伸子には何とも云へず愉快であつた。彼が入つて來ると同時に、何處かに引込んで居た罪のない滑稽や、樂天的な生活の悅びが次から次に現れて、室內を翔び始めるやうだ。

伸子は、引越さうと云ふ新しい旅館について、種々父に質問した。佐々は、快濶に答へた。

「これもおあづけにして置かう。その方が樂しみでいゝだらう。自働車に乘る、遊つた路を馳る。さて降りると、お前のお歸りといふので、ずらりと玄關に並んだお仕着せが一どきに最敬禮をする――」

「――父樣、ゆふべ活動寫眞でも見て被來つた？」

「佃君に訊いて御覽、噓は決して云はない」

佃は其那御例噺の證人には立てない。彼は、上機嫌な、仲よい親子のお喋りの影響で、平和に晴れた顏付で居る。

伸子に、其が二重の悅ばしさであつた。父と佃とがそうやつて一緒に歩き、並んで居るのを見ると、新しい今迄なかつた幸福が湧いた。父と佃とが互に打ちとけ睦しければ睦しい程、見て居る伸子の嬉しさは極りない。彼女は椅子の上から、濃やかな燦く眼差しで二人を見較べた。

二人とも帽子をとり、日光をたつぷり受け、髮や外套の肩に光の閃きを躍らせて居る。伸子は、父と佃と、體の構造

は全然違ふのに、後頭部のふつくりした線がひどく互に似て居るのを發見した。佃の顔を正面から見るとさうでもないが、横で眺めると、その類似の爲、父の輪廓と同じやうな感じがある。伸子は、内心に、深い驚きの作つた啓示を感じた。自分は子供の時分から、幾百度、愛する父のこの頭や髮を愛撫したか解らない。大きい、重い、心持よい父の頭。佃が何處やら共に似た頭部を持つて居たとは。伸子の心に呼きが起つた。Good One . Good Omen.

今、佃と父とが話して居る。佃は、下街に川事があるが、次手に買ひ物はないか、歸途に又此處に寄つて父を誘はうか如何うかと訊いて居る。少し前こどみになり、彼の頭の後ろつきは一層はつきり伸子から見える。伸子は二人に呼びかけ、自分の新しい發見を告げたい衝動を辛うじて制した。

佃は椅子を押して立ち上つた、

「では――又これから行くところがありますから失禮いたします」

「今晩來て下さることゝ?」

「多分上ります」

佐々は、彼を見送り乍ら冗談に云つた。

「親子で君の時間を丸潰しで、恐縮です。」

佐々は、伸子と一緒に病院の簡單な食事を美味がつて食べた。

親子は、降誕祭の贈物について相談した。

「これはぢやあ定つたとして。――佃君にはどうしよう、」

寢台に戻り、横になつて父を眺め乍ら伸子は

「さあ」

と云つた。

「何かおあげになるの？」

「今度はなみ〳〵ならず世話にもなつたのだから、少しちやんとした物をやりたいと思ふ、記念の意味で」

仲子は、暫く考へて云つた。

「何か本はどう？　其でなかつたらいつかほら父様と行つて見た骨董屋ね、第五街の、あすこにあつたやうな波斯の小畫はどう？」

「ふうむ……然しそれは彼方の專門だからな、とんだまやかしものを贈つたりしたら失敬だ。」

仲子は、熱心に個の悦びさうなものを考へた。彼女は遂に苦笑して云つた。

「――判らないわ、どうも」

「そんなら矢張り考へて置いた通り禮裝用の控鈕にしようか」

仲子は

「變だわ」

と、笑ひ出した。

「ちつとも釣合はないぢやあないの、あのひとと。――其に父様、其那盛裝なんかする時があること？　――燕尾服なんぞ持つてゐるのはウェイタアをして居る人ぐらゐよ、きつと」

「一生のうちには役に立つ時もあらうさ。何も學問をする人間だからつて、年中茶色の襯衣ばかり着て居なければなら

ない法はない」

佐々は、二時過まで居て歸つた。仲子は、彼に用事を賴んだ。

「どうかお忘れにならないやうに、一ッ上靴を買つて被來つて頂戴な。起きるやうになつても足に穿くものを何も持つて來てゐないから」

（七）

翌々日は曇つた寒い日で、粉雪でも降りさうな空模樣であつた。

其にも拘らず、佐々は午後、仲子の賴んだ買物をして病院に寄つた。

忙しい氣持で、ぽつねんと本を讀んで居た仲子は、父と奇麗な上靴とを一時に見てすつかり喜んだ。上靴は光る絹絲混りの毛絲製で、薄藤色と白との配色であつた。爪先に、大きなりボンの結び飾がついて居る。

仲子は、胸の前に兩方揃へて並べ、彼方此方から眺め乍ら父に禮を云つた。

「どうも有難うございました。少し可愛すぎる位よ私には。」

佐々は、隅の、夜伽がいつも掛ける低い椅子から、滿足さうに、仲子を見守つた。

「少し俗つぽい形さ、どうも。然しまあどうせ間に合はせだからそれで勘辨して置いて貰はふ」

彼は、其朝母から受取つた手紙について、仲子に話した。其によると、日本にも甚だ惡性の感冒が流行して、死亡者が多いといふ事だ。

「私の寢た事はまだ仰云らないでせう？私すつかり癒つたら自分で書いて上げようと思つて居ります。」

「うむ、其がよからう。私もさう思つて自分の事しか云つてやつてない――」
佐々は、不圖眞面目な顔付になつて、顔を抑へ、人さし指で鼻髭をたゝいた。仲子は其を認め、訊いた。
「なに？お忘れものを？」
「いや、さうぢやあない……」
彼はやゝ唐突な調子で尋ねた。
「近頃、保田が來たかい」
「保田――あのお醫者？」
「うむ、佃君がサムアヴェル博士を紹介して呉れる前に呼んだ」
「一週間ばかり前かしら、一度被來つてよ。立派な薔薇を持つて。少し心持がわるかつたわ、斷られた患者にお菓子を持つて見舞に來るなんて、ね」
「ふうむ」
仲子は、平常に似合はず外側から物をいふ父の態度に疑問を感じた。
「あの人がどうかして？」
「何でもない事だがね、きのふ或所で一寸きいたことがあるのさ」
佐々は、上つ張りを一思ひに脱ぎすてたといふ風に直截な口調になつて云つた。
「佃君について非紳士的な蔭口を利いて歩く奴があるらしい――お前をどうとか斯うとか――ね。我々の生活に少しでも立ち入つた者はあの醫者位のものだし、さうらしい口ぶりも見えた。」

仲子は、父の顔を見たまゝ

「ふうむ」

と云つた。どう云ふ事かと思つて居た心配めいた心持が、其をきいて却つて鎮つた。仲子は、全然冷靜に其を受取つた。――彼女は、佃が決して其那陋劣な成心を持つて居ない事を、信じて居た。信じて居る程度は、地球に又明日といふ日があるのを總ての人間が信じて居ると同樣に深い。殆ど意識を絕して居た。仲子は、父が自發的に同じ事を云つたとしても、矢張り今の通り平靜であり得たらう。心持の上では聞いたも聞かないも同じだから。

保田は佃に反感を持つ理由が無いではなかつた。佐々は、仲子が發病した日、先づ手近な醫者として保田を招いた。保田は、仲子の痙攣を鎭める爲、二度モルヒネを注射したのださうだ。効果がなく、却つて變になるので三度目をしようとした時、佃が激しい見幕で其を中止させ、サムアヴェル博士が來てから遣るならやつてくれと云つた。博士が來モーフィーンはこれでたつぷりだ、と三本目をやめた。佃は、亢奮した調子で、保田の名譽心、自尊心を傷けたのだらう。

仲子は

「ふうむ」

と云つたきり、默つた。彼女は、先日保田が來た時、何心なく云つた自分の言葉を思ひ出した。保田は、彼女に精養の箱をよこし乍ら醫者の辛さを訴へた。素人のさか恨みといふ迷惑な場合に屢々遭遇しなければならない點を強調して。仲子は、心に自分の母が、子供の病氣の時如何那に夢中になつて活かさうとするが、母の病氣の時父や自分がどんな恐怖、信頼、不信頼の混同した情熱を以て醫者に對するか思ひ浮べ乍ら、云つた。

「お醫者様には、澤山の中の一人の患者といふ丈でせうが、周りの者、其者を愛して居る者にとつては、一大事ですものねどうして夢中になり易い」

保田は堂々たる風采の男であつた。彼が、若し、其體で、恐らく一寸聲を低め意味ありげにこせ〳〵左様いふ中傷的な言辭を弄して居るとすれば、滑稽だ。—濁つた、いやな戯畫だ。其は笑つて仕舞へるが、暗示されてゐる特殊な交渉といふ事實に對しては、自分にもある責任があると仲子は思つた。若し佐々が其點を尋ねたら、彼女は佃に對する自分の信頼と一緒に、ある通りを告げたらう。仲子は、さういふ未だ未熟な、微妙な問題から自分から觸れるのは好まなかつた。

佐々は、左手に華やかな上靴を持つたまゝ默つて居る仲子を、暫く見て居た。仲子も自分を見守る父の顔を眺め、唇をとがらし沈默して居たが、やがてひとりでに、穏やかな皮肉な微笑で口元をゆるめた。佐々の彼女の見て居る瞳にそれが照り返した。小さな輝きが、彼の眼の中に躍つた。彼は、間もなく

「やれ、やれ」

と云つて、大きな伸を一つした。仲子は笑ひ出した。佐々もつられて笑つた。雰圍氣はすつかり變つた。

佐々は二時間以上居たが、彼の細心さから二度と其事には觸れなかつた。夜七時に、例によつて佃が來た時、仲子はまるで無感情に、其間父から聞いた事を一瞬間思ひ出した。彼女は佃に一言其について話さうとする丈の重大さも感じて居なかつた。

佐々が少くとも一日置きに來るやうになつて、仲子の日常は變化に富むやうになつた

彼は、大抵何處かの歸途寄る。そして、小さい紙包を仲子に渡す。

「あけて御覧」

中から、多くの場合、かさばらない扉の蝶番、錠前、鎖をつないで置く鐶。さういふ金屬製品の買物が現れた。彼は其を仲子に說明して聞かす

「御覧、この鐵の鍛へ方がまるで違ふだらう、へな／＼の和製とは。確かりした仕上げだ。それでやすいこと〻云つたらお話しにならない。思ひがけない重寶をするから、目についた時ためて置くのさ」

時には、非常に色彩の好い布地が現れることがある。太い蠟を塗つた扣鈕つけ専用の縫絲が轉り出すこともある。仲子は

「お爺さん栗鼠のやうよ、父様は」

と笑つた。特に佃と父とが落合ひ、佃が、敬意から感服して父の說明を謹聽して居るのを見ると、仲子は、嬉しさと樂しさで輝き渡つた。

佐々が、（買つたまゝトランクに入れ、機會が來る迄どんなものを自分が買つたか忽ち忘れて居るといふ性だが）其と買物をするに、丁度よい時期であつた。

市街の商店といふ商店は、目前に迫つた降誕祭の爲、熱誠をこめて居る飾り、商品の魅力を増して居た。降誕祭！降誕祭！　市場で羽根を捲られ正札をつけられ、すらりと逆さに吊下げられて居る鷄さへ、彼等の黄色い嘴から降誕祭を叫んで居るやうだ。

特に、平和克復第一年の祝祭なので、複雑な感動が一般を通じて高まつて居た。

再び平和が歸つて來たといふ歡び、社會の方面に於て多事で且つ活潑であらう本年に對する漠然とした意氣込み。其

等の優しい眞面目な陰翳をつけるに、まだ鮮やかな過去の苦痛の記憶がある、社會事業家は、さういふ一般の感情を最も此際効果多く運用しようと活動した。

宗教家達は、本氣で彼等の説教を考へた。一九一四年來、基督教に對する信仰を失つた男女の壯年、青年は夥しい。彼等の多くは、理屈でなく、感情の上の幻滅から、絶望をして信仰を失つた。若し、平和、生活の希望と一緒に再臨した基督を示し得るなら、この降誕祭以上適當な時はなかつたゞらう。

仲子の病室では、赤い實をつけた柊の小枝が、電燈や、窓枠や、寢台の金棒に飾られた。彼女は、外界からすつかり遠ざかつた圍繞の裡に、降誕祭前夜の鐘を聴いた。

當日、仲子は父から、匂ひ菫の花籠と一對の本立てとを貰つた。佃は、彼女に人形を一つ呉れた。人形は、一種の流行となつた赤十字の服装をし、兩手をきつと側に垂れ、踊子のやうにぱつと見開いた眼で、箱から現はれた。仲子は、佃の選擇の何處か間が抜けて居るのが面白く、その贈物をよろこんだ。



子の前に泳ぐ

廣津和郎

『御婦人の方がいらつしやいましたよ。お子さんをお二人おつれになりまして』

女中が自分の部屋のドアを開けて、かう聲をかけた時、自分は弱つたな、と思つた、こんな事は屹度あるに違ひないと覺悟はしてゐたが、併しいよいよと云ふ場合になると、日頃の覺悟も何もどこやらに行つてしまつて、それについて一度も心の準備をして置かなかつたとでも云ふやうに、急にあはて出さずにゐられなかつた。おまけに自分は、その日までに書き上げなければならない小説があつてそれで苦吟してゐたのが、やつと筆が動き始めたところだつたんだが、これでその創作氣分もぶちこはしだと考へた。さう思つたら、その事がへんに腹立たしくなつて來た。

『何だつて、今頃……かうして俺が物を書き出してゐるところに……』その事が彼女の無智で、取りどころのない證據だとでも云ふやうな氣がして來た。

『通して下さい』と自分は女中に云つた。どうせ來なければならない不愉快な事は

來させなければならない、この世の中では不愉快な事だつて避けてはゐられない場合があるんだ、と云ふ風に自分は考へて、眼を一寸の間つぶつた。覺悟したぞといふ氣持を自分に見せようとしたのだ。

『エツチラ、オツチラ、エツチラ、オツチラ………』

彼女はそんな事を口の中で云ひながら、二人の子供に梯子段を一段々々登らせつゝやつて來た。上の子が四つで男、下の子が二つで女。その片手づつを引いてエツチラ、オツチラ一段づつ登つて來る形が彼女の聲で想像されると、自分は一寸センメンタルになつた。部屋から出て行つて、子供を抱いてやらうかと考へた。だが、自分は出て行かずにじつとしてゐた。

『十四番……ここだよ、ここだよ、お父さんのお部屋は……』

彼女はかう子供に云ひ聞かせるやうに云つた。そこまでは素直だつたが、それよりも少し高い聲になつて、

『お父さん、て呼んで御覽』と云つた時には、下宿中にその事を知らせてやらうと云つたやうな意識が、その聲の響の中に現れかけてゐた。

それがぐつと自分の胸に來た。

自分は立つて行つて、ドアを開けて、顏をしかめながら云つた。

『大きな聲をしないで、早く内に這入つたらいいぢやないか』

『へへへ』と云ふやうな笑が彼女の頰に現はれた。

『お父さんと云つたら困るの、え、お父さんと云はれたら困るんですか?……』

彼女の聲は高くなつた。さつき自分のところに彼女の來た事を知らせた女中が、廊下の隅の方に立つて、此方を見て

ゐたが、自分の眼がその方に行つたので、あはてて姿を隱した。――それが一層自分をならむらさせたが、自分は心を押へた。

『莫迦！』

自分はかう呟いて、もつと何か云つたら、彼女がもつと大きな聲で、聞こえよがしに返答するだらうと考へたので、そのまま部屋の中に這入つた。彼女も子供二人も這入つて來た。――四つになる男の子の方は、父と母との爭がもう解るといふやうな顏をして、じつと自分と彼女との顏を見較べてゐたが、べそを掻き出した。それにつれて二つの女の子の方が聲を擧げて泣き出した。さうしたらそれに卷き込まれて、また男の子もわあつと聲を出して泣き始めた。

自分は恥しかつた。『おお、よしよし、泣くんぢやない！…』と云つて、男の子の肩に手をかけようと思つたが、そんな月並な慰めは、子供に對しても云へない氣がした。――自分は『勘忍して呉れよ、なあ』と腹の中で子供に頭を下げた。が、耳にふたをするやうな氣持になつて、泣くままに泣かして置いた。

『俺は丁度今原稿を書きかけてゐたんだ。時間がまるでないんだ。昨日締切なのを、今日の夕方まで待つて貰つてゐるんだ。今少し書けさうになつて來てゐたんだ。』と自分は早口にさう云つてゐる中に、自分の言葉の忙しなげな響が、一層自分の心持を忙しなげにさせて來た。

『あたし又鎌倉に歸ります』と彼女がきつぱり云つた。

『それは鎌倉に歸るもいいが、俺の兩親と折合やしないぢやないか。――後でその事は又話しに行く』

彼女は部屋の中をじろじろ見まはしてゐた。部屋の壁際に女持の懷中鏡のあつたのを彼女は見つけて、それを手に取つて、

『これ、誰んです?』と云つて、自分の顏を睨んだ。
『ふん、それは岸本のお母さんのだ』
自分は偶然にそれがお光のでなくつて、ほんたうに岸本のお母さんの鏡であつたので、氣が强くはつきりと云つた。岸本のお母さんは岸本と一緒に、やつぱりこの下宿にゐるのだが、岸本の部屋と自分の部屋とは、同じ家族のやうに行き來したゐるので、お母さんも始終自分の部屋に來る。それで偶然そこに鏡があつたわけなのだ。
『へえ』と彼女は云つた。そして尙もじろじろ部屋の中を見まはしてゐた。彼女が見まはすにつれて、自分も部屋の中を見まはした。好い鹽梅にお光の着物だの道具だの、有らゆるものが、その部屋になかつた。それも偶然だつた。自分はその偶然を喜んだ。
『――大變色の黑い女なんだつて、しやあしやあと電車の中にお二人で腰かけてゐるのを、見た人があつて、さう云つてゐましたよ』
『莫迦!』と自分は腹の中で呟きながら、皺の寄りかかつた、自分より年上の女の嫉妬に燃えてゐる顏を見てゐた。――これも偶然だが、お光は昨日から國に行つてゐた。自分より十歲年下のお光が、今日ここにゐなかつたといふ事は、何と云ふ幸運なことだらう。
『何處に行つてゐるんです、その女は?』
『……』自分は答辯の限りにあらず、と云つたやうな顏をして、返事をしなかつた。
『何處に行つてゐるんです、云へないんですか、あたしに?』
『お前に云へない事なんかあるものか。國に歸つてゐるよ』

『一人で國に歸つて行つたんですか？』
『さうだ、一人で國に歸つて行つたんだ』
『よく歸せましたね。——汽車の中で男でもこしらへやしないかと、さぞ御心配なことでせうね！』
『……』自分は怒鳴らうかと思つた。だが、自分が怒鳴つたら、彼女は自分の三倍も怒鳴り返すだらう。
『お前は何を云ひに來たんだ？……併しお前の云はうとする事は大概解つてゐる。だが、高壓的な調子か何かで物を云つて來たつて、俺はお前の云ふなりになりはしない。俺はお前に對して悪いとは思つてゐない。俺達の關係が、うまく行かないと云ふのは、俺達の生活が不自然なんだから、責めるならその點しか責められない。……だが、今日は止せ。俺は原稿を書いてゐるんだから、いづれ俺の方から詳しい事は話しに行くから』
『その女とお別れなさい！』
『今日はもう止せと云つたら。——その女と別れたところで、お前のところに俺の心が行くなどと云ふ事は到底あり得ないんだ。それは俺自分がさう努力して見たつて、さういふやうにならないんだから、仕方がない。まあ、今日は止せ！』
『あたしは何處までも、くつついてゐてやるから。どこまでもくつついてゐてやるから——』
自分は彼女の力味返つた顔を見たら、急にをかしくなつた。そこで自分は笑ひ出してしまつた。
『まあ、止せ。今日は止せ。お前もよく考へて見てくれ。……日本といふ國ではお前のやうな感情が正當のやうな顔をしてゐて濟んで行くが、そんなやうな意地だけで物を考へないやうな時代が來れば、我々のやうな不自然な狀態は、お互に我慢がならなくなつて來るんだがな。意地なんていふものは一番つまらないものだといふ事が解つてくるんだがな——』

『口惜しいイ！』

彼女がさう云つて、ヒイと云つて泣き出した。好い鹽梅に子供達二人は、さつき泣いてゐたのが、泣き疲れたのか、女の子は疊の上に仰向けになつて、男の子は自分の膝を枕にして、そのまま眠つてゐた。若し子供達が眼が覺めてゐたら、その母親の泣聲が傳染して、一緒に母子三人が泣き出して、自分を途方に暮れさせたかも知れない。――だが、母親一人の泣聲でも、かなり自分を途方に暮れさせないではをかなかつた。

自分は彼の女を可哀さうにもなつて來た。いや、遠くから、客觀的に、つまり一人の人間として考へる時に、いつでも氣の毒になつて來るのである。――家の都合で、婚期の遲れた彼女は、熟し切つた肉體を持扱つてゐた。そこに彼女の姉の一家が彼女の家に寄寓した。さうしてゐる中に、彼女は姉の良人の子供を生む事になつてしまつた。そして姉夫婦がそのために、その一家を逃げ出してしまつた後に、偶然そこに自分が寄寓して、結局彼女と結婚する事になつて、二人の子供を彼女は生んだ。だが、この年下の良人は彼女を愛さなかつた。そしてそのためにその良人は、彼女の妹に子供を生ませる事になつてしまつた。同じ事は繰返されたのだ。彼女の姉の良人の子供を生んだ彼女は、彼女の妹に彼女の良人の子供を生ませてしまつたのだ。まるで因果話のやうな話だ。――今だから、自分もこんな事を平氣で述べられる。だが、この淫蕩の嵐の渦卷中に陷つてゐた時には、自分の頭は狂亂と紛糾との巣だつた。――自分は彼女の一家の人々が、或正直な共通な性質を持つてゐる事を知つてゐる。だが、正直で淫蕩と云ふ事は、人間として、客觀的に憎むべき事ではないに違ひない。何故なら、理性の發達してゐる人が、身を持して行く上に於いて、一つの幸運を神から授つてゐるといふ事が云へるなら Womb の他の部分に比して發達してゐる女達は、その事によつて、身を持して行く上に、不運を神から授つてゐると云へるからだ。

『女といふものは………』

彼女の父親は、もう六十幾つかの老人で、正直で、善良で、その正直と善良とのためにいろいろの商賣に失敗して、その頃は家計の事はすつかり妻や娘にまかせて、自身はぼんやりと老後を送つてゐたが、その父親が自分に向つてよくさう云つた。

『女といふものは………』

溫厚な老人は唯さういふだけで、それ以上その事を説明しようとはしなかつた。だが、自分はその老人がその妻から、貞操の事で度々の苦痛を甜めさせられた事を聞き知つてゐた

若し老人の娘達の一人一人が、さういふ問題で、貞操りに如何に老人の心を惱まして來たかを老人に語らせたら、我々は老人の手を執つて、彼をどうして慰めたらいいかに困惑するに違ひない

『たとひあなたが娘を離緣なさらうとも、わたくしだけは、何とも申しません』

老人は溜息つきつき、自分にかう云つたこともあつた

……だが、こんな話は今は止めよう。

それで、自分は今も云つた通り、一個の人間として、遠くから彼女を考へる時、彼女に哀憐も同情も湧くのであつた。彼女との同棲中、自分は彼女を幸福にはさせなかつた。自分は始終家を明けて、彼女の側に歸つて行かなかつた。

……そして今又、自分は彼女から離れて、他の女と同棲してゐるのだ。そして法律上でゆるされた彼女を妻と呼ぶ氣はしないで、新らしき同棲者を、妻と呼び、心から妻と思つてゐるのだ。

若し他日自分と彼女との間に、離緣話の熟する時があつたら、自分はその離緣の理由に彼女の缺點は數へまい。彼女

の强情も、無性も、教養のなさも、總てその理由にはならない。良人らしくなさの缺點は自分の方が多さうだ。――自分は唯かう云はう。

『自分に彼女に對する愛がないのだ。理由はそれだけです』と。

▽

結局その日の會見も、彼女がそれから十五分ばかり泣いて、そして彼女の云ひたい事を云つて、そしてそれが部屋の外に洩れない事を自分が希望して、そして自分がなだめるやうに、だが、彼女の抗議をしりぞける事は忘れないやうな返事を幾度か繰返して、その中に時間が經つたので、彼女は不得要領の中に歸ると云ひ出した。

女の子は少し前から起きて、彼女の膝の上にまたがつて、彼女の乳を飲んでゐた。

『進ちやん』かう云つて彼女は男の子をゆり起した。『お母さんは歸るよ、もう』

『うゝ』とまるまると肥えた進一は、自分の膝から頭を上げて、身體を起して、眼をこすり出した。

『さあ、歸りませう、進ちやん』

『うゝ』

『進坊は置いて行つたらどうだ？』と自分は優しく云つた。『後でお父さんが送つて行つてやるからね』

『うん』と進一はうなづいた。

『ぢや、お前はもつと遊んでおいでかい？――この子は昔つからお父さんツ子だから』

彼女も優しい調子で云つた。――いや、彼女のその調子の中には、自分の氣を引かうとするお世辭があつた。自分は

彼女を氣の毒に思つたが、併し進一がにこにこして、後に殘ると云ふのが、彼女の前で、何だか誇らしくもあつた。

彼女が女の子と一緒に歸つて行つてしまふと、自分はおちついた、ゆつたりした氣持で、わが子と二人つきりになつた。自分は何とも云はれず嬉しくなつて、涙ぐまれて來た。——進一の身體を抱かない事が、もう四五ケ月になつてゐた。

自分は子供を抱き上げて、子供のまるまるした頰に、自分の頰を押しつけた。

『お父さん、頭の押しつこらしませうか?』と進一が云つた。さうして自分の膝の上で立上つて、彼の小さな頭を、自分の頭に『うん』と云つて打つつけて來た。これは半年前、鎌倉で自分達がよくした遊びだつた。進一の身體は骨太で、嚴丈に出來てゐた。『石頭』から我々が呼んでゐたやうに、子供の癖に頭が固かつた。『うん』と云つて打つつけられると、割引なしに、痛くて閉口だつた。

『もう好し、もう好し』と自分は云つた。『お前は丈夫でいいな。——進坊、お前に帽子を買つてやらうか?』

壁際に置いてある進一の帽子を見ると、去年自分が買つてやつたもので、古くなつてゐるばかりか、もう今の進一には小ささうだつた。

『うん』と進一は答へて、躍るやうに手足を動かした。嬉しい時に進一のするいつもの表情だつた。

『よし、買つてやらう!』

自分は立上つて、子供の手を引いて、部屋から出て行つた。梯子を下りて、玄關に行くと、宿のおかみが、

『まあ、可愛らしいお坊つちやまですこと』と云つた。

自分はまぶしいやうな氣がした。――今日まで何も知らないでゐた宿の者達が、さぞ吃驚したらうと思つた。いろいろな臆測をされる事は不愉快だな、と考へた。國に歸つてゐるお光が可哀さうだな、と云ふ氣もした。だが、お世辭にも子供を賞められると云ふ事は、結局うれしいものである。

『お幾つです？』

『四つです』

『ほんたうにお可愛らしい顔をしていらつしやいますね』と結婚してから七八年になるのに、未だに子供がないので、子供を始終欲しがつてゐるおかみは、お世辭ばかりではない愛想を見せて、立つて來て、進一に下駄を穿かせたりした。自分達は神樂坂通りに出て行つて、進一の帽子を買つた。――一緒に伴れて歩くのも久しぶりだな、とそんな事を、今更のやうに考へた。

『あツ、オートバイ』

オートバイの通るのを見て、進一は喜んでそれを指さした。

『自働車に乘せてやらうか』

『うん、自働車に。――それから電車にも乘るのね』

『よし、電車にも乘らう』

自分は院線――その時分は省線とは云はなかつた――に乘つた。自分は電車に乘つたら、急に原稿の事が氣になり出して來て、頭が暗くなつたが、そんな事は、今は仕方がないと考へた。

『あツ、池！』と窓から進一は、お茶の水の下の川を指さした。——水があると池だと思つてゐるらしいのである。
『あれは池ぢやないよ、川だよ』
『ふう』解つたやうな解らないやうな聲を出して、進一はさう云つた。
『あツ、自働車、自働車！』
見ると、お茶の水の向ふ岸の上を自働車が走つてゐる。
『お父さん、牛、牛、牛、』
『うん、牛だね。』と自分は荷車を引いた牛が、それを追ひ越して行つた自働車の後から、初夏の日を浴びて、ぼそりぼそり歩いてゐるのを見た。
『電車、小さい電車……』
『ああ、あれは市電といふんだよ、今進坊が乘つてゐるこの電車ね、これは院線……』
『インセン……』
『ああ、インセン……』
『お父さん鎌倉のも小さいね、それから横濱のも……』
『うん、お前はよく覺えてゐるね、鎌倉のも、横濱のも小さいよ』
そんな風にして、自分は進一と一緒に窓から外をながめてゐた。六月末にしては天氣の好い日だつた。光つた空や、青葉や、煉瓦の建物や、いろんなものが眼にチカチカした。
新橋で自分達は下りて、驛前で珈琲を飲んで、——この珈琲を飲むことに就いても、自分には思ひ出があつた。もう

一年も前の話だ。自分が進一を銀座へつれて行つて、珈琲を飲んだら、その後、お父さん、珈琲飲みに行かうか』さういふのが、自分の顔を見ると進一の口癖になつてしまつた―― これから自働車―― あのタクシイのフオオドのぼろ車だ。

『ブ、ブ、ブー、ブー、』

自分がタクシイを呼んでゐる間、進一は有頂天になつて、頬つぺたを空氣でふくらまして、このブー、ブー、を叫びつづけてゐた。

車が走り出すと、あの振動のひどい車の中で、小さな身體をぽんぽんはづませながら、尙ほ得意さうにブ、ブー、をやつてゐた。

『やあ、日比谷公園だね、お父さん』

『ああ、日比谷公園だよ』

自分は何だか胸が何かの感激でいつぱいになつて來た。

『ねえ、坊や、お前は鎌倉のお爺さんやお婆さんをお好きだつたね。今度お父さんと鎌倉に行かうか?』

『鎌倉のお爺さんおばあさん、意地惡だから嫌いだ』

『誰がそんな事を云つたの?』と自分は云ひながら、急に腹立たしくなつた。子供にそんな事を云ひ聞かせる、何と云ふ事だ、と自分は彼女や彼女の一家の者が憎くらしくなつて來た。おぢいさん、おばあさんは、進坊をあんなに可愛がつて下すつたぢやないか?』

『さうかい』と張合がない。『自働車、お父さん、自轉車……』

『ああ、自轉車だね』と自分は吾々の自働車に見る間に追ひ越された自轉車の、鳥打帽をかぶつた男が、足をいそがし

げにくるくる伸したり縮めたりしてゐるのを見ながら云つたが、『若し彼女と別れる場合、進一の方はどうしても手放す事は出來ない。女の子の方は向ふにやつても、この子の方はどうしても手放さいぞ』と云つたやうな事を、力味返つて考へてゐた。

『ねえ、進坊、おぢいさんやおばあさんは、それはお前を大事にして下さるよ。それは可愛がつて下さるよ』

『…………………』

『お前お父さんは大好きだらう？』

『ああ、お好きだよ』

『どんなに好きだい？』

『こんなに好きだよ』と進一は兩手を擴げて見せた。

『お母さんは？』

『お母さんも好きだよ』

『ねえ進坊、お前はお父さんとお母さんとどつちが好きだい？』

自分は身體中が緊張して來るのを感じた。

『兩方好きだよ。……』進一は煩さうにかう云つた。そして、自分の顏をちつと見たが、――ああ、この子はこんな事でも解るんだな、と云ふ氣が自分はした。――『どうてそんな事を訊くんだい？』

『うん…………』

自分は子供の一言に行き詰つてしまつた。『どうしてそんな事を訊くんだい？』――自分はその言葉を咽の中で鸚鵡返

しに繰返した。『どうしてこんな言を訊くんだい？』

四つになる我子の前に泳ぐ眞似をする。――自分は自分の哀れな姿をまざまざ見た。自分は暗涙を呑み込んだ。

『お前は利口だね、坊や、お前は利口だね』自分は進一の頭を撫でながら、心が泣き笑ひに搔きむしられるのを堪へてゐた。

『外務省、外務省！』

子供は外務省を指しながら叫んだ。

自分は默つてしまつた。

タクシイは彼女の里　彼女の兩親の家の方へ、次第に近づいて行つた。



湖畔手記

葛西善藏

たうとうこゝまで逃げて來たと云ふ譯だが——それは實際悲鳴を揚げながら——の氣持だつた。がさて、これから一體どうなるだらう、どうするつもりなんだらうと、旅館の二階の椅子から、陰欝な色の湖面を眺めやつて、毎日幾度となく自問自答の溜息をついた。海を拔くこと五千八十八尺の高處、俗塵を超脱したる幽邃の境、靈泉湧出して云々——と書き出してある日光湯本溫泉誌と云ふのを、所在ないまゝに繰りひろげて讀んで見ても、自分の氣持は更にその境に馴染んで來なかつた。よくもこゝまで上つて來たものではある、が今度はどうして下れるか、自分の蟇口は來る途中でもう空になつてゐた。どこに拾圓の金を賴んでやれる宛はないのである。心細さの餘り、自分はおゝ妻よ！　と、郷里の妻のことを思ひ浮べて、幾度か胸の中に叫んだ。でこの手記は、大體妻へ宛てゝ書くつもりだが、が特に何かの理由を考へ出したと云ふ譯では無論ないのだ。昨日——九月九日のある東京新聞の栃木版に、生ける屍の船長夫妻と云ふ見出しで、船の衝突で多數の人命を失つた責任

感から、夫妻で家出して、鹿沼町の黒川と云ふ川に深夜投身自殺を計つたが、未遂で捜し出されたと云ふ記事を自分は寢床の中で讀んだが、町の人々の間にはそれが狂言自殺だなぞと云ふ非難もあると書かゝれてゐるが、そんな年配の夫妻が狂言自殺？――そんなことがあり得るだらうか。そしてまた、その生ける屍と云ふ文句が、自分の聯想を更に暗い方に引いて行つた。

「生ける屍か……」と、自分はふと口の中で呟いた。

白根山一帶を蔽ふて湧き立つ入道雲の群れは、動くともなく、こちらを壓しるやうに寄せ來つゝある。そして湖面は死のやうに憂鬱だ。自分の胸は弱い。そして痛む。人、境、倶不奪――なつかしき、遠い郷里の老妻よ！ 自分は今ほんたうに泣けさうな氣持だ。山も、湖水も、樹木も、白い雲も、薄綠の空も、さうだ、彼等は無關心過ぎる！

今日は東京で、親しい友人の著作集の出版紀念會に、自分も是非出席しなければならないのだつた。それも駄目、あれも駄目。仕事の方も駄目、皆駄目なことになるのだ。斯うしてすべての友人からも棄てられ、生活からも棄てられて、結局生ける屍となるか、死せる屍となるか、どちらかなんだらうが、慘めな悲鳴を揚げつゝ逃げ廻る愚か者よ！ 自分は自分のその、慘めな姿を凝視するに堪えない。

雲の山が、いつの間にか、群山を壓してしまつてゐる。湖水は夕景の色に凝つてゐる。自分は少し散步して來よう。

……

白根山、雲の海原夕燒けて、淒し思へば、胸いたむなり。

秋ぐみの、紅きを噛めば、酸く澁く、タネあるもかなし、おせいもかなし。

湯瀧のさき、十五町ほど湖畔の道を、戰場ケ原を一眸の下に眺められるあたりまで、道々花を摘みながら、ゆつくり

と歩いた。原一面薄紫色に煙つてゐた。何と云ふ美しい眺めだらう。十八九年前の思ひ出から、自分は夕闇の迫つて來るのも忘れて、しばらく立つてゐた。湖水の暗い色は、冷めたい戰慄を傳へた。

自分のかゝりの女中は、あい子と云つた。二十だと云ふが、十七八にしか見えない、素直なやさしい娘である。彼女は自分の採つて來た花を帳場に持つて行つて、一つ〱紙片に名を書きつけて來て呉れた。――秋グミ、大カメノキ、ツリガネニンジン、ゴマナ、ニガナ、ハタザヲ、ワレモコウ、ミヤマウド、ヒヨドリバナ、アキノキリンサウ、コウゾリナ、ヤマハハコ――自分の知つてゐたのは秋グミだけだつた。

いつもの晩より遲く、二時頃まで自分は酒を飲んだ。滞在客はほとんどゐないのだ。それで女中たちは代る〱遊びに來て呉れた。ナカ子、ハナ子、マス子、ツル子、ハマ子、ユキ子、それとアイ子との六人居るのだが、女中と云ふよりは娘と云つた感じの、十六七から二十までのやさしい氣立てのいゝ娘たちである。早く十一月になつて、日光の町にさがる日を、彼女等はどんなにか樂しみに待つてゐるらしい。そしてきた彼女等は、自分のことを、どんな人間かと疑つて見たこともないかのやうに、無邪氣に振舞つてゐる。それが時々自分を憂鬱にさせる。………

四日の日――さうだつた、Kの咯血したのも、やはり先月の四日だつたが――自分は朝から金策に出歩いてゐた。自分は月末の下宿の拂ひを濟ましてなかつた。自分は九月號の雜誌には一つも書けなかつたので、全然の無收入だつた。自分は二三の雜誌社を廻つた。が下宿に差出すべく餘りに少な過ぎる額しか、出來なかつた。それに、前の晩またもおせいと醜い掴み合ひの喧嘩をやつたので、兎に角ひどく厭な氣分の日だつた。牛込にKを訪ねたが、Kはやう〱床の上に起きあがれる程度で、まだ談話は遠慮しなければならなかつた。やはり一度咯血したことのある弱い細君の顔は痛痛しいほどやつれてゐた。自分はそこ〱に外へ出て、若松町から電車に乘つたが、すつかり滅入つた氣分だつた。一

ヶ月前の咯血の時、細君から速達郵便を受けて車で駈けつけたが、咯血がなか〳〵止まらなかつた。咳く度に迸つて出た。自分も四五日の間、食がふだんのやうにたべられなかつた。三四年前自分もその經驗では、どれほど脅かされたものだつたらう。

「あの容態では、どうかなあ？よくなれるか知ら。何しろたいへんなことだなあ……」

と、思はずわがことのやうに、暗い溜息をついた。

神樂坂の鳥屋に遲い晝飯にはいつて、酒を飲んだ。下宿の出がけにポケットに入れて來た、玄關の狀差しにはいつてゐた郷里の長男からの手紙と、信州の別所溫泉から出したSからの繪葉書とを、盃を舐めながら讀んで見た。長男からの手紙は、九月の新學期に間に合せて、どうして學用品の代を送つて呉れなかつたかと云ふ、詰責の文句だつた。心にかけながら、つい送つてやれなかつたのだ。Sは十日程前から、戀人と、信州の溫泉めぐりをやつてゐるのだつた。別所溫泉は自分も六七年前に半年程引かゝり、田舍藝者にふられた小說を書いた思ひ出の土地だつた。高原に立ちて四方の山々を眺め、雲を見る、多少の感慨無き能はず——斯う云つたやうな文句が走り書きに書かれてあつた。斯うした簡單な文句が、自分にはいろ〳〵なことを想はしめた。羨望とも、同感とも、同情とも、云ひやうのない氣持だつた。何と云ふヒタ向きな男だらう！勇敢な熱烈な戀——自分は、氣持を引緊められるのを拒ぐことが出來なかつた。彼等の直情な戀に較べて、自分とおせいとの關係の、如何に醜く、耻づべきだか。互ひにドブ泥のなすり合ひをしてゐるやうなものなのだ。戀でもなく愛でもなく、そして彼女は姙娠三ヶ月？……自分は飲んだ酒がグツとこみあげて來るやうな氣持した。淺ましくも、呪はれた、自分等二人だ。妻よ、輕蔑と憐れみを以て、許してほしい。さうだ、自分は今では、おせいにすら輕蔑されてゐるやうな、すつかりヤクザな人間なのだ。

俺もどこかへ行きたい。どこかへ〳〵、行つちまひたい。そして當分歸つて來まいか知ら。……下宿へ歸つたつて、何が自分を待つてゐるんだ？書き損ひの原稿と、あの髪を蓬々さした、狐憑きのやうな眼付きして、厭な嫉妬氣取りのおせいとが待つてゐると云ふ譯かな。あゝ、厭だ〳〵。何も彼も厭だなあ。……行つちまへ！行つちまへ！」と、自分は心の中に繰返して、われと勢ひづけた。

「この停滯、この墮落、自分の全身中がドブ泥見たいなものでいつぱいなんぢやないか知ら？、これが人間の生活だとは、俺自身にも考へられない。一日でも一刻でも、この頃の生活を棄てろ。二人で醸す惡臭から遠退け。でないと、貴樣は今に自分から窒息するのだ……」

ふと十八年前、二十の年、暑中歸鄕の途中、日光見物旁々湯本から金精峠を越へ、鬼怒川の上流に出ようとして、途中無理をした爲め戰場ケ原にさしかゝつた時分にはもうすつかり日が暮れ、その上大雨に降られ、初めての道ではあり、原の眞中頃でどうにも歩けなくなつた時、後から牛を曳いて來た十五六の少年に助けられ、二荒山の下の木挽小屋で、一晩泊めて貰つたことのある――その戰場ケ原のことが、ふと頭に浮んで來たのだつた。「さうだ〳〵、あそこがいい。あの原を久しぶりで見て來よう。あの憂欝な湖水もよかつた……」自分は鳥屋からツーリングを呼んで貰つて、すぐ上野驛へ驅けつけたのだつた。

その當年の少年も、今では幾人かの父となつて、平和な日を送つてゐるのか知ら？彼は二十四五の兄と二人で、その小屋で炊事役をし、兄の挽いた板を牛で日光の町へ運び、そしてまた兄の木挽きの弟子でもあつた。丁度その日は彼等の父が日光の町から酒の二升樽をさげてやつて來たのだが、息子が酒を飮まないので、おやぢさん一人で手酌で飮んでゐるところだつた。自分のびしよ濡れの小倉服は土間の焚火のまわりにかけ、息子の褞袍を着せられて、生干の椎茸と

川魚を大鍋で煮たのを肴に、空腹に熱燗をしたゝかに御馳走になつた。自分とおやぢさんとは、三枚ほど筵を並べた板敷の上に、蒲團まで着せられて寝かされたが、息子たちは土間の焚火のまわりに横になつて、一夜を明かしたのだつた。それからざつと二十年、忘れ得ぬ懐かしい旅の思ひ出であつた。その一夜を思ふ時、自分の荒み切つた胸にも、人生と云ふ母のふところに温ためられた少年の日が、還つて來る氣がする。

自分は今度もまた、雨の中を、夕方四人の田舎婆さんと乘り合せ、ガタ馬車に揺られながらその原を通つて來たのだ。方角はたしかさうらしいが、ずつと道に近く、二棟ばかりの小屋が立つてゐた。滯在中に一度それとなく、訪ねて見よう。

十四日。發熱八度三分。左脊部肋間の神經痛堪え難し。アスピリンを飲み終日臥床呻吟。昨夜の無理がたゝつたのだ。「すべてが、妄想と云ふものゝ仕業か知らん？絶望して見たり、希望を描いて見たり、憎悪、愛着、所有感、離脱感——何もかも皆己れと云ふ擴大鏡を透しての妄想と云ふものか知らん？あの山の樹木、湖の水が自分等に無關心のやうに、自分も社會、人間、周圍に對して無關心な氣持になれないものか知ら。生の溺愛か、離脱か、はつきり出來ないものか知ら。はつきり出來ないところに何か知ら生活の味……？」が斯んな山の上に來て、蒲團の中で斯んなことを考へたりする自分の阿呆さ加減に氣づいて、ひとりできまりわるくなつた。

近所で材木を挽く鋸の音、庭の筧の音、鶏や家鴨の聲、下山の準備で屋根屋、大工、經師屋などはいつてゐるので屋根上でトタンを打つける音、槌の音、さま〳〵な音で晝間は山の宿も決して靜かではないのだが、熱のためについうつら〳〵と寂滅の境に落ちてゐた、

昨日は珍らしくカラリと晴れて、そして暖かだつたので、氣分がいくらか好かつた。それで、宿料の心配から、午後から何かしら書きはじめたいと思つた。按摩を呼びにやつた。こゝへ着いた翌日かに一度呼んだことのある、五十近い、口髭なぞ刈込んだ、やはり日光在だと云ふが、中年後に習つたのだと云ふから下手だつたが、この前の時はわりに叮嚀に揉んだ。昨日は無茶だつた。「旦那の身體は一度揉んですつかりわかつちめえましたから、こゝのとこさへよく揉んで置くとね」斯んなことを云つては、左りの肩胛部のあたりを滅茶苦茶にグリ〳〵やり、强く叩き、頭もほんの形式ばかりに手拭を卷いてゴシ〳〵やりながら「どうですね旦那、片手で斯う云ふ風に緊まるのですぞ」なぞと自慢らしく手拭を右左りと片手で引き絞つて見せ、それで「どうもお粗末さま」斯う云つてペコンと一つ頭をさげ、いくらかは覗えるらしい薄氣味わるい眼の、土氣色した顏を自分に向けた。腰をさすらうとも横になれとも云はなかつた。この前の時もさうだつたが、それでやはり上下分の料金七拾錢を帳場から持つて行くのだつた。さすがに自分も毒氣を拔かれた氣持で「それでは………」と云つて、この前と同じやうに五拾錢銀貨を一つ彼の大きな掌に載せ、呼鈴を押して女中を呼んだ。自分はすつかり脅えた氣持で蒲團の中に横になつたが、亂暴な揉み方や叩き方を意固地に我慢してゐたお蔭で、折角溫泉で鎭つてゐたのが、急にチク〳〵痛み出して來た。ホーツと熱が出だした。按摩の殘して行つた惡臭がいつまでも鼻から消えず、手垢で染つてゐた手拭が、眼から去らなかつた。後悔と疲勞で、自分の氣分は滅茶々々だつた。

「水神様のお祭りで船競漕があるさうですから、いらつしやいませんか」と、晝のお膳の時、あいちやんが誘つて吳れた。

「皆さんが行くの？」

「え、うちからもみんな行きますし、よそでも大抵行きませう。それに福引きや何かもあるんですよ」

「さう。ちやあ行つて見てもいゝな」と、自分は云つた。

どうかすると、褞袍一枚では散歩に出て肌寒い感じのするやうな天氣の續く此頃としては、申し分のない好日和だつた。二時頃、宿の褞袍に鳥打帽をかぶり、氣樂な浴客らしく手拭ひをさげ、赤い緒のすがつた宿の下駄を突かけて、ふらりと出かけた。わりに大きな建物ばかしだが旅館としては六軒、店屋が三軒ほど、養魚場の出張所、電燈會社の出張所、馬車屋、駐在所、二三の木挽き小屋、狹く暗い共同浴場の幾棟、溫泉の神樣の小さなお宮——これだけで、この山山の行止まりの湖畔に小さな部落を造つてゐるのだつた。自分の宿からも湖畔まで一町となかつた。ドゝン／＼と太鼓の音がしきりに聞えて、旅館の女中さん、おかみさん、若奧さん風の女、皆それ／＼に盛粧を凝らし、いろ／＼な色のパラソルをかざしなどして、ぞろ／＼湖畔へと繰り出してゐた。その間に背に「ゆ」と赤く染めた印半纏を着た男たちが忙がしげに駈け廻り、すつかりお祭り氣分だつた。湖畔の巖の上に祭壇が造られ、白木の三寶の上に大きな紅白のお供へ、一升ビンの御神酒、長柄の銚子に三つ組の盃、白幣、御神燈、そして湖水からでも拾ひあげたらしい頃合ひの石に墨で「水神祭」と書かれたのが、立てられてあつた。渚に立てられた栂か樅の荒削りの眞新しい長い丸太に張りわたされた綱には、紙の國旗が長閑な感じに動いてゐた。その下でお宮のらしい大太鼓がドゝン／＼と若い衆の手で鳴らされた。道わきの石垣の上には賞品や福引の袋が積まれ、應援の樂隊として一つのボートに石油罐が二つ積み込まれた。

一、櫓競漕。二、竿競漕。三、盲目競漕。四、ボートのリレー。——餘興は斯んな順序で進むのだつた。選手は養魚場の番人、木挽き兼船頭、旅館の主人や番頭、馬車屋——年齢にして十六七から五十六七と云ふ雜多な取組であつた。

「なか／＼始まりませんね」

「第一神主さんがゐないんで祭文の讀み手がないと云ふ騷ぎなんですよ。何しろ今年から始めたんださうだから……」

と、山崩れを防ぐための、道わきの低い石垣に並んで腰かけた同じ宿の滞在の客が、自分に教へた。

宿の女中さんたち八人、小さな子守りの娘まで加はつて、皆羽織姿ながら美しい色彩を見せて、自分等のすぐ前の渚の石垣に、石入りの指輪を見せた手に美しい日傘をかざしなどして、ずらりと並んで腰かけた。宿々のさうした幾組みかで、祭壇の廻りや狭い道ばたが埋められた。それが満山の濃緑、湖水の深碧と對象して、時ならぬ一團の花叢を見せたかの感じだつた。そしてそれが更に絃歌臭を聯想せしめず、また山の荒くれ男たちに手折らるべく、美し過ぎる、山の少女たちの感じだつた。それらが、時々ブウ〳〵笛を鳴らしながら中禪寺から登つて來るガタ馬車の田舎婆さんや、一晩泊りの女づれの客や、中禪寺から散歩の西洋人夫婦などの眼を見張らせた。

やがて、大工さんでもあらうか――年配の男が何やら讀みあげると、娘たちに福引袋が渡され、先づ世話役や選手たちが御神酒をいたゞいた後、そこに見物に來てゐた男すべてに、その銚子と盃で御神酒が注ぎ廻され、その上に男、女、子供の差別なく一同に二寸大の紅白の餅が配られた。

「どうも行屆いたものですなあ」と、自分等は感心した。

帶上げと香油と束髪の櫛、足袋と白粉と手鏡、帶上げとハイカラな封筒と絲卷き――大抵はさう云つた取合せのものだつた。可哀相に、十三の筒袖着た子守娘は、一番貧しい袋に當つた。

「何がほしいの？何かほしいものある？」自分は宿へ歸つて何か買つてやりたいと思つたが、その子は答へなかつた。

斯うして、やう〳〵競漕が始められた。白根山續きの外山と云ふ山の麓まで、渚から二町餘りもあるのか知ら――その麓近くに、横に一町程の距離を置いて二つの浮標が置かれ、それを籤引きで分けた八人宛の紅白二組の競漕だつたが、先頭に乗り出した紅組の馬車屋のTさんと云ふ二十一二三の屈強の若者の櫓が、浮標まで行かないうちに折れたが、その

まゝ競漕が續けられたので、赭い虎鬚の逞しい湖水の番人の必死の働きもその効なく、紅組の慘敗に終つた。斯うしてプログラムの進んで行くのを、自分はかなり無關心な、疲れた氣持で眺めてゐた。太鼓の音、ブリキ鑵の響き、歡呼、聲援、拍手――それらが四邊の靜寂をふるはした。竿競漕、新聞紙の袋をかぶつた盲目競漕――これがひどく見物人の腹を抱えさせた。が斯うした物音や笑ひ聲や、選手たちの必死な競漕ぶりを見てゐるうちに、いつとなしに自分の心は暗くうなだれて來た。自分は今更のやうに淺黄色に晴れた空、山、湖、集つた人々を眺めやつて、さびしい氣持になつた。それでゐて、自分は最後のボートのリレーの終るまで居殘つた。宿の人たちも皆歸り、すつかり暗くなつて、御神燈の中の電燈がともり、そしてまだ舊暦八月十五日夜の月がのぼつてゐなかつた。

「誰か知つた人が來ないか知ら？どうもそんな氣がするが……」そんな筈のないことを知つてゐながら、自分は中禪寺からの馬車の中の顏を、そこに腰かけた時からのぞいて視ずにゐられない氣持だつた。

酒を飲んで少し元氣づいたところで、自分は女中たちに誘はれて、褞袍を二枚かさね着して、十時過ぎに湖水に乘り出した。船頭は吉さんと云ふ、木挽きが本業の、二十四五のおとなしい若者だつた。一度鱒釣りに出かけて、知つてる仲だつた。彼は船頭としてもかなりの腕だつた。竿競漕では一着を取つた。

あい子、はま子、ます子、なか子と、自分との四人だつた。女中たちは二組に分れて出たのであつた。娘たちは聲を揃へて合唱した。湯瀧の上に船を停めて、吉さんはハモニカを吹き、自分は娘たちの合唱に耳を傾けた。空には中秋の滿月がほの白くかゝつてゐた。――わがふるさとに來て見れば、君やむかしの君ならず――とか、――昔は旅して夜は夜で踊る、末はいづこではつるやら――斯う云つた文句が耳に入つた。

「成程な、後の唄は、これは生ける屍の中の文句だつたな……」と、自分にもふと思ひ當つた。

昔の選手たちの飲めや唄への騒ぎの音が、死水のやうに靜かにほの白く耀いてゐる湖面をわたつて來る。自分も聲を張りあげて唄ひたいと思つたが、それが出なかつた。

夜靜カニ水寒フシテ魚喰ハズ、滿船空シク月明ヲ載セテ歸ル――自分は斯うした片言憶えの文句を口吟んだ。

何の意味？……否！好き山の乙女達よ、いつまでも清く美しくあれよ。そして自分の藝術？……自分は思はず溜息をついた。

ゆうべも遲くまで酒を飲んだ。あい子はキチンと座つて、厭な顏を見せずに酌をして呉れた。こゝへ來て自分は毎晩一升近くの酒を飲んでゐる。これを彼女は、初め來た時と變りのない態度で相手になつてゐる。ほとんど一年ぶりで、自分はちよつとの間ながらおせいとの睨み合ひから、遁れられた譯である。ゆうべ彼女は、自分の机の上の原稿紙に、三四首の即興歌を書いて見せた。多少文學少女なのかな？と、自分もちよつとした興味をそゝられた。自分も對詠めいたものを書いた。たしか――白根の山の、老いたる熊は、ものうく雪の、穴ごもり――斯う云つたやうなものだつた。

「湯本には昔から泥棒と云ふものは、はいつたことはないんですつて。だからどこのうちでも戸締りはしないんですの。下りる時も、夜具でも道具でもみんなこのまゝにして行くんですよ」

「夏、客の澤山の時でも？」

「さうですよ」

「僕このまゝそうつと逃げだしたら、どうだらう。日光まで行かないうちに摑まつちまふだらうな。裏山へはいつたつて、二日と凌げないからな。どうしたつて日光へ出る外ないだらう。何時間か後氣がついて、番頭さんが中禪寺まで自

轉車を飛ばして、電報か……電話を日光へかける、大抵そこらで參つちまふんぢやないかな？　うまく汽車に乗り込めて東京にはいれたとしても、大したことはあるまいね。新米の泥棒なんかも、大抵そんなことだらう。何しろ逃げ出しにくい、要害のいゝところだな。どうだらうあいちやん、僕がほんとに逃げ出したら、うちで追かけさせるか知ら？」

自分は柄にない幼稚な活動寫眞的興味から、斯う云つて見た。

「わたしにはわかりませんわ、そんなこと……」幾らか鼻にかゝるフヽとくゝんだやうな笑ひ聲をして、疑ふ様子もなく、云つた。

「どうしてお仕事をなさらないの？　もう十日からになるんでせう。お仕事をなさりにゐらしたんぢやないんですか？」

「そのつもりで來たんだけど、出來ないんだね」

「どうしてゞせう」

「まだ土地に慣れないんだね。それに僕熱が出るんだ……」

「熱つてどんな熱なんですの？」

「あい子さんの熱……それは冗談だが、僕神經痛が持病なんだ。それにこゝも……」斯う笑ひながら云つて、褞袍の胸を指さきで叩いて見せた。

「それでは肺の方なんですの？」

「嘘だよ」と、自分は打消したが、彼女は顔色を曇らせた。

斯んな様子で、ゆうべも夜を更かしたのだつた。が今朝は四時、眞暗なうちに眼がさめて、それからはどうしても睡

付かれなかつた。枕元の水指しの水を飲み干し、自分でまた洗面所に行つて、山から引いてゐる水のやうに冷めたい水を酌んで來た。夜は明け離れたが、霧のやうな細雨で、灰色の雲が重く湖水に垂れ、山々は濛々と煙つてゐた。侘しいと云ふより痛い感じである。自分は傘をさして、一番奥の、二三町離れた山の嶺の孤屋の湯にと、出かけた。机の上には、ゆうべの歌の紙は、もう見えなかつた。そんなことも思はれて、岸の一面に生へた沼のわきの細路を歩いて行つたが、縕袍のかされ着で、まだうす寒さを感じた。

浴槽は一坪餘りの、ほんの形ばかしに上の方を板で仕切つたものだつた。また誰もはいらないらしく、硫黄が一面に汚ならしく浮いてゐた。自分はしばらくたぢろいた氣持で眺めてゐたが、思ひ切つて縕袍を脱ぎ、流し場にあつた板切れで掻き廻して、少し熱目なのを我慢してはいつたが、さすがに顏を洗ふ氣にはなれなかつた。ぢつと身體を動かないやうにして湯の面を見てゐたが、一尺ほど下に何やらブワ／＼したものが動いてゐるので、二三度やり損じた上で掬ひあげて見ると、二十本ほどもならうかと思はれる女の髮のもつれた束だつた。それが湯垢やら硫黄やらでヌラ／＼になつてゐた。自分はぞうつとして素早く流し場の溝に棄てたが、その二三本が指の間に卷きついて早速には取れなかつた。自分は左りの指さきで一本々々摘まみ取らなければならなかつた。自分はそこ／＼に身體を拭いて外へ出たが、胸がむかついて來る氣がした。惡女の妄執――そんな氣もされた。

「どうせ若い美しい女なんか、あんな湯に行きやしないだらうから、多分田舍の婆さんかなんかの髮なんだらうが、ひよつとすると、あの婆さんたちの誰かのかも知れないな……」中禪寺から乘り合せて、馬車屋とさかんに猥談を交はして來た四人の田舍婆さんたちの顏の一つ／＼まで浮んで來て、そこらに漂ふ硫黄と沼氣の惡臭い匂ひに、息を詰らした。

午後から本降りになり、西北の風が強く吹きつけた。板の雨戸を締め切つたので、部屋の中はしつかり暗くなつた。自分は蒲團の中にもぐり込んだ。何しろ一間幅の廊下が玄關から四十八間とかあると云ふ、その一番奥ではないが、それに近い部屋だつたので、荒れしぶく風雨の音、庭の筧の音のほかには何一つ聞えて來なかつた。アスピリンを飲み、頭から蒲團をかぶつて、うつら／＼しかけると、思ひ出したやうにガタ／＼と來る雨戸の音に脅かされては、睡むりを妨げられた。その度に、自分の神經は恐怖から慄へた。妻子のこと、おせいのことが、うつら／＼した、熱つぽい頭腦に浮んだり消えたりした。

「Sたちはどうしたらう。もう東京に歸つたか知ら。それともまだ別所に滯在してゐるのか知ら？」ふと、Sのことが、懐かしく思ひ出されたりした。

斯うした雨の日を、彼等は如何に樂しく語り合つてゐることだらうか！どうかして自分も別所へ行つて見たい、彼等を訪ねて見たいと、自分は胸を締めつけられるやうな思ひで、彼等のことを想ひ遣つた。

暮るゝを惜むかの如くしづやかに黄昏れそめた鹽田平の全面を見をろし、あの自分にも思ひ出の縁結びに利益のあると云ふ觀音様の境内の石の玉垣にもたれ合つて、眞直ぐに立ちのぼる淺間山の白い煙りを眺めやつて、彼等はどんなことを語り合つたのであらうか？雨の宵には、三里さきの上田の街の閑ろな灯を遠見に眺め、上り下りの電車自動車の數なぞかぞへて、興じ合つたことでもあらうか？

死よりも強いと云はれる戀、年齡や功利を棄てた戀――そこに生甲斐を見出したSは、幸福だと云つてゐる。自分はさうした戀愛の實例を、幾つか胸の中に數へて見た。そしてこの自分の惠まれない生存、粉々に打碎かれて手入れの仕様のないやうな自分等の生活の消壞――それは最早、土塊に過ぎないのだ。

あいちやんがお膳を運んで來た音で、ハツと目をさました。びつしより汗をかいてゐた。郷里の家に、父がまだ生きてゐて、妻子や大勢の人が集つてゐるやうな夢を見てゐた。また歯ぎしりでもしてゐたのか、下の歯が一二本ボロボロに缺け崩れて行く夢が、はつきりと不氣味に頭に殘つた。

「何だか怖いやうな夢を見てゐた」と、盃をさし出しながら話しかけたが、

「さうですか」と、彼女は取澄した返事をした。そして二本目のお銚子から、なかちやんと云ふやはり二十の娘と代つた。

色白の、頬の豐かな、肉附きのいゝ、眼に愛嬌のある、氣のよさゝうな娘である。自分が若くて嫁に貰ふんだつたら、多分この娘を選ぶだらう。彼女は、家の百姓仕事が忙しくなるので、みんなよりさきに、近いうちに歸らねばたらぬのだと云つて、さびしがつた。

「わたし歸つても、そりやつまらないんですよ。わたしこれで、お百姓仕事はなんでもするんですよ。川へも畑へも、それからなんだつてするのよ。こゝに居るとこんな風をしてますけど、うちへ歸るとまるで乞食見たいな風して、そりやなんだつてやりますわ、

と、素朴なアクセントをつけ、しなを造つて、絶えず眼に笑ひを見せながら、彼女は云ふのだ。

「早くお嫁に行つたらいゝでせう

「お嫁に行つたつて、やつぱしお百姓さんでせう。つまらないわ………」

「それなら、東京へでも出て、どこかいゝとこへでも奉公して見たらどう？」

「奉公したつて、やつぱしつまらないぢやないの。歸つて來ると、やつぱしお百姓さんでせう」

「ぢやあ、お百姓さんで結構ぢやないの。お百姓さんは一等いゝですよ……」

自分は斯う云つたが、ふと思ひ當ることがあつた。いつか、彼女に來年もまた來るのかと訊いた時、彼女と誰ちやんとは、來年はわからないと云つた。やつぱし秋の收獲の濟み次第、所謂お百姓さんのところへ、お嫁に行くことにきまつてゐるのに違ひない。その歡びの期待と、處女期を棄てる惱ましさから、この娘の眼は斯んなにも美しく燃えてゐるのか――自分は斯う腹の中に思ひながら、盃持つ手を抑えて、彼女の顏を視直した。自分の結婚時代、妻のこと――それからの十五年で、結局自分等は何を報ゐられたか。そこには苦い生活のカスが殘されたばかしでないか。妻の髮も、かなり白くなりかけて來てゐるのに、未だに自分は一家を成してゐない。さうしては、更に本能の過失を重ねて行く。家庭生活の苦しみも樂しみも知らぬ間に、家庭生活と云ふものに、すつかり幻滅し切つてゐた自分を、自分は今更どうすることも出來ないのだ。妻は、一般の妻としては隨分慘めな妻であるに違ひないが、三女の兒女の母としての生活には相當の滿足と誇りとを持ち得る筈だ。自分には何物も無い。そして心ならずも彼女等から離れて暮してゐると云ふことが、そしてまたそれが不斷の二重三重もの心の負擔となつて、自分の生活の基調を暗く、悲劇的なものにしてゐる。それにつけても、自分は、おせいとの關係を呪ひたい。自分の過失は過失として、戀愛もなく、醉狂もない二人の關係を、これ以上自分は續けたくないのだ。これまで幾度か和解的に別れられる機會があつたのを、彼女は頑強に斥けて自分等の生活に喰ひ入り、そして皮肉にも、姙娠したといふ。――だが、おせいよ、自分は今、溢れ流れてゐる宿の浴槽にひとりでつかつて來て、若い娘のお酌で、明るい電燈の下で、寢床の上で、外の風雨の音を聽きながら、あたゝかい酒を飲んでゐるが、お前はあの四疊半の部屋で、今頃ひとりでどうしてゐるか？思へばお前も不憫な女だ。だが、俺に妻子と云ふものがなかつたとしたら、俺も決して、今までのやうに冷淡な態度は取れなかつたと思ふ。無論愛し合へたと思ふ。

不用意だつたとしても、俺たちの關係も、動機はそんなに不純であつたとは思へない。お前は仕事の出來ない俺に、俺の不幸續きに、病氣に同情して吳れ、ほとんど獻身的に盡して吳れた。それは、俺も、忘れてはゐない。また、斯うして離れてゐると、お前の苦しい立場も、よく考へられる。親同胞を棄てゝまで家出して來た以上、今更俺に妻子があるから歸れと云はれてのめ／＼と歸つて行けないお前の氣持を、一概に女の妄執だとケナしつける自分の方が、よつぽど卑怯でもあり、自分勝手かも知れない。だが、俺にはSほどの勇氣がない。それに俺の心持は今、尖がり過ぎてゐる。俺は何もかも、ほしくないのだ。妻子もほしくなければ、お前も、お前の腹の子も、ほしくないのだ。極端に云へば、俺自身をも、ほしいとは思はない。俺は最早、生活にへコ垂れはじめたらしい。書くものも、一つ／＼駄目になる。俺はどこに生の希望と悅びをつなぐのだ？が今に、だん／＼と生活も好くなり、書くものも良くなる……？がその今に、が曲物なんだ。どうして、信じられたものぢやないのだ。その今に、引きずられて徒勞を重ねて行くべく俺はすこし厭いたやうだ。

だが、おせいよ、氣をゆたかに持て。人間のことは、すべてが悲劇のやうにも、また悲劇でも喜劇でも何でもないやうにも、思へば、思へるのだ。どんな大きな災難でも、不幸も過ぎて見れば、煙のやうなものぢやないか。まあ、出來てしまつたものは仕方がないとして、腹の子に氣をつけるんだな。

酒は樽の菊正、喰べ物も思つたより豐富だ。俺は兎に角まだ當分居るつもりだ。――十八日快晴、午前十時何十分かにかなりの強震二回あり。家の中の人みな飛び出す。――

Sは信州へ發つ二三日前の晩、久しぶりで自分の下宿に訪れて來た。ほんとに久しぶりだつた。三四月頃までは、ち

よい〳〵往つたり來たりしてゐたのだが、其後バツタリとSは姿を見せなくなつた。自分はまた、おせいとの問題がだん〳〵とわるくこんがらがり、恥さらしな事件がつゞき、ほとんど昏迷狀態からして、ついSのところをも訪ねずにゐた。自分とSとは、彼是十五年近くの親しい友人だが、遊里方面の交際は一切無いので、その方の消息は自分はまるで知らないのだ。殊に今度の——あの謹直堅固なSが、さうした熱烈眞劍な戀を何ケ月か續けて來て此頃では互ひに一切を棄てゝもと云ふ切迫した狀態にまで進んでゐるのだとは、まつたく自分には想像にも及ばないことだつた。それもつい十日程前に、他の友だちに聞かされた時には、餘り意想外な話なので、つい吹き出した位ゐだつた。

「そりや此頃のSは、一杯のコーヒー代だつて惜しいだらうよ」と、友だちは云つた。

「何しろ毎晩なんだから、大きいよ。一晩だつて缺かさないんだから、そして女の方でも一切他の座敷へは出ないと云ふんだからね、一晩二十圓づゝとしたつて、そりやSだつてたいへんだらうよ。何しろお互ひにひどく惚れ合つたものさ。やつぱし家庭が、どうも面白くないらしいんだね…」と、友だちもやはり微笑を浮べながら、同情した調子で云つた。

「さうかなあ、Sにもそんなことがあるのかねえ！ちつとも知らなかつた。實は此間ね、H社で偶然久しぶりで落ち合つたが、Sがひどく焦燥な態度で原稿料を請求してゐるのを傍で聞いてゐて、妙だなあ、金のことでは斯んな風な男ぢやないと思つてゐたが、どうかしてゐるのか知らと、僕は彼の態度に寧ろ反感を持つたのだが、さうかなあ、そんなことになつてゐるとは知らなかつた」と、その時のSの苛ら〳〵した態度を思ひ浮べ、反感を持つた自分を濟まなく思つた。

「しかし誰しも一度は通る道だからね。そして俺たちはもう何をしたつて、大丈夫だよ。壞れつこないよ。Sだつて大

丈夫うまく切り抜けるさ。そして今までのあの堅い殼を打壞せたら、彼の藝術だつてもつと自由な、暢びくしたものになるだらう。さう云ふ點では、今度のことは、彼にはいゝことだよ」

「さうだね、どうせ一度は、遲かれ早かれ誰の上にも來ることなんだらうからな……」

「さうだなあ、遲かれ早かれ……か、兎に角一度は誰の上にも來るんだね。あのSさへたうとう引かゝつたからなあ……」と、二人は思はず顏を見合はして、ほゝ笑まずにはゐられなかつた。

「それにしてもSは幸福だよ。今が頂上と云ふところかも知れないが、兎に角お互ひに好いて好かれてゐるんだからね、Sとしては滿足な譯だらう。それに較べると、俺なぞの貧乏畫と來ちやお話にならないよ」と、自分はついまた、愚痴を洩らした。

「……………？」友だちはチラと自分の顏を視たが、それには答へなかつた。……

Sのことを聞いたのは、その時が初めだつたのか。

十年程の家庭生活の間に、Sは三人の子の父として、良人として、社會人としてほとんど破綻らしい影さへ見せずに來てゐた。作家生活と云ふよりも、謹直な智識階級の健實な生活ぶりを續けて來てゐた。物質的にも精神的にも用心深い、多少臆病らしくさへ思はれるほどに冒險味に乏しい生活ぶりだつた。彼自身から、獨善主義――と自身のことを云つてゐた位ゐだつた。彼は十年一日の如く忠實な家庭の支持者だつた。それがつい二年程前から、家庭生活の無興味、現在の否定、人生への懷疑――さう云つた虛無的な、否定的な口吻を洩らすのを、自分は時々耳にするやうになつた。彼は滅多に自身の愚痴など云ふ性質の男ではなかつた。それだけに、彼の内に潛在して、悶えてゐるものゝ影が、自分の胸に強く感じられるやうな場合もあつた。

「しかしSは頑固だからなあ。俺たち友人のどれもこれも、みんな破綻だらけの生活をして來てゐるが、Sだけは大丈夫らしいな……」と、この一二年來めつきり憂鬱になり、神經質になつて來てゐる彼のことを考へながら、心の中でさう思つて來たのだつた。そして、震災前あたりから、友人の誰彼といつしよに、Sも遊び出したと云ふ話を耳にしても「さうかしら、ほんとか知ら?」と、自分には微笑を催さしめる程度にしか、彼の噂さを聞いてゐなかつた。それが、つい四五ケ月會はずにゐた間の出來事だつたのだ。

「Sも此頃は憔悴してるよ。何しろ毎晩なんださうだから、そして夜明け頃女に途中まで送られて歸るんださうだが、情死もし兼ねない双方の逆上せ方ださうぢやないか。なんにしてもSと云ふ男も變つた男さねえ!」最近のSに逢つた誰もが、斯んなやうなことを云つた。

成程、さう思つて見る氣のせゐばかしでなく、その晩のSの窶れ方に、自分は一寸胸を打たれた。白皙だつた顏の艶も失せ、頬のげつそり削けたのが目立つて見えた。濃い髯の剃り跡の青々しさにも、何やら悲しい思ひを誘はれた。Sのやうな男でさへ、戀と云ふものゝ前には斯んなにもなるのか!………自分は思はず腹の中で嘆息した。相手が素人でない金のかゝる女だと云ふだけに、純情一本氣のSの立場が、傷々しい氣もされた。

「此の間の晩、たうとうワイフにも、何もかも一切告白した。どうにもならない相手との苦しい義理合ひから、何もかも一切つゝます涙を流して告白したんだが、ワイフなんてどうにも仕方がないもんだね、良人の涙を以ての告白にも同感してるのかしてないのか、默つて聽いてゐると云ふだけなんだからね。なんとか云つて呉れるべきなんだ、それをどこまでも默つて……そんな法つてないんだ。唯それからは僕が三時に歸つても四時に歸つても、屹度起きてゐて、僕の脱ぎすてた着物をたゝんだりして、それから階下へをりて行く……そんなことだつてこれまでは一度だつてなかつたん

た」Sは斯んなことも云つた。

「場合に依つては、いつでも家庭を破壞してもいゝと思つてゐる。唯子供たちのことを思ふと、不憫だ。子供たちのことを思ふと、いつでも泣かされる……」

Sが眼がしらに涙を溜めてゐることが、よく自分にわかつた。自分には慰めよう言葉もなかつた。

「まあ〳〵、君のやうにさういつこくに考へるなよ。君の氣持はよくわかるけれど、しかしさう君のやうにいつこくに考へ過ぎてもいけないと思ふな。どうにかそのうちには解決の道が開けると思ふよ。双方に誠實さへあれば、どんな場合に立ち到つても、救はれると思ふよ。僕とおせいとの場合のやうな、こんなのは駄目だが……」おせいは昨晩から、彼女に當がつてある階下の三疊に引込んでゐて、その場にはゐ合せなかつた。

「それで、僕はいろ〳〵と考へて見たんだが、結局一番いゝ方法は、僕は今重い肺病になつて、南湖院にでも入院して、どんなに會ひたくとも會へない身體になる……まあそんな方法しか、考へられないんだ。でもないと、一晩でも會はづにゐられない……あゝ僕も肺病になりたい！、肺病の人が羨ましい！」彼は斯う叫ぶやうに云つた。

酒を飲んでゐたのだが、すぐには、彼の顏を見る勇氣がなかつた。思はず、窓外の隣り屋敷の庭園の暗い植込みに眼を遣つてゐた。そして二三度も眼をしばたゝいた。

「しかし肺病になつても、會はずに居れないとなつたら……？」自分はふと斯んなことも思つたが、口へ出すのが、傷々しい氣がされた。

何と云ふ思ひつきだらう、この肺病嫌ひと云ふよりも寧ろ肺病恐怖患者だつたSが！自分等の友人間では、大抵肺炎位ゐは冒された經驗の無い人はないのだが、Sだけはその用心過ぎる位ゐな几帳面な日常生活に依つて、それを免かれ

て來てゐた。それだけにこの病氣に對しては、常識以上に過敏だつた。

「やつぱし彼等の間にも、人知れぬ苦勞があるのだらう。妻子がありそしてだん〳〵と中年に入りかけて家庭といふものに興味を失ひかけた男の戀の姿と云ふものは、やつぱし傷ましいものだなあ……」

これ以上に突き進めることも、退くことも出來ずに肺病にでも罹れたいと云ふ、Sの氣持は、自分にもわかる氣がされた。偶然だつたが、この日もKの細君から速達の手紙が來てゐた。自分は當座の小遣ひを幾らか封筒に入れて使ひを出すところだつた。

「どう、君も幾らか寄進に附いて呉れない？」と、Sに云つた。

「さう、ぢやァほんの少しばかしだが……」

Sは快く五圓出して呉れた。そして九時頃そこ〳〵に歸つて行つた。蒸暑い晩だつた。愛欲の業火に身を燒かれてゐるS、氷嚢を三つも四つも胸や頭に載せて、喀く度に血の混つた臭い啖汁を吐いてゐるT、そして自分とおせい——自分はしばらく盃の手を休めて、暗い庭の植込みに眼をやつてゐた。

「俺の此頃の生活は、一番いけないやうだ。誰のと較べても、一番鈍つてゐる。どうかして淨める方法がないか、燃やす方法がないだらうか？」自分は斯う思つて、深い吐息した。Sはその晩、自分にいゝ衝動を與へて行つて呉れたのだ。……

烈しい雷雨の晩で電燈つかず、古風な行燈と机の隅に立てた蠟燭の明りで、今日の午後についたKの細君からの葉書

を、また讀んで見た。「やつぱしさうかなあ……」と自分は又しても最初彼を見舞つた時の豫感が繰り返されて、嘆息するほかなかつた。——扱う、とても病人はだめでございます。こゝ五六日間は餘程注意して居らなければなりません。非常にうはごと、うめきをしますので、なんとも云はれぬ心細さを感じてゐます。まだ國からも參りませんので何かと心配してゐます。あなた樣もどうか早く歸つて來て下さいまし。病人も心さびしきことゝ思ひます……——斯う云つた走り書きの、絶望的な文句だつた。二十七日の日附だつた。

四五日前東京から、若い友だちのA君が、下宿に溜つてゐた手紙類や、不自由してゐた剃刀や砥、爪切り鋏、おせいからの傳言など持つてやつて來て呉れて、二晩泊つて歸つて行つた。その中にも十一日の日附の細君の葉書が混つてゐたが、それには、此月中に床上げが出來るかどうかわからないが、落付いては來たから安心してくれ——と云つた調子で、却つて自分の病氣のことを心配してくれて大事にするようにと、書いてあつた。その時分はまだ山へ來てどこへもたよりをしてゐなかつたので、自分はやはり發熱で下宿で寢てゐるものと思つて、それで下宿へ出した葉書だつた。それを讀んで、自分は稍安心して、湖水の繪葉書に簡單な見舞の文句を書いてやつた。それが折返しの今日の絶望的な細君の葉書だつた。そして、自分としても此際直ぐにはどうしようも無いのだと云ふ頼りない溜息のほかには、いい思案もないのだ。

「御病人が出來たんですか?それではお歸りになるんでせう?」二三日前からアイちやんに代つてお酌に來てゐる、ナカちやんが云つた。

「しかし歸れあしないでせう、これからひと仕事でもしないことには。……しかし困つたなあ、どうもあぶないらしいな」

「やつぱしお友だちの方なんですか？それはその奥さんからの葉書？」
「さう。向うでも待つてゐるらしいんでね、早速歸らなければならないんだが、どうにもならないぢやないか。それに僕も非常に神經を傷めてゐるんでね、さうしたいろ／＼なことから離れたくて斯うして來てゐるんでね、仕事の出來ないのも、やつぱしひどい神經衰弱のせゐなんだよ」
「さうですか。そしてその御病人の方はまだ若いんですの？」
「さう若いと云ふ方ではないね、僕より二つ上だから四十か。奥さんの方はまだ二十七だから若い」
「さうですか。そして病氣は何病氣なんですの？」
「やつぱし肺病だね」斯う云つて、自分は口を噤んだ。
中禪寺行きの朝の一番の馬車に間に合ふやう、蠟燭の明りで、おせいにすぐKを見舞ふようにと、繪葉書を書いた。
雷雨を衝いて、足尾から山越えして來たといふ五六十人程の在鄕軍人の團體が、十時頃漸く着いて、夜中過ぎまで下の座敷で大騒ぎをやつてゐた。それに睡りを妨げられ、K夫妻のことが夢うつゝに斷れ／＼に思ひ出された。
A君の來た日も雨だつた。セルに夏羽織の彼は、夕方の馬車の中で寒さに慄へながら來たのだつた。もう二度厚い霜が下りて、山々は日一日と目だつて色づいて來た。東京の十一月の中頃の氣候を思はせた。彼が歸る日は珍しく快晴だつたので、送つて行くことにし、いつしよに例の戰場ヶ原の木挽小屋の跡を訪ね、原の中程の三本松の茶屋で、茶を飲んで別れて來た。一里十何町かの往復である。木挽小屋の跡は小篠やクゴ草の間にそれと分つたが、その時分の木挽きの兄弟は、今は日光の町にゐないことだけは確かで、行衞は分らないと云ふそこの茶屋の爺さんの話だつた。「やつぱしそれでは、あの人たちだつて、どうなつてゐることかなあ……」正午近い日を浴びて、銅色に輝く樹肌の、一抱えに餘

る楢の巨木の林の美しさに見惚れたりしながらも、自分は何となく淡い幻滅感をそゝられて、淋しく口笛を吹きながら阪道を登つて來た。二三日前から禁漁となつた湖は、黄、紅、白、濃淡の綠りと、とりどりに彩られた山の姿を逆さに、鮮かに映してゐた。が斯うしたこの湖の誇りも、やがてひと月の後には、氷と雪に封じられて、死の湖として長い冬を過さなければならないのだ。對岸の麓では、土工たちが、この湖を一周する路普請にかゝつてゐる。その樹を倒し、土砂を崩したりしてゐる音が、湖畔の靜かな空氣を一部分掻き濁してゐる。國立公園の豫定區域になつてゐるのだ。そして一二年の後には、自動車が通り、電車が通りして、永久にこの湖の憂鬱な感じが失はれることだらう。そしてまた、二度と自分等を快く受入れるやうな場所ではなくなることだらう。………

往復二里半餘りの、たつたそれだけのその日の散步にも、自分は足を痛め、發熱するほど疲勞した。「何と云ふ弱蟲！鑄かけの利かない古鍋、地金としてだつて誰も引取り手はあるまいな……」自分は、自嘲する。

溫泉の效能も、この冷めたい雨續きの天候には敵はないのだ。自分は幾日か喘息の發作と神經痛で終日寢床の中で呻いた。そして夕方近く起きて醉ふための酒を十一時過ぎまで飲み、三時頃、雨戶をしめない外の暗闇に脅かされでもしたかのやうに目をさます。そして自分のこと、Tのこと——さうだ、彼は、自分等「哀しき仲間」の中でも、特に慘めな方の一人であるかも知れない。

もう二三日で、一ケ月になるのだ。山も、湖も、溫泉も、娘たちも、周圍のすべてが、自分の感興から失せてしまつた。やはり彼等のすべてもまた、自分の肉親、妻子、おせい、哀しき仲間——それらと同じやうに、結局暗鬱と苦惱を吹込む存在にほかならないのだ。酒よりも强く自分を醉はしめて、妻よ！などゝ呼びかけさせ、詩人らしくさへならしめたあの最初の魅力が、どこへ消えてしまつたのだ！　泡沫の如く感興は消え去る。が、酒の狂醉、苦痛の自己麻醉劑

——自分はこの二つの、完全な中毒者だ。この夜と晝との交互の痲醉劑に依つて、辛うじて自分の一日々々が延ばされてゐるのに違ひない。が自分とても、自分の神經系統の傷害程度の以外に進んでゐるものだらうとは氣附いてゐない譯ではない。酒の力でやう〳〵四時間足らずの睡眠。心氣朦朧、鈍頭痛、耳鳴り、そして後頭部半面の筋肉が硬直すると云ふのか浮腫むと云ふのか——顏の筋肉もさうだ——それが硬張るやうなむず痒いやうなヘンな不愉快な感じだ。それが少しでも物を考へたり書いたりした翌日には、覿面に現はれる徵候だ。自分にも無論その原因がはつきりは分らない。が兎に角このぐうたらな手記が、今や宿料に迫られ、そして一刻も早くKを見舞ひたい一心を以てしても、日に一枚半枚の平均にしか書けないとは、何と云ふ情けないことだらう、

「結局Kは肺病で命を取られるだらうが、俺は何かしら？　この分で行つたんでは、どうしたつて狂死と云ふところかな。しかし發狂は厭だなあ。氣が狂つて、死ぬにも死ねず、何年か妻子たちに嘆きを見せる……氣ちがいだけは厭だ」寢床の中で掻き抜いた揚句にやつて來る、うつら〳〵とした自己痲醉の狀態の中で、自分は斯う呟いた。それが遁れることの出來ない、自分の運命のやうに思はれた。

Kにしても、また同じ仲間の×にしても××にしても、自分としても、恐らくは四十と云ふ峠を越せずに、それ〳〵に自分の身内に巣喰ふた惡魔の無意識の中にも戰ひ續けて來て、結局は打敗かされるのだ。明るみ、奮鬪、社交、圓滿な家庭——永年それらを希求しつゝ、そして誰もが同じやうに反對の方向に沈んで行き、その結果が肺病か狂氣かだ。さうした哀しき仲間を、自分は見過ぎた。それが避け難い自分等の運命なのだ。自己の意志も、他からの強制も、ある程度までしかの効力が無いのだ。自分は昨年の震災當時まで足かけ五年間、建長寺内の山の上の寺の暗い部屋で、蟄息的な生活を續けて來た。「東京へ出たまへ。明るい世界へ出たまへ。こんなところに居ると、些つとも好くならずかし

ぢやないか」と、その自分ある友人が時分に忠告的に云つて呉れた。「駄目なんだよ。それが出來ないんだよ。自分の内のいろ／＼なものが傷づき、弱つてしまつてゐるんだ。それで、さうした明るい激しい世界には迚も堪えられないんだよ。神經も身體も普通の人間に、こんなところに一ケ月も居れと云つたつて、辛抱出來ないと同じやうな譯さ」と、自分も答へたことがあつた。人間誰しも好んで暗い道を撰びたくはないのだが、身内の魔物の不斷の脅威に、自分等はいつの間にか征服されてゐるのだ。……

さびしき妻より――東京から廻されて來た妻の手紙の文句の後に、斯う書いてあるのを讀むと、今更のやうに自分もさびしく、うら悲しい氣持になる。この手記は最初から妻にあてゝ、おせいとのいきさつの一切を謝罪的な氣持で書くつもりだつたのが、いつのか間に、最初の心持から反れたへンな小說めいたものになつてゐたと云ふことも、いろ／＼な意味から自分をさびしく思はせる。か兎に角自分は、一日も早くこれを金にして、山を下らなければならないのだ。七月以來妻と自分との間か一層疎遠になつてゐる。亡父の三周忌におせいを伴れて行つて會はせたのが、失敗だつたのだ。今度はこの手記で、妻の諒解を求めるつもりだつたのか、また失敗である。やはり、自然の時を待つほかないのだ。（さびしき夫より）………

「歎く」と云ふ題で、今月號のある婦人雜誌に發表した三十枚程の短篇が、たうとうKの絶筆となつた。十月三日は珍らしく快晴だつたので、自分は午後から湖一周の新道をひとまはりして疲れて歸つて來ると、机の上にKの細君からの電報が載つてゐた。（ゴゼン三ジニシス）萬事終れりである。午前六時五十分發の電報だつた。臨終の時間からかんがへても、恐らく細君一人のほかに誰もゐなかつたに違ひない。

「それにしても、もう一欺き二欺きしても、生き延びれなかつたのかなあ……」唯一の飲み相棒でもあつた彼に、自分は心の中で盃をさゝげた。

（キムラサンシス、セトシバンジセワス、アスクニヨリオチクルヨシ、ヘン）午後五時におせいが打つた電報は、翌日の十時頃配達になつた。（カヘレヌバンジハカラヘ）自分は斯う返電を打つほかなかつた。

「欺く」と云ふのは、二三年前Kが窮乏の餘り、萬策盡きて、郷里の他家へ嫁いでゐる唯一人の親身の姉へ、急病來て呉れと云ふ僞電を打ち、姉が丁度流産したばかりの時だつたので、本家に當る叔父が、遙々と備後忠海町から急行でやつて來たのを夫婦でのこ〳〵東京驛に出迎へた——その時のことを、正直に、素直に書いたものだつた。「わしはもう十中八九駄目と思ふて、これ、この通りぢや」と叔父はカバンの中から黄平の紋附、羽織、袴なぞ取出して見せた——と云つたやうな文句もあつた。その叔父が今度もまた出て來る譯なのだが、今となつては、その「欺く」一篇は、叔父への謝罪文となつたやうなものだ。

「欺く」を自分は原稿の時に讀まされたが、それで見ても彼が如何に永年の間ひそかに病苦と戰ひ續けて來たかゞ、わかるのだ。そしてまた今更のやうに、永年の間彼の努力の足りないことを責めて來た自分の鈍感を、耻かしく思ふ。

編輯者の好意から「欺く」はすぐ金に替へられたが、婦人雜誌に載せるものとしては餘りにヂミ過ぎると云ふので、もつと華かなものと云ふ先方の注文から、それの代りを執筆中、丁度一ケ月前九月四日午後二時に咯血したのだつた。

その一週間前の二十八日の日に、彼は下宿に訪ねて來て、二人で遲くまで飲み合つた。

「しつかりしろよ。細君が氣の毒ぢやないか。……先方の好意に對しても、欺くはまた他に處分できるから、その代りを早く書いてやれよ。締切が五日頃なんだらう。……」

「やるよ。大いにやるとも！俺もな、此頃はほんとに一生懸命にやつてるんだよ。君の云ふやうなものでもないんだぜ。嘘だと思ふならワイフに訊いて見ろ！」彼はいつになく、昂然として、睨みつけるやうにして云つた。その晩が、彼との飲み納めだつたのだ。

新聞の廣告で、「欺く」が十月號で發表されることを知つた。そして彼の絶筆が、創作欄に入れられず、趣味欄と云ふところに入れられてあつたと云ふことは、不遇作家としてのKの一生を、何よりも有力に語つてゐるものだ。そしてこの、「欺く」の作者ほど、自をも他をも欺き得なかつた人を、自分はほとんど知らない。

（キムラサンアスヨル八ジタツ）八日午後おせいが打つた電報である。自分はその時刻に、湖畔の暗い道を十二三町、湖水の落ち口、湯瀧の上に新道でかけられた嚴丈な荒削りの橋の上に立つた。宿の階下では二百人近い學生の團體客が、食後の茶話會とかで大騒ぎをしてゐた。自分は獨りで酒を飲んでゐるに堪えない氣持だつた。高さ四十五丈、巾數丈と云ふ瀧の音は、橋の上に立つた自分の脚をわなゝかせた。後ろは暗い死のやうな湖面だつた。自分は手を合はして默禱した。「Kよ許せ！……」細君と叔父に護られ、二三の友人に車窓まで見送られて、一壺の骨となつて、今や永久に彼には辛らかりし都會を去るのだ。そして彼は最早「悲鳴を揚ぐる」の人ではないのだ。悲鳴を揚げつゝ登つて來て、十五年來の親友の死すら見送りに行けない自分も、決して幸福ではないのだ。彼は有名無名――そんなことを死際まで氣にしてゐるやうな男ではなかつた。咯血後最初に見舞つた時に、自分には彼の覺悟がわかつた氣がした。無名にして陋巷に窮死する――それもこれも仕方がないのだ。是モ好シ山堂無月ノ夜、一天ノ星斗闌干ニ墮ツ――さうだ。Kよ！自分は心から君の靈の光榮を信ずる。

――十二年十月――

對支國策討議

（十月十一日夜帝國ホテルにて）

長谷川如是閑
堀江歸一
吉野作造
永井柳太郎
米田實
福田德三
小村俊三郎
山本實彥

（いろは順）



向つて左から　小村氏、福田博士、山本社長、長谷川氏、堀河博士、
米田博士、吉野博士、（十月十一日帝國ホテルに於て寫す）

山本　ちよつと御挨拶を申上げます。實は今夜貴重なる時間を御割き下さいまして御出下さいましたことをば有難く存じます。今日本では支那に對する態度に就きまして隨分混亂した間違つた考を有つて其歸する所を知らないと云ふ狀態にあるやうに思はれます。第一外務省は不干渉主義と云ふことをば出淵亞細亞局長が發表されまして、胸中何等の成算なきに拘らず傍觀的不干渉主義を執つて居りますし、それから陸軍では、或者は張、孫等の手先となつて反直派の提灯を持つて居りますし、又或陸軍の一部では曹錕及び吳佩孚の勢力をば過信しまして、どうしても日本は此方に力を藉すやうにと言つて說いて廻つて居る者もありますし、又日本の資本家階級の支那及び滿洲に關係のある者は、日本の自主的干渉、詰り日本が東三省に有つ特殊的利權を考慮する立場から主動的干渉をせよと運動して居る。斯ういふ四つの派に分れて、銘々勝手な運動をばして居るやうな狀態で、我々國民として如何にも遺憾のことに思つて居ます。此混亂して居る狀態に就きまして權威ある諸先生に集つて戴いて、現在日本の輿論を指導するやうな御議論をして貰ひ、さうして國民の歸趨に對して色々有益なヒントをば與へて戴きたい。一體日本は民國の動亂に對し現在どう云ふ態度を執るべきであるか、又執らなくちやならぬかといふことゝ、それから所謂干渉不干渉主義その他問題になつて居るものに就ての御討議をば願つて、結局日本と支那とはどういふ風に、將來根本的に手を取合つて行くか、その方策、今回の動亂に對する態度に就ての最後の結論をば一つ攻究して戴きたいといふ希望で今夜お集りを御願した次第であります。それで此議事を進行せしめますに就てはどう云ふ風にして戴いたら宜いか、是も皆樣の御協議に待たうかと思つて居ります。如何でございませうか、私の考へます所では十五分なり二十分なり兎に角支那のことに精通して居らるゝ小村さんに、今迄の動亂の經過に付て知らるゝ所を御話して戴いて、それに付て段々話を進めて行きたいと思ひますが、如何なものでございませうか。

米田　結構です。

山本　それでは短い時間で要約して、小村さんに御話を願ひたいと思ひます。

小村　私は今晩の御催しに就きましては、諸先輩が支那問題を日本に於て御覽になるに就て、支那の事に關して何か私の知るだけの範圍で御參考に供することがあれば……と實は參考人の積りで參りました。先輩の前で私が自身の意見を申上げると云ふやうな考へは有たずに參りました。さう云ふ積りで

何等豫め考を持つて出た譯ではありませぬ。併し今山本君の、御註文のやうに是から皆様が支那問題を討議される僅に其前提として、私の見る所で、今日の時局の起りました所以、現在進行しつゝある大體等を御話申上げます、私自身にも意見は有つて居りますが、其意見は挾まないで置かうと思ひます。この支那に付きまして、一體支那はどうなるのであるか、どうしたら宜いのであるかと云ふことは、日本に於ける何人の頭にも往來して居る。これには勿論、一體支那は今どう云ふ風にあるかといふ其實情を明かにして、其上にどうなるのか、どうすれば宜しいのかを考へなければならぬと思ふ、斯の點が肝腎の前提となる。現在支那はどんな風に變りつゝあるのかと云ふことは、從來餘り日本では深く研究されずに、さうして直ぐどうすれば宜いのかといふ事ばかりを考へて、而して今回のやうに何か事が起ればこれを日本だけの考へで右に左に引廻さうと云ふ風に考へられるやうであります。（中略）これは手取早く言へば、要するに支那は軍閥の勢力に支配されて居つて、この軍閥を打破する爲には民衆の勢力が種々な方法を以て今日まで對抗して參りました。併し如何なる方法を以ても力の無い者が力の有る者に對抗することは出來ない譯でありますから、從つて現在支那の民衆の多くの考へは第一、どうかして軍閥自身の中に紛擾して爭ひが起つて、而してこの軍閥自身が軍閥自身の運命を自決することの進行が早ければ早い程宜しい。從つて若し彼等の間に戰爭が起れば、戰爭の犠牲は誠に忍びないけれどもこれは一時の苦しみであつて、將來永久の平和、統一を求むるには一時の苦しみは忍ばなければならぬ、であるからどうか軍閥の中で互に爭ひをして呉れゝば宜い。一たび爭ひを始めたらどうか徹底的に爭つて貰ひたい、而してその一方が負け一方が勝つて、勝つた者は矢張り軍閥として存在するかも知れないけれども、若しこの勝つた軍閥が負けた軍閥と同じやうな行動に出て、何時までも民心を壓迫して行くならば、この勝つた方の軍閥も終ひには彼等の中で反對が起るか、或は民衆の勢力の爲に倒れるか、言ひ換れば、——私は始終斯ういふ比喩で議論をして居りますが、——日本の相撲で言へば五人抜、劍術で言ふと土器割と云ふやうな譯であつて、北方軍閥同士が互に、相撲で言へば五人抜で最後に殘るのは一番力強き者でありますが、これも終ひには自己で自己の力のバランスを失ふて倒れる、關取を倒す力の者は無いけれども、この關取は自分で自己の力のバランスを失つて或は足を踏出し、或は腰を折ると云ふことで倒れる。それは袁世凱を初め段祺瑞等誰

も皆さう云ふ徑路を經て來て居る、だから最後に一人殘つても構はない、これは必ずまた當然の運命を遂ぐるであらう。其プロセスの途中に、支那の民衆ですら如何ともすることが出來ないものが、日本の力或は列國の力を合しても、このプロセスを日本或は列國の都合に依つて右に曲げ左に曲げるといふことは到底不可能である。これが可能であるとすれば支那の爲にもこれに越すことはありますまいけれども、この方法が無いとすれば、支那の民衆が考へて居る通り、軍閥同士が何處までも徹底的に爭つて吳れる。其プロセスが早く來れば來る程、又繰返して吳れる程、支那の時局はこれと共に進行して行つて自然に歸著すべき所に歸著する、大體は是より外に見方はあるまい。又支那人民も正にさう考へて居ると思ふ。最近では英米人の如きも同じやうに考へて居ります。それでありますから現在の時局に處しても根本の方針としては即ち絕對の不干涉、絕對不干涉と云ふことは何等自己に所信なくして言ふのではない。絕對に不干涉を執つて而して軍閥同士の爭ひを何處までも徹底的にやらせるといふことが即ち支那の時局を進行させる、現在に於ける支那を助ける唯一の方法である。大體斯う思ふのであります。それで現在の時局も同じくさう云ふ自然の法則の通りに働いて行き居るやうであります。詳く申上げる迄もなく最近數年間に支那の問題の變化して來ました一番の原因は、兎も角も袁世凱と云ふ北洋派の巨頭が倒れたといふことから源を發して居るやうであります。革命後一つの時期を劃して今日の南北の狀態を續けて居ります。袁世凱の居ります間は兎も角北洋軍閥、北洋軍閥を分析しますと大體安徽派と直隸派になります。又其本に遡れば長髮賊の亂に李鴻章が淮軍をこしらへて長髮賊を討平しました、李鴻章は其功に依つて長い間直隸總督で、北洋辦理大臣を兼て天津に居つた。天津に居りましたが其權勢は殆ど天津、北京、支那內外に亘つて居つた。是が所謂北洋軍閥の初まりです。其次に李鴻章の衣鉢を繼いだのが袁世凱。袁世凱の居ります間は兎に角袁世凱に依つて北洋軍閥は統一されて居つた。袁と云ふ大きな力が北洋軍閥の上に坐つて居つたが、其力が無くなつて北洋軍閥の中に安徽派と直隸派が分れて、袁の歿後段祺瑞が北京で武力を揮つて南北統一を圖つた。さうして今日の吳佩孚が湖南に居ります時には、直隸派であつて南方派と通じて段に背いたと云ふことから、直隸派と安徽派の爭が深刻になつて、其結果は安直戰爭となり、其安直戰爭の時に張作霖は、表面は一種の仲介者として北京に進軍して、而して何れかと言へば直隸派に加擔してさうして

安徽派を抑へたのであります。さうしてその直隷派の勝利の結果、張作霖が體よく結んで、一時張作霖が北京の重なる權力者になつた。それが故に又今度は奉天派と直隷派の爭になり、その時分に段祺瑞は直隷派に對抗する爲に、其前には敵の關係であつた奉天派と結んで、さうして奉直戰爭といふものが行はれ、その結果は張作霖の失敗となり、そこで奉天と直隷との間は仇讐の關係が結んで解けないやうになり、又張作霖としては直隷派の壓迫に對する爲に段祺瑞の安徽派とは勿論――その中には實際の勢力としては浙江派がある譯です――それから遥かに海を隔つて廣東の孫文派と結び、そこに所謂三角同盟といふものが形成され、そこで張作霖の方から言へば、その三角同盟の力を借りて直隷派の奉天に對する壓迫を牽制する、斯ういふ譯になつて居ります。而して御承知の通り張作霖は奉直戰以後汲々として軍事費及兵器の補充といふことをやつて居ります。張作霖としてはそれ等の準備が完成されるまでは、今度始りましたやうに直ぐに直隷派に挑戰する、或は之に應戰するといふことは、張作霖としては不便であつたかも知れませぬ。併ながら今申す通り三角同盟といふ關係が成立し存在して居りまして、その三角同盟の何れの一方でも、又何れの場所に於て、何れの時に於て戰爭が始つても、張作霖は勢ひ三角同盟の關係から張作霖のみが自らを全うするといふことが出來ない關係に立到つて居る。この三角同盟の計畫では、その中の一番大きな力を有つて居る所の奉天の方から直隷派に挑戰して出て來ること、然ればこれに應じて山東に殘つて居る所の段祺瑞の勢力は、浙江は勿論、この頃まで福建にも多少勢力を存して居りますこれ等と、廣東の孫文と、それから唐繼堯等西南の諸將といふものが、殆ど海岸を縫ふて反直隷派的勢力を成して居る。それ等の者が、諸所に相應じて而して直隷派に向ふ。斯ういふ計畫であつたのですけれども、今申す通りに張作霖は今直ぐ起つといふことは時機が早いですから、此計畫が實行出來なかつた。そこへ持つて來て福建に僅に殘つて居る段祺瑞の勢力、即ち臧致平一派、是が福建を逐出されて入り込んで來たのだから、浙江としても入れる譯にいかぬ。又浙江として之を入れゝば、浙江と直隷派の江蘇と對抗して居つたのが、その勢力のバランスが狂うて來る譯ですから、それで江蘇としてもどうしても浙江と挑戰しなければならぬ。又浙江としても之に應戰しなければならぬといふ譯でありますから、江蘇浙江の間に戰が始れば、張作霖としてはどうしても起たざるを得ぬ。若し浙江派が敗れゝば、最後の運命は張作霖

の上に來るのだから、又是まで三角同盟を利用して直隷派の壓迫を牽制しやうとして居つた張作霖の、三角同盟に對しての利害の關係から言つても、張作霖は起たざるを得ぬです。さういふ風にしてこの戰爭が起りました。（中略）

それから、この直隷派と反直隷派の戰爭に就きまして、その戰爭を表面から觀ますれば、前に繰返して申上ました通りに、要するにこの北洋軍閥の中の直隷派と安徽派、それに奉天派が參加して、又一方は孫文を代表して居る南方派が參加して。即ち一方は直隷派、一方は反直隷派を形づくつて居る所謂三角同盟といふものが對抗して爭つて居るのでありますが、之を唯表面からだけ觀ればです、即ち軍閥同志の爭であつて、その勝敗が徹底的に行はれて行くといふこともです、向ふの支那の民衆全體としても表面だけでもさういふ風に觀て考へて居ります。さりながらそこに多少の裏面的の、政治的關係、思想的關係が無い譯でもありませぬ。即ち現在の直隷派反直隷派の戰を比較して見ればです、何れが宜いかは、……比較的の話でありますが、是は支那の國民から觀、又外國から觀ても、一目瞭然として疑を容れませぬ。何となれば、直隷派……直隷派と言へば呉佩孚でありますが彼は安直戰爭の起る前湖南で、先き申上げましたやうに南方派と通じて段の武力統一南方討伐に反抗した迄は、非常に民衆の同情を受けて居りました。而して又呉佩孚自身もです、その時の標榜は、武力統一南方討伐といふことは到底駄目である、全國の平和統一といふことは必ず全國の國民に愬へその代表の國民會に於て決すべきものであるといふことを、安直戰爭迄は標榜して居たのであります。然るに奉直戰爭を經て、直隷派——言換れば呉佩孚の力の天下になりましてからは、彼は前の標榜を飜へして、今度は彼自身が反對した即ち袁世凱段祺瑞の執つて來た武力統一といふことを、彼自身が標榜した。標榜して居るのみならず、その標榜の下に御承知の通り支那全體に手を出して武力統一を實行して、その武力統一成つた後には自分が、最近に見え出して來た通りに、大總統になつてさうして自分の意の儘に統一後の平和建設を圖る、と斯ういふのであります。併ながらその呉佩孚の統一を完うする爲めには今後何年かゝるか分らない。今現に彼等が統一した地方に於ては如何なる狀態に在るか、彼が意を體して居る曹錕の北京政府を始め、彼の勢力範圍に在る處の狀態は如何であるかを觀れば、その統一して觀た結果は押して知るべきのみ。況んや統一に達する迄何年この戰爭を繼續して犧牲を拂はなければならぬか。支那國民の中で何人か呉佩孚に推服

して居る者があるか。之に對する反直派の方は、第一この段祺瑞が過去に於ては武力討伐の一番の主唱者でありますけれども、その段祺瑞もです、時代の要求人心の推移といふことに注意せざるを得ず、又之に注意せざれば彼は再び失敗して又三度政治舞臺の人となることは出來ないのであります。それが故に、今日はその三角同盟を代表して居る段祺瑞自身も民衆の味方となつて居る。將來の平和統一は飽まで民意輿論を尊重し、又憲法議會をも尊重して、而して平和統一の方法は各省の代表會議に依つて總て決まらなければならない。大體支那の建設方針は、今支那全體と言つても宜しい程の大部分の輿論になつて居ります所の聯省自治、各省に相當な自治を與へてその自治を與へた所の各省を聯ねて一つの共和聯邦にする。この憲法上の根本の爭は第一革命から今日迄續いた。それ故に憲法の制定といふことが南北統一の上に……として今日迄行はれなかつたのです。それで、段祺瑞も今日は聯省自治といふことを標榜して居ります。さういふ變化が政治的に起る。がこの將來の統一方法に付ては、三角同盟の中は勿論、その他の政黨政派の人々の間に、十分な打合せ諒解があるやうであります。從つてそれを承知して居る所の民衆は勿論段祺瑞といふやふな人に十分な信用を置けるかどうかは、是は疑問でありますけれども、兎に角この直隸派と反直隸派と相對照して見れば、直隸派が武力統一中央集權を主とするものであり、反直隸派は聯省自治地方分權を主とするものであるといふことに、民衆は觀て居ります。それで今度の戰爭を思想的政治的に言へば、一方に於ては軍閥同志の戰であるけれども、一方に於ては何れかと言へば今申した武力討伐中央集權を主とする直隸派と、聯省自治地方分權を主とする反直派の爭である。然らば民衆は何れに味方すべきであるか。と言へば當然反直派に味方するのである。さり乍らその味方も、元々軍閥の爭であるから縱令反直派が聯省自治を標榜して居つても何處までそれを實行して與れるかは疑問でありますから、反直派の味方といふことは、同情は致しても進んで之を援助するといふ所までは行つて居りませぬ。（中略）

だから私は、自分個人としてはです、全體から言へば勿論絕對不干涉でなければならないが、それが日本の外交政策のことに關しては兎も角、吾々國民個人の考としては、何れに同情するかと言へば、それは兩方の軍閥何れにも決して同情するのではありませぬが、支那の民衆が何れに同情を表して居るかと云ふ支那の民衆に同情するといふ立場からその支那の民衆の同情して居る反直隸派に同情する。是は反直隸派その

ものに同情するのでなくして、彼等が標榜して居る政治的主義主張に同情するのである、斯ういふことに自分は考へて居ります。併し言ふまでもなくその同情と援助と乃至干渉といふものは、是は非常にその間に差別があります。又援助と干渉は、或る點に於ては差別がなくて殆ど同様なものになる。だから同情の範圍を越えて干渉は勿論援助と雖も決して爲すべきものぢやない。といふことに又結論が達するのではないかと思つて居ります。マア大體斯ういふやうな事を前提として、皆さんの議論を進めて頂いて、自分も亦矢張り皆さんの說を伺つて行くといふことが出來れば大に仕合せと思ひます。

山本　それで話の進行に就てちよつと御相談申上げますが、こゝに四つ位の項目があるやうです、『干渉是か非か、』といふことゝ『干渉の承認される場合』と『滿蒙の特殊地位に對して吾々は之を如何に解していゝか』それから『日支共存共榮の根本方策』といふことです。それから小村さんの今仰しやつた支那の軍閥と軍閥と戰はして、疲れしめて、さうして其の間に本當の支那の政治が愈々行はれるといふこと。之に就ては反對の御議論があるだらうと思ひますが、第一この進行の狀態をどういふ風にしたらいゝかといふことに就て皆さんの御意見を伺つて置きたいのですが……。

米田　今の項目のどれかの一つに觸れなければならぬ譯だが、兩方へ跨ることもございますね、議論の筋道としてそれは已むを得ないでせう。

山本　それで、皆さんの御說をば短い時間で皆さんから承りたいのですが……。

堀江　質問……といふ程でもないが、一つ伺つてみたい。反直隸派の政治上の主義とか、又自分達が天下を取れば斯ういふ事をやるといふやうなことをですね、具體的に發表して居ることがあるのですか。今度の戰爭の前なり、又愈々戰爭が始つてからなり、機關新聞なら機關新聞を通じてですね。

小村　それは去年の春、夏の間の頃でございましたが、段祺瑞が天津で大體の大綱を發表した事があります。

堀江　何か箇條書のやうにして發表したんですか。

小村　箇條書でもありませぬが、マア箇條書にすれば出來ますが大體今言つたやうに、今日は要するに民意輿論の世の中で武斷主義はいかぬ。そして支那の平和統一は支那國民の意思に依つてやるもので、その意思を代表させる爲め國民會議を開いて決定する。而して將來の憲法もどう決めるか、建國の方針をどう決めるか、又さつき申上げたやうに聯省自治を主張せんければならぬ、それから內政外交の方針とかいふやう

な、さういふ建國の大體をその會議で決める。建國の會議を開くといふのはそれなんです。それには殆ど上海の各黨各派共に完全に諒解が出來て居る、段祺瑞と……。

堀江 その頃からちやんと渡りがついて居るのですか。

小村 さうです。そして今度……この春支那に行きまして段祺瑞等に會ひまして二時間ばかり話をしましたが、段祺瑞等の言ふことばかりでも分りませぬから、上海で各黨各派の話も聞いたのですが、それは改造社の註文で今度の『改造』でも長いものを書いております。

堀江 段祺瑞が豹變した譯ですね。

小村 軍閥の中から拔けて居る譯……

堀江 それはどういふ譯でせうか。勢力が無くなつたからですか。

小村 さうしなければ世に立たれないからで、今殘つて居る武力は、福建と浙江だけであつて、その浙江に江蘇が反對したからどうしても起たなければならぬことになつたのです。

堀江 今、段が言つて居ることも、どの位信頼し得るか疑問ですね。

小村 それは疑問です。唯併し幾分かはやらなければならぬでせう。丁度日本でも憲政會が全部はやらぬでも其中の一つ……行政整理とか又貴族院の何とかいふ樣な、さういふ差支の無いことは幾らかやるでせう。だから今と比較すれば大分宜くなるといふことは言へませう。之に反して……又呉佩孚の方でも同じだけれども、それがこの儘取つても到底永續は出來ませぬから、ちやんと支那人はさう考を決めて居るでせう。

米田 干渉論はどうかね。

山本 長谷川さん、今、小村さんは軍閥と軍閥とを爭はしめてそして何れそれが非常に衰へる、その間に本當の政治が起るといふことを言はれましたが、それに對する御意見はどうでございますか。

長谷川 さア、マアさうなるでせうね、なると思ふ。けれども今の最後のものが倒れるといふことですね。どうせ勝つた奴も惡い事をすれば又倒れる、今度呉の方が勝てば呉の方で又さういふ軍閥の武力統一をやるといふと、それはいけないから倒れるといふ。その最終のもの、呉なら呉を倒すのは何で倒すのですか、その倒す勢力といふのは……。

小村 是は同じことで、直隷派自身がその中で分裂が必ず起つて來る、分解作用ですね。それは的にならぬけれどもそれより外に仕方がない。それを待つて居る………屹度さうなるでせうね。

長谷川　それを待つてもですね。つまり、單細胞動物が二つになるやうになつても、矢張り同じ爭が起るといふ結果になりはしませんか。

小村　そのプロセスの期間が長いか短いかの問題ですね。

長谷川　さういふやうに假りに吳が二つに分れても、そこに同じものが二つ出來る——丁度袁世凱の勢力が今のやうに割れたやうに。吳の勢力が割れても、矢張り同じ性質、同じ形式のものが二つに分れるだけだといふことになりはしませんか。

小村　結果は、分れる程、その分れたものは小さくなるでせう。

長谷川　段々小さくなるといふけれども、どうでせうかね。今の制度を保つて今の形勢で進んだ日には、一時は分れるから小さくなるといふけれども、生存競爭の結果として或るものは又勢力を得る。つまり袁世凱後の段祺瑞、吳佩孚といふやうな勢力に又達しやしませんかね。

小村　さういふ時期があるかも知れませんね。

長谷川　倒れる時は……割れる時は小さくなると言つても、それが又成長してさうして同じ勢力になるでせう。

小村　さういふ期間が相當續くけれども、そこは日本でも外國でも、自分のやうに非常に進んだ政治、社會の組織を持つた高等動物といふやうな考を以て支那を見るなら待ち切れないが、支那人自身としては、過去の歴史に照しても、五十年や百年の間はさういふ亂世が續いたことがあるから、マアさうなると思つて居る。そこが非常に考へ方が違ふのですが、それぢや困ると言つた所でどうにも出來ない話ですね。で、支那人はどう考へて居るかといふと、そんな……

長谷川　そこですね。僕は唯問題を抽象的に考へると、同じ勢力が爭つて居る場合に、何か一つの勢力がギャップを持つた所を跳越えて、變つて來る時機が來やしないかと思ふ。今迄の經過通り割れないで、割れても、その今度割れた時は、そいつが今迄の性質を持て發展して行く事が出來ないやうな時機が來やしないか。例へば、日本の明治維新の際と同じなんだ。今の支那は……維新の際に薩、長、土、肥の四藩と德川幕府とに爭ひが起つた。あの當時は、今の支那の軍閥の爭ひと殆ど同じだつたでせう。維新の際には或るギャップを跳越えて、天下を取つた方のものは立憲政治を採るといふやうな急激な變化が起つたでせう。さういふ變化が支那にも起りはしないかね。つまり軍閥の性質を變へてしまふ。今まで通りの性質で發展して行かないで、割れた方のどつちかゞ假に性質を變へて、さうしてギャップを跳超えて、軍閥政治から急に或る……歴史的順序から言へば立憲政治に行くんだね、行

くやうに、ギヤツプを跳超えて急に移ることが起りはしないかと思ふ。

小村　段祺瑞はその標榜だけはやるでせう。又民黨の人はそれをやらせるでせう。

長谷川　唯、それをやらせる時に、日本はうまく行つたけれども、あゝいふ風に行く見込は支那には無いと思ふ。それはつまり日本のやつた場合は、新らしい勢力が思ふ通りにすることが出來たでせう、それが一つの軍閥の軍國的國家が倒れてさうして立憲國家が起つた理由なんだね。あんな事が支那に出來れば同じだが、所がそれが支那には出來ないと思ふ。軍政を立憲政治に支那の政府がするといふことは出來ないと思ふ。段祺瑞が立憲主義を標榜して政府を取つても、軍政の上で以ての軍國國家が地方に澤山存在して居るが、之をだね、日本の廢藩置縣を行つたやうに軍政を統一することは出來ないでせう。段祺瑞はそれが出來なければギヤツプはどうしても跳越えられない。さうすると何時迄も今の形勢で行くよりしやうがない。だから空想的にそのギヤツプを跳超えられなくては政治的に支那は立憲國になる樣に行かないが、併し立憲政治を建設したいなら資本主義が起つて來ればです。その資本主義が起ればギヤツプは跳越えなくてもオルガニックに立憲政治になつて來る。インターナショナルの資本主義が支那に行き亘つたらば、ギヤツプを跳越えないでオルガニックに軍政が倒れると思ふがどうでせう。

小村　それは孫文が代表して……一方には彼等も直接に直隷派から壓迫を受けて居る。軍閥から……。だから自分も今は軍閥行動を執らなければならぬ。其の點に於て反直隷派の三角同盟は一緒でせう。が今度は……今仰しやつた所に適當するかどうか知らぬけれども、丁度唯軍閥に對する軍閥ではいかぬ。又軍閥が如何に輿論を受けて民衆政治家を氣取つた所が、裝つた所が的にはならぬ。それだから例の社會革命とか思想革命とかいふ方の一種のその方のリーダーの勢力が、表面の爭の外に一種の地下水として潜んで居る。それが何時か噴出して地上に氾濫してさうしてそれが勢力を占めて來ることがあるかも知れない。それを廣東派が一面にはやつて居る譯ですね、それを宣傳したり運動したりして……。けれども支那全體から言ふとどうですかね、どうもそこ迄は出來ないですね。

長谷川　所で、支那人の考へなければならないのは、廣東政府の人なんかもさうだらうけれども、あすこで資本主義に行くことを實際政策としてやつたらどうか。過激主義、共産主義に分れてやつて居る人は澤山あるでせうが、おれはいかぬと

思ふ。あれは危險である、あれは資本主義の起るのを壓迫する一つの働きといふものになるから……。英吉利の共產黨が英吉利の政府を倒したといふあれと同じやうに、支那に急に過激主義共產主義をやつたら、軍閥を倒すことはむづかしいことになる。殊に軍閥を倒すに必要な資本主義を壓迫するといふことになるからね。あの運動は支那の歷史的過程では逸まり過ぎて居る。思想的に惡化し……思想的に先走つて居る。思想的に先走つて空想的になつて居るではないかと思ふ。

小村　廣東の內部にも爭が起つて居るのですね、過激主義、共產主義の間にも……。

長谷川　資本主義……と言つても何だが、支那の軍閥に商賣さしたらどうか。支那の軍閥を資本家にするのが一番よくはないですか。非常に惡辣な政策をやれば、軍閥に金を與へて商賣をさせるとか、大きな會社なり銀行なりを興させる、といふことを一つのプライヴェートで以てやればどうでせう。日本の銀行なり何なりのやうにです。そして今の軍政がもつとインターナショナルの資本主義迄、は入つて行つたら、事實あんな軍政は滅びてしまふ。產業上の主義と政治上の現狀がかち合つた場合には、產業上の主義に依つて自分で軍閥主義を撲滅してしまふと思ふ。その政策より外に支那の軍政を倒す方法は無い。裁兵問題といふやうな法令を以て一擧にしてやるといふことは出來ない

永井　今の長谷川君の話に就て一寸思ひ出したが、直隷派の兵士の中には、鐵砲を撃つては儲からぬ、それで砲彈を賣ればね、一個銅貨四文に賣れるんださうで、それを二文乃至四文に賣つて居るものがあるさうです。それを普通の人民が買ふのだ。さうして奉天軍の這入つて來るのを待つて、奉天軍に賣ると實價以上に高く賣れる。その鞘を取る爲めに五百個千個といふ砲彈の賣買が始まつたんですね。直隷軍に屬して居る兵士は、戰爭すれば危險はあつても儲かることは無いが、與へられた砲彈を賣拂つてしまへば儲かる一方だから、盛に砲彈の賣却を始めたといふことが書いてある。さういふ風になるとだね、實際金儲を始めると戰爭は止んでしまふね。

米田　今干涉論で色々ございますが、その中で二つ、一つは日本の東三省に於ける――東三省といつても主に南滿方面に於ける利益を擁護する爲に張作霖を援助する、さうして滿洲に於て其の地步を占めさして動かさぬといふ一派です。それからもう一つは、大體から見て支那全體に干涉をせよといふのがありますの爭に干涉する。支那全體の今の直隷派反直隷派けれども、少し極端であれば援助すると言つても宜しい。所

が先づ一番に滿洲に於て張作霖をして永遠に地盤を有たして行かうといふ、それが宜いといふ論者の言は、明治三十八年のポーツマウス條約以來日本が地盤をあすこに造つて以來、所謂奉天總督袁世凱氏など、御承知の通り清朝以來今日に至るまで總督督軍で色々な人が代つたが、日本との間に相談が一番圓滑に行くのか今の張作霖だといふ。今までは何とか云つてうるさがつて甘く行かなかつた。今でもちよい〳〵喧嘩する、感情の衝突がある。場合に依つては日本の領事が行つてヘタをやる場合もございます。ございますが、大局から言つて張作霖は圓滑に行つて居る。そこで特殊的利益關係を有する日本としては張作霖を維持するが宜いといふ。何とかして彼を維持しなければ工合が惡いといふ。所が吾々が考へて見ますと、張作霖といふ人物は本當に日本の味方をするものとして信頼が出來るかどうか。是は日本の利益ばかりで論ずるのでないけれども、假に日本の利益の問題の方面からだけ見るとして、御承知の通り彼は馬賊上りである。だから利害で動きやすいのであります、其一番好い反覆の例は、例の張勳か大正六年の七月一日に清皇室を奉つて、其が十二日天下で破れたことがある。あの際にどうかといふと、張作霖ばかりではなかつたけれども、あの連中は復辟に贊成であつた。所が天下の形勢がいかぬと見たから、大概は助けるといふ諒解があつて、張勳なども安心して……無論張勳も馬賊……ではない泥棒上りで大したものでなかつたが、安心して居た。所が形勢いかぬのを看取した彼はひつくりかへつたので、遂に張勳は失敗して和蘭公使館に逃れてしまつた。あれが果して世間で言ふ如きしつかりした人間で、自分の持する所を堅く行ふ奴かといふとさうでない。矢張り其氣の如何に依つて反覆する人である。だから今どうかといふと、袁世凱が死んだ後には督軍制になつて袁世凱の力がなくなつたものですから、殆ど各省獨立して別に税を取る、鹽税までも差押へたりする、軍隊は自分で勝手に造つて居るといふ有樣であるから、今は中央政府の威力が各省の督軍に行き亙らぬし、滿洲の方にも及ばぬ。張作霖も中央政府の支配權を受けぬからそこで日本に對して勝手にやり易い。場合に依ては妥協も出來る。清朝時代の總督の時はどうかといふと、總督巡撫は中央から免職される、北京政府の支配權の下にあるから北京政府の命もあるし、外に列國の運動もあるから勝手に出來なかつたが、併し張作霖はその影響は受けないし、勝手にやれるに加へて中央と反抗して居るから、日本の好意を求めなければならないやうな境遇に立つた。日本の言ふことを聽くにもや

り易い。又自分は日本と結托するに都合が好いやうな便宜な地位になつて居る。そこで唯便宜主義から日本に一緒になつて居るやうで、若しあれと同じやうな地位に置いたならば、從來の總督と雖も、彼と同じやうなことであつたらうと思ひます。であるから境遇の產物で、張作霖に限つたことでなからうと思ひます。それからもう一つ或日本の論者のやうに、張作霖をして滿洲に永遠に地盤を維持せしめるといふことはどうかといふと、それには日本が保障しなければならぬ、それをやらぬと張作霖はやり切れぬ譯です、今の或一部の論者といふものは、張作霖をして滿洲にちやんと居らして置いて中央に干渉させまい。滿洲に置いて中央政界に干渉させない代りに、同時に安全にさせやうぢやないかといふやうな案のやうであります。所がそれか滿洲は日本の領土でもなし、矢張り支那の一部であつて見ると支那の主權の下にある。華盛頓會議の決定などでも益々その精神を發揮されて居るのだから、そこで日本が張作霖に奉天を維持させることにすると、日本が是こそ支那の主權を蹂躙することになる。蹂躙しなくては出來ぬ。だから日本が若しさういふ意味の干渉のやうなことを將來やるならば、それにて支那人全體の反感を受けるのであつて、二十一ケ條事件以上の問題になるだらうと思ふ。それで日本が干渉もしない、保障もしない、さういふことは出來ぬといふことになれば、張作霖としては何もあすこ引に込んで滿洲に地位を維持して中央政治に關係しないといふ譯にいかぬ。何となれば自己を保全し自己の防禦の爲にも必要である。御承知の通り今度の吳佩孚が最近になつて四川省を討伐しそれから福建を收めてしまつたものだから、段々と直隸系の方面の力が廣くなつて來る。廣くなつて來ると、浙江にせよ、奉天にせよ、自分の地位を心配して來る譯になる。若し浙江でも今度破れたとすれば、奉天が獨り殘るのだから非常に心配になる。無論廣東もありますが、廣東なんか實際實力がございませぬから、武力が無いから問題にならぬ。そこで自分の地位を助けん爲に矢張り中央に入つて行なければならぬのだから、日本が保障を與へて之を止めるといふことは出來ない。だから今言ふ滿洲に止めて置かうといふ論者は、その意味で張作霖を援助するといふ根據が當てにならぬ。之に反して張作霖を積極的に援助して北京まで出して行つて、あれを北京政界に本當に乘込まして、四年前の安直戰以後に一時張作霖が占めて居つたやうな、梁士詒か內閣を組織して居つた時のやうに勝手に自由にするといふやうに、あの勢力を一層進めるかどうかといふと、張作霖といふ人に

はそれだけの能力の無いことは分つて居る。又脊椎もない、すればどうも張作霖援助論は問題にならぬ。其次は、又一面に或一部に行はれて居る論は、支那全體に亙つて又直隷派の方を助けたら宜からうといふ。即ち盧永祥、張作霖、今の段祺瑞――一時的に一緒になつて居る孫文も居るのでありますが――先づその連中を助けるが宜いといふ。此論はどうかといふと、直隷派はどうも英米と一緒になり易い、又なつて居る。そこで日本の利害を圖る方はそつちでなくして反直隷派の方が圖るといふその一部の論は御承知の通り例の上海附近に亞米利加が無線電信の根據地を作るといふ場合、あれに就て唯今上海は江蘇に屬して居るに拘らず、浙江の督軍……是は督軍は止めまして軍務なんとかとなつて居るやうですが、盧永祥、その盧永祥の下にある何豐林といふのが上海の護軍使であるといふ立場から上海附近が今浙江の盧永祥の下に立つて居る。江蘇の督軍の齊燮元の下に立つて居ない。そこで亞米利加の方ではどうかといふと、どうも上海附近の好い場所に無線電信の根據地を造らうとすると、浙江軍は日本に宜からしてその場所を與へない。之に反して將來江蘇の方の齊燮元の方ならば、愈々あすこを統一して、江蘇だけでも統一することになれば亞米利加に與へるんだといふ。さういふ風に大體の感じがさうなつて居りますから、直隷派はその點で具合が悪い。もう一つは吳佩孚が西洋人の評判がよい。この頃は少し落ちましたけれども、殊に一昨年頃は評判が宜かつた。一つは彼が馮玉祥と同じくクリスチャンであるといふことが一つ、もう一つは學問も幾らかあるといふやうなこともある。英吉利あたりでは吳佩孚などを利用して鐵道政策を行はふ、鐵道に段々自分の勢力を入れやうとする。亞米利加の方でも利用しやうといふ頭があるのもある。それから日本は長く寺内内閣時代に段祺瑞を助けた、一億五千五百萬圓の借款を以て實際あいつらの南方討伐の費用に幾らかなつたと稱し、又新交通系の曹汝霖その他の連中が着服する金にも、なつたらうと思ひますが、さういふ風にして歴史的に反直隷に近い。そこで若し甘く行つたならば日本に便宜だといふ風に考へて居る人が相當にあるけれども、是は吾々が支那人は所謂自分本位であるといふことを知らぬのであつて、矢張り便宜主義で時々どうにでも變る。丁度段祺瑞その他の連中が日本の方に近かつたからして、直隷派が日本に反對したものである、だからして立場でクルリ〱變るのだからして今の點は問題にならぬだらうと思ふ、彼等の主張でさへも小村君の御話になつたやうに、吳佩孚連が前には立派な主張をして居

つたが今はひつくり返つた、段祺瑞は軍閥だけれども近頃良ささうな主張をして居る、そんなことで便宜の爲にクルリクルリ變る、そこで本來直隷派が日本と惡いといふのでもなければ、又反直隷派が本來良いといふのでない、當時の行懸りからさうなつて居るので是は問題にならぬと思ふ況や今日支那で統一するやうな能力の人が反直派にあるかといふと、段祺瑞といふ人は廉潔で立派な人だらうけれども、政治的能力はないのみならず、寺内内閣當時のやり方を見ると、隨分腐敗したことを自分の手下にさせたのです、それから四年前に安直戰爭の元になつた河南の督軍趙倜といふのがありましたか、あれを逐出して自分の妹婿に吳光新をあすこの督軍にしやうといふことがあの騷ぎの口火になつた、あゝいふ遣方にした所で決して宜いことぢやなかつた、段祺瑞といふ人が自分で惡くなくても、立派な人であつても、自分の下の働き手になか〳〵勝手にやらせて居るのです、本人は善い人であつても、腐敗した惡いことを政界を毒することを下にさせて構はぬといふものは、矢張り先生が惡いと同じことなんだ。のみならず段々時代後れになつて居るし、あゝいふ人を助けて行つた所で今頃支那が甘く行かうとは思はない、同時にそれでは直隷派はどうかといふと、直隷派も御承知の通り曹にした所で、吳佩孚にした所で、最初はちよつとよささうな説があつたが、今は西洋人あたりも惡く言ひ出した、昨年頃から今年にかけて英吉利あたり亞米利加あたりに出て來るものを見ますと、二年ばかり前とずつと變つて來まして、統一の能力がない、あれはあれだけであれ以上、いかぬといふやうな觀測が出て來た、二年ばかり前はさうでもなかつたが、吳佩孚は支那を統一する人物のやうに言はれて居つたが、その頃は期待に背く、期待するに足らぬといふやうな文句で出て居る、英吉利の領土になつて居る人などはさういふ風な冗談などども言つて居る、だから之を助けて統一をさせるといふ人は居らぬ、日本の利益から言つても助けるといふ人は居らぬ、反直派にも居らぬし、直隷派にも居らぬ、斯ういふ點から日本の利益といふ點から言つても、一方を助けた方が宜いといふ結論は出來ぬやうである、況や支那のことは支那のことであつて日本の利益を見るといふことは支那の政策を誤つて却て日本の不利益なことになる、兎に角滿朝時代は矢張り支那では文官本位で武人といふものは低かつた、民國になつて急にあつちこつちの武人が中心になつて來て威張り出して來た、だから之は永遠の問題でなく或時機に至る變態ではないかと思ふ、矢張り日本としては差當つての問題よりは十年二

十年の後の問題で、矢張り小村君の言はれたやうに進む途は自然に進ませて、さうして新らしき生命が終ひに現はれて來る、新らしき機運が出來て來るといふことを助長して行つても邪魔することはいかぬだらうと思ふ、今に支那人自身が和平にしなくちやならぬと思ふ時期が來る、その時に助ける、今日支那人の輿論でない時に干渉論などに贊成することは出來ないのです

山本　小村さんの聯省自治と云ふのは、支那を一つの國家と見ての御話でありますか、一面又、支那を國家と見ないと云ふ說もある、吉野さんの御話はどう云ふのですか。

吉野　國家と見ないとは思はぬが、聯省自治とか、武力統一とか云ふこともあるけれども、武力統一でも聯省自治でも、何等か支那に一つの纏つた國家の組織を與へて、それで統一して行かうと云ふ形で行つては永久に成功しないのだと思つて居る、それで兎に角軍閥を互に爭はせて見る、が幾ら戰つても何時まで經つても軍閥が殘ると思ふ、長谷川さんの言はれるやうに本當にそれを制すものは民衆の力だけれども、民衆が全體に纏つたやうな形になつて押出して行つて倒すのではないといふのは支那の國民は感激しない、殊に依つたら自治は自治だけれども、省では大き過ぎるので、今は交通なども發達して居りませぬから、極小さい所で、利害關係の一致するやうな小さい自治體が色々な所に出て、それが又重なつて一つの大きなものになり、それが省のやうに大きくなると云ふ階段を造つて行つて、さう云ふものゝ勢力で軍閥を閉塞する時期が來るのぢやないか、さう云ふ時期が來なければ全體が纏ると云ふことはないだらうと思つて居ります、だから露西亞のやうなものがモデルになつて、隨分日本に來て居る支那の學生で、さう云ふ意味で研究して居る人が多いのであります、其事を研究して何かの形でそれを支那に移してやらうと云ふのです、現に地方の自治體が、隨分あるところにはあるやうですけれども、相當發達した所には殆ど將軍でも誰でも手を出せないですね、さういつたものが固まつて來るにあらされば統一が出來ないのぢやないかと思つて居る

山本　今の支那は完全な國家でないと見るのが穩當でせうか。

吉野　法理上は國家かも知れないが天下ですね

長谷川　昔の言葉で言へば天下だね。それでも法律上は國家でせう、國家はどう云ふ形體を取らなければならぬと云ふ絕對的の性質はないからあれでも國家と言へば言へる。

吉野　今の學問で謂ふ國家と云ふ意味にきちんとは嵌らない。

山本　福田さん、今度の干渉不干渉に付て、日支共存共榮の前

提から見てどう云ふ風に、御覧なつていらしやいますか、若くは何か日本の態度に付て御考へがありますか。

福田　私は自分には説はない、一つ吉野君に伺ひたひ、吉野君は、支那は省若くは省よりは小さい幾多の國に分れてと……

吉野　國と云ふのではないけれども、東京のやうに纏つて居る所は宜いですが、地方の小さい町とか村とか云ふ所で、銘々の生活が互にインターデペンドして居る範圍で、さう云ふ所に自治體が起りつゝある、其處で金を出し合つて郵便もやれば兵隊もやれば色々な事をやつて居る、さうすると他の者が手を著けない、ぴたつと固まつてしまふ、土地を基礎としない商務總會とか商業家の團體などで軍閥に壓倒されながら自分達の仕事を可なり完全にやつて居る、あゝいつたやうなものが政府が戰争などで愚圖々々やつて居る間に發達して來ると、今迄は督軍に抑へ付けられて居つたけれども、今度は督軍の言ふことを肯かない奴が出來る、人民にさういふ團體が出來て、さうしてそれが聯合する、其聯合がこれと同時に大きくなる、相當に大きい聯合が又他の聯合と結ぶか、それは是からの成行に任すとして、さう云ふ多數の小さい固まつた奴が基礎になつて、結局督軍もどうも斯うもならないと云ふやうになつて、それが本になつて本當の強い固まりになるのではないか、さう考へて居る、又さう云ふような卵が出來つゝある、さうでもしなければ迚も纏まるまい、初めから全體を纏めるやうな頭で組織を拵へて押付けたのでは旨く行くまい、日本の維新なるものは、日本國民たることを光榮として、謂はば空名に感激して出來たものであるけれども、支那人はそんなことには感激しない、何か儲からなければ、自分の生活に何かの關係がなければ動かないから、そこでさういつたやうな小さい所で固まつて、その固まることが自分達の生活に直接關係があると云ふ經驗が積んで、それから段々固まつて行けば本當の固まりになる、さういふ時期の來るまでの間は軍閥にやられたりなんとぞして愚圖々々して居る、さうなるのぢやないかと思ふ。

福田　支那と云ふ國は戰さごつこをやつて……。

吉野　戰さごつこをやつて居れば何時迄たつても色々な奴が、例へば段祺瑞が引込んでもあとから下らない奴が出て來る、日本でも西園寺が引込むとあとから下らない奴青木信光の如きが出て來て威張るだけで、威張る奴の性質が下等になるだけで、同じやうに民の膏血を絞る、支那でも遊戯的に戰爭をやつて居る奴はいつまでも絶えないであらう、所謂細胞の分裂

は何時迄經つても絶えない、そこでいつか倒す奴がある、倒す奴は民衆の力だけれども、其民衆が全體を纏めるやうな組織を與へられて、それに感激して集まるといふことは、日本人には出來たけれとも支那人には出來ない、それはさう云ふ民族性でないといつて宜いか、思想が無いと云つて宜いか、兎に角今のところはそんなものを持つて行つたのでは支那人は動かない、動くのは何かと云ふと、小さい利害の密接した團體が自治的に起らなければならぬ、現に起りつゝあるし、今日本に居る學生か一生懸命にさう云ふ興味を持つてやつて居る、どうしても是だと思つて居る奴が可なり多い、さう云ふ奴が國へ歸つて行つて、役人にもなれないで田舍に居つて獻身的に、日本から百人歸つた中五人でも三人でもやれば、隨分違い話のやうだけれども案外早くはないか、僕の空想だけれどもさう考へて居る。

山本　さう云ふものが起つてもまた倒れて……。

吉野　倒れるのぢやない、さうなつたら倒れない。

長谷川　それは僕も同感だが、あなたのやうに纏まつた勢力でやらうと云ふのは軍國國家、政治國家に特有な現象だけれども、支那は軍國國家、政治國家には纏まらぬ國で、所謂アナアギズムの圖案でないかと思ふそれで日本の國家のやうに經つてやらうと云ふことは決して宜いことではないと思ふ、日比谷の原に集つてやると云ふことは政治國家、軍國國家に附き纏ふ現象だから、本當の國家改造はさう云ふ運動で出來るものでない、矢張り同じ軍國政治、政治國家を繰返すだけであるから、小さい細胞が發達して行くと云ふ風な組織でやるのは、支那ばかりでない各國の國家改造の道程だと思ふ。

吉野　根本はさうなるが最近、少なくとも百年間はさうぢやなかつた。何處でも……

長谷川　何處でもさうでないと云ふのはプロセスが其處まで達しなかつたからで、支那も資本主義が崩れる時にはこれが出來ると思ふ、あなたの今の組織は資本主義に反對する組織でせうが、それが直接出來ると云ふことには疑を有つてゐる　何故資本主義を經過しなければならぬと云ふと、資本主義に對する反抗としてさういふ組織が起るからであります。兎に角資本主義が支配する、あなたの言はれるやうな自治體になると軍閥も手が出せない、金を取ることが出來ない、商業會議所なんかも……

吉野　商業會議所は取られて居るが、是は取られない、其處だけである。

長谷川　さう云ふことの出來るのは軍國國家の財源があるからで、財源がなくなれば資本主義による外ない、財源がなくなれば軍國國家がなくなつて資本主義になるから、さうすれば一度に潰れると思ふ、どうしても一度資本主義が成つて、これが崩れなければ駄目だ、露西亞見たいにレニンのやうな者が出て獨裁でやることが出來るればそれは出來るけれども、支那には獨裁が出來ないからさういふやうなプロパビリチーが無い、一つの組織を全體に拵へ上げると云ふプロバビリチーはない、矢張り一度資本主義の過程を經なければいけない、上が軍國組織で下に自治體があつてちつとも勢力が加はらぬ組織でやつたら、其組織が完成すると云ふだけで、軍國國家は倒れないと思ふ、

山本　堀江さん支那の資本主義は確立の可能性があると思はれますか。

堀江　段々西洋の文明を取入れたら。……

山本　其程度は……

堀江　オルガニゼーションが出來るや否やと云ふ點です、今のやうにオルガニゼーションのない状態では出來ない、オルガニゼーションは直ぐには出來ない、今は交通機關もなし、個人の信用もない、株式會社をやれば誰かの喰物になるやうな状態ではどうしても出來ない

長谷川　組合組織がどうしても出來ないと云ふのは支那の特有だネ

堀江　個人々々の信用が大きくなり、資本主義の出來る、要件が支那に起らなくては何時になつて出來るか分らない

山本　これ迄に各地に存在する孫文の政府、東三省の政府、中央の政府、此三つの勢力を認めて日本が總ての交渉をやれば宜いと云ふ説はいかがでせう

堀江　其政府がどれ位の力を有つてゐるか、日本政府と交渉する能力があるか、孫文政府は從來政府と稱して居たつて省のやうなもので、其土地だけを支配して居るのであるから日本が眞面目に相手に出來るかと云ふことになる、怪しいものだと、云つて勢力ばかりで日本が干渉してどれを擁立てると云ふことは出來ない、相手が大き過ぎるから私共素人考へには分らぬが、或一人二人を信用して無暗に肩を持つと云ふことは駄目でせう、それで始終失策してゐる、段祺瑞に惚れ込んで、寺内内閣が惚り込んだけれども何が殘つたかと云ふと、殘つたものは一億數千萬圓の空證文である。だから一人二人に惚れ込むことは駄目だらうと思ふ、

吉野　これは日本の癖だネ、御用商人がお役所の會計官をごま

かして物を賣るやうに、良い物を廉く賣ると云ふことで競爭入札で勝たうとしない、結託して何か利權を與へて自分の言ふことを肯くやうな人を拵へないと承知しない、選擧でもさうです、段祺瑞に惚れたのは宜いけれども、まごついて困つて居る奴に金をやつて言ふことを肯け、良い人でも言ふことを肯かし得ないのはイヤだ、羅馬尼から醫者を頼まれた時にも、初めは醫學博士をやらうとしたが、軍醫の方が宜いと云ふので軍醫をやらうとしたことがある。張作霖も言ふことを肯くやうに腐れ緣を繋げて、景氣が悪るくなると何でも張作霖を立てなければならぬと云ふことになる

堀江　これは日本人の自惚れで、あの位肩を持つたから此位のことはして吳れると思ふが、向うは何とも思つて居ないのだ

吉野　先刻小村さんの言ふ通り吳佩孚だつて日本の利權を擁護する、此方さへしつかりして居れば……

堀江　だから爭ふだけ爭はせるより仕方がない、今滿洲に有つて居る日本の權利は何處の國だつて侵害することは出來ない、日露戰爭前の露西亞や獨逸のやうな國が出て來ることはないだらうと思ふ、オープンドアのプリンシプルで裏面では傷つけるかも知れないが　面では尊重しなければならぬ、日本の資本で事業をして居るのであるから誰が勝たうが、誰か權力を持たうが脅かすことは無からうと思ふ、なまつじつか誰を助けて其勢力を利用してどうしやうと云ふのが私は間違ひだらうと思ふ

山本　併し若し中央に日本が交渉しても宜いやうな立派な政府があればだけれど、それが出來る時まで。現に露西亞のカラハンがやつてゐるやうに中央では北京政府と交渉し、奉天では張作霖とも交渉し、南方で南方政府と交渉して居るが、日本は矢張り同じやうに交渉したらどうか……

堀江　從來日本でも局部的にやつてゐる、政府が表面からはやらぬかも知れないが大倉なら大倉が張作霖と提携すれば日本政府が助けて居る、表面ではやらぬでも蔭で助けると云ふことが多少ある。

山本　それは永井さんどうなつてゐませうか、

永井　これはさうです、別々に待遇して居る、若し日本政府が北京政府をのみ認めることになれば、今度でも張作霖は逆賊にあたるんだが、さうは取扱つては居らぬ。

福田　第一私は日本の新聞などに書いたり、冗談にしたりしますけれども、支那の戰爭は幼稚だ、雨が降ると傘をさす、夜は戰爭を止めるが、それを笑ふのは大變間違つて居る、私はそれが實に理想的の戰爭だと思ふ、戰爭は勝ちさへすれば宜

い、人を殺す爲めではないから、人を殺さないで濡れないで、傘を被つて戰爭をして夜は休むと云ふ戰爭は最も理想的の戰爭だと思ふ、之を文明の戰爭にしなくてはいけないので、支那人を笑ふのは馬鹿々々しいと思ふ、私の見たのは奉天の張作霖の兵隊ですが、小さい大砲を持つて小さい馬に乗つてがらがらやつて居た、兩方ともさう云ふ風で戰爭して居ればそれで宜い、文明の利益だと云つて飛行機などでよく人を殺す、結局何方が勝つか負ける、勝負がなければ同じことだ、同じことならば成るべくならば鐵砲も大砲も刀も無しに戰爭をすれば一番宜いのだらうと思ふ、それだのに餘計な話で張作霖の所には何とか云ふ日本の大佐が居る、直隷派にも居る、山東へ私が行つたら何とか云ふ日本の大佐が附いて居る、さうして日本の軍隊的の訓練をして、其人の居る所だけは日本の軍隊的になる、實にあれが大變間違つて居ると思ふ、第一不干渉なんと仰しやる外務省が軍人を何故おやりになるか、軍人をやつて、勝手に行つたのだらうと思ふ、豫備か後備だらうと思ふが、軍人が軍備を教へて居る、あゝ云ふ者を何故早く引上げて仕舞はないのか、或は張作霖の使ひに來て運動する、なぜあんな者を捕縛して仕舞はないかと私は考へて居る、怪しからぬ話だ、成るべく戰鬪力を支那の軍隊に與へない方が人民を害さない、それから張作霖に向つて日本が仲間に入つて、北京の上に飛行機を飛ばしていけないと抗議する、馬鹿な話だ、それより北京に向つて北京を撤退しろと言つた方が宜い、北京に在る大事な寶を燒くのがイヤだと云ふなら北京から引上げろ、さうして北京を引上げて天津へでも行つて仕舞つたら宜い、飛行機で飛込んで行けないなんと云ふのは不干渉どころでない大干渉だと思ふ、干渉して置きながら不干渉だと云ふのは頭の惡い話だと思ふ、それが私の疑問です、是はどう云ふものであらうか、それと反對に支那を精鋭ならしめ、盛んに戰爭をさした方が支那の爲になり世界の爲にもなるかと云ふに、私はさうは思はない、それからもう一つの疑問は何故支那にオルガニゼーションを與へるか、何故支那を一國にしやうと日本が焦せるか、焦せらなくても宜いのに何故さう云ふ事を希ふか、一體今日國が出來たのは、日本のことを申すと惡いから日本だけは除外して歐羅巴に就て言へば、人の國をふんだくつたり何かして國の統一が出來た、伊太利の如き、西班牙、葡萄牙、英吉利、和蘭、佛蘭西、皆さうである、最後に獨逸、獨逸は人の國を取らうと云ふ時にはばら〳〵になつて居た、それが聯邦になつて力が附いて取れさうになつて出て來た時には殖民地がなかつた

ものだから今度のやうになつて來た、人の國を取るにはなるべく人の居ない取り易い所を取る、それが殖民政策で、段々土地を搾り取つて國が出來たが、獨逸は殖民地が得られないから人の住んで居る所を荒し廻つたので憎まれたが、決して獨逸が惡い譯ではない、遲く起つて來たからいけない、日本は例外にして置きませうが、どうも私は近世國家の出來たのは、昔は分りませぬが近世國家の出來たのは、人の國を取るためか、取られさうなために統一すると云ふ外に意味はなかつた樣に思ふ、歷史上の事實に於てなかつたやうに考へる、其他又國民の財產生命の安固を圖ると云ふのですけれども、それは他の國が皆國になるから國の形でもつてやるので、さうでなければ必しも生命財產の安固が維持し得られなかつたのではない、少なくとも歐羅巴ではなかつたと考へる、交通上のこと、關稅のこと、道路の修築と云ふやうなことには色色の組織が要るが、それは國でなくても出來る、ハンザ同盟でも出來た、ライン同盟でも出來たものである、此やり方は、今迄のやり方に於てはさうでなくてはならなかつたらうが、將來もさうでなくてはならぬのであらうかどうか私には分らない、中々むつかしい、支那に向つて支那を統一しなくてはいけない、それには中央の權力が强くなくてはいけない、誰か中原の鹿をとつて全國を引締めるやうな人が欲しいと希望する、此希望の仕方が私は無理だと思ふ、私は自分の國に於ける例を以て支那に望むと云ふことは無理ではないか、支那の民衆が希望して居るのか知らない、又支那人生活の現狀はさうでなければならぬ地位に立つて居るか、どうも私には分らない、吉野君の言はれるやうに地方的の自治團體が出來るやうに、私は全然支那のことは知らないので分りませぬが、終局的に中央に大きな者が出なければ支那の問題は解決しない、どうしてもさうなくてはならない、督軍同士喧嘩をせしめるのは結局は誰か統一するのだと云ふまで進むだらう、斯う云ふことは私にはよく分らないが、督軍同士の戰爭に日本の軍人が行つたり何かして智慧を附けて本當の戰爭をさせ、惡い戰爭をするやうになるのは大變困る、さうでない雨が降つたら休む戰爭ならやつたつても大した害はない、支那の民衆は迷惑するでせうけれども、民衆が自らどうすることも出來ないものを、他から行つて彼れ此れ言ふべきではなからうか知らん、又財政問題から申しても、何億と云ふ金を日本人が一派に貸してやつてうんと財力を與へると云ふやうなことも分らない、一方にそれだけの力の無い者が出來て來る、而もそれを其人間が十分支那民衆の爲に使ふかと云ふとさうで

ない、唯或一派を利するに止まる、日本は或一派を利する爲にやつたのではない、支那全體の爲めなり日本の爲にやつたのでせうが、やつた人にはちつとも爲になつて居ない、將來と雖も私はどうもさうぢやないか、是が第二の疑ひである、第三の疑ひは長谷川さんの仰しやつた資本主義になる力が早く文明の代議政體の起る途だと仰しやつたのは、歐羅巴に付てはさうだし日本もさうであらうと思ひますが、支那はそれは一番世界中で不適當な所ではないかと考へる、支那人ぐらゐ發展の理法に乘つて來ない者はないのぢやないかと考へる、日本は維新の時にぽかつと統一したかと云ふとさうでない、德川氏が三百年間統一して居つた、其統一して居る前には亂れて居つた、織田信長などが出て來たが倒れてしまひ、家康が最後に來てうまい汁を吸つた、それから約三百年、少なくも二百何十年間統一して居つた、是は自分は兎角非難されませうけれども德川時代は決して封建政治ではないと私は見てる、形は封建政治であるが實際は專制政治である、專制的のルイ十四世が築いた國家と同樣に考へて居る、其準備を支那がやると云ふことは到底出來ない、早く是が片附くにした所で、日本で三百年かゝつたものを三十年五十年では出來ないだらうと思ふ、即ち德川氏にあれが出來たのは、其前に日本の經濟の仕組が本當に封建化してゐた、フユウダリゼーシヨンが出來て居た、西洋でもさうです、歐羅巴は少なくともさうなつて居る、其理法に支那は乘つて來ない、乘つて來るにしても長くかゝる、其中には世界の形勢も變り、支那の形勢も變つて來るので、全然出來ないことになつてしまふかも知れませぬ、迚も吾々の眼の屆く限りでは考へられない、支那は資本主義にならないけれども支那人は金儲がうまい、利慾に強いと云ふのは資本主義にならない強い理由ぢやないかと思ふ、個人々々の金儲けはうまいが所謂資本主義が大變に違つた方へ發達してしまつて、どうも資本主義を授けることは出來ないと云ふ心持が出來て居るのぢやないかと思ふ、資本主義を授けるにしてもむつかしい、詰り資本主義的の國、其前の德川時代の國と云ふものはうまく稅の取れると云ふことが土臺にあつた、稅の取れ方がうまく行けばどん〳〵民衆の壓迫もするし、政府の力から言へばうまく財政が立てられると云ふことがなければ國が出來ない、所が支那の稅の取り方は下手なんで、ギウ〳〵搾つても決してたんと稅は出て來るものではない、搾らないやうにして搾るのが本當の財政の立方である、英吉利の財政がうまく行くと云ふのは搾らないやうで搾つて居る、他の國では敵はない、その搾る本として

民力を涵養して居るから非常に強味がある、支那は搾れるだけの民力もないでありませうけれども、搾り方が下手である、支那古來の、他の事は知りませぬが知つて居る一の事を言へば税法が非常に下手であります、税を取つても其途中で皆寄つてたかつて、かすりを取つて、澤山人民から取つたやつが結局國庫では僅かしか入つて來ない、永い習慣で是が中中改まらない、又改まらないやうに出來て居る、取る人と取られる人との間が遠いほど無駄が多い、近くなれば無駄が減ずる、取つた額に近いものが收入になる、中央まで送つて行くと云ふことが支那では出來ない、それが出來ないと他の點で幾ら中央に大きな統一國家を拵へても出來なくはないが、それを工風して税をたんと中央に集めて良い財政の仕組で適當に經濟的に使ふと云ふのは、歐羅巴に於てはそれで國權を擴張する、殖民地を獲得する、外國を倒して侵害する必要がある、其必要に迫られてやつたので、西洋人が其工風がうまい譯でもなかつた、必要に迫られない前、封建制度の前には拙かつた、全く亞剌比亞から教はつたやり方で、それが英吉利で發達して、他の國も眞似をして居る、今之を支那に教へると云ふことはむつかしい、出來ても現實に必要がなければ中々出來なくはないが、中央に財政を持たなければならぬ相當の者も今はない、其必要も今支那人としては感じて居ない、吉野君の言はれるやうに地方々々で相當にやつて利益が擁護されて居れば滿足して居る、中央の必要を感じて居ないから税を出さない、無理に取れば寄つてたかつて取つて仕舞ふと云ふことになるのぢやないかと思ふ、是が第三の疑ひです、要するに私は支那のことは知らない、支那人も知らない、素人考へで見ますと、日本に今迄行はれて居つた所は、支那を日本のやうにしなくちや蟲がおさまらないと云ふ頭から出て來る、それは迚も出來ないことである、日本のやうに治まると云ふのは、維新の際には大變うまかつたと思ひますけれども、日本ではうまかつたでせうが、それが何處の國にもうまいことがあるや否や、是が一つの疑ひであると私は考へる。日本も今日まで徳川氏が續いて居つたならばあゝうまく行つたかどうかと思ふ、其眼を以て今日の問題を見ますと是は問題にならない。干渉も問題にならない、一方にアイデアを實現させやうと云ふから干渉と云ふことになる、さうした方が自分の利益だと利益主義でやるのか知らないが、結局は支那の爲にもならない、日本の利益にもならない、さう云ふことから言ふと干渉不干渉と云ふことは全然問題にならない。今までにやつた事を絶對に手を引いてしまふべきぢやな

いか、特別借款を諾したり軍人を貸したりすることは打切らねばならない。教育、文化的の事をやるのは宜いが、さうでないことをやるのはいけない、唯困つたことは英吉利、亞米利加、日本などから云ふと、支那と云ふ國があつて力の強い政府が無ければ談判をするに不便である、それで此方が不便だから拵へると云ふのは全く實際の必要から來たことでないから、中央政府が弱くては色々な事件が起つて仕方がない、さう云ふ國が世界にあるのも仕方がない、一様の型にははまらないのではないかと考へる、それは考へたゞけで、果してそんなものかどうか、幸に御批評を戴ければ結構であります。

天井　皆、大體思想の距離はないやうですね。

長谷川　資本主義が支那に行くか行かぬかといふことには、支那の民族性がどれだけ産業上インターナショナル化ずるか、又することを支那の民族性が妨げるかといふことが、分らなければならぬ。民族性が是れ〳〵是だけ妨げるといふ具體的研究が出來なければ、資本主義が行くとか行かぬとかいふことは出來ぬ、私は今の所支那を知らぬから、その民族性といふものは一般的人類的のものとして、産業上インターナショナルに同化するといふことを認めて資本主義化するといふことを言ふだけで、特に支那を研究して、民族的にさういふことにはならぬ、又組織上さういふことにならぬといふことが確實に分れば、支那は資本主義化しないといふことも言へやうと思ふのですね、その智識が無いとちよつと斷言が出來ぬと思ひます、矢張り一般原則に從ふより仕方がない、斯う思ふ、併しこの民族性を非常に高調することには僕は疑を持つ、物質的なり産業的の自覺といふものよりは民族性は弱いと思ふ、で支那がインターナショナルの道程に這入れば民族性が働かなくなる、今の民族性が働いて居るのは、支那がインターナショナルの道程を通らないからで、その通らない事情は色々あらうが兎に角通らないからで、通るべき道程には入るとその民族性は世界的になると思ふ、將來のことは分りませんけれども……、で、支那がインターナショナルに永久には這入らなければ民族性が固定して即ち資本主義化して行かない、斯ういふ風に言ふより仕方がない。

堀江　今の所いろんな妨碍があるといふことは事實です、インターナショナル化するに就て……。例へば貨幣制度の改革と言つたつて支那人は決して希望して居ない、今のやうに混亂して居る間は結構あれで生活して居るので、外國人などがあれを改革して行かうといふのは餘計な話だ、又支那人で改革

しろといふ奴は、その間で儲けやうといふ奴で、借款でも起して儲けやうといふ奴が支那人の改革論者でせう、支那人の多數は舊い制度のあれで結構職業もあるし儲かりもするんだから……、行きたての外國の商賣人なら損をするが、こいつは大馬鹿野郞だ。

長谷川　支那人に、さういふ利益方法よりもインターナショナルになつた方が儲かるといふことが分れば、それには入るだらう。

堀江　併しそれがだね、現在儲けて居ることに執着するから、新制度になつたらどうなるかゞ分らないだらう、そこへ行くと保守的觀念の强い奴だから今の狀態がいいといふことになる。

長谷川　今の組織で儲かつて居るならば……。

吉野　今の組織が儲かるといふけれども、その儲かる奴は限られて居る階級だ、が未だ儲かるか儲からぬか知らずに居る多數の奴が是から働くといふのだ。

堀江　そいつを分らせるのは大變だね、將來のことで煙のやうになつて居るんだからね、儲かるか儲からぬかが……。どうも支那人といふものは、現狀に甘んずるといふ所は强いでせう、現狀打破といふよりは餘ほど現狀に甘んじて居る方が强さうだね。

長谷川　支那人の特性といふて、支那人だからグラ〳〵變る、支那人だから信用されないといふけれども、是は僕ら日本人でも同じだらうと思ふ、政治家など隨分グラ〳〵變るからね。

堀江　日本人も似て居るね。

長谷川　板垣退助でも大隈重信でも失意の地位に居なければあんな過激派にはならない、得意であつたら保守黨でせう。

米田　それは程度の問題ですよ。

長谷川　程度の問題ですが、併し又グラ〳〵變るのは環境の變化に依るのが多いのだから、そいつを餘り言ふのはちよつと可笑しい。

米田　政治家と一と口に言つても、それは人間に依つて……。

堀江　日本人はそれに懲りて居るからさう言ふのだらう。

米田　支那人には、外患が起つてから幾らか國家といふ頭が出來て來たやうですね、今はどうも國家といふ頭も淸朝時代の初めよりは少し寧ろ遲れて來たやうですね、中央政府のせいかも知らぬがどうも尊敬されないやうな氣味がある、併し個人々々には……。

吉野　外から侮されると、それに對して消極的にボイコット・

るとか利權を回收するとか何とか言ふけれども、皆が一緒になつてやるといふことが出て來たことは、未だ嘗て一度も無いやうですね。

永井　けれどもその思想は段々國家的生活の基礎になつて來るやうに思ふがね、今、福田君のお話の軍隊のことだね、それは事實福田君の言ふ通りなつて行きつゝある、支那の戰爭は、民國元年の時代の革命當時に較べると今日の戰爭は非常に小規模のものになつてしまつた、それから非常に緩漫になつて行きつゝある。それは財源が涸渇した爲めだね、經濟的にさうするを得ないのである。何となれば年々軍閥が誅求するそこで商工業者は段々それに對して反抗するやうになつて來た、そこで外國の借款に依らうとするのだが、外國は申合せて戰爭を目的とする借款に應じないといふことになつて來た、それからその軍閥がだね、戰爭する軍費を持たぬのだ、そこで今度の戰爭では、さうだね馮玉祥が今非常に疑惑の眼を以つて居る、所が馮玉祥は一昨年頃からだね、自分の率ゐて居る軍隊に對する給料を中央政府に要求して居るけれども、中央政府がその要求に應じない、それが爲めに是までも幾度か中央政府に對抗してゐるがね、それ故、軍隊は給料さへも今日與へられないのだからそこで鐵砲を擊たないのだね、で給料を支拂つてやる者が出て來ればその軍隊は直ちにもうそれに追隨する、かういふ次第で、實際鐵砲の彈を擊つことが少ないやうになつて行きつゝあるのだ、支那の戰爭は……。殊にこの前の奉直戰爭に比ぶれば、今度の場合は、列國が尤も警戒して居るが、それ故この前の奉直戰爭程には大きな戰爭にもなり得ないだらうと僕は思つて居る、それで僕は財政的に、經濟的に支那の軍隊は滅びつゝあると思ふ、支那の軍閥の戰爭は、僕は困難になりつゝあると思ふね、それで先ほど小村君の話があつて、直隸派と反直隸派とは武力統一と聯省自治とに思想が分れて居るといふこともあつたけれども、それもその時の民心に迎合する爲めに唱へる一つのお題目に過ぎないので、幾らか實行するかも知らんけれども、結局は兩者共に軍閥に相違ないのだね、支那人の生活から見れば、それは總て軍閥に搾取されて居るのだが、其の搾取されるのも力の有る間は幾らかづゝされては行くけれども、段々搾取されてしまつて、今日はその搾取に應じなくなつて來て居る、それだから中央の財政も地方の財政もだね、皆今日は破綻に瀕して居る譯だね、どうして支那は財政上立つて行くかといふことが既に大きな疑問になつて來たと思ふね……。で僕は支那の軍閥の專制は經濟的に不可能になつて來る

と思ふ、それで不干渉を列國が唱へて居るのもだね、その戰爭を出來るだけ小規模にしやうと、遂には不可能にしやうといふことを矢張り意識してだね、列國もやつて居るのだから、僕は、軍閥專制の前途は餘り長くないと思つて居る、僕はその點を幾らか樂觀する、それから資本主義が起つて來るかどうかといふことの議論がさつきからあつたが、去年僕は北京大學へ行つてだね、北京大學の校長代理の蔣夢麟に會つた時に、彼は面白い話をした――北京大學の學生の思想が段々變遷して來た、三四年前には北京大學の政治科の學生などは皆外交官になることを希望して居つた、何故外交官になるかといふと、大體に於て賣國外交を憤慨して居つたのだ、誰が主權者になつて……支那の支配者になつてもだね、外國へ何か權利をつ售てやつてそれで金を儲けることばかりやつて居る、その賣國外交に憤慨して皆外交官にならうと考へて居つた、所が今日では外交官の志望者が非常に少くなつて來た、さうして大體に於て革命家になつて來た、それは大分支那の靑年も考へてだね、今のやうな政治組織では賣國外交は已む得ない、この政治組織そのものが根本から變らなければだね、外交官になつたつて矢張り賣國外交をやる外ないといふことを考へて來たのだ、所がこゝに支那の革命家が外の國の革命家と違ふ點が一つあると思ふ、それは、支那では社會革命と愛國革命といふものが何時も一緒に來る傾向がある、それが支那獨特な狀態だね、それで支那に於ける今日の大資本家いふものは外國人だ、或は外國人と聯合して居る支那人だ そこでその資本家――外國人又は外國人と結托して居る支那人といふ者は、今日は外國のインペリアリズムの奴隷になつて居る、インペリアリズムを支那にイントロヂウスして來るのは、その外國人と外國人の手先になつて居る支那人だ、今日大資本家に搾取せられて居る生活から脫出しやうといふ爲めにもだ、それから支那の國民的自覺をだね、外國人の帝國主義の壓迫に踏み躙られないやうにこいつを保存して行かうといふ一種の運動もだね、一緒になつて來る傾向がある、帝國主義に對する反抗も、それから大資本家の壓迫に對する反抗も、それは同じ種類の人間に對し同じ種類の人間が戰つて居ることになる、それで支那では、民族的自覺を基礎にした支那人の解放運動といふやつと、それから經濟上の獨立を要求する資本主義からの解放運動といふものが、同じ人に依つて、同じ人に對して、行はれるのだ、だから支那の革命は、愛國革命であり同時に社會革命だ、その點は支那人の今日の生活が外國人の生活と特に變つて居る爲めに自然に起つて來

る結果で、是は外國の靑年が經驗しないことだと自分は思ふ、といふことを言つて居つた、僕は是は支那の社會狀態の特色を説明する面白い言葉だと思つて聽いて居つた、それだからさつき長谷川君の言つたやうな民族的の自覺は經濟上の自覺ほど強くないといふことは、外國では言へるかも知れぬけれども、支那のやうに經濟上の專制君主である奴が常に外國人でありさうでなければ外國人のエヂントであるといふ國では、僕は、民族的自覺は經濟上の自覺と同時に同じやうな強さで起つて來る傾向があるやうに思ふ。

長谷川　それはあるけれども、一方からいふと、つまり外國人の搾取を自分の搾取に轉ずる傾向を執りやしないか、支那人が、外國人がやつて居る搾取を自國人がやるといふ過程を通儲つて進む傾向もあるだらうし、外國人に儲けさせないで自分が儲けやう──自分が資本家にならうといふ傾向を生ずるだらう、矢張り資本主義はそこから起るべきプロバビリティがあると見なければならない。

永井　それはある、兎に角軍閥の專制主義といふものは支那ではさう長い生命はあるまい、經濟的に不可能だと思ふ、それからさつき吉野君の言はれた支那のあちらにもこちらにも段々小さな自治的の團體が起つて來て、それが次第に大きくなる、或は聯合して大きな勢力になるかして、それが支那の國民生活の中心になつて來るだらうといふことは、是は今日でも幾らかさういふ傾向が現はれて居ると思ふね、今盛に支那の軍閥に對して攻擊をやつて居るのに三つの主なる團體がある、一つは大學生を中心としたヤング・チャイニスの運動、一つは商務總會とか商工總會なんといふものを中心にした商工業者の團體、それからもう一つは支那の勞働者、殊に交通勞働者の間に僕は中々自覺運動が起りつゝあるやうに思ふのだ、殊に外國人の經營して居る鐵道に從事して居る勞働者だね、是は他の勞働者よりも特に著しく愛國革命をやるやうな……愛國革命の思想が強いやうに思ふ、それで自分達は始終外國人及び外國人のエヂエントになつて居る支那人にコキ使はれて居るから、それに對する反感が非常に強くなつて來て、そこで社會革命をやり、愛國革命をやつて鐵道を支那人の手に取返さう、自分達でその鐵道を經營しやうといふやうな思想が、可なり廣く擴がつて居るやうに思ふ、僕が去年あたり向ふへ行つて歩いて居つた、津浦鐵道の沿線に於てはそれが非常に強いといふことを感じた、僕はさういふ勞働者の間から起つたストライキが、當然京奉線に延長して行くだらう、京奉線に延長して行つて奉天で南滿鐵道に必ず波及して

來るといふことを痛切に感じたがね、さうして是等のヤング・チャイニスの運動、商工業者の運動、それから交通勞働者を中心とした勞働者の運動が皆同じ方向に向つて行つて、さうして今日では先づ同じ一つの軍閥攻擊をやつて居る訣だから、僕は、この軍閥の專制に對して是が矢張り正面に來る故になつて來る、で軍閥の專制を倒してからは又是が今の資本主義の專制に對しても戰を挑む中心團體になつて來るといふやうな風に思ふ、支那人の間に於ける民衆の政治上理論上に於ける自主的運動といふものは、僕は可なり有望なもののやうに思つて居るのだ、それだからさういふ政治上及び經濟上に於ける自主的運動を出來るだけ自然に發達させるやうに、日本の支那に對する外交の方針は立てなければならぬといふ風に僕は考へて居る、支那に對する不干涉といふことも、僕はその根本思想から出發することが本當であるやうに思ふ、不干涉であるといふことが、日本に取つて利益があるかないかといふことは、それは第二段の問題で、僕は、支那の民衆の間には政治上經濟上の自主的運動が、今日でも相當に著しく起つて居るが、將來は更らに大きく發達し得る見込がある、といふやうに考へて居る。

吉野 學生の運動ですね、北京大學は――事實上の聯絡はないだらうが、自ら各地方の學校の目標になつて隨分飛でもない田舍の方の學校などにも矢張り學生が中心になつて、何といふことを意識しないで騷いで居る、それから東京へ來てゐる學生から聞いたことだが、學生などで督軍などの爲に殺される奴がある、四川省の田舍の方であつたが、師範學校で督軍に反對したといふので、それからまた學校の當局者に反對するか何かで學校をストライキして殺されたのもある。あつちは日本のストライキのやうなものでない、一種の田舍だけのの政治的革命だ、さういふことをやつて、自分の親類で殺されたといふやうな者もあつた、さう云つたやうに直接に連絡がないが、自ら北京大學などの風を臨んでそこから感激してやつて居るといふ所があるらしい。

永井 支那に於ける新聞記者雜誌記者といふものは、大部分は北京大學の學生と同じ思想らしい。

吉野 此二三年の現象だが、さういふ者が地方に行つて地方の有志家となると、從來の書生が青雲の志を抱いてて官吏になるとかいつたやうな望は斷つて居るのだから、否でも應でも中には惡いことをするやつがあるかも知れぬが、併しさういふやうなのが本當に地方の爲に起つてやると支那の改造も始出來やしないかと漠然と考へて居る、

堀江　日本の外務省でやつてゐる文化事業なども、支那人に恩をきせやうといふのだらうが向は恩にきやしない、それが支那人の特色で……それが本當だね。

永井　僕はヤングチャイニスの間に於ける自覺は相當に大きく見るべきものだと思ふ、排日問題でもそこから出て來た運動として考へなければ本當の對策は講じられぬと思ふ、僕は去年青島に行つて見ると、同時に三つの國が排斥されて居る、一つは日本の商品が日貨排斥で排斥されて居る、それから明德中學校といふ亞米利加人の中學校がある、それは學校を閉鎖さして居る、聞いて見るとその學校の運動會で亞米利加人と支那人と綱引をやつた、亞米利加人の審判官が非常に不公平な審判をした、その不公平な審判に支那人がなか〳〵服しない、それで校長に訴へたのであります、校長は亞米利加人でその不當な審判をどうしてもひつくり返さうとしなかつた、それで生徒が同盟休校をして學校は閉鎖されて居る、それからもう一つ獨逸人の禮賢中學といふものがある、是又止めて居る、是はどうして止めて居るかといふと、禮賢中學校で獨逸語を第一外國語にして英語を第二國語にして居る、支那人は英語を第一外國語にしろといふ要求をした、獨逸人は之を許さなかつたので學生がそこも止めてしまつた、丁度今日の支那人の間に日本人の尊王攘夷のやうな感情があると思ふ、さういふやうな一種の思想が起つて居ると思ふ。

山本　吉野さん、此問題に付て御尋ねしたいのですが、此の動亂に對してあなたの所には色々の支那の學生やなんかゞ見えるでせうが、新人といふやうな立場に居る人達がこの動亂をどういふ風に見て居るか……。

吉野　動亂のことを氣にして居るといふことを恥ぢる態度ですね、そんなことは私共は問題にして居りませぬといふ、却て餘りに追究するといふと怒ります、そんなことは吾々の念頭にないといふ、中には吳佩孚から金を貰つて來て居るのもゐるので、吳佩孚が負けたら困るだらうと言ふと、何にそんなことは念頭にないといふて厭やがります、少くとも、吾々の所の大學の學生はさう澤山ありませぬが、皆厭やがつて悉く罵倒するです

山本　堀江さん、さつきの問題でお尋ねしたいのですが、滿洲の日本の特殊利益といふものは、日支親善、東洋永遠の平和の爲には、日本は拋棄した方が宜いといふ風に御思ひでせうか。

堀江　日本だけ拋棄したつてつまらない、もつと既往に遡つて西歷千八百何十年以來各國が取つた利權は皆拋棄するといふ

なら日本も拋棄するが、日本獨り拋棄したつてつまらない、それは宋襄の仁だからね。

山本　それからもう一つ御尋ねしますが、統計に依りますと過去の支那の動亂に依つて日本の貿易といふものの關係に餘り變りがないやうですが、今度の動亂が長引けば日本の經濟上に受ける影響に付てどう御考へですか。

堀江　それは綿糸輸出などは困るでせう、現に影響を受けて居りませう、殊に綿糸布はさうでせう、上海の方は大丈夫だから大した影響はないでせうが、何でも綿布綿糸は減つて居ましたよ、動亂が以後長引けば無論影響はありませう。

山本　さうすると綿布綿糸を除いては大して……。

堀江　サア除いてはどうですか、今の所は影響はないでせう、けれども向ふに商賣して居る人が追々困るといふことはありませうね。

山本　現在日本の獲得して居る滿洲の特殊地位といふものは放棄した方が東洋全局の爲に宜いといふものもあるが此ことに對して吉野さんの御考へは。

吉野　條件が要るな、放棄して後どうするかといふ、後の處置ですな。例へば鐵道も放棄するとして、鐵道を國際的のものとして相當の方法で管理して世界に連絡するといふやうにやるならば僕は宜いと思ひますが。

堀江　國際的の意味にするとさうなるね、各國公平にやらなければいかぬ。比較的後から取つた日本だけ棄ててしまつてはつまらないからね、古くから取つて居るものが居るのに、日本のみが放棄するといふことは、……是は宋襄の仁だね。

山本　日本の特殊地位を侵すといふ時は、日本は自動的にそれに對抗しなくちやならんでせうね。

堀江　それは程度問題だね、南滿鐵道沿線に於ける日本人の財產、營業、南滿鐵道のあるものを脅かすやうなことになれば防ぐだけのことはしなくちやならぬでせうね。

吉野　張作霖の居る間は現狀で行けるが、吳佩孚にしてもさう日本の利益を侵害することはないのでせうが、つまり人が代れば、今まで公然とやつた譯でなからうが、人に云はれて明るみに出されて體裁の惡いやうなことは修正を加へる、日本の方で今までやつて居ることに色々修正を加へられるといふやうなさういふ形勢に陷るだらうと思ふ、滿洲が吳佩孚の勢力になつたら。

米田　僕は滿洲あたりで下らないことに餘り日本人を保護してやつてはいかぬと思ふ、却て支那の他に行つて居る者より滿洲に行つたやつは發展して居ない。それは滿鐵などの厄介に

なつて居ると、境遇が親の金を貰つて遊んで居る學生と同じで獨立心がない、船舶補助といふことは國内の海運の發達する所以でないから、餘り加勢する爲に日本人が發達しないのだと思ふ。

永井　一人を相手の外交はいかぬ、張作霖はどんな利益があつても明日死ぬかも知れない、だから彼一人にたよつた外交は、彼がいけなくなれば日本の勢力がなくなる、だからどうしても民衆全體を相手にやる外交でなければならぬ。

長谷川　國内の政治がさうなんだから凡て國内的に斯ういふことをやつて居て、外國に對して斯ういふ風な方法を執れといふことは無理だ、内政が改まらない以上はさういふ外交は執れないと思ふ。

山本　どうですか、支那に對する政府の態度は。此度も矢張り外務省と陸軍省の二重外交でないですか、外務省は抑へ付けられて居るのでないですか。

永井　今度はなか〳〵さうでない、外務省と陸軍省との關する限りに於ては、統制があると思ふ。

山本　それぢや色々有難うございました、これで會を閉ぢます。（文責は記者に在り）

編輯だより

□秋風來、そぞろ肥馬一鞭の快にひたりたくなつた。小三國誌の蒔繪見たやうな東三省と直隷の對峙は、あまりに昔より規模の縮少されたのに、ガツカリする、三省極北の野は大英雄兒成吉汗が呱々の聲を擧げた所ではないか。それが小好狗盜の本營となり果てた光榮？

□支那問題に對する我朝野の區々片々たる群議、醜より出でて醜の極惡を曝露して我國の國策を誤る。我には平和の利刄儼乎として犯すべからざるものがある。今日は東、明日は西と浮川竹の女郎みたいに孫、段、吳、曹等鶏鳴狗盜の間を縫ひ廻はるしれ者どもに吐唾一番する。

□我社が帝國ホテルにて開催せる對支國策計議は、將に我帝國の最高國策を暗示、明示する者であつた。雜談の裡、支那國家の根本を論じ、孫、張、吳、曹を品し、支那の經濟、財政を究め、そして或國の採るべき大國策を討議した近來稀に見る有意義の會合であつた。何にせよ各方面に亘る我國第一流の權威者のみであつたが爲に日比谷議會などに見られぬ壯觀を呈した。その速記錄を一讀せば支那に對する根本知識が得られる雜誌新聞界空前の企圖であつた。

□キヤンペル事件で英國の政界は再び狂瀾を卷きおこした、シルクツハトの國、加藤首相の祖師する我英國はかくして段々左傾して行く。永く犬猿の境裡にあつた保守、自由の兩派は自黨の最終の政治舞臺が迫つて來たやうに怖れ戰きつゝ茲に握手することゝなつた。我國の本黨も、政友も、憲政もその運命に惧えつゝプル關が一丸となる機を期待せずや。

□高田保馬博士百三十枚の大論文『剩餘價値第三論』大山郁夫氏の二百枚の大論文は本誌十二月號に登載せられる。此二論文は本年度論壇の有數な收穫として誌界を震撼せしめるの慨があるだらう。

□近時文壇の明星であつた厨川白村の「厨川白村集」豫約申込は十月卅一日を以つて締切ります。この秀れた輝かしい一書を必ず書架に加えて下さい。

□賀川豐彦氏の死線を越えての下卷『壁の聲きく時』が不日刊行される、出版界が時ならぬ雷霆に打たれる時機は刻々に迫つてくる。

□秋天晨朗し、地上に人傑なきを彼は笑ふ。（十月十四日）

改造定價

册數	定價	郵税
壹册	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	[illegible]郵税不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	[illegible]郵税不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾參年十月廿日 印刷納本
大正拾參年十一月一日 發行
（價壹圓）
東京市芝區愛宕下町一ノ一 編輯兼發行人 平田貫一郎
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二 印刷所 秀英舍
東京芝區愛宕下一ノ一 發行所 改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

武者小路實篤著

第二の隱者の運命

定價貳圓
送料十七錢

自序

武者小路氏曰く「この作は自分の作としては尤も自信を有てるものだ。そして一面自分が讀みたいと思ふ本をつくらうと思ふてかいた、そして尤も面白くよめ、又最もいろ〳〵のものをふくみ、又尤も深い所に入つている。ここに書かれに世界は現世ではない、過去の世界でも未來の世界でもない、そして運命と童貞との問題は作品に色つやをつけ、又人間の切斷面を見せるため、事件を發展させる爲め、利用された傾があるが、その場、その場に於ける人間の心理、心のつくられ方は正視されてゐると思ふ」眞に本書は氏の現在までの作中の第一の傑作で、人間はどう生活すれば安心が出來るか、又どう云ふ心のもち方をするのが本當かと云ふ所に異常な力瘤を入れられたものだ。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

藤森成吉著（四版）

六四判上製　定價貳圓卅錢　送料拾九錢

東京へ

敬虔なる著者が最近の創作中より特に五篇を選んで盟友有島武郎氏の靈に捧げたのが本書である。收むるもの「東京へ」「無心」「少年の群」「脱走者」「若き修道者」其處に眞摯なる著者の人生觀と濃厚な反逆性とが滲んでゐる。

イバニエス原作　鈴木厚譯（拾版）

四六判上製　定價貳圓六拾錢　送料拾九錢

血と砂

西歐文壇近時の驚異であるイバニエスの出世作の完譯主人公は「世界に二人とない闘牛士」たるガルラアド、之に配するに某侯爵の姪にして絶世の美人なるカルメンを以てす。西班牙上流の華奢淫蕩の生活、闘牛士の生活下流の被壓服者的心理が活寫されて一讀其境にあるの思あらしむ。

發行所　東京芝區愛宕下町　電話高輪四九九三　振替東京八四〇二　改造社

法學博士 河田嗣郎著

家族制度と婦人問題

四六判 上製 定價二圓 郵送料十七錢

最新刊

我國の金城鐵壁として立國の最大强みであつた家族制度は個人主義的、社會主義的思想の成長と共に崩壞的行程にあるが如く、我經世家は此問題の爲に革命の露西亞の如く、或恐怖に襲はれて居る。著者は本問題研究家としての權威で、本書の一部は「婦人問題」として發表されて一度は當局の忌諱に觸れ絶版となつた者だが、澎湃として寄せ來たる解放的精神は、婦人問題にも、家族制度の上にも劃時代的の變革を來たさでは止まぬ氣勢である。敢えて我國の家族制度の崩壞、及婦人問題の前途を憂慮する人々に此一書を贈る。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四二〇番 改造社

厨川白村集豫

◆本書成るを聞きて遙に書を寄せて曰く◆

一代の才人白村厨川の全集成る。彼が惜しまれし死は、日本に於ける一偉星を失はしめた。彼が透徹せる頭腦と自ら偽らざる感情と純眞なる良心は自由人として怖れなき虹を論壇に吹きかけた。

彼は恐怖を知らぬエッセイストであつた。色々の意味に於て解放者がありとすれば、白村厨川は日本娘の爲に戀愛を解放したと云ひ得よう。彼は性慾を越えて魂の自由を說いた。彼は偽らざる愛を民衆に敎へた。その爲に彼は誤解せられた。然し彼は魂として高く民衆と傳統の上に出てゐたのだ。彼は解放者であつたのだ。彼は自由人であつた。そして彼の魔筆は何人も追從を許さぬ光輝を持つて居る。その光芒は時の經つと共に益輝く。大正の天才を思ふもの彼を必ず思ひ出すであらう。彼は今や永遠の位置を保つ。彼は我等を敎へ、我等の蒙を啓く。彼は最も人間らしい敎育者の一人である。日本の育て生産し得た最も美しき批評家として我等は今や彼を憶出す。彼の全靈はその論集の中に踊る。彼は今や永遠に屬す。

賀川豊彦

第一卷 文學論(上)

本卷に收められた『近代文學十講』は事新しく喋々するまでもなく白村博士の不朽の名著であつて、泰西の近代文學が系統的に組織的に、しかも平明の文體を以て說くこと本書の如きは、西洋にもその類例がないといふことは、發刊當時の定評であつたが、今に於ても東西にその比を見ない。恐らくは現時苟も文學を談ずるもので、一度でも本書を繙かなかつたものはないであらう。その明治大正文壇に與へた影響のいかに甚大なるかは、後世の文藝史家を俟つて明らかにせらるることだとは信ずるが、本社の需要が今にして盡きず、寧ろ累年その度を高める觀のあるのは、以て本書の內容價値が永遠に不朽であることを充分に證明して居る。

第二卷 文學論(下)

『十講』が近代文學の鳥瞰圖であるならば、『文藝思潮論』は近代に於ける思想文藝の由つて來るところを闡明した系圖である。前者が「文學の地理」であるならば、後者は「文學の歷史」であつて、この二者は彼此相補つて始めて全圓的統一を示すものである。また『苦悶の象徵』は、白村博士が遺稿の廢墟の中に見出された唯一の系統的述作であつて、博士が晚年に於ける文藝觀は本書に遺憾なく表はされて居る。蓋し、博士は『文學十講』の發表以後に於て、思索上の一大轉機に逢着した。その心的革命から生れたものがこの『苦悶の象徵』であるから、本書を讀まずして博

申込所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二 電話高輪四九九三

約募集に就て

士の文學史上に於ける地位を斷ずることは到底不可能である。たゞ惜むらくはこの「苦悶の象徴」は未完稿であり斷章であつた。よつて本書の後半には「文藝と性慾」「藝術の表現」「東西の自然詩觀」以下七章を輯補して、博士の文藝觀を完璧たらしめることにした。

第三卷　文藝評論

前二卷に於て博士の一般文藝に關する識見を知つたものは、本卷に於てその藝術觀が具體的にいかに適用されたかを知らねばならぬ。本書收むるところ、「現代文學の主潮」「藝術より社會改造へ」「わかき藝術家のむれ」以下約二十五章、英米佛獨の文學より白耳義、西班牙、愛蘭に渉つて、或は無言劇を語り或は漫罵を評じ、筆を更めては勞働問題と文學を論じ、また英國思想界の今昔を說く。博士が博識多才よく古今東西を貫いた例は、本卷に於いていよいよ玲瓏たるものがある。

第四卷　エッセイと文明批評

博士が文學者として偉大であつたか、或は思想家として文明批評家として拔群であつたかは、未解決の問題であるが、ともかく博士が「象牙の塔」を出て「十字街頭」に呼號した時の反響は、寧ろ文學者としての名聲を凌駕した事は指[illegible]實である。實に博士の文明批評は諸屬贅牙の閑文字ではなく、その明澄流麗なる「エッセイ」は日本文學の逸品と稱するも過褒ではあるまい。卽ち本卷の劈頭を飾る「象牙の塔を出て」を首として、そのほか「平和の勝利」に近代思想の歸趨を案じ、「何が故の假面ぞ」に世界文明の暗礁たる人種問題を論じ「小泉先生」に溫情不遇の畸師を偲び、或は女の表情美を讚し或は服裝の墮落を歎き、さては絶筆「人間讚美」に人作の不滅を謳歌するなど、收むるところ凡て十七章、悉く洗練彫琢の文字である。

第五卷　戀愛觀と宗教觀

『近代の戀愛觀』に於ける博士は、文明批評家といふ消極的な立場から一歩を進めた、熱烈なる「社會改造家」である。「戀愛至上」の炬火一度投ぜられて今思想界は愕然としてその惰眠から覺醒した。晩近の思想界に於てこの書ほど大きな反響を喚起したものはあるまい。

戀愛より宗教へ、これは博士の踏んだ當然の道程であつた。卽ち金錢の結婚、因襲の戀愛を蔑視した博士の筆端は「靈魔の宗教」の醜狀を抉つて餘蘊なかつた。

第六卷　印象記。雜評 及び雜纂

博士の北米漫遊は、その生涯に一時期を劃したもので、特拔なる社會觀、深刻なる批評眼、これらは何れもその時に發はれたのであつた。博士を目するに一介のペダントを以てした論者は、「印象記」に載せられた社會批評に驚いた。「印象記」は單なる紀行文ではない、それは日本人の筆になつた最も卓絕せる「米國研究」の書である。殊に日米問題の風雲急なるの時、本書を熟讀玩味すべきは、獨り爲政者のみの問題ではあるまい。

泰西文學の移植に與らなかつた博士は、また飜譯家としても優に一家をなして居た。博士が東大在學時代から時々文壇に發表した譯詩譯文は、その流麗さと正確さとに於て、後人の好模範とするに足るものである。そのほか本卷には、博士の講演、序文等、散佚して未だ廣く世人の目に觸れざるをも集大成して、博士の全面目を躍如たらしめた。

◆頒布方法　全六卷・豫約者のみに頒つ◆刊行期日　大正十三年十二月より毎月一册宛刊行◆體裁　菊判布裝天金函入、毎卷コロタイプ版挿入◆申込　十月末日迄に豫約金四圓五拾錢（最終會費に充當）を添へて申込の事◆會費　毎月拂四圓五拾錢（計廿七圓）一時拂廿五圓◆送料　市內十二錢內地廿七錢を要す

【締切十月三十一日限】

申込所　東京銀座 新橋　福永書店　振替大阪一六一七五六　振替東京四〇四六六

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR.
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

東京株式會社秀英舎印刷